戦極vsDREAM、マット界再生の3月決戦!!

kamipro 紙のプロレス

MMA & PRO-WRE

enterbrain MOOK
2008
120
880yen



3.15『DREAM』で再出発!!
独占ロングインタビュー
ミルコ・クロコップ

やっときたぞ、J.Z.カルバン戦!
大晦日"真"のメインが夢舞台で実現!!
青木真也

FEGとホントにやれんのか!?
新イベント結成の裏側を激白!!
笹原圭一『DREAM』イベントプロデューサー

さらば『HERO'S』!!
涙のラストインタビュー!?
谷川貞治 FEG代表

"魔王"秋山成勲にチェ・ホンマン!
近くて遠い隣国の本質に迫る大特集!
格闘激国"韓国"とは何か?

俺の祭りはこれからだ!!
3.5『戦極』で火の玉ボーイが燃える!!
五味隆典

チョーひさびさの、あたたたたっ!!
マット界乱れしとき北斗現わる!
ジョシュ・バーネット

クールな柔道王が本誌初見参!!
瀧本 誠

これぞMMA最強イベントのド底力!!
大炎上!! キミはUFC81を観たか?
A・ホドリゴ・ノゲイラ
ランディ・クートゥアー
ダナ・ホワイト UFC代表

PRIDEはもう忘れろ!!

"過去の誇り"を捨てて、新時代を切り開け!!

kamipro 120 "過去の誇り"を捨てて、新時代を切り開け!!

印刷・製本 図書印刷株式会社

うわ〜ん、うわ〜ん、かわいそうだよ〜。

MARTIAL ARTS & BUDO WEAR

FOR JIU-JITSU, KARATE, KICK BOXING, MIXED MARTIAL ARTS…AND ALL FIGHTING SPORTS!

reversal.dogi.design.works

rvddw

COMPETIDOR

rvddw

JIU-JITSU / KIMONOS / JAPAN



rvddw

JIU-JITSU / KIMONOS / JAPAN

rvddw

COMPETIDOR

reversal

reversal.dogi.design.works

rvddw OFFICIAL WEB SITE **www.rvddw.com**

reversal shop 2-41-10 TOMIGAYA SHIBUYA KU TOKYO TEL 03.3467.8245

身体が大きくてデートができないんだよ（涙）



©みのもけんじ

2008 No.120 CONTENTS

kamipro

表紙写真／菊池茂夫

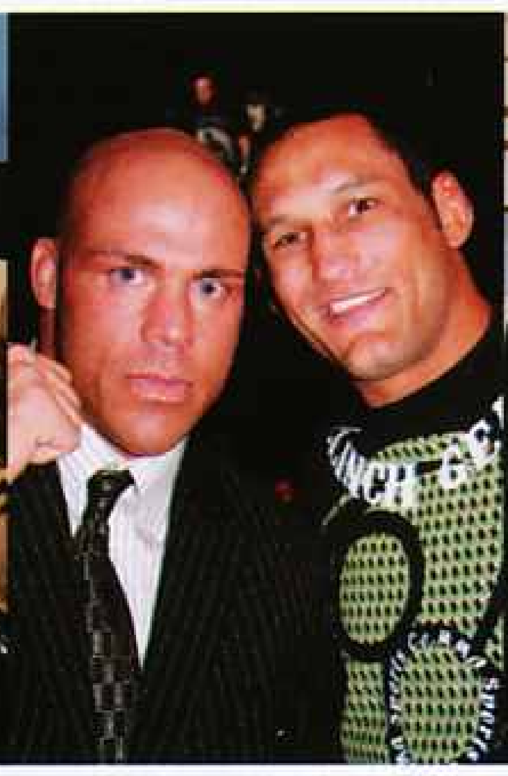


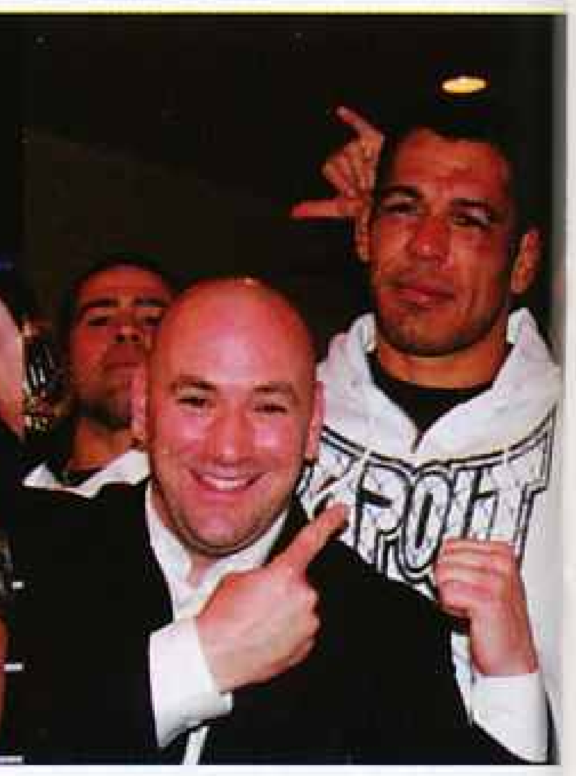
それいけ

デコボコマット界

ハラハラドキドキ春の大乱立祭





日本マット界再生と再編が見えてきた!!

桜が咲く頃、何かが起こる!? とささやかれていた2008年、新春マット界!! いやあ、咲きました! いろんな花が一気に咲きました。まるで予想もしなかったもの、ちゃんと予想できたもの――。兎にも角にも、そこにはマット界再生と再編の兆しを感じた。みんな生き抜くために手を取り合ったそのデコボコ具合やいびつさは、不格好だからこそか魅力的に見えたのである。

最大のデコボコは、新イベントDREAMの旗揚げ。FEGと『やれんのか!』の恩讐を越えた結束だった。で、黒魔術の呪いは解けるのか……!?

そのDREAMより一足早く旗揚げを迎える『戦極』は、事実上の吉田道場、パンクラス、GRABAKAの連合軍ではあったが、PRIDE大物ファイターたちを「これでもか!、これでもか!（髙田総統調）」と招き入れている。いびつさを気にせず合体していく。我々はいま、新たなるフランケンシュタインの怪物の誕生を目のあたりにしているのかもしれない。

そしていまや世界を完全に手中に収めたUFCでさえも、プロレスとの歴史的なクロスオーバーや、ノゲイラの戴冠によって、ネクストステージの地ならしを始めている。こいつら、どこまで巨大化するつもりだよ……。

日本格闘技界の昨年一年間は、圧倒的な孤独感、沈黙という不安で常に脅かされていた。何も起こらない、起きる気配さえ見られない暗黒時代だった。

そこを打破しようと、生き抜くために手を取り合った人。いやいやながらもシェイクハンドしたヤツ。気がついたら手をつかまれていたあの人。いままでもこれからも一緒に歩いていく二人。それでも孤独を守る男。

いずれもデコボコやいびつさを抱えていようとも、この先へと進むしかない。そこに何があるか。行けばわかる。行かねば暗闇の中のままだ。そして光が差し込む場所は――読めばわかるさ!?

（ジャン斉藤）









**なぜUFCを離れ
日本に帰ってきたのか?
DREAM電撃参戦
全真相を語る**

「自分を取り戻すため過去の栄光を忘れて日本のリングで出直したかったんだ」

クロコップ

“大連立”から生まれた総合格闘技新イベントDREAMに、ミルコ・クロコップが電撃参戦!
昨年、MMA史上最大規模の大型契約でUFC参戦をはたしながら、1勝2敗の不本意な結果に終わったミルコ。
まだUFCとは契約が残っているはずだが、いかにして日本復帰が決まったのか。複雑な契約問題も絡んでくるため、
ミルコの全権代理人である今井賢一氏にも同席してもらい、ミルコ・クロコップのDREAM電撃参戦に至る真相を語ってもらった。

聞き手/堀江ガンツ　撮影/菊池茂夫



ミルコ・ク

Mirko CroCop

——ミルコ選手。まずは、おかえりなさい！　前回、『大みそかハッスル祭り』のあと、元日にやらせていただいたインタビューで「いつか必ず日本マットに帰ってくる」と言ってましたけど、まさかこんなに早く帰ってくるとは思いませんでしたよ。

ミルコ　ああ、自分でもこんなに早く帰ってこられるとは思わなかった。それに試合の一カ月前に、記者会見のためだけに日本に来るのも生まれて初めてだよ。

——それだけ今回の「DREAM発表記者会見」というのは、重要であると理解しているわけですか？

ミルコ　本当は自分としては、試合前の大事な時期に練習スケジュールを中断して行くというのは、イヤだったんだ。でも、ここにいるマネージャーのケン（全権代理人・今井賢一氏）が「今回だけは練習を中断してでも来ることが大切だ」と、さんざん言うもんでね（苦笑）。

——あ、今井さんが無理矢理説得したわけですか（笑）。

今井　やはり今回、UFCとの契約を解除してまで日本に来るっていうことの重大な意味を、メディアやファンの人たちにキチッとわかってもらうためには、ミルコ自身が来なくちゃどうしようもないと思ったんですね。

——でも、確かにそうですよね。会見に来るのと来ないのとでは、インパクトもまったく違うでしょうし。では、かなりタイトなスケジュールでの来日なんですか？

ミルコ　日本滞在はたったの1泊。機中を合わせて1泊3日の日本旅行だよ（笑）。試合の1カ月前という、この時期の1日というのは、非常に大切だからね。帰ったら、その夜にはスパーリング再開だよ。

——では、どういった経緯で今回のDREAM参戦、日本マットへの復帰が実現したのかということをお聞きしたいんですけど。

ミルコ　自分を取り戻すために俺自身が望んだんだ。俺はオクタゴンでの闘いで、正直言って、自分のファイトスタイルもメンタル面もバラバラになってしまった。ならば、このままオクタゴンで闘い続けるより、闘い慣れたリングとルール、さらに自分にエネルギーを与えてくれるファンの声援の中で、自分本来の姿を取り戻すために日本で試合をしたい。その思いをケンに話したのが最初だね。



——それはいつ頃の話ですか？

ミルコ　去年の話だよ。

今井　もう少し正確に言うと、昨年の11月末から12月初頭ぐらいだったと思います。ただ、時計を戻すと、9月末のロサンゼルスでの『ストライク・フォース』の後、ボクがベガスに飛んで、ダナ（・ホワイト＝UFC代表）とヒザを突き合わせてミルコの今後について突っ込んだ話し合いをし始めたところからが始まりでした。それからさらに2カ月後、髙田（延彦）さんからの招待があった『ハッスル』へのゲスト出演を実現するために、ダナを説得するべく、12月にダナのオフィスに3度目の訪問をしたとき、じつは原契約を変更する話を始めていたんです。

——『ハッスル』出演の話だけでなく、今後についても話し合っていた、と。

今井　そこからは、ミルコの希望を叶えるために、とにかく粘り強く様々なことを説明したんですよ。その一方で、年が明けてからは『やれんのか！』実行委員会とも、いろんな話をかなり深いレベルで話し合いました。

——UFCとDREAM、双方との話し合いがまとまって、今回の日本復帰が実現したわけですね。

今井　ただ、3月15日に本当にこういう大連立で新しいイベントがスタートできるのかという不確定要素、それに契約に厳しいダナの理解を得られるのかというさらに大きな不確定要素、この不確定要素の二乗のような状況の中で、ダナとの話し合いがまとまり、さらに大連立の交渉が着地したというのは、本当にちょっと奇跡的だし、いろんな人たちの理解と努力が、ミルコの日本復帰を実現させたと思いますね。

——UFCとの契約はまだ残っていたはずですけど、それはどうなったんですか？

今井　契約はあと3試合残っています。

——残っているということは、破棄したわけじゃないんですか？

今井　これは、守秘義務もあることなので、ダナの立場も考えて、すべてをここで話すわけにはいかないんですよ。ただ、ダナからもハッキリと「こんなことは、これまでありえなかった」と言われましたが、簡単に言うとメジャーリーグでいうところのオプション付きの『自由契約』にしてもらったんです。しかも、UFCに戻る時は、先方とはじっくりと最優先でもう一度条件を交渉できるという確約を書面でもらい、こちらからもアメリカに戻る場合にはUFCに戻ると書面で確約をした上でです。

——将来、UFCに復帰することを前提とする代わりに、自由契約になってもアメリカではUFC以外には上がらないということですか。

今井　ダナ・ホワイトという人間は非常に懐が深いところも見せる男で、「ミルコが復活するところを見たいから、ミルコのためにその条件が最も整う場所で、完全復活させてから戻ってきてくれればいいよ」と言ってくれたんです。

——へぇ～、あのダナ・ホワイトがそんなことをよく認めましたね。

今井　もちろん、もの凄く大きな葛藤が彼の頭の中で渦巻いていたと思いますよ。ミルコは06年末にUFCとMMA史上最大規模の契約を結んだわけですから、UFCがミルコのためにこれまでに投下した資金は日本の格闘技市場ではちょっと考えられない規模になっている。そして、ランディー・クートゥアーと訴訟になってしまった現在、UFCヘビー級の選手層が一気に薄くなってしまう中で、ノゲイラが暫定王者になった。ダナのPRI



復活をするにしても、グローブを置くにしても その姿は日本のファンに見届けてもらいたかった

DEに対する永遠の執着のきっかけとなった試合は、いまでも彼はハッキリ言いますが、初めて東京ドームで見た2003年11月のミルコvsノゲイラだったわけですから。

―ダナはノゲイラにも「ミルコvsノゲイラのような試合を自分がプロデュースするのが夢だった」と言っていたらしいですからね。

今井 そのミルコvsノゲイラを、オクタゴンでもう一度観たいと彼が思えば、それは今回のボクらのわがままに付き合わず、原契約の中ですぐに実現できるわけですからね。

―では、本当にミルコに復活してもらうために、一定期間の自由契約を認めたってことなんでしょうね。

今井 今回はボクも、ミルコからダナに直接電話をかけさせて、ミルコの気持ちもじかに聞かせたので、最終的には『早く、完全復活して戻ってきてくれ』とダナからも、ハッキリとミルコの背中を押してもらいましたから。あと高田さんにも相談して、もちろん彼は背中を押してくれましたから。

―高田本部長にも後押ししてもらいましたか。でも、フリーになったところで、DREAMでのファイトマネーというのは、もちろんUFCほどの金額じゃないわけですよね？

今井 正確な金額は言えません。何分の1という額……かもしれないですね。

ミルコ （さえぎって）今回の日本復帰に金は関係ない。自分を取り戻すための最適な環境ということで、旧PRIDEスタッフが創るあの完璧な空間で、あれだけ自分を支えてくれるファンの前で、完全復活したいという結論に行き着いたんだ。

―ファイトマネーを大幅に下げてでも自分を取り戻すために、日本で闘いたかった、と。あとは日本のファンに復活する姿を観てもらいたいという気持ちもありますか？

ミルコ 復活する姿を観てもらいたいというか、復活できなかったら、もう自分のファイト人生はそこで終わりだからね。でも、万が一そうなるにしても、それは長年俺を支えてくれた日本のファンの前でやりたかったという気持ちはあるよ。格闘技は何が起こるかわからない。それは自分が一番よく知っている。だから、完全復活するにしても、万が一、失意のどん底でグローブを外すにしても、そのどちらかの姿を見届けるのは、日本のファンであってほしかったんだ。

―でも、ミルコ選手自身は、自分を取り戻すためとはいえ、UFCで負けたまま日本に帰ってくるというのは、かなり苦渋の決断でもあったんじゃないですか？

ミルコ 大きな決断ではあったよ。俺だって本当なら、少なくとも（ガブリエル・）ゴンザガを叩きのめしてから日本に帰ってきたかった。でも、状況がそれを許さなかったんだ。

今井 こちらとしては、ゴンザガとのリベンジマッチ実現への交渉もしていたんですよ。ミルコはとにかく「ファイトマネーはいらないから、ゴンザガとやらせろ」とボクに言ってきていたので。それでミルコvsゴンザガの再戦をクロアチアで開催するという案も挙がっていたんです。

―ああ、確かにダナは昨年末に「今後、開催する可能性がある国」として、クロアチアの名前を挙げていました。

今井 これはミルコ自身もクロアチア国内で実現に向けて動いていて、5月に実現した場合、その大会ではクロアチアの大統領がオープニングのスピーチを努めて、クロアチア国営放送がドキュメンタリーを撮りながら、完全にライブで中継をカバーする国民的イベントになる予定でした。この案にはダナも乗り気だったんです。ただ、1月19日の『UFC80』で、ゴンザガがファブリシオ（・ヴェウドゥム）に負けてしまったことで、白紙に戻ってしまったんですよ。

―あまり二人が闘う意味もなくなってしまったわけですね。

今井 もし、あそこでゴンザガがファブリシオに勝っていたら、今回のミルコの日本復帰は実現してなかったかもしれない。だから、小さな偶然が奇跡的にいくつも重なって、実現したんですよ。『やれんのか！』のチームが継続してイベントを行なうことが決まり、UFCが契約中断を認めてくれて、しかもミルコが倒すべきゴンザガが敗れた。そういった小さな

Mirko CroCop



ダナがいまでも絶賛する、PRIDE史上に残る名勝負だったミルコとノゲイラの闘い。ミルコはDREAMのリングでかつての自分を取り戻し、ふたたびオクタゴンでUFC王者ノゲイラと相対することはできるか？

Mirko CroCop

可能性同士がわずかに交わった部分が、ＤＲＥＡＭへの参戦なんです。

——何か一つでも欠けていたら、実現しなかったわけですね。

今井　そうです。『やれんのか！』スタッフ、ＵＦＣ両方との、針の穴に通すような交渉が実を結んだということですね。

——では今回の件は、ＤＲＥＡＭによるミルコ引き抜きでも、ＵＦＣによるミルコ解雇でもない、と。

今井　違いますね。ダナからも「頑張って復活してくれよ。君にはいったいいくら遣ったと思ってるんだ」というメッセージをもらってますから（笑）。

——となると、某スポーツ紙に載った「ＵＦＣがミルコに戦力外通告」っていう、ダナのインタビュー記事はなんだったんですかね？

今井　その記事については、ボクもダナに聞いたんですよ。「インタビューを受けるにしても、なぜあのスポーツ紙だったんだ？」って。そしたらダナは「そんな取材は受けた覚えはない。俺は『ＵＦＣ81』の翌日からカナダに行ってたから、物理的に受けられるわけがない」って言うんです。

——受けてないんですか⁉

今井　そうみたいです。しかも「その新聞が『宇宙人発見』とかを表紙に持ってくるところだということぐらいは、ＵＦＣの広報だってわかっている。こんな大事なことをどこかと単独でやるなら、間違いなく別のところになる。どういう経緯でその記事が出たのかわからない」とまで言ってましたからね。

——そんなことまで（笑）。

今井　おそらく『ＵＦＣ81』のプレスカンファレンス（記者会見）で囲み取材に

ファンの声援が俺の心を動かしてくれた
とにかくまたベストパフォーマンスを見せたい

応じていたときの発言を膨らませて書いたりとか、そんなところでしょう。まあ、あの記事の中でも「ミルコが這い上がりたいなら、その協力は惜しまない」と言ってますから、ダナ自身は記者に囲まれても、こちらに気を遣った発言をしてくれてるんだと思いますけどね。

——なるほど。では、ミルコ選手。UFCを離れ、とりあえず1年間はDREAMに参戦するにあたって、どんな目標を立てていますか？

ミルコ　とにかく心身ともに自分を取り戻す。とくにフィジカルよりもメンタル。自尊心を取り戻したい。俺はもう負けることは許されないんだ。1年を通して、ピーンと張り詰めた昔のような状態に戻らなければいけないと思っているよ。いまは闘いに没頭したいね。そのために国会議員の二期目を棒に振ったわけだから。

——DREAMは『M—1グローバル』とも協力関係を築いていますけど、DREAMで闘っていく中で、やはりヒョードルとの再戦というのも大きな目標ではありますか？

ミルコ　ヒョードルというファイターを倒すことは、いまだけでなく、PRIDEに本格参戦した2003年からずっと、俺の大きな目標であることは変わらないよ。ただ、いまの自分にはヒョードルの名前を口にする資格はない。だから何試合かして、キッチリ自分が元に戻ってきたところで、みんなに俺がヒョードルに挑戦する資格があるか判断してもらえばいいことだろう。

——谷川さんは「ミルコはK—1にも上がってほしい」って言ってますけど、その可能性というのはありますか？

ミルコ　自分の闘いを取り戻したあとは、様々な選択肢がある。しかし、いまはとにかく自分を元に戻す以外は何も考えてないね。



Mirko Cro Cop■1974年9月10日、クロアチア出身。96年にK-1に初来日。01年にMMAデビュー。03年からは主戦場を『PRIDE』に移し、06年にPRIDE無差別級GPに優勝。07年より主戦場をUFC移すが、1勝2敗と苦戦。3.15DREAMへの電撃参戦を発表した。188cm、100.4kg。

——3月15日の相手はもうだいたい決まってるんですか？

ミルコ　まだ決まってない。でも、相手は誰でもいいんだ。とにかく自分自身の問題だからね。

——復帰戦に向けてのトレーニングというのは、どんな感じですか？

ミルコ　非常に体調はいいよ。いいトレーニングができているし、体幹が強くなってる。

——昨年末はオランダ修行にも行かれたんですよね？

ミルコ　ああ。これからまたオランダに少し行くよ。最終調整としてね。あと、先週の日曜日からマーシオ・コレータ（ブラジルの柔術家）が、クロアチアに来てくれている。いま、慣れ親しんだPRIDEルールでの寝技というのを再確認しているところだ。

——でも、ミルコ選手のジムには、オクタゴンケージを導入してしまったことで、いまはリングがないんですよね？

ミルコ　じつはそうなんだ。あんなに苦労して作ったオクタゴンが、いまは必要なくなってしまったよ（苦笑）。うまくいかないものだな。ただ、リングはどこにでもあるからね。リングでの練習には不自由してないよ。

——ただ、この1年間、UFC向けの練習を必死にやってきて、また今度DREAM向けの練習に切り替えるというのは、マイナスに働く懸念はありませんか？

ミルコ　それはない。UFCでの敗戦で気づかされた俺の弱点というのは、何もオクタゴンだから対応が難しかったということだけじゃない。相手に組み付かれてスタミナを奪われてしまうというのは、ジョシュ・バーネットと闘ったときもそうだった。それでもPRIDEでは、なんとか勝ってきたから、その弱点に目をつぶっていただけで、俺にとっての課題というのは、オクタゴンでもリングでも、じつは同じなんだよ。それに昨年苦しんだ一番の要因はメンタルな部分だと思っているからね。

——確かにUFCでの試合を観ると、オクタゴンやルールに慣れていないのを差し引いても、動き自体がPRIDE時代と比べて悪く見えました。

今井　動きが全然別人でしたよね。史上最大の契約で鳴り物入りで乗り込んだのに、それにふさわしいパフォーマンスがまったく見せられなかった。

ミルコ　あんな闘いをしてしまったことは、ファイターとして本当に恥ずかしい。やっぱり、PRIDE無差別級GP王者になって、UFCとの契約でビッグマネーを手にした自分の慢心がすべての出発点だ。このあいだゴンザガとファブリシオの試合を観て、「なんで俺は彼に負けたんだろう」と、正直思ったよ。本来の自分を取り戻すために、過去の栄光も忘れて、日本で出直すつもりだ。

——では、1年半ぶりに日本で試合をするにあたり、ファンに対して何かメッセージはありますか？

ミルコ　とにかく日本のファンの暖かい声援が恋しかったよ。それを大晦日、『ハッスル』に出演してあらためて噛み締めた。あの声援が俺の心を動かしてくれた。とにかくベストパフォーマンスをまたみんなに見せるから、以前と同じように応援してほしい。ただそれを願うだけだね。

——では、3月15日の闘いを期待してます！

【08年2月13日／都内・ホテルメトロポリタンにて収録】



3.15さいたまスーパーアリーナ

DREAM

SHINYA AOKI VS J.Z. CALVAN

かハッキリさせろ!!

戦国時代開幕!!



3.5代々木第一体育館

戦極

DUANE LUDWIG vs TAKANORI GOMI

どっちが強いのか

“夢”のライト級

——ついに『戦極』という新しい戦場が決まった五味さんですが、まずはこの1年間を振り返っていただけますか。

五味　もうあんまり、過去は振り返りたくないんだけどね（苦笑）。

——でも、この1年間、〝これからどうするのか〟が一番、注目されてたのが五味選手だったと思うんですよ。いろんな噂もありましたし。

五味　そうですねぇ。雑誌とかでもね、期待っていう意味でいろんなことが書かれてて。現役選手なんで、なんか聞かれたら前向きにね、リップサービスでもなんでもなく答えてたんですけど。まあ僕としてはね、正式な話にならないと動けないわけですし。

——マスコミに話すとしたら正式決定してからですよね。それまでは微妙な立ち位置というか。

五味　僕の生活自体はそんなに変わらないんですけどね。ずっとここで練習してきたし。……ただ去年は、「本当に試合したいか？」って言われたら、そこまでじゃなかったんですよね。周りは「早く観たい、もっと観たい」って言ってくれて、ありがたかったんですけど。結果的に、いい休息になりましたよ。

——進む道が決まらない時期も、それはそれで意味があったというか。

五味　ただまあ……あの、HIROYAくんが僕の隣の中学なんですよ。

——え？

五味　ホントに近いんですよ。歩いて行けるくらいの距離で。だからね、最近うちのオヤジが飲みに行っても片身が狭いらしくて（笑）。全部HIROYAくんの話題になっちゃうんで。

——試合に出てないあいだ、ご近所の話

UFC、“大連立”ではなく『戦極』を選んだ“火の玉ボーイ”の真意とは？

「これからの俺が本当の自分です！」


隆典



“世界の五味隆典”が帰ってきたぜ〜〜！　07.2.24『PRIDE.33』でのニック・ディアス戦以来、約1年近く試合から遠ざかっていた五味の復活の舞台が3.5『戦極』に決定した。その間、『HERO‘S』やUFCへの参戦も噂されていた五味が『戦極』のリングを選んだ理由とは？『PRIDE武士道』のエースとして一時代を築いた五味のこれからのモチベーションとは？ドゥエイン・ラドウィックとの対戦を控えた五味が本音を激白!!

聞き手／橋本宗洋　構成／阿修羅チョロ　撮影／菊池茂夫　試合写真／乾晋也



3・5『戦極』で
ドウエイン・ラドウィックと激突!!

五味
Takanori Gomi

UFCの盛り上がりも凄かったんだけど、「俺、ここでも全然問題ないな」と思いましたね

題を取られちゃって（笑）。

五味 そうなんですよ（笑）。

――年末にはアメリカでUFCも観戦しましたよね。それで"UFC参戦か！"って噂にもなったんですけど、実際に生で観たUFCはいかがでした？

五味 あのときはね、日本にいづらいの半分、遊びに行きたいの半分で。

――やっぱり大晦日は日本にいづらかったですか。まあいろんな人にいろんなこと言われるでしょうしね。

五味 というよりも、それまでの数年間、ずっと大晦日は試合してたじゃないですか。何万人ものファンに囲まれて試合やって、打ち上げでたくさんの仲間と一緒に騒いでね。そういう新年を迎えてたのに、いきなり部屋に一人でいるっていうのは寂しすぎますよ！（笑）

――落差が激しすぎると（笑）。

五味 そんで部屋でね「（格闘技中継の）テレビ観ようかな、どうしようかな……」とか考えてたら寂しくて死んじゃいますよ（笑）。

――「PPV購入しようか……」とか（笑）。

五味 そういうのもあったし、あとは遊びたかったのと。遊びといってもUFCなんですけど、僕の場合は遊びでも常に格闘技が絡んでくるんで。

――あ、そういうもんなんですか？

五味 ずっとそうですよ。どっか出かけるといったら格闘技の会場しかないんですよ。この10年間、一番ね、青春を燃やせる時期をそういうふうにすごしてきたんで。まあ去年はね、試合がなかったんでいろんな人がいろんなとこに連れてってくれたんですけど、何やってても、最後はイライラしちゃうんですよね。

――格闘技と関係ないことで遊んでもつまらないわけですね。試合がないジレンマもあるでしょうし。

五味 いい思いはさせてくれるんですけどね。でもどっかで「俺はこんなんじゃない。まだ引退したわけじゃねえんだ」って気持ちがあって。

――ああ、五味さんにとって「格闘技と関係ない遊び」は引退した人間のすることなんですね。

五味 だから最後はね、必ず帯谷（信弘。前DEEPライト級王者）をブン殴って店を出るっていう（笑）。



五味の一番最近の総合ルールの試合は07年2月『PRIDE.33』でのニック・ディアス戦。五味は2ラウンド、フットチョークでタップを喫するも、その後、ディアスの薬物使用が発覚し、無効試合に。翌月、五味はコンバットレスリング大会73キロ級で優勝を飾っている。

――そこにはけ口が（笑）。

五味 「おまえと一緒にすんじゃねえ！」って（笑）。まあ、そういうことしながらもね、なんとか力を落とさないように練習はしてきたつもりですけどね。……で、なんの話でしたっけ？（笑）。

――いや、UFCを観てどうだったかっていう（笑）。

五味 まあ、だから僕の遊びに行くとこは格闘技の会場だってことですよね。UFCと、あと楽しみだったのは新年のカウントダウン。とにかくもう、大勢の中で新年を迎えないとダメなんですよ（笑）。大会も楽しかったですしね。でも、こんなこと言ったらアレだけど、会場としてはさいたま（スーパーアリーナ）のほうが凄かったですよ。盛り上がりは。ウェーブ感っていうかどよめき感っていうかね。

――会場のグルーヴ感ですよね。

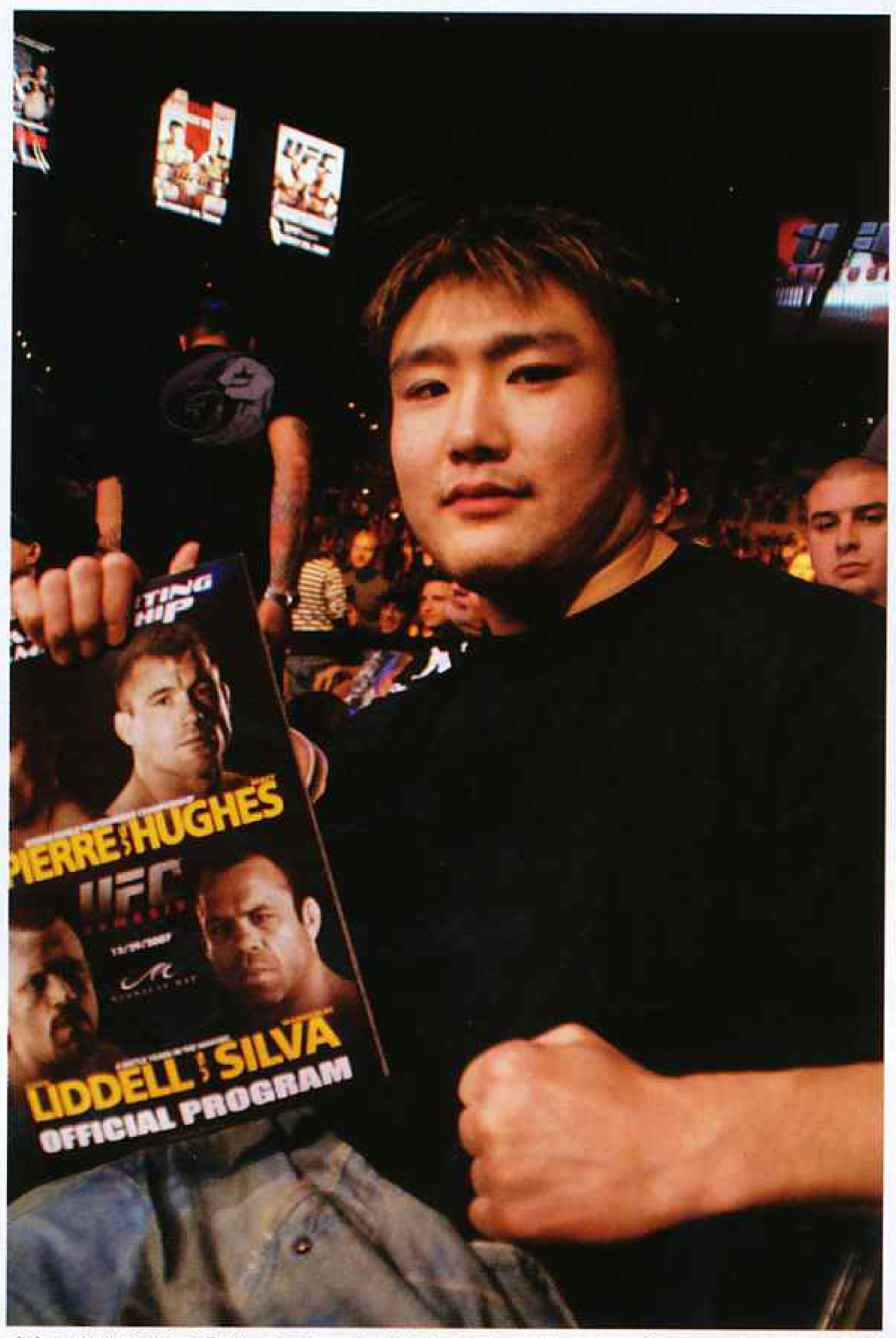
五味 そうそう。だから失礼な話かもしれないけど、UFCの盛り上がりも確かに凄かったんですけど「あ、俺、ここでも全然問題ないな」とは思いましたね。「俺はさいたまの5万人でやってきたんだから」って。UFCのファンもパワーはあるんですけど、5万もの方々が集まってくれるというのは凄いことですよ。僕はそういう日本のお客さんが好きなんですよね。

――そういうこともあってか、UFC参戦は決まらなかったわけですけど、さっそくダナ・ホワイトは「五味は金で『戦極』を選んだ」みたいなことを言ってるらしいですね。

五味 あ、そうなんですか。

――あの人は契約しそこなった選手を必ずボロクソに言うんですけど（笑）。

五味 いや〜、でもねえ、UFCって出るもんじゃなく観に行くもんかな、とも思いましたね。ラスベガスっていう華やかな街でね、UFC以外にも娯楽がいっぱい



昨年の暮れは高田『やれんのか！』統括本部長から熱心なラブコールを受けるも、五味は大晦日興行には背を向け、シウバvsリデルが行なわれた『UFC79』ラスベガス大会を観戦。オクタゴン登場は近いかと思われたが、最終的には『戦極』をチョイス。

あって。そういうとこには遊びで行くのがいいかな、と。それこそ年末に、ゴージャスな女の子連れて行って、カジノで遊んでUFC観て新年を迎える、と。そういう場所ですよ、あそこは（笑）。また観に行きたいと思ってるんですよ、UFC。

――そうなんですか（笑）。

五味　だからね、会場に入れてもらえるようにダナ・ホワイトとは仲良くしときます（笑）。

――ダハハハ！　入場パス出してもらえるように（笑）。

五味　そういう関係は保っておきたいですね（笑）。

――日本の大晦日興行はビデオで観ました？

五味　観ましたよ。中量級の試合中心で。でもフルで観た試合はないかな。ところどころ早送りしながら、ですね。

――『やれんのか！』なり『Dynamite!!』なりに自分が出ている姿っていうのは想像できました？

五味　やるんならJZ（カルバン）選手とのチャンピオン対決だなって思ってたんですけど、こっちのコンディションが整わないままで闘うのはファンに失礼だし、違うなって思っていましたね。だけど不思議なもんで、やりたいと思ってたJZ選手も出なくなったりね（笑）。世の中どうなるかわかんないっていうか、去年はそういう年だったんだろうなって。

――JZ選手との試合の話が具体的にあったわけではないんですよね？

五味　そうですね。「やるとすれば」って感じでいましたけど。

――「やるんなら、この相手しかいないな」っていう。

五味　僕が『HERO'S』に出るんじゃないかって書かれてた時期は、純粋に楽しむために観に行ってたんですよ。

――ミドル級トーナメントとかですよね。

五味　夏くらいですかね。それでJZ選手を観て感じたのは「このチャンピオンと、あと誰がやるんだろう？」って。なんか『HERO'S』の選手もやりたくないんじゃないかな、誰が止めれんのかなって。感じませんでした？



Takanori Gomi

選手同士だったらアリだけど、あんまり格闘家をディスらないほうがいいですよ

――ちょっと手に負えないなっていう感じですよね。

五味　お客さんも熱狂してるって感じじゃなくて。だから（小声で）セーム・シュルトが優勝したときみたいな（笑）。

――クククク！

五味　まああの中では強すぎるからしょうがないんですけどね。

――それを観て、「じゃあオレが」って気持ちになってきたと。

五味　といって、僕がチャレンジするっていう感じでもないし。

――五味さんもチャンピオンですからね。

五味　まあそのベルトもね、なんか〝公式記録〟じゃなくなっちゃった感じもするんですけど。あのとき、お客さんが観てる前で（桜井）マッハさんに勝ったってのは事実なんですけど。

――有名無実というか、ベルトも手元からなくなって……。

五味　いや、ベルトは家にあるんですけど。どこに返すのかもわかんないし（笑）。でも、そのへんははかないもんだなって。だから頑張れるんですけどね。新たなチャレンジをすればいいんで。

――そこで今年になって『戦極』出場が決まったわけですけども。

五味　選手としての自分とか、純粋にファイトを正当に評価してくれる人たちの中でやるってことですね、大事なのは。

――去年の格闘技界って、いってみれば〝政治〟の世界がメインだったと思うんですよ。でも五味さんは、そういうのが一番、肌に合わないんじゃないですか。

五味　なんとも言えないけど……格闘家っていうのは、普段から節制して、きつい練習してるんですよ。好きでやってることなんですけど。で、それって凄く繊細な生活なんで。そういう人間たちをね、あんまり傷つけてほしくないなって。

――選手が一番、大事にされなきゃいけないですよね。

五味　あんまり格闘家をディスらないほうがいいですよ。ディスるのって、選手同士だったらアリですけど。格闘家とラッパーは許されるんですけどね（笑）。

――それはそうですよね（笑）。

五味　でもそれ以外の人が格闘家をディスるのはダメですよ。努力してる人間をね……。

――そして『戦極』には、選手に対するリスペクトを感じたわけですね。

五味　ルールもしっかり作って、競技者のための大会になるって感じでしょうね。僕だけじゃなくて、ジムの子たちが安心して目指せる舞台を作るっていうのも大事ですしね。

――『戦極』参戦にあたっては、吉田秀彦選手へのリスペクトも大きな理由だったんですよね。

五味　それもありますね。吉田さんがいたからっていう。

――吉田選手の、どういう部分にリスペクトを感じてるんですか？

五味　やっぱり大人っていうか。一昨年から、PRIDEはいろいろあったじゃ

PRIDEに出てた頃の自分っていうのは、まだ子どもだったんですよ

Takanori Gomi

ないですか。

——放送打ち切りがあって、買収があって、活動休止にまでなって。

五味　そうなったときにね、吉田さんは格闘技の道を選んだんですよね、我慢強く。あれだけの人がね、他の選手と一緒に、どうにもならないことに耐えてきたじゃないですか。

——金メダリストで、常に陽の当たる道を歩いてきた人が、っていう。

五味　僕、中学生くらいのときに観てましたからね、オリンピック。そういう人が、僕らと同じ状況に耐えてきて、それで新しい大会に出ることになったんで。そこに自分が一緒に出られるってうのは名誉なことですよ。

——新しい大会で心機一転になりますけど、どんな姿を見せたいと思ってますか？

五味　一回目の大会なんで、どんな大会になるか僕もわかんないんですよ。でも、そういう場に自分もいられるっていうのは嬉しいですね。

——最初から関わるっていう意味では、修斗ともPRIDEとも違いますよね。

五味　一回目で、大会の色ってだいぶ決まってくると思うんですよ。そのときの印象がすべてを決めるっていうか。だから、絶対勝ちたいですよね。

——大会の色を決める一発目で闘うっていうのは、かなり燃えますか。

五味　そうですね。やっぱり大事なとこで勝って、期待されてる場面でやってくれるっていうのがスター選手の条件だと思うんで。

——対戦相手はドゥエイン・ラドウィック選手に決まりましたね。K—1 MAXにも出てたストライカーです。

五味　打撃を中心に対策を練ってますね。総合なんで柔軟にやろうとも思ってますけど。いま、走り込み中心の練習をやってて、前に出るスタイルをまた作り直してるんですよ。多少（攻撃を）もらっても、下がらないようにしようと。

——五味さんらしさが問われる相手というか。ラドウィック選手はUFCで須藤元気選手とも闘って判定勝ちしてましたけども、あの試合はセコンドについてたんでしたっけ？

五味　応援に行きましたよ。そういう意味でもね、カタキ討ちってわけじゃないけど、僕は格闘技を続けなきゃいけないんでね。元気は本の印税でやっていけるんだろうけど（笑）。

——こっちはまだファイトマネーでやってくぞ、と（笑）。

五味　そうそう（笑）。まあでも、元気も嬉しいと思いますよ。僕が格闘技を続けて、自分が昔やった相手と闘うっていう。そういうとこもおもしろいですね、今回。

——だから舞台にしても相手にしても、五味さんには新しいモチベーションが必要だったっていうか。一度は頂点を極めたわけですから、そこから先……。

五味　（さえぎって）いやいやいや。頂点を極めたとかってことじゃないんですけどね。PRIDEに出てた頃の自分っていうのは勢いでやってたし、周りの状況もね、ブームだったし。楽しさだけでやってきたっていう。子どもだったんですよ。でもこれからはね、プロとしての意識をかなり高く持たなきゃいけないでしょうね。これからも、いいこともあれば悪いこともあると思いますけど、周りに流されたくないですね。

——足元を見据えるというか。

五味　だから……格闘技やってはしゃいでたり、調子に乗ってたり、そういう選手を見ると気持ち悪いんですよね。昔の自分を見てるみたいで。

——「オレも前はこんなだったな」と。

五味　それはね、木口（宣昭）先生にも言われたんですよ。「テングになってるヤツは気持ち悪いよ」って。何言ってもわかんないんですよね、そうなったら。二度とそんな人間にはなりたくないんですよ。調子に乗って突っ張って、周りにいる人を不快にするような人間にはね。それよりね、いっぱい練習して、パパッと仕事終わらせて、「よし、飲みに行くぞ！」っていうのが一番（笑）。

——そこが本線だろう、と（笑）。

五味　小さいって言われるかもしれないけど、そこが一番ですよ（笑）。「ほかに何があるの？」って思いますけどね。いろんな人にアピールするのは大事ですけど、フワフワしたくはないですね。

——じゃあ五味さんの中では、『戦極』で格闘技ブームをもう一度取り戻したい！」って感じではないんですね。

五味　それより淡々というか、よりプロに徹する感じですね。結果はあとからついてきますから。

——いっぱい練習して、いい試合してっていうのがプロの基本だろ、と。

五味　だってねえ、前は練習してなかったし（笑）。

——それは衝撃の告白ですよ！（笑）。

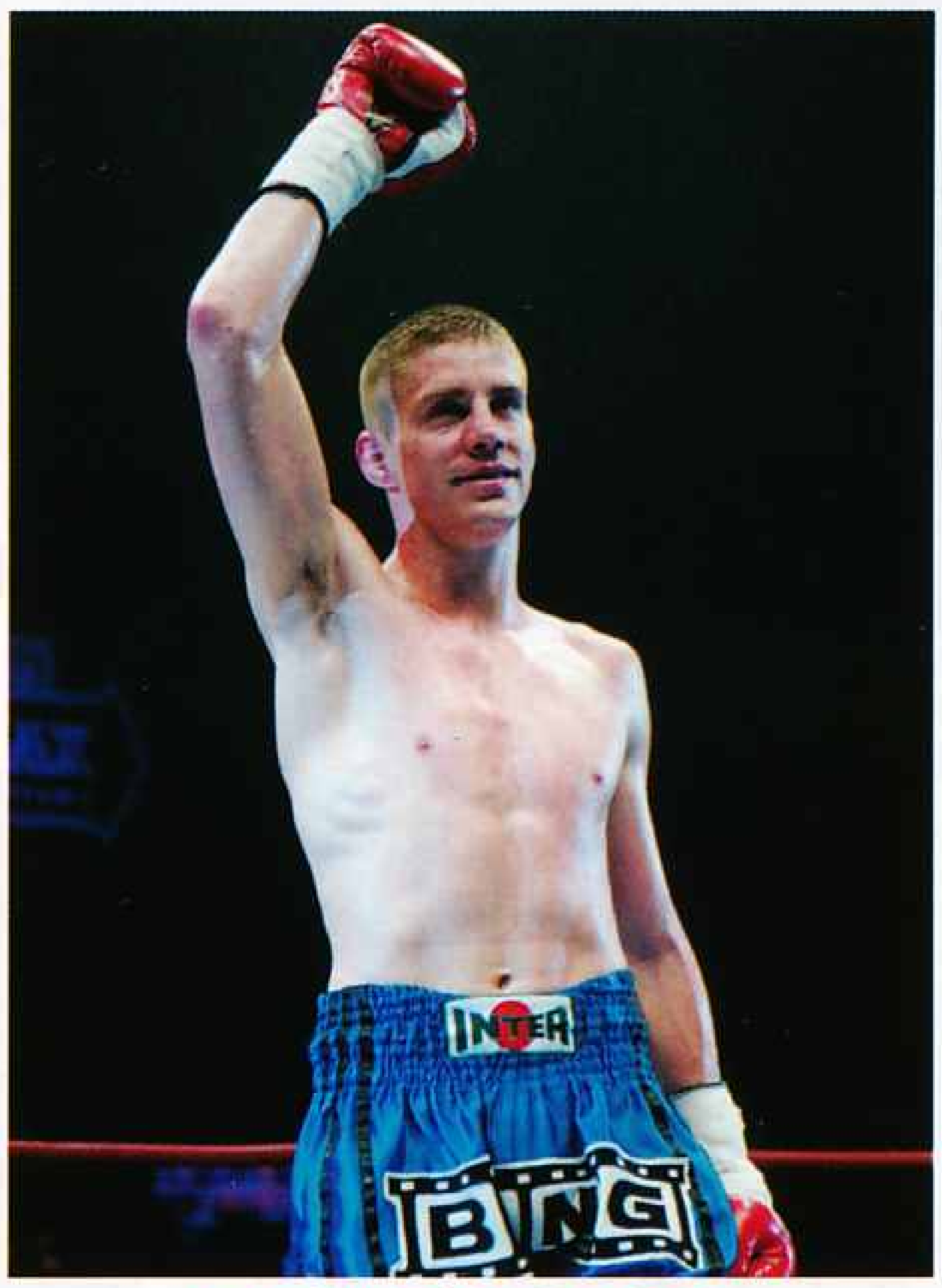
五味　いや、やってはいたんですけどね。いまのほうが練習日は多いんですよ。それがどう出るかっていうのは、試合してみないとわからないですけど。

——練習でいうと、ひさしぶりに古巣の木口道場とか空手（武心塾）の練習も再開されたんですよね。

五味　今年に入ってからですね。木口先生とはマンツーマンで。

——それは厳しそうですねぇ！

五味　きっついですよ。木口先生、こないだDVD出したんですけど、そこからなんか身体がウズウズしてきちゃったらしくて（笑）。



3.15『戦極』五味の相手、ドゥエイン・ラドウィックとは？

1978年8月4日、アメリカ出身、立ち技・MMAを両方こなすマルチファイター。K-1 MAXでは武田幸三をKOし、魔裟斗やアルバート・クラウスとも対戦。MMAでは03年にジェンズ・パルヴァーをKOし、須藤元気にも勝利するなど、実績は充分。最近はストライク・フォースを中心に活躍中。MMAでは判定決着が3試合しかないラドウィックとアグレシブな試合が信条の五味との一戦はKO決着必至！



――じゃあこっち（久我山ラスカルジム）での練習があり、以前と同じ練習も復活して、環境が全部整った感じですよね。

五味　この1年半、ジム作って身勝手にやらせてもらってたんですけど、自分の親は木口道場なんで。「自分一人で悩むのもいいけど、たまには帰ってこいよ。仲間がこんなにいるんだから」っていうね。そういうのを言葉じゃなくて、身体で示してくれるんですよね、先生が。

――新しい戦場も決まって、練習環境も整って、また〝あるべき五味隆典〟が帰ってくるのかなっていう感じがしますね。

五味　そうですね、ホントそう思います。修斗で厳しい闘いをしてきて、ブームの中でPRIDEに出て。で、今度が最後ですよね。本当に自分の存在が試されると思うんですよ。

――ファンもそこを観たいんだと思いますよ。

五味　……僕、できますからね、まだ。よく雑誌に〝去就〟がどうのって書いてあったじゃないですか？　まるで引退するのかといったように。

――そんなのよけいなお世話だと（笑）。

五味　そうそう。そういうのをね、人に決められたり遮られたりしたくないんですよ。ケガもしてないし練習もしてるしね。去就がどうのって、そんなの自分で決めるよ！（笑）。

――まあ、そうですよね（笑）。

五味　だからこれからですよね、これから。苦しい時期は終わったんで。これから本当の五味隆典をお見せしますから。

【08年2月12日／都内・久我山ラスカルジムにて収録】

ごみ・たかのり■1978年9月22日、神奈川県出身。98年11月に修斗でデビューして以来連勝を続け、01年12月には佐藤ルミナを破り、第5代ウェルター級王者となる。PRIDEでは『武士道』のエースとして破竹の10連勝。05年には、初代PRIDEライト級王座を奪取。PRIDE消滅後、去就が注目されていたが、3.5『戦極』旗揚げ戦への参戦が決定。対戦相手はドゥエイン・ラドウィック。現在は久我山ラスカルジムの会長も務める。173cm、73kg。

戦いを極めろ！『戦極』は、こちらの7カードで旗揚げ戦に突入!!

『戦極-SENGOKU-』

3月5日（水）東京・国立代々木競技場第一体育館　開場17:00／開始18:30

対戦カード

吉田秀彦（吉田道場）vs ジョシュ・バーネット（フリー）
五味隆典（久我山ラスカルジム）vs ドゥエイン・ラドウィック（ハイ・アルティチュード）
藤田和之（藤田事務所）vs 強豪X
三崎和雄（GRABAKA）vs シアー・バハドゥルザダ（ゴールデン・グローリー）
瀧本誠（吉田道場）vs エヴァンゲリスタ・サイボーグ（シュートボクセ・アカデミー）
ファブリシオ・"ピットブル"・モンテイロ（グレイシー・フュージョン）vs ニック・トンプソン（フリースタイル・アカデミー）
川村亮（パンクラスism）vs アントニオ・ブラガ・ネト（グレイシー・フュージョン）

入場料金（全席指定・消費税込）

VIP席 100,000円（専用入場ゲート・特典付き）／RRS席　30,000円
戦極シート（S席）17,000円（特典付き・完売）／S席　17,000円／A席　7,000円

お問い合わせ

株式会社ワールドビクトリーロード TEL.03-3369-2211
『戦極-SENGOKU-』オフィシャルサイト http://www.sengoku-official.com/

『戦極』旗揚げ戦PPV完全生中継!!

放映スケジュール

スカパー！「パーフェクトチョイス」にて全7回放送

●生中継 3月5日（水）18:30〜22:55（ch.162）
●タイムシフト放送 3月5日（水）21:00〜25:25（ch.176）、23:00〜27:25（ch.177）
※他、再放送あり

e2 by スカパー！「スカチャン！ ハイビジョン」にて全3回放送

●生中継 3月5日（水）18:30〜23:00（ch.800）
●再放送 3月6日（木）22:00〜26:30（ch.800）、7日（金）24:00〜28:30（ch.800）
※事前に「『戦極』第1回大会 HVチケット」（商品コード：K10）を購入。　※上記視聴チケット購入で生中継と再放送2回の計3回視聴が可能。
※その他、一部ケーブルテレビ局でも生中継。なお、視聴方法については近くのケーブルテレビ局まで問い合わせ。
●視聴料金：2,625円（税込）

お問い合わせ

スカパー！カスタマーセンター TEL.0570-039-888（10:00〜20:00）
e2 by スカパー！カスタマーセンター TEL.0570-08-1212（10:00〜20:00）

"野獣"藤田和之も『戦極』を選択!!

©WVR



この号が発売される頃には相手も決定していると思われるが、昨年4月の『PRIDE.34』以来、試合から遠ざかっていた藤田が選択したリングは『戦極』だった。「いくつかの選択肢がありましたが、『戦極』のリングで闘うことを決意しました。決して後ろに下がらない、そんな闘いを皆さんに観てもらえたらと思います」とコメントを発表した藤田。試合が決まり、ロスのマルコ・ファス道場で猛練習中の藤田の近況については、『kamipro Hand』で好評連載中の、業界きっての藤田番、GKこと金沢克彦のコラム「こちらプロレス村役場」をチェックするんだ！



3.15『DREAM.1』でついにカルバン戦が実現!!
“ミスターやれんのか!”が連立内部闘争宣言!

“HERO'S”には絶対に負けない!!

夢の大連立の末に発足した新イベントDREAMだが、リング上では対立!!
それはそうだろう。そしてそのほうが絶対におもしろい！　PRIDEvs『HERO'S』のライト級全面戦争、
そしていきなりの大将戦！　ワオ木真也さんとカルバンの一戦。これは大変なことになった!!

聞き手／ジャン斉藤　撮影／梅木麗子

真　也



青　木
Shinya Aoki

去年の苦しさと比べたら闘えるだけで幸せいっぱい、夢いっぱい!!

――青木さん、韓国への遠足はお疲れさまでした。

青木　いやあ、おもしろかったですね、韓国!!

――そうですか。ボクは行きのエアが4時間も遅延した時点で心が真っ二つに折れましたけど。

青木　まだまだですね～。ボクなんか、あるイベントを8ヵ月も待ち続けたことがありましたからねぇ……（遠い目で）。

――ダハハハハ！　たいへん失礼いたしました（笑）。

青木　でも、ホントに韓国はよかった。とくに食べものが凄くうまい!!　うん。

――キムチとか辛いやつをバリバリ食ってましたよね。現地の人でもちょっと敬遠するトウガラシも迷わずかぶりついて。

青木　なんかね、ボクの身体に韓国料理が妙に合うんです。アッチに住みたいくらいですよ。あと、格闘技記者の人もヤバかったしね～（148ページを参照）。クククク。

――青木さん、隣で聞いてて爆笑してましたよね（笑）。で、そんな思い出に浸っているところに残念なお知らせが……。表紙候補だったホンマンとのデコボコ大連立をイメージするツーショットは、申し訳ありませんが落選です！

青木　ん？　じゃあ、誰が表紙になったんですか？

――ミルコ・クロコップ。

青木　ミ、ミルコめ～!!

――いやいや、恨むならボクを恨んでください（笑）。

青木　ウソウソ。全然気にしてないですよ。いいんじゃないですか。

――よかった。でもまあ、たったいまDREAM開催記者会見が終わったばかりですけど、去年4月のPRIDE休止から続いてきた不安はこれで解消されたんじゃないですか？

青木　いやいや～、まったく安心できないですよ！　新しいイベントですし、いろいろと課題は山積みだと思いますよ。

――まあ、そうなんですけども。でも、やっと光明が見えてきた感じはあるじゃないですか。違います？

青木　そうですね。生々しい話になりますけど、ワオ木真也、今年は定期収入が得られそうデース!!（一際大声で）。

――ちょっと、まだファンの人が残ってるんですから（笑）。

青木　ククク。進路が新宿中央公園に向かっていたんですけどね～。ホントに危なかったなあ。

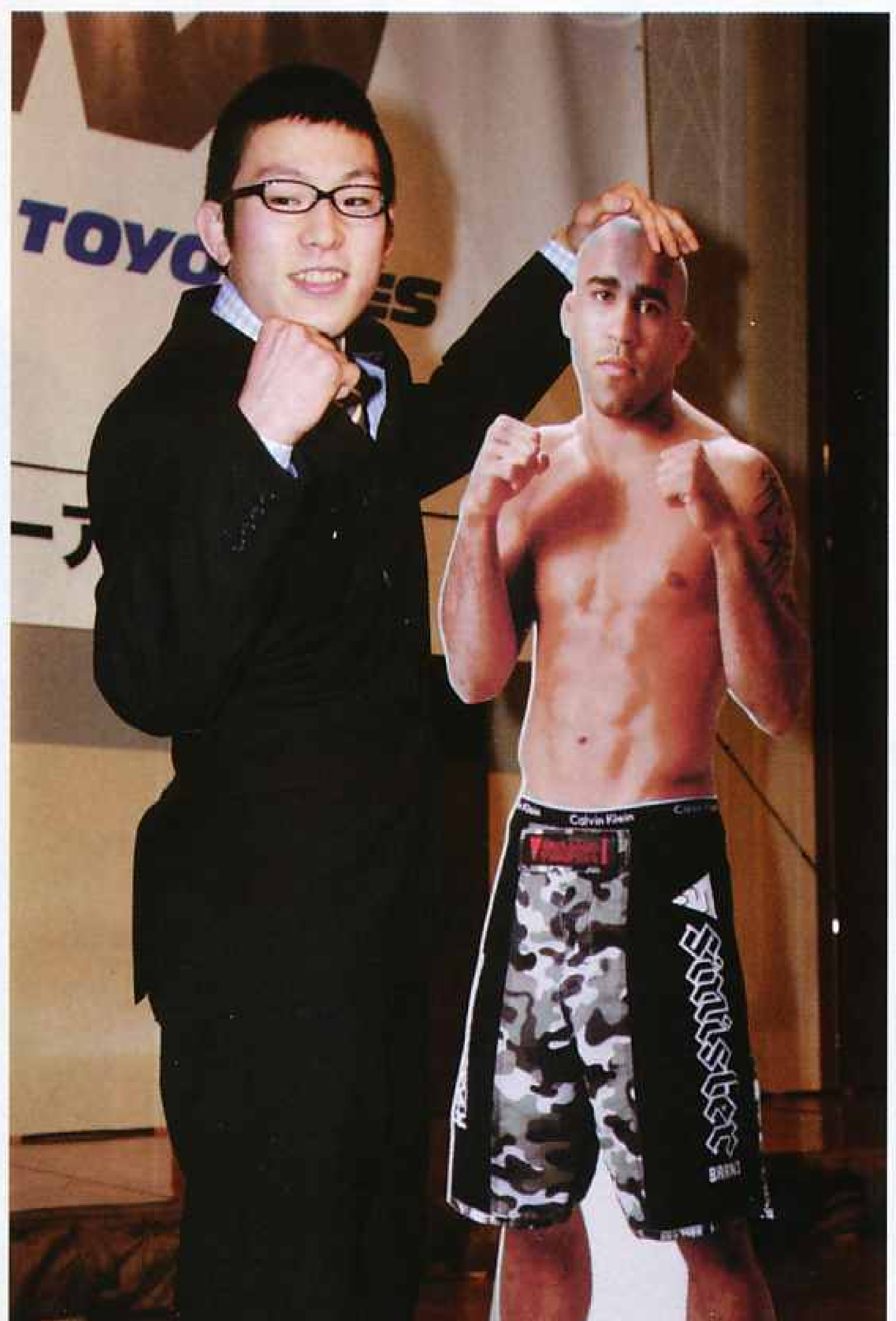
――〝ホームレス格闘家〟寸前でしたか（笑）。やはり闘うリングはこの新イベント、つまりDREAMという気持ちはあったわけですよね。

青木　そうですね。ボクは『やれんのか！』のスタッフと一緒にやっていこうと思っていましたから。ほかのリングは選択肢になかったですね。

――たとえば『戦極』とかUFCに興味はなかったんですか？

青木　ほかのリングがイヤだというわけじゃないですけど、いままで一緒にやってきた人たちを裏切ることはできないでしょう、やっぱり。

Shinya Aoki



昨年の大晦日、真のメインイベントが『DREAM.1』で実現！　青木真也vsJ.Z.カルバン戦が第一弾カードとして発表された。この二人のどちらかが一回戦で消えてしまうなんて、もったいないよ!!　だからこそ観たいんだっ！

――まあまあ、最近の青木さんのストーリー的にも、ここでほかのリングを選択したら、ファンからすると意味がわかりづらいですしね。

青木　でも、FEGさんと『やれんのか！』が一緒に新しいイベントをやることで、ボクの（ウェブの）ブログでは炎上してましたけどね。ムチャクチャおもしろいことになってましたね～。

――聞くところによると、コメント欄が大変な騒ぎになってたそうですね。で、青木さんはその炎上を利用して自分のDVDを売りつけようとしていたそうですし、いったい何をやっとるんですか（笑）。

青木　炎上サイコー!!　ボクの最新DVDもサイコーです！　ぜひご購入を。クククク。

――正直、そういうファンの気持ちはどう思います？　中には極端な声もあるんでしょうけど、PRIDEファンのFEGに対するアレルギーってあたりまえのようにあると思うんですよ。

青木　ボクはもう立派な大人ですから。こういう時代だからこそ、リング外では手を組んで、格闘技がいい方向に進めることを考えたいです。ただし、リングに上がったら絶対に『HERO'S』の選手には負けないですよっ!!（キッパリ）。

――ちょっと青木さん。まだ『HERO'S』の選手がいらっしゃいますから（笑）。

青木　クククク。だから、ファンのみんなも全面的に受け入れるわけでもないし、逆に全否定するわけでもない。そう楽しんでいただけたらと思います。

――そういえば、韓国で青木さんに「カルバン戦は『HERO'S』でやるのと『やれんのか！』でやるのは雰囲気を含めてだいぶ違いますよね」って言ったら、「ボクにとってみれば、やれるだけで幸せです!!　合掌！」みたいなことをおっしゃってましたよね。

青木　そうですよ。やるだけで幸せいっぱい、夢いっぱいですよ！　朝起きて、コ



ーヒーが飲めて、おいしいご飯が食べられて、練習ができて、で、3カ月に一回、試合ができたら……ほかに何もいらないです。だって去年の苦しさと比べたら、これって大きな前進だと思うんですよね。

——実感がこもっているなあ。でも、『HERO'S』への対抗心みたいな感情は確実にあるわけですよね。

青木　メチャクチャありますよ！　前にも言いましたけど、「アッチは敵だ!!」って教えられてきたわけですよ。それなのに明日からいきなり友だちになれるほど、ボクがやってきたことは並大抵じゃないぞ!!　という気持ちは凄くありますね。それは『HERO'S』の選手にもあると思うんですよね。そういう意地をリング上で張っていきたいですね。

——つまり、ライバル関係は保って、それに伴なう緊張感は維持していきたいっていうことですよね。

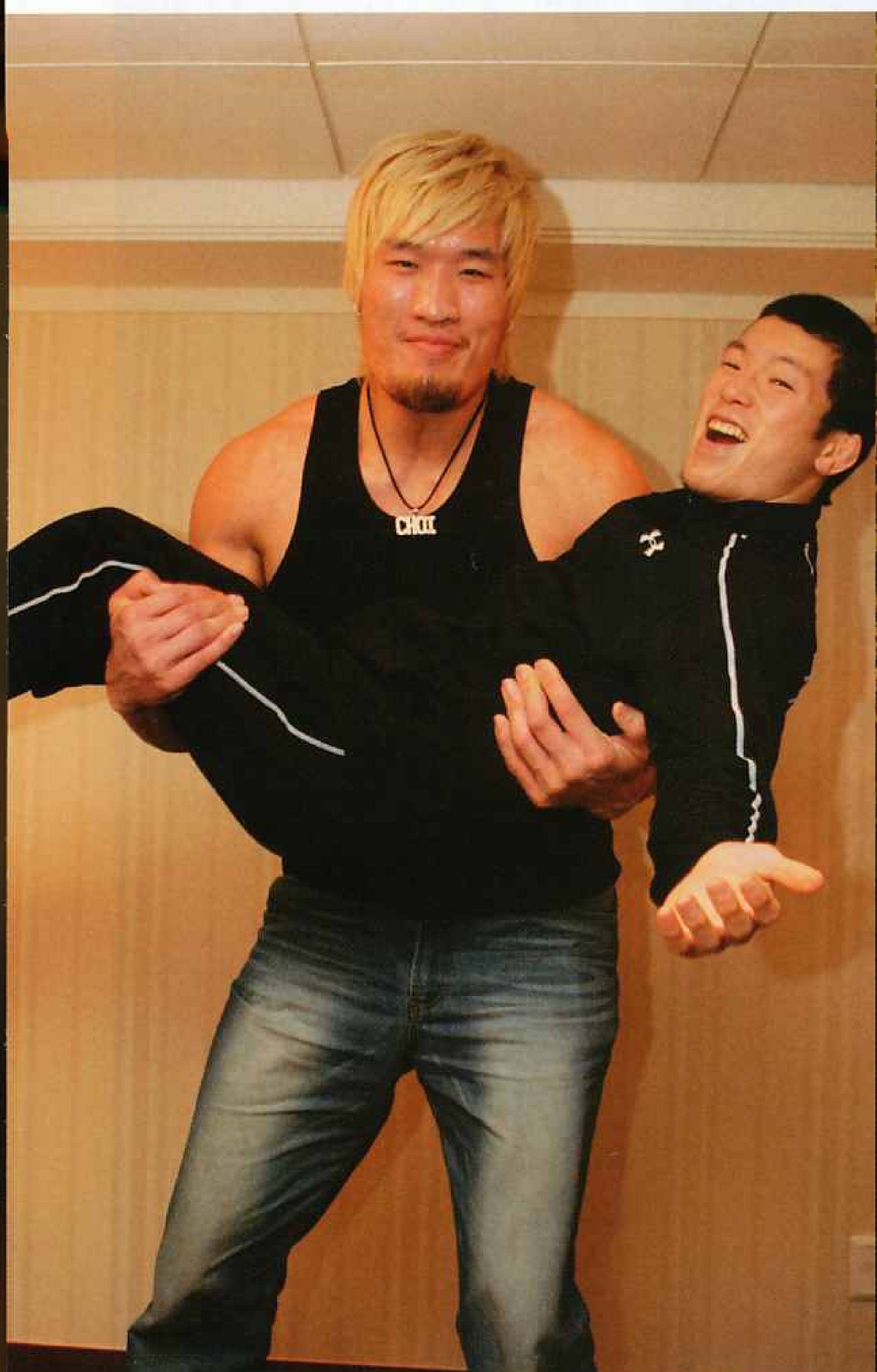
青木　そうです、そうです。勝手にボクは〝ミスターやれんのか！〟だと思っていますから、カルバン戦ではその看板を背負いますよ！　看板を背負ってきたのはミルコじゃないですから。ボクですから！　……まあ、ミルコ本人の前では怖くて言えないですけどね!!

——ダハハハハ！

青木　怖くて言えないな〜。「じゃあ、表に出ろや！」って言われて、ハイキックされたらどうしようもない!!　ボクは打たれ弱いのが売りなんで。

——そのミルコと控室は一緒じゃなかったんですか？

青木　いや、違いますね。『HERO'S』の選手とは一緒でしたけど。ボクはイマナーさん（今成正和）とワオワオしていましたよ。









ワオ木さん、韓国へ行く!

本誌の企画で大巨人チェ・ホンマンに会うため、二泊三日の日程で韓国に遠足!!　しかし、さすがついていない男。出発便が遅れるわ、韓国に雪を降らせるわ、韓国マスコミからトンデモ質問をぶつけられるわでさんざん！　でも、無事にホンマンに会えて、韓国料理を充分に堪能！　韓国、サイコーな青木さんでした!!

——『HERO'S』勢とはコミニュケーションはとられなかったんですか？

青木　まったく話はしてないですよ。「ボク、知〜らない！」って感じでイマナーさんとワオワオしてました。

——それ、おもしろいですね。そういう控室の模様って。

青木　精神的には全然よくないですよ！　じつは小心者ですからね〜。

——いや、見ているほうからするとメチャクチャおもしろいですよ。緊張感ありますよ。

青木　ああ、確かにそうかもしれないですね。まあ、『HERO'S』には絶対に負けない!!」という気持ちを持ってやります。ボクは勝手にそういうプライドを持っているから、すべてを懸けて闘います。つまるところ一番目立ちたいっていう自分勝手な欲求の塊なんですけど。おいしいところは持っていかせないぞ!!　って。

——確かに、連立したからって、選手までもが仲良しこよしになられても、こっちはおもしろくないですからね。

青木　だから、『HERO'S』勢とはいい意味で友だちにはなれないです。やってやりますよ、全員と。カルバンに勝って、所選手、宇野選手、宮田選手にも勝って、あとミノワ（マン）選手とか桜庭選手も！

——あ、桜庭さんまで（笑）。いい姿勢ですね。そしてミルコともやって。

青木　怖いなあ、ミルコは。ククク。

——そういえば、青木さん、ついに地上波デビューじゃないですか。PRIDE参戦と時を同じくして、テレビ中継は打ち切りになっちゃいましたから。

青木　ですね。テレビのないところで一生懸命シコシコやってきたから、そのパ

ワーをぶつけてやります。
――それで有名になったら、青木さんが遠いところに行っちゃいそうだなあ。
青木 いやいや、『富士そば』は離さないし、『kami-pro』も離さないですよ、遠いところに行っても。ククク。
――ああ、遠いところには行くんですか（笑）。地上波のプレッシャーみたいなのはありますか？ 全然ないか、それは。
青木 なんにもないです！ な～んも関係ないです。
――3月に『戦極』さんもイベントがありますが、どうですか？ 大物選手が続々と出ますが、そっちは意識します？
青木 いや、意識するも何もないです。
――五味選手も『戦極』ですけど。以前は対戦を熱望されていたじゃないですか。
青木 大晦日にしても、ボクは五味選手と闘ってみたかったですけどねぇ。五味選手のほうがあまり意識してないみたいだし、ボクと闘う気がまるでないみたいなので。それならしょうがないですよね。
――それにリングも別々ですしね。
青木 現実問題としてできるかどうかはともかく、ボクにやる気があっても相手にその気がないんだったらしょうがないですよね～。残念ではありますけど、そこからロマンは生まれませんよ。だったら、ボクと向き合ってくれるカルバンのほうと闘ったほうがロマンはあります。
――ポイントはロマンですか。
青木 ボクが闘う理由はロマンがあるかどうかなんです。ファンがどう思うか、どう興奮してワオワオしてくれるかどうか!? 今度のカルバン戦だってそうですよ。これ、ボクが血まみれの失神になるか、カルバンが絞め落とされるかの試合になると思うし、ファンもそういう試合を期待していると思うんですよね。そういうファンの心に応えたい。そのためにボクは闘います！ うん。ホントにどうなるか、ボク自身もワクワクしてますからね！ どうする、どうなる、青木真也さん!?



――ダハハハ。『やれんのか！』vs『HEROS』という対立構造も刺激的ですけど、青木さんたちには新しい価値観を生み出してほしい気持ちがあるんですよ。ストレートに言うと、良い意味でPRIDEは捨ててほしいというか。
青木 あ、それはボクもそう思いますね。もう"けじめのイベント"はやったわけですし、それでもPRIDEにしがみつくのは、な～んか、くたびれた同窓会みたいな感じですよねぇ。
――ダハハハハ！ あの頃はよかったなあって、うしろ向きな感じで。
青木 イヤだなあ、そんなの。ボクはですね、DREAMも『戦極』も、PRIDEを受け継ぐ団体なんじゃなくて、PRIDEから産み落とされたものだと思うんですよ。

Shinya Aoki

"けじめのイベント"は大晦日にやったわけだし PRIDEにしがみつくのはくたびれた同窓会

――なるほど。そうですね。産み落とされたものですね。
青木 そこが重要!! いつまでもマザコンじゃないんだから。PRIDEという親はもう死んじゃったんだから、あとはどうやって自立していくかですよ。
――いまの青木さんは、お母さんが再婚して、新しいお父さんの連れ子の兄弟とギクシャクしている感じですよね。「お兄さんと呼びなさい！」ってしかられるけど、まるで聞く耳を持たない（笑）。



あおき・しんや■1983年5月9日、静岡県出身。柔道、柔術をバッグボーンにする、世界が恐れる天才グラップラー。父・青木正さんは、息子の試合中に「余分なことすんな!!」とシャウトすることで有名。180cm、70kg。

青木 そりゃあ呼べませんよ。まだ、反抗期だから（笑）。「これ、今日から僕のお父さん？ お母さん、こんなお父さんイヤだ～！」みたいな。
――その距離を埋めるのは時間かかりますよね。
青木 時間かかりますよ。いつまでたっても意地張ります！ 3月15日は、大反抗期の青木真也を期待してくださいよ。
――わかりました！
【佐藤大輔が通りかかる】
青木 お疲れさまです！ 明日バレンタインデーですねぇ。
佐藤大輔 元気出してくださいよ（笑）。じゃあ！
青木 ど、どーゆー意味ですか!?
――チョコをもらえなくても元気を出せ！ってことですかね（笑）。まあ、青木さんはマブダチのしなし（さとこ）さんからはもらえるんじゃないですか。
青木 どうですかねえ～。しなしさんは何を考えているかわからんですからな～。
――チョコはあげないけど、お返しはよこせぐらいの？
青木 そんくらいのオラオラはありますから！ こき使ってくださりますからね、ボクのことを。
――今日の会見で、しなしさんが出てくるんじゃないくらいのオラオラ感？（笑）。
青木 それはロマンがあるなあ。ミルコの代わりに出てきてもおかしくなかった！ どっちもボクは勝てないですけどね（笑）。
【08年2月13日／都内 ホテル・メトロポリタン・エドモントにて収録】

3.15DREAMライト級GP開幕!!













HEIWA
『DREAM.1』
ライト級グランプリ2008開幕戦
さいたまスーパーアリーナ
3月15日（土）試合開始／15:00（予定）

対戦カード
青木真也 vs J.Z.カルバン

【ライト級グランプリ参戦予定選手】
J.Z.カルバン、青木真也、川尻達也
石田光洋、アンドレ・ジダ、宇野薫、
チョン・ブギョン、宮田和幸
ヨアキム・ハンセン、アルトゥール・ウマハノフ
ギルバート・メレンデス
ルイス・ブスカペ、朴光哲ほか

入場料金（全席指定・消費税込）
VIP席 100,000円（特典＝専用入場ゲート・グッズ付）
RRS席 30,000円／スタンドS席 17,000円／スタンドA席 7,000円

OA情報
3月15日（土）19:00〜20:54
TBS系列28局全国ネット

お問い合わせ
DREAM事務局 TEL.03-5775-5065

超! イケてるイベントになると思うんで!（KID調）

年間スケジュール

3月15日（土）
HEIWA DREAM.1
ライト級グランプリ2008開幕戦
さいたまスーパーアリーナ

4月29日（火・祝）
OLYMPIA DREAM.2
ミドル級グランプリ2008開幕戦
さいたまスーパーアリーナ

5月11日（日）
HEIWA DREAM.3
ライト級グランプリ2nd ROUND
さいたまスーパーアリーナ

6月中旬
OLYMPIA DREAM.4
ミドル級グランプリ2nd ROUND
韓国 or 横浜アリーナ

7月21日（月・祝）
HEIWA DREAM.5
ライト級グランプリ決勝戦
大阪城ホール

9月下旬
OLYMPIA DREAM.6
ミドル級グランプリ決勝戦
さいたまスーパーアリーナ



二大スターも開幕戦登場か!?

4.29 ミドル級GP開催も決定!

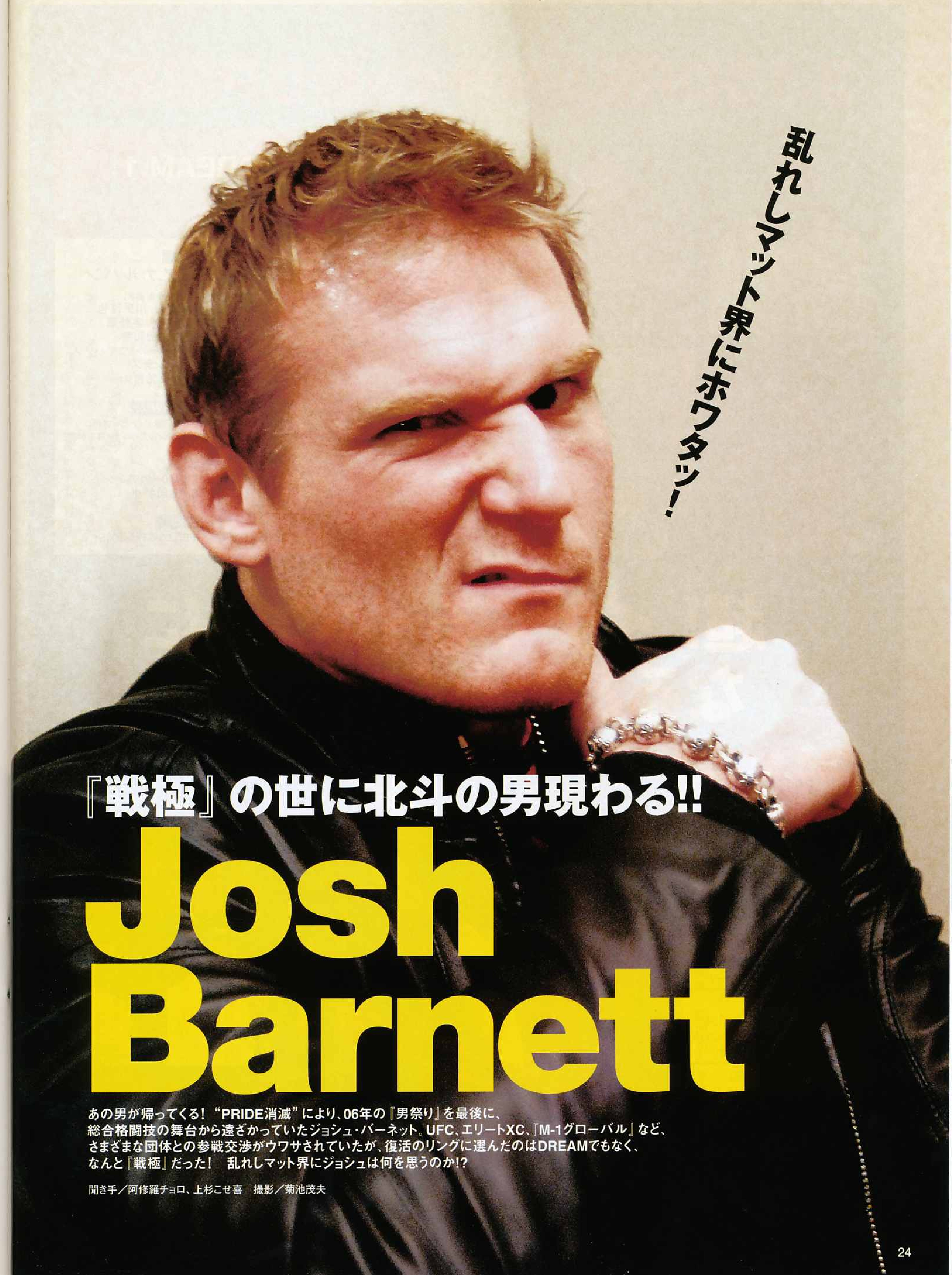












乱れしマット界にホワタッ！

『戦極』の世に北斗の男現わる!!

Josh Barnett

あの男が帰ってくる！ “PRIDE消滅”により、06年の『男祭り』を最後に、総合格闘技の舞台から遠ざかっていたジョシュ・バーネット。UFC、エリートXC、『M-1グローバル』など、さまざまな団体との参戦交渉がウワサされていたが、復活のリングに選んだのはDREAMでもなく、なんと『戦極』だった！　乱れしマット界にジョシュは何を思うのか!?

聞き手／阿修羅チョロ、上杉こせ喜　撮影／菊池茂夫

——ジョシュさん！　ようやく総合の試合が決まりましたね!!

ジョシュ　（日本語で）チョー、ヒサシブリ。試合を組んでくれたワールドビクトリーロードとこれまで待ってくれたファンに感謝したいね。

——PRIDEとの契約の問題もあって、なかなか総合の試合ができなかったようですけど、『戦極』を選んだのはどうしてですか？

ジョシュ　ボクにはファイターとしてこれまで積み上げてきたモノがある。彼らは、その積み上げてきたモノを崩さないようなオファーをしてくれたんだ。ヨシダサン（吉田秀彦）と闘うことは光栄だしね。

——オファーがあったのはいつですか？

ジョシュ　年末ぐらいかな。パンクラスを通じてオファーがあったんだ。「『戦極』というイベントが立ち上がるから、一緒に仕事をしたい」とね。でも、そのあいだにボクが『M−1グローバル』でアレキサンダー（・エメリヤーエンコ）と闘うとか、ヨシダサンがホジャー・グレイシーと闘うというウワサがネットに流れて迷惑したよ。パンクラスのためにも、このリングで闘うと決意していたのにね。

——ダナ・ホワイトじゃないですけど、「インターネットを信じるな！」と。今日の会見には、そのパンクラスのベルトを持ってきてましたよね。

ジョシュ　モチロン！　これはボクのベルトだし、パンクラスを代表して闘っているという気持ちを常に持っているからね。このベルトの価値を上げるように頑張らないと。

——で、いきなり『戦極』のエースと闘うことになったわけですが。

ジョシュ　ヨシダサンのキャリアを考えると、今回闘わなかったら、もう闘うチャンスはなかっただろうから嬉しいよ。偉大な柔道家として尊敬しているからね。世界中のファンに、観たこともないグラウンドゲームを見せてやるよ。

——柔道vsキャッチレスリングということですね。

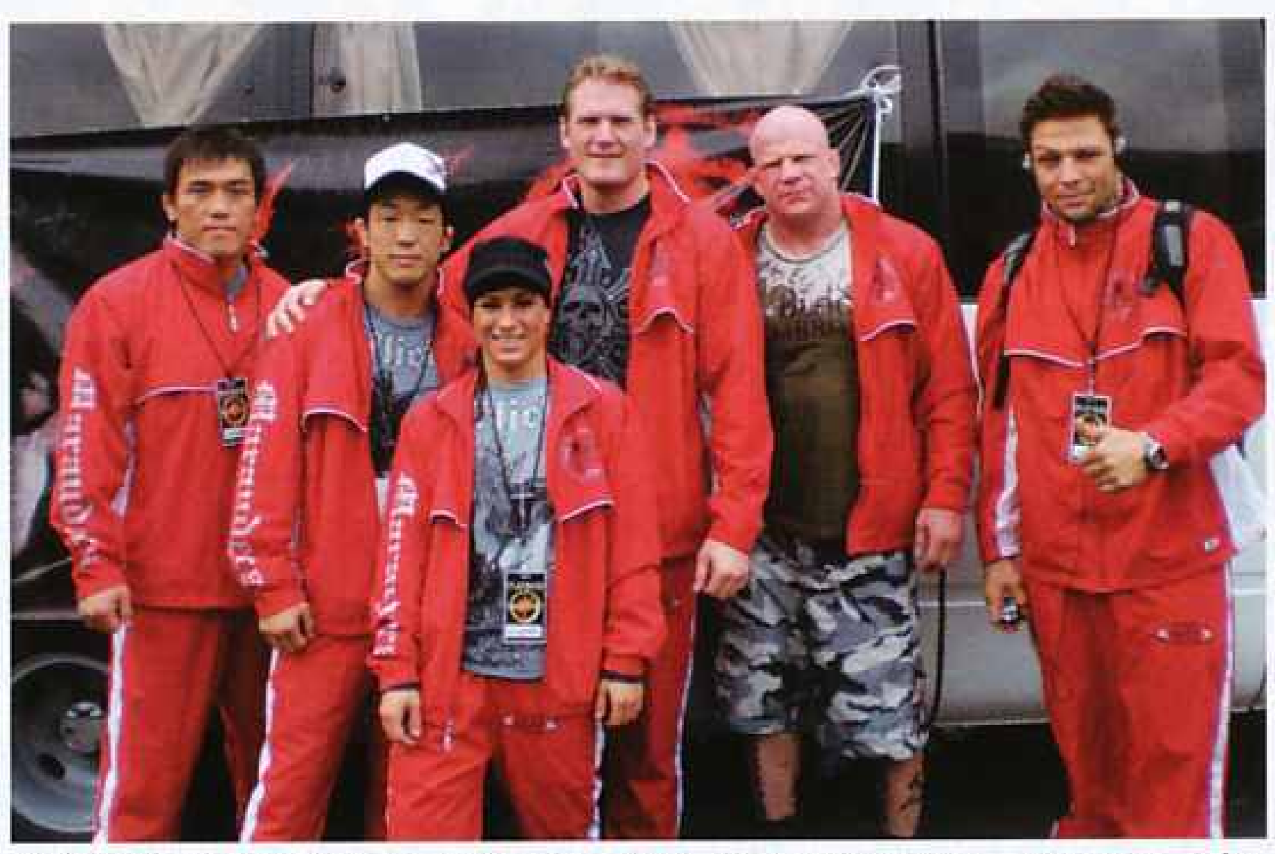
ジョシュ　でも、その前に北斗百烈拳をあたたたたっ〜！　と炸裂させて勝っちゃうかもしれないけど。

——どっちですか！　吉田選手とはかつて一緒にトレーニングされたこともあるみたいですけど、闘うことに抵抗はないですか？

ジョシュ　問題ないよ！　リングに上がれば、誰とでも闘うのがファイター。ケンシロウだって、ファミリーや友だちと闘ってきただろう。一緒に練習したことでわかったこともあるから、それを利用させてもらうよ（ニヤリ）。



2月3日に行なわれたカード発表会見では、パンクラスの無差別級のベルトを持ってきたジョシュ。かつてトレーニングをともにした吉田と向かい合うと、思わずお互いにニッコリ。



総合の試合に出られなかったジョシュだが、昨年12月にはコーチとして、ジェフ・モンソン、レナート・ババル、近藤有己、大石幸史らを率いてフィリピンのMMAイベント『RING OF FIRE』に参戦していた。

——お互いの共通の友人である髙阪剛さんは、どちらのセコンドにつきますかね？

ジョシュ　う〜ん、TKは中立の立場として、コメンテーターになるんじゃないかな、たぶん。ただナカムラサン（中村和裕）はヨシダサンにつくだろうな。ヨシダサンはサッポロビールのCMに出てたから、ボクも試合前にナカムラサンにビールの一杯でもおごって買収しとかないと（笑）。

——そんなこと、よく知ってますね。その吉田戦の前に、この雑誌が出ている頃には結果は出ていますけど、IGFで小川直也選手との試合がありますよね。

ジョシュ　因縁深い二人の柔道レジェンドと続けて対戦するのはミラクルだね。ハードな課題になるよ。ガンバリマス！

——ジョシュさんからすれば、どちらが手強い相手になりますか？

ジョシュ　ヨシダサンはオガワサンにPRIDEで闘っているけど、IGFでなら、結果は逆になるんじゃないかな。オガワサンのプロレスのキャリアは長いしね。どちらもタフな試合になるよ。

——でも、吉田選手はIGFの試合を「どうせプロレスでしょ？」と言ってましたけど。

ジョシュ　オガワサンは総合よりプロレスのほうが強いよ（キッパリ）。ルールも違うし、油断はできないな。

——しかし、いまはMMAとプロレスの両方で闘う選手は珍しいですけどね。

ジョシュ　ボクにはMMAとプロレスとどちらか一つを選ぶという考えはない。リングがあれば、そこに上がるのが自分の使命だと思ってるから。

——そのプロレスの中でもIGFで闘うのは、やはり猪木さんのリングだということが大きいんでしょうか？

ジョシュ　オフコース！　彼は憧れの存在だし、それにバックステージでのいろいろと面倒なことと闘ってくれている。ボクが新日本プロレスで闘いだしたときから、サポートしてくれているし、尊敬しているよ。

——しかしIGFでは舞台裏のズンドコぶりもあって、ファンからは「ジョシュ、それでいいのか？」という声もありますが、それについてはどう思います？

ジョシュ　ボク自身としては心配してないよ。いつも、イノキサンやマネージメントの人たちが、ボクのことを気にしてくれているからね。実際、2大会を終えて、ちゃんと運営できることは証明できたと思うし。IGFが失敗すると思っていた人もいるみたいだけど、そんなヤツらには「ざまあみろ！」って言いたいね（笑）。

——ついでにトロフィーも投げつけてください（笑）。でも、ファンのあいだでは

IGFが失敗すると思っていた人には「ざまあみろ」と言いたいね（笑）。

Josh Barnett

いまのところIGFの大会の評価はあまり高くないですけど。

ジョシュ　ホント!?　でも、IGFはまだまだ始まったばかりだから、これからさ。

――逆に、ジョシュさんは『ハッスル』にはあまりいい印象を持たれていないみたいですね。

ジョシュ　『ハッスル』には優秀なレスラーも揃っていると思うけど、契約してそこで闘いたいとは思わないんだ。スタイルが違うからね。前に上がっていた新日本についても、団体自体には魅力は感じていない。でも契約に関係なくIWGPに挑戦できるなら、IGF代表として、いつでもベルトを奪いに行くさ。

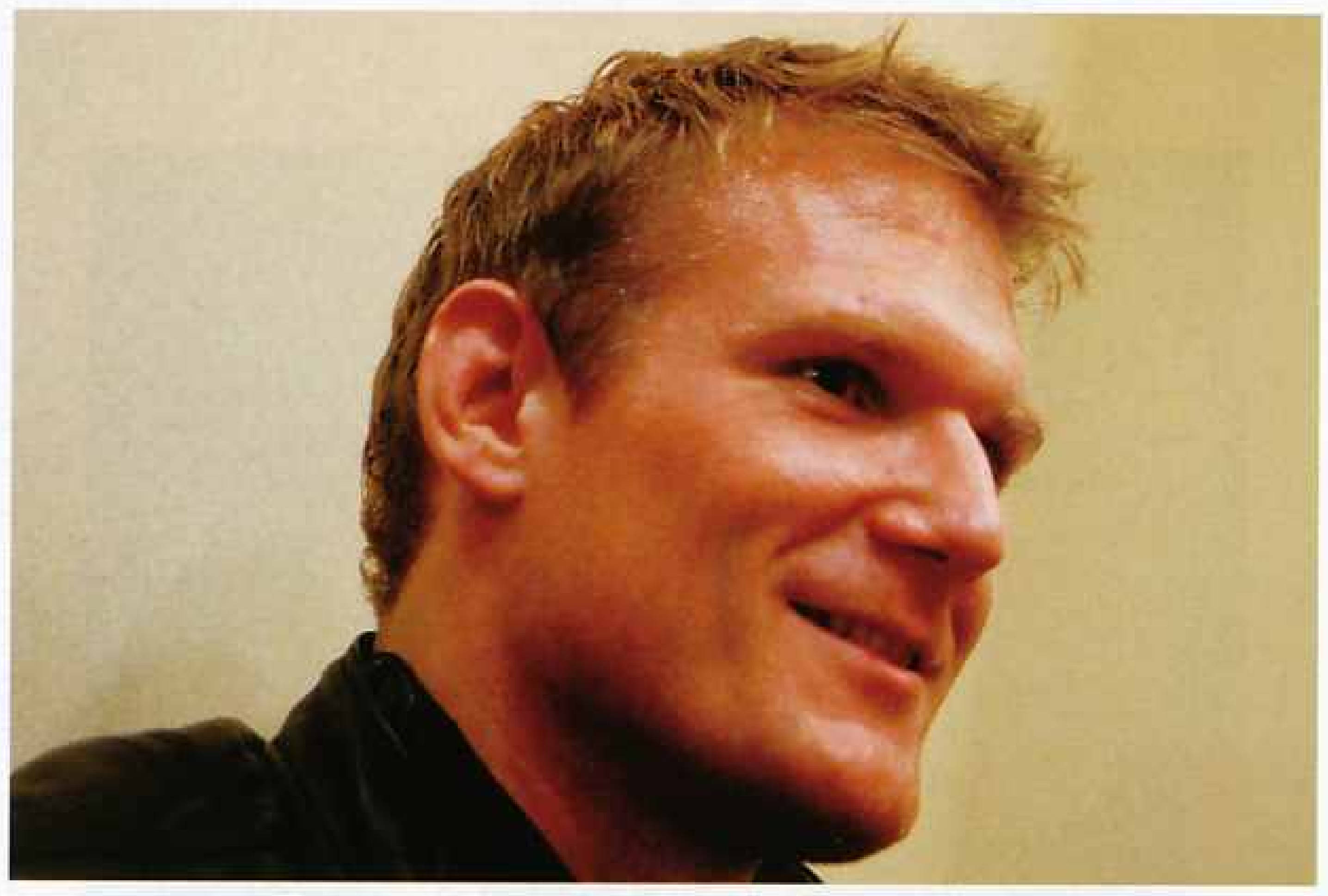
――ベルト・コレクターとしては、IWGPは魅力的なタイトルだ、と。そういえば、そのベルトを（剥奪されても勝手に）保持している、元WWEスーパースターのブロック・レスナーがUFCデビュー戦で負けましたね。

ジョシュ　この試合は凄く楽しみにしていたんだ。レスナーは大学生のとき、アマレスで本当に強かったからね。それに、同じプロレスラーとしてレスナーを応援していた。じつは、彼はボクのコーチ、エリック・パーソンの下にいるインストラクターとトレーニングをしていて、ボクにとってはチームメイトみたいなものなんだ。だからというわけじゃないけど、レスナーがTKOで勝つと予想していたよ。フランク・ミアのサブミッションに捕まったけど、彼はいつかMMAで成功するね。

――ところで、その大会ではジョシュさんのライバルだったノゲイラがUFC王座を獲りましたけど。

ジョシュ　ノゲイラが成功したことは嬉しいよ。でも対戦相手が（ティム・）シルビアじゃ勝つのはわかっていた。シルビアはあの身体のサイズで勝ってきたけど、ノゲイラやほかのトップファイターには勝てない。

――フィニッシュまでのノゲイラのテクニックは見事でしたけど、どう思いました？



JOSH BARNETT■1977年11月10日、米国ワシントン州出身。『北斗の拳』をはじめとする日本文化をこよなく愛する世界最強のオタク。第7代UFCヘビー級王者、『PRIDE無差別級GP』準優勝者、現パンクラス無差別級王者。3.5『戦極』旗揚げ戦での吉田秀彦戦が決定。総合の試合は06年大晦日以来、1年1ヵ月ぶりとなる。191cm、116.5kg。

ジョシュ　そうだね。彼の柔術の技術が凄いことは認めているよ。でも、シルビアにグラウンドのスキルはないからね。あと、このタイトルマッチについて言わせてもらえば、"本当のベルト"はボクが持っている（※2002年3月の『UFC36』でランディ・クートゥアーを破ってベルトを奪取。しかし試合後の薬物検査でステロイド陽性反応が出たため王座を剥奪された。ジョシュは薬物使用を否定）。いまのベルト自体には価値はないよ。ランディが離脱したことで、暫定王座を争っているんだから、事実上の"ナンバー3"決定戦だね。

――離脱したランディとUFCの争いについてはどう思います？

ジョシュ　これがきっかけになって、UFCの独占的な経営方針と選手契約のあり方が変わることを願うよ。ダナの発言はいつも選手を見下しているし、とても団体の代表の言動とは思えない。

――ランディは、ヒョードルとの対戦を熱望していますけど、実現すると思います？

ジョシュ　可能性はあるけど、難しいだろうな。ヒョードルとランディのファイトマネーは高すぎるからね。もし、実現したらヒョードルが1ラウンド中に関節技で勝つと思うけど。

――UFCではPRIDEでのかつてのライバル、ミルコ・クロコップが戦線離脱するという情報もありますね。（この取材後、『DREAM』への参戦が決定）

ジョシュ　（日本語で）シンジラレナイヨ！　UFCに上がってからのミルコは、ボクがこれまで闘ってきたミルコとはまったくの別人みたいだ。ボクの知っているミルコなら、（ガブリエル・）ゴンザガや（チーク・）コンゴを破壊しているはずだからね。でも、ノゲイラやファブリシオ（・ヴェウドゥム）が勝っているし、"オクタゴンの呪縛"のようなものは終わったのかも。ボクはPRIDEとUFCの両方で闘ってきたけど、いつもPRIDEファイターのほうが強いと感じていた。彼らは仲間みたいなものだから、活躍してくれると嬉しいね。

――PRIDE系のイベントとしては、大晦日に『やれんのか！』が開催されましたけどご覧になりました？

ジョシュ　いいイベントだったと思うよ。PRIDEにはファイターだけじゃなく、素晴らしいスタッフも関わっていた。裏方も含めてね。そういう人たちにとって再び活躍する場所ができたことは、ボクにとっても嬉しいことだよ。ただPRIDE売却のとき、トラブルに巻き込まれたし、キャリア的なことも含めて傷つけられた。

――去年の4月以降、総合の試合をすることができませんでしたよね。

ジョシュ　裁判にはしたくなかったけど、もっといい解決方法があったんじゃないかとも思う。でも、まだ未解決のこともあるし、それまでは向こうのリングに上がることはないと思うな。

――『戦極』には継続して参戦することになりそうですね。

ジョシュ　『戦極』にホジャー・グレイシーも上がってくるみたいだから闘ってみようかな。グレイシーのネームバリューは強いからね。それからパンクラスにも上がりたい。あと、まだ決まってないけど、夏にはアメリカでの大きなプランもあるんだ。

――いろいろと大変だった去年とはうって変わって、今年は充実した一年になりそうですね。

ジョシュ　ハイ！　新しいスタートダッシュだと思ってるからね。どこに向かうかはわからないけど、ファイターとして、どのリングでも闘うつもりさ。迷ワズイケヨ、行ケバワカルサ!!　ってことかな（笑）。

――ご活躍、期待しています！

【08年2月3日の帝国ホテルでの収録分と08年2月9日の国際電話での収録分を再構成】

『戦極』欠場の“真相”を激白!

フィル・バローニ

「ホントは三崎とやりたかったな」

3.15『戦極』で菊田早苗との対戦が決まっていながら、肩の負傷により欠場となってしまった我らがバローニ。しかし、その一方で3.15『Icon Sports』のハワイ大会出場も取りざたされていることから、「ダブルブッキングか!?」などとも言われている。そんな渦中のバローニを本誌は『戦極』欠場発表前の2月1日に、ラスベガスにあるエクストリーム・クートゥアーに行った際、偶然キャッチ。そこで、今回の欠場につながる話をしていたので、独占でお届けします!

聞き手／堀江ガンツ　通訳／石井史彦



―『戦極』での菊田戦まであと一カ月ですけど、体調はいかがですか?

バローニ （浮かない顔で）じつは……ケガをしてしまったんだよ。

―えぇ〜っ!? どこをケガしたんですか?

バローニ ウエート・トレーニングのしすぎで肩をやってしまったよ。急いで仕上げようとしたのがまずかった。肩はもともと悪いんだけど、前に手術した場所をまたやってしまった。残念だよ。

―じゃあ、菊田戦はキャンセルになってしまうんですか?

バローニ せっかくのオープニング・イベントだし、なんとか間に合わせたいとは思っているんだが……。ただ、ケガをした不充分な体調で出て、ひさしぶりとなる日本で、つまらない試合をしたくないという気持ちもある。いまの状況ではパンチは打てないから、テイクダウンして、固めてという戦法しかとれないだろう。そんな試合を日本のファンに見せたくないんだ。

―『戦極』に出たくないわけじゃないんですよね?

バローニ ケガさえなければ出たいよ。そのために、しっかりトレーニングをして身体だって絞ったんだからな。

―確かに、減量はしっかり進んでるみたいですね。

バローニ ただ、キクタはべつに闘いたい相手じゃないけどな。

―そうなんですか（笑）。

バローニ あいつは押さえ込んで固めるだけのつまらない試合をしようとするだろう。以前やったミノワ（マン）と同じだよ。だから本当はミサキ（三崎和雄）がよかったな。ミサキならおいしい相手だよ。ミサキと闘ったときはGPだったから、たった2ラウンドしかなくて判定決着になってしまった。そしてミサキはGPで優勝したんだからな。もしかしたら俺が優勝だったかもしれない。ケリをつけないとな。

―また都合のいい解釈ですね（笑）。GPといえば、『戦極』ではなく、旧PRIDEスタッフが新しく始めるイベント（DREAM）で、84キロのGPトーナメントをやるという噂がありますよ。

バローニ な、なんだって!? それは本当か! そのトーナメントにはぜひ出たいな。俺はGPチャンピオンになりたいんだ。そのGPだったら、腕が折れてたって参戦するよ。

―肩の故障で『戦極』を欠場しようとしてるのに、GPには腕が折れていても出ますか!（笑）。

バローニ それぐらいトーナメントは凄いものだ。タイトルコンテンダーが一堂に会して、たった一人しか生き残らないんだからな。それが日本のイベントのいいところだ。GPで優勝すれば、ほかのことは関係ない。延々とタイトルマッチの順番待ちをすることなく、そいつがチャンピオンなんだ。

―あの〜、『戦極』とは契約をしていないんですか?

バローニ 『戦極』とは口頭で合意している。ドキュメントベースでは、弁護士の確認をしている段階だ。できたら、ケガを治して5月から出たいけどな。

―いまは誰と練習しているんですか?

バローニ いまか? いまは肩をケガしているから、誰とも練習していない。ランニングマシーンが俺のパートナーだよ（笑）。

―ケガをする前は?

バローニ ここではフォレスト・グリフィンとよく練習している。ただ、ここではコンディショニングを中心にして、スパーリングはサンノゼのAKAで練習しようと思ってたんだ。AKAにはジョン・フィッチやジョシュ・トムソンら、素晴らしい練習相手がいるからね。

―練習環境としては充実しているわけですね。では、以前より強くなったと思いますか?

バローニ いや、弱くなってるね。

―そうなんですか（笑）。

バローニ ちょっとブランクが長かったからな。PRIDEがなくなって、試合もなくなって、練習もせずにリラックスしすぎてデブになってしまったんだ。食って、飲んで、映画を観てっていう毎日でね。あとはポーカーとかギャンブルばかりやっていたよ。だから、試合のテクニックは落ちたけど、ポーカーの腕はかなり上がったな（笑）。

―ダハハハ!

バローニ 『戦極』でファイトマネーを稼いで、ポーカーのワールドツアーに出たかったんだけどな。1万ドルでエントリーして、優勝すれば、なんと500万ドルの賞金がもらえるんだ。そしたら引退して、美女たちに囲まれる楽しい生活を送れるんだけどな。それが俺のゴールなんだ。

―素晴らしいゴールですね（笑）。じゃあ、ここでケガをしたのは、ポーカーで運を使いはたしちゃったからじゃないですか?

バローニ そうかもな。でも、ポーカーのほうが金になるから、試合よりも大事かもな。イージーだし、ストレスもない。酒も飲み放題だしな。

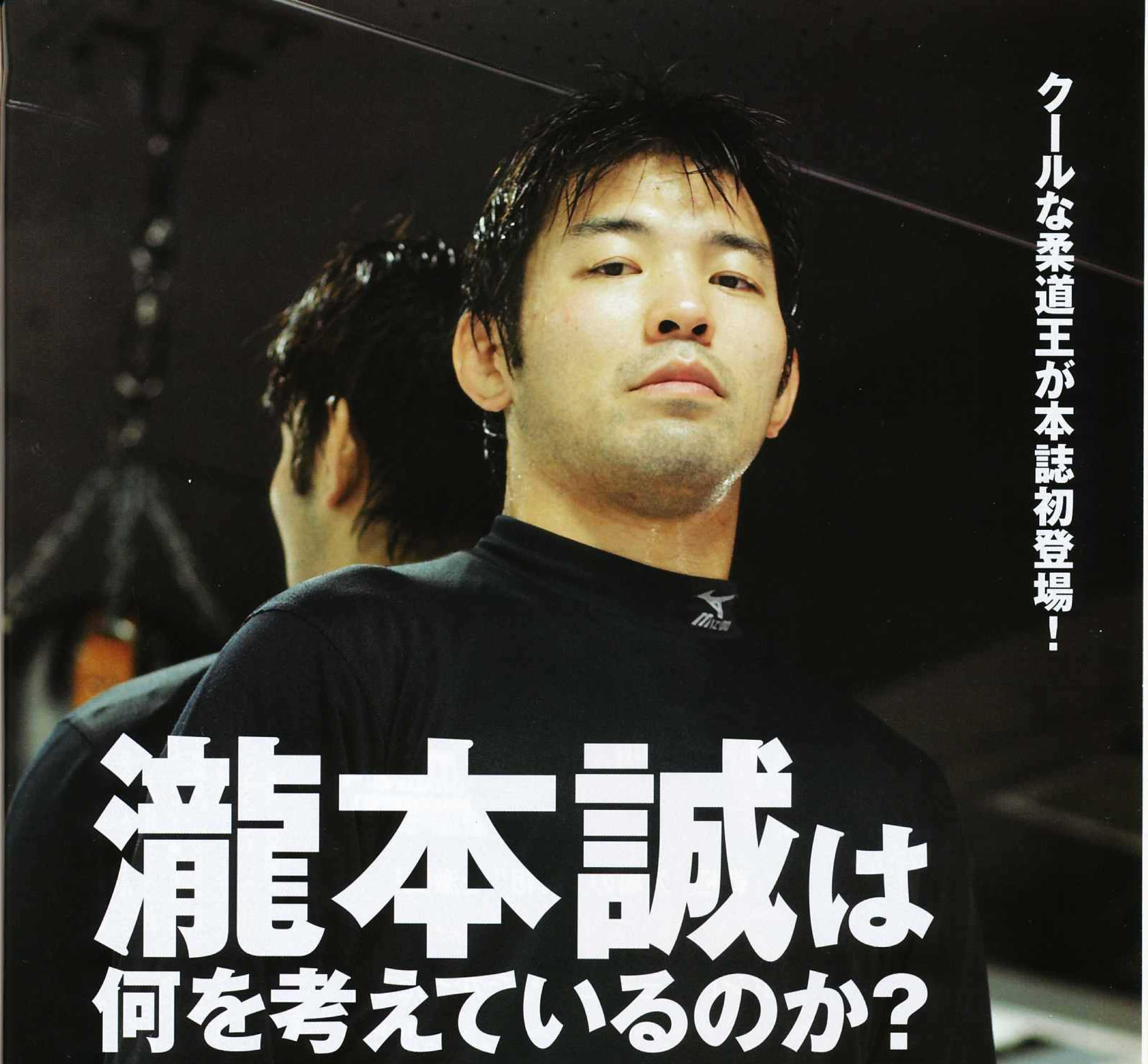
―バローニさん、さっさとリングに戻ったほうがいいですよ（笑）。

バローニ でも、こういうケガの状況だから、いまはハードには闘えないんだ。俺が評価されたのは、エキサイティングな試合をしてきたからだ。だから、つまらない試合はしたくない。100パーセントの状態で闘いたいんだ。

―では、まずはコンディションを整えるためにも、ポーカーのないサンノゼに行ったほうがいいですね。

バローニ ああ、そうだな。ラスベガスはそこら中に食べ放題の店があるし、ストリップ・クラブやディスコ、カジノもあるからな。金さえあれば天国だが、その金を稼ぐために、さっさと闘いに戻ることにするよ（笑）。

【08年2月1日／米国ネバダ州ラスベガス、エクストリーム・クートゥアーにて収録】



クールな柔道王が本誌初登場!

瀧本誠は何を考えているのか?

“未知なる”金メダリストが『kamipro』初登場! 04年総合デビュー以来、メダリストであるがゆえの厳しい風当たりをかいくぐり、07年、PRIDEラスト興行となった『PRIDE.34』、そして『やれんのか!』でようやくブレイクをはたした瀧本誠。その名勝負製造機と化した裏側にはいったい何があったのか。意外な一面とともに、瀧本という男に迫る!

聞き手／ジャン斉藤　撮影／梅木麗子　試合写真／平工幸雄、乾晋也

――瀧本さんは『kamipro』初登場ということで、いろいろとおうかがいしたいと思います。

瀧本　よろしくお願いします。

――瀧本さんといえば、07年のゼルグ・“弁慶”・ガレシック戦やムリーロ・ブスタマンチ戦はどちらも名勝負になって、3月の『戦極』での活躍も期待されてますけど、そういった声は届いていますか?

瀧本　まあ、こういう取材を受ける機会が多いし、同じこと聞かれることが多いんで、「ああ、そうなんだな」って感じですかね（淡々と）。

――ということは、ちょっとへんな質問になりますけど、デビュー当初はあまり取材がなかったということですよね。

瀧本　そうですね。でもまあ、取材自体あんまり好きじゃないんで。べつにいいんですけどね。

――なるほど。瀧本さんってけっこう怖いイメージがあるんですよね。

瀧本　そうですか?（淡々と）。

――煽り映像でかなり辛口な発言をされたりしてますし。

瀧本　……どう?（同席した広報に向かって）。

広報　ぜんぜん怖くないです（笑）。

瀧本　でもまあ、吉田（秀彦）さんの明るさとは正反対ですね（ニヤリ）。

――これはボクの偏見かもしれないですけど、この世界に入ってくる柔道家ってかなり個性的な方が多いというか。たとえば、小川（直也）さんや秋山（成勲）さんにしてもそうなんですけど。

個人的には格闘技をやめて、違うことでもやろうかなという感じだったし

瀧本 どうなんですかね？ まあ、柔道は個人競技なんで、どうしてもそういう印象はあるのかもしれないですけど。

――確かに我が強くないとやっていけないところはありますよね。それでいうと吉田道場って、個性的な選手が一つにまとまっている感じはありますけど。

瀧本 それも最近ですよ。ここ1年ぐらいかな。

――それは何か結束するきっかけがあったんですか？

瀧本 たぶん、石井（大輔）さんが新しくコーチとして練習に来るようになってからですね。

――パンクラス出身で、現在はトレーナー業をされている石井さん。

瀧本 前はブラジル人のコーチに教えてもらってたんですけど、石井さんが道場に来るようになってから、道場の雰囲気がガラリと変わりました。選手が立て続けに勝ち始めて、誰かの試合があるたびに「みんなでコイツを勝たせよう!!」という雰囲気になってたんですよ。そういういい雰囲気の中でたまたま自分の出番が来たんですけど。僕はあまり気持ちを表面に出さないほうなんですけどね、僕の中では「みんなやってるから頑張ろう!!」みたいな気持ちになりましたね。

――せっかく雰囲気が良くなって調子も上がってきたのに、大晦日まで闘う舞台がなかったのは悔しくないですか？

瀧本 まあ、早く試合できればいいかなって。でも、大きな会見（六本木でのPRIDE買収会見）があったじゃないですか。だから、これから新しい体制で進んでいくんだなとは思ってたんですけど、僕としてはやるのか、やらないかを早く決めてほしかったです。個人的には格闘技をやめて違うことでもやろうかなという感じだったし。

――へぇ～。違うことといいますと？

瀧本 どっちにしろ、総合格闘技って長くできる競技ではないと思ってるんで。まあ、このあとの将来を考えて何かビジネスでも始めようかなって。

――瀧本さんって、じつはそういう事業意欲が旺盛なんですか？

瀧本 凄くありますね。毎朝、経済新聞読んでますし。

――ははあ。では、どうなんでしょう、最近の経済の動きは。

瀧本 そうですねぇ。株の変動が凄くてヤバイですね（ニヤリ）。

――ヤバイですか！ 瀧本さん、日本は今後どうしたらいいんでしょう？

瀧本 まあ、ただ、4月ぐらいがちょっとまた情勢が変わるんじゃないですか。3月31日で暫定税率が変わりますから。

――ははあ。ちなみに、どんなビジネスをやりたいと考えてるんですか？

瀧本 それは言えないですね。

――いやいや、教えてくださいよ。

瀧本 いや、だっておもしろおかしく書くでしょ？

――まあ、おもしろおかしく書く雑誌なんですけど。

瀧本 一回『kamipro』読んだことありますよ。『ハッスル』とかが載ってるヤツですよね？（ニヤリ）。

――はい。『ハッスル』はどうでしょう？

瀧本 『ハッスル』ねえ……（無表情で）。

――微妙な反応ですね（笑）。

瀧本 っていうか、ボク、○○○がちょっと……。

――○○○！ ちょ、ちょっと何をおっしゃるんですか（笑）。

瀧本 だって『ハッスル』って○○○でしょ？

――うーん、ずいぶんと難しいことをおっしゃいますねぇ。エンターテインメント色の強いプロレスでも瀧本さんは「？」な感じですか？

瀧本 まあ、いいんじゃないですか。僕がやるわけじゃないんで（含み笑いで）。

――いやあ、機会があればぜひ本格的に観てほしいですけどね。おもしろいですよ、『ハッスル』。

瀧本 『どハッスル!!』でしょ？（ニヤリ）。

――ダハハハハハ！ 微妙な反応のわりにはけっこうご存知ですね（笑）。

瀧本 いやいや、そんなことないです。

――そうですか（笑）。話を戻しますが、ほかのビジネスを考えたくなるくらい「この業界は大丈夫なのかな？」と思ったわけですよね。

瀧本 そうですね。でも、それは誰の責任でもないと思いますし、イベント会社があっての選手なんで、闘う場がないと選手も活きてこないですし。

――それって柔道時代にはない不安ではありますよね。

瀧本 ああ、そうですね。柔道はJOC（日本オリンピック委員会）があって柔道連盟があってという感じでしっかりしたものがあったんで、そういう心配とかはなかったですね。

――そういう意味では、瀧本さんはオリンピックの金メダリストですし、柔道に留まっていれば安泰じゃ……。

瀧本 （さえぎって）でも、僕自身はそれでメシ食っていこうと思ってなかったんで。けっこう金メダル、金メダル言われてそれでメシ食ってるヤツ見てるんで、カッコ悪いなあって思ってたんですよ。なんで、自分はあえてそういうことをしたくなかったってことですね。

――ただ、デビュー当時は思い描いていたイメージとだいぶ違ったんじゃないかなって。デビュー戦後には「なめていました」発言も飛び出しましたけど、あそこまで素直にマイクする人も珍しいなと思ったんです。本当に軽い気持ちでなんとかなるだろうと思ってたんですか？

瀧本 はい（キッパリ）。まあ、試合の話があったのもじつは10月ぐらいだったんですよ。吉田さんに「やらない？」って話



［07.12.31 やれんのか! 大晦日!2007］
埼玉・さいたまスーパーアリーナ

○瀧本誠 vs ムリーロ・ブスタマンチ×
（2R 判定2-1）

評価を一気に上げた『PRIDE.34』弁慶戦に続き、『やれんのか！』ブスタマンチ戦も瀧本史上ベストバウト的な名勝負に！ 柔術の匠・ブスタマンチに右ストレートから左フックを食らわせダウンさせると、リングサイドの吉田は「終われ！終われ！」と大絶叫。試合は判定にもつれ込んだが、瀧本の猛撃が印象的な内容に。

をされて出たんですけど、毎回吉田さんの試合を観てると僕もだんだん自信が出てきて、「まあ、やるか」って感じで。（マットに）転がしちゃえば大丈夫だろうって。でも、実際はぜんぜんそんなことないんですよね。そこからさすがに取り組み方は変わりましたね。

——05年『PRIDE男祭り』菊田早苗戦も、大きな転機になった試合なのかなと思うんですけど。瀧本さんの中であの菊田戦はどういう位置づけになりますか？

瀧本　あんまり思い出したくないですね。

——思い出したくない！　それは内容のことですか？

瀧本　まあ、内容もそうですけど、僕自身ちょっといろいろありまして、当時は格闘技に集中していないような感じだったんで。

——それは日本経済の動きに翻弄されていたりとか？

瀧本　そんなわけないでしょ。まあ、いろいろとあったんですよ。

——あの菊田戦までは道衣を着られてましたよね。やっぱりあの一戦の結果を受けて、道衣を脱ごうと決心したんですか？

瀧本　道衣に関しては結局、周りの人と話し合って決めたんですけど。「ここまでダメだったから、一回ぐらいちょっと脱いで闘ってみるか」という結論が出たんで。僕はどっちでもよかったんですけどね。でも、脱いでもちゃんと試合ができるのかどうかは不安でしたけど、結果的にはよかったなという感じです。

——なるほど。GRABAKAつながりでいうと、郷野（聡寛）選手にいろいろと挑発されたことがありましたよね。あのときの心境は正直どうでした？

瀧本　まあ、べつにどうでもいいなあって感じですかね。

——ああいう挑発って、ある意味興行を盛り上げるうえでの発言としても受け取れますけど。

瀧本　ああ。僕は嫌いなんですよ。たとえば、よくリング上で「次はアイツと闘わせろ」とか指名するヤツいるじゃないですか。そういうの大っ嫌い。自分も言いたくないし、言われたくもないし。だって、指名されてもどうしたらいいの？　いますぐリングに上がるわけ？　って感じじゃないですか。

——でも、プロとして興行を背負う以上、いろんなことを転がしていくことが求められたりするじゃないですか。たとえば、記者会見にしても、少しでも新聞の見出しになるような発言をしたりとか。

瀧本　あんまり好きじゃないです。そこは当たらず触らずで。

——パフォーマンスに関心ないってことですね。

瀧本　そうですね。

——はあ。まったく惑わされないですね、瀧本さん。

瀧本　あんまり自分以外の格闘技情報には興味がないんですよね。選手の名前もよくわからないし。なんか情報があるときは、道場で聞くぐらいですね。

——格闘技以外で、いわゆる趣味って？

瀧本　趣味はバイクですね。

——趣味はバイク。気が向いたときはブラーっと飛ばす感じですか？

瀧本　いや、練習の行き帰りしか乗りません。

菊田戦？　あんまり思い出したくないですね
内容もそうですけど、僕自身ちょっといろいろ……

瀧本誠は
何を考えているのか？

——それ、趣味なんですかね（笑）。

瀧本　一応ハーレーに乗ってるんですよ。だから、格闘技雑誌は見ないですけど、バイク雑誌はよく見ます。

——ボクはまったくそっち方面には疎いんですけど、どうしてまたバイクなんでしょう？

瀧本　僕も最初はまったく興味もなかったんですけど、一昨年の6月にケガして長期離脱したことがあったんですよ。

——『武士道・其の十一』ゲガール・ムサシ戦のときですね。

瀧本　だから、せっかく時間があるから、資格でも取ろうかなって。べつの勉強でもしようかなと思ったんですけど、ちょっとバイクに興味があったから、そこから中免（中型免許）取るのに教習所に通って、一応取れたんで乗ろうかなって。

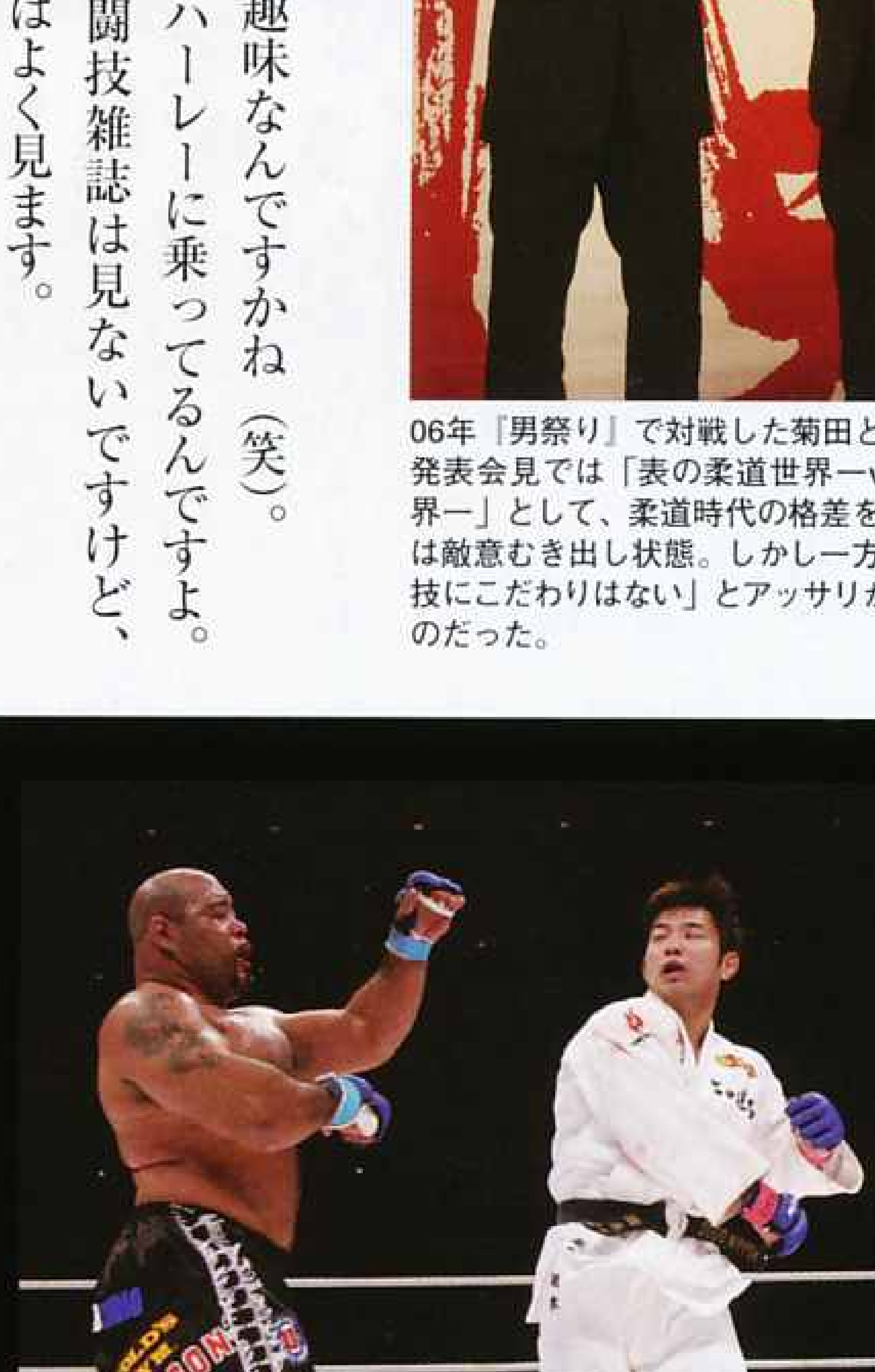
——そういえば秋山選手はかなり車が好きみたいですよね。

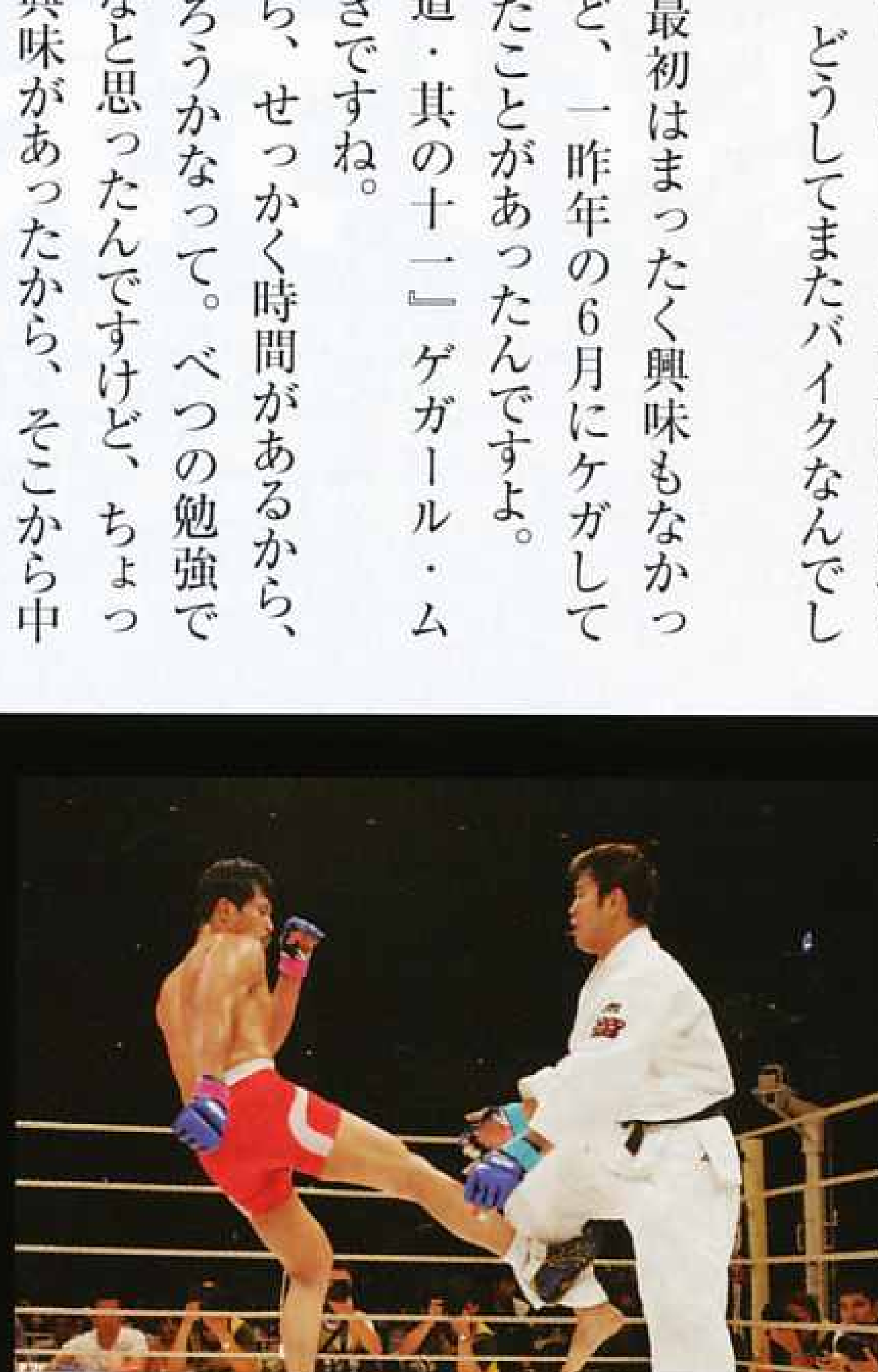
瀧本　あ、そうなんですか？　アイツ、何に乗ってるんですか？

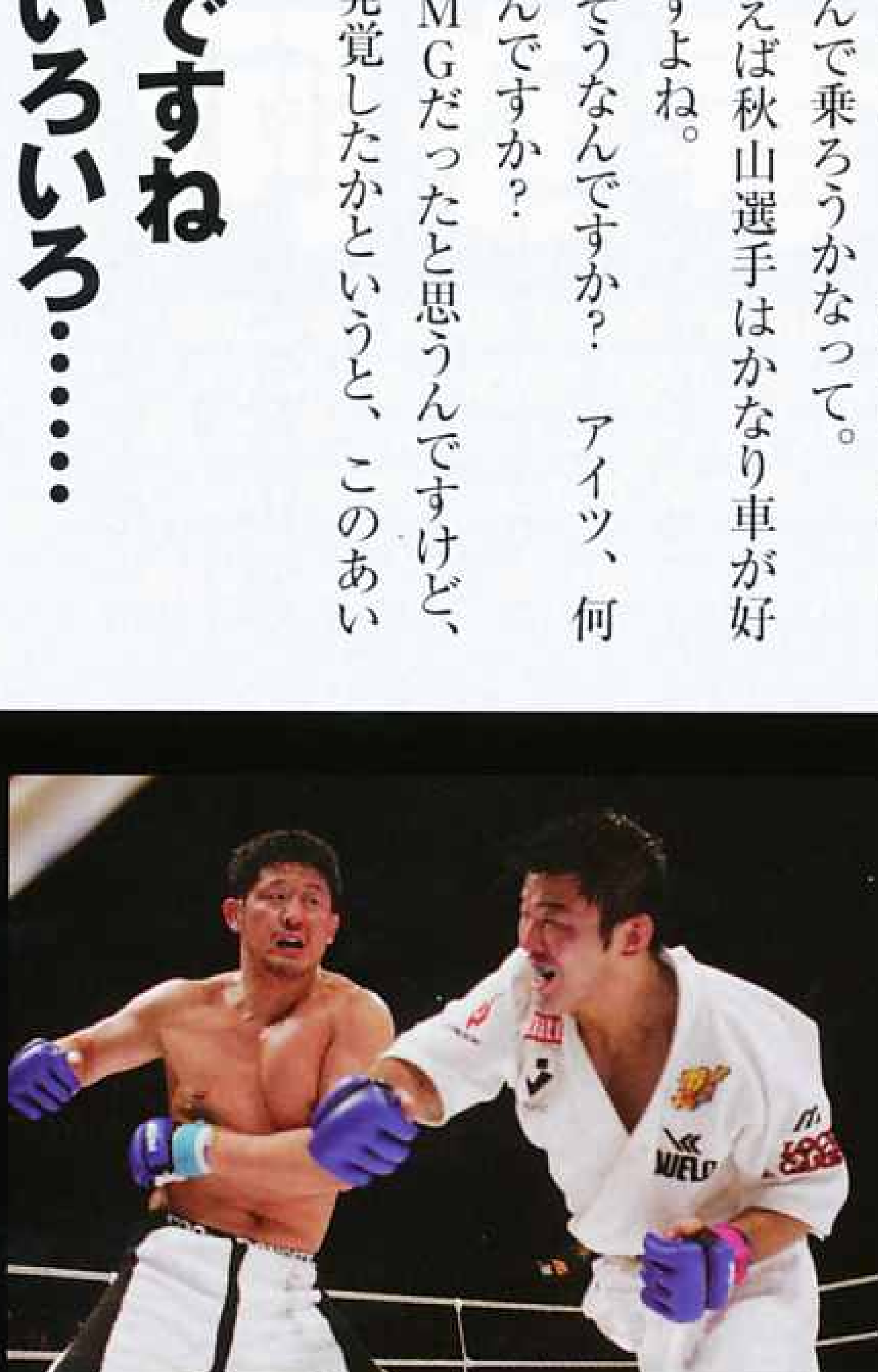
——確かAMGだったと思うんですけど、なぜそれが発覚したかというと、このあい


06年『男祭り』で対戦した菊田と瀧本。カード発表会見では「表の柔道世界一vs裏の寝技世界一」として、柔道時代の格差を持ち出し菊田は敵意むき出し状態。しかし一方の瀧本は「寝技にこだわりはない」とアッサリかわしてみせたのだった。

瀧本誠MMA全試合レビュー


04.12.31『PRIDE男祭り2004』
○ vs 戦闘竜（3R 判定3-0）
「総合をなめてました！」と伝説的なマイクが飛び出したデビュー戦。「相撲は強いんだよお！」でおなじみの戦闘竜に体重差30キロ以上ながら「転がせば勝てるだろう」と軽く考えていたというから、凄い度胸である！


05.06.26『PRIDE GP 2005 2nd ROUND』
× vs 田村潔司（3R 判定3-0）
2戦目は対吉田戦で敗れ、柔道へのリベンジに燃える田村との対戦。徹底して寝技を避ける田村に瀧本は攻め手を欠いてしまい、結局判定負けに。試合後、勝利をつかんだ田村は自ら「内容はイマイチだったんですけど……」と一言。


05.10.23『PRIDE.30』
○ vs ユン・ドンシク（3R 判定3-0）
日韓柔道対決として闘った3戦目。終始膠着ぎみの試合展開で再三ブレークの指示が出るも、なんとか瀧本が判定勝ち。しかし、試合後には「まだまだ弱いと思ってます！」と、これまた“素直すぎる”マイクを披露したのだった。



だカーセレブ特集という……。

瀧本　（さえぎって）ああ、出てる、出てる。本屋のバイクコーナーってクルマ雑誌と近いじゃないですか。だから、「あれ？」って思ったんですよね。ギンギラギンのクルマの横に立ってるでしょ？　見たことある!!

――そうなんですよ。瀧本さんって秋山選手と仲はいいんですか？

瀧本　まあ、（柔道の）後輩なんで。『やれんのか！』の三崎（和雄）戦の前にも「先輩、ヤバイです。負けるかもしれないです」みたいな話をしてたんですよ。

――それ、どんな顔して言ってました？

瀧本　たぶん、半笑いだったと思います（ニヤリ）。

秋山に関しては、僕からするとまあちょっとかわいそうかなあとは思います

――さすが魔王だなあ。秋山選手はここ一年いろんな意味で話題になってますけど、先輩の立場からどう見てました？

瀧本　いやー、格闘技自体は本当に強いと思いますよ。でもまあ、ちょっとしたことは柔道時代にもあったし、どこかしら弱いところがあるんでしょうね。普通にやれば勝てるのにって僕は思うんですけど。でも、周りの人は批判的かもしれないですけど、僕からすると、まあちょっとかわいそうかなあとは思います。

――そういったお話はご本人としたことってあります？

瀧本　いやいやいやいや、まったくしないですよ。

――秋山選手とは、『やれんのか！』で瀧本さんと闘うかもしれないみたいなお話もありましたよね。でも、いまのお話を聞く限り、試合は難しいですかね？

瀧本　そんなことはないですよ。試合になれば関係ないです。でも、秋山は吉田さんとやりたかったんじゃないですか？　僕との試合はないと思ってたんで、あんまり気にしてなかったんですけど。

――瀧本さんは3月に『戦極』出場が控えていた中で、『やれんのか！』に参戦されましたけど、どういう気持ちで臨まれました？

瀧本　正直『戦極』のことはあんまり考えてなかったですね。『やれんのか！』も1ヵ月前に突然決まったんで、勢いでやっちゃおうみたいな感じでした。

――では、試合を控えたいま、『戦極』という舞台に対してはどう思いますか？　まったく新しいイベントですよね。

瀧本　どうですかねえ……。まだ始まってないイベントなんで正直なんとも言えないですけど、成功していいイベントになっていけばいいのかなって。

――そこもあんまり関心はない（笑）。

瀧本　そんなことないですよ（ニヤリ）。まあ、一生懸命頑張ります。

――いやあ、瀧本さんは不思議な方ですね～。次のインタビューでは、『どハッスル!!』について語るのはどうでしょう？

瀧本　嫌ですよ。だってタマゴとか出てくるんでしょ？「なんだよ、タマゴって」って思いましたもん。

――瀧本さん、じつは好きなんじゃないですか？

瀧本　いやー、どうなんですかねえ。

【08年1月30日／都内・吉田道場にて収録】

たきもと・まこと■1974年12月8日、茨城県出身。シドニー五輪柔道81kg級金メダリスト。04年から総合格闘家に転向し、同年12月31日『PRIDE男祭り』戦闘竜戦でデビュー。その後、試合内容、結果ともに苦しい状況が続くも、07年弁慶戦、ブスタマンチ戦では脱皮したかのように試合が爆発。3月5日『戦極』にも出場予定。174cm、81.9kg。



07.04.08『PRIDE.34』
○ vs ゼルグ・"弁慶"・ガレシック（1R 5分40秒 アームロック）
PRIDEラスト興行にして瀧本が総合ブレイクをはたした一戦。道衣なしで闘う瀧本は、肩固め、腕十字を次々と仕掛け、弁慶の打撃を凌ぎながらも最後はアームロックで一本！これまでの試合内容とは見違える闘いぶりを見せた。



06.06.04『PRIDE武士道・其の十一』
× vs ゲガール・ムサシ（1R 5分36秒 ドクターストップ）
「デビュー戦で大晦日出場？　神経を逆なでしやがって！」となぜか郷野に噛みつかれながら出場したウェルター級GP。しかし瀧本はムサシの猛打により目を負傷。ドクターストップという結末で郷野と対戦することなくGPから姿を消したのだった。



05.12.31『PRIDE男祭り2005』
× vs 菊田早苗（3R 判定3-0）
図らずも「寝技世界一決定戦」という"因縁の対決"となった菊田戦。観客には難解すぎる寝技の攻防となり「ハイレベルな技術（菊田談）」が炸裂した。しかし、この「思い出したくない」一戦を転機に瀧本の試合内容が徐々に変わっていく。



さまよえる炎の玉ボーイ完全追跡!
どーする! どーなる!?
“運命”の旗揚げ戦!
3.5『戦極』徹底レポート
そのほか
UFC、ハッスル
“休止中”のあの団体まで
徹底特集!
またまた出します!
MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE
kamipro Special
2008 LATE SPRING
3月13日(木)発売予定
予価=780円(本体743円+税)
3月28日(金)発売予定のNo.121で3.15DREAMも網羅!
enterbrain 株式会社エンターブレイン 〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 TEL.0570-060-555(代表)[通信販売のお問い合わせ先]http://www.enterbrain.co.jp/



超！イケてるイベントは 戦極 vs DREAM どっちだ！

座談会

08年MMA界が超激しく動き出す！ 2月13日DREAM開催発表記者会見を受けて、3月は『戦極』vsDREAMの大興行戦争が勃発することにどちらも旗揚げ戦ということで、いまだ全容が見えない状況だが、はたしてどちらに追い風が吹くのか!? 今回の座談会も最新情報を駆使して語りまくる!!

構成／松下ミワ

ジャン　タコ兄さん、たいへんですよ！　また世間を騒がすとんでもない争いが始まったんです。

タコ　お！　なんや、なんや。もしかして、格闘技界に2003年の〝仁義なき闘い〟以来のケンカでも始まったんか。

ジャン　いや、じつは本誌の座談会にたびたび登場するH氏が、『Gリング』誌をパラパラ読んで、的外れかつ事実誤認の批評をしたことで、『Gリング』統括プロデューサーの金沢〝GK〟克彦さんを本当に怒らせてしまったんですよね。ホントにどうしようもないですよ！

タコ　へぇ、そんなことがあったんや……って、そのH氏ってワシやがな！

ガンツ　ま、誰も興味ないでしょうから、その話は置いときましょう（アッサリ）。

タコ　置くんかい！

ジャン　そんなことより、去年、総合格闘技のビッグイベントが日本でほとんど開催されなかったのがウソのような、そんなたいへんな展開になってるんです。

タコ　だから、その争いってなんなのよ。

ジャン　ズバリ、『戦極』とドリームスとの争いなんですよね

ガンツ　ドリームスではなく、DREAM（ドリーム）ですけどね。

タコ　編集長、うろ覚えやないですか。

ジャン　え〜っと、パラパラ読みの事実誤認、謝罪いたします！

X　記者会見を見るかぎり船木誠勝もうろ覚えだったじゃん。看板見ながら「ドリームステージじゃないですよね？」って言ってたし（笑）。

ガンツ　なんだか『HERO'S』設立会見のとき、檀上で上井（文彦）さんと前田日明がコソコソと『「ヒーロー」やったよなあ』「いや、『ヒーローズ』ですよ！」って、プロデューサーとスーパーバイザーがイベント名を覚えてなかったことを思い出す（笑）。

タコ　でも、いま初めてDREAMという名前を知ったんやけど……、ズバリ、なんでこの名前なん？　名づけ親は誰なんや？

ジャン　誰なんでしょ。まあ、いずれ慣れますよ。PRIDEだって『ハッスル』だって、『MOVE　ON!　Kings!』だってそうでしたし。

ガンツ　最後のは慣れる前に終わってるよ！

タコ　PRIDEも『PRIDE・1』はカッコいいけど、『PRIDE・2』ってなったときに、「ええ!?」って思ったもんなあ。



一時は『戦極』との協力体制も予想された『やれんのか！』チームだが、最終的にはFEGとタッグを組むことに。主催者側は「PRIDEや『HERO'S』とは違う新たなイベントを！」とコメントしているが、どんな世界観が生まれるのか注目が集まる。

「増えていくの!?」って。

X　いや、K—1だって最初はK—2、K—3、K—4って増えていく構想が本当にあったからね。

タコ　ええ!?　そうなんですか！

ガンツ　いやあ、ミスターXさんはそんな昔からこの業界と関わってる方なんですねえ。

X　……（急に黙って）。

タコ　え〜、Xさんの正体はキャリアが長い人のようです（笑）。んで、今日はファンを招いて、どんな発表があったんですか？

吉田、藤田、五味、三崎……。旧PRIDEのビッグネームは『戦極』が一本釣りしてますから（ガンツ）

ジャン　本当に真っ白なタコ兄さんのような方に説明すると、新イベントのDREAMを『やれんのか！』スタッフがすべてプロデュースしますよ、ということですよね。主催はFEGのままだけど、『HERO'S』に代わる総合格闘技イベントのソフトの部分を丸々『やれんのか！』スタッフが進行するという。

ガンツ　だから、ここでは『戦極』とDREAMがどういう成り立ちになってるのかを語ったほうがいいでしょうね。

タコ　それを教えてよ。だって『kamipro』でしか情報を得ないボクとしては、『戦極』の煽りVを佐藤大輔氏が作ると噂されてたりして、『戦極』と『やれんのか！』スタッフとの連立もあるのかなと思ってたんやからね。その中で、今度はDREAMというイベントが出てきたじゃないですか。だから、『やれんのか！』スタッフのそもそものスタンスはどうなってんのかなって。

X　つまり、『やれんのか！』実行委員会の皆さんは〝業者さん〟なんですよ。とっても優秀なイベントプロデュース会社になったんです。

ガンツ　雑誌でいうところの版元ではなく、編プロみたいな感じですよね。

ジャン　だから、『戦極』にしてもFEGにしても、その編プロにどこまで権限を与えるかという交渉ですよね。たぶん谷川さんは「『HERO'S』をなくしちゃうから、うまとめてやってよ〜」という感じだったことは容易に想像できるんですけど（笑）。

ガンツ　DREAMはマッチメークから何から、すべて『やれんのか！』実行委員会にお願いしたのに対し、『戦極』は「対戦カードやプロデュースはすべて自分たちでやりますから、イベント演出だけお願いします」というオファーだったみたいですね。

X　だから、結果的にはFEGから完全に下駄を預けられた『やれんのか！』グループが、DREAMをプロデュースするというスタンスになった。

タコ　はっはー。これは完全に谷川イズムやなあ。オレも昔、谷川さんと仕事してたとき「タコちゃん、あとはやっといてねえ〜」ってよう言われたもんなあ。でも、ファンとしては『戦極』より100パーセント『やれんのか！』スタッフが関わるDREAMのほうが注目度、期待度が高いんちゃう？

ジャン　いや、現時点ではまだそうともいえないようですけど。

タコ　えぇっ！　違うの？

ガンツ　旧PRIDEのビッグネームは、『戦極』が一本釣りしてますからね。団体エースの吉田秀彦以外にも、藤田和之、五味隆典、そして三崎和雄がいるわけですから。

タコ　でも、将来的にはDREAMにも出るんちゃうん？　だって三崎は『やれんのか！』に出とったし、吉田も会場に来とったやん。

ガンツ　それは今後の流れを見ないとなん

座談会出席者

ジャン斉藤
本誌編集長。雀鬼・桜井章一の内弟子を経て『kamipro』編集部へ。永久電機に代表される〝アントン事業〟の真摯な調査・検証をライフワークとする32歳。

堀江ガンツ
本誌編集部。子どもの頃から変態的プロレスファン＆UWF信者として鳴らし、『kamipro』入社後もUWF研究家を自称。カリスマ的変態である34歳。

原タコヤキ君
元『紙のプロレス』編集者で現在は音楽プロデューサー。格闘技業界外の人物であるため、毎回マット界の情報収集のために座談会に出席。

ミスターX
どこから仕入れてくるのか、格闘技業界のあらゆる情報を完全網羅している業界屈指の情報通。

戦極 vs DREAM

とも言えないですね。

ジャン だから、おそらく『やれんのか！』の構想の一つには、『戦極』も手伝いつつFEGと組みたいという考えがあったと思うんですよ。というのは、いまのMMAシーンはギャラの高騰問題含めて、非常にビジネス的に不安定な状態の中でやっている。それだったら業者として中身だけを請け負ったほうがいいという発想ですよね。

X じつは、それって一番最初の『Dynamite!』をやったときのPRIDEと同じ発想なんですよ。最初から裏方に回って「僕たちはK−1さんのお手伝いをいたします」というスタンスでK−1のノウハウを全部吸収してたという（笑）。

ガンツ その中でお金も貯めて、ファンも増やして、K−1側最大のスターだったミルコを引き連れて別れるんだから凄いですよね（笑）。

タコ ……ということは、今回だってそうなる可能性も？

X フフフフ。初心に返るかも。

タコ うわー！　歴史は繰り返すんや。怖いなあ。

ガンツ まあ、現時点でそれはありえないですけどね。『やれんのか！』スタッフがFEGに取り込まれたといえば取り込まれてるけど、『HERO'S』を乗っ取ったといえば、乗っ取ってるわけだからね。だってPRIDEは、大晦日に『やれんのか！』に名前を変えて大々的に〝散開〟したけど、『HERO'S』はなんのアナウンスもなく終了してるわけだからね（笑）。

ジャン 何を言ってるんですか。きっと前田日明SVの『ジ・アウトサイダー』が〝けじめのイベント〟になるんですよ。

ガンツ どんな〝散開〟だよ、それ（笑）。

タコ ちょ、ちょっと待ってよ！　『ジ・アウトサイダー』って何？

ジャン 前田SVが開催する、不良少年を集めたケンカファイトの大会です。

タコ ええーっ!!　なんやそれ（笑）。

ガンツ そんな話はいいとして、『HERO'S』ですよ！　ちなみに『HERO'S』のラスト興行って、みんな忘れてると思うけど、昨年10月の韓国大会ですからね（笑）。

タコ 日本ですらないんや。そういう意味でも谷川イズム爆発やん！

X まあ、『HERO'S』は赤字だったし、金がかかるからねえ。FEGからしたら、『やれんのか！』スタッフに無償で譲渡したようなもんでしょう。

ジャン たとえ赤字でも『HERO'S』をやらないと総合格闘技の文化自体がなくなっちゃうんで、谷川さんは多少無理をしてでも続けてたところはあったんですよ。テレビ局の放送枠含めて、一回なくしちゃったら返ってこないものですから。

タコ でも、さっきの話に戻るけど、DREAM開催を手放しに喜べない人がいるっていうのは、単純に『戦極』にスター選手を取られたってことだけなん？

ジャン いや、もう一つあるとしたら、非常に引っかかるのがやっぱり三崎vs秋山問題ですよね。それによって今回の連立がファンにあまり支持されてない雰囲気になってるのも事実というか。

タコ え、なんで、なんで？

X あれは谷川さんがホントに迂闊！　せっかく大晦日の件でポイントが高くなったのに、ふりだしに戻っちゃったもん。いや、ふりだし以下！

ガンツ 要は、三崎vs秋山戦でひさびさに格闘技が盛り上がって、ファンが最高に気分がよくなっていたにもかかわらず、「やっぱり決着ついてません、再戦です」みたいに言っちゃう部分とかですよね。「終わった。はい、次の商売」というのが見えすぎなんですよ。おまけに、しばらくしたらわけがわからないまま判定が覆るし。しかも、ルールに則ってというよりも、「三崎が『戦極』に行っちゃったからノーコンテストにしました」というように見えちゃうんですよ。

タコ へえ～、みんな難しいこと考えるなあ。谷川さんのことなんか手放しにおもしろがってたらええのに。

X いや、ぜんぜん深読みしてないよ。将棋でいうと一手先ぐらいだから（笑）。

ジャン 2試合契約うんぬんの話も、真相はともかく本当にロマンがない話ですからね。

タコ でも、ええやん。再戦させたいなら、再戦させればええだけの話やないの？

X だから、再戦してもいいんだよ。ただ、そのやり方があまりにも頭ごなし。格闘技のイヤな部分を長である谷川さんが自ら口に出して言っちゃったんだからね。



ノーコンテスト問題で大きな波紋を呼んだ三崎vs秋山戦。『やれんのか！』サイドによると、この問題で起こった誤解は解消したということだが、今後、三崎らがDREAMに参戦することもあるのだろうか!?

ガンツ だからPRIDEファンとしては、「『やれんのか！』チームはこんなヤツと組むべきじゃない！」ってことですよね。だって、PRIDEファンはそういう名勝負の記憶を財産にしてるのに、軽視してるように見えちゃうわけだから。

『HERO'S』は赤字だったし、FEGからしたら無償で譲渡したようなもんでしょう（ミスターX）

試合自体をあまりに軽視してるように見えちゃうわけだから。

X ベストな道としては、「微妙な判定ではあるけど、もう結果は出てるから今回は三崎の勝利。でも、真の決着をつけましょうよ」という選択ですよ。そしたら、もっといい流れになってた。お客さんに見せちゃいけない部分ってどうしてもあるんだけど、一連の出来事はお客さんが夢から覚めるような部分まで見せちゃってるから。

タコ ということは、結局谷川さんはベビーフェイスにはなられへんかったんやなあ。

ガンツ ベビーフェイスどころかヒール以下ですよね。PRIDEのファンは、試合自体にまで主催者の思惑が感じられるように見えるFEG系の試合がイヤだからPRIDEを支持してたのに、三崎vs秋山戦の件を見たら「おいおい、そういう世界になっちゃうのかよ!?」ってなりますよね。

ジャン 新イベントでは〝黒魔術〟はもう完全に封印しないとダメですね。いまの谷川さんをおもしろがるには、かなりハードルが高くなってますよねぇ。

タコ なんかマット界も世知辛いなあ。

ガンツ そもそも谷川さん自身、K−1で手一杯でしょうから、『やれんのか！』スタッフにMMAを引き受けてもらって、肩の荷が降りた部分もあるでしょうからね。

ジャン でも、この『やれんのか！』チームの引っ張り合いで、やっぱりDREAMと『戦極』って対立構造になるんですかね？

X おもいっきりバチバチですよ！　それに参戦選手的には『戦極』はお客さんの心の機微を捕らえる術には長けてると思うよ。参戦選手を見たときに凄く豪華に見える。

ジャン それこそ『戦極』は資金力に関しては凄そうですよ。UFC的価値観とは少しずれながらも、日本では大きな価値を持つ大物たちをあんなに揃えるんですから。

戦極 VS DREAM

タコ　じゃあ、単純に『戦極』がそういう選手を次々と一本釣りしていったんや。

ガンツ　まあ、言っちゃえば格闘技版SWSですよね。純粋に総合格闘技を応援したいお金持ちのスポンサーがいて、金に糸目はつけずに豪華メンバーを集結させるという。

タコ　おお〜っ、それって田中八郎イズム爆発やん。

ガンツ　だから吉田秀彦がSWSにおける天龍源一郎なんですよ。そう考えると、『戦極』はビックリするようなカードをどんどん提供しそうな気がするんですよね。SWSで天龍&ホーガンvsロード・ウォリアーズ戦なんていう、金がかかりすぎるだろってカードが組めちゃったように。それに対して、DREAMのライト級GPメンバーなんて、完全に全日本プロレスの超世代軍ですよ。まだ名前はそんなにないけど、とにかく熱い試合をするというね。

タコ　ホンマやなあ！　ここ（ライト級GP参戦選手を見て）に書いてある一番下の人なんかオレ、読み方もわからへんもん。

X　「ぼく・こうてつ」です（笑）。

タコ　あとDREAMにはミルコが出るんやろ？　あれはどうなん。UFCの契約ってまだ残ってるはずやし、UFCって契約問題厳しいんちゃうの？

ガンツ　えー、説明しますと、要は一時休止なんですよね。ミルコってMMAの歴史上、最大クラスの超大型契約を結んで鳴り物入りでUFCに行ったじゃないですか。

X　超破格のファイトマネーですよ。

ガンツ　それでもヨーロッパ戦略のエースとしてガンガン金を稼いでくれると思ってやってたのに、まったくアテが外れてしまった、と。セミファイナル以下の前座で使うには、とてもじゃないけど採算が合わない選手なんですよね。

タコ　そうやろなあ。メインイベンターとして連れて来たのにもったいないもん。

ガンツ　でも、本来の力を発揮できさえすれば、ヘビー級のエースで使える実力とキャラクターがある。ただし、いまはスランプに陥っていて金食い虫になっている、と。そういう場合、野球なんかだとマイナー（2軍）で調整させるじゃないですか。今回のミルコもダナにとったらマイナー調整させるつもりなんでしょうね。だから、UFCに戻るオプションつきで自由契約にして、DREAM参戦を許可した、と。そして、ミルコの調子が戻り、価値が戻ったところでUFCに戻しましょう、と。

タコ　レンタル移籍みたいなもんなんや。

X　ミルコはUFCの中ではホントに珍しい、選手有利な契約だよね。それは契約を結んだ時点で、ミルコの価値がいかに高かったか、ということなんですけど。

ガンツ　PRIDE無差別級GP王者になった直後ですからね。

タコ　でも、ミルコが帰ってくることに関してファンはどう感じてるの？

X　会見に集まったお客さんの反応を見るかぎりウエルカムですよね。ミルコが会見場に現われたときの歓声は凄かったから。やっぱりPRIDEヘビー級でやってた選手の残像ってもの凄く強いんだよ。

タコ　やっぱり記憶で見てるよな、PRIDEファンは。だってシビアに実績だけで見たら、いま一番評価低いでしょ、ミルコって。UFCから勝ち逃げならぬ負け逃げやもんなあ。

ガンツ　でも、ミルコの評価が低いというなら、『戦極』のトップである吉田、ジョシュ、藤田は全員そのミルコに負けた選手じゃん、ってことになるじゃないですか。吉田はトンプソンに負けて以来の復帰戦だし、藤田だってジェフ・モンソンに敗れて以来でしょ。でも、吉田、藤田の価値が落ちてるかっていえば落ちてない。逆にいえば、ミルコが負けたのがインパクトがあったからこそですよ。

X　そういえばさ、今日の会見でボクは誰がいないのかというのをじーっと見てたんだよね。それで気づいたんだけど、前田日明と髙田延彦がいないんですよ。

タコ　おぉ〜っ！　それが一番興味深いじゃないですか。

X　プロモーションフィルムで、田村の紹介のときに、試合の映像じゃなくて前田にトロフィー投げつけられた場面が出てくるのに（笑）。

ジャン　さすが佐藤大輔。確信犯（笑）。

タコ　悪質やなあ……。でも、前田はどうなるの？

ジャン　単純に『HERO'S』がクローズしたんで、スーパーバイザーもなくなりますということでしょうね。

タコ　ちょっ、ちょっと待ってよ。やっぱり『ジ・アウトサイダー』なんてやってる場合やないやんか！　オレ、DREAMより前田のほうが気になるよお。

X　でも、谷川さんは『ジ・アウトサイダー』の立ち上げに手を貸すみたいだけどね。

ガンツ　あ、田中八郎さんがSWSを潰すとき、天龍やケンドー・ナガサキに手切金代わりに団体持たせたみたいなもんですか？（笑）。

X　そうかもしれない（笑）。

タコ　そやけど……。じゃあ、髙田はなんでなん？　『やれんのか！』でも「髙田はいないとダメでしょう」みたいな感じやったのに。もう、袂を分かったってこと？

ジャン　どうなんですかね〜。まあ、新しいことを始めるんだったら、そういった先達の威光に頼らないのは、新時代の幕開けとしていいふうに捉えたいですけどね。

タコ　確かに前田と髙田が記者会見で握手しても、喜ぶのは我々のような変態世代だけやろうしな。

前田日明と髙田延彦が会見にいなかった!?
それが一番興味深いじゃないですか！（タコ）

X　しかも、二人の握手はまずできないからね。だから、新しいという話でいうなら、スーパーバイザーや統括本部長というポストがなくなった。それが新しいよね。

ジャン　つまり、これってジャンルが成熟したということですよね。PRIDEのイメージが浸透するまでは、猪木さんというアイコンが必要だったりしたじゃないですか。アイコンがいい意味で必要のない時代になったという。

タコ　でも前田はそんなの納得するの？　なんかでまた文句言い出すんちゃうの？

X　谷川さんは「ケンカしたわけじゃないですよお」って言うんだけどね。それに、スーパーバイザーとしての最後の仕事がトロフィーを投げつけることだったというのが凄い（笑）。

ジャン　マイクを握って『やれんのか！』を締めくくった本部長とは、まったく違いますね（笑）。



DREAM開催発表記者会見には姿を現わしていなかった両者。本誌締切までに二人の去就に関する情報は入らなかったが、何かビッグサプライズは放たれるのか!?

タコ　だから髙田は『ハッスル』の主役というポジションがあるし、テレビでもモテモテやから心配してへんけど、前田はどうなるんやろ……。ガンツ、いまこそ前田の生の声を聞きに行ってくださいよ。

ガンツ　……え、なんのために？（冷たく）。

一同　ガハハハハハ！

タコ　だって、スーパーバイザーもなくなったわけやし、新しいイベントをしはるんでしょ！

ガンツ　まあ、また一人ぼっちになったのなら、いまこそホントにリングスをやってほしいですけどね。規模は小さくても『HERO'S』のお飾りスーパーバイザーやってるより、はるかにファンは喜ぶと思いますよ。今度こそ山本KID級の選手を30人発掘してくれれば言うことなし（笑）。

タコ　うーん、冷たいのか、熱いのかわからんなあ。

X　KIDといえば、DREAMにはKIDが闘う階級がまだないんですよね。一応、会見には出てたけど、どこか蚊帳の外というか。

ガンツ　KID、所英男、今成正和を中心にフェザー級を立ち上げたら、凄く観たいけどな。

タコ　それは観たいねえ。大連立することでそういう新しいカードも見えてくるんやなあ。単純に旧PRIDE勢とFEG選手の絡みだけじゃなくて。

X　それから、永田克彦がいないんだよねでも、反対に今日いなくてもいい人が座ってたりもしてたけどねえ……。

ジャン　あぶれる中で『戦極』にいく選手もいるってことですかね。『戦極』の展開もどうなるかわからないから興味深いですよね。

ガンツ　とくに五味の今後は凄く興味あるけどな。ある種、PRIDEのはぐれ者になった五味がおもいっきりDREAMを意識してるのは凄くわかるし、そういう情念を爆発させるときの五味って、メチャクチャ魅力的だから。

タコ　それに結果的に試合を観たら『戦極』のほうがおもしろかったってなるんやない？　オレ、DREAMは『やれんのか！』スタッフがプロデュースするというのを含めて興行として観たいけど、参戦選手の知識がないから『戦極』のほうが試合単位では観たいなと思うねんけどなあ。

ガンツ　DREAMはハッキリ言って強くておもしろい選手ばっかりですよ。ただ、記憶がないというのが一番大きな問題なんですよね。



参戦予定選手として発表されていたフィル・バローニは欠場という結果になってしまったが、吉田、ジョシュを始め、五味、藤田、三崎と、豪華なラインナップで迎える3.5『戦極』。総力を挙げて臨むと予想される旗揚げ戦、そしてその先はどうなる？

タコ　なるほどねえ。そういうDREAMは具体的なカードとか、もう決まってんの？

ジャン　とりあえず旗揚げ戦の3・15はライト級GP開幕戦ですね。そのうち青木vsカルバン戦はすでに発表されました。で、次の4・29はミドル級GPがあって、そのあとは交互にトーナメントをやるみたいです。

X　でも、ミドル級GPは大丈夫かな。今日、檀上に上がった84キロに値する方々って、年齢的にも桜庭を筆頭に、船木、田村……。どれだけ期待できるのかって思うけど。

最大のポイントはいかにしてPRIDEを忘れるか
PRIDEの価値に寄りかかるのだけはやめてほしい（ジャン）

ガンツ　ボクは逆に凄く期待してるんですよ。もともと桜庭、田村、船木って『HERO'S』時代は、UWFのレジェンドを、ただ「レジェンドでございい」っていうやり方がつまんなかったんですけど、個人個人はみんな魅力的だし、それぞれドラマを背負ってる人ですからね。彼らを『やれんのか！』グループがプロデュースしたら、きっとおもしろいものになりますよ。

X　そのレジェンドにどれだけ旬な人を絡めるか、だよね。

ガンツ　またプロレスの話で恐縮ですけど、最初のG1クライマックスみたいにレジェンドが全員負けて、若い選手だけで決勝を争うような展開も見てみたい。そしたら闘魂三銃士がブレイクしたときみたいになるんじゃないですか。たとえば若い選手が桜庭和志をノックアウトしました、田村潔司が大の字ですってなったらインパクトあるし、スターってそういうふうに生まれるものですからね。

ジャン　本部長の引退試合からしてもそうでしたしね。

ガンツ　そういうふうに見たら、「そうはいかない」と踏ん張る桜庭、田村にもまた思い入れを抱けるだろうし。

タコ　ほほう。じゃあ、やっぱりファンは喜ぶべきやん！　オレ、これは100パーセントいい話やと思うわ。

ジャン　確かに去年と比べたらかなり状況はいいですよね。去年なんて、大会もないのに増刊含めてムリヤリ16冊も『kamipro』を出したけど（笑）。

ガンツ　まあ、『戦極』にしてもDREAMにしても、旗揚げ戦はどっちも凄く意地を張ると思うんですよ。とくに先に開催される『戦極』は絶対に負けられないってことで、一発目は総力を結集すると思うし。それこそ天龍＆ホーガンvsウォリアーズ戦を実現させるくらいの勢いで！　それに、『戦極』のほうが何か突拍子もないことをやりそうで興味深いんですけどね（笑）。

ジャン　もしかしたら「♪ダン、ダン、ダダン」のテーマが『戦極』の会場に流れるかもしれないですし。

タコ　『戦極』で流れんのやったら、ちょっと事件やな（笑）。

ジャン　あとは、猪木さんが『戦極』に現われるという手もいいなあ。

タコ　それは『戦極』というより、ズンドコへの個人的な期待感やろ（笑）。そういう意味では新しいイベントに期待することって二つあるよね。一つは継続性があるかということ、もう一つはPRIDEの1回目みたいに事件性があるかどうかということやもんね。それはどちらにも期待したいところですけどね。

ジャン　でも、最大のポイントは、いかにしてPRIDEを忘れることができるか、ですよ。かつてPRIDEが栄えた状況とは違いますし、その亡霊を追っても悪い意味でのノスタルジーに浸るしかないと思うんですよね。もちろん、あの素晴らしいPRIDEの感動や熱気を再現するのは大歓迎ですけど、PRIDEという価値観に単に寄りかかることだけは絶対にやめてほしいです。新しい時代の新しい価値観を築いてほしいですよ！

ガンツ　PRIDEはもう忘れろ!!　ってことだね。

ジャン　そうですね。いまのIGFをおもしろく観るためにも、2003年の猪木祭りを忘れなきゃダメですしね！

タコ　どんな学習能力や！

【08年2月13日／ダブルクロスにて収録】

あの菊地成孔が谷川黒魔術を見破った!?

「谷川さんはインターネットのない世界からやってきた人」



すっかりおなじみの谷川代表のキャッチフレーズ、“谷川黒魔術”の生みの親であり、武蔵のインターネット感のなさや、三崎vs秋山戦における日韓問題をズバリ指摘するなど鋭い言論が絶好調の菊地氏がまたまた登場！　今回は摩訶不思議な“谷川黒魔術”の秘密、そして谷川代表の「インターネット感のない世界の住人」っぷりを徹底解析！

聞き手／ジャン斉藤

きくち・なるよし■1963年生まれ。音楽家／文筆家。先鋭的ジャズ・ミュージシャンとして活動する一方、膨大な知識を駆使した批評家として音楽、映画、料理、ファッション等の著作多数。格闘技批評本に「サイコロジカル・ボディ・ブルース解凍～僕は生まれてから5年間だけ格闘技を見なかった～」（白夜書房）。

——前の取材は『FIGARO JAPON』だったそうですね。

菊地　はい。その前が『朝日新聞』で、メインが『kamipro』です（笑）。

——メイン取材のテーマは谷川貞治なんですが（笑）。じつは三崎vs秋山戦の裁定がノーコンテストに覆りました。

菊地　いや～。正直驚きました（笑）。

——しかも、谷川代表が、『戦極』に出場する三崎に向けたモラル発言とか、2試合契約の話が出てきたり。かなり複雑な展開になってますから。

菊地　せっかくの死闘が手がつけられないくらい安くてダーティな展開になってきちゃってね。「三崎が『戦極』に出る出ない」なんて話より、秋山vs三崎線が残したナショナリズム的な棘のほうが重要だとばかり思い込んでいたので（笑）、またもや明るい黒魔術に脱力、脱臼という。

——またもやバカ負けならぬ、バカ勝ち状態で（笑）。でも、なんで谷川さんはこういうファン不在の対応をしてしまうのか？　って部分が凄く気になってるんです。あまりにファンの心理を理解していないようだし、「どうにかなるでしょ？」みたいな雰囲気がもの凄くある。

菊地　端的に言って「黙ってりゃわからない」と思っているはずです。武蔵選手の特集のとき（本誌No．115）に言った“インターネット以前の感覚”でしょう。谷川さんは明らかに「インターネットのない宇宙」からきていますが、その希少さはある意味、“癒し”というか（笑）。

——知らないあいだに癒されてましたか（笑）。

菊地　テレビ報道ができる前の、記者クラブ癒着の政治家とかね、ガラス張り感のない、ゆったりした過去からきてますね。ファン不在の態度がまかり通るってことを天然で信じてる感じがする。インターネットってどうしてもギスギスする方向にいくじゃないですか。

——インターネットがあるからこそ、ヒートアップする一方ですね。

菊地　秋山のヌルヌル問題だって、もともとインターネット発でニュースが抜かれて、テレビが怯えてるって構図ですからね。最近は有名人が失言したら、もう血祭りですよね。「インターネットだけがあって、戦争がない国」の結論だとは思いますが、要するにネットが魔女狩りの装置になる。その一方、谷川さんの自我の中にはインターネットがないと思います（笑）。

——それはもの凄く貴重な存在ですね（笑）。

菊地　あの人の、ブログのメディア化による、一般人からの全方位的な批評や分析をまったく気にしていない態度を見ていると、過小評価とかではない、そもそも「存在しない」と思っているとしか考えられません。アウトサイドですね。しかし、インターネットのインサイドでは真摯であればあるほど“デス感”や“殺戮感”あるいは“鬱感”が漂ってしまう。

——確かにそういった部分はありますね。

菊地　それに対して、谷川さんは言行こそメチャクチャなんだけど、ちょっと“パラダイス感”がありますね。過去という桃源郷において、現

在をサクセスしている。

—まったくギスギスしてる感じはないですし。

菊地 結果的に癒されちゃうし、"バカ負け"している中に、どこかで心地よさも感じてるはずなんです。ちょっと懐かしい感じで。

—ダハハハ！ 谷川さんは、懐かしい感じ（笑）。

菊地 師匠筋のターザン山本！イズムでもあると思うんですよ。というのは、ターザンさんは「自分はメディアをコントロールできる」という自負が凄くあったと思うんです。

—あ、確かにありましたね。

菊地 ところが、実際にあの人がコントロールできたのは、『週刊プロレス』編集長時代、つまりインターネット以前のメディア止まりで、インターネット以降のメディアはコントロールできていなかったと思うんです。少なくとも、ご自分で思っているほどは。

—いまやツッコミどころ満載ですから。

菊地 あまり細かく知らないのですが、確かターザンさんは紙媒体から、一般紙誌、テレビ、インターネットと、次々に打って出ましたよね。「俺はネクストメディアでもいけるんだ」という気持ちはあったと思うんですよ。しかし華々しい成果は出せなかった。同じくインターネット以前のグループだけど、谷川さんはインターネットがないまま"凍結"されてる感じがする（笑）。そこは武蔵の話にもつながっていくんですが。

—武蔵を「インターネットのない世界の住人」とおっしゃってましたけど、武蔵はホントにパソコンを持ってなかったみたいですから。それで最近は、「パソコンをついにゲットしたぜ！」とか、逐一パソコンを勉強していく過程のブログがアップされてて（笑）。

菊地 やっぱりそうでしたか（笑）。あの一帯に漂うのは「パソコンがない世界」感ですよね。これは一つの視点ですが、格闘技界でインターネットに順応した人、してない人の問題というのは丁寧に検証していったら、かなり興味深いと思うんですよ。

—武蔵の例もありますし（笑）。

菊地 細かいところまでは知りませんが、ネット批評に過剰に反応していたバトラーツの石川雄規さんとか、UWF時代からの"元祖・パソコン持ち"である前田日明さんと佐山サトルさんの、現在におけるパソコンの使い方の違い。とか、そんなこと言ったら角界の"元祖・パソコン持ち"は北尾（光司）さんだ、とか、山本喧一さんが毎日毎日食べた物をブログに克明にアップしているらしく、一種のレコーディング・ダイエットなのではないか？ とか、元WJの永島（勝司）さんが、「どんどんかかってこい！ 2ちゃんねらー！ 俺は受けて立つぞ!!」と、2ちゃんに直接書き込んでいたという話を、本で読んだことがありますが（笑）。

—ダハハハハ！ 何をやっとるんでしょうか（笑）。

菊地 誰しもいろいろなかたちのパソコン、インターネットとの関わり方があり、いまや充分にそれが履歴として意味を持つ世の中ですが、いずれにせよ、それはインターネットがあることが前提の世界ですから。そういう意味で、谷川—武蔵路線である「インターネットのない世界の住人」が、いまバカ勝ちしながら深いところで人々を癒している、というのはインターネットというメディアの持っている何かががあぶり絵になっている気がするんですよ。



大連立効果で天下無敵のベビーフェイス状態だった谷川代表を、たちまちスーパーヒールにターンさせてしまった三崎vs秋山戦の"ノーコンテスト裁定"会見。あまりにファン不在の展開となったこのドタバタ劇から、まさしく菊地氏のいう谷川代表の「インターネット感のなさ」加減が浮き彫りになった格好だ。

—なるほど。

菊地 ずいぶん長く引っぱっちゃいましたけど、実際にパソコンを持ってるか、これは実際にインターネットに接続してるかどうかの話じゃないですよ（笑）。どんな人でも一度インターネットを始めちゃったかぎり、「誠実だけど痛い」という印象に染まり、それによって「器が小さくなる」イメージがします。インターネットを持ってない人のほうが、大振りですよね。要するに「天然」です。

—ホントに谷川さんは気にしてないですからねぇ。

菊地 同じ問いは全ジャンルになされていると思うんですが、たとえば私のいる音楽界は、パソコンもインターネットもかなり具体的な職業ツールになるんで、うすーく全般的に「持っちゃってる」んですね。だから、格闘技界のほうが「ネットやってるかどうか？」がおもしろみとして浮き上がりますよね。

—格闘家は直接、試合や練習とつながらないですからね。

菊地 たとえば吉田秀彦さんがパソコン持っているか、いないかと考えたとき、イメージとしてはハーフなんですよ（笑）。実際は知らないですけど、パソコンを持っている感も、持っていない感もある。

—確かに、自分の評判を気にしてるのか、気にしてないのかよくわからないですね。

菊地 そこが吉田秀彦という人の一種煮えきらない部分だと思います。「パソコン？ やってないねえ」ということにするのか「『YouTube』？ 大好きよ」ということにするのかハッキリしてほしいですね（笑）。そういう意味では田村潔司さんやGRABAKAの皆さんは、パソコンやってる感が凄くあるじゃないですか？

—ありますねぇ。GRABAKAは今回の谷川さんの会見への反論の第一弾声明が菊田（早苗）のブログ発ですから。

菊地 まさしく現代のブログっ子ですよね。どんな正式発表もブログで済ます。

—髙田本部長もブログをやってるんですけど。携帯で打ってそうなんで、パソコンを持っているかどうか謎なんです。そのブログで今回のノーコンテスト問題について「見事な三崎の勝利」と表明したら、ファンが「よくぞ言ってくれた！」って熱狂してて。

菊地 あの人はブログでも煽る能力がありますよね。デカイ手で携帯のボタンを押している感じに包容力があるのか、発言で多くの人を先導する力が凄くある。あのサムアップは、携帯でブログ書いている手の象徴化

言っていることはメチャクチャだけど
ちょっと"パラダイス感"があるんです

谷川さんのやり方は、記者クラブ中心の昔の政治家的な態度というか

でしょう。前田日明さんみたいに、黙っているほうがカリスマが大きく輝くのとは反対な感じで。

——そこでも性格が出ちゃうわけですね。

菊地　ブログは誤字とか改行にまでその人の性格がモロに出るじゃないですか。雑誌みたいに検閲を通るわけじゃないし、アップが早いので、異様に生々しい。コメント欄とか、一様に精液臭いですもんね。これは誹謗や中傷ではなく、相対論ですが、インターネット的な賢者というのは、どうしても「人間としての器が小さくなる」という感じを払拭できません。住む世界が狭いわけだからしようがない。なので、一番器がデカイのは、堂々と「持ってないよ！」「知らないよ！」っていうね。

——「インターネット、何それ？」って感じで。

菊地　もちろん、器はデカければいいと言うわけではありません。そういう意味では顔面やチンポコと同じです。

——ダハハハハ！　同じですか（笑）。

菊地　しかし、谷川さんの側近とかブレーンの人々はどんな感じなんでしょうかね。

——谷川さんは周辺からいろいろ聞いてるみたいですけど、「ああ、そうなんだ〜」という感じで。

菊地　側近やブレーンに策士がいるんだろうとは思うんですが、どうしても谷川さんはそれもブッチ切ってしまっているように見えます。ファンは谷川さんに対していろいろ苦言を呈しながらも、時間経過とともに懐かしさが込み上げてきて。どうしても"昭和の感じ"がにじみ出てくるんだよね。

——『サダハルンバの夕日』みたいな感じで。

菊地　一種の童貞性すら感じますからね。もちろん性的な意味ではないですよ！

——はい（笑）。

菊池　今回の秋山をかばうような立ち回りとか、GRABAKAへの対応の仕方を見ていても、昔のプロレスでダブルクロスで揉めてるときのようなムードがあるじゃないですか。何度か本誌でも話しましたが、あれはコスプレだと思うんですね。でもブログ感があってのコスプレではなく、天然のコスプレですね。

——谷川さんがパソコンを持ったら、どうなるんでしょうね？



記者会見のあと、いつ何時でもマスコミに対して、にこやかに囲み取材を受けるのが定番の谷川代表。ファンの評判とは真逆で、近ければ近いほど好きになり、遠ければ遠いほど嫌悪感が増すという相反する"谷川現象"の秘密は、こうした記者陣とのリレーションシップ中心の姿勢にあった。

菊地　何も変わらないかもしれませんが（笑）。なんにせよ、谷川さんのコスプレのネタである『空手バカ一代』と全盛期の新日本プロレス、全日本プロレスっていうのは、私の世代はともかく、若いファンにはなんのことやらわからない。ネタのわからない、しかも天然のコスプレですから、バカ勝ち無敵ですよ。

——ただ、不思議なことに、谷川さんに近い記者や関係者はみんな谷川さんが大好きなんですね。近づけば近づくほど好きになって、離れれば離れるほど嫌悪感が増すって現象があって。

菊地　そこも昭和の感じですよね。さっきチラっと言いましたが、記者クラブ中心の、昔の政治家的な態度というか。

——ああ、なるほど。

菊地　政治家と記者クラブとの癒着とか、赤坂の料亭での腹芸っていうのは、まさに古い時代の政治家の感覚なんですけど、そこに通じる部分があります。

——確かに恰幅のよさも含めて、昔の政治家っぽいですね。

菊地　かつて、佐藤栄作（第61〜63代内閣総理大臣）が退陣記者会見の席で、「僕は国民に直接話したい。新聞になって文字になると違うから」と新聞記者の取材を拒否して、「テレビには全部映るから、テレビ以外の記者は帰ってもらいたい」と言ったら、怒った記者クラブの記者が全員退席したという有名な事件もありましたけど。どんな時代でも、事をオープンにするのは新メディアで、アンダーグラウンドにしておけるのは旧メディアなんですよ。プロレスや格闘技界における、記者クラブ的なるゾーンについては、詳しい方もいくらもいるでしょう。いずれにせよインターネットが一番極左的だとすると、そういう記者クラブ的なイズムは一番極右というか、まあ、反動的ですよね。

——だから、多くのファンは谷川さんに嫌悪感があるんでしょうね。

菊地　ただ谷川さんは、そういう大本営な場所の中心に、憧れを持って居続けているイメージがあるんです。あの役職に成り上がっていく過程において、イヤイヤ神輿に乗せられたり、強い願望でのし上がった感もなくて、不思議な気持ちよさがある。なんかいつも遊んでるみたいな感じでね。これも以前お話ししましたが、谷川さんにとって"マスメディア&編集者"という感覚は本来『格闘技通信』時代の記憶であるべきですが、これだとターザンさん直系のプロフェッショナリズムになります。谷川さんの成功はそこを捨てて、さっき言った政治も含め、懐かしコスプレという"遊び"の感覚に自我をシフトさせたことにあると思います。

——いつ何時でも、どんなに苦しいときでもお気楽な感じで泳いでいる雰囲気はありますよね。

菊地　だから、こちらはバカ負けするしかないんですよね。まぁ、インターネットとの関係はもっと掘っていくとおもしろいでしょうね。そこは武蔵の一件でハッキリしたし。

——ええ。残念ながら、武蔵はパソコンを持っちゃったんだねぇ（笑）。

菊地　持っちゃいましたけど、そういえば、私が「武蔵はパソコンはやってないはず」とか「武蔵のサイトがあるか、興味ありますね」みたいなことを『kamipro』で言ったら、しばらくしたあとの『格通』に「武蔵選手のサイトが立ち上がりました！」って記事があって。

——なんとも言えないタイミングですね、それ（笑）。

菊地　「ありました！」みたいなニュアンスで書いてあったんで（笑）。いずれにせよ、谷川さんに先んじて、実際にパソコンを持った武蔵はいよいよ変革というか、革命の時がとうとう来ましたね（笑）。

——ダハハハハ！　今日はありがとうございました！

【08年2月6日／都内・新宿の菊地氏の事務所にて収録】



さらば、谷川黒魔術!!
こんにちは、極上のライブショー!!
DREAM
設立公開記者会見で
何が起こったのか？

時は来た！ 2月13日17時より、都内ホテルにて行なわれたファン参加型のDREAM設立公開記者会見は、事前の予想を上回る"夢の続き"を提示した衝撃の生誕祭となった。谷川代表の総合退陣表明と新体制発表、佐藤大輔氏による熱狂の煽りV、なんと桜庭と秋山が揃い踏み、まさかのミルコ登場！ とサプライズ満載となった会見の模様を誌上徹底再録！

構成／真下義之　写真／梅木麗子

多くのマスコミ陣、約300人のファンが会見場に押し寄せ、熱気溢れる中、会見はスタート！ まず、姿を現わしたのは、TBSテレビ事業局長の狩野敬氏、FEGの谷川貞治FEG代表、『やれんのか！』実行委員会の笹原圭一氏の3名。

谷川 本日はお忙しい中、マスコミの皆さんありがとうございます。そして300人以上のファンの皆さんに集まっていただき本当にありがとうございます。今日発表することなんですが、昨年大晦日に京セラドーム大阪で『K─1 Dynamite!!』、そしてさいたまスーパーアリーナで『やれんのか！ 大晦日2007』という二大イベントをTBSさんの理解もあり、開催させていただくことができました。

この〝大連立〟という大きな流れを途切らせてはいけないということで、FEGとしてはおもいきって新しい総合格闘技のイベントを始めたいと思います。その新イベントに関しては、もちろんPRIDEでも、『HERO'S』でもないです。大連立の〝夢の続き〟を新たなイベントとして行ないたいと思ってます。この新格闘技イベントに関しては、これまでどおり主催は私どもFEGが行なっていきます。そしてTBSさんのご理解もあって、TBSでの主催と放送も決まっています。

そして制作とプロデュースに関しましては、今年から新たに『やれんのか！』のチームの皆さんに全部お任せしたいと思っています。

もちろん私もFEGの代表取締役としてこのイベントをやっていきますが、私個人としては、ここでK─1のほうのプロデュースに専念します。『K─1 WORLD MAX』と、『K─1 WORLD GP』、頑張らなければならないイベントがたくさん控えていますのでそちらに専念し、新しいイベントに関しては、ここに座っている笹原さんに代表になってもらい、プロデュースをお願いしたいと思っています。

大晦日の延長線上として本当に夢のカードを作っていきたいと思いますし、いまこそ日本の総合格闘技を盛り上げていかなきゃいけないので、FEGとしても大決断して、熱いファイターとスタッフによる新格闘技イベントをドンドン盛り上げていきたいと思います。皆さん、ぜひよろしくお願いします。

笹原 昨年末、私たちは『やれんのか！』というイベントを開催しました。このイベントはFEGさんをはじめ、『M─1グローバル』さんなど、多くの方々のご協力をいただいて、無事成功裏に終えることができたと思います。格闘技界に沈滞ムードもあったと思いますが、日本の格闘技界はまだまだ熱がある、まだまだパワーがあるということを知らしめることができたと思っています。そんな中で大晦日以降、私たち『やれんのか！』の制作チームも、今後の方向性をいろいろと探っていました。



おまえ、男だ！ このところ、またもスーパーヒール状態だった谷川代表が、総合からキッパリと退陣表明！ “器の大きさ無限大”ぶりをあらためて証明したが、これで黒魔術は封印……となるのか？ DREAMスタッフとの“距離感”が注目される。

私、個人としては、ここでK─1のプロデュースに専念します（谷川）
観たことのない素晴らしいものを作っていきたい（笹原）

イベントの最後に「桜の花の咲く頃に、夢の続きを……」というメッセージを残しつつも、けじめのイベントでしたので、その時点で今後の方向性は決まっていませんでした。そんな中、いろんな方々とお話をさせていただき、いま谷川さんからお話があったように、新しいイベントを我々に任せていただけるということになりました。

中身に関しては、プロデュースを任せていただけるということで、今回この座組みができあがったと理解してます。お任せされた以上、中身に関してはお客様に喜んでいただけるような熱のあるライブイベントを作っていきたいと思っています。

多くの方にお集まりいただきましたが、まずはファンの方々に喜んでいただけるイベントを作っていきたいと思います。先日も3000名ぐらいの署名をいただいて、「ぜひイベントを続けてほしい」、「熱のあるイベントを作ってほしい」、そういう声に励まされました。まだまだ私たちは力不足だと思いますが、皆さまから「世界最高の制作チーム」とご賞讃いただいてますので、その名に恥じないものを作っていきたいと思います。

そして、やるからには、いままでの財産とか実績にすがることなく新しいものを、皆さんが観たことのない素晴らしいものを作っていきたいと思います。

狩野 谷川さんと笹原さんがコンセプトとかイメージを語っていただいたので、私からとくにコメントさせていただくことはないんですが、ご存知のとおり私たちはTBSは立ち技のK─1と、総合格闘技の『HERO'S』と、その集大成として大晦日に『Dynamite!!』をFEGさんと一緒に主催させていただいてますが、これから『HERO'S』に代わる新しいイベントとして、新しい格闘技イベントを放送、主催ともに全面的にバックアップさせていただきたいと思います。私たち自身も夢の大連立を楽しみにしてますので、皆さまもぜひご期待ください。

ここでスクリーンにて、佐藤大輔氏による煽りVが上映。立木文彦アナの「あんな、程度で終われるか！」という名調子から次々と選手が登場。前田日明のトロフィー事件や「さらば黒魔術！」と谷川代表も登場。さらにミルコ・クロコップの姿が映されると場内は大熱狂となる。最後は「あの夢の続きが始まる」というナレーションで締められた。

さらにレイジ・アゲインスト・ザ・マシーンの『ゲリラ・ラジオ』に乗り、島田裕二レフェリーらレフェリー陣、佐藤大輔氏ら演出スタッフ、ケイ・グラント氏、レニー・ハート氏らが登場し、参戦選手も次々と入場。

中村大介、上山龍紀、柴田勝頼、朴光哲、大山峻護、宮田和幸、金泰泳、所秀男、長谷川秀彦、桜井隆多、今成正和、山本KID徳郁、宇野薫、船木誠勝、田村潔司、秋山成勲、ミノワマン、桜井マッハ速人、青木真也、川尻達也、石田光洋、最後は桜庭和志。

さらにスクリーンがせり上がってロゴが披露され、新イベントの名称がDREAMであることが発表された。

また3月、5月、7月にライト級グランプリ、4月、6月、9月にミドル級グランプリが開催。一回目はHEIWAのスポンサードで3月15日（土）に『HEIWA DREAM・1ライト級グランプリ2008開幕戦』さいたまスーパーアリーナ大会。4月29日（火・祝）にOLYMPIAのスポンサードで『OLYMPIA DREAM・2ミドル級グランプリ2008開幕戦』さいたまスーパーアリーナ大会と交互にスポンサードされることと、9月までの6大会が発表された。

笹原 ライト級グランプリとミドル級グランプリのトーナメントの初代覇者は、それぞれ初代ライト級、ミドル級チャンピオンになり、それ以外の階級は今年一年でタイトルマッチを組んでいきます。階級は70キロ未満がライト級、76キロ未満がウェルター級、84キロ未満がミドル級、93キロ未満がライトヘビー級、93キロ級以上がヘビー級となります。ウェルター級、ライトヘビー級、ヘビー級に関しては、ワンマッチでタイトルマッチを行なっていきます。ルー

ルに関しては、現在調整中です。いまご登壇いただきました島田（裕二）さん、野口（大輔）さん、磯野（元）さんを中心にDREAMオフィシャルルールを制定していきたいと思ってます。そして階級のトーナメントに関しては3年に一度の間隔で実施していきたいと思ってます。

イベントの演出を担当する山形龍司氏、VTRを担当する佐藤大輔氏がコメント。

山形　一番上段に座っているのが、演出、制作を担当しているスタッフです。昨年12月の記者会見に裏方の人間として出て、今回またこういうかたちで立たせてもらっています。

今日、この場で大連立の新しいイベントが始まります。我々、美術、音響、照明は表に出る人間ではないんですが、今日ここにいらっしゃるケイ・グラントさん、レニー・ハートさん、そして佐藤大輔さん。彼らは〝本物〟なので、我々がやる以上、我々でしかないイベントをしていきたいと思っています。



会見を盛り上げまくった佐藤大輔氏入魂の煽りVはニコニコの桜庭から、黒魔術に「Good Bye」と別れを告げ、神の子にサタンに皇帝、ミルコまで登場のオールスター状態。まさに“極上”の逸品だった。

今日をきっかけにこの先格闘技が、10年、20年と日本を発信地として世界に羽ばたくスポーツ文化になればいいなと思っています。その一翼を担わせてもらうことに責任を感じるとともに感謝もしています。年末、会場に来ていただいた皆さんや、テレビを通しても熱を伝えられたんではないかな、と。大会を観てくださったファンの皆さんには、より熱い大会を演出、制作という立場から全力でサポートしていきますので、応援よろしくお願いします。

佐藤　過去にとらわれず、新しいものをみんなで作っていきましょう。極上、熱狂のライブショーはファンの皆さんなくしては作れません。ファンの皆さん、一緒に頑張りましょう！

ここで各選手からコメント。

中村大介　今日、集まってるメンバーを見ても、世界最高峰のリングだと思いますので、その中で自分を出せるように、一生懸命練習して強くなっていけるよう頑張ります。

上山龍紀　この素晴らしい新イベントに参戦できることを非常に嬉しく思います。今年は勝負の年になると思いますので、世界王者を目指して頑張りたいと思います。

柴田勝頼　気を引き締めて頑張ります。

大山峻護　この歴史的なイベントに参加できることを幸せに感じています。選手、スタッフ、ファンの皆さんで一丸となって盛り上げていけたら最高だなと思っています。

朴光哲　どうも。朴です。よろしくお願いします。

宮田和幸　凄いレベルの高いリングなんで、いい試合をしたいと思います。

金泰泳　これだけ選手がたくさんいるので、誰とでも試合をやりますので、よろしくお願いします。押忍！

所英男　一生懸命練習して、結果を出せるよう頑張ります。

長谷川秀彦　凄いメンバーの中でサンボの強さを皆さんにお見せできたらと思います。

桜井隆多　自分はDEEPで2月22日に試合があるので、それに勝ってこの舞台に上がれるよう頑張りたいと思います。

今成正和　強い人と試合がしたいです。

ミノワマン　DREAMという名前を聞いて素敵な名前だなと思いました。凄いスタッフ、関係者、素晴らしいファンの前で強くなり、いい試合を見せていきたいと思います。

秋山成勲　ざっと見ても、本当に素晴らしい夢のカードができると思います。自分たちじゃなくてファンの皆さんと、応援してくれる皆さんために、夢というものを追いかけていきたいと思います。

田村潔司　選手はリング上がすべてだと思いますので、リング上で自分の持ってるものを出したいと思います。

船木誠勝　ドリームス……あ、ドリームステージじゃないですね（笑）。新しいイベント、自分もその力になれるよう、選手として頑張っていきたいと思います。

宇野薫　総合格闘技界が進化した中で、自分も進化したものを出せればと思います。

山本KID徳郁　かなりイケてるイベントになっちゃうと思うんで、俺も頑張ります。ちなみに3月15日は、僕の誕生日なんで覚えといてください。

石田光洋　このような新イベントの中に出れることを嬉しく思ってます。僕は一生懸命やるだけなんで、応援よろしくお願いします。

川尻達也　DREAM、こういう夢のある舞台を作ってくれたことに感謝したいと思います。3月15日当日は、僕ら選手が夢のある闘いをしてファンのみんなにいい夢を見てもらいたいので、ぜひ会場に遊びに来てください。

青木真也　幸せいっぱい、夢いっぱい。夢

極上、熱狂のライブショーは皆さんなくしては作れません ファンの皆さん、一緒にがんばりましょう！（佐藤）

とロマン溢れる試合をワオワオしたいと思います！

桜井マッハ速人　僕、MMA自体が長いんですけど、たぶん殴られ年数が一番長いと思うんですが、今年はトーナメントはないんですが、殴り年数が一番長いということで、頑張りたいと思います。

桜庭和志　第一回の『Dynamite!』のときのように、DREAMという名前で、みんなに夢を与えられるよう選手、スタッフともに、一生懸命頑張りますので、応援よろしくお願いします。

ここで『M－1グローバル』のワジム・フィンケルシュタイン氏とエメリヤーエンコ・ヒョードルからのコメントを司会が代読。

司会　近々、日本でスタートする新しい大会DREAMの開催を、お慶び申し上げます。私たちもともに日本で素晴らしいイベントを開きたいと思ってます。我々M－1もグローバルなミックスド・マーシャルアーツのプロジェクトである『M－1チャレンジ』をDREAMの方々と進めていきたいと思います。

続いて来日中のホイス・グレイシーのビデオメッセージが上映。なぜか歌舞伎町をバックにコメントしたため、一部から笑いも起こる。

ホイス　日本にDREAMという新たなイベントが誕生することを嬉しく思います。日本最大のMMA組織であるFEGと、かつてのPRIDE制作スタッフが結集して作り上げるイベントは成功するでしょう。いつかDREAMの舞台で自分のスタイルと技術をお見せします。MMAの歴史を築き上げてきました。グレイシー一族はそれを発展させてくれることを期待するとともに嬉しく思います。試合が待ち遠しいです。必ず戻ってきます。

ここでライト級グランプリの概要について笹原氏がコメント。

笹原　参加予定選手は、JZカルバン、青木真也、川尻達也、石田光洋、アンドレ・ジダ、宇野薫、チョン・ブギョン、宮田和幸、ヨアキム・ハンセン、アルトゥール・ウマハノフ、ギルバート・メレンデス、ルイス・ブスカペ、朴光哲。以上が予定選手です。
　最終的には16人によるトーナメントを開催します。開幕戦は16人による8試合。2nd ROUNDは8人による4試合、決勝大会は4人による準決勝、決勝。全部名前が出ていませんが、決まり次第発表いたします。そんな中、本日一カードのみ決定しております。昨年末に流れてしまったカードなんですが、3月15日に実現します。青木真也vsJZカルバン。このカードが決定しております。

青木　新しい舞台で、第一発目のカード発表が僕だということで、感謝とともに幸せを感じています。正々堂々と僕のしょってきた看板と向こうの看板をかけて、世界最高峰の熱い試合をして、僕が勝ちたいと思います。

ここでJZカルバンのビデオメッセージがスクリーンにて流れる。

JZ　アメリカン・トップチームのJZカルバンです。記者会見に参加できずにごめんなさい。いま青木選手との試合に向けて猛練習中です。『HERO'S』で2回チャンピオンになった者として、これから自分の本拠地となるDREAMで『HERO'S』とK―1のすべてのファンを歓迎します。より多くのファンにMMAの世界とエキサイティングな試合を見せることを楽しみにしてます。3月15日にお会いすることを楽しみにしています。



かなりイケてるイベントになっちゃうと思うんで、頑張ります（KID）
夢とロマン溢れる試合をワオワオしたい（青木）

司会　（突然に）そして皆さま！　あの選手の参戦も決定しました！

場内に、デュランデュランの『ワイルド・ボーイズ』が流れ出した瞬間に大歓声！　レニー・ハート氏のアナウンスでミルコ・クロコップが登場する。

ミルコ　コンニチハ！　ゲンキデスカ？　今回また日本の皆様の目の前で試合ができることを嬉しく思うとともに、非常に興奮しています。ですから自分の次の試合である3月15日、さいたまスーパーアリーナにぜひ足を運んで観に来てほしいと思っていますし、この新しいイベントのサポートをして、ともに頑張っていきたいと思います。

ここから質疑応答となる。

――ミルコ選手のUFCとの契約問題と、今回の交渉の状況についてご説明ください。

笹原　契約に関して、詳細はここでは申し上げられないんですが、ここにご登壇いただいているということが、すべてだと思います。とくに問題ないと認識しています。

――今回は、どんな経緯で参戦が決定したんですか？

笹原　私どもは、初めてのイベントでヘビー級の外国人選手で看板となる選手を探していたんですが、ミルコ選手と話す機会がありまして、今回参戦いただいたということです。

――階級でKID選手の階級がないんですが、そこはどうなってるんでしょうか？

笹原　その下の階級は設けたいと思ってます。ただ、まだ何キロにするか決まりきってないので、今日の資料には記載されていませんが、もう一つ軽い階級は作りたいと思っています。

――谷川代表はK―1に専念し、マッチメイク面は関わらないんでしょうか？

谷川　基本的には、僕は笹原さんにお任せしようと思っています。ただ主催者としての義務とか選手と契約してますので、そういう調整はちゃんとやっていきますが、基本的にはこの素晴らしい優秀なスタッフにお任せしたいと思っています。

――これまで『HERO'S』はロード・トゥ『Dynamite!!』の意味合いがあったと思いますが？

谷川　もちろん関連してくると思います。年末の『Dynamite!!』に向けて、何をやるかわからないんですけども、とりあえずDREAMが発進してやっていく中で、格闘技界の優秀な頭脳が結集しているので、どういうふうにつなげるか考えていきたいと思います。大晦日はMMA中心になってくると思うので、そこはこれからですね。

――ミルコ選手に、闘う場をUFCからDREAMへの移しますが、決意した理由と、このリングで闘いたい相手は？

ミルコ　確かに前回UFCで残念な結果に終わってしまい、その結果、このDREAMに移ってきたという印象があるかもしれませんがそうではありません。確かに前回、残念な結果に終わりましたが、いずれはUFCに戻ってまた素晴らしい試合をしたいと思ってます。ただ、日本でも試合をしたいとずっと思っていましたし、このDREAMは、自分のこれからの格闘技人生でキャリアを積むうえで非常に重要な場所となると感じて、今回参戦を決めました。
　正直、ケージファイトは自分に合っていないと思ってましたし、日本で試合をするのが自分には合っていると思います。長年、日本でサポートしてくれたファンもいますので、日本が自分の第二の故郷だとも感じています。これからは一生懸命練習して、前回の残念な結果から精神的にも肉体的にも立ち直っていますので、いい試合を皆さんにお見せしたいと思ってます。

会見終了後には、谷川代表と笹原イベントプロデューサーが報道陣に向けての囲み会見を行なった。

谷川　というわけで、新しいイベントでやっていくことになりましたので、よろしくお願いします！　PRIDEでもない、『HERO'S』でもない新しいイベントということで、制作からプロデュース、マッチメイクも含めて笹原さんたちのチームに任せようと思ってます。ただ主催者としての責任はまっとうして、スポンサーさんや選手の管理も含めて一緒にやっていきます。もの凄く盛り上げていきますので、一つよろしくお願いいたします！

僕から言えるのは、新しい体制、新しいイベントということで一応、前田（日明）さんに関してはスーパーバイザーという肩書きはなしで、高田（延彦）さんに関しても統括本部長という肩書きはなしで。ケンカ別れしたわけではなく、これからも仲よくやっていきます。前田さんに関しては、この2、3年、前田さんが『HERO'S』でやりたかったことが、個人的にはやれてないと思うんで。近々、前田さんも会見をやると思うんですが、頑張ってやっていただいてお手伝いをしていきたいと思ってます。これからも一緒にやっていこうとFEGとしては思ってますんで、一つよろしくお願いします。

――3月のイベントにFEGから誰が出る？

谷川　さっきの資料の選手です。基本的にはFEGの選手とか『やれんのか！』の選手ではなくて、この一つの中でやっていきますんで。契約関係とかも含めてね。

――ルールはどうなりますか？

谷川　あ、そういう細かいことは全部、笹原さんのチームに聞いてくださ〜い。では、一つよろしくお願いします！

谷川代表が退場、代わって佐伯繁氏が加わる。

――レフェリー陣は、『HERO'S』と『やれんのか！』の二つのチームがあると思いますけど、どういうかたちに？

笹原　今日、島田さんと野口さんと、磯野さんにご登壇いただいたんですが、『HERO'S』と『やれんのか！』のルールをうまくミックスさせて新しいルールを作れれば、と。まだ現時点では、「こうなります」というのはないです。

――ルールのスタッフも混成チームになりますか？

笹原　DREAMのディレクションチームができて、おそらくルールディレクターは島田さんになると思うんですけど。

佐伯　あと、磯野さんとですね。

――組織として会社を作ることはあります？

笹原　さっきも「笹原さん、FEGに入られたんですか？」と聞かれたんですが、違います（笑）。FEGさんから、我々がイベントプロデュースというお仕事を引き受けたと言えば、わかりやすいと思うんですが。

佐伯　業務を請け負った、ということですね。

笹原　制作は会社というかたちではないので、いずれ会社を作って、会社と会社の取引ということになります。そこは現時点でその準備が整ってなかったので。

――笹原さんが社長になられる？

笹原　新しい会社の人事をどうしていくかっていうのは、まだ決まってないですね。

――佐伯さんの肩書きは？

笹原　佐伯さんは、永遠のDREAM広報です！（笑）。

佐伯　いや〜、昨日も会議みたいなのがあったんですが、誰が誰だかわからんかったもんね（笑）。

――年間スケジュールですが、9月以降はまだ決まってないと？





笹原　大晦日の大会ははなんらかのかたちでやりたいと思ってます。どういうかたちで、どんな内容にするのかは決まってないですけど。さっきの会見で桜庭さんもおっしゃってたように、第一回の『Dynamite!』のような夢のあるイベントもやりたい、と。年末にそうなるのかはちょっとわからないですけど。

佐伯　国立（競技場）でね。いいねぇ〜。12月31日に。

笹原　ま、12月31日はさすがに貸してくれないと思いますけど（笑）。

――『戦極』さんとは交流しますか？

笹原　最終的に、我々のチームが『戦極』さんをお手伝いすることはありません（キッパリ）。私たちは一部分を切り売りしてご提供しても、熱のある世界観は作れないと思ってますから。『戦極』側とお話する中で、そこらへんのコンセプトが合わなかった、と。べつに何かチャンチャンバラバラとケンカしてるわけではなくて。ただ旗揚げ戦に関しては、僕らが手伝ったりというのはないです。

――制作チームの名称は？

笹原　いまはないですね。名称は募集中です。とりあえずは、旧『やれんのか！』制作チームですね。

佐伯　まぁ、あの興奮をもっと大きくしたいよね。正直、今回の話は一年前じゃ考えられない話だったし。僕個人も去年の春先くらいから、だんだん格闘技の熱が冷めてきたという印象があって。DEEPのほうも集客が悪くなってきた。だから、年末の『やれんのか！』もそうですけど、今回の件もGCMさんとか修斗さんとかとも協力し合えれば、ホントに日本はまとまるんじゃないか、と。

――3月の大会は、ライト級グランプリとプラス何試合くらい？

笹原　全部で10試合くらいですね。ミルコのカードに関しては、まだちょっとなんとも言えないんですけど。その試合を含めて10試合ぐらいをイメージしてます。

――トーナメント以外はワンマッチとのことですが、年内に全階級のチャンピオンを決めるということですか？

笹原　全部できるかどうかは、断言しきれないんですけど、少なくとも二つか、三つくらいは……。

佐伯　そしたら全部じゃん！

笹原　あ、じゃあ全部できますね（笑）。9月以降のスケジュールが出てないので、今年一年でどの階級でもタイトルマッチが組めればいいな、と思ってます。そのときに一番ファンの後押しや勢いがあって、注目の選手同士で、まさしく夢のカードという感じでタイトルマッチが実現できれば、と思ってます。

佐伯　誰もが納得するような相手と対戦カードになれば、ということですね。

――三崎選手の問題に関しては、笹原さんからはどういうご説明になりますか？

笹原　この件に関しては「言った、言わない」みたいな行き違いもあったと思うんですよ。ご本人とお話をして誤解は解けて、円満に解決してますから。『戦極』でも頑張っていただきたいですし。

佐伯　またDREAMに上がるような機会もできると思いますし、これで終わりというわけではないので。そこは選手本人の気持ちもあると思いますしね。

――ファンからすれば、ノーコンテスト裁定があって、その場で谷川さんから「二試合の約束だったのに、一試合で離れてしまった」という発言があった。当人同士では解決してると思いますけど、そこで止まっているファンにはどういう説明を？

笹原　僕らの立場もよくわからない中で、説明するのは「無責任かな」と思ったんです。新イベントの準備ができた時点でご説明できればと思ってまして。それが長引いてしまったので、ファンの方には申し訳なかったんですけど。

佐伯　こちら側から発言するにしても、一度本人と話をしてからじゃないとできなかったしね。正直、会ったのも最近ですから。

――そこに関しては、谷川さんと秋山選手も納得していると？

笹原　『やれんのか！』自体は一回限りのイベントなので、その先どうのこうのという話はないじゃないですか。とはいってもイベントの最後に「桜の花の咲く頃……」と匂わしていたんで、その部分のニュアンスの違いがあった、と。人と人が話をする中で、思ったことが伝わらなかったり、思った以上のことが伝わっちゃったりすることもあると思うんですけど。今回のように話をして、行き違いを認め合えたのでよかったかな、と。もちろん、谷川さんにも納得していただいてます。

佐伯　いまは普通にしゃべれる感じになってます。あのときはタイミングが悪かったからね。



我々が魂を売ったかどうかは、イベントを観て、判断してください!!





新イベント立ち上げに至る真相を激白!!

笹原圭一

元ハッスルGMが、DREAMイベントプロデューサーへ華麗なる転身!

ついに始動した新イベント、DREAM! FEGが主催、プロデュースは丸ごと『やれんのか!』チームという画期的な構図はなぜできあがったのか? 『戦極』との距離、三崎vs秋山問題も含め、かつてのハッスルGMからDREAMイベントプロデューサーにまで登り詰めた男、笹原圭一氏を会見後にズバリ直撃!

聞き手／ジャン斉藤　撮影／梅木麗子　大会写真／山口比佐夫　写真提供／やれんのか！

――笹原GM……じゃなくて、笹原DREAMイベントプロデューサー！　今日は聞きたいことが山ほどあるので、よろしくお願いします。

笹原　よろしくお願いします！

――まず、今回FEGさんと新しい格闘技イベントをやることになったのにはどういった経緯があったんでしょうか？

笹原　それは昨年の大晦日、我々は〝けじめのイベント〟を行なったわけですけど、これまで交わることのなかったFEGさんや、『M―1グローバル』さんにご協力をいただいて、日本の格闘技の熱や底力がまだまだあるというところを見せられたと思うんです。実際、大会後にはファンや関係者から「もう一度、あの熱を感じたい!!」という声をたくさんいただきました。

――何かしらのかたちであの熱を再現させたい、と。そこで『戦極』さんに協力するんじゃないかという話もありましたね。

笹原　はい。年が明けてから、いろいろな方々と今後のことを話し合ってきたんですけど、我々『やれんのか！』制作チームとしては、たとえば佐藤大輔さんの映像だけとか、レニー・ハートさんの声だけといった部分だけを切り売りすることは難しいなと考えていたんです。

――確かにその一つ一つのパーツを束ねることによって、あの世界観があったわけですし。

笹原　そうなんですよ。やるのであればイベントのタイトルから、イメージから、演出から、すべてをトータルパッケージで手がけることができる環境がベストだな、と。そこから、『戦極』さんやFEGさんとお話をさせていただいたんですが、FEGさんからは「イベントの中身はすべてお任せします」というお話をいただいたので、「じゃあ、新しいイベントを立ち上げましょう」と。そこから、今回のDREAM旗揚げに至ったわけですね。

――でも、一度『戦極』さんが『やれんのか！』チームの演出でイベントを行なう」という発表をされたじゃないですか。

笹原　あの発表自体は、ちょっと『戦極』さんが先走りしてしまったというか。そういったお話はうかがっていたんですけど、具体的な内容を詰める前の段階で、こちら側の名前が表に出てしまったんです。ただ、それで『戦極』さんと揉めたりしたわけじゃないんですけどね。

――いまのお話を聞くかぎり、FEGさんがイベント丸投げ的な発注だったとすると、『戦極』さんは、おもに演出面に限った仕事の発注だったというわけですか？

笹原　そうなりますね。あとはお話を進めていく中で、イベントのコンセプトの部分で合致しなかったところもありましたね。

――たとえば、イベントにとって最大の要はマッチメイクだったりするじゃないですか？　でもFEGさんは、その大事なマッチメイク権も含めて笹原さんたちに「お任せする」と？

笹原　そうですね。「やれんのか？」と（笑）。

――へえ～。それもまたメチャクチャおもいきった決断ですよねぇ。

笹原　そうですよねぇ。ホントにおもいきった決断ですよ！

――まあ、この体制の発表自体はどのタイミングでするのか？　という見方も業界にはあったわけです。というところが今回の記者会見を開くのがかなり遅れてしまったことで、FEGと『やれんのか！』の足並みが揃ってないんじゃないか？　なんていう懸念もあったんですが。



まさにDREAM感溢れるメンバーが一堂に集結した公開記者会見。この"素材"たちを『やれんのか！』チームがどんな味つけで、どう料理するのか？　その答えは3月15日を待つしかない！

笹原　いや、今日の会見を見ていただければわかると思うんですけど、これだけの年間スケジュールを立てて、スポンサーもつけて、選手も用意して、となると時間は当然かかりますよね。とくに『やれんのか！』の一発目の会見のときと比べると、今回はテレビ局を含めたさらに大きな器でしたから。お待たせしてしまって申し訳なかったんですけど、時間がかかるのはしょうがなかったところもあったんです。

――そう危惧してしまう理由の一つには、やっぱりFEGと『やれんのか！』のカラーは合わないんじゃないか？　ということなんですよね。ストレートに言うと、価値観は相反するところもあったじゃないですか。

笹原　まあ、そうですね。逆に言えば我々の価値観を認めていただいたからこそ、この座組みができあがったということです。つまり、今後はいわゆる黒魔術的なことはない！　ってことです（笑）。

――〝ノーモア・黒魔術〟（笑）。

笹原　ええ。会見でのVTRにも「黒魔術よ、安らかに」って、ありましたからね（笑）。

――それで、いまのMMAシーンの状況や、『やれんのか！』サイドが置かれている不安定な立ち位置。無理を承知でおうかがいしますが、笹原さんたちが単独でイベントを行なうという選択肢はなかったんですか？

笹原　いや、やろうと思えばできたでしょう。ただし、いままでより数段、スケールを落とさないといけません。

――うーん。なるほど。

笹原　もちろん、それも一つの選択肢でしょうけど、やはり多くの人が熱狂し、ファイターの方々にも「出てみたい！」と思っていただけるようなスケールの大きなイベントを継続的に開催していくには、我々の体力だけでは足りないんです。

――当然、どこかしらとタッグを組むしかない、と。ただ、今後のMMA戦略の見直しを図っていたFEGさんからすると、渡りに船のところもあったわけですよね。

笹原　だからこそ谷川さんからは「中味はお任せする！」と言っていただいたわけですが、一部のファンからは「FEGに魂を売った」と言われてしまって、かなりツライんですけどねえ……（遠い目で）。

――ダハハハ！

笹原　笑いごとじゃないですよっ！

――す、すいません（笑）。まあ、やっぱり「FEGに吸収されたんじゃないか？」なんていう見方は確実にあるでしょうね。

笹原　それは全然ないです！（キッパリ）。

――よ、ササハルンバ!!　じゃあ、

つまり、今後はいわゆる黒魔術的なことはない！　ってことです



自他ともに認める「世界最高の制作チーム」による新イベント。誰も見たことのない新しい価値観は創出できるのか？　演出プラン、煽りV、音楽、アナウンスまで、〝極上のライブショー〟への期待は高まるばかりだ。

栄光、歴史に甘えることなく新しい価値観を創造していかなきゃならないですね

逆にFEGさんをいい意味で「利用する」くらいの気持ちというか。

笹原　まあ、中味を作るのは我々ですから、魂を売ったかどうかは、次のイベントを観て判断してくださいと言うしかありません！

――そう言いたくなる背景の一つには、『戦極』さんとのドッキングを期待していたファンもいたんですよね。

笹原　そういう声も聞きましたね。確かに。

――そんな中、『戦極』さんの大会に対する期待感もけっこう膨らんでいますが、その風を吹かせたのは誰であろう、谷川さんなんですけど（笑）。事の発端となった三崎選手と秋山選手のノーコンテスト裁定について『やれんのか！』サイドからは、ちゃんとした見解が出てませんでしたね。

笹原　その件に関しては、いろいろな行き違いはあったんですけど、そのあと三崎選手ともしっかり話して、そのへんの誤解は解けています。

――和解はされているわけですね。

笹原　してますね。

――じゃあ、2試合契約だったうんぬんという話は……。

笹原　うーん、契約に関しては表に出せない話もあるので、ちょっと詳しいお話はできないんですよね。

――そこをなんとか。誰にも言いませんから。

笹原　何を言ってるんですか（笑）。囲み会見でも言いましたが、私どもが言えることは、三崎選手が『戦極』に出ることは決まっていますから、そこで頑張ってほしいということですね。このDREAMというイベントに熱が生まれて、三崎選手が「出たい」と思うような舞台ができあがれば、ぜひ出ていただきたいし、扉はいつでも開いているってことです。

――でも、この件に関しては、三崎選手との水面下の確執によってノーコンテストになったふうに見えなくもないんですが。

笹原　そこはホントに誤解を解いておきたいんですよ！　だって契約うんぬんの問題と、ノーコンテスト裁定はまったく関係ない話ですから。ただ、あの会見の流れだと地続きであるかのような誤解を与えてしまったと思うんです。あれはよろしくなかったですね。

――加えて、『やれんのか！』サイドの見解がすぐに発表されなかったじゃないですか。裁定変更が〝紙切れ一枚〟で終わってしまったわけですから、後味がかなり悪いですよね。

笹原　もちろんすぐに会見を開くこともできたんですけど、我々の立ち位置が決まってない中で、その件を「こうです、ああです」って言うのも、もの凄く無責任な感じがしたんですね。この件に関しては、我々の方向性なり、イベントという土台があった上で見解を出さなきゃダメだと思ってましたから。今日の会見でも質疑応答の際に質問があれば、ファンの方たちの前で説明しようと思ってましたし。その質問がなかったので、そこは囲み会見でも説明させていただいたんですけど。

――なるほど。先ほどもおっしゃっていましたが、この座組みを作るのは大変な作業ですし。

笹原　そこは、まだデコボコしているところもあるんで、引き続き話をしていって、〝地ならし〟しなきゃいけないし、もう少し時間はかかるかもしれませんね。

――いまの日本格闘技界は、かつてPRIDEが隆盛を極めた時期とはだいぶ状況が変わってると思うんです。ファイトマネーは高騰しているけど、収益自体はさほど上がっているわけじゃない。テレビで放映してくれるだけでありがたいくらいですし。そういった時代に向けたイベント観はありますか？

笹原　このDREAMというタイトルどおり、いままで見られなかった夢の対決をドンドン実現させていきたいというのが一番です。これまで我々と『HERO'S』が別々にやってきましたが、そのために見られなかった夢の対決を実現させる。「この選手とこの選手の試合が観たい！」っていう原点に立ち帰りたいですね。それと、GPというハードはUFCやほかのイベントにはマネできないものですから、独自色のある世界観でやりたいし、ゆくゆくは昔やった国

僕らは熱のあるライブショーを作ることに命を懸けてきた そこを変えるつもりはない

立競技場（02年8月28日『Dynamite!』）のようなスケールの大きい大会もやりたいな、と。

――なるほど。そこで気になるのは髙田本部長の不参加なんですけど……。

笹原　本部長のほうからは、「熱のある大会を作ってほしい」というメッセージをいただいてます。というのも、今回のDREAMは、『HERO'S』と『やれんのか！』という、二つのイベントが昇華した新しいイベントなんです。まだ色のついていない、まっさらな状態なんですね。だから、本部長が言うように「熱のあるイベント」を作って、いいタイミングがきたときに「また、やっていただけませんか？」っていうお願いができればなというのが、僕らの思いです。

――PRIDEの象徴だった髙田本部長の不在は残念ですけど、いい意味で捉えることで新しい世界観を期待したいですね。

笹原　PRIDEの栄光や歴史に甘えることなく、新しい価値観を創造していかなくちゃいけないってことですよね。我々がこれまでやってきた財産や蓄積はかなり大きいんですけど、どっかでそれを裏切っていかなきゃいけない部分も出てくるでしょうし。

――そういう意味では、同じく新興イベントとして、『戦極』さんは意識されていますか？

笹原　そうですね。おたがい切磋琢磨して、いい意味での競争ができれば。ただ、最終的に判断するのはファンなんですよね。イベントを観てもらって、お客さんに判断してもらう、と。そこは純然たる競争ですし、僕らはずっと熱のあるライブショーを作ることに命を懸けてきたんで、そこは変えるつもりはないです。

――あと、『戦極』に参戦が決まった五味（隆典）選手の話をうかがってもいいですか？　髙田本部長のブログでは、『やれんのか！』サイドと五味選手は歩み寄ることができなかった、みたいな内容の書き込みもありましたが。

笹原　選手それぞれにいろいろな思いや考えがあるでしょうし、いまはただ新しい舞台で頑張ってほしいということだけですね。さっきも言ったとおり、僕たちは新しい価値観を作っていくしかないと思うんです。つまり第二、第三の五味隆典をこのイベントの中で生み出していくってことでしょう。

――そこも新しい価値観の話につながりますね。それから、今回はFEGと『やれんのか！』の合体になりますけど、慧舟會やZST、DEEPとの関係はどのようになるんでしょう？

笹原　そこも変わらず連携していきますよ。今回のライト級トーナメントには宇野（薫）選手にも出ますし、ワンマッチで所（英男）選手や、修斗系の選手も出ます。今日のコメントにもあったとおり、『M－1グローバル』とも変わらずいい関係です。

――じゃあ、『M－1グローバル』のサポートで、またヒョードルが来るなんてことも……。

笹原　はい。ヒョードル絡みでも夢のカードを組みたいですし、ミルコとの顔合わせにも期待したいですし、私も楽しみにしています！

――ところで今日、桜庭選手と秋山選手が揃い踏みしたのは、かなり凄いことだと思うんですが。

笹原　そうですね。あの一件以来、初めてですよね？　きっと桜庭さん的には、こういうかたちでもう一回、旧PRIDEのチームと一緒にやれるっていうのが、本当に嬉しいんじゃないかなぁ。たぶん、その気持ちが大きかったからこそ、この場に来たんだと思うんですよ。

――そういえば、桜庭さん本人はPRIDEを離れたときに、K－1との〝夢の懸け橋〟になりたいということを言ってましたね（笑）。

笹原　そうですね。その〝夢の懸け橋〟がDREAMというイベントになるなんて、非常にドラマチックですよね。じつは、あのドキュメンタリーを作るときに僕も大輔さんと桜庭さんに会ってるんです。

――あ、佐藤大輔さんが監督した番組『ドキュメンタリーやれんのか！完結編』の桜庭さんの取材には、笹原さんも同行されていたんですね。

笹原　ええ、僕はカメラマンだったんですけど。

――んあ～！　イベントプロデューサーが何をやってるんですか！

笹原　でも桜庭さん、すっごい嬉しそうにニコニコしながらインタビューに答えてくれましたから。僕もあんな表情の桜庭さんを見れて、ほんっと嬉しかったですから。

――桜庭さんの夢がはからずも実現したわけですもんね。

笹原　だから、そういった夢をどんどん実現していきたいですね。普通なら「やりすぎなんじゃない？」っていうくらいの内容をやってこそ、『やれんのか！』だと思うんですよ。いろいろな縛りはもちろんあるんですけど、委縮せず、おもいきったことをやっていきたいな、と。

――ただ、繰り返しますが、ファンが一番心配しているのは、FEGさんと足並みが揃うかどうかなんですよね。

笹原　イベントの中身は責任を持って作りますので、もし僕らが「屈してるんじゃないか？」っていう部分があれば、ファンの方にはしっかりと批判していただきたいです。そこは謙虚に受け止めます。そこは我々は昔からずっと耳を傾けてきたという自負もありますから。期待してください!!

――わかりました！　では、最後にGM時代のお得意ポーズである「アイ・アム・GM！」ポーズで締めていただけますでしょうか。

笹原　残念ながら、私もこのような立場になったので、『kamipro』さんと遊んでるヒマはないんですよねぇ（素っ気なく）。

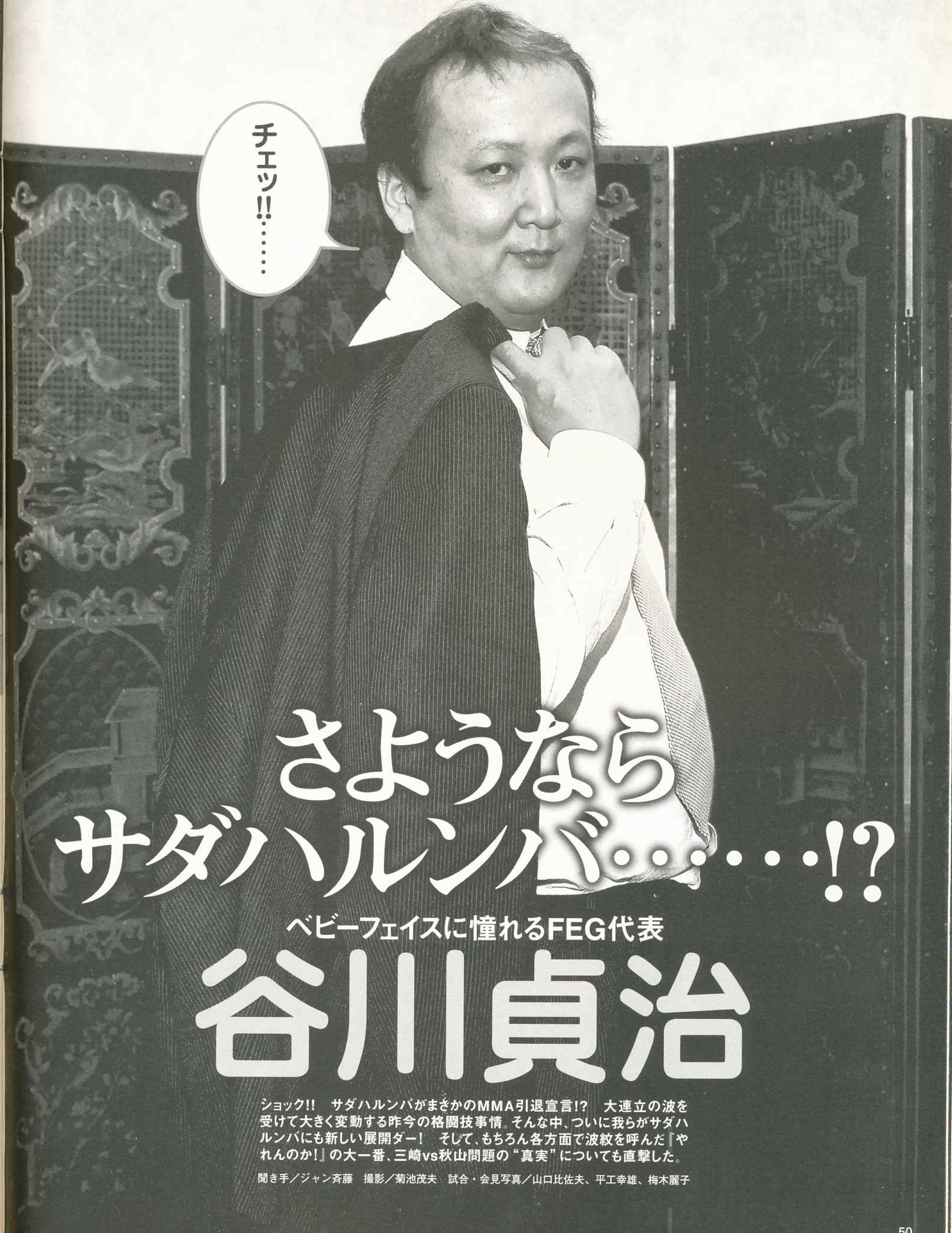
――ダハハハ！　さっそく新しい時代が到来してますねえ。

【08年2月13日／都内・ホテルメトロポリタン エドモントにて収録】



ささはら・けいいち■1967年9月16日、愛知県出身。PRIDEには旗揚げ当初から参加している貴重な"歴史の証人"の一人。PRIDEの広報として活躍、また『ハッスル』では初代GMも務めていたが、07年に『やれんのか！』実行委員会を経て、このたびDREAMイベントプロデューサーに就任。その手腕が期待される。

DREAM発足で、ついにMMAから退陣か



さようなら サダハルンバ……!?

ベビーフェイスに憧れるFEG代表

谷川貞治

シヨック!!　サダハルンバがまさかのMMA引退宣言!?　大連立の波を受けて大きく変動する昨今の格闘技事情。そんな中、ついに我らがサダハルンバにも新しい展開ダー!　そして、もちろん各方面で波紋を呼んだ『やれんのか!』の大一番、三崎vs秋山問題の“真実”についても直撃した。

聞き手／ジャン斉藤　撮影／菊池茂夫　試合・会見写真／山口比佐夫、平工幸雄、梅木麗子

2月13日に行なわれたDREAM開催発表記者会見。ここでは、なんと我らがサダハルンバがMMA界から退陣するという衝撃的事実が発表された!! ただ、じつは会見の10日ほど前、2月3日に収録された本インタビューでサダハルンバは、それを匂わせることをキッパリと語ってたのだ！

また、ここ最近のサダハルンバといえば、三崎vs秋山戦のノーコンテスト問題で「じつは2試合契約をしていたのに……」に始まる、あわやファンのロマンを壊しかねない発言で大きな波紋を呼んでいた。2月13日の会見での『やれんのか！』の笹原実行委員によれば、この三崎vs秋山問題は「お互いにきちんと話をして、行き違いがあったことを理解し合えた」という話で収まっているが、いったい谷川発言の"真意"はどこにあったのか。まさか、これが退陣の理由か……!? というわけで、何かと騒がしいサダハルンバ本人の声を聞け！

ちなみに、前田日明『HERO'S』スーパーバイザーの去就については、聞き手であるジャン斉藤がすっかり聞き忘れてしまっているが、悪しからず!!

谷川 今日はなんの話？

——今日はですね、他人の気持ちを代弁する方法を教えてください。トラブルを起こさない代弁の仕方を。

谷川 んあ〜！ その話かぁ。

——谷川さんの三崎和雄批判発言が大きな波紋を起こしてますね。

谷川 ふ〜ん。なんでそんな話題になってるんだろう？

——んあ〜！ 谷川さん、ご存知ないんですか（笑）。

谷川 ちょっと教えてよ。

——簡単に言うと、せっかくあれだけ盛り上がった三崎vs秋山戦に水を差すな！ というか。

谷川 （戸惑い気味に）水なんか差してないよぉ。



三崎vs秋山戦のノーコンテストが発表された翌日、谷川代表は三崎の『戦極』参戦について「大連立でやっている中で、こんなことが起こったのは業界的によくない！」と痛烈に批判。しかしこれが『やれんのか！』スタッフ不在のまま"代弁"した発言だったためか、ファンからは思わぬ大顰蹙を買ってしまったのだった……。

——「余分なことすんな!!（青木真也のパパ調）」ということですよね。だって、2試合やる予定だったということを知らされるわ、その2試合の話を菊田（早苗）さんが否定するわで、ファンからするといったい何がどうなっているんだ？ と。

谷川 いやいや、どうなってるかはこっちが聞きたいくらいだよ〜。

——んあ〜！ 谷川さんも混乱状態なんですか。それなのに代弁したんですか（笑）。

谷川 ただ、なんでボクがあんなふうに言ったのかを凄く簡単に言うとね、もう言いたかっただけ!!（キッパリ）。

——ええ〜？ 『やれんのか！』サイドの気持ちを代弁したわけじゃないんですか（笑）。

谷川 それも含めて、どうしても言いたかったんだよねぇ……。

——面倒くさいことになってきた。あの発言の裏には、三崎選手が魔王（秋山成勲）との再戦を渋ったからじゃないかとか、『戦極』に参戦することになったからなんじゃないかというような憶測が流れてしまっているんですよね。

谷川 そんなつもりは一切ないです！

——ホントですかぁ？

谷川 ホントだよぉ。だって、ノーコンテストに関しては『やれんのか！』サイドが判断したことじゃないですか。『やれんのか！』にはFEGも主催者として名前を連ねてますけど、三崎vs秋山戦の結論に関しては最終的には『やれんのか！』の人たちに任せていましたからね。だって正直に言うと、ボクはあの裁定にはまだ不満なんだもん!! ……こういう発言ってマズイかなあ？

——谷川さんらしいけど、充分にマズイです！ で、不満といいますと？

谷川 前も言ったと思うけど、あの試合は三崎選手の反則だと思ってるから。

——ノーコンテストじゃなくて、反則負けにするべきだ！ と。

谷川 反則負けかどうかは難しいけど、反則、ノーコンテストがボクの意見。だからさ、今回の裁定は「谷川の笛」とか言われてるそうだけど、ぜんぜん吹いていませんよ!!

——ハンドボールで話題になった中東の笛ならぬ「谷川の笛」!!

谷川 しかし、谷川の笛にはさすがに笑ったなあ！ ビンビンに響いちゃったぁ（うっとり）。

——感心してる場合じゃないですよ。

谷川 （無視して）ボクはね、高校時代はハンドボールをやっていたしさ。宮崎（大輔）くんみたいだったんだよぉ。

——んあ〜！ その話はいずれお聞きします。

谷川 マジメな話、今回は谷川の笛を吹くほどの力もないし、だいたいボクが島田の野郎と何か話をするわけがないじゃない。

——ルールディレクターの島田さんは谷川さんの天敵。じゃあ、三崎選手批判の真意は？

谷川 『やれんのか！』サイドから聞いたのは「三崎は挨拶もなしに『戦極』に行っちゃった」と。それはFEGとしても不満があるところなんです。そもそも秋山くんとしては京セラドームで吉田（秀彦）選手と闘いたかった。でも結局は敵地で向こうのチャンピオンである三崎選手とやったわけじゃない。そこに至るまでには時間をかけて秋山くんを説得した経緯があるんですよ。

——自分から完全アウェイの地で闘いたいなんて選手もいませんからね。

谷川 その交渉はけっこう苦労したんですけど、その条件の一つとして、どっちが勝っても負けてもお互いにリスクを背負って闘うわけだから、秋山くんにも「秋山くんが勝っても2回やってよ」っていう話をしてたんです。その合意の下で出場すると決めてくれたわけだから。ボクらは秋山くんにウソをついたことになってしまう。それはほかの選手からしてみても、プロモーターとしての信頼をなくしちゃうじゃない。

——それで『やれんのか！』サイドの気持ちを代弁したということなんですか？

谷川 はい。ましてや、三崎くんはチャンピオンだから、本当にいい条件で闘えるんだったら他団体から絶好のオファーがあったとしても、そこは話し合いの中で選手の道を作ってあげられると思うんだよね。ボク

今回の裁定は「谷川の笛」と言われてるそうだけど、吹いてませんよ

らも「そこで闘わせてあげたい」と思えば、快く送り出す決心ができるだろうし。でも、今回はそういったことがうまく通じてなかったみたいだから。

——ただ、記者会見で谷川さんのおっしゃったことはGRABAKAサイドの言い分と、かなり食い違うんですよ。『やれんのか！』には挨拶をしたと言うし、2試合やるという話も了承していないと。

谷川　もしボクの言っていることが間違っていたらごめんなさいということですけどね〜。

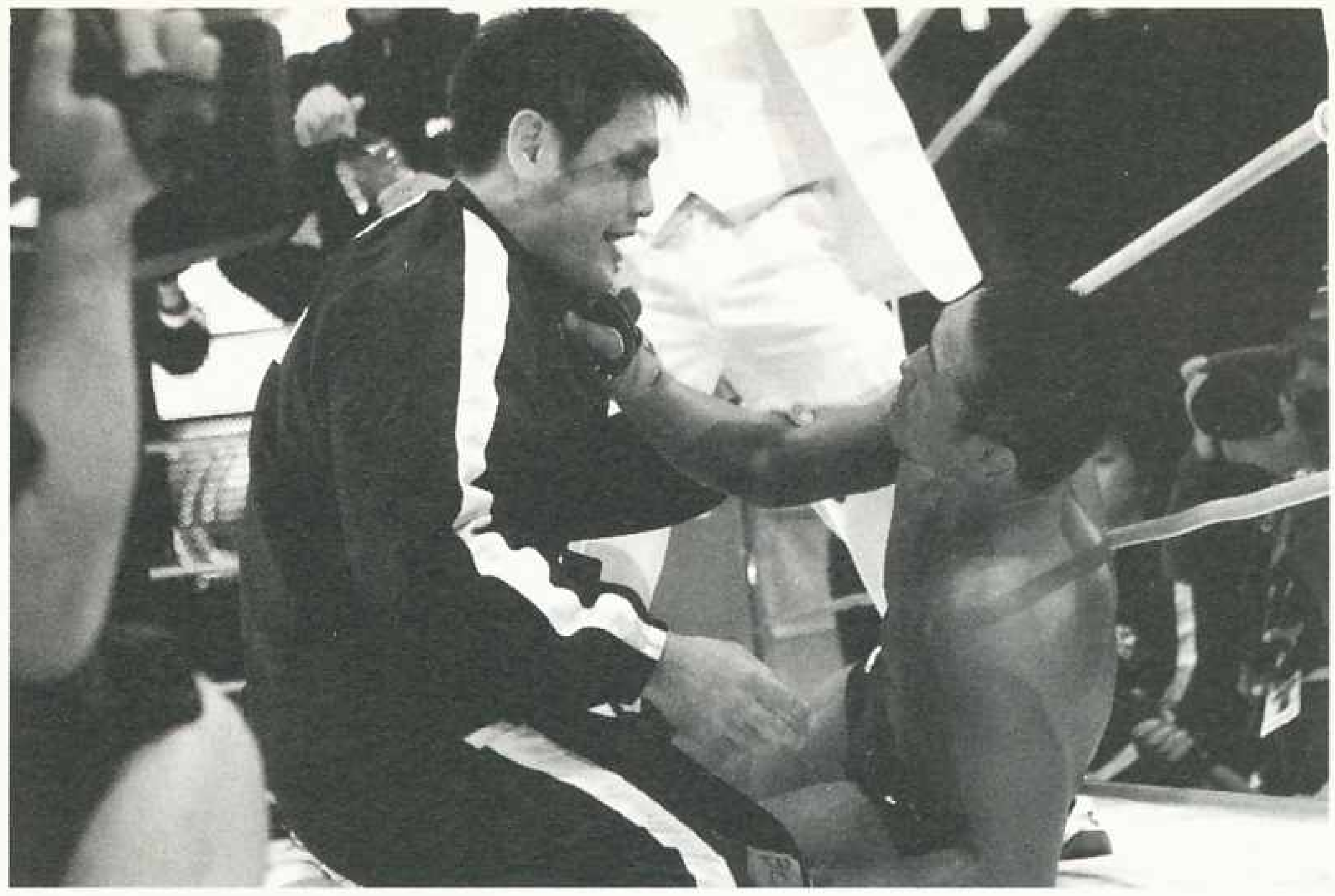
——ファンからすると、選手や団体間の細かい交渉やその裏側はまったく見えないんですけど、『やれんのか！』も谷川さんもGRABAKAサイドも、いろいろと言えないこともあるんですかね？　そう見えて仕方がないんですが……。

谷川　う〜んと、言えないことはあんまりないよ、ボクに関しては。『やれんのか！』スタッフとGRABAKAサイドの交渉の中で微妙な何かはあったかもしれないけど、それは普通の交渉の中でもあることだし。

——そういう細かい事情をまったく知らないファンからすると、谷川さんの三崎批判発言は本当に水を差すものなんですよね。要するに「最初から2試合やるつもりだったのに……」とか言ってしまうのは、ある意味まったくロマンがないなって。

谷川　まあ、そうなんだけどさあ。そこはわかっていますよ。でも、ボクシングの世界戦でもリマッチが最初から組まれることはあるからねえ。

——谷川さんとしては、それを理解してでもあえて悪者になるつもりで発言したところってあるんですか？



チームメイトの三崎をサポートするGRABAKAの大将・菊田。谷川代表から三崎vs秋山戦の2試合契約の話がなされると、すぐに自身のブログ上でこの件をキッパリ否定した。

谷川　ある、ある!!　だからね、ボクは三崎選手に対して何か不満があるわけじゃないし、GRABAKA相手に言い争おうという気持ちはまったくないんです。いま凄く大事なのは格闘技界の健全なる秩序だと思うから。じゃないと「2回やるはずだったんです」なんて言わないしね。要はこれはボクらのミスでもあるんですよね。秋山くんにしても三崎選手にしても、最初からちゃんと契約をしてから発表すればよかったんだから。

——こういったトラブルになったのは、じつは『戦極』サイドとの綱引きの末なのかなという見方もあるんですけどね。

谷川　『戦極』さんとの綱引きぃ⁉　そんなことはないですよ。そもそもボクは『戦極』さんとケンカするつもりはまったくないからさ。ただ、『戦極』さんもよくわからないかもしれないけど、選手の交換は団体同士で話し合ってやったほうがいいし、そうすればファイトマネーも高騰しないし、それこそ『戦極』さんが前に言ってたコミッションとかできていく可能性も生まれるでしょう。

——あと、ちょっと大連立の足並みも揃ってないのかなって感じたんですよね。実際どうかは知りませんけど、『やれんのか！』不在のままものごとが進んでるような印象をファンは受けていると思うんですよ。

谷川　だから、この件に関してボクはただ言いたかっただけ。これから先の話は『やれんのか！』サイドに聞いてもらったほうがいいですね。

——あ、強引にパスしましたね（その後、この問題をおもいっきりパスされた『やれんのか！』チームはちゃんと対処した模様）。

団体同士で話し合っていきたい大事なのは格闘技界の健全な秩序

谷川　そんなことないよぉ。窓口が二つになるとおかしな話になるからね。でも、そんなに足並みが揃ってないとも思わないだけどなあ。だって、凄く仲良くしてるんだよ〜。

——でも、このあいだの会見にしても、『やれんのか！』サイドの問題をFEGが仕切っているふうに見えちゃったんですよ。『やれんのか！』スタッフはいないのに谷川さんが出てきたり。

谷川　そうかあ。よかれと思ってやったんだけどなあ……。

——ボクはもうちょっと見え方がなんとかならなかったのか？　という気持ちはあるんですよね。

谷川　さっきも言ったけど、そこはボクらが甘かった、と。だから結局ね、ボクが一番言いたいのは、ちゃんとしたルールを作って守っていきたいなあってことですよ。

——猪木さんじゃないんですから（笑）。

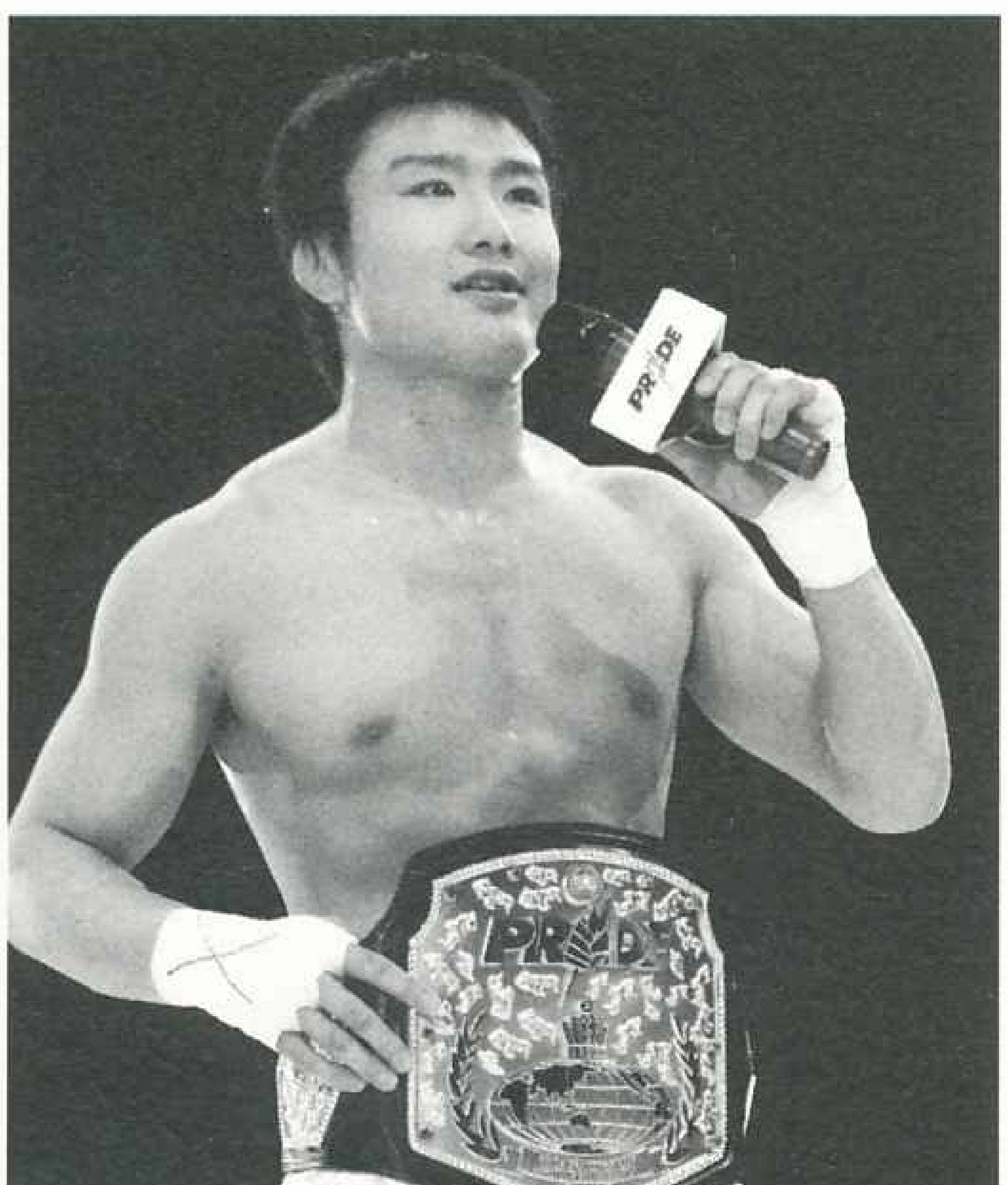
谷川　ファンの方々にはそこを理解していただきたいなあ。

——でも、今回の件で谷川さんってめちゃくちゃイメージが悪くなっていますよ。

谷川　ボクって、いまそんなにヒールになってるの？

——あ、その自覚はありませんか。

谷川　そうなんだ。せっかくベビーフェイスになったのに、あっという間にヒールターンじゃない。ホント、「チェッ!!」て感じだよなあ。



沈黙の五味隆典がいよいよ『戦極』で08年をスタートさせる。07年から『HERO'S』参戦の噂が飛び交っており、大晦日イベントへの参戦もファンから熱望されていが、結局、成立には至らなかった。

さようなら、サダハルンバ…!?

―ダハハハハハハ！　舌打ちされても困ります（笑）。

谷川　でも、もう少しボクの苦しみを察してほしいなあ……（遠くを見つめて）。

―そういえば、五味選手の『戦極』参戦が決まりましたけど、五味選手に関しては去年から『HERO'S』に出るんじゃないかという噂はずっとありましたよね。

谷川　もちろん魅力のある選手なので出したいと思ってたんですけど、ある時期から『やれんのか！』サイドと一緒に仕事をしていこうという話が決まったので、それこそ「ルールを守れ!!」ということで、ボクらが『やれんのか！』サイドを飛び越えて五味選手と交渉するのは絶対によくないなって思ったから。大晦日出場に関しては、『やれんのか！』と五味くんサイドの話がまとまらなかったということですよね。

―3月15日開催の大会ですが、これは『やれんのか！』サイドと一緒に新しいイベントをやるんですよね？

谷川　おそらく『HERO'S』の名前を変えてやると思いますよ。

―それはどういう座組みになるんですか？

谷川　ええっと、TBSさんやスポンサーさん含めてまだ調整は済んでないんですよ。だから調整の段階で話が飛ぶ可能性があると思うんですけど、そういうことを踏まえて話すと、ボクとしてはFEGの総合格闘技部門を『やれんのか！』の人たちにお願いしたいと思ってるんです。そして、お願いするからには、すべてのプロデュースを『やれんのか！』スタッフにお任せしたいというのはもうすでに伝えてあります。

―つまり、『やれんのか！』のプロデュースのもと新イベントが誕生する！　と。

谷川　そのとおり！

―演出も含めて、『やれんのか！』が独特の世界観を生み出していく！　と。

谷川　うんうん！

―そして谷川さんは今回の〝失言〟の責任をとって、格闘技界から引退!!　長いあいだ、お疲れさまでした！

谷川　やめな～い！　それだけは違うぞぉ!!

―あ、違うんですか（笑）。

谷川　ボクはFEG代表取締役としての関わり方をこれからもしていきますよ。

―それは具体的にいうと？

谷川　ハード面の整備ですよね。スポンサーの獲得なり、テレビ局との話し合いなり。だから、記者会見も柱の陰から見てるというね！

―なるほど、なるほど。柱の陰から〝谷川の笛〟を吹く！　と。

谷川　んあ～！　また誤解されること言うんだから。「うまくやってくれよー」という感じで眺めてますよ。ただ、新しい格闘技イベントにしても『HERO'S』にしても、「主催FEG」というのは変わらないです。それは、TBSさんやスポンサーさんとの契約もあるし。だけど『やれんのか！』の人たちは情熱があるし、イベンターとして凄く評価してますので、そういう意味では総合部門を『やれんのか！』スタッフにプロデュースしてもらいたいと思ってる。それでもう一度、PRIDEを観てた熱いファンを満足させる場を作ってもらいたいしね。だから、いまはその交渉をしている最中ですね。

―これから一緒にやることで、周囲からの反響って何かありますか？



2月13日に行なわれた会見で、ついにサダハルンバがMMA引退宣言！　……というわけでもないのだが、今後はFEG代表として「柱の陰から見守る（本人談）」立場に。とりあえず、お疲れさまです!!

ボクはFEG代表取締役としての関わり方をこれからもしていきます

谷川　というより、ボクはまだ誰にもちゃんと説明してないですからね。だから、現段階であるとしたら警戒だろうね。「俺はいったいどうなるんだろう？」って。だから、説明してないだけで「連立はやめてくれ！」と言う選手や関係者もいないし。いずれにしてもボクにも責任があるから。サクちゃんにしても、秋山くん、KIDくん、それからTBSさん、スポンサーさんにしても、そこはちゃんと誠意を持って向き合いますよ。

―そういった話を聞くかぎり、『やれんのか！』サイドが『戦極』に協力することはなくなったんですかね。

谷川　まったくないと思います。ボクが聞いてるかぎりは。

―そうなると、3月の興行戦争がますます楽しみですね。

谷川　でも、まあ『やれんのか！』の人たちなら絶対に盛り上げてくれるでしょう。

―あ、また簡単にパスした（笑）。

谷川　ウフフフ。『やれんのか！』スタッフって、何かがあっても絶対になんとかする人たちだよね。最近は何か問題が起きると、ほっとくヤツって多いしね。

―谷川さんはどっちですか？

谷川　ボクもなんとかしちゃう！（あっけらかんと）。

―しっかし、今日は大雪ですねえ。青梅マラソンは中止ですって。

谷川　無視しないでよぉ!!　まあ、彼らに任せれば、ボクはK―1ワールドユースに専念できるから凄くワクワクしてるんだけどなあ。

―ジャニー谷川としての役割によやく本腰を入れるわけですね。

谷川　子どもたちはいいよ～（うっとり）。

―ククククク。

谷川　ボクらにはない夢があるなあ（しみじみと）。

―しかし、そうなると、谷川さんがこうやってインタビューを受けることもなくなるんですね。榊原（信行）さんに次いで、谷川さんを失なうことはウチにとっても大問題だなあ……。

谷川　ボクもバラさんも話がおもしろいからねぇ。でも、インタビューはこれからも受けますよ。

―それは評論家としてですか？

谷川　でも、評論家として話すのはあんまりよくないよね。三崎選手の件じゃないけど、誤解を招いたり、「何を言ってるの？」って話になるかもしれないし。そのへんは注意してやらなきゃなあ。

―とりあえず責任を取るために引退しましょう。10数年にわたって、おもしろいインタビューありがとうございました！

谷川　だから違うって！　絶対に引退しないぞぉ!!

【08年2月3日／都内・某所にて、涙の引退インタビュー収録】



ロレンゾ(現オーナー)が榊原(元オーナー)DSE代表を訴えた!

どうなる!? PRIDE裁判

写真／平工幸雄

さまよえるPRIDE――。日本で『やれんのか!』とFEGが手を組み、DREAMが誕生した2月、かつての日本総合格闘技シーンの象徴"PRIDE"が海の向こうで再び注目を集めることになった。

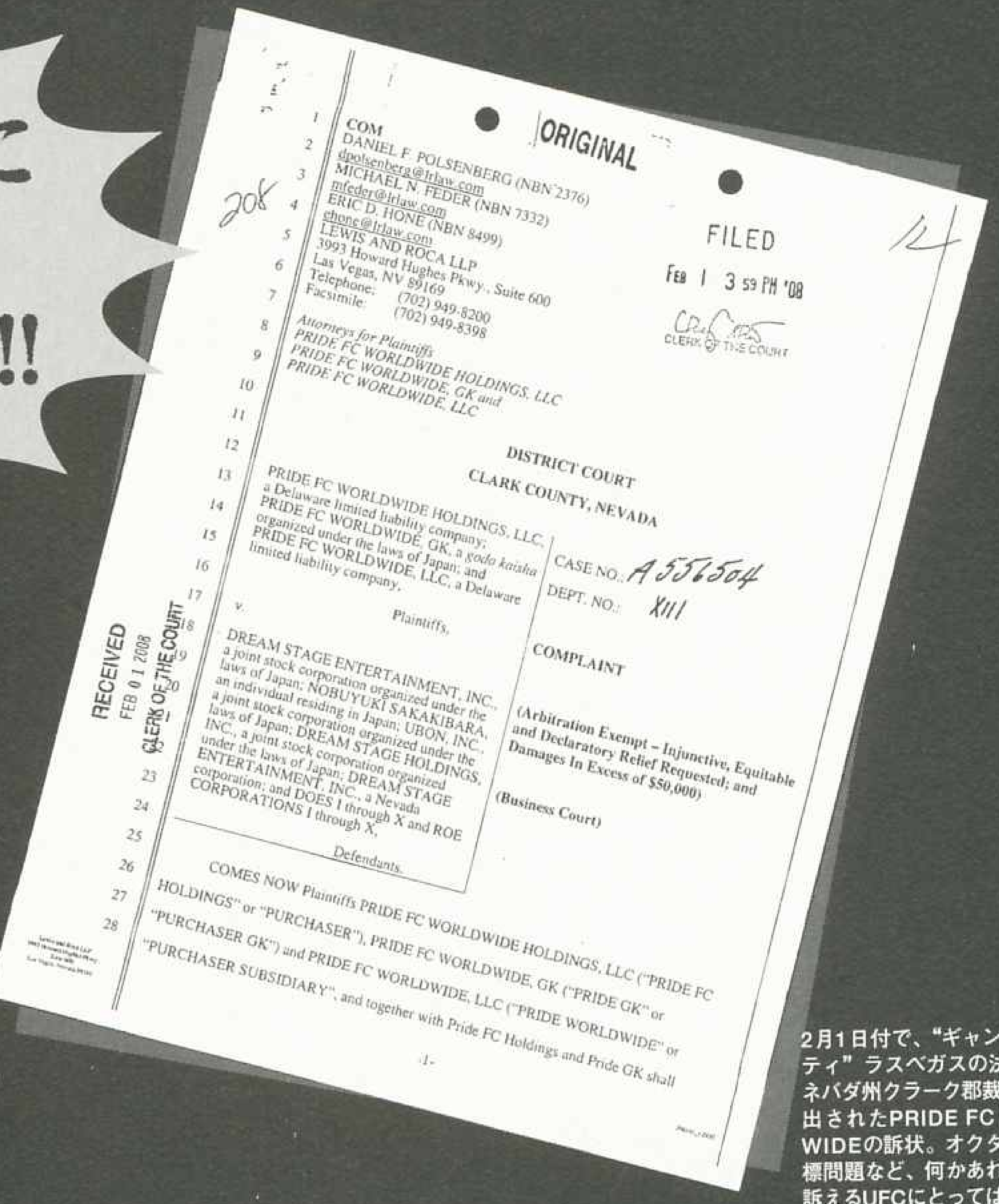
2月1日、UFCオーナーであり、"現PRIDEオーナー"であるロレンゾ&フランク・フェティータ兄弟が設立した会社、PRIDE FC WORLDWIDEがドリームステージエンタテインメントとその榊原代表ら"元PRIDEオーナー"を提訴したのだ。

ネバダ州クラーク郡裁判所に提出された訴状によると、ロレンゾ側は「PRIDEを買収した際に結んだ合意書の内容について、元オーナー側が協力しなかった」と主張。その行為を"詐欺"だと訴え、すでに支払った買収金（その金額は明確には提示されていない）の返還と今後の支払い義務の免除を求めている。

では、元オーナー側が協力しなかった合意書に記載された事項とは何か? 裁判資料の中で、もっとも強調されていたのはバックグラウンド・チェック（身元調査）だ。UFC側は「バックグラウンド・チェックの実施の際、元オーナー側は調査担当者に対し、繰り返して情報提供を怠った」とクレームをつけている。

UFC側がバックグラウンド・チェックにこだわるのは、フェティータ兄弟がラスベガスで、経営面での透明性を求められるカジノを運営しているからだ。それは今回の訴状の中でも「フェティータ氏がネバダ州でゲームビジネスに関わり、ステーション・カジノのオーナー兼運営者としてのライセンスを取得している以上、元オーナー側がバックグラウンド・チェックを受けることは必須であった」と説明されている。

これが裁判所に提出された訴状のコピーだ!!


COM
DANIEL F. POLSENBERG (NBN 2376)
dpolsenberg@lrlaw.com
MICHAEL N. FEDER (NBN 7332)
mfeder@lrlaw.com
ERIC D. HONE (NBN 8499)
ehone@lrlaw.com
LEWIS AND ROCA LLP
3993 Howard Hughes Pkwy., Suite 600
Las Vegas, NV 89169
Telephone: (702) 949-8200
Facsimile: (702) 949-8398
Attorneys for Plaintiffs
PRIDE FC WORLDWIDE HOLDINGS, LLC
PRIDE FC WORLDWIDE, GK and
PRIDE FC WORLDWIDE, LLC

ORIGINAL

FILED
FEB 1 3 59 PM '08
CLERK OF THE COURT

208

14

RECEIVED
FEB 0 1 2008
CLERK OF THE COURT

DISTRICT COURT
CLARK COUNTY, NEVADA

PRIDE FC WORLDWIDE HOLDINGS, LLC, a Delaware limited liability company; PRIDE FC WORLDWIDE, GK, a *godo kaisha* organized under the laws of Japan; and PRIDE FC WORLDWIDE, LLC, a Delaware limited liability company,

Plaintiffs,

v.

DREAM STAGE ENTERTAINMENT, INC., a joint stock corporation organized under the laws of Japan; NOBUYUKI SAKAKIBARA, an individual residing in Japan; UBON, INC., a joint stock corporation organized under the laws of Japan; DREAM STAGE HOLDINGS, INC., a joint stock corporation organized under the laws of Japan; DREAM STAGE ENTERTAINMENT, INC., a Nevada corporation; and DOES I through X and ROE CORPORATIONS I through X,

Defendants.

CASE NO.: A556504
DEPT. NO.: XIII

COMPLAINT

(Arbitration Exempt – Injunctive, Equitable and Declaratory Relief Requested; and Damages In Excess of $50,000)

(Business Court)

COMES NOW Plaintiffs PRIDE FC WORLDWIDE HOLDINGS, LLC ("PRIDE FC HOLDINGS" or "PURCHASER"), PRIDE FC WORLDWIDE, GK ("PRIDE GK" or "PURCHASER GK") and PRIDE FC WORLDWIDE, LLC ("PRIDE WORLDWIDE" or "PURCHASER SUBSIDIARY", and together with Pride FC Holdings and Pride GK shall

-1-

2月1日付で、"ギャンブル・シティ"ラスベガスの法の番人、ネバダ州クラーク郡裁判所に提出されたPRIDE FC WORLDWIDEの訴状。オクタゴンの商標問題など、何かあればすぐに訴えるUFCにとっては、裁判は日常茶飯事なのかもしれない。

フェティータ兄弟からすれば、一投資案件であるPRIDEのために、本業であるカジノのライセンスを失なうことになるのは悪夢だろう。

また、あくまでロレンゾ側の言い分ではあるが、バックグラウンド・チェックだけではなく、資産査定においても問題が発生していたことが裁判資料で明らかになった。そこには「07年4月（の買収時）より預金や支払い、集金の記録、顧客情報、取引報告、銀行残高証明などの情報が提供されず、さらには物理的な妨害行為が行なわれた」と書かれており、そのため事業の継続が難しくなったと説明されている。

昨年10月に日本事務所を閉鎖した当時、PRIDE FC WORLDWIDEは

"PRIDE消滅"の真相が明らかに!?
現オーナーと元オーナーによる訴訟合戦に発展か?

「元役員たちの協力が得られずイベントを開催することが不可能になった」と声明を発表していた。つまり、この"協力"とは具体的にはこのバックグラウンド・チェックと資産査定におけるものだったのだろう。

しかしながら、仮にUFC側の言い分が事実だとしても、『MMA WEEKLY』編集長スコット・ピーターソンはPRIDE買収ついて、ロレンゾ側の失策だとバッサリ。「カジノを運営しているのなら、バックグラウンド・チェックを優先するのは、なおさらあたりまえのこと。資産査定についても、大金を使って買収しているのだから、どうして買収前に行なわなかったのかわからない」と苦言を呈す。

実際、同じく買収のオファーを申し出たというエド・フィッシュマンは「『資産査定のため、30日間の確認期間を用意してくれないと買えない』と伝えた」と以前、話している（※DSE側は売却交渉そのものを否定）。

競合他社への売却を防ぐためだったのかどうかはわからないが、結果的にPRIDEを買い急いだロレンゾたちはその運営で大きくつまずくことになってしまった。そして現在、すでに支払った買収金の返還と今後の支払いの免除、そして合意書に定められた「PRIDEを維持する義務」の免除を求めているのだ。

しかし、その一方で元オーナー側が「PRIDEを存続させるという条件を守らなかった」として、現オーナー側を相手に逆に訴訟を起こす準備を進めているという情報もある。

このまま訴訟合戦に発展しそうなPRIDE裁判。この件に関しては、もうPRIDEを忘れろ! というわけにはいかなそうだ。

<RADICAL特選劇場>

迷わず読めよ、読めばわかるさ! 永久電機の歴史は本誌で読める!

no.72 「永久電機とは何か?」



no.54 「猪木とは何か?」



●今年2月2日に、アントンが「ついに完成した」と衝撃発言した“永久電機”。本誌No.72では、アントン事業のキーマンである、アントン実弟の啓介氏を直撃! 「発表されたら世界がひっくり返りますよ!」と永久電機に自信満々。約4年前の時点で「現実に完成してる」、「あと数週間でしょう」とキッパリ語っていたのだから最高。アントンハイセルなど、荒唐無稽な事業話までをズバリ激白!

●本誌No.54ではアントンの実兄である快守氏を直撃。永久電機もビックリ!? なスポーツ平和党党首としての破天荒すぎる政治活動、“パブロ猪木”としてワンマンコンサート実現に燃える歌手活動を直撃! 知られざるアントン秘話も満載だ!

ついに“永久電機”完成!? アントンの軌跡と猪木家のゲノムはRADICALで読める!!

注 No.92以降の「Kamipro」はこちらでは取扱いがありません。http://www.enterbrain.co.jp でお買い求めください。

バックナンバーは電話で注文できます!

03-5368-1797

販売元 (株)ダブルクロス 平日 13:00~19:00



電機ですか——ッ!!
「世間の皆さまには
『ざまあみろ!!』と言いたい!
ダーッハッハッハッ!!」

元祖! 紙のプロレス BACK NUMBERはすべて50%OFF

特集 神秘とは何か?
no.14 780yen⇒390yen
佐山聡・大槻ケンヂ・プロボディガード清水白鳳・鈴木みのるたち格闘神秘を膨らます!/遠藤幸吉インタビュー

特集 インディペンデントの逆襲
no.15 780yen⇒390yen
あんた誰? 山口日昇試練のインディ・レスラー10番勝負!/K-1とは何か? 石井館長・ターザン山本・サダハルンバ

特集 実況パワフル北朝鮮
no.17 780yen⇒390yen
あの北朝鮮での「平和の祭典」を語りまくる! アントニオ猪木&永島勝司・村松維視・破壊王・ブル中野

パンクラス公式読本「矛」「盾」
各1260yen⇒630yen
97年当時のパンクラシストが勢揃い!! ゴッチさん、佐山聡、なぜか馬場さんも登場するパンクラス公式読本二部作!!

紙のプロレス RADICAL no.16~87

格闘ノストラダムス!
no.16 780yen '99.03
[表紙:エンセン井上] アントニオ猪木、環境問題を『紙プロ』で語る!/引退後初! 前田日明インタビュー/石川孝司

“新”プロレスとは何か?
no.32 840yen '00.10
[表紙:小川直也] 田村潔司に快勝! A・ホドリゴ・ノゲイラ/ドラゴンの大爆笑10 藤波語録/ラッシャー木村

『猪木祭り』いよいよ開幕ーッ!
no.34 840yen '01.01
[表紙:小川直也] 田村潔司に快勝! ノゲイラインタビュー/ドラゴンの大爆笑10 藤波語録/ボブ&オバチャンチン

純プロレスを徹底検証!
no.35 840yen '01.02
[表紙:サクマシン(イラスト)] ZERO-ONE本格始動 橋本真也/プロレススーパースター列伝 ジョー樋口/杉浦貴

燃えよ、闘魂の火種!!
no.36 840yen '01.02
[表紙:橋本真也(イラスト)] ノアから独立! 高山善廣を確認せよ!!/ヴォルク・ハン——ノゲイラに狼の伝言

小川直也は是か非か?
no.38 840yen '01.05
[表紙:髙田延彦(イラスト)] 忘れ物の正体は。髙田延彦/ヴォルク・ハンの最強の遺伝子 E・ヒョードル

前田日明は是か非か?
no.39 840yen '01.06
[表紙:前田日明] 前田道場新エース・金原弘光/怪物か!? それとも…… 藤田和之座談会/壮絶なる格闘人生・藤原敏男

地上最強のプロレスとは?
no.40 880yen '01.07
[表紙:アントニオ猪木] 蘇れ! Uインター&キングダム伝説! 高山善廣×金原弘光/熱いこの叫びを聞け! 大谷晋二郎

“最後の黒船”WWF来襲!!
no.41 880yen '01.08
[表紙:ビンス・マクマホン・ジュニア] リングス10周年! ヴォルク・ハンが振り返る/真樹日佐夫×三池崇史

アントンパワー大爆発!!
no.42 880yen '01.09
[表紙:アントニオ猪木] ドン荒川×橋本真也のトンパチ伝承対談/“ヒャッホーの真実”辻よしなり/高山×宮戸×金原

聖戦『PRIDE.17』迫る!!
no.43 880yen '01.10
[表紙:桜庭和志] ブラジリアン・トップチーム 3大柱インタビュー/金原弘光×サスケの新日本プロレス学校同窓会

サク連敗と『PRIDE』の未来
no.44 880yen '01.11
[表紙:桜庭和志、ヴァンダレイ・シウバ] その修羅場の数々! シーザー武志/怪物伝承対談! 高山善廣&杉浦貴

一寸先はハプニング!!
no.45 880yen '01.12
[表紙:アントニオ猪木(ホームレス姿)] 悪魔の書、現る! ミスター高橋/ジェラルド・ゴルドー人生相談

田村潔司、『PRIDE』討ち入り!
no.46 880yen '02.01
[表紙:田村潔司] さらばリングス! 金原×和田、浅草キッド/ならず者DEEPで勝利! エル・カネック/キラー・カーン

WWE日本侵攻、5秒前!
no.47 880yen '02.02
[表紙:ビンス・マクマホン・ジュニア] “天才”武藤敬司が『紙プロ』驚愕の初登場!/噂の馳浩がミスター高橋本を語る!

桜庭、満開の日は近い!
no.48 880yen '02.03
[表紙:桜庭和志] 奇跡のメガトン対談! 小川直也 vs ノゲイラ&スペーヒー/和田最強伝説が遂に現実に! 金原弘光

究極の格闘技大戦争勃発!
no.49 880yen '02.04
[表紙:ミルコ、ヒクソン、小川、桜庭] 和田さん快勝記念鼎談! 高山&金原&和田/菊田早苗とは何者か!?

50号記念企画てんこ盛り号
no.50 880yen '02.05
[表紙:桜庭和志]「地方発世界」開始! 小川&橋本/リングスロシア軍団の軌跡/パンクラス取材解禁!

揺るぎなきプロレスの確立
no.51 880yen '02.06
[表紙:橋本真也] 両国国技館だよ、全員集合! 橋本真也/『PRIDE』の魅力をマン開! 小池栄子/武藤敬司人生相談

戦慄の『LEGEND』前夜!!
no.52 880yen '02.07
[表紙:橋本真也、小川直也] 全身プロレスラー・高山善廣/USAの渡世人ドン・フライ/ロシアン・トップチーム

『Dynamite』ド直前号!
no.53 880yen '02.08
[表紙:桜庭和志] ノーフィアー×無謀美・対談!! 高山善廣×美濃輪育久/独占肉弾スクープ! マット・ガファリ

『Dynamite!』を大総括!
no.54 880yen '02.08
[表紙:アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ] “首の皮一枚”ホイス&エリオグレイシー/ジョシュ・バーネット

髙田vs田村、夢限大の真剣勝負!
no.55 880yen '02.10
[表紙:髙田延彦]「真剣勝負」発言から7年、田村潔司が激白!/金原が『PRIDE』参戦!/メガトン級の男、ボブ・サップ!

驚ガクの6周年記念号
no.57 840yen '02.11
[表紙:高山善廣] サップとタイマン勝負!! 高山善廣/新たなる“U”が始動!! 田村/ミスター高橋×大槻ケンヂ

夢の対談、大連発号!
no.58 880yen '03.01
[表紙:武藤敬司&船木誠勝] 夢幻のファンタジー対談 武藤×船木/Uスタイル対談 田村×髙阪/宮戸×安生×鈴木健

最後の皇帝、『PRIDE』上陸
no.59 880yen '03.02
[表紙:エメリヤーエンコ・ヒョードル] いざノゲイラ戦!! E・ヒョードル/アメリカン・ドリーム ダスティ・ローデス

『PRIDE』は変貌&再生する!
no.60 880yen '03.03
[表紙:エメリヤーエンコ・ヒョードル] ノゲイラ撃破!! E・ヒョードル/驚愕の格闘芸術対談!! 武藤敬司×須藤元気

ゼロワンvs新日5.2戦争!
no.61 880yen '03.04
[表紙:橋本真也&小川直也] 裏番組をブッ飛ばせ! 橋本真也×小川直也/1年間の沈黙を破った!! ヴォルク・ハン

ミルコの首をカッ斬ってみろ!
no.62 880yen '03.05
[表紙:ミルコ・クロコップ] ヴァーと登場! 佐々木健介/現役復帰? 船木誠勝/ヒョードルが藤田を一刀両断!

マット界、超絶リボーン!!
no.63 880yen '03.06
[表紙:橋本真也&小川直也(イラスト)]「お前は男だ」劇場炸裂! 髙田延彦/『PRIDE』REBORNを大総括!!

PRIDEミドル級GP直前!!
no.64 900yen '03.07
[表紙:桜庭和志] “異次元格闘技戦”田村潔司×吉田秀彦を大展望!!/『PRIDEミドル級GP』出場全選手インタビュー

皇帝vsミルコ闘争本能決定戦!
no.65 880yen '03.08
[表紙:ミルコ・クロコップ] 最後の皇帝大炎上! ヒョードル/ミルコついに皇帝戦へ/闘魂ストーカー、イズマイウ

ミルコ『武士道』電撃出陣!
no.66 880yen '03.09
[表紙:ミルコ・クロコップ] ミルコ緊急インタビュー/マッハを破った男、長南亮登場!/『東スポとは何か?』

ミルコvsノゲイラ、迫る!!
no.67 880yen '03.10
[表紙:ヴァンダレイ・シウバ] ノゲイラ戦緊急インタビュー! ミルコ/『PRIDEミドル級GP』決勝戦インタビュー

大晦日・格闘技大戦決定!!
no.68 880yen '03.11
[表紙:髙田延彦PRIDE統括本部長] 大晦日三つ巴決戦に出撃宣言! 髙田延彦/曙とは何者か!?/桜庭和志

『ハッスル1』開催ド直前!
no.69 900yen '03.12
[表紙:橋本&小川] 出てこい! 泣き虫! 橋本&小川/「泣き虫」著者、金子達仁登場!/田村潔司/美濃輪育久

04年末の格闘戦争を大総括!
no.70 880yen '04.01
[表紙:ミルコ・クロコップ] シウバに近藤有己が宣戦布告!/健介&北斗WJの真実を語る!/紙プロ大賞&語録発表

『ハッスル2』で大フィーバー!
no.71 880yen '04.02
[表紙:ハッスルイラスト]『PRIDE GP』優勝宣言! ミルコ&ノゲイラ/川田利明初登場!/猪木vsアミン戦の真実

『PRIDE』に格闘ロマンを見よ!
no.72 840yen '04.03
[表紙:ヒョードル、ミルコ、ノゲイラ] GPの大本命をオランダでキャッチ!! エメリヤーエンコ・ヒョードル/山本KID徳郁

最も過酷な道を行く男!!
no.73 880yen '04.04
[表紙:小川直也] GP出場決定、緊急インタビュー! 小川直也/PRIDE・GP出場全選手 パーフェクトガイド

感じろ、ハッスル魂!!
no.74 880yen '04.05
[表紙:小川直也] PRIDE・GPでハッスル成功! 小川直也/リベンジロード発進!! 桜庭和志/ミック・フォーリー

英雄誕生の気運高まる!!
no.75 880yen '04.06
[表紙:小川直也、桜庭和志、吉田秀彦] シルバ戦直前に大ハッスル宣言! 小川直也/奇蹟の独占インタビュー! 髙田総統

プロレス爆発へ最後の挑戦!
no.76 880yen '04.07
[表紙:桜庭和志] 小川の“盟友”と“宿敵”が奇蹟の対談!! 破壊王×ノゲイラ/厳しくも、飄々と戦路を進む! 桜庭和志

小川vsヒョードル決定!!
no.77 880yen '04.08
[表紙:小川直也]「相手がヒョードルだろうと俺はハッスルする!!」小川直也/狙うは皇帝の首ひとつ! ミルコ

PRIDE GP徹底総括号
no.78 840yen '04.09
[表紙:小川直也] 衝撃の敗戦直後、独占インタビュー! 小川直也/小川の敗戦をどう見る!? 髙田延彦/谷川貞治

髙田総統がビターンと降臨
no.79 840yen '04.09
[表紙:髙田総統] キャプテンに休息無し! 小川直也/特別付録・髙田総統ポスター/谷川さんも推薦『曙は是か否か?』

守護神ミルコが外敵狩り!
no.80 880yen '04.10
[表紙:ミルコ・クロコップ] ミルコ独占インタビュー/ハッスルお家騒動、小川直也/「袋とじ企画」グリズリー岩本

究極のSADAME、迫る!!
no.81 880yen '04.10
[表紙:桜庭和志] ヒョードルの弱点を発見!? ノゲイラ&ノゲイラママ/新日本でハッスル成功! 小川直也/草野仁

男たちの祭りは激化する!!
no.82 890yen '04.12
[表紙:桜庭和志] “道場破り”の全てを激白! 安生洋二/WJの秘密を大暴露! 永島勝司×ターザン山本!×吉田豪

ミルコ激白! 打倒皇帝!
no.83 880yen '05.01
[表紙:ミルコ・クロコップ] 04年『PRIDE男祭り』を大総括/05年ハッスル大進撃発表! 小川直也/橋本×船木対談

RTTが皇帝に宣戦布告!!
no.84 880yen '05.02
[表紙:セルゲイ・ハリトーノフ] “殺人落下傘”が3強越え宣言!! セルゲイ・ハリトーノフ/田村潔司がPRIDE GPを語る

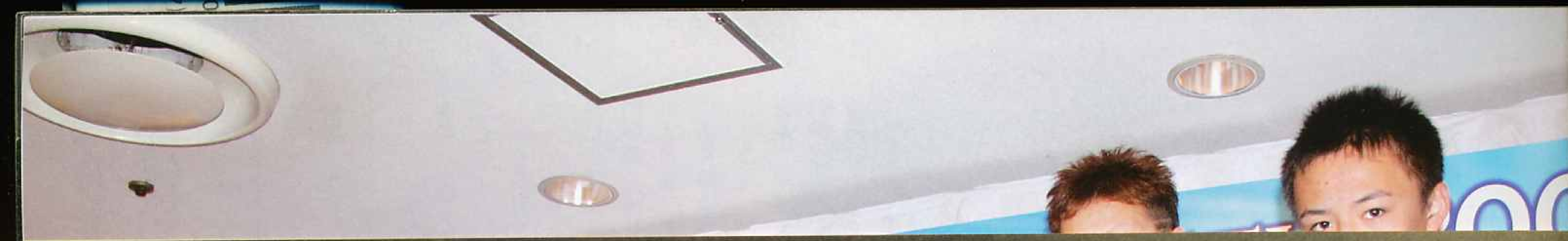
『PRIDE』vs『HERO'S』開戦!
no.85 860yen '05.04
[表紙:前田日明&髙田総統] PRIDE GP2005特集 桜庭、田村、高田/パンクラス2大王者対談 高坂剛×近藤有己

PRIDE GP直前大解剖号
no.86 860yen '05.04
[表紙:ヴァンダレイ・シウバ] 大物再会! 超U級対談が実現!! 船木誠勝×田村潔司/ダンプ松本が全女解散を語る!!

PRIDE GP開幕&大総括!
no.87 860yen '05.05
[表紙:吉田秀彦] 敗れてなお咲く花あり! 吉田秀彦/船木誠勝×宇野薫/金原弘光×池田大輔

通販方法 ▼No.91までのバックナンバーは書店で扱っておりません。下記の通信販売をご利用ください。
①『kamipro Hand』で注文 ②電話注文 03-5368-1797 ③メール注文 kapra@kamipro.com

※通販方法はすべて代引きとなります。手数料は315円です(代引き金額によって異なります)。 ※送料は一律500円(何冊でも可。離島山間部は除く)となります。 ※郵便振替は現在受け付けておりません。ご了承ください。



ヤバイぐらいに大反響！

リングス、K-1、修斗に深く関わりゴジラにまでなった男が語る

“興行と競技”



日本修斗協会事務局長

若林太郎【後編】

初期リングス時代、前田日明の側近として活躍していた頃の衝撃エピソードが大好評だった若林太郎氏のインタビュー後編をお届け！　今回の後編ではK-1、石井和義前館長とのエピソードから、現在も深く関わる修斗を立ち上げた佐山聡とのエピソードまで、またしても新事実が続々発覚！　これはもう読むしかないって!!

聞き手／ジャン斉藤　構成／阿修羅チョロ　DVD写真協力／(株)クエスト

K―1が始まる前、フジテレビに出す企画書を書いたのは僕です

――治郎丸（明穂・初期リングスのプランナー）さんが抜けたあとのリングスは、若林さんから見てガラッと変わった感じですか？

若林 そんなすぐには、ガラッとは変わってないんじゃないですかね。物事はやっぱり誰か一人の力で動いているものではなくて、「自分が動かしているんじゃ！」って思った人がいなくなっても続くものだし。

――では、治郎丸さんがやろうとした、〝前田日明抜きのリングス〟的な新プロジェクトはどうなったんですか？

若林 結果的に『格闘技シンポジウム』っていう名称で年末にやったんですけど、いろいろと紆余曲折があってあまりうまくいきませんでした。

――何が決定的な原因だったんでしょうか？

若林 う～ん、結局根本的な問題だったのは、リングスと同じように興行を目指してしまったということですね。興行としてやろうとするなら、やっぱりタレントがいないと無理なんですよ。リングスというのは、要は前田日明っていうタレントに支えられた興行だったわけですよね。それを前田さん抜きでやるっていうのは……。

――当時、前田日明のいないリングスを観に行くかっていったら……ってことですよね。

若林 そうですね。「タレント」に代わるキーワードが、「競技」という価値観なんですけど、その頃はいかにして競技を確立するかというところまで至ってませんでした。政治的な問題もあって思ったとおりの試合が組めず、苦肉の策でトークショーとかも入れることになったりして。『格闘技シンポジウム』っていうのは、そこから僕の考えた興行タイトルだったんですけど、完全に失敗に終わって（苦笑）。イベントは準備段階ではお金を産まないので、早い段階から並行してライター業もやるようになるんですよ。会社からは給料をもらってましたから。だから当時は『格通』なんかでもチョロチョロ書かせてもらってました。

――治郎丸さんはもともとライターですし。

若林 そうです。あと僕はビデオを作れるんで、クエストや学研に企画を出して。こんなはずじゃなかったのにライター、こんなはずじゃなかったのにビデオ監督っていう感じでやってましたね（笑）。

――当時の『格通』の編集長は誰だったんですか？



前回の若林氏のインタビューに何度も登場し、注目を集めた初期リングスのプランナーにして、超重要人物・次郎丸秋穂氏（右から2番目）との記念撮影。読者からも「次郎丸さんのインタビューが読みたい」との声が多数届いているので近いうちにやりたいなと思ってます。お願いします、次郎丸さん！ ちなみに右端はサンボで活躍する若林氏の弟、次郎氏。

若林 谷川（貞治）さんですね。その当時は『格通』が業界のオピニオン誌みたいな感じでしたからね。プロレスは『週プロ』全盛期で、いわゆるターザン・谷川体制のときですね。

――ベースボールマガジン社が黄金時代の頃ですね。

若林 で、結局『格闘技シンポジウム』が大失敗に終わったことで、格闘技以外の業務もどんどんこなさなきゃいけなくなって、治郎丸さんからまったく違う取材をやれと言われて。

――たとえばどんな取材ですか？

若林 学研とつながりがあったので、学研から出ている女性誌の街角占い師マップとか（笑）。あとは某女性誌のダイエット特集で、ガイアジャパン旗揚げより全然前の長与千種さんにインタビューをしたこともありましたね。

――そんなことまで（笑）。途中で我に返らなかったですか？「オレは何をしてるんだろう？」って。

若林 我に返ったけど、無我夢中ですよね。子どもは二人もいるし。

――我に返っているひまはなかった、と。

若林 そうですね。あとはキングレコードのプロレステーマ曲CDを企画したり、テレビ番組の企画なんかもやりましたよ。昔、テレビ朝日に『プレステージ』っていう深夜番組があって、僕の企画でJWPのスタジオプロレス生中継なんていうのもやったりしましたし。

――たまに女子プロ企画をやっていたような気がしますね。

若林 もともとは、まだリングスにいた頃に『プレステージ』が格闘技を特集したことがあったんです。僕は前田さんのお付きでスタジオに行ったんですけど、そのときのスタッフとは付き合いが続いてて。谷川さんと知り合ったのはそのときですね。谷川さんが世界のいろんな民族格闘技を紹介する役割だったんですけど、じつは詳しいことは全然知らなくて……。

――んあ～！ さすが谷川さんですね（笑）。

若林 リハーサルのときにちょっと間違ったことを言っていて、僕は格闘技オタクでしたから「谷川さん、これはこうですよ」と全部教えてあげて、そうしたら、「よく知ってるぇ」なんて言われて、それで面識ができて。谷川さんは当時、編集長としていろんな団体と中立な立場にあったし、もの凄くバランス感覚のある人だったんで、その後は何かあるたびによく相談させてもらいましたけどね。

――石井館長とのつながりは谷川さんルートじゃないんですよね？

若林 違いますね。僕もリングス時代から面識がありました。でもそれ以上に治郎丸さんと石井館長は仲がよくて、K―1を始める前に「フジ（テレビ）に出す企画書をジロちゃん書いてくれ」っていう依頼があって、僕が治郎丸さんの代わりにその企画書を書いたんですよ。

――あ、そうだったんですか（笑）。

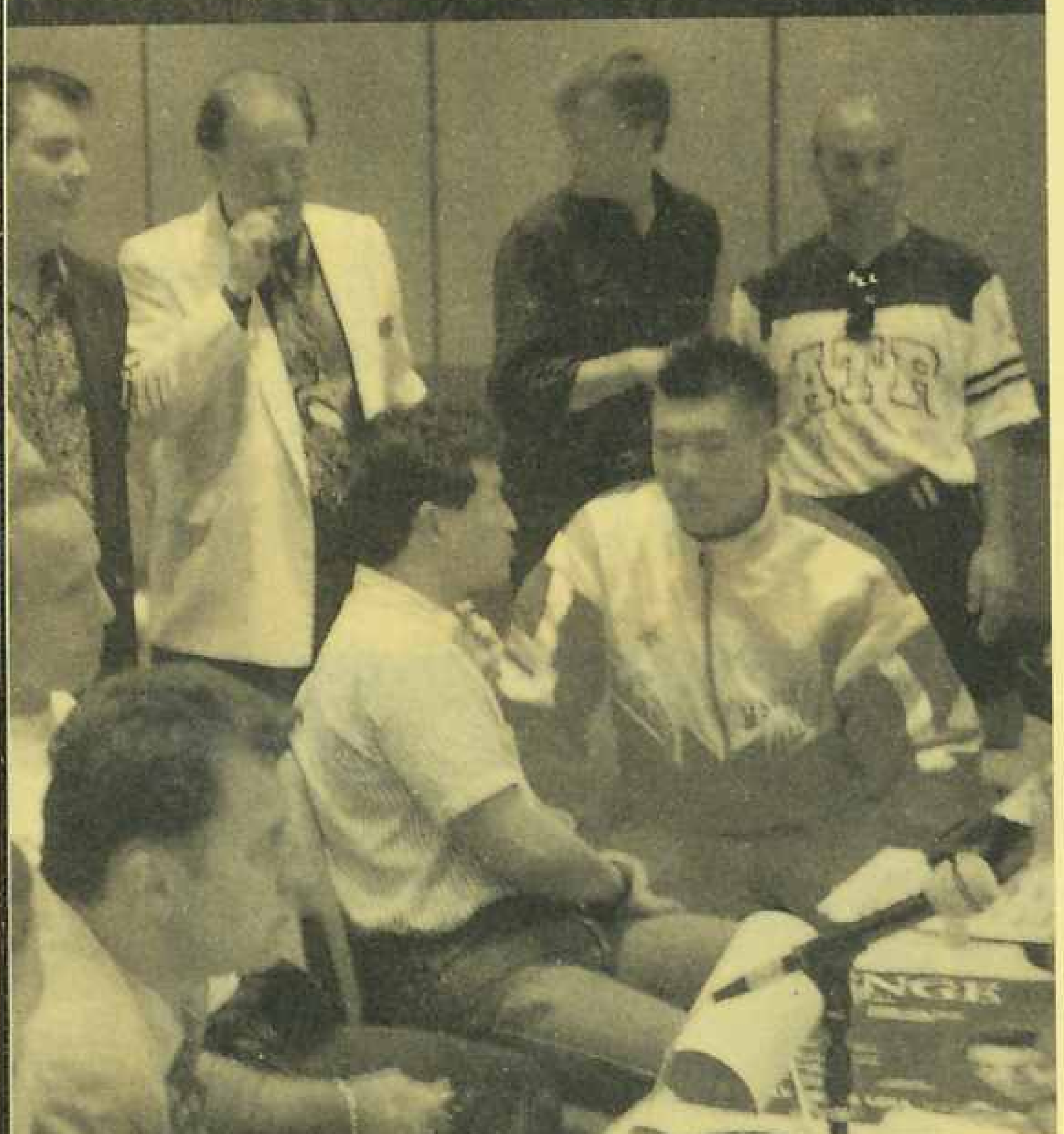
若林 僕の書いた企画書では「K―1」じゃなくて「F－ST」っていう名前だったんですけどね。「Fighting International Strongest Tournament」の略で。いま思うと、あの名前が通らなくてよかったと思います（笑）。

――ちょっと微妙ですね（笑）。

若林 その後、格闘技以外の仕事が増えたこともあって、結局、治郎丸さんの立ち上げたオフィス・ミツ







この写真は前号でのインタビューで話題に上がっていたK-1時代、佐竹の入場時にゴジラのぬいぐるみを着ていた若林氏と佐竹の2ショット。写真ではわからないが、このゴジラの中には若林氏が入っているとのこと。

いままで格闘技界で天才だと思ったのは、石井館長と佐山さんだけ

ルギを辞めることにしたんです。フリーで生きていく覚悟をしたんですが、館長から「K−1やらんか？」って誘われて、同じぐらいの時期に谷川さんから、「『格通』に入らない？」って言われて。

――よく誘われますねぇ（笑）。

若林　でもK−1も『格通』編集部も、本当にやりたいこととは微妙にズレてるわけじゃないですか。だからおいしいところ取りすぎて卑怯かなと思ったんですが、「フリーとして両方やらしてください」ってお願いして。いま考えると赤面なんですけど、若僧だった当時の僕的には「俺って有能？」みたいな過信や勘違いも多分にありましたからね（笑）。でも結局、その我がままを通させてもらったんですが。

――当時のK−1というのはリングスで感じたような"革命"の可能性は感じました？

若林　新しいものが始まるなという感じは同じでしたね。

――間近で接した石井館長というのはどういう人物でした？

若林　う〜ん。一言で言えば、天才だと思いますね。

――天才ですか！

若林　ええ。いままで格闘技界で天才だと思ったのは二人しかいないんですけど、その一人は石井館長ですね。館長は何かをビジネスとして成り立たせる才能が本当に溢れた人でした。何かを思いついたらすぐ行動するし、いい悪いの判断、切り替えがもの凄く早い。約1年間、間近で働かせてもらったんですが、いい意味であそこまで商才を持ってる人は、格闘技界にはほかにいないんじゃないかなと思いますね。やっぱり凄い人でした。

――ちなみにもう一人の天才は？

若林　もう一人は佐山（聡）さんですね。佐山さんは発想の天才です。どんどん新しいことを発想していって、いままでのことがどんどん古くなってしまうんだと思います。基本的に自分の過去には興味がないんです。タイガーマスク時代のマスクとかビデオとかも自分では全然持っていないと言ってましたし。思い出とかを大事にしている人は天才じゃないんだと思いましたね。

――へぇ〜、それはいい言葉ですね。佐山さんがよく言われるのは「いつも10年早い」ということですけど。

若林　10年先っていうか、佐山さんは物事の本質を見抜くのがもの凄く早いですね。前田さんも物事を根本から発想する人ではないと思うんですけど、AかBかの判断は天才的だと思うし、運もやっぱり凄いし、そういうのがやっぱりタレント、才能なんですね。

――でも、凄いですね。前田日明、石井館長、佐山聡っていう3人に深く関わってきたというのは。

若林　そうですね。その3人と知り合えたのは財産ですよね。一応、一瞬でも右腕にしていただけたので。

――正道会館のスタッフとして働きだしたのはいつ頃から何ですか？

若林　93年4月の第1回K−1グランプリ直前からですね。まだ東京本部を高田馬場に移転したばかりでした。フリーと言いつつも、正道会館のオフィスに机があって、事務所にずっといる感じでしたけどね。

――その頃はK−1もかなり勢いをつけ始めている頃ですよね？

若林　そうですね。最初はたいしたことは手伝ってなかったんですが、佐竹vsスタン・ザ・マンをメインに日本武道館で開催した9月の「K−1イリュージョン」は制作チーフのような役割をやらせていただきました。それこそ会場打ち合わせから演出打ち合わせに出て、マッチメイクも館長と相談して、おまけに当日はゴングまで叩いてましたから（笑）。

――ホント、なんでも屋ですね（笑）。

若林　まあ、ゴングは叩きたかったから叩いたんですけど（笑）。

――でも、その頃はイベントのエキスパートになってたんじゃないですか。

若林　あの1年間でかなり勉強させてもらいましたね。ただ僕はけっこうストレートにモノを言うほうなんで、人間関係でぶつかったりもあって、結局12月の「K−2グランプリ」を最後に正道会館を離れることになって。原因は僕にもあると思うんですが、リングス、ミツルギ、正道会館ときて、もう団体の仕事はいいやという気持ちにはなってましたね。

――若林さんがK−1を手伝うようになった頃にはパンクラスが旗揚げしますよね。

若林　パンクラスの旗揚げは、正道会館のスタッフとして石井館長と一緒に観に行ってるんです。旗揚げ戦を観て正直、「うわっ、やられちゃったよ！」って。ガチンコでUWFをやる日がついに来たんだなと思いましたね。

――じゃあ、かなりの衝撃を受けました？

若林　衝撃でしたね。パンクラスは最初の3回ぐらいは、視察と称して全部観に行きましたよ。その後『格通』で記事も書いてますし、尾崎（允実・社長）さんのインタビューもやってますからね。いまはなき『プロレスの達人』って雑誌で（笑）。

――当時のパンクラスには、たとえばリングスとかK−1で感じた何か起こるかもしれないという予感はありましたか？

若林　可能性はあるかもしれないなと思いました。ただ、僕がリングスに入ったときっていうのは、まったく新しい何かが始まるような感じがしたんですよ。それはK−1の最初もそうでしたよね。これまでになか

石井館長は1回目のUFCを観た直後「日本でやる」って言ってました

った新しい世界ができるんだっていう。パンクラスは新しい世界のスタートというより、UWFから始まったものがここまで来たんだなという感じでした。

——そう考えると、パンクラスと同じ時期にスタートしたUFCのほうがまったく新しい世界を感じたんでしょうか?

若林　そうですね。UFCは最初の1回目は現地に観に行こうとしたんですよ。館長からもOKが出ていたんですけど、「ANDY'S GLOVE」(※93年11月5日、後楽園で開催されたアンディ・フグ初のグローブマッチが行なわれたイベント。アンディは村上竜司に1ラウンドKO勝ちを収めた)っていう大会と日程が近くて行けなくなっちゃったんですよね。で、大会後に「凄い」っていう話を谷川さんや安西(伸一)さんから聞いて、無理して行けば良かったな、と。

——『格通』の名物記者だったアンザイ・グレイシーから。

若林　すぐにビデオを入手して、石井館長と観たら、その段階でもう石井館長は「おもしろい! 日本でやる!!」って言いだしたんですよ。まず「K—2グランプリ」のワンマッチにホイス・グレイシーを呼んで、西(良典)さんとやらせようっていう話になって。その交渉をするために僕、ロスのグレイシー・アカデミーに電話して、ホリオン(・グレイシー)と話をしましたからね。そのときはにべもなく断られましたけど。

——しかし、行動が早いですねえ(笑)。

若林　館長は本気で取り組もうとしてましたから。いろいろ話をしているときに「総合をやるには誰が必要やねん?」って聞かれたから、「総合なら佐山さんですね」って答えた覚えがあります。「俺はK—1のプロデューサーだからやるわけにいかんやろ。だからこれは若さんが表に立ってやったらええやん」なんて言ってもらったりもしました。

——この業界って新しいものに拒絶する人が多いんですけど、館長はやはり鋭いですね。

若林　やっぱり見る目というか、そのへんの嗅覚は全然違いますよ。館長のことをいろいろ言う人はいるかもしれませんけど、そういう面は本当に凄いと思いました。

——若林さんがUFCに感じた衝撃というものは、グレイシー柔術に対してですか? それともUFCというイベントに対してですか?

若林　グレイシーに関して言えば、そこまで大きな驚きはありませんでしたね。ロマンは感じましたけど。当時は高専柔道を知っている人ってまったくいなかったんですけど、僕は古武道マニアだったから大学時代からその存在を知っていたんですよ。日本武道館の監修で出てる高専柔道のビデオも持ってましたし。

——現在のパートナーの中井祐樹さんも高専柔道出身なんですよね。

若林　そうなんです。だから、僕は「高専柔道じゃん、これ」って当時から言ってましたね。UFCというイベントに関して言えば、総合格闘技の競技化っていうことを夢想してきた人間としては、あのグラウンドパンチは衝撃でしたよね。寝技での打撃を解禁するなんて、その頃は考えもしなかったので。

——バイオレンスですもんね。

若林　「グラウンドパンチなんてやっていいの?」っていう感じでしたよね。正道会館を辞めた直後だったんですけど、第2回のUFCは知り合いだった市原海樹選手が出ることもあって現地まで観に行きましたもんね。

——残念ながら市原さんはホイスに敗れたわけですけど、戦前は勝つと思ってました?

若林　勝ってほしいと願ってました。でも、どうなるかわからなかったですね、当時は。あの第2回大会は16人でトーナメントを行なった唯一の大会で、もの凄く残酷な試合の連発でした。パトリック・スミスのグラウンドでのヒジ打ちで顔が陥没した選手がいたり、セコンドのタオル投入がルールにないために、相手のオーランド・ウィットが失神したあとも、袈裟固めに抑えたレムコ・パドゥールがその頭にヒジ打ちを連打したり……。とにかくバイオレンスで、レフェリングやルール面での問題がもの凄くあったんです。だからこれは無理でしょうというのが、素直な感想でした。

——それはイベントを続けることがですか? もしくは日本に持っていくことがですか?

若林　両方ですね。このままだと、いつ深刻なケガ人や死人が出てもおかしくないなと思っていました。UFCを観た日の夜は遅くまでホテルの部屋で、担当することになっていた『格通』の原稿を考えてたんですけど、だいぶ遅くなってから同じ日に行なわれた日本のキックの興行で事故があり、選手が亡くなったという連絡が入ったんです。面識のある、若くて才能のある選手の突然の訃報に打ちのめされて、本当にショックを受けて、格闘技界に入って初めて泣きました。UFCと日本の事故と、目の前の二つのことが重なって、人が死ぬものを競技にしちゃいけないんだ、そういうことに手を貸しちゃいけないんだって、強く思いましたね。

——でも、UFCの登場によってだいぶ日本の格闘技シーンも変わりますよね。

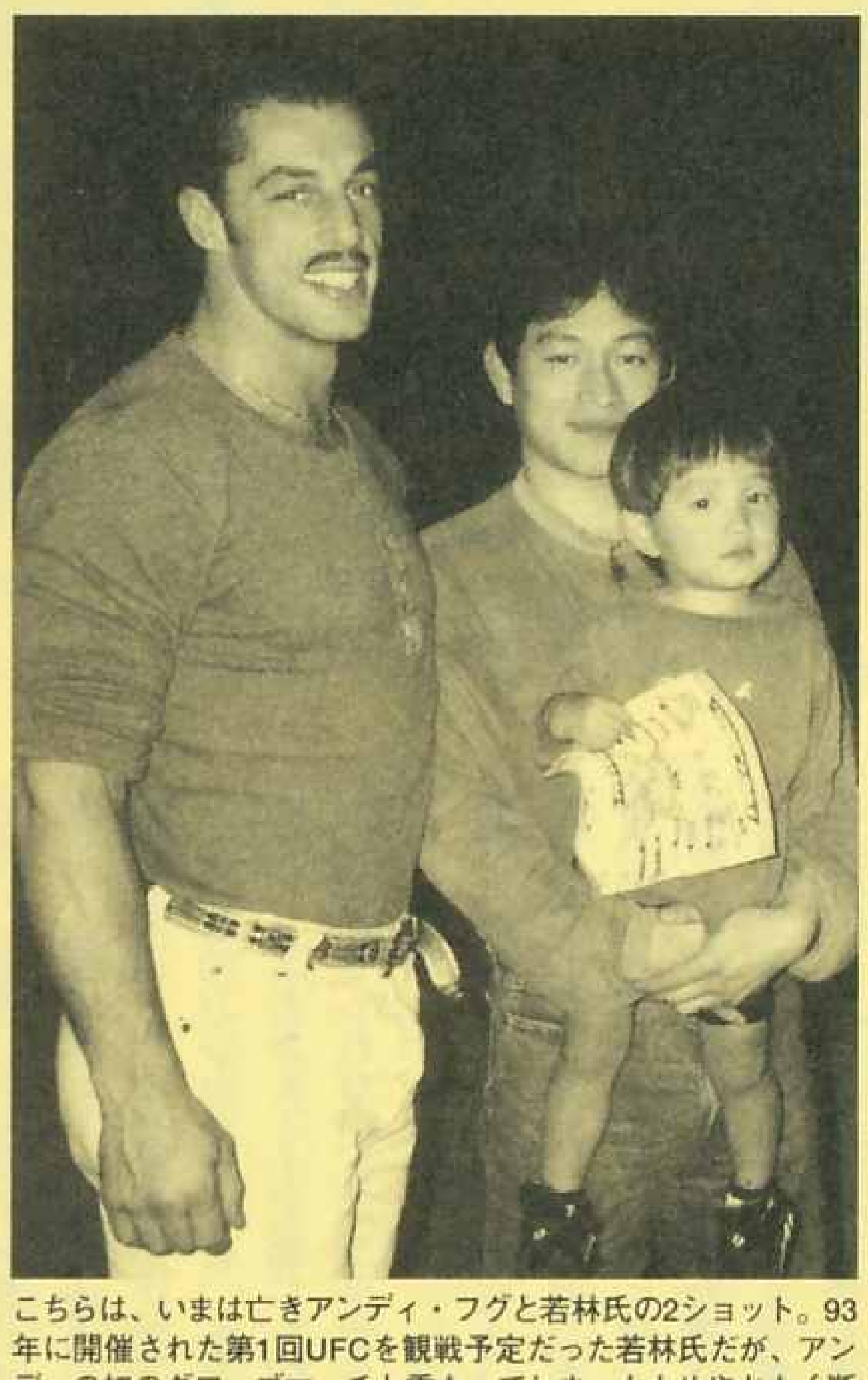
若林　そうですね。新しい何かが始まるかもしれない予感は、確かにありました。でも、リングスのときの何かが起こるかもしれないっていうのは凄いプラスだったんですよ。ロマンがあるっていうか。それはリングス・ロシアの存在が大きいかもしれませんけど。なんかロシアにはロマンを感じるんですよね。

——あ、それはなんとなくわかりますね。

若林　でも、アメリカは凄く現実的じゃないですか。だから、UFCによって何かが始まるかもしれないけど、何か危ないものが、取り返しのつかないものが始まっちゃうかもしれないって思いました。まあ、その段階で僕はもう団体や興行には一切関わらず、フリーライターとビデオ監督をやって生きていくしかないだろうって思って、布施(鋼治)さんと一緒に高田馬場に仕事場を作って、新しい一歩を歩み始めていたんです。にもかかわらず、僕が再び興行に携わることになるのは、リングス時代から仲良くさせていただいていた西(良典)さんがきっかけなんです。

——そうだったんですか?

若林　リングスのどの試合のあとだったかよく覚えてないんですが、西さんに「なんで私の試合はつまらないんでしょうか?」って聞かれたんですよ。「それは西さんの試合だけがガチだからです」って答えたら、西さんは「やっぱりそうですか」って。生意気かなとも思ったんですが、「でも、西さんにはそうじゃない試合はやってほしくないんです」って言ったら、ニッコリ笑って「道場で



こちらは、いまは亡きアンディ・フグと若林氏の2ショット。93年に開催された第1回UFCを観戦予定だった若林氏だが、アンディの初のグローブマッチと重なってしまったためやむなく断念。ちなみに若林氏が抱いているのはお子さんとのことです。



教えてる子どもたちに嘘はつけませんから。大丈夫ですよ」と答えてくれたんです。

—そんなことがありましたか（笑）。

若林　で、その西さんから「若林さん、ジャケットを着た総合の大会をやろうと思っているんですよ」って相談されて、それで「トーナメント・オブ・J」を手伝うことになったんです。

—ありましたねえ。「トーナメント・オブ・J」。

若林　僕は当時から、ジャケットの総合格闘技というのは絶対にアリだと思っていたんです。ブラジリアン柔術も流行りだしていたし。「何かいい名前ありませんか」と言われて、柔術でジャケットだから、当時スタートしたばっかりだったJリーグから"J"をいただいて、『トーナメント・オブ・J』にしましょう」なんて提案したら、そのまま決まっちゃって。

—かなりおもしろかったですよね、『トーナメント・オブ・J』は。

若林　そうでしょう？　ビデオ監督も僕がやったんですよ。僕の関わった大会の中でも、傑作の一つなんですけどね、『トーナメント・オブ・J』は。

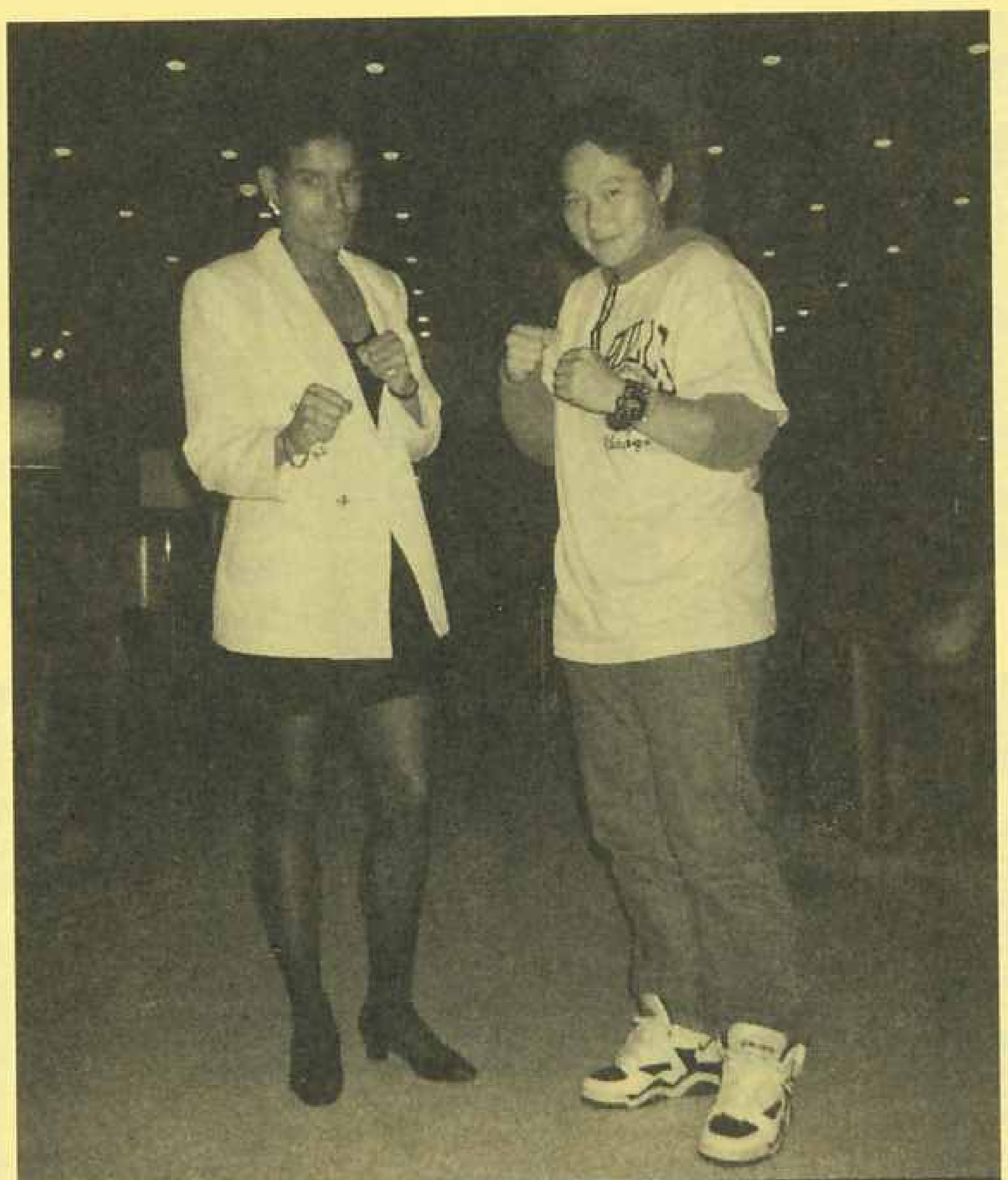
—いま活躍している選手たちもたくさん出てますし。

若林　長崎でやった第1回大会では郷野（聡寛）選手が総合デビュー戦をしてます。

—TK（髙阪剛）やイーゲン井上とかも出てましたし。

1回目の『バリジャパ』の、ある一件で、前田さんに絶縁されました

若林　それは東京でやった第2回以降ですね。大道塾の山崎進選手、桜井隆多選手、須田匡昇選手、プロレスラーになった村上和成選手、美濃輪（育久・現ミノワマン）選手も出ましたし、あれは、いまやってもおもしろいと思いますね。最初の長崎での『トーナメント・オブ・J』は僕以外に、福昌堂のライターだったM氏が選手のブッキングを手伝っていたんですよ。





取材を通じ、女子プロレス界とも接点のあった若林氏はK-1時代、当時"女子最強"と言われたオランダのルシア・ライカとガイアジャパン旗揚げ前の長与千種との一戦を計画していたという。現在40歳のライカは女優としても活躍中だ。

—福昌堂っていうのは『フルコンタクト空手』を出している出版社ですよね。当時の編集長は山田（英司）さんで。

若林　そうです。で、その年の『バーリトゥードジャパン94』（以下『バリジャパ』）は、福昌堂の山田さんたち仕切りだったんですよ。ヒクソンを連れてきたUSA修斗協会代表の中村頼永さんと、山田さんが旧知の中だったこともあって。でもヒクソン以外のブッキングが難航しているという話を仲良くなっていたM氏から聞いたので、『トーナメント・オブ・J』つながりで手伝うことになったんです。僕にはK-1時代に築いた外国人選手との友好関係もあったんで。結果としてヒクソン以外の外国人選手は全員、僕のブッキングした選手になったんですけど、それが原因で前田さんの逆鱗に触れるんですよ。

—えっ、それはなぜですか？

若林　一度『バリジャパ』出場が発表されて、すぐに取り消しになるウィリー・ピータースの件です。僕はブッキングをビジネスとしてやっていく気は全然なくて、知り合いのM氏を助けるボランティアのつもりだったんです。『バリジャパ』の運営母体がどうなっているかもよく知らず、知ってるのも連絡するのもM氏だけ。当然ギャラなんて発生してなくて、実費の国際電話代ぐらいしかもらってませんでした。いま思えば、それが間違いの元だったんですが。あちこちに選手探しを依頼してたら、オランダの知人から「ウィリー・ピータースが出たがっている」という話が舞い込んできたんです。僕が「ピータースは絶対にリングスと契約が残っているはずだ」と言っても、相手は「ドールマンが大丈夫だって言っているから」と譲らないので、つたない英語ですけど直接ドールマンと話させてもらったんです。すると「大丈夫だ」と言う。そのままをM氏に伝えて、「でも、ピータースは出られるって言ってますけど、リングスには確認したほうがいいと思いますよ」って言ったんだけど、まったく確認しないで「ウィリー・ピータース参戦」って出しちゃった。そしたら案の定、リングスとは契約が残っていて、大騒ぎになっちゃった。

—当然、前田さんは激怒されるわけですよね？

若林　もちろん（笑）。完全に「若林がピータースを引き抜こうとした」ってことになってましたからね。僕もちょっと迂闊でした。その直後にとある会場で前田さんに会ったときに挨拶したら、「消えろ！」って言われましたから。そこから前田さんとは絶縁になったんですけど。

—そんなことがありましたか。

若林　はい（苦笑）。1回目の『バリジャパ』は当日の仕切りも悪くて……。僕は当日は『格通』の記者として試合を観てただけなんですが、大会直後に会場の隣のホテルでの反省会には呼ばれて、「何やってんだ」なんてさんざん文句を言われて。こっちとしてはわけのわからないまま善意で、しかもギャラももらわずにいろいろとやってあげて、にもかかわらず失敗の原因はおまえだなんて言われて、さすがに「ふざけんな！」って怒りましたよ。

—それは怒りたくもなりますよね。

若林　運営組織がメチャメチャだったぶん、いろんな人の責任をなすりつけられちゃったんでしょうね、おそらく。そんなこともあって、とにかく修斗の手伝いはもうやらないと思ってたんですけど、一週間後ぐらいに佐山さんから直接電話がかかってきて、「一回会ってください」って言われて。新宿のホテルでお会いしたんですけど、佐山さんから「手伝ってください」って言われたんです。

—今度は佐山さんですか（笑）。

若林　さすがに初めは断りました。



『バリジャパ』のことは本当に頭にきてましたから。ただ大会後の反省会でいろいろ言ったのは佐山さんじゃなかったんですよ。その反省会には、佐山さんは出席してませんでしたし。僕としては当時から総合格闘技を競技化するなら、当時はどん底人気でしたけど、シューティングしかないと思っていたんで、最終的に口説かれてしまいまして（苦笑）。

――佐山さんは憧れの人だったわけですよね？

若林 そうなんですね。僕としては前田さんとも付き合いがあって、石井館長とも付き合いがあって、いわば最後の憧れの人だったわけですよ、佐山さんが。初代タイガーマスク全盛期をリアルタイムで観てて、スーパータイガーが出るから旧UWFを追いかけてた。その佐山さんが俺に頼んでいるのかって思ったら、それはファンとしては、やっぱりねえ（笑）。性懲りもないんですけど。

――わかります（笑）。

若林 それで、とりあえず僕が条件として挙げたのは「『バリジャパ』も必要なら手伝いますけど、できれば修斗の公式戦のほうをやらせてほしい」ってことだったんですよ。あと当時は修斗のビデオがまったくリリースされていなかったんで、僕の個人会社でビデオをやらせてくれということ。その二つを条件に、正式に手伝うことになったんですよ。それが修斗との初めてのつながりですね。

――ようやく修斗にたどり着きましたね（笑）。『バリジャパ』よりも修斗の公式戦を手伝いたいっていうのは、どういう意図で？

若林 『バリジャパ』はあくまでイベントであって、やっぱり競技じゃなかったですからね。94年7月に行なわれた最初の『バリジャパ』の直前に、全日本アマ修斗選手権の第1回大会が開催されているんですよ。このときはライターとして取材で観に行ってるんですけど、この大会が初めて外部からも選手を募集して開催したオープンなアマチュアのトーナメントだったんです。そこで上位になった選手をプロにするっていう話を聞いて、「俺がやりたかったのはこういうことなんだよな」って凄く感動したんですよね。それで佐山さんに口説かれたときに、総合でプロとアマのリンクする競技たりえるのは修斗しかないっていうのが、僕の中に軸のようにあったんですよ。

――ようやく、ホントにやりたいものにめぐり逢えた、と。

若林 そうですね。僕がそのとき関係していた『トーナメント・オブ・J』と、北斗旗選手権の大道塾、福岡の真武館が開催していた『全日本格闘技選手権』、そして修斗の4つを全部リンクできれば、少なくとも僕の考えていた総合格闘技の競技化に結びつくんじゃないかって、当時は思ってましたね。

――凄いですね。治郎丸さん、前田さん、石井館長ときて、ようやくそこにたどり着くっていうのは。

若林 そうですね。めぐり合わせですよね。

――めぐり合わせとはいえ凄すぎますね（笑）。実際に修斗に関わるようになったのは、佐山体制後になるんですか？

若林 僕が修斗と深く関わるようになったのが94年の9月大会からで、佐山さんが修斗を去ることになるのが96年の7月ですから、佐山体制の最後の約2年間はプランナーをやらせてもらってます。よく考えると、リングスや正道会館の在籍期間より長いんですよね。そのあいだにいまの修斗の大枠は完成してたんですよ。外国人を呼ぶルートがある程度確立されて、グラウンドパンチを解禁して、コミッションができて。振り返ってみると……、これは偶然なのかもしれないですけど、佐山さんが修斗を去るのに合わせるように、それらが急ピッチで成立していった気もするんですね。

――それはどういう意味ですか？

若林 佐山さんがプロ修斗公式戦のリングに上がったのは『バリジャパ96』の前の5月の後楽園大会なんですよ。このときは「プロ修斗7周年記念興行」と銘打った興行だったんですけど、7周年なんて普通やらないじゃないですか。

――やらないですね（笑）。

若林 その興行で歴代のチャンピオンを全部集めて、リング上で佐山さんと記念写真とか撮ってるんですよ。その2ヵ月後に、佐山さんが修斗からいなくなるなんて夢にも思っていないのに。しかもそれは、修斗コミッションができて初めての興行でした。だから競技としての基礎が完成したあとに、佐山さんが修斗を去ったかたちなんですよ。

――当時の佐山さんは興行と競技の兼ね合いでかなり苦しんでいたみたいですけど。

若林 興行的にはまだ全然ダメダメでしたからね。赤字興行が続いてましたし、赤字が続けばお金を出していたスポンサーの人も悩むでしょうし。そういう「きしみ」みたいなものはありましたよね。まだ修斗人気のブレイク前でしたから。

――そのためなのか、佐山さんは当時、新日本のリングでプロレスをやったりもしてましたよね。

若林 修斗を去る1年前ぐらいから、佐山さんから僕は「もしかしたらスポンサーが離れるかもしれない。でもそのときは自分がタイガーマスクをしてでも金は稼いでくるから大丈夫」と言われてました。あと一つは、ケンドー・ナガサキさんが修斗に出たことがありましたよね？

憧れだった佐山さんに誘われたら、やっぱり断れなかったです（苦笑）

――キック出身のジーン・フレージャー相手に秒殺負けをしましたね（96年9月26日、駒沢体育館）。

若林 同じ興行の中のエキシビションで、佐山さんが小林邦昭さんをノックアウトしちゃったんですよ。

――エキシビションにもかかわらずKOしちゃったんですよね（笑）。

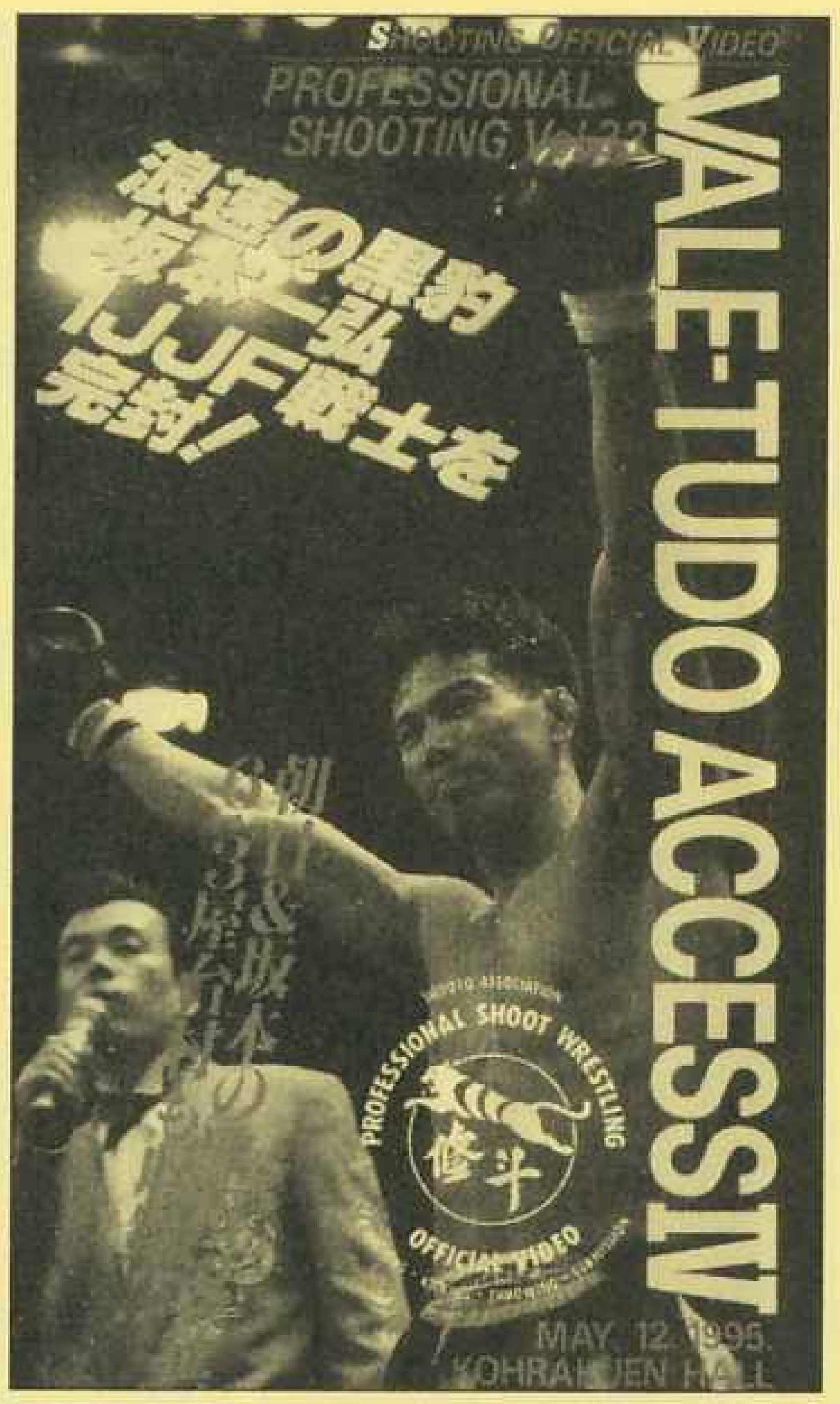
若林 小林さんは佐山さんを助けるために、いろいろと新日に無理言って出てくれたらしいんです。にもかかわらずそんな結果になって、新日で小林さんの立場がなくなってしまった、と。

――新日本的には当然「ふざけるな！」ってなるでしょうからね。

若林 だから佐山さんが新日本に上がったのは、そんな小林さんに恩を返すためだったって僕は聞いてるんですよ。

――当時の修斗では佐山さんがプロレスのリングに上がったということで、選手からもかなり批判的な声が出てたみたいですからね。

若林 そうですね。ただ佐山さんと選手っていうのは、先生と弟子の関係じゃないですか。佐山さんの立場からすれば、裏は自分がなんとかするからおまえたちは練習しろっていう気持ちが強かったと思うし、いちいち事情説明したりすることはなかったと思うんです。でも説明がないせいで、下の人間は単純に「裏切られた」って思った部分はあったと思うんですよ。いわば親子のすれ違いのような、悲しい気持ちのすれ違いですよね。



こちらは若林氏が手掛けた95年5月に開催されたシューティングの大会と朝日昇＆現サステイン代表の坂本一弘氏の欧州遠征の模様が収められたビデオ。若手時代の佐藤ルミナの試合も収録された貴重なこのビデオを読者1名様にプレゼント。詳細は63ページ参照!!



選手を育てずに、お金で引き抜くイベントは続きません、絶対に！

——佐山さんも、いろいろと葛藤があったんでしょうね。

若林　そう思います。佐山さんはゼロから修斗を立ち上げて、借金をはじめすべてのことを背負ってやられてきたわけですから。

——当時は若林さんも佐山さんに対して懐疑的な目で見てたところはあったんですか？

若林　僕は弟子じゃなかったし、外部からプランナーとして入った人間だったので、佐山さんは僕にはいろいろ説明してくれたんだと思います。そういう意味では僕の力不足も原因の一つかもしれません。僕がもっといろんな人に説明できていれば、それほど批判的な声は出なかったかもしれない。でも当時は僕は外から入ってきたばかりだったので、旗揚げから苦労してきている初代シューターにはまだまだ遠慮がありました。

——結果的には、佐山体制から変わってから修斗は急激に上昇したイメージがありますけれども。

若林　佐山さんが抜けたことがブレイクの理由ではないです。逆に佐山さんが去る前にやっていた改革の成果が出たのが、去ったあとだったっていうことですよね。

——そういえば、グラウンドの顔面パンチの導入も佐山さんが決めたんですよね。

若林　顔面パンチ解禁に関しては佐山さん以外、僕も含めて全員が反対してましたからね。で、僕は佐山さんから説得されたんですよ。「技術があれば問題ない」ってとうとうと。いま思えばそのとおりだし、全部そうなりましたからね。

——グラウンドパンチを導入していなかったら日本の総合は……。

若林　（さえぎって）全然、遅れてましたね。間違いなく。修斗のブレイクもなかったし。だから、あの時代に、ちゃんと頭の中で技術を理解した上で判断ができたことが凄いですよね。僕にはそれができなかったから。

——そういったところが天才と評されている部分なんですかね。

若林　ホントに天才だと思います。あれはまさに佐山さんにしかできない決断でしたね。

——それに、決断してもなかなか成果が出るには時間がかかりますし。

若林　かかると思います。選手がすぐには育たないですし、ルールに慣れることも必要ですし。でもルールを定めて大会をやっていけば、それに順応した選手は必ず生まれるものです。選手というのは育つものなんですね。そしてたくさん選手を育てれば、必ずその中からスターは生まれる。その成果が出たのが佐山さんが去ったあとだったっていうだけの話ですよね。

——いわゆるそれが（佐藤）ルミナさんだったり、（桜井）マッハさんだったり。

若林　そうですね。佐山さんが去った直後に行なわれた第3回全日本アマ修斗選手権でプロになったのが、マッハや宇野薫選手でしたからね。

——若林さんにとって理想の団体に携わるようになったわけですが、PRIDEという大きなイベント、興行論を軸にしたイベントがカルチャーとして定着していったわけですけど、PRIDEに関してはどういう目でご覧になっていたんですか？

若林　最初は「続くのかな、これ？」っていう感じでした。確かに髙田vsヒクソン戦ってプロレスファン的にはビッグマッチだったじゃないですか。でも格闘技的な目で見たら、髙田さんが勝つのはまず無理じゃないの？っていうのはありましたよね。とにかくその他のマッチメイクもルールも進行も、すべてがメチャクチャだったし、イベントとしてはとても定着するようには思えなくて。

——それはリングスとかK－1とか興行論によるイベントに携わってきた若林さんの目から見るといいかげんだったということですか？

若林　まるっきりいいかげんでしたね。格闘技として続けていくなら競技志向にならざるをえないはずだし、選手を育てているわけでもないんで。だから、PRIDEだけじゃなくて、K－1も最初のままのかたちでは続かないと思ってました。選手を育てずに、お金で引き抜いていくものは続きません、絶対に。競技として運営していくことと、企画書を作って営業してスポンサーをつかんでいくというのは、まったく別ベクトルですけど、両方とも必要なことですよね。で、僕らが競技運営にやや傾いた運営をしているところに、逆のベクトルの極端なものがドカンと出てしまったので、正直やられちゃった感はありましたけどね。

——修斗でも興行論を軸としたイベントをやるという選択肢もあったと？

若林　それもありましたよ。やっぱ

ワ〜オ！（株）クエスト提供、若林氏関連DVDプレゼント!!



若林様が手がけたDVDを株式会社クエストのご厚意により読者1名様にプレゼント。まずは2月20日発売の青木真也DVD!!



続いては絶賛発売中の"足関十段"こと今成正和のDVDです！足関のスペシャリストを目指すなら見なきゃ嘘だよ〜ん！



最後は若林氏のパートナー、中井祐樹DVDだ。希望商品のタイトルを明記の上、158ページを参照してご応募ください！



り選手のためになることだと思いますしね。僕は選手を育てる人間として生きてきたし、今後もそうしたい気持ちなので、アマ修斗に出てくれた子が修斗じゃなくても有名になったり、成功したり、リッチになるのは嬉しいんですよ。それに本当にちゃんとしたものなら、選手にしても、スタッフにしても、メインの誰かがいなくなっても絶対なくならないし、続くものだから、そういうものに修斗がならなくてはいけないという思いのほうが強かったので、焦りはなかったですけどね。

―いわゆる、前田日明がいないリングスでも成功するような団体じゃなきゃいけないということですね。

若林　そうです、そういうことです。

―川尻（達也）さんにしても青木（真也）さんにしても、PRIDEに上がることによってなかなか修斗に戻れなくなっている状況っていうのもありましたよね。

若林　まあ、そのへんはマッチメイクやギャラの問題ですよね。

―修斗はいまのスタンスでやっていくっていうことでいいんですかね。

若林　いや、それは大きいところを目指さなきゃダメですよ。いまはまだプロモーター的な力が足りないっていうだけの話ですよ。当然、プロモーターである以上目指すべきですけれども、ただ……。

―派手な方向に行ってまでやる必要はないってことですか？

若林　いや、行くのもありじゃないですか。でもそれをやらなきゃならない義務はないのもまた事実なんですよ。プロモーターごとの個性もありますから。ただ、よくないことや背伸びをしすぎてまでやる必要はないなと思いますね。とにかく、上から作っていくか下から作っていくかですよね。

―K-1やPRIDEは上からで。

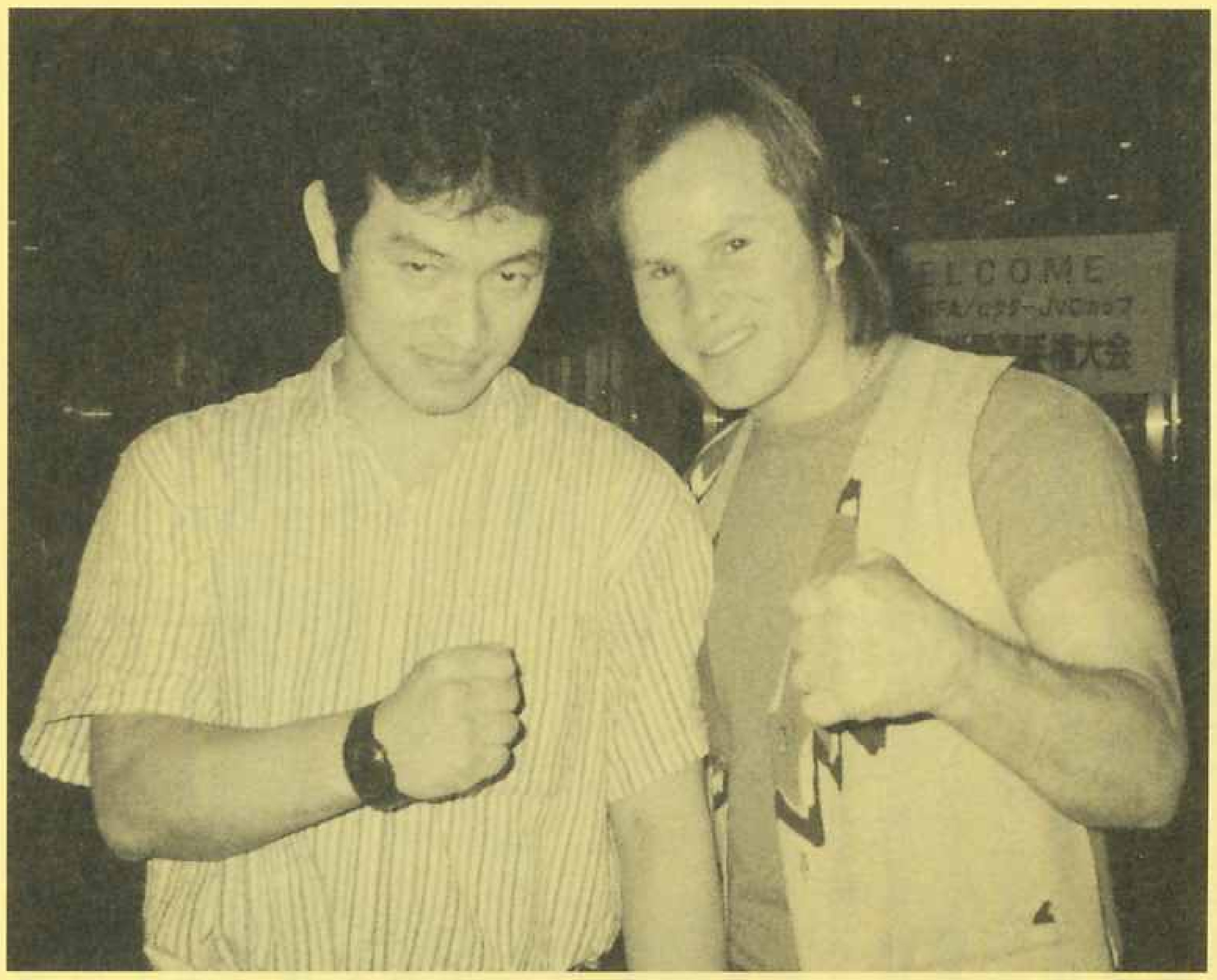
若林　僕はさんざんいろんなところを見てきた中で、下から作っていかなければならないっていう発想でやってるんで。

―そういう意味では、修斗のアマチュア普及委員長として全国を飛び回っているという、いまの状況は若林さん的には充実してるんじゃないですか？

若林　そうですね。最初に考えていたようなことが実現しつつありますよね。格闘技雑誌では、日本の総合格闘技はこれからどうなるんだとか、海外情報とかは溢れているんですけど、なかなかアマチュアには目を向けてくれないんですよね。雑誌はやっぱりいいとこ取りだから、仕方がないと思うんですけど。中途半端にわかったフリされても困るし（苦笑）。

―それは『GONKAKU』や『格通』もわかってないですかね？

僕ら世代はUWFを信じていたから裏切られた思いが凄く強いんです



わかばやし・たろう■1965年7月8日、大阪府出身の北海道育ち。日大芸術学部を卒業後、電通プロックスを経て92年にリングスに入社するも数ヵ月で退社。その後、立ち上げ当初のK-1でプランナーとして活躍しながら、同時にライターやビデオ制作も手がける。94年からは修斗に携わり、現在は日本修斗協会事務局長＆アマチュア普及委員長として全国を駆けめぐりつつ、番頭として中井祐樹とともにパラエストラ東京を運営。ちなみに上の写真は若き日の若林氏とベニー・ユキーデだ。若林太郎ブログ→http://blog.livedoor.jp/ban10tyo/

若林　はい。全然見えてない気はしますね。

―じゃあ、ウチはもっとダメですね（笑）。

若林　むしろ、『kamipro』とかはそこをまるっきり無視してるんで、気持ちがいいぐらいですね（笑）。

―ダハハハ！　ウチもアマ修斗とかも取材しなきゃダメですかね（笑）。

若林　いや、無理しなくてもいいっすよ（笑）。

―はい。無理しません（笑）。ちなみに最近はプロレスとかは観ます？

若林　テレビとかもあまり観ないし、さすがに『週プロ』とかを見ることもありませんからね。地方に行ったときに時折、ホテルのテレビでなんとなく観るぐらいですかね。ただ、『kamipro』は立ち読みしたり、毎号じゃないにしても買ったりしてるんで、『ハッスル』の試合写真はパラパラ見たりしますね。本文はまったく読みませんけど（笑）。

―『ハッスル』はたぶん修斗とはかぶらないでしょうからね（笑）。

若林　でも写真見てるだけで、プロレスはこういうふうな方向に行くしかないんじゃないのかなと思うんですよね。僕らの世代っていうのはプロレスが真剣勝負だって信じられた、ある意味、幸せな世代なんですよ。ひどい言い方をすれば騙されたわけですけど。お金もたくさん使ったし、時間もたくさん使ったし、いい意味でも、悪い意味でも幻想をつかまされた時代だったじゃないですか。だから、そういう意味では僕らの世代は、格闘技とプロレスの境界線に対しては神経質ですよね。

―修斗でいえば、（佐藤）ルミナさん世代までは懐疑的ですよね。

若林　そうでしょうね。僕らの世代はUWFも凄く信じてたから、そのぶん裏切られたという思いは強いんです。時代的に仕方がなかった部分もあるのかもしれないけど、あれは一種の詐欺だと思うんですよ。

―詐欺ですか？

若林　最初から「これは手品です」って言ってくれればいいものを、「これは超能力です」って言って手品をずっと見せられてきたわけだから。それはやっぱりダメ。時代を理由にするのは、やった人の言い訳でしかないんですよ。僕は手品を超能力だって見せられた世代なんで、そういうギミックにアレルギーがあります。でも、いまの若いファンは最初から手品だってわかってるから、おもしろきゃいい、と。そういうふうに時代が変わった感がありますよね。

―線引きされたっていうのもありますよね。

若林　完全にされちゃいましたよね。そういう意味では、僕らが目指していた世界が実現しちゃったんでしょうけどね。だからこそ、「ノアだけはガチ」っていう言葉がおもしろいわけじゃないですか（笑）。

―確かに（笑）。

若林　でも時代の揺り戻しを許さないためにも、僕らの世代はその歴史を語るべきだと思うし、僕は短いあいだとはいえリングスに人生を懸けたんで、それに関しては少しは言う権利があると思うんですよね（笑）。……しかし、こんな昔話で記事になるんですかね？

―充分です！　なぜ若林さんがプロ修斗やアマ普及に力を入れているのか、興行を通してよくわかりました！

【07年12月28日／都内・新宿の喫茶店にて収録】



この少年たちがマット界を変える！

2008年、『K-1 WORLD YOUTH』始動!!

これぞK-1新機軸！　谷川代表が「ジャニーズJr.みたいにしたいなぁ～」とほくそ笑むのが、07年大晦日『Dynamite!!』で話題となった『K-1甲子園』の世界拡大版、『K-1 WORLD YOUTH』だ。世界中の10代のファイターがキャプテン翼ばりに大集結、団体対抗戦を行なうというニューコンセプト。“主役”のHIROYAはもちろん、早くも人気沸騰のイケメン・才賀紀左衛門、実力ナンバーワンの雄大、まだ見ぬ強豪の筆頭である藤鬥嘩裟。2008年、この少年たちから目を離すな！

構成／真下義之



HIROYA



KIZAEMON SAIGA



YUDAI



TSUKASA FUJI



K-1さわやか路線に異常アリ!
驚異のスポ根師弟が再始動!!

藤門嘩裟

WITH 加藤会長
(藤ジム)

み〜んな、ふっ飛ばしちゃう！　07年大晦日の『K-1甲子園』にド直前で、無念の欠場となってしまった“悲運の15歳”藤門嘩裟、そして“魔裟斗を育てた男”であり、ターザンばりの炎上キャラが大人気の加藤会長がまたまた登場！『K-1 WORLD YOUTH』、そしてHIROYA戦に関してズバリ直激！

聞き手／真下義之　撮影／吉場正和

参戦はなくなると思ってた！ うまくいきすぎている部分があったしね（会長）

——加藤会長、鬥嘩裟くん、今日もよろしくお願いします！

会長 （鬥嘩裟くんとやや離れた場所に座って）じゃあ、始めてください！

——あれ？ どうしてそんなに離れてるんですか？

会長 ちょっとね、今日は練習のことでおたがいに気分を壊しているんですよ。見てくださいよ、この顔を（と鬥嘩裟くんを見やって）。

鬥嘩裟 ………（ムスッとした表情で）。

——あら、鉄壁の師弟コンビに亀裂が入っちゃったんですか？

会長 ま、そうですね（アッサリと）。

——そう言わずにもっと近寄ってください（笑）。今日は『K—1甲子園』出場消滅のお話からおうかがいできればと思います。

鬥嘩裟 よろしくお願いします（淡々と）。

会長 はい、よろしくね！

——まず、鬥嘩裟くんは昨年末の「HIROYA戦がなくなりそうだ」と聞いたときはどう思いました？

鬥嘩裟 話は母から聞いたんですけど、最初は「絶対になくなることはない」と思ってたんです。

——なるほど。会長はその話を聞いたときには……

会長 （さえぎって）なくなると思ってた！（キッパリ）。

——ええっ！ なくなると思ってた？

会長 そう。鬥嘩裟は31日に備えて体重もグングンとアップしていたしさ、テンションもかなり上がっていたし、も～う万全の態勢に入っていたんですよ。ただし！ あんまりにも鬥嘩裟の調子がよかったし、全体的にちょっとうまくいきすぎてた部分もあった。だからね、（声を潜めて）じつは、周りや鬥嘩裟のお母さんにも「この試合、なくなる可能性があるよ」ってことは言ってたんですよ。

——はぁ～、そうなんですか。

会長 というのも、極真時代もそうですけど、いままでウチから出た選手というのは話題性が多くて、突発的に出てくる選手が多いんだよ。それで同じようなトラブルはいままでも何度か起きてたからさ。

——会長はどこかで虫の知らせみたいなものがあった、と。

会長 とくに鬥嘩裟はほかの選手と違って、一人だけ中学生だから。その場に立ってみないとわからないことはあったんだけど。……ま、いろいろあったけど、自分としては『K—1甲子園』は通過点にすぎないと思っていましたから。



（写真上）取材スタート時、練習中の叱咤で二人に微妙な距離感が……。だが、終了時はなごやかムードに解凍したのだから、この師弟愛は鉄壁！（写真左）昨年12月21日、谷川代表が「労働基準監督署への申請」の関係で藤鬥嘩裟の欠場を電撃発表、師走に衝撃が走った。

TSUKASA FUJI

——鬥嘩裟くんはいかがですか？

鬥嘩裟 やっぱり試合に向けて、一生懸命練習をしていたんで、「出場がなくなった」って聞いたときはかなりショックでしたけど、次の試合（2月29日、J—NETWORK後楽園ホール大会、大原清和戦）が決まっていたんで、そこはすぐ気持ちを入れ替えましたね。

——ただ、自宅でも積極的に自主練をやったり、いままでやったことのないほど、追い込んだ練習をしたらしいですけど。

鬥嘩裟 そのときは、かなり練習をしてました。でも練習は昨日より今日、今日より明日のほうがハードルが上がっていくものなんで、いまはさらにその上を行く練習をしていますから（淡々と）。

——立派だなぁ。鬥嘩裟くんの中学校では垂れ幕を作って応援されていたそうですね。

鬥嘩裟 そこまで応援してもらったのに、応えられなくて……それはやっぱり残念でしたね（うつむきながら）。

——今回の件に関して、谷川代表が直接こちらのジムにいらっしゃったそうですが。

会長 ええ。来ていただきました。でもホントはさ、たかが試合が流れただけで、こんな場所までわざわざ来てもらうのもおかしな話なんだけど。意外と波紋が広まっちゃった部分もあったからねぇ。

——鬥嘩裟くんにも、谷川さんから直接電話があったようですけど。

鬥嘩裟 はい。「君の責任じゃない。責任は全面的にこちらにあるから」という謝罪の電話をいただきました。

——それに対してなんと答えたんですか？

鬥嘩裟 ……ちょっと覚えてないです。すいません。

——あ、覚えてない。それで昨年の大晦日は大阪の『Dynamite!!』の会場に欠場の挨拶をしに行かれたわけですよね。

会長 ええ。筋を通すためにも、コイツも俺も大阪まで行って挨拶をしたんですよ。

——ただ残念ながら、地上波では放送されませんでしたね。

鬥嘩裟 自分の言ったことが放送されなかったのは、残念でしたね。

——そこは流してほしかった、と。基本的に「テレビでも試合を観ないし、会場にも行かない」主義の鬥嘩裟くんですが、ひさびさに会場で試合を観た感想は？

鬥嘩裟 やっぱり「自分も出たかったな」という気持ちが大きかったです。

——そうですよね。対戦するはずだったHIROYAくんの試合はどうでした？

鬥嘩裟 僕が闘うはずの相手だったので、「僕が上がってやりたかったな」って。やっぱり自分が出て、ベストを尽くして、勝ちにいきたかったです。

——会長は『K—1甲子園』を観ていかがでした？

会長 非常に一生懸命やってたと思いますよ！ もちろん、鬥嘩裟を含めて、どの選手も若いからプロとしての課題はあると思いますけど。ただ、基本的な技よりも、応用的な技が目立ったようにも感じましたね。

——なるほど。

会長 たとえば、肩ができていないのにあんまりアッパーとかフックを打つと肩を痛めちゃうこともあるんですよ。そういう意味で、自分は鬥嘩裟に「ワン、ツー、ストレートでヒジを動かすな」と。そういった基本だけを徹底的に教え込んでいるんです。コイツもアッパーは打てますけど、自

分は一切教えてません！
――応用編はまだ早すぎる、と。
会長　それからね。もう一つ大事なのは、テクニックとは別に、以前、チャモアペットがおもしろいことを言ったんですよ。
――〝ムエタイ9冠王〟として知られるチャモアペット（・チョーチャモアン）ですね。
会長　そう！　彼が「何人もの一流のトレーナーが完璧に指導して、選手を完璧に育て上げたとしても、リングに上げたら試合に負けてしまうことはある。なぜなら〝勝つこと〟だけはトレーナーが教えられないものなんだ！」と。強くてうまくてなんでもできるヤツだってさ、意外とヘタクソなヤツにやられちゃうんですよぉ！
――〝勝つこと〟というコアな部分だけは教えきれない、と。そういう意味でも、会長は鬥嘩裟くんにまずは基本を徹底的に教えているわけですか？
会長　そのつもりです！　自分は、鬥嘩裟には「ワン、ツー、ストレート」だけを毎日、やらせてますから。それにね、キックに関して、自分が本当に基本の技から付きっきりで、イチからいろいろ教えたのは鬥嘩裟が最初の選手なんです。言ってみれば鬥嘩裟は〝日本版ムエタイ〟なんですよぉ！
――日本版ムエタイ！　ムエタイのように本当に小さい頃から、教え込むっていう意味ですか。
会長　そうです、そうです！　やっぱりねぇ～、そういう基本をしっかりと積むことによって、舞台に立ったときに初めて絵になるんですよ！　だからさ、よく打撃を覚えたての巨体の選手が最初からいろんなパンチを覚えて打ってるじゃない？　あれはさ、前蹴りだけ教えて、手を上げて相手に近づいてドーンと蹴りゃあいいと思うんだよ。それなのに、最近はなんでもかんでもアッパー、フック！　アッパー、フック!!（と身ぶり手ぶりしながら）。これじゃあ、ダメなんですよぉお！（と炎上して）。
――なるほど（笑）。鬥嘩裟くんは憧れの



（写真上）07年大晦日、鬥嘩裟は、『Dynamite!!』のリング上で「4月のHIROYA戦に向けて、練習や努力を積み重ねていくんで、よろしくお願いします!」とキッパリとマイク。だが、この挨拶は地上波に乗ることはなかった。（写真下）『K-1甲子園』に優勝した雄大を中心に記念写真に収まる鬥嘩裟。本来は"主役"のはずだったHIROYAの沈んだ表情も印象的だ。

魔裟斗さんの試合はやっぱり凄い。ほかに気になった試合は、ないですね（鬥嘩裟）

魔裟斗さんの試合を観てどう思いました？
鬥嘩裟　やっぱり凄いな、と思いましたね（淡々と）。
会長　うん！　魔裟斗はスゲエぞ!!
――ほかに気になった試合は？
鬥嘩裟　ないですね（さらに淡々と）。
会長　ないない！
――それより自分がこれからどうするかを考えていた？
鬥嘩裟　そうですね（あくまで淡々と）。
会長　もっともっと練習だぁあ!!　それとね、格闘技で一番大事なのは下半身なの。とくにキックは下半身がしっかりしてなかったらダメッ！　技がうまかろうがヘタだろうが、元気なときってのは、誰だって勢いがあるんですから。息が上がったときに、下半身の状態を見ればいい選手かどうかは一目瞭然！　それだって、鬥嘩裟はスタミナからしてもう違いますから！　フフフフ（と不敵な笑みで）。
――鬥嘩裟くんは走り込みもたっぷりやってるみたいですからね。ちなみに今年のお正月はさすがにお休みだったんですか？
鬥嘩裟　元日とあと2、3日ぐらいですね。
会長　俺が「休ませてくれ！」って言ったんです！
――あ、さすがの会長もお正月は「休ませてくれ」と。
会長　やっぱりねぇ～、大晦日は正直言ってガッカリしちゃってさあ。大阪の会場に行くときは気持ちを入れ替えて、行ったつもりだったんだけど……。
――年末は優勝するつもりで、ひたすら練習に打ち込みまくってたわけですからね。
会長　やってみなけりゃあ、わからねぇけどさ。そういう気持ちはあったから！　というのもね、『K―1甲子園』みたいなヒジなしのルールだったら、前蹴りを打てるヤツが絶対に有利！　これは絶対的に有利なんですよぉ！
――じゃあ、試合に出ていれば鬥嘩裟くんの前蹴りが炸裂していた、と。
会長　もったいなかったなぁ～……（と遠い目で）。
――とにかく正月に休まれて、気持ちを入れ替えたわけですね。
会長　そう。我々もケジメをつけようと思ったんですよ。もうキッパリ忘れてさ。
――で、その正月明けに、『K―1 WORLD YOUTH』という新しいイベントが発表されましたけども。これは『K―1甲子園』をさらに拡大し、日本代表のチームとして、世界との対抗戦をするというプランなんですが、このお話を聞いたときはどう思いました？
鬥嘩裟　やっぱり強い人と闘えるんで、「こ



かとう・しげお■1945年生まれ、東京都出身。58年に大山道場に入門。故大山倍達総裁の高弟として極真会館創草期を支えた。68年に"海外指導員第一号"としてオーストラリアに派遣。帰国後は後進の指導に従事。06年に天空キックボクシング協会を設立。あの松井章圭氏（極真会館松井派館長）、そして魔裟斗を育てた名伯楽としても知られている。

れはいいな」と思いました（と微笑して）。

—世界の同世代の強豪たちとの対決は興味がある？

門嘩裟　はい。世界の強い人と闘うことで自分の力を試せるチャンスなんで、いいと思いますね。

—谷川さんはイケメンばっかりだから、「K—1ジャニーズJr.みたいにしたい！」なんて能天気に言っていましたけど（笑）。

会長　まあ、そのへんは話半分で聞いてるけどさ（笑）。

—なるほど（笑）。その『K—1 WORLD YOUTH』の会見で選手がズラリと並んでいたときに、一番初めの挨拶で門嘩裟くんが「僕は誰が相手でも負けません！ 以上です！」とキッパリ言ったじゃないですか。仲よしこよしではやらない！ って感じで。あれは会場もどよめいてましたね。

門嘩裟　あのときは、「自分のやっていることや気持ちを出したらいいかな」という感じでした（照れながら）。

—あれにはシビレましたよ。でも、HIROYA戦の前に、団体対抗戦のプランが入ってきて、心中はちょっと複雑だったと思うんですが？

門嘩裟　集中して、いまは一試合一試合こなすだけです。

—とにかく、目の前の試合に打ち込む、と。

門嘩裟　はい、そうですね。

会長　こういう舞台に門嘩裟が上がらせてもらうのはホントに大きいことですよ！『K—1甲子園』は18歳以下だったけど、それが20歳以下になったでしょ。20歳っていったらもうK—1 MAXに出てもおかしくないから、『K—1 WORLD YOUTH』で外国人選手を探すのは大変かもしれないよね。ただし！ いずれにせよ、自分は4月の門嘩裟vsHIROYA戦がこの世代の選手の試合の大〜きなターニングポイントになると思うんですよ。だから、門嘩裟にはKOを狙わせたい！ やっぱりキックはKOで勝たなくっちゃあ!!

—力強いですねぇ〜。

会長　それにね、考えてもみてください！ 門嘩裟は、もう何度もプロのリングに上がっているんだから。しかも門嘩裟がいままで闘ってきた選手はみんな大人ですよ。そういう選手に強烈なパンチをもらったって、コイツはダウンしなかったんだから！ そういう経験っていうのは、凄い自信になってるんです。自分も試合を観てて、「あ、倒れたかな？」とヒヤリとしたこともあったけど、倒れなかった。しかも、そのあと前蹴りでダウン取っちゃうんだから！ そんな選手がほかにいますか！（とまたまた興奮して）。



「頼もしいなぁ〜」と谷川代表も上機嫌！08年のK-1学園の新学期は2.2『K-1 MAX』日本武道館大会での『K-1 WORLD YOUTH』で開幕。HIROYAを大将に据えた日本代表はいきなり3連勝でパーフェクトな好発進！

TSUKASA FUJI

—ダハハハ！ 頼もしいですねぇ。門嘩裟くんも「大舞台に上がっても、心が揺れない」とおっしゃってましたよね。

会長　そう！ それにどんなにパンチが強くても、技がうまくても、顔面に前蹴りを一発もらったらどんなヤツだって動けなくなっちゃうんです！ 人間の本能としてそこは怖がっちゃいますから。つい最近もスパーリングでの動きを見ていて、「門嘩裟の蹴りは、こっちが思っていたとおりに仕上がってきてるな！」と思ったからねぇ。

—ますます自信を深めていましたか。

会長　ただし！ 15歳の門嘩裟がやっているから、簡単に考える人もいるだろうけど、この前蹴りは簡単にはできません！

—マネするのは無理ですか？

会長　ぜ〜ったいできない！（キッパリ）。前蹴りなんて、普通はいくら破壊力があったって真正面からからくるし、見えるから普通はかわされちゃうもんなんですよ！ ところが！ コイツの前蹴りにはみんなが同じことを言うんです。「蹴りが見えない！」。そして「手が3本見える！」と。

—手が3本！

会長　そう！ でも、最近は動きがうまくなってきたら、なんだか格好つけたがって、やたらとモーションをつけようとしやがるからさ。今日も練習中にクソミソに言ってやったら、ふてくされちゃってさ！

—ダハハハ！ それで今日は最初、微妙な空気になってたんですね。でも門嘩裟くんはクソミソに言われてどうでした？

門嘩裟　やっぱり「直さなきゃいけないかな」と思いましたね。自分は会長の教えを信じて、ここまでこれたんで（と素直に）。

—なるほど。じゃあ、目前には2月29日の試合もありますけど、4月にはいよいよHIROYAくんが予定されています。

門嘩裟　はい。決まったからには、どの試合も負けないだけです（キッパリ）。

—先日の会見で、HIROYAくんにコメントを求めたら、「門嘩裟くんは試合に出られなくてかわいそうだったし、試合はしてあげたい」と言っていました。ちなみにHIROYAくんとお話ししたことは？

門嘩裟　ないですね。

—あ、ない。じゃあ、ほかの『K—1 WORLD YOUTH』のメンバーとは？

会長　ぜ〜んぜんない！ コイツは一切、話さないもん。

—えっ、若い選手がたくさんいましたけど、門嘩裟くんは誰とも話していない？

門嘩裟　してないです（キッパリ）。

—ほかの人たちは話してるんですか？

門嘩裟　はい。ほかの人たちは話していましたけど（淡々と）。

会長　まぁ、そういうヤツが一人くらいいてもいいじゃない！（笑）。でも自分もさ、4月のHIROYA戦はホントに楽しみだし、谷川氏に言っておいてくださいよ。「4月の試合ではビックリさせるから、心の準備をしていたほうがいいですよ！」って（とニヤリと笑って）。

—凄い自信ですねぇ。

会長　門嘩裟が前蹴りだけだと思ったら、それも大変な間違いですよぉ！

やっぱり門嘩裟にはKOを狙わせたい！ キックはKOで勝たなくっちゃあ!!（会長）

——う～ん。またまた鬥嘩裟くんへの幻想が膨らんできたなぁ。

会長　それにね！　自分の勘っていうのはたいがい外れたことがないんですよ。このあいだもサウナに行ったんだけどさ、たまたま白鵬と朝青龍の相撲をやってて、みんなテレビの前で「どっちが勝つか」なんて言っていたんですよ。

——あ、大相撲の優勝決定戦ですね。

会長　そうそう。圧倒的に「朝青龍が勝つ」って言っているヤツが多かったんだけどさ、俺は「ぜ～ったいに白鵬が優勝する！」ってキッパリと言ったんです。なぜかって言ったら、白鵬はちゃんとその試合まで体力を残してるんだから。

——実際、そのとおりになりましたね。

会長　でしょぉお！　だからさ、「今年は俺、ツイてるわ！」と思ってねぇ～！（と鼻息荒く）。

——ダハハハ！　では、とりあえず2月の試合が控えてますけど……。

会長　（さえぎって）いやいや、2月の試合は凄～く大事です！　2月はバンタム級2位の選手とやるんだけど、この試合だって鬥嘩裟はKOで勝たなかったら、意味がないですよ。まずは2月をKOで勝って、HIROYA戦も狙っていきますよ！　コイツはふっ飛ばしちゃうから！

——じゃあ、次へ次へと突き進む、と。

会長　そりゃ、そうですよ。自分としては、ド～ンドン上を見てるんだから！

——まさに天井知らずって感じですね(笑)。じゃあ鬥嘩裟くんも2月、4月に向けてテンションを上げていく感じで。

鬥嘩裟　そうですね。まずは2月の試合に向けて集中したいと思ってます。

——どちらも素晴らしい試合を期待してます！　それから最後になっちゃいましたけど、先日、通信制の高校に受かったということを聞いたんですが、あらためておめでとうございます！

鬥嘩裟　ありがとうございます！（この日、一番の笑顔を見せて）。じつは1月に試験を受けたんですけど、無事に受かりました。

——でも大晦日に向けた練習と並行しての受験勉強は、さぞかし大変だったんじゃないですか？

鬥嘩裟　はい。やっぱり大変でしたけど、そこはなんとか合格できました（笑）。

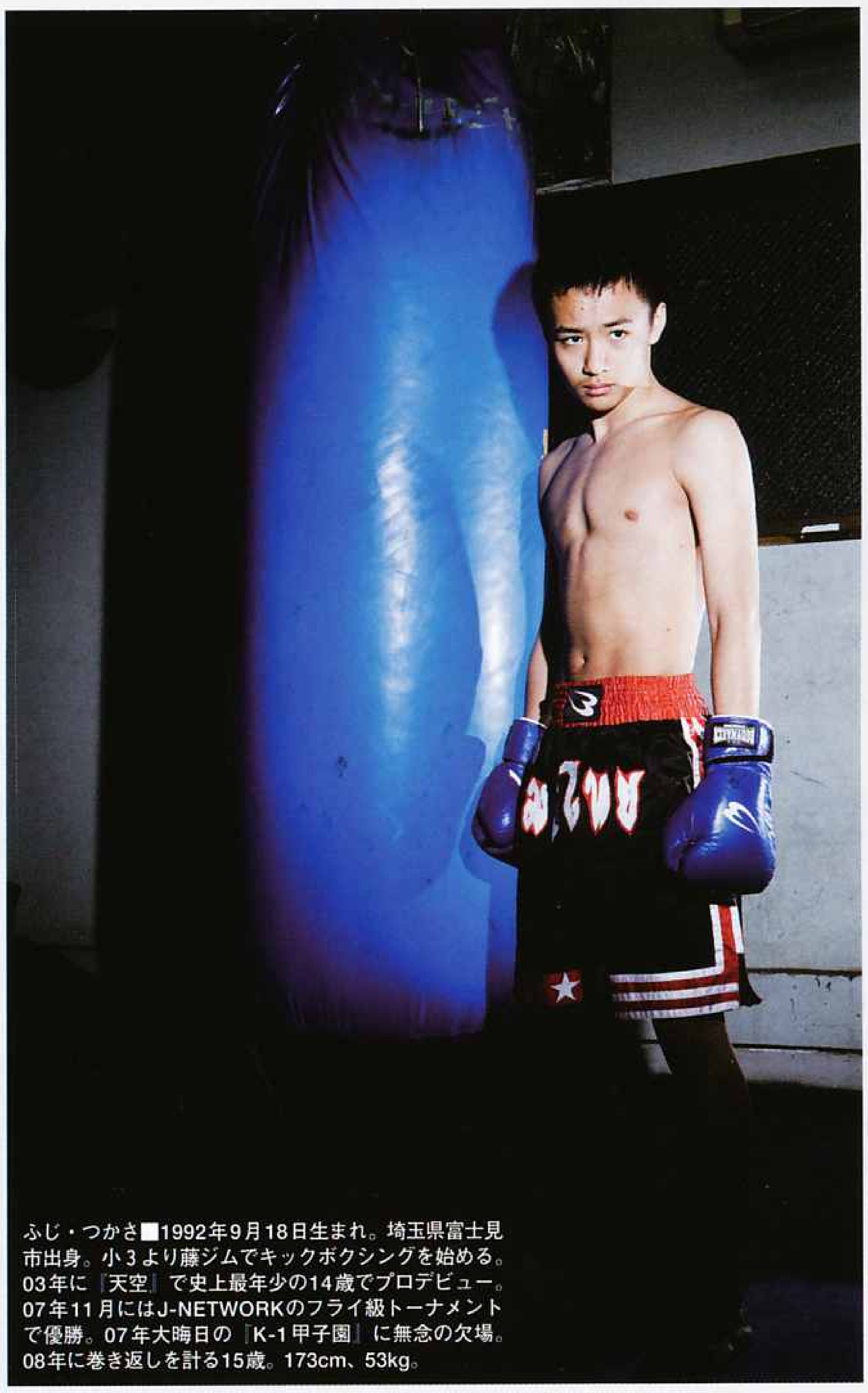
——じゃあ、今後も勉強とキックと両立する感じで。

鬥嘩裟　はい。生活のリズムをしっかりと整えて、会長と一緒に練習していきます。

会長　よーし！　これからも、ド～ンドン練習させますよぉお！　（と立ち上がって）

——すっかり師弟関係が戻りましたね(笑)。これからもこの感じでお願いします！

【08年1月29日／埼玉県・藤ジムにて収録】



ふじ・つかさ■1992年9月18日生まれ。埼玉県富士見市出身。小3より藤ジムでキックボクシングを始める。03年に『天空』で史上最年少の14歳でプロデビュー。07年11月にはJ-NETWORKのフライ級トーナメントで優勝。07年大晦日の『K-1甲子園』に無念の欠場。08年に巻き返しを計る15歳。173cm、53kg。

TSUKASA FUJI

『WORLD YOUTH』のメンバーとは、誰とも話したことはないですね（鬥嘩裟）

と、この取材が行なわれた時点では、4月9日広島グリーンアリーナでの『K―1 WORLD MAX』にて、藤鬥嘩裟 vs HIROYAの一戦が行なわれることは決定的とされていた。

ところが、2月2日に日本武道館で行なわれた『K―1 WORLD YOUTH』に出場したHIROYAは試合後、鬥嘩裟戦に関して「テストの日とかぶっちゃうかもしれないんで、わからないんです」とまさかの衝撃発言！

翌日会見でも、HIROYAは「闘いたいけれど学校のテストがあるので……」と困惑気味にコメント。これを聞いた谷川代表も「じゃあ、考え直さないと」とまたもや試合の延期を示唆したから驚きだ。

はたして「テストが原因で試合が延期」という前代未聞の事態になってしまうのか？　それとも試合は決行されるのか？　4月大会の参加予定選手に藤鬥嘩裟、そしてHIROYAの名前は入っているが……。

またまた波瀾万丈な展開になってきた藤鬥嘩裟劇場。すべては正式発表を待つしかない！

君も鬥嘩裟くんを応援しよう！ 2月、4月大会予定！

K-1 WORLD MAX 2008
世界一決定トーナメントFINAL 16
広島・広島グリーンアリーナ
4月9日（水）16:30開場／18:00開始

【出場予定選手】
アンディ・サワー／魔裟斗／ブアカーオ・ポー.プラムック／アルバート・クラウス／アルトゥール・キシェンコ／佐藤嘉洋／マイク・ザンビディス／ドラゴ／ヴァージル・カラコダ／城戸康裕／HIROYA／藤鬥嘩裟ほか

【チケット料金】※全席指定・消費税込み
SRS席／23,000円　S席／12,000円　魔裟斗応援シート／12,000円（特典付き）　A席／6,000円

［お問い合せ］
FEG　TEL.03-3796-5060

J-NETWORK
“Let's Kick with J 1st”
東京・後楽園ホール
2月29日（金）16:30開場／16:45開始

［54.5kg契約　サバイバルマッチ］
大原清和（レグルス池袋／J-NETWORKバンタム級2位）
vs 藤鬥嘩裟（藤ジム／J-NETWORKフライ級王者）
※J-NETWORKヘビー級王座次期挑戦者決定トーナメント決勝戦ほか

【チケット料金】※全席指定・消費税込み
S席／5,000円　（SRS席、RS席は完売）

［お問い合せ］
J-NETWORK興行部　TEL.03-3419-0536

『K-1 WORLD YOUTH』いきなり全勝スタート!

2.2『K-1 WORLD MAX 2008 日本代表決定トーナメント』日本武道館大会レビュー



せ〜の〜、WE LOVE HIROYA! どうだい? このラブリーな応援ボード! U-20クラスの"絶対的主役"HIROYAは、『K-1甲子園』の敗戦を払拭する白星スタート。やはり、『K-1 WORLD YOUTH』もこの男を中心に廻っていくのは間違いない。

[K-1 WORLD YOUTH 日本vsオランダ 大将戦]



○HIROYA vs ロビー・ハヘマン×
(2R 2分05秒 KO)
日本vsオランダの大将はもちろんHIROYA! 堂々の真っ向勝負でKO勝利を奪ったものの、相手が「まだヤレル!」とアピールしたかたら、若干グレーな印象も残ったが、見事に大役をはたした格好だ。

[K-1 WORLD YOUTH 日本vsオランダ 中堅戦]



○才賀紀左衛門 vs ロイ・タン×
(3R判定 3−0)
前日計量で、相手を「アウト・オブ・眼中!」と言い放ち、入場では音楽に合わせノリノリで入場と、いろんな意味で見逃せないイケメンキャラの才賀紀左衛門は、トリッキーな蹴り連発で判定勝利。

[K-1 WORLD YOUTH 日本vsオランダ 先鋒戦]



○嶋田翔太 vs バビー・"ベビーフェイス"・テテロー×
(2R 0分32秒 KO)
団体戦先鋒の嶋田翔太は新空手出身。試合はあまりに鮮やかなバックブローを炸裂させてKOデビュー! これには谷川代表も「嶋田くんは今日の大会全体のMVPですよぉ〜!」と手放しで大絶賛!



試合後のHIROYAは、「タイに戻ったら遊びに行きたい!」「髪の毛もまた伸ばします」と無邪気な16歳に戻っていたが、4月の藤門嘩袋戦には「テストと近いので、ちょっとわからないです」と仰天発言!



○ブアカーオ・ポー.プラムック vs 佐藤嘉洋×
(延長1R判定 2−1)
「勝ったら、言いたいことを言わせてもらう!」と意気込んだ佐藤だが、無念の判定負け。一方のブアカーオは動きの固さを「日本が寒すぎた」とコメントなど余裕の構え、さすがは絶対王者だ。

[日本代表決定トーナメント決勝]



○城戸康裕 vs HAYATO×
(1R 1分07秒 KO)
本人も認めるノーマーク状態の城戸康裕が、するすると勝ち上がって日本代表の座をゲット! 500万円の賞金は大学奨学金の返済で、「切り詰めた生活してたから、超嬉しいっす!」と満面の笑顔。

[日本代表決定トーナメント準決勝]



○HAYATO vs 前田宏行×
(1R終了時 TKO)
ボクシング3階級制覇の実力派、入場曲はベートーベンの『運命』&『ロッキーのテーマ』というド直球な男、前田は1回戦に続きKO奪取も、まさかの脱臼アクシデントで無念の準決勝敗退。

[日本代表決定トーナメント準決勝]



○城戸康裕 vs アンディ・オロゴン×
(3R判定 3−0)
ナイジェリア出身ながら、なぜか日本代表にエントリー。しかもダントツの優勝候補だったアンディだったが、いまいち動きに精彩を欠き、「アンディ対策ゼロ」だった城戸がまさかの決勝進出!

[日本代表決定トーナメント1回戦]



○HAYATO vs 龍二×
(3R判定 2−0)
節制なんてクソ食らえ! 毎日、飲酒を欠かさないという"酔いどれ格闘家"こと、龍二がK-1初参戦。あの内藤大助が練習仲間というHAYATOとの壮絶など突き合いの末に判定負け。

[日本代表決定トーナメント1回戦]



○前田宏行 vs TATSUJI×
(1R 1分10秒 KO)
会場の一部で巻き起こった異様なまでの「前田」コールを背に、華麗なボクシングテクニック全開で優勝候補の一角、HAYATOを左フック炸裂で瞬時にKO! 前田はこの試合でKO賞をゲット!

[日本代表決定トーナメント1回戦]



○城戸康裕 vs 尾崎圭司×
(3R判定 3−0)
「竜巻旋風脚!」ばりの回転技で、"リアル"『ストリートファイターII』状態の尾崎と、キレのいいハイキックが信条の城戸が正面激突! 一進一退の攻防を制した城戸の快進撃はここからスタート。

[日本代表決定トーナメント1回戦]



○アンディ・オロゴン vs 山本優弥×
(3R判定 3−0)
前日会見では、「MAXは優弥のためにアルジェリア」とアンディを意識したダジャレコメントで、自信満々だった山本優弥。前のめりな姿勢でガンガン攻め込んだものの、2Rのダウンが効いて判定負け。


社保なし・強者優遇。
志田幹。元はOA機器の営業マン。
「最近、腹まわりが…」と、
フィットネス目的でパンクラスのジム
「ピーズラボ」に入会したことが、彼の人生を一変させた。
プロデビュー、そして格闘技に専念するため退職。
いいのか?
いいのだ! 悔いるくらいなら。
PANCRASE HYBRID WRESTLING
PANCRASE 2008 SHINING TOUR
3.26(水)後楽園ホール
OPEN/18:00 START/18:30
SS・¥12,000 A・¥8,000 B・¥6,500 C・¥5,000 D・¥4,000
フェザー級王座 次期挑戦者決定戦
(パンクラスP'sLAB東京/2位)志田幹 [3R] マルロン・サンドロ(ノヴァ・ウニオン/4位)
ミドル級戦
(SKアブソリュート/第7代王者)竹内出 [3R] 金原弘光(U.K.R.)
ミドル級戦
(SKアブソリュート・ロシア/4位)ガジエフ・アワウディン [3R] 佐藤光留(パンクラスism)
ライト級戦
(パンクラスism/4位)伊藤崇文 [3R] ハクラン・ディアス(ノヴァ・ウニオン/初参戦)
ライト級戦
(パンクラスism/7位)アライケンジ [3R] 小路伸亮(KRAZY BEE)
バンタム級戦
(KRAZY BEE/2位)浅野倫久 [2R] 裕希斗(U-FILE CAMP.com)
ミドル級戦
(パンクラスism)金井一朗 [2R] 佐藤豪則(Laughter7/初参戦)
ウェルター級戦
(パンクラスP'sLAB横浜)本田朝樹 [2R] 岩見谷智義(髙田道場)
パンクラス アマチュアジム「ピーズ・ラボ」
東京/横浜/大阪で会員募集中! お問い合わせ:(03)5792-7079
第14回ネオブラッド・トーナメント予選および1回戦
3.23(日)ゴールドジムサウス東京アネックス
MOW ON SALE OPEN/14:00 START/14:30
SS・¥4,000 A・¥3,500 立見・¥3,000
4.27(日)ディファ有明
3.1 ON SALE OPEN/15:00 START/16:00
SS・¥12,000 A・¥8,000 B・¥6,000 C・¥4,500
※当日券は一律500円増しとなります。
●主催:(株)ワールドパンクラスクリエイト ●後援:インデックス、スカイ・A、ドン・キホーテ、STC GROUP ●お問い合せ:パンクラス 03-5792-0815 http://www.pancrase.co.jp/
パンクラス、テレビ観戦は スカイ・A sports+ で! 全大会をどこよりも早く!
3月 6日(木)20:00~22:00 ▶ 07.12.22 ディファ有明大会
3月 9日(日)23:00~25:00 ▶ 08.01.30 後楽園ホール大会
3月13日(木)20:00~22:00 ▶ 03.10.31 後楽園ホール大会
3月21日(金)20:00~22:00 ▶ 03.11.30 両国国技館大会
3月31日(月)22:50~24:50 ▶ 03.12.21 ディファ有明大会
※都合により、放送日時は変更となる場合があります。
スカイ・A sports+をご覧いただくには
お近くのケーブルテレビ
e2 by スカパー!
スカパー! スカパー! えらべる 15
「よくばりパック」(3500円)から
15ch選べる「えらべる15」(2800円)
がお得です!
sky・A sports+
最新情報は www.sky-a.co.jp

大反響のバック・トゥ・

UFC×PRIDE×WWE融合で、オクタゴンに科学反応爆発!!

UFC DYNAMISM!!

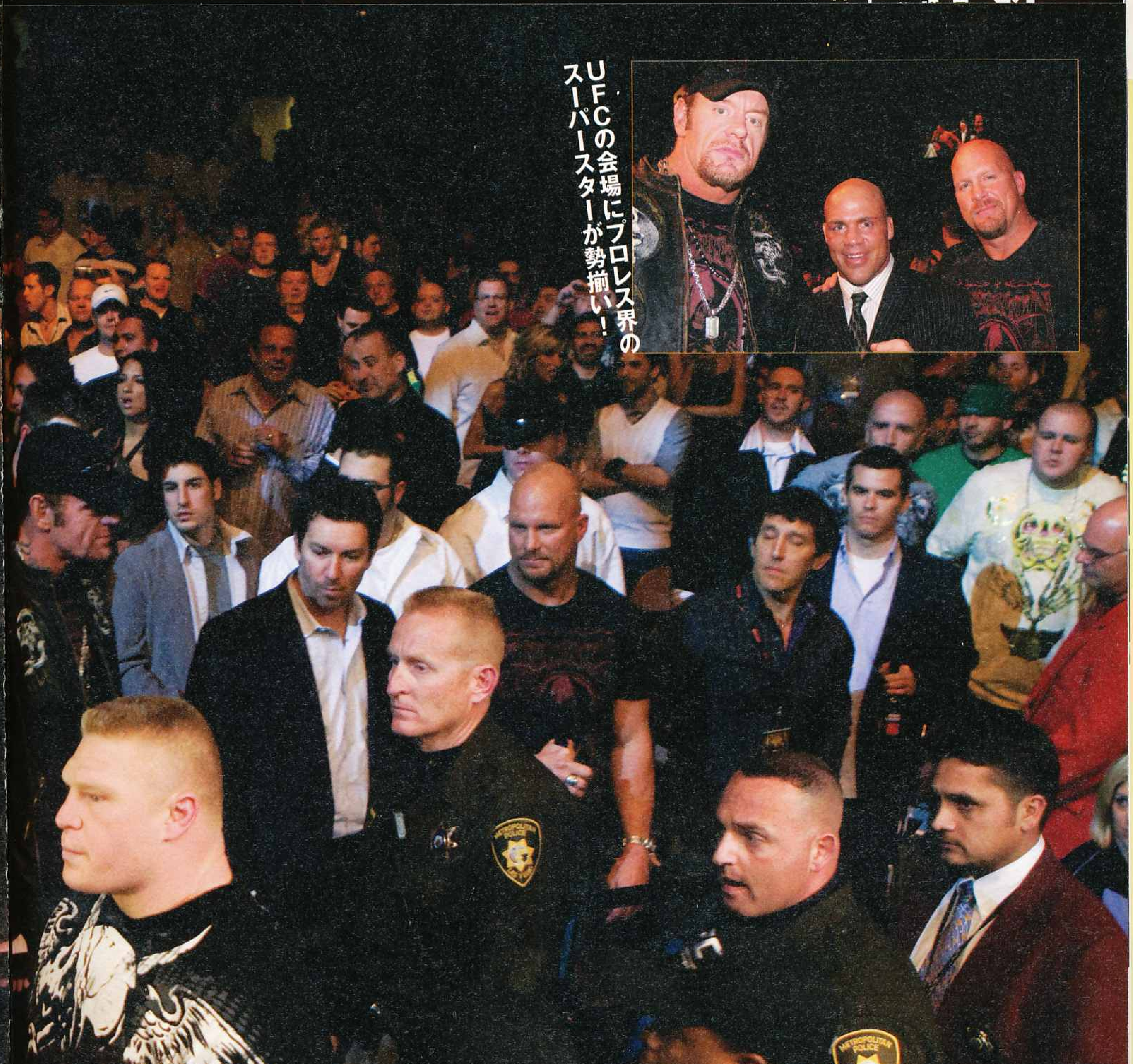
2008.2.2 LAS VEGAS
UFC81 BREAKING POINT
NOGUEIRA vs SYLVIA　MIR vs LESNAR

ノゲイラ大逆転 UFC王者に! ブロック・レスナー UFCデビュー!!



毎月のようにビッグカードを連発し、ゴールドラッシュ状態のUFC。その勢いは2008年に入ってからも止まらない。2.2『UFC81』では、ノゲイラvsシルビアのUFCヘビー級暫定王者決定戦とブロック・レスナーのUFCデビュー戦という2大カードをぶっ放してきた。世界最高峰の熱狂ライブUFCを今月も全16ページ、たっぷりとお届けします!

構成／堀江ガンツ



UFCの会場にプロレス界のスーパースターが勢揃い！

「MMAワールド・シリーズはもう始まっているんだよ」

昨年、PRIDE開催のメドがまったく立たない中、UFCのオクタゴンでUFC vs PRIDEのスーパーカードを次々と実現させ、そううそぶいたダナ・ホワイト代表。

その流れは今年に入っても止まらず、今大会もノゲイラvsシルビアというPRIDEとUFCの元ヘビー級王者同士の対戦が組まれたが、今回はさらにもう一つ驚愕の対立概念を持ってきた。元WWEのスーパースター、ブロック・レスナーと、元UFCヘビー級王者フランク・ミアの超異次元対決がそれだ。リアルファイトのスポーツであるMMAと、見た目は似ていながら決定的に似て非なるエンターテインメント・ショーであるプロレスのクロスオーバーは、アメリカでは日本で考える以上の違和感がある。

しかし、その違和感が賛否両論と話題を呼び、レスナーvsミアは注目度では、メインであるシルビアvsノゲイラのヘビー級暫定王者決定戦を完全に上回っていた。

ラスベガスのビルボードでは、メインを差し置いて「ミアvsレスナー」が宣伝され、現地の情報誌や格闘技専門誌の表紙もレスナーが飾った。そして、その表紙にはこんなコピーが踊っていたのだ。「IS BROCK LESNAR FOR REAL?（ブロック・レスナーは本物か？）」。

そう、どっちが強いかではなく、レスナーはリアルなのかフェイクなのか。そんなじつにプロレス的な興



元PRIDE王者も、元WWE王者も俺のもの！
ダナの“ジャイアン”ぶりがさらに加速!!

“リアル”vs“フェイク”禁断のクロスオーバー UFCに“プロレスの興奮”爆発!!

文／堀江ガンツ　撮影／Josh Hedges（UFC）

味から、レスナーのUFCデビュー戦は注目を集めたのだ。

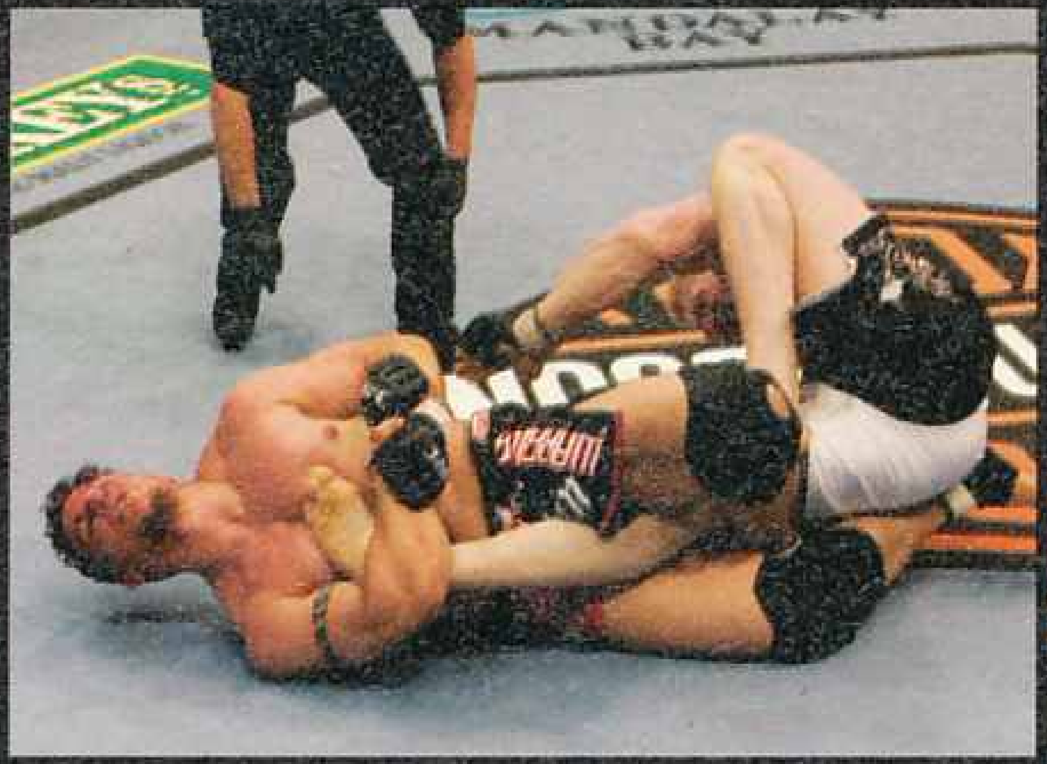
レスナーがおもしろいのは、プロレスという「フェイク」と切り捨てられるジャンルで名を馳せながら、もともとは全米大学レスリング王者という「リアル」なバックボーンを持っていること。しかも、運動能力の高さは誰もが認めるところで、MMAのトレーニングもすでに1年半続けている。

対するミアは、元ヘビー級王者ではあるが、交通事故のブランクを経てからは2勝2敗と、かつてのような強さは見せられていない。

そんな二人の要素が相まって、試合前のスポーツベッティングのオッズはミアが2・3倍に対して、レスナーは1・6倍。なんとMMA2戦目のルーキーが、元王者に対して、下馬評で大きく上回ったのである。カジノのオッズが“レスナー幻想”に飲み込まれたのだ。

ミアvsレスナーは、両者の入場前から客席からざわめきが起こった。期待感から来る盛り上がりとは明らかに違う。この試合には特別な緊張感がともなっているように感じられた。なぜなら、もしミアがレスナーに負けることがあれば、それは単にレスナーがミアより強かったというだけの意味ではなく、“フェイク野郎”であるはずのプロレスラーに、リアルファイトを売り物にしてきたUFCの元王者が負けるということになるからだ。

だからこそレスナーの入場時に起きた大ブーイングは、“フェイク野郎”への嫌悪感だけでなく、レスナ





［2.2 UFC81 BRAKING POINT］米国ネバダ州ラスベガス／マンダレイベイ・イベントセンター
○フランク・ミアvsブロック・レスナー×
（1R 1分30秒 ヒザ十字固め）

注目のブロック・レスナー、UFCデビュー戦。レスナーは試合開始早々、いきなりタックルでテイクダウン。パウンドのラッシュを浴びせ、一度、スタンドに戻されてからも、すぐさま拘束タックルでテイクダウン。グラウンドでもスムーズに態勢を入れ替えパウンドで勝負に行くが、ミアに下から足を取られ、ヒザ十字固めで逆転負けを喫した。

このパワー、このスピード！ レスナー逆転負けも 幻想はさらに巨大化!!

ー幻想に対する畏れも感じられた。存在自体は認めたくないが、その実力には一目置かざるをえない。そんな、かつての北尾光司やいまの秋山成勲にも似たヒールとしての存在感を醸し出していたのだ。

そして、試合開始。レスナーはミアのローキックに合わせてタックルで突進し、いきなりテイクダウン。そしてハーフガードを取られながら、嵐のようなパウンドを浴びせかける。その数発がミアの後頭部に当たってしまい、レフェリーチェック後、スタンドで再開。すると今度は右フックを浴びせながらのタックルで、再びテイクダウン。速い！ ヘビー級とは思えぬタックルのスピードだ。

そこからレスナーはパウンドでラッシュをかけるが、ミアは下から腕十字を狙う。それを逃れたレスナーは立ち上がってパウンドを落とすが、ミアはそのがら空きの足にしがみつきヒールホールド。入りは浅かったが、これにレスナーはたまらずタップアウトした。

その瞬間、場内は大爆発！ 外敵退治を成し遂げた歓喜の輪は、まさに三崎vs秋山戦のようであった。

ミアに対する賞讃の歓声と拍手は、そのままレスナーに対する高い評価への裏返しといっていいだろう。寝技の対処という課題は見つかったが、そのポテンシャルの高さをまざまざと見せつけ、敗れたものの、レスナー幻想をさらに巨大化させたといえる。

「IS BROCK LESNAR FOR REAL?」

その答えは、いまオクタゴンで出された。レスナーは紛れもない本物だったのだ。

レスナーvsミアの興奮冷めやらぬ中、迎えたメインはシルビアvsノゲイラのUFCヘビー級暫定王者決定戦。

ミルコ、ダンヘン、ショーグン、シウバ……。昨年、元PRIDEのトップファイターたちは、次から次へとオクタゴンへ沈んでいった。そんな中登場したノゲイラは、いわばPRIDE最後の砦だ。

ノゲイラはデビュー以来、一度もKO、一本での負けはなく、PRIDEではヒョードルとジョシュに判定で敗れた以外は全勝という、PRIDEファイターの中でも実力者中の実力者。

対するシルビアは、長らくUFCヘビー級のトップに君臨していたが、その評価はあまり高くない。試合前のオッズでもノゲイラ有利。しかし、いざ試合が始まると、またしても〝圧倒的現実〟を見せつけられた。

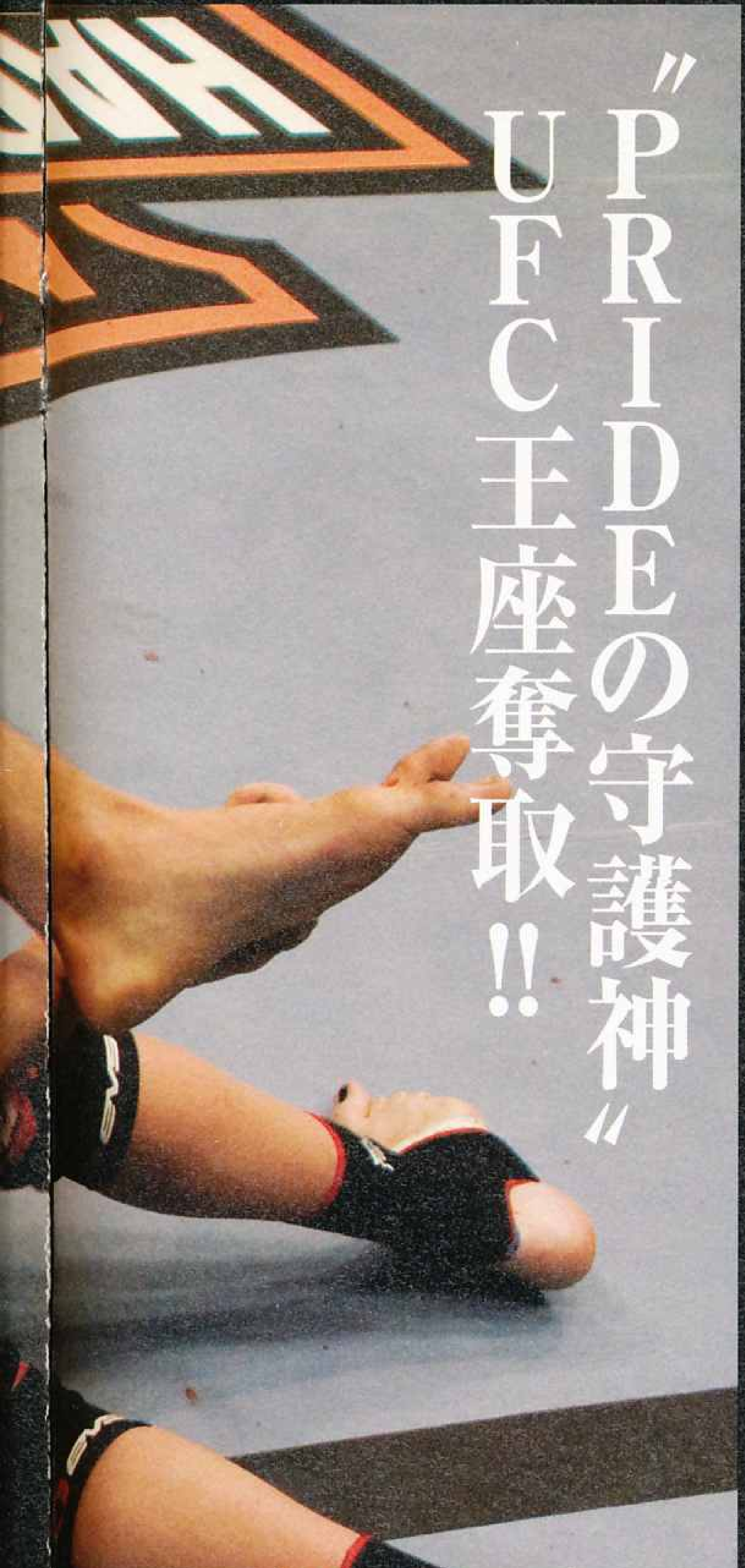
シルビアの長いリーチから繰り出されるパンチが、次々とノゲイラの顔面を捕らえていく。ノゲイラはタックルでテイクダウンを奪いにいくが、シルビアは懐も深く、タックルは決まらない。

細かいジャブで徐々に赤く染まっていくノゲイラの顔面。そして、シルビアのワンツーがアゴを打ち抜き、ノゲイラが1ラウンドからダウン！ なんとかガードポジションで持ちこたえるが、明らかに効いている。

しかし、ここからがノゲイラの闘いだ。劣勢にも焦らずあきらめず、「耐える時間」はしっかりと耐えることができる。2ラウンドに入っても相変わらずグラウンドには持ち込めず、シルビアペースで進んでいるが、ノゲイラにも1ラウンドのようなピンチは訪れない。

そして3ラウンド。ここまでシルビアのほぼワンサイドゲーム。しかし、ノゲイラは足下に滑り込むように引き込むと、シルビアの巨体を見事に引っくり返すスイープ。そし

〝PRIDEの守護神〟UFC王座奪取!!



［2.2 UFC81 BRAKING POINT］
米国ネバダ州ラスベガス／マンダレイベイ・イベントセンター
【UFCヘビー級暫定王座決定戦】
○アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラvsティム・シルビア×
（3R 1分28秒 フロントチョーク）
※ノゲイラが暫定王者に

現王者ランディ・クートゥアーがUFC離脱を表明していることで、ヘビー級暫定王座決定戦となったこの一戦。シルビアは1ラウンドにワンツーでノゲイラからダウンを奪うなど、スタンドで試合を優位に進め、2ラウンド終了まで終始ペースを握る。しかし、ノゲイラは3ラウンドに引き込みから寝技に持ち込むと、スイープからサイドポジション、そしてフロントチョークへと流れるような動きでシルビアを捕獲。見事、UFCヘビー級のベルトを腰に巻いた。

大反響のバック・トゥ・



て、そのままサイドポジションを取ると、上体を起こし逃げようとするシルビアの動きを先回りするかのように、ギロチンチョークで捕獲！　完璧に極められたシルビアは、たまらずタップした。

ノゲイラ大逆転勝利！

これが〝奇跡の逆転ファイター〟アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラの闘いだ。

ボブ・サップ戦、ミルコ・クロコップ戦もそうだった。嵐のような攻撃を受け、どれだけピンチにさらされても、気持ちが途切れずあきらめない。そして、ひたすらチャンスを待ち、勝負を一発で引っくり返すサブミッションを極める。

これこそが〝柔術マジシャン〟の闘いだ！

勝ったノゲイラの腰にはUFCヘビー級のベルトが巻かれる。史上初のPRIDE、UFC両ヘビー級王座奪取！

ついにPRIDEファイターが、UFCに一矢報いた。

PRIDEの守護神と呼ばれた男は、やはり最後の最後でPRIDEファイターの威厳を守り通したのである。

メインとセミが劇的な逆転の一本決着となり、今回もおおいに盛り上がったUFC。かつては勝利至上主義の単なる競技になりつつあったが、vsPRIDE、vsプロレスラーという対立概念の導入により、他流試合のダイナミズムまでも発揮しはじめた。

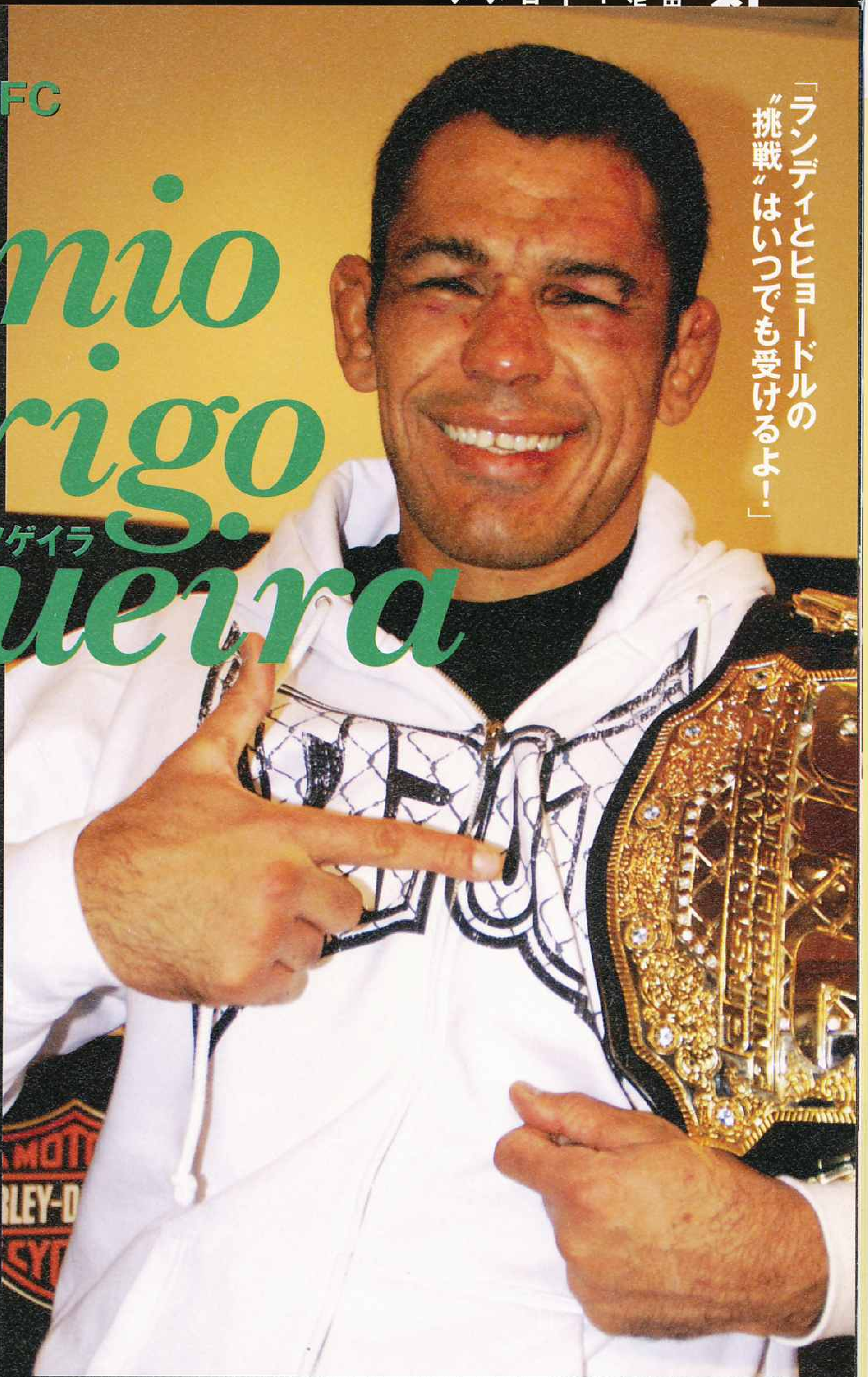
恐るべしUFC。その怪物化はまだまだ止まりそうにない。

史上初のPRIDE、UFC両ヘビー級王座奪取！

Antonio Rodrigo Nogueira

アントニオ・ホドリゴ・ノゲイラ

「ランディとヒョードルの“挑戦”はいつでも受けるよ！」



ノゲイラがUFCヘビー級暫定王座奪取！これまで元PRIDEのトップファイターたちが、オクタゴンの魔物に次々と飲み込まれていく中、2戦目にしてタイトル戦のチャンスをつかんだノゲイラは、ティム・シルビアからフロントチョークで一本勝ち。見事に史上初のUFC、PRIDE両方のヘビー級ベルトを巻いたことになったノゲイラに、試合後、喜びの声を聞いた。

聞き手／堀江ガンツ
通訳／石井史彦

――UFCヘビー級王座奪取、おめでとうございます！

ノゲイラ　ありがとう！　ボクの闘いはジャパニーズ・スタイルだ。耐えて耐えて、最後に勝つ。前半痛めつけられたぶん、3ラウンドに返して仕留めてやったさ。

――これで史上初のUFC両ヘビー級のベルトを腰に巻いた男になりましたね。

ノゲイラ　ボクにとっても大きなチャレンジだったよ。ボクの人生はいつも順風満帆だったわけじゃない。小さい頃に大きな交通事故に遭ったし、人生で最悪な時期も遭った。でも、ボクはどんなことがあってもあきらめない。だから、最後には必ず勝ってきたんだ。

――今回も3ラウンドの途中までは、ずいぶんとシルビアの攻撃を受けましたよね。

ノゲイラ　クロコップやボブ・サップと闘ったときと一緒だよ（笑）。シルビアはいい距離で闘っていた。ボクがフックで飛び込むと、アッパーカットで迎撃されたしね。試合開始から13分間は彼の時間だったさ。でも、ラスト1分はボクの時間だった。1分あればボクは試合を終わらせることができる。

――途中まで、なかなかテイクダウンが奪えず、フラストレーションが溜まりませんでしたか？

ノゲイラ　いや、そんなことはないよ。自分が何をしているのか、何をすべきかがわかっていたからね。それにボクは神様を信じているから、神様がどうにかしてくれると思っていた。だから数多くのパンチを食らいながらも、集中力が途切れることはなかった。

――最後の引き込みからのフロントチョークは狙いどおりでしたか？

ノゲイラ　タックルでテイクダウンしたかったけど、できなかった。だから、引き込んでガードポジションからオモプラッタか、スイープにいこうと考えたんだ。そしてサイドポジションをとってからは、三角絞めを狙っていたよ。でも、彼が起き上がって逃れようとしたので、すぐさ

大反響のバック・トゥ・

まギロチンに切り替えたんだ。

――鮮やかなコンビネーションでしたよね。

ノゲイラ　ボクのチームは素晴らしい仲間が揃っているんだ。彼らとの練習のおかげさ。それに、ボクはコンビネーションの中でサブミッションを極めるのが得意なんだ。相手がこう動いたら、次の技というふうにね。

――ティム・シルビアについては、対戦してみてどう感じましたか？

ノゲイラ　シルビアは本当の意味でヘビー級ファイターだった。デカくてリーチが長く、テイクダウンしづらい相手だった。ハードなパンチもずいぶんもらったしね。予想以上の強敵だったよ。

――それにしても、これまでUFCではPRIDEファイターの負けが続いていたので、日本のファンにとっては、ようやく喜べる状況になりましたよ。

ノゲイラ　ボクの勝利を日本のファンが喜んでくれるのなら嬉しいな。ルールや闘う場所が変わると、それに適応するのは簡単なことじゃないんだ。でも、ボクは想像もつかないほど努力したからね。

――ノゲイラ選手にとってもリングからオクタゴンへの変化は大変でしたか。

ノゲイラ　そうだね。ルールだけじゃなくて、アメリカという環境はまた違うからね。

ボクの人生は順風満帆じゃなかった
でも、あきらめなければ最後には勝てるんだ

――多くのPRIDEファイターがオクタゴンで負けてきましたが、なんでだと思いますか？

ノゲイラ　それはエルボーだったり、オクタゴンのかたちや広さの問題だったりするよね。PRIDEは10分闘ったあと2分間のインターバルがあったけど、UFCは5分闘ったあ1分しか休めない。PRIDEとは違ったスタミナが必要なんだ。

――ファイトスタイルの違いもありますか？

ノゲイラ　アメリカのファイターは、ボクシングとレスリングが強いからね。どんなファイターでもこの二つはしっかりしている。それにオクタゴンにはコーナーがないから、追い詰めることができない。これに苦しめられているんだ。でも、日本で活躍したファイターは、適応に少し時間がかかっているだけで間違いなく強いから、近い将来、アメリカでも活躍するようになるだろうね。



何度もノゲイラの顔面を捕らえたシルビアのストレート。1ラウンド、ノゲイラはダウンを奪われるなど、大ピンチに陥ったが、ひたすらチャンスを待ち続けて一本勝ちした。

――今日はヒカルド・アルメイダもいい試合をしましたよね

ノゲイラ　うん。やっぱり柔術がキーなのさ。みんな信じないけど、この競技において柔術こそがもっとも大事なんだ。ボクはその柔術をオクタゴン仕様に変えた。多くのファイターがオクタゴンに来て、戦術を変えて、失敗している。でも、ボクは柔術を使い続けている。この競技に付け焼き刃の技術は通用しない。自分がやってきたことをやることが本当は重要なんだ。

――なるほど。では、今回UFCヘビー級の暫定王者となったわけですけど、現王者ランディ・クートゥアーとの王座統一戦については、どのように考えていますか？

ノゲイラ　ランディがUFCに帰ってくるなら、闘いたい。ボクはいつでも待っているよ。この試合が実現するかどうかは、ダナの交渉次第だろうね。

――あなたの最大のライバルであるヒョードルがUFCに来なかったことについては、どう思いますか？

ノゲイラ　彼の意思がなんであれ、ボクはここにいるし、ベルトを持っている。いまボクはUFCのチャンピオンだ。いつでも彼の挑戦は受けるよ。彼はボクが闘ってきた中でも、もっとも強い戦士だからね。いつでもいいからもう一度彼とは闘いたいよ。ただ、ボクには彼の人生にとって、何がベストな選択肢なのかはわからない。だから、もし彼がほかの団体に行くのであれば、そこでの活躍を願っているよ。

――では、UFC王者になったわけですが、これからの目標はなんですか？

ノゲイラ　ベルトを持ち続けることさ。ここには強いヘビー級ファイターがたくさんいる。彼らからの挑戦を一人ずつ受けていきたいね。

――近い将来、なんとか日本でも再びノゲイラ選手の試合が観たいのですが……。

ノゲイラ　ボクのUFCとの契約が終わるまでに、UFC日本大会ができると信じているさ。でも、今日の試合すら日本のファンはライブで観られないんだろう？

――PCのオンデマンド放送が唯一の手段ですね。

ノゲイラ　一日でも早く日本でもUFCのPPVが観られることを願っているよ。ボクの闘う姿を観てほしいからね。ダナにも言っとくよ（笑）。

――お願いします！（笑）。

ノゲイラ　たぶん、近々日本に行く機会はあると思うんだ。ホジェリオが日本で試合をすることになると思うからね。そのときは、このベルトを持ってセコンドにつくよ（笑）。

――へぇ、ホジェリオが日本マット復活ですか！　どこのリングに上がりそうなんですか？

ノゲイラ　いま話をしているところみたいだから、ちょっと待っていてほしい。とにかく近い将来、日本に行きたいと思っているから、ボク自身、日本のファンに会えるのを楽しみにしているよ。

――わかりました。では、また日本で再会しましょう！

【08年2月2日／米国ネバダ州ラスベガス、マンダレイベイ・イベントセンターにて収録】

敗れたがこの男も強かった！

Tim Silvia

ティム・シルビア

「ノゲイラは生きる伝説だ」

まさに、ミノタウロ・ノゲイラの術中にハマってしまったな。彼はいつも、最初の10分で攻められながら相手を知るんだ。そして、試合のペースに慣れてきたところで、追い上げてくる。MMAの生きる伝説といっていいファイターだよ。ノゲイラは間違いなくヘビー級でナンバーワンの柔術家だ。そしてフランク・ミアがナンバー2だ。それでも俺は勝てると思っていたよ。リラックスしていたし、最初の2ラウンドはうまくいってたのにな。それでも極められてしまった。悔しいが脱帽だ（談）。



試合後のプレスカンファレンスでがっちりと握手を交わすノゲイラとシルビア。闘いの中から、お互いに認め合う部分が出てきたのだろう。

関係者はノゲイラとレスナーをどう見たか？

ノゲイラvsシルビア
レスナーvsミア

UFC81証言集

ファンのあいだで大きな波紋を呼んだ元WWEスーパースター、ブロック・レスナーの初参戦。そして観客を興奮のるつぼに巻き込んだ前PRIDEヘビー級王者、ノゲイラの鮮やかなUFC王座奪取劇。興奮冷めやらぬ『UFC81』ラスベガス大会直後、本誌取材班はファイター＆関係者を現場で次々とキャッチ！　彼らの声をここにお届けします!!

聞き手／石井史彦　構成／堀江ガンツ

「ノゲイラは凄い。彼こそ本物のヘビー級王者だ」



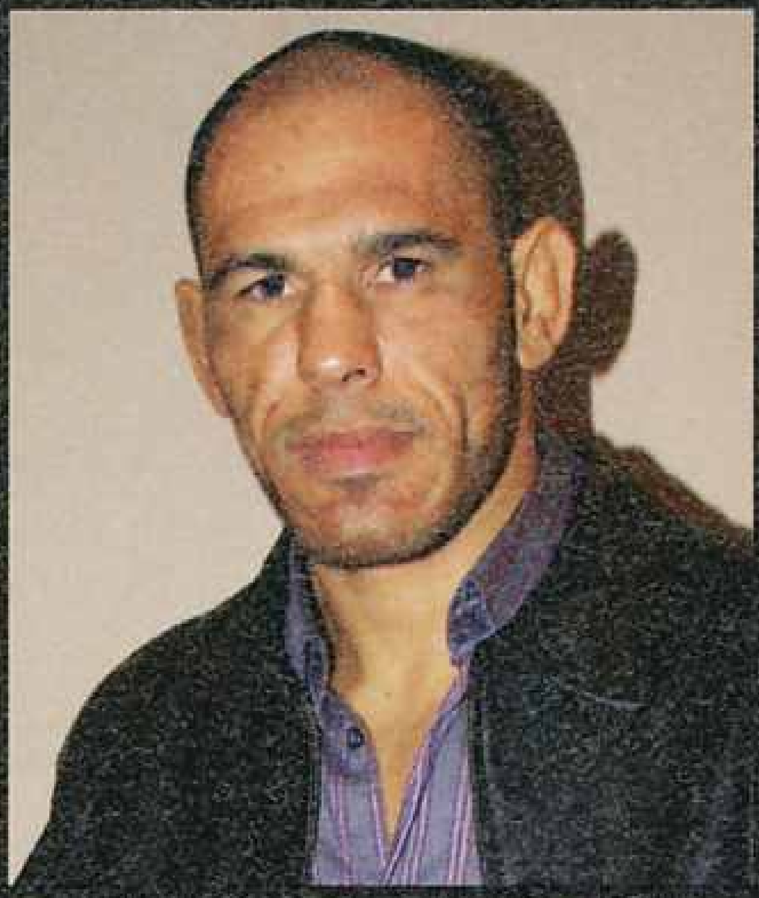
RICARDO ALMEIDA■かつてパンクラスやPRIDEで、三崎和雄や長南亮を撃破し、日本マット界無敗を誇った男。04年の引退後、柔術の指導をしていたが、『UFC81』で約4年ぶりに総合の舞台へ。復帰戦を見事、秒殺で飾ってみせた。ヘンゾの愛弟子でもある。

元パンクラス・ミドル級王者

ヒカルド・アルメイダ

ノゲイラの試合は凄かったね。彼こそが本物のヘビー級チャンピオンだよ。1ラウンド目こそ苦戦したけど、毎ラウンド、毎ラウンド、状況に対応して、戦術を変えていったからね。アンビリーバブルだったよ！　ブロック・レスナーとフランク・ミアの試合も良かった。フランクは攻められながらも自分の柔術を信じていたよね。そしてミステイクを待って、一発で極めたんだ。プロレスラーがMMAに上がっても、MMAに大きな変化はないよ。変わる必要があるのはプロレスラーのほうだろうね。もっとトレーニングしないといけない。あと今日はなんといっても、自分自身、復帰できて本当に嬉しいよ。ギロチンに懸けていたんだ。これからトップを目指したいね。

「まさに"ノゲイラ・スタイル"。兄を誇りに思うよ」



ANTONIO ROGERIO NOGUEIRA■現UFCヘビー級王者、ノゲイラの双子の弟。兄と互角とも言われる柔術テクニックと、ボクシング技術を併わせ持つ。"PRIDE消滅"後、カナダの新興団体「HCF」に参戦。そのデビュー戦をTKO勝ちで飾った。

ノゲイラ双子の弟

アントニオ・ホジェリオ・ノゲイラ

今日の試合はまさに"ノゲイラ・スタイル"の試合だったね。兄はベスト・ハートとベスト・テクニックを持っていることを証明したと思うよ。グラウンドに持ち込んで、たった30秒で首を極めたのは素晴らしかった。兄弟として誇りに思うよ。今日はフランク・ミアも良かったし、アルメイダも良かった。柔術がベストだということさ。柔術がMMAでもっとも有効なテクニックだということを、あらためて知らしめたんじゃないかな。ボクはいま、カナダの団体（HCF）で闘っているけど、独占契約じゃないから、またチャンスがあれば日本で闘いたいね。

「レスナーの試合はまた観たい。MMAで本当に闘える選手だ」



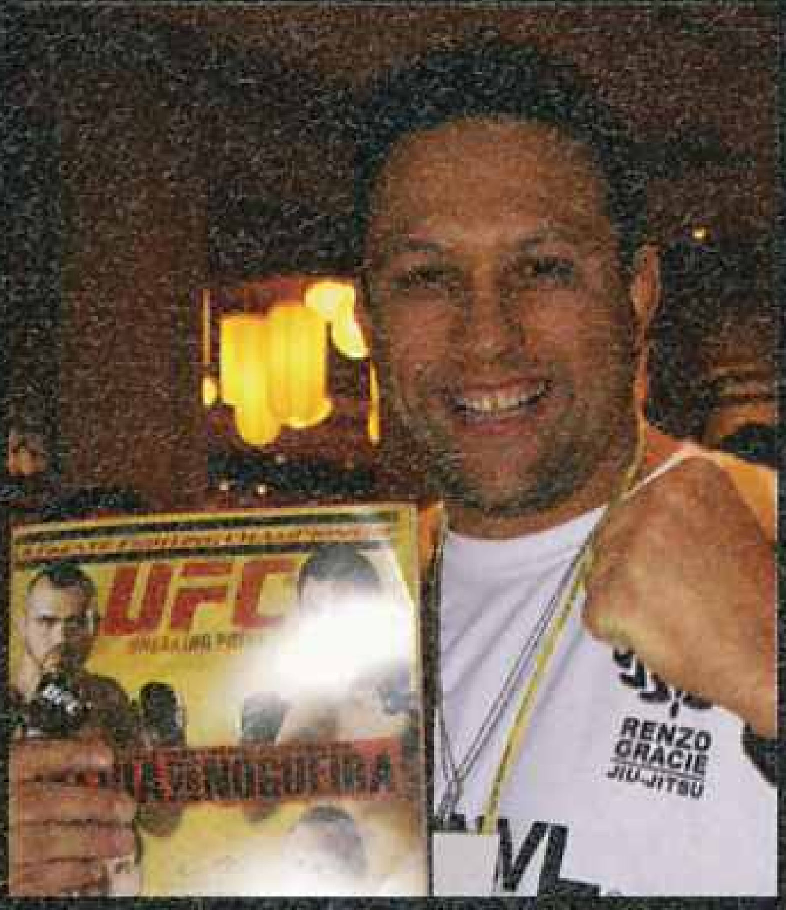
今日のファイトは楽しかったな。レスナーとミアの試合はエキサイティングだったし、ノゲイラとティムの試合も良かったよ。レスナーがUFCで本当に闘えるのか疑問だったけど、レスナーの闘いはまた観てみたいね。プロレスラーの中にはMMAで闘えない選手もいるけど、レスナーは本当に闘える選手だよ。

B.J PENN■現UFCライト級王者。2000年にブラジリアン柔術世界選手権をブラジル人以外で初めて制覇。総合転向後も打撃の能力の高さも示し快進撃、"天才"の名をほしいままにしてきた。パウンド・フォー・パウンドの呼び声も高い。

現UFCライト級王者

BJペン

「アルメイダは満点以上！今日は柔術デーだったよ」



RENZO GRACIE■日本では『PRIDE.1』から活躍したベテラン柔術ファイター。ブラジリアン柔術の創設者、カーロス・グレイシーの孫であり、現在はニューヨークを中心に米国東部で柔術道場を大々的に展開中。ビジネスマンとしても成功を収めている。

柔術界の兄貴

ヘンゾ・グレイシー

今日はノゲイラもミアも良かったけど、一番良かったのは、ヒカルド（・アルメイダ）だよ！　10点満点で10.5点！　満点以上のビューティフルな試合だったし、最後は素晴らしいギロチンだった。彼にギロチンを教えたとき、本当にマスターするのに1年もかかったんだ。苦労して自分のモノにしたテクニックで勝った彼を誇りに思うよ。ヒカルドは6試合契約だから、ベルトを獲るには、充分時間があるよ。彼の身体はちょっと小さいけど、柔術ガイは対格差を克服して勝つんだ。今日も柔術デーだったろ？　ミアもノゲイラもしっかり極めて勝って、ビッグガイどもは泣きながら帰ったよ！（あなた自身の試合は？）いまのところ、何も決まってないけど、次はフランク・シャムロックとのリマッチになるだろうね。でも、いまは仕事で忙しいんだ。マンハッタンに900人の生徒がいるからね。

「レスナーvsミアのようなフリークショーはごめんだ！」



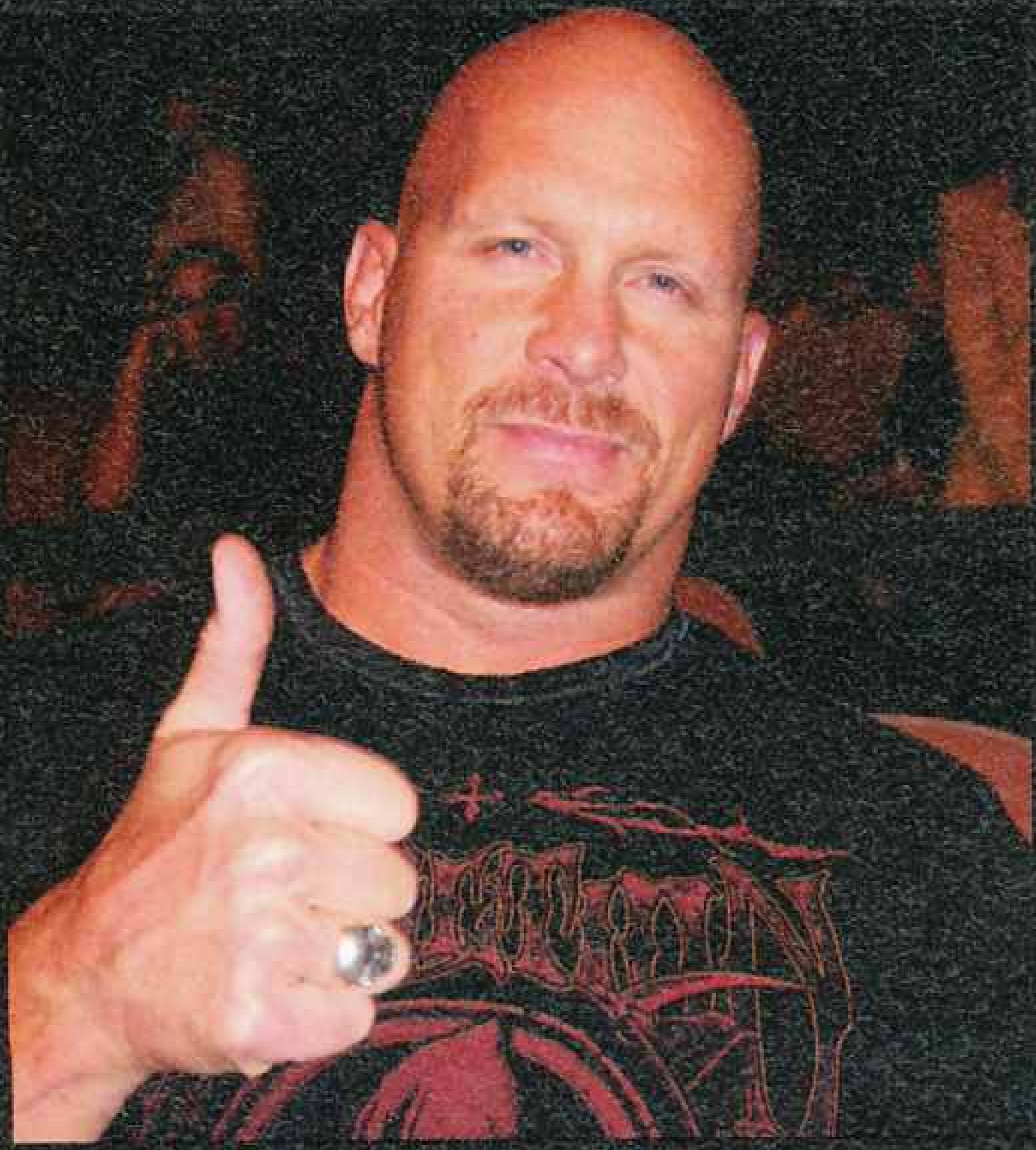
ウェルター級無冠の帝王

ジョン・フィッチ

ブロック・レスナーは素晴らしいレスラーだけど、MMA2戦目で元王者と闘うのは間違っているね。コミッショナーはこの試合を許可するべきじゃなかったよ。そして、もっともムカつくのは、彼が25万ドルもファイトマネーをもらったことだよ。勝ったフランク・ミアは8万ドルしかもらってないのにね。俺は誰がUFCに来ようともかまわないが、そんなフリークショーだけはまっぴらゴメンだよ。プロレスラーが真剣にMMAに取り組むのならかまわない。でも、いま現在起きていることはフリークショーだ。試合に関しては悪くなかったけど、最後がいただけない。レスナーは痛みでタップしたんじゃなくて、パニックになってタップしたんだ。ヒザ十字は浅かったからね。彼はビビッて、タップしただけだ。あんな試合でもファイトマネーに加えて、PPVボーナスもあるから、相当もらったんじゃないかな。合計で50万ドルはいっただろうな。それに対して、ノゲイラは凄かったな。あの美しいスイープには驚いたよ。思わず大声を出してしまったさ（笑）。

JOHN FITCH■GSPが支配する超激戦区のウェルター級で、ディエゴ・サンチェスら強豪相手に7連勝中の次期挑戦者最有力候補。昨年、50万ドルの高級マンションをローンで購入しているが、サブプライム問題が心配。

大反響のバック・トゥ・



「レスナーは6カ月あればベストファイタになるだろうよ」

“ストーンコールド”

スティーブ・オースチン

ブロック・レスナーは試合を支配していたな。最後にミステイクをしてしまって、逆転負けを食らったが、6カ月もあればUFCヘビー級のベストファイターになるだろうよ。ただ、ちょっとだけ、技術を勉強しないとな。（プロレスラーがMMAに挑戦することは素晴らしいことだと思いますか？）ああ、そうだな。次は俺かもな。

STONE COLD STEAVE AUSTIN■WWEスーパースター。90年代後半のWWF（当時）社長のビンス・マクマホンと抗争で大ブームを巻き起こした。リング上でビールをガブ飲みするパフォーマンスは一流。決めゼリフは「What?」。

「レスナーはいつか手がつけられなくなる」



MONTE COX■ヒョードル擁する『M-1グローバル』CEO。ティム・シルビアらミレティッチ軍団のマネージャーでもある。当初今年2月に予定されていたはずの旗揚げ戦がいつになったら行なわれるのかは、すでにミステリーになりつつある。

『M-1グローバル』CEO

モンテ・コックス

今日のメインイベントは、ティムをマネージメントしている私たちからすれば、負けてしまったけれど、いい試合だったと思うよ。ティムには最近「アグレッシブじゃない」という批判があった。だから試合前にロッカールームで話したんだ。「アグレッシブにいけ！」とね。そして最初の12分間、ノゲイラを追いかけて攻め立てた。残念ながら、最後はチョークでつかまってしまったけど、あれはノゲイラをほめるべきだろう。今日はノゲイラの素晴らしい勝利だったけど、ティムの素晴らしい試合でもあったね。ブロック・レスナーについては、じつは私は彼のビッグファンなんだ。今日は負けてしまったけど、いつの日か、手のつけられない選手になっていると思うよ。（『M－1グローバル』の旗揚げ戦はいつになりますか？）5月3日にシカゴ大会を開くべく調整しているよ。私たちはまだ始まったばかりの会社だから、最初はミステイクをしたくないから、慎重に進めているんだよ。日本でも今年中に必ず大会を開きたいね。

ファイター、関係者

2.2U

筋肉三兄弟長男

マーク・コールマン

メインイベントはもう「ワォ！」って感じだな。ミノタウロはみんなが知っているとおり、ビッグハートを持つ男だ。そして強いアゴを持っている。彼はデカいシルビアからあれだけ強烈なパンチをもらってサバイブしたんだから凄いよ。かつて彼とPRIDE王座を争った人間として、彼の勝利を嬉しく思うよ。ブロック・レスナーはアニマルだ。すぐに強い選手になって、いつかチャンピオンになるよ。今回は相手が悪かった。ミアのテクニックはUFCの中でももっとも高いレベルだからな。でも、レスナーの突進力は凄かったよ。俺は闘いたくない（笑）。彼は敗戦から学んで強くなるだろう。今日は柔術の日だったんだ。アルメイダも良かったしな。でも、レスリングが勝つ日もくるさ。俺自身もいまオファーが来ていて、決断するときが来たんだ。ビッグなオファーが5つも来ている。すべてMMAだぞ。ケージで闘いたいね。それが俺の原点だからな。PRIDEは好きだったよ。でもリングは俺に向かないんだ。ケージで闘ったほうが俺は強いよ。



「レスナーの突進力は凄い俺は闘いたくない（笑）」

MARK COLEMAN■初代UFCヘビー級王者にして、『PRIDE GP2000』覇者。黎明期の米MMAシーンでグラウンド&パウンドスタイルを確立し、活躍。日本マット界でも、熱血筋肉三兄弟の長男として人気を集めた。次回、『UFC82』で殿堂入り確定!?

「ブロックはあと2試合でベルトを狙えるだろう」

THE UNDERTAKE■WWEスーパースター。「地獄の墓堀人」のキャラクターで20年近くの長きにわたり、WWEのトップに君臨し続けるアメリカンプロレスで最も人気のある選手の一人。MMAのファンとしても知られ、何度か会場にも姿を見せている。



アメリカン・バッドアス

ジ・アンダーテイカー

ブロックの経験はまだ充分じゃなかったが、あと2試合もすれば、ベルトを狙えるだろう。そんだけの可能性は見せてくれたんじゃないか。（プロレスラーvsMMAファイターという図式については？）ま、これはまったく別のスポーツだからな。でも、ブロックがトレーニングすれば、いつかヘビー級を支配できるようになるよ。ノゲイラとシルビアの試合も素晴らしかったな。じつは俺はMMAが好きなんだ。会場にも何度か来ているけど、今日は楽しかったよ。

TNA世界ヘビー級王者

カート・アングル

UFCは好きだよ。世界中のベストアスリートが集まっている。MMAの連中とも話したが、彼らもプロレスを観ているようだし、ファンもクロスオーバーしている。今日のような試合はプロレス、MMA両方にとっていいことだよ。いまはMMAのスキルが上がっている。昔は、柔術家は柔術だけ、ボクサーはボクシングしかできなかったのにな。ノゲイラのチョークも、ミアの足関節も凄かったな。楽しかったから、また観に来るよ。



KURT ANGLE■元WWEスーパースター。現在は、そのライバル団体であり、UFCにとっては同じケーブルテレビで流されるTNAに参戦中。96年アトランタ五輪レスリング金メダリストでもあり、過去にたびたびMMA転向のウワサが流された。

「クロスオーバーはMMA、プロレス両方にとっていいことだ」

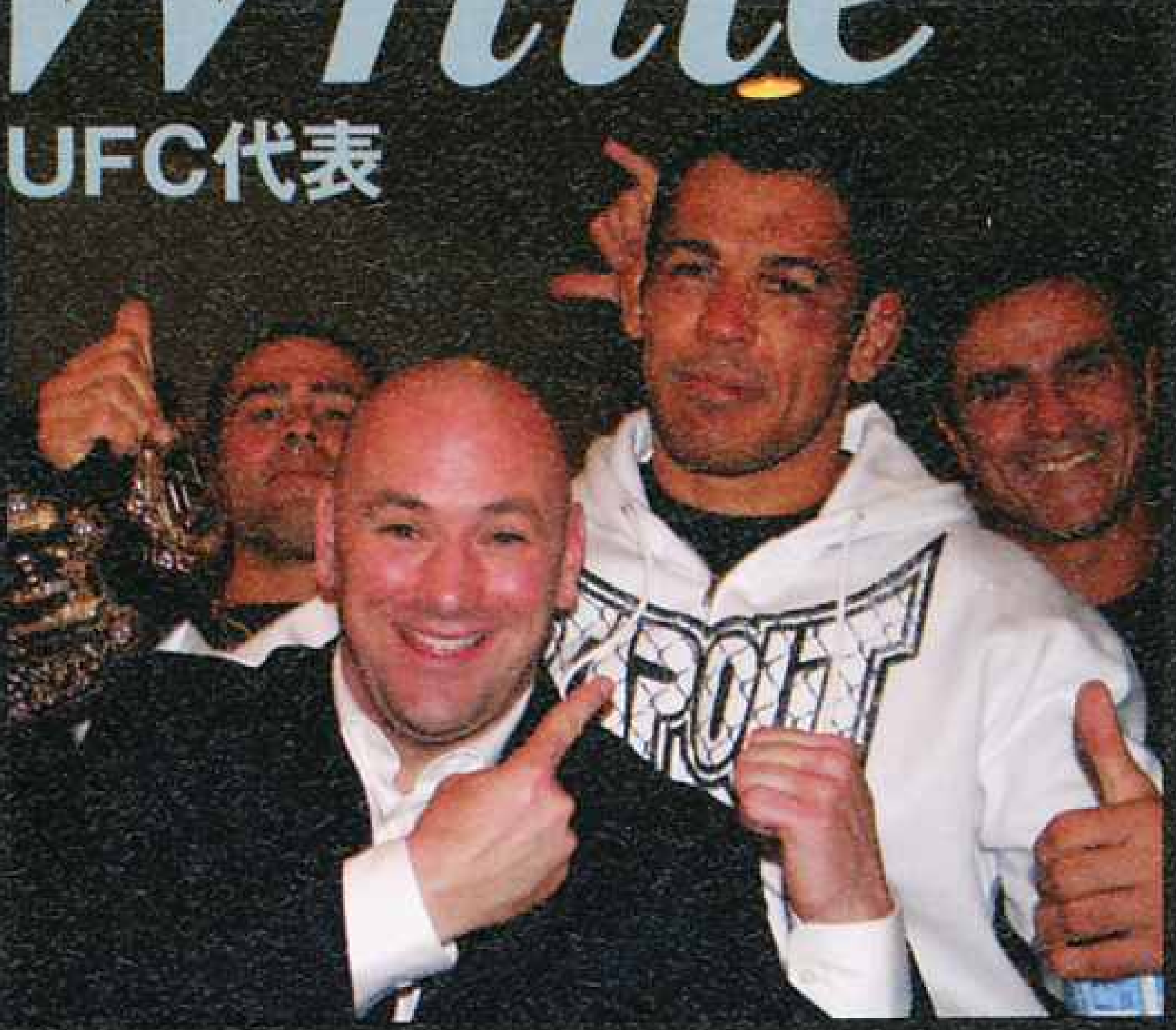


今月もやっぱり"ジャイアン節"炸裂!
ヒョードル、ミルコ、五味をブッタ斬る!!

ダナ・ホワイト

Dana White

UFC代表



「五味が『戦極』と契約したって？ 俺にとってはどうでもいい話だ!」

毎度おなじみ好評連載（？）、ダナの毒舌劇場。今回は2.2『UFC81』大会直前にインタビューできるはずが、「外せない急用ができた」とのことでドタキャン! それでも、大会後に短いながらも取材を受けてくれ、ノゲイラvsシルビア、レスナーvsミアの総括。さらにUFC参戦が噂されながら『戦極』との契約が発表された五味ついても語ってくれた。

聞き手／堀江ガンツ　通訳／石井史彦

——ようやくダナ代表がつかまり安心しました（笑）。

ダナ　試合前のインタビューに応えられなくてすまなかった。ちょっと急用が入ってしまってね。いまなら少し時間がとれるよ。

——では早速、お願いします。まず、代表から見て、ブロック・レスナーの闘いぶりはいかがでしたか？

ダナ　見てのとおりだよ。試合前に多くの人間が「ブロック・レスナーは本当に闘えるのか？」と言っていたが、その答えは「イエス」だ。今日の闘いで彼がUFCでも闘えることは充分に証明されただろう。MMAを一試合しか闘ったことのない人間が、元王者で偉大な柔術家を相手に見事なパフォーマンスを見せたんだからな。試合後、リングサイドにいたランペイジやマット・ヒューズが「この男は、いつか凄い選手になる」って言ってきたよ。彼らのその反応が今日のすべてだろう。

——今回はいきなり元王者との対戦でしたが、次はどんな相手と闘わせるつもりですか？

ダナ　誰がいいかわからない。でも、これから興味深いことになるな。

——今回、プロレスとのクロスオーバーとなりましたが、それは成功したと思いますか？

ダナ　もちろんだ。今日の盛り上がりを見ただろう。オクタゴンサイドにはWWEとTNAから有名選手が来てくれた。ビンス・マクマホンも電話してきたしね。スパイクTVのプロレス中継の中で、UFCの番組を告知できたことも良かった。今回、UFCを観たことがなかったプロレスファンもたくさん観てくれたことだろう。

——では続いて、ノゲイラvsシルビアはどうでしたか？

ダナ　いい試合だった。ヘビー級タイトルを争うにふさわしい試合だったよ。打撃で試合を支配していたティムも良かったし、それをしのいで柔術で勝ったノゲイラもさすがだった。どちらの良さも出ていたよ。

——多くのPRIDEファイターがオクタゴンで敗れる中、ノゲイラはベルトを腰に巻きましたね。ノゲイラはほかの選手と違ってオクタゴンを苦にしなかったと思いますか？

ダナ　いや、まだまだ慣れてはいないだろう。だから、ここ2試合苦しい闘いが続いている。ただ、それでも勝つのがノゲイラだ。それだけの実力を持っているということだよ。

——ランディ・クートゥアーとの王座統一戦は実現しそうですか？

ダナ　そのための働きかけを、いましているところだ。ランディはこの舞台に上がって、ノゲイラにタイトル戦を闘うチャンスを与えるべきだ。彼は以前、リデルに二度負けて、ライトヘビー級に居場所がなくなって引退した。そのあと、私に電話してきて「ヘビー級に転向してタイトルマッチをやりたい」と言ってきたんだ。それを実現させてやったんだから、今度は彼が私に借りを返すべきだろう。それに何より、彼は結んだ契約を誠実に実行すべきだ。

——ランディにもヒョードルにも勝っていないノゲイラは、ヘビー級ナンバーワンとは呼べないという声もあります。

ダナ　くだらない意見だ。それでいて「ヒョードルがナンバーワンだ」なんてぬかしやがるんだろう。ファ●ク！　何度も言わせてもらうが、断じてヒョードルはトップファイターではない。彼は2005年にミルコを倒して以来、誰も強いファイターを倒していない。そして、そのミルコだってUFCでは、トップファイターでもない二人の男に負けたんだ。そんな状況にも関わらず、ヒョードルは、ウェブサイトでパウンド・フォー・パウンド、世界ナンバーワンだとランクされていたんだ。クレイジーだよ。まるで意味がわからない。これは『MMA WEEKLY』のようなメディアのセンスがおかしいからだ。あのランキングを作っているヤツは、俺と討論してみろよ。

——しかし、ヒョードルは新チャンピオンのノゲイラを二度にわたって倒していますよ。

ダナ　それはいったい、いつの時代の話だ？　最近では、ただデカいだけの韓国人を倒したぐらいだろ。それでもランキング・ナンバーワンだというのか？　ファ●キン・ジョークだ！　次の質問にいってくれ。

——ミルコの次の試合は決まりそうですか？

ダナ　ミルコについては、彼からの連絡を待っている状態だ。彼には決断を待つと伝えたが、まだ何も決まってないようだ。これ以上、待つことはできないな。たぶん、次の月曜日がデッドラインだ。

——ミルコの契約が解除されることもありますか？

ダナ　さあね？　近いうちに彼から返答が来るだろう。この質問には答えられないな！　次の質問は？

——五味隆典選手が『戦極』への参戦を発表しましたが、一言いただけますか？

ダナ　確かに我々もゴミにはオファーをかけていたが、彼らは私たちより多くの金額でオファーしたらしいな。ゴミにとってはいいことだよ。

——未練はない、と？

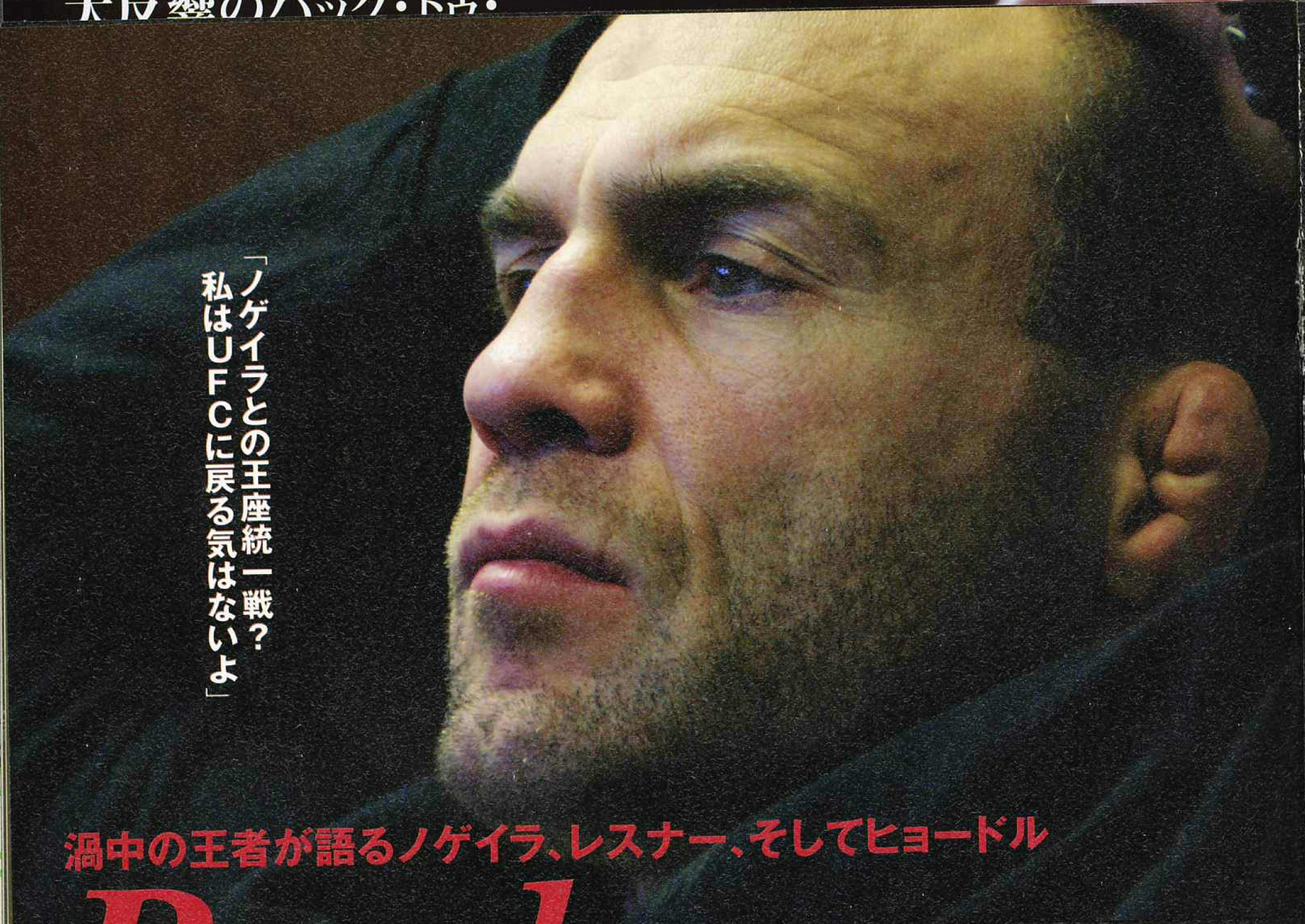
ダナ　いいか、よく聞けよ。ゴミが自分を世界最強だと証明したいなら、ここに来なければならない。UFCにはBJ・ペンやショーン・シャークなど、彼が闘うべきトップファイターたちがいる。しかし彼は今回、その闘いに背を向けた。それだけだ。彼らは○○万ドル用意したらしい。ゴミにとっては良いことだ。俺にはどうでもいい話だ！

——日本については、何かアナウンスがあると言ってましたが、それはいつになりますか？

ダナ　それはまだハッキリとは言えないな。だが、いい発表ができるかもしれないから、楽しみにしていてくれ。今日はここまでだ！

【08年2月2日／米国ネバダ州ラスベガス、マンダレイベイ・イベントセンターにて収録】

大反響のバック・トゥ・



「ノゲイラとの王座統一戦？
私はＵＦＣに戻る気はないよ」

渦中の王者が語るノゲイラ、レスナー、そしてヒョードル

Randy Couture

ランディ・クートゥアー



ノゲイラvsシルビア、レスナーvsミアとヘビー級で二つのビッグファイトが組まれた2.2『UFC81』ラスベガス大会。その二つの闘いを、UFCオフィシャル的にはまだ現ヘビー級王者でありながら、UFCとの絶縁を宣言している渦中の男、ランディ・クートゥアーはどう見たのか？　その感想と気になるヒョードル戦の行方を大会翌日、ラスベガスにあるランディのジムで聞いてきた。

聞き手&撮影／堀江ガンツ　通訳／石井史彦

——昨日の『ＵＦＣ81』はメインとセミでヘビー級の大一番があったので、ＵＦＣヘビー級王者であるランディさんに、試合の感想をうかがいに来ました！

ランディ　私はもうＵＦＣを辞めた人間だけどね（笑）。

——でも、ＵＦＣオフィシャル的には「現王者」ですから（笑）。

ランディ　まあいい。なんなりと聞いてくれ。

——まずは、元全米大学アマレス王者であり、ＷＷＥのスーパースターでもあったブロック・レスナーのＵＦＣデビュー戦を、ランディさんはどう見ましたか？

ランディ　まず彼はアスリートとして優秀だ。ビッグだし、パワフル。でも、アマレスラー、そしてプロレスラーからＭＭＡファイターに転身するには、充分な時間がなかったようだね。

——少々準備不足に見えましたか。

ランディ　ブロックはポテンシャルのある選手だけど、いきなりトップファイターと試合をさせるのは、どうかと思っていたんだ。それに、たとえば打撃のスペシャリストがＭＭＡに転身して、グラップラーと闘うのなら、寝かされる前に打撃で倒すこともあるかもしれないが、レスラーが柔術のスペシャリストと闘うのなら、何かが起きる可能性は少ない。だからブロックの扱いには疑問に思っていたけど、実際、私の予想どおりの展開になったね。

——下馬評では「レスナー有利」の声が多かった中、ランディさんは「ミア勝利」を予想してましたもん

ね。

ランディ　うん。ブロックは最初に嵐のような攻撃をしたけど、フランク（・ミア）はポジションをうまくとって防御していたし、足関節は大きな武器だからね。やはり経験と知識、そしてこの競技での技術の差はいかんともしがたいものがあったよ。ただ、ブロックが素晴らしい素質を持っていることは間違いない。時間をかければ、いいファイターになれると思うよ。ショーン・シャーク（UFCライト級王者）たちと練習しているようだから、トレーニング環境もいいようだしね。

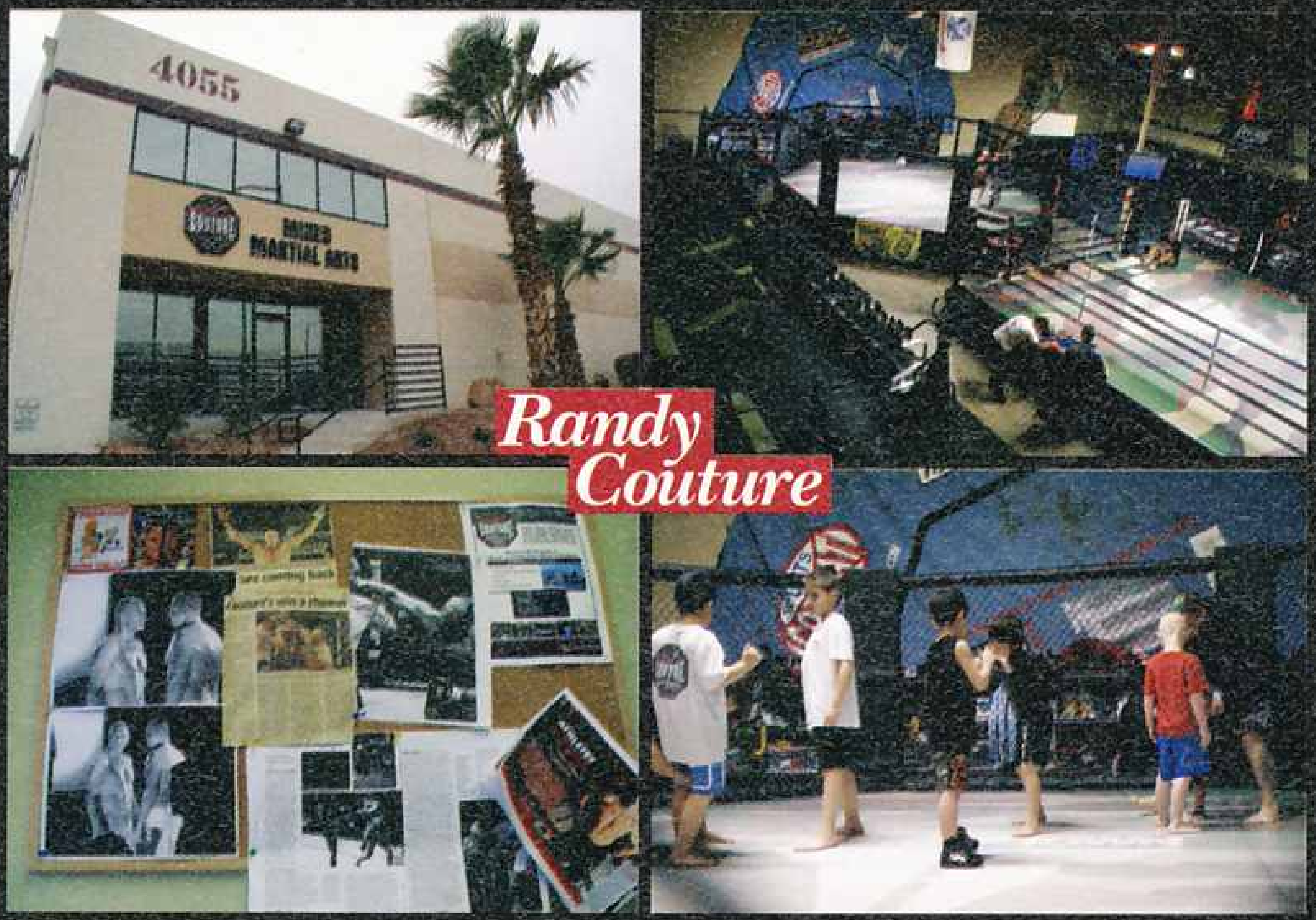
――今回のプロレスラーとMMAファイターのクロスオーバーについてはどう思いますか？

ランディ　プロレスラーたちは素晴らしいアスリートだ。フットボーラーやアマチュアレスラーらと同じようにね。私のジムにもフットボーラーやアマレスラーがMMA転向のために練習に来ているけど、みんな成功するために必要なスキルを新たに学んでいるよ。真剣にこの競技に取り組んでいる選手なら、出身となるスポーツがなんであろうが関係ないね。

――経済面ではどう思いますか？　今回は名声のあるプロレスラーが参戦することによって、普段、MMAを観ないプロレスファンも注目していたと思います。オクタゴンサイドにはWWEのスーパースターが顔を見せたりとか、こういった相乗効果についてはどう思いますか？

ランディ　WWEのプロレスラーたち以外にも、（ラッパーの）Jay－Zもいたし、（NBAの）シャキール・オニールもオクタゴンサイドにいた。彼らは明らかにブロックの応援に来ていたね。ただ、いずれにせよ、MMAはブロックが来る前からすでにプロレスリングを観ているファンをも魅了していたんだ。だから、今回のブロックの参戦は大きなことではないよ。「ブロックが出場するから今回だけ大会を観る」というハードコアなプロレスファンが少しはいたかもしれないけど、それはとるに足らないことだよ。

ノゲイラのフィニッシュは見事だった。でも、彼が私をテイクダウンすることはできない



――逆に、今回レスナーが参戦することによって、MMAがフェイクファイトだと勘違いされることを懸念していた関係者もいたようですけど、そういったことについてはどう思いますか？

ランディ　そんな懸念は昨日の試合で晴れたと思うよ。昨日、フランクが受けたパンチはプロレスのときのパンチはまったく違っただろう。確かにMMAでも、ちょっとワークかシュートか疑問を持たれるような試合が過去にはあったよ。でも、いまのアメリカでそんなことはないよ。この競技はしっかりとしたスポーツなんだ。

――アスレチック・コミッションもありますしね。今後、レスナーに続いて、ほかにもプロレスから参戦してくる選手はいると思いますか？

ランディ　プロレスラーに限らず、優秀なアスリートがこの競技にどんどん参加してくる可能性は高いね。プロレスラーでいえば、カート・アングルがそんな話をしている。彼もアマチュアレスラー、そしてプロレスラーとして成功した世界有数のアスリートだから、打撃やサブミッションのスキルを身につければいいファイターになる可能性はあるよ。でも、ブロックのときのように、いきなりトップファイターと闘わせたらダメだよ。

――レスナーのような、他分野のトップ選手が参戦してくるというのは、MMAの地位が上がってきていることの表われだと思いますけど。

ランディ　そうだろうね。ただ、待遇面ではまだまだ未成熟だよ。いまはUFCの経営陣だけが金を儲けている状況なんだ。一部のトップファイターはたくさんギャランティをもらっているが、それは限られている。いまUFCはテレビの視聴率も上がっているし、PPVの購入数も伸びている。それなのに、ボクシングに比べれば、ファイターが得る金額は遥かに少ないんだ。

――ランディさんは、そういった状況を改善するために、UFCと争っているわけですか？

ランディ　まあ……、そういった話は次の機会にしよう。あまり語ってはいけないようなんでね（笑）。

――わかりました（笑）。では、続いてノゲイラvsシルビアについて聞きたいのですが。

ランディ　いい試合だったね。（序盤押されていた）あの展開から、ノゲイラのようにサバイブできるファイターはいないよ。これまでシルビアと闘ったファイターはみんなあの圧力に押し潰されてきた。でも、ノゲイラはしっかりと耐え抜き、最後には得意のグラウンドに持ち込んでフィニッシュした。じつに見事だったよ。

――負けたシルビアはどうでした？

ランディ　ティムはちょっと動きが硬かったね。1～2ラウンドはノゲイラに対して有効な打撃を見舞っていたけど、それでもこれまでの彼の試合と比べると、動きが硬かったように思えるよ。グラウンドに付き合わずスタンドで勝負したのは正しいアプローチだったけどね。

――1～2ラウンドはうまくタックルを潰していましたよね。ノゲイラはテイクダウンできなくて、苦戦してました。

ランディ　ティムを倒すのは難しいんだ。彼は身体が大きいだけでなく、腰も重い。もちろんリーチが長くて懐も深いから、タックルはなかなか決まらないんだよ。

――でも、ランディさんは昨年、ティムからテイクダウンを奪ってましたよね（笑）。

ランディ　なんとかね（笑）。でも、ティムを倒すのは簡単なことじゃなかったよ。

――ランディさんは試合前、「ノゲイラ不利」と予想されていましたけど、それはシルビアからテイクダウンを奪うことが難しいからですか？

ランディ　そうだね。ノゲイラはテイクダウンできないまま5ラウンド終了のブザーを聞くことになるだろうと思ってたよ。ただ、ティムもノゲイラをKOすることはできないと思っていた。ノゲイラはとにかくしぶとくて、KOするのが難しい選手

レスナーvsミアが他団体で実現していたら ダナは徹底的にこき下ろしただろうね（笑）

だからね。

——最後はタックルではなく、引き込んでからのスイープで寝技で上になりましたね。

ランディ　タックルで倒せないなら、ああするしかなかっただろう。でも、寝技になってもティムは重いから、スイープするのは大変なんだ。でも、ノゲイラはいとも簡単にあの巨体をひっくり返してみせたのだから、呆れたよ（笑）。そして、サイドポジションを取ってからはもう、ノゲイラの独壇場だったね。最後のアームバーからギロチンにいくコンビネーションも見事だったよ。

——ノゲイラは試合後に、ランディさんとの対戦を望んでいました。ダナ・ホワイト代表もこの試合を組みたい意向のようですが。

ランディ　でも、私はUFCに戻る気持ちはないよ。

——では、UFC以外の舞台だったら興味はありますか？

ランディ　現時点ではまだ頭にない。いまはヒョードルとの試合にフォーカスしているからね。

——狙うはヒョードルの首一つ、と。

ランディ　私は一つ一つステップを踏んでいきたいからね。もし、ヒョードル戦をクリアしたら、ノゲイラとの闘いにも興味が出てくるかもしれない。彼はいいファイターだし、私と闘えば素晴らしい試合が見せられるとは思うよ。

——もしこの試合が実現したら、どんな闘いになると思いますか？

ランディ　彼はトラブルを抱えることになるだろうね。でも、ノゲイラはグラウンド・テクニックに優れているだけでなく、身体も大きいし、力も強い。（自分と同じタイプの）ダン（・ヘンダーソン）にも勝っているし、私にとっても強敵だよ。ただ、レスリング・スキルは彼より上だから、私の望むスタンドの闘いになると思うよ。

——ノゲイラはどれくらいタイトルを保持できると思いますか？

ランディ　それは、難しい質問だね。誰が負けてもおかしくないのがこのスポーツだから（笑）。

——では、誰が次の挑戦者にふさわしいと思いますか？

ランディ　ミルコに勝ったチーク・コンゴはいいストライカーだし、（ファブリシオ・）ヴェウドゥムもいいファイターだ。（アンドレイ・）アルロフスキーもあと一試合契約が残っている。

——ブランドン・ベラはどうですか？

ランディ　ブランドンはちょっとヘビー級としては小さいね。ティムとの試合を観てそう思ったよ。彼は205ンド（ライトヘビー級）のほうが活躍できると思うよ。



昨年3月に1年のブランクを経た復帰戦で、ティム・シルビアを破りUFCヘビー級王者となったクートゥアー。ノゲイラがシルビアに大苦戦したことで、その相手に完勝したクートゥアーの実力が再認識された。

——ところで、大晦日にあったヒョードルvsチェ・ホンマン戦はテレビでご覧になりましたか？

ランディ　残念ながら見逃してしまったよ。これから映像を手に入れて、観てみたいとは思うけど。

——このマッチアップについて、ダナはさかんに「ジョークだ！」と発言していますけど、ランディさんはどう思いますか？

ランディ　それはダナの典型的な物言いだね。彼は何をするのかではなく、どの団体がやるのかが問題なんだ（笑）。彼が関わってないことはすべてジョークなんだよ。

——他競技で実績のあるルーキーとMMAトップファイターという図式は、レスナーvsミアとまったく一緒ですもんね（笑）。

ランディ　そうだろ？　もしブロックとフランクの試合を他団体でマッチアップしていたら、ダナは徹底的にこき下ろしていただろうね（笑）。

——まあ、そうでしょうね（笑）。では、今年のランディさんのプランを教えていただけますか？

ランディ　とにかくUFCとの契約が切れるのを待つだけだよ。

——UFC側はなんとか和解して戻ってきてほしいと考えているようですが。

ランディ　和解だって？　私を訴えたのは彼らのほうだ!!　彼らはファイターがエクストリーム・クートゥアーのアパレルを着用するのを禁止して、たとえこのジムで練習している選手であろうと、コスチュームにロゴをつけることさえ禁止しているんだ。そんなことをしておきながら「和解したい」なんて理解できない。和解への道はまったく見えないよ。

——万が一、ダナがヒョードルをUFCに連れてくれば、復帰しますか？

ランディ　もしそれが可能ならね。ただ、それは起こらない。私はその提案もしたんだ。ヒョードル陣営と手を組んではどうかな、とさえね。でも、それを蹴ったのは彼らのほうだ。残念ながら、この状況が変わるとは思えないな。

——なるほど。

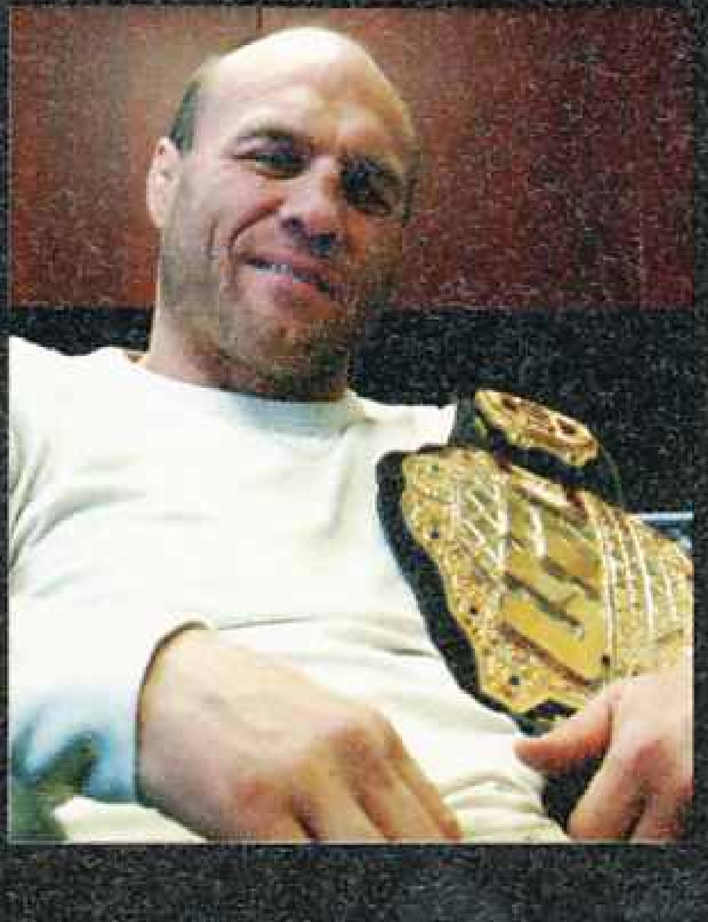
ランディ　私とヒョードルの試合は、UFC以外の場所で実現することになると思う。（突然、大きな声で）でもUFCで実現してほしかったんだ！　私は12年間、UFCで闘ってきた。多くのチャンスをモノにしてきたし、ここでヒョードル相手にタイトル防衛戦をやりたかったよ。でも、それは実現しないんだ。

——それはヒョードルがオクタゴンに入りたがらない、金網で闘うことを怖がっているからだ、という人もいますが。

ランディ　それが本当だとは思わないな。UFCに参戦しないのは条件の問題なんだ。そして彼はロシアや日本で闘うことを望んでいるが、UFCはそれを許さない。まあ、ヒョードルの件についてはこれぐらいにしておこう。私はこの試合について、まだ話すことはできないんだ。

——わかりました。早くそのお話が聞けることを期待しています！

【08年2月3日／米国ネダ州ラスベガス、エクストリーム・クートゥアーにて収録】



Randy Couture
1963年6月22日、米国ワシントン州出身。97年UFCデビューし、ライトヘビー級とヘビー級の二階級を制覇した唯一の選手となる。昨年3月、1年のブランクを経て現役復帰し、ヘビー級王座に返り咲いたが、その後、UFC離脱を表明した。188センチ、100キロ。



ノゲイラvsシルビア
レスナーvsミアで
何が起こっていたのか？

"世界のTK" 髙阪剛の技術講座

2.2 UFC81

技術論に疎い（?）本誌読者には「わかりやすい」と好評の『TK式プロフェッショナル講座』。
今回はノゲイラvsシルビア、レスナーvsミアの二大カードを分析。はたしてオクタゴンの中では、何が起こっていたのか？

聞き手／堀江ガンツ　撮影／Josh Hedges（UFC）

——今回も2・2『UFC81』を"世界のTK"にぜひ解説してもらおうとうかがいました！

髙阪　でも"世界のTK"って呼ばれるの日本だけだからね。アメリカやったら"滋賀のTK"ぐらいかな。一気に狭くなって（笑）。

——アメリカ人は滋賀県知らないでしょ！（笑）。

髙阪　いや、向こうのテレビのテロップで「ツヨシ・コーサカ　フロム　シガ・ジャパン」って出るんですよ。

——では"滋賀のTK"にお聞きしていきたいと思います（笑）。まずはメインイベントのノゲイラvsティム・シルビア戦ですけど、これはどう見ましたか？

髙阪　この試合はまったく予想してたとおりになったんですよ。というのは、ノゲイラが勝つにはいかに金網を使わないかというところにキーがあると思っていて。

——金網を使わない？

髙阪　普通、オクタゴンでの寝技というのは、相手を金網際で動けなくしておいて、パウンドを打ったり、ヒジを打っていくんです。関節技にしても、押さえながらやるんだけど、ノゲイラに関しては、相手の動きを利用してとか、相手の動きを誘ってとかいう寝技なんで、金網際で動けないと意味がない寝技なんですね。

——前回のヒース・ヒーリング戦では、金網がジャマで一本奪えなかったようなところがありましたよね。

髙阪　だから、どんだけ真ん中でテイクダウンを取るかがキーになるんじゃないかと思ってましたね。

——ただ、タックルでは苦戦してましたよね。

髙阪　ティムはタックル切るのが凄くうまいんですよ。凄く反応がいい。身長が2メートル3センチもあったら、下半身が脆くなるもんなんです、普通は。自分がヒカルドン（ヒカルド・モラレス）と試合をしたときもそうでしたし。ココ（頭を指しながら）の反応が足にいくまで時間がかかるというか（笑）。

——ダハハハハ！　って、そんなに違わないでしょ！

髙阪　ともかく、あんだけ身長があって、機敏に反応できる人ってそうそういない。1回タックルで倒されたときも、ティムは殴りにいってバランスが崩れてたような感じだったので、もし切ろうとすれば、切れてたはずなんですよ。

——じゃあ、その巨体にもかかわらず機敏なところが、ずっとトップでいられる秘訣だったりするんですね。

髙阪　それでノゲイラは3ラウンドになって引き込んで。あれはウチらはフライング・ハーフガードと勝手に呼んでいるんですけど。

——フライング・ハーフガード!?って、どこが"フライング"なんですか？（笑）。

髙阪　自分から飛び込んで、ハーフガードにしてるから。フライング・アームロック（跳びつき腕十字）とかフライング・レッグロック（カニバサミ）ってあるんですけど、フライング・ハーフガードっていう技術もあるんですわ。自分からすべり込むように引き込んで。で、そこから潜って、ポジションを取り返すっていう。

——えらい地味なフライングですけど（笑）。

髙阪　本当にあれは技術としてあるんですよ。そのためには、脇を取りにいってないといけないですけど。脇を取ってないのに、ハーフガードで潜ったら、潰されておしまいだから。脇を取りにいってるからこそ、できる冒険ではありますね。

——あそこからのスイープがメチャクチャ鮮やかでしたよね。あの巨体がコロンとひっくり返って。

髙阪　あれはね、逆にティムがデカいから反応できないんですよ。潜られて小さくなられると、大きいから、上体が浮いてバランスがとれなくなってしまう。ま、もともと、ノゲイラはああいう潜りのテクニックが得意なんですけど、ああいうデカい相手に有効だということはノゲイラ自身もわかってることだし。だから再三、ハーフになろうとしてたんで。

——完全に狙っていたわけですね。ボブ・サップとか、ズールとの試合





リーチが長いノゲイラでもパンチがなかなか届かないほど懐が深いシルビア。逆にシルビアはちょっと腕を伸ばしたらノゲイラの顔面に手が届いてしまうのだから、この対格差はじつに厄介なのだ。

TK式実演解説
ノゲイラはシルビアをこうやって極めた!



スイープで上になったノゲイラは、サイドポジションを奪取。ここからノゲイラは相手の動きに応じていろいろな攻め方ができるのだという。



ノゲイラ自身が「狙っていた」と言っていた三角絞めは、このように腕と一緒に相手の頭をまたいで締め上げることで、押さえ込みながら極められる。



相手が左手を自分の首の前に持ってきたら写真のようにアームロックに。うしろに持ってきたら腕十字に移行できる。ここからシルビアが起き上がろうとしたので、ノゲイラはその起き上がる力をそのまま利用してギロチンへ持っていったのだ。

でも、あぁいうひっくり返し系の技をやってましたよね。

高阪 逆に言うと、あれしかないなあって思ってたけどね。パンチ出そうと思っても、ティムは手が伸びるし、3発以内のパンチのコンビネーションが速いんですね。とくに、まっすぐのパンチは見えない。ティムは手打ちでパンチを打っているのにしっかり届くから、僕らみたいに身体を使わなくてもいいんです。あれ、僕らがやったら、ボクシングのトレーナーに怒られますよ。それで倒せるんやから、規格外ですわ。

——でも、上になってからはノゲイラの独壇場でしたね。

高阪 あれは最初、サイドから腕を一本またいでの三角絞めを狙ってたんだと思うんですよ。シルビアの脇をとっていたノゲイラにはバリエーションがあって。アームロックにも、腕十字にもいけた。で、今回はティムが反転して起き上がってきたから首を取っただけで。ティムがほかの動きをしていればほかの対応があったと思うし、相手の動きに合わせて、やり方を変えるという寝技師の典型的なパターンですね。

——やられている側にとっては、たまんないですね。

高阪 ノゲイラが脇を取って腕を抱えた時点で、ティムにしてみればアリ地獄に捕まったというか。もがけば、もがくほどハマっていくみたいな状態ではあったわけやね。

——ノゲイラらしい試合だったわけですね。ヘビー級ではもう一試合、ブロック・レスナーのUFCデビュー戦が注目を集めたんですけど。

高阪 個人的に自分はブロック・レスナーが好きだったんですよ。シアトルに住んでた頃はけっこう、WWFを観てたんで。自分はブロックの藤田っぽいところというか、凄い不器用っぽいゴツな感じが好きなんです。

——なるほど。

高阪 だから、まっすぐの動きは強いんだろうけど、円運動が苦手なんじゃないのかなっていう、プロレスしているところを観て、そんな気がしたんです。たとえば打撃だったら、電車道みたいにバーっと打って、倒してしまうのはできるけれども、サイドステップを踏んで横から散らして、というのはちょっとできないタイプだなって。でも逆に打撃にしても、タックルにしても前に出る力はあるんで。最初、タックルで2回倒したでしょ。しかも最初のタックルなんか始まって5秒ぐらいで(笑)。

——あれは早かったですね。

高阪 その突進力にフランク・ミアはビックリしたと思うんですよ。で、2回目のときは、ジャブを当ててからタックルに入っているんです。あぁいう打撃とタックルを連動させる動きというのは、イメージしながら練習しとかないといけないんですけどね。

——じゃぁ、かなり練習をしていた、と。

高阪 うん。ただねぇ……、最後のヒザ十字は逃げられるよ、あれ!

——「これ、極まっちゃうの?」って感じでしたか(笑)。

高阪 なんで逃げない! っていうか(笑)。痛みを知らなかったのかなぁ、きっと。ちょっとは痛かったと思うんですよ、ちょっとは。だけど5秒ガマンしたら、逃げられる。そういう痛みやったと思うんですわ。そういうのは、だんだん平気になってくるから。たとえばヒールとかだと瞬間でイカれてしまうから、耐えられるとかそういう問題じゃなくなってしまうけど、ヒザ十字で、しかもあれだけ浅かったら5秒ガマンしたら、「こんなもんか」って冷静になって逃げれたと思うんですよ。でも、もの凄い早さでタップしましたからね。

——あまりの早さにレフェリーも、タップに気づいてなかったのか、ストップしなかったですよね(笑)。

高阪 レフェリーも、あれがタップじゃなくて、ケツを叩いて逃げようとしていると思ったんじゃないですかね。ボクも「ケツに掌底してるわ!」って思いましたから!

——ダハハハハ! でも、タップだった、と。

高阪 あれが一番驚いたわ(笑)。確か試合後のインタビューとかでも「足関節はよく知らなかった」みたいなことを言ってたと思うんです。

——ヒザ十字を知らずに出てくるのも凄いですけどね(笑)。

高阪 下からの腕十字に対する仕掛けには反応してましたから、そういった練習はしてたんだろうなと思うんですけど……。

——ヒザ十字は知らなかった。

高阪 知らなかったし、動きもわからなかったというか。たぶんテンパったんやろうなぁ。あれがアンクル・ロックだったら……(笑)。

——そしたら、腕立てで逃げてたら凄かったですけど(笑)。

高阪 やってほしかったね〜。そういうの大事よ(笑)。ストーンコールドもいたし。

——ちゃんとビールをガブ飲みしながら観てましたけどね。

高阪 キャラに忠実にね(笑)。でも、レスナーにはもうひとあがきしてほしかったなぁ。途中で止められたのも、ちょっとかわいそうだったし。

——後頭部にちょっと当たっただけですよね。

高阪 後頭部というか脊椎への攻撃は、絶対ダメってなってるんですけど、コツって当たるぶんには止めないんです。でも、たぶんパウンドが効いてたと思うんですよ。その中の一打が後頭部に当たったんですけど、ほかのパウンドがたいして効いてなかったら、止めてなかったと思うんやけど。逆にいえば、パウンドでダメージを与えてたということやから、あの状態で続けていたら、〝もしや〟っていうのはあったと思うし。パンチ力というかパワーを活かす試合ができるという部分は観れたから、そこは良かったと思うけど。

——でも、いまのUFCってなんでもできる選手ばかりだから、パワーだけで勝つのは難しいですよね。

高阪 とくにヘビー級っていうのは、そういうファンタジーが入るような選手がいるのが一般的だと思うけど、UFCに限ってはそういうのがないから。やっぱりレベルが高いってことが素人でもわかるやろね。でも、そこで「やる」って決めたんだから、レスナーもやるしかないですよね。

【08年2月7日/都内・A-SQUAREにて収録】

縮小版 USA COOL 宅急便

超大口スポンサー倒産の闇にうごめく怪しい影

UFCに史上最大の経営スキャンダルが勃発!?

ビッグマッチ連発に加え、地上波契約間近との報道もあり、絶好調のUFC。しかし、その一方で最大スポンサー、ザイエンス倒産にまつわるスキャンダルの影が迫っていた! アメリカMMAシーンに深い情報網を持つケビン・マスクがその疑惑に斬り込む!!（聞き手/デューク東郷）

ケビン ザイエンス問題がけっこうたいへんな騒ぎになっている。UFCの今後の行方を占う事件ですよ!

——ザイエンスってなんだっけ?

ケビン 何、眠たいこと言っているんだよ! UFCのスポンサー!! 去年までオクタゴンのド真ん中に広告を出していたエナジー・ドリンク（健康飲料）の会社だよ。「XYIENCE」のロゴを見たことあるだろう? その会社が倒産したんだ!

——それはUFCも大変じゃん!

ケビン そう、大変なんだよ! といっても、スポンサーを失なったことが大変なんじゃなくて、その周辺の環境がちょっとややこしいことになってきているんだ。

——それは、どういうことさ?

ケビン まずザイエンスについて説明すると、UFCがブレイクした2005年頃から、どこでも見かけるようになった大・大・大スポンサーだった。オクタゴン・マット以外にも、試合のあいだのコマーシャルや選手のトランクス、記者会見場でパネルなどでね。

——日本でいえば、ピーター・アーツや角ちゃん（角田信朗）を起用してコマーシャルを打っていた「エスカップ」みたいな存在ってことね。

ケビン まあ、そのさらに露出の大きいバージョンというか。実際、ザイエンスはチャック・リデルやマット・ヒューズらトップファイターをスポンサードするなど、MMAシーンにお金を落としていった。そして、UFCが急成長したこともあって知名度もアップ。流通面でも、何年か前まではどこで売っているかわからなかったザイエンスの商品はアメリカ中のコンビニやガソリンスタンドなど約2万5000店舗で売られるようになったんだ。

——UFCへの投資が功を奏したように思えるよね。

ケビン その後、ザイエンスは去年の10月にUFCと3年間のパートナー契約の更新を発表。ところが、それからわずか3ヵ月で倒産した。

——じゃあ、派手な露出や莫大な流通量とは裏腹に経営はうまくいってなかった、と。

ケビン 倒産により明らかになった資料によると、2006年度の営業損失は5500万ドル（≒約58億円）。その一方で、売り上げはその半分にも満たなかった。

——全然ダメじゃん!

ケビン しかもその損失の原因として、4200万ドル（≒約44億円）もの費用がマーケティングに使われていたことも判明。そのほとんどがUFCやファイターに対しての広告出稿費だったわけなんだけどね。

——つまりUFC関連のスポンサー料を支払っていて大赤字になっていた、と。

ケビン そして、この倒産によって明らかになったのが、ザイエンスとUFCの複雑な関係。倒産を申請したときの資料によって、UFCを運営するズッファ社のオーナー、（ロレンゾ&フランク・）フェティータ兄弟やその財務役員が運営する会社がザイエンスの3番目に大きな株主であることが判明した。

——それじゃあ、ザイエンスのスポンサー契約って、もともとフェティータ兄弟が出資したお金が、ザイエンスを経由してUFCに戻っていただけじゃん!

ケビン もっと言えば、フェティータ兄弟以外にもザイエンスに出資していた株主がいたわけで、フェティータ兄弟が出資した以上の金額がUFCやそのファイターに流れていたとも考えられる。

——UFCにとってザイエンスは、いわば〝打ち出の小槌〟みたいな存在だった、と。

ケビン そして興味深いことに、最も多くの債権を抱えていたのもフェティータ兄弟。もっとも、その金の大半は、UFCへの支払いに流れていたわけだけど。

——はぁ〜? そうやって資金を循環させるメリットはなんなの?

ケビン その理由は二つ予想できる。UFCは資金繰りのためお金を借り入れて経営しているんだけど、あるファンドから大金を借りる上で、大口スポンサーの存在を示すことが条件としてあったらしい。そのためにザイエンスに巨額融資してでも、3年間の長期パートナー契約を共同発表したと推測できる。

——はぁ、だから台所が火の車の状態であっても、ザイエンスは長期パートナー契約を発表したんだ。

ケビン そして、もう一つ。ザイエンスの最大の債権者になった彼らは、再建中のこの会社をコントロールすることができる。米国倒産法11条によると、今回のケースのように資産よりも負債が多い場合は、債権者が会社の所有権を得るからね。

——最大債権者であるフェティータ兄弟らが、ほかの株主以上に力を持つことができるわけだ。


ケビン 倒産したとはいえ、ザイエンスのブランド力と販売網は魅力的。倒産によって、負債を整理したあとで、うまく経営すれば、大儲けできる可能性は高い。

——もしかして、最初からザイエンスの所有権を握ることがロレンゾ側の狙いだったんじゃないの? それで費用対効果を度外視してUFCにお金を出したり、ムチャな経営をして倒産させたとか……。

ケビン ちょっと、軽々しく物騒なこと言うなよ! ただ実際にザイエンスは債権者たちから8件もの訴訟が起こされているし、追い出されたザイエンスの創業者がほかの株主たちと共同でフェティータ兄弟を訴えようとも呼びかけている。

——すでに火種がくすぶっている、と。ファンドから大口融資を受けるため、ザイエンスに深く関わるようになったUFCサイドがそのスポンサーを救済せざるをえなくなったのか、それとも何かウラがあるのか。裁判の行方も含めて、ちょっとキナ臭いこの一連の動きは注目したほうがいいね。

【08年2月1日/国際電話にて収録】



大反響のバック・トゥ・
レスリング企画が帰ってきた!!

無表情できれいな技のハイスパートだけじゃ喜怒哀楽や人生を語るプロレスはできない!

90年代の新日本ジュニアから
ハッスルまで変わらない熱さで駆け抜ける男

大谷晋二郎

ハッスル発
バック・トゥ・レスリング
Back To Wrestling

1月発売の『kamipro Special 2008 SPRING』において、TAJIRIが「現在の日本のプロレスは、90年代の新日本プロレスが奇形な進化を遂げたもの」と指摘したインタビューが大きな反響を呼んでいる。では、当時の新日本ジュニアで活躍し、また現在『ハッスル』のリングにも上がっている大谷晋二郎に俯瞰して語ってもらおう！　というわけでインタビューをお願いしたのだが、いつのまにか話は大谷の熱いプロレス論に!?　ヤケドに注意しながら読め！

聞き手／坂井ノブ　撮影／平工幸雄、山口比佐夫　写真提供／ハッスルエンターテインメント



当時の新日本ジュニア勢は、永田裕志、中西学、小島聡、西村修らとしのぎを削りあうライバル関係でもあった。合宿所で生活をともにしながら、リング上では火花を散らす。いま思えば感情表現と自己表現が豊かな選手ばかりであることがわかる。

新日本ジュニアは核となる6人全員がニーズを察知する能力に長けてました

――今回、90年代新日本プロレスのジュニアについてのお話をうかがいたいと思います。以前、TAJIRIさんに話をうかがったときに、最近のプロレスのジュニアの源流は、新日本プロレスのジュニアなんじゃないか？　という話をしたところ、けっこうな大反響だったんですよ。

大谷　そうですか……。いまになって思うと当時の新日本ジュニアが凄かったなと思うのは、人数がいまの新日本ジュニアと比べると半分以下でしたからね。いつも決まって出場していたのは6人だけですから。

――そんなに少なかったでしたっけ？

大谷　（獣神サンダー・）ライガー、（エル・）サムライ、（ケンドー・）カシン、金本（浩二）、高岩（竜一）、それと僕の6人だけですよ。へたしたらワンシリーズが全部3vs3の6人タッグマッチだったこともありましたからね。でも、僕たちは1試合たりともマンネリを見せたことはないですよ。全員そういう意識でしたよ。いまも「ジュニアの黄金時代だったね」って言っていただけるのは僕の誇りですね。

――いつも同じ6人で飽きさせないというのは凄く難しいですよね。

大谷　でも、どんな試合にもいつもテーマがあった。たとえば今シリーズは大谷とカシンがガンガンやり合ったりとか、ライガーと金本がガンガンやり合ったりとか、ほかの人間を立てるわけじゃないけど、6人全員がお客さんやマスコミの皆さんが何を求めているかを察知する能力に長けてましたね。

――なるほど。

大谷　その6人が核になってからしばらく経ったとき、誰が誰に勝ってもおかしくない状況になったんですよ。サムライが僕をフォールすることもあるし、高岩がライガーをフォールすることもあった。最後まで誰が勝つかわからないという興味もあったでしょう。

――そこでも観客のニーズに応えていたわけですよね。

大谷　ただ、勘違いしてほしくないのは、お客さんは大事なんですよ。でも、1から100まで媚び始めちゃうと、お客さんは絶対に離れます。これは僕が15年やってきて得た持論です。「俺はこうなんだ！」っていうものを貫き通している選手にファンは惹かれるんですよ。

――そういう意味では「俺はこうなんだ！」という我の強い選手ばっかりですよね、そのときの6人って。

大谷　全員キャラが違うんですよね。だから、観ている人はおもしろかったのかもしれない。さらに、僕らはジュニアというカテゴリーで闘いながら、ヘビー級とも勝負してましたから。

――ヘビー級よりいい試合をしよう、と？

大谷　そうです。当時、ジュニアの6人タッグは休憩前に組まれることが多かったんですね。いわば前半戦のメインイベントなんです。僕らの試合後に休憩があるから、お客さんを完全燃焼させてやろうぐらいの気持ちでやってましたよ。それで休憩は「ああ、おもしろかった」って言わせて、「よーし、後半戦もまた観るぞー！」っていう感じでまた席に着いてもらう。僕は休憩前の試合にプライドを持っていましたから。

――ガイジン選手も充実してました。

大谷　クリス（・ベノワ）もエディ（・ゲレロ）も（ディーン・）マレンコも（クリス・）ジェリコもいましたね。

Shinjiro OTANI

ハッスル発 バック・トゥ・レスリング Back To Wrestling

——メキシコからはネグロ・カサスが来てたし、ヨーロッパからはデーブ・フィンレーも来てましたよね。凄い選手ばかりですけど、当時のガイジン選手についてはどういう印象を持ちました？

大谷 ベノワ、マレンコ、エディっていう3本柱は、試合で対戦するたびに勉強になりましたよね。どこまで奥が深いんだっていうぐらいいろんなことを知っていましたよ。この3人が来日するたびに、ワンシリーズで絶対に3つは何かを盗んでやろうって考えていましたね。一つ技術的なことで言うと、絶対に忘れられないのは、スワンダイブって日本人で最初に使い始めたのは僕なんですけど、本当は猿真似なんですよ。

——猿真似ですか!?

大谷 猿真似という言い方はおかしいけど（笑）、エディ・ゲレロがピョンとトップロープに乗ってドロップキックをやったんです。僕はこれをやろうと思って何度か練習を重ねたらできたんですね。ロープの乗り方は違うんですけど。でも、これはプロレスラーのプライドというか暗黙のルールというか、エディに聞いたことがあるんです。「俺もエディがやってるロープに乗って飛ぶ技を使ってもいいか？」って。そしたらエディは「おお、やれるもんならやってみろ」って言ってくれた。それで使い始めたんですよ。

——エディのお墨付きなんですね。

大谷 その頃から誰が言い始めたかスワンダイブっていう言葉ができたんです。エディは日本にいつも来ていたからお客さんの反応でわかるんですね。「スワンダイブは大谷の代名詞になったなぁ」と感じたんでしょう。それからエディは使わなくなったんですよ。僕は「プロだなぁ」と思いましたね。そんなところも尊敬してます。

——二人とも同じ技を使ってしまったらお互いの光を消し合っちゃうってことですね。

大谷 だから、スワンダイブはいまはここぞっていうときにしか使わないし、凄く大事にしてますよ。エディから受け継いだ技だと思っているし、へんなプライドで申し訳ないけど、僕のは違うんだよ。ここ（と胸を指差す）の問題だけど。

——それが大事なんじゃないですか。

大谷 この世界は盗んでナンボじゃないですか。だけど、あのとき僕はなぜかエディに言いたかったんだよなぁ……。

——あと大谷さんの代名詞と言えば顔面ウォッシュですよね。

大谷 いま新日本で金本さんが顔面ウォッシュを使ってますけどね、もしかしたらここ4～5年で新日本プロレスのファンになった人だと顔面ウォッシュは金本さんの技だと思っている人もいるかもしれない。

——そうですね。

大谷 僕は新日本を出るときに、仲が良くて面倒を見てくれた金本さんに「辞めます」と伝えたら「そっか、寂しゅうなるな。おまえが辞めたあと顔面ウォッシュ使ってええ?」って言われたんですよ。それで「全然いいですよ」って言って。「ほんまか、ほな使うわ」って言って。

——気持ちよく譲った、と。

大谷 僕はわかるんですよ。金本さんはたぶん大谷の色を新日本から消したくなかったんですよね。「おまえの影は俺が新日本に残しておくからな」って気持ちを感じたんです。だから、僕は金本さんが使うことにへんな感情もないし、逆にドンドンやってくれって思いますね。でも、真意が違ったらどうしよう（笑）。

——悲しいですね（笑）。でも、顔面ウォッシュって大谷さんのオリジナルですよね？

大谷 そうです。あれは試合の中でできた技なんです。藤田（和之）選手が若手だった頃ですね、僕がコーナーに攻めていたんですけど、藤田選手が座り込んだから、「立てーっ！」って顔をガンガンこすった。そしたら後楽園ホールのお客さんが凄く沸いたんですよ。そこからおもしろいなあってやるようになったんです。

——お客さんとのやりとりの中で生まれてきた技なんですね。

大谷 よく〝試合は生き物だ〟って言うじゃないですか。まさにそのとおりなんですね。僕はお客さんが「わあ、きれい。わあ、凄い攻防」って拍手するような試合よりも、「おおっ！」って拳を握って思わず立ち上がってしまうような試合をしたいですからね。凄くきれいなハイスパートをやって「わあ、凄い」っていう試合をするようなガラじゃないですよ。まあ、若いときは違ったけど。

——具体的にはどんな違いなんですか？

大谷 たとえば若い頃は一回転して相手の技を切り返したりっていう攻防ですね。

プロレスラーのプライドというか暗黙のルールでエディに聞いたんです！「俺もロープに乗る技を使ってもいいか？」って



90年代新日本ジュニアを語る上で欠かせないのはクリス・ベノワと、この二代目ブラックタイガー（正体はエディ・ゲレロ）。1996年第3回ベスト・オブ・ザ・スーパージュニアで優勝している。意外なことに、大谷はベスト・オブ・ザ・スーパージュニアで一度も優勝していない。

ZERO1・MAXも『ハッスル』も、どっちもプロレス。最初から否定するな！

ジュニアでガンガンやってたときは「大谷イコール、飛ぶ」っていうイメージがあったんですけど、そういう試合よりも張り手一発で沸く試合をやりたいですね。

――お客さんの感情を引き出したりとか、思わず立ち上がってしまうような試合をするためには何が必要だと思いますか？

大谷 「どんなプロレスがやりたいですか？」って聞かれたら、僕は必ず「観ている人に喜怒哀楽が伝わるプロレスをやりたい」って言うんです。僕の試合で心から喜んでくれたり、怒ったり、感動して泣いたりっていうプロレス……。〝人生プロレス〟をしたいって思っていますね。

――〝人生プロレス〟ですか⁉

大谷 ちょっと重い言葉になるけど、一つの試合で喜怒哀楽を出せるって、〝人生プロレス〟じゃないですか。そう思いませんか？（遠い目）。

――は、はあ。その〝人生プロレス〟というのはいままでの人生を語るような勢いでプロレスをやるという意味ですか？

大谷 （質問を聞かずに）僕は〝人生プロレス〟をしたいですねぇ（しみじみ）。たとえば仕事とか友人関係とかで凄い悩んでる人が、僕のプロレスを観て興奮して「よし、明日から頑張るぞ！」っていう、それって〝人生プロレス〟のいいところだと思うんですよね。〝人生プロレス〟っていい言葉ですね。喜怒哀楽の伝わるプロレス、名付けて〝人生プロレス〟です。それを僕はやりたい。（急にかしこまって）ありがとうございます、今日は素晴らしい言葉を思いつきました。

――（困惑して）えっ？ こちらこそ、どういたしまして。

大谷 TAJIRI選手がこのインタビュー（『kamipro Special 2008 SPRING』掲載）で「一流のプロレスラーは、絶対に技だけの試合をやらない」と言ってますけど、これは僕も凄くわかるんですよね。きれいな技の攻防だけじゃ一流になれないってことをTAJIRI選手はわかっているんですよね。技だけの攻防では喜怒哀楽は伝えられないですよ。

――大谷さんは試合中の表情が本当に凄いですもんね。

大谷 僕は、表情を作っているとは思わないですね。自然とああいうふうになるから。負けたときは本当に腹の底から悔しがりますよ。ずっとほしくてたまらなかったIWGPジュニアのベルトを獲ったとき、涙をぐっとこらえて喜びを噛みしめる、これもかっこいいだろうと思う。でも、僕は違うんですね。嬉しかったら泣けばいいじゃない？ 若いやつにもそう言うんですけど、それを演じるんじゃなくて心の底からなんで出さないんだと思うんですね。

――照れずに出せ、と。

大谷 それが自分を貫くってことでしょう。新日本時代も、どんなに上の先輩でも、絶対に俺は間違っていないと思ったら自分を押し通してたんですね。だから、嫌われてはいたんですけど。

――いまだったらKYとか言われそうですよね（笑）。



コーナーに相手を押し込めて足で顔をこするたびに「オイ！　オイ！」と観客も反応。大谷が反対側のコーナーへ走って、強烈な蹴りを顔面に入れる。どこの会場でも観客はこの一連の動きに大歓声をあげる。大谷の代名詞と言っていいだろう。

大谷　名前は出しませんけど一般の人が誰でも知っている大物二人に顔面ウォッシュを批判されたことがあるんですよ。

――へぇ、そうなんですか。

大谷　「あんなことやったら1、2年で終わるぞ」「あれはやめておけ。おまえはレスラーじゃなくなる」って言われて。

――なぜですかね？

大谷　そのとき「はい。はい」って言って、それで、次の日から僕は意地で使いまくりましたからね（笑）。その人たちに「僕は生き残っていますよ。15年続いていますよ」って言いたいですね。……あれ？　なんの質問だったっけ？（笑）。まあ、そうやって意地を貫いています。

――当時のジュニアって自由にやっているイメージもありましたけど、上からのプレッシャーもきつかったんですか？

大谷　いや、でも、けっこう自由にやっていたんじゃないですかね。僕ぐらいでしょう、そうやって言われたのは。

――いま、大谷さんは『ハッスル』のリングにも上がっていますけど、『ハッスル』はプロレス業界の中でも何かと否定的に受け取られがちですよね。

大谷　僕は『ハッスル』を否定したことは一度もないし、これはおべっかを使うわけじゃないけど、素晴らしいですよ。いまのこの時代に、あれだけお客さんを集めてますから。スタッフも一人一人が自分の役割を一生懸命やっている。なかなかできることじゃないですよ。

――『ハッスル』で試合をするときは、ほかのリングとは違うものですか？

大谷　周りから見ると僕のスタイルはZERO1・MAXのときと『ハッスル』のときでは全然違うと思いますよ。でも、僕はどっちもプロレスだと思いますよ。プロレスって本当にいくつもスタイルがあるんです。僕はすべてプロレスだと思っていますから。その中で支持されないスタイルは消えていくんです。

――お客を集められないところは淘汰されていくわけですね。

大谷　そういう厳しさはありますよ。最初から否定するな！　っていう気持ちはありますよね。駄目だったら消えていくんだから。

――大谷さんの顔面ウォッシュが残ったように、お客さんに支持されたものが残る、と。今日はありがとうございました！

【08年1月23日／東京・後楽園グリーンホテルにて収録】



おおたに・しんじろう■1972年7月21日、山口県出身。92年に新日本プロレスでデビュー、ZERO-ONEに旗揚げから参加。08年1月、ZERO1・MAX社長に就任。現在は肩を負傷して欠場中。181cm、107kg。

ガチ☆ボーイ

「べつに。プロレスでしょ?」そんな人にこそ観てほしい!!



もちろんプロレスファン必見!



映画『ガチ☆ボーイ』が描いたプロレスにおける"ガチ"の本質



みちのくプロレスが全面協力!!

最近プロレスの映画も多いが、この映画はぜひプロレスファンにオススメしたい。学生プロレスを舞台に繰り広げられる青春グラフィティなのだが、プロレスにおける"熱"を描いた作品となっている。ジョシュ・バーネットと小川直也が対戦することについて感想を聞かれた吉田秀彦が「べつに(気にしてない)。プロレスでしょ?」と10年前ならプロレスファンから総スカンを食いそうな発言をしても、反感の声はたいして挙がってこない。それがプロレスの現状である。かつては強さの象徴だったプロレスがその地位を明け渡してからずいぶん時間が経っているが、そんな時代にプロレスが何を描くべきなのか? この映画には重要なヒントが隠されている。

構成/坂井ノブ

高次脳機能障害で〝段取り〟を忘れてしまい、試合がすべて〝ガチンコ〟に!?

プロレス映画、しかも学生プロレスが舞台の映画なのに『ガチ☆ボーイ』とは、これいかに?

ここ最近はテレビなどあらゆる場面で「ガチで」という形容詞が一般化しているので、そんなことを気にする人も少ないのだろう。そもそも「ガチ」とは「ガチンコ」、つまり真剣勝負を意味する隠語である。おそらく一般の方にはわかりにくいと思うが、いまだにプロレスラーやマスコミの大御所の方々の前では、うかつに「ガチ」という単語は使いにくい雰囲気はある。

学生プロレスを舞台に繰り広げられるこの映画の主人公・五十嵐(佐藤隆太)は高次脳機能障害によって記憶が一日しかもたないという設定になっている。せっかく試合の段取りを練習しても、試合中には忘れてしまうため、すべてガチンコになってしまうというおそるべき(学生)プロレスラーなのだ。

試合中の段取りやお約束がことごとく破たんする学生プロレスが実際にあったら、かなり寒い試合内容になりそうだが、『ガチ☆ボーイ』で描かれている五十嵐の試合はきわめて熱い。ガチだから熱いわけではなく、闘っている五十嵐が熱いのである。相手の選手は試合を成立させるために〝段取り〟を遂行しようとするが、五十嵐がガチであるため試合がなかなか終わらない。五十嵐の障害が明らかになってからは、相手選手は五十嵐がガチでくることを知っていて、試合を盛り上げていいところで負けるようになる。いわば片ガチンコなのだが、五十嵐の人気はどんどん上がっていく。



今回出演した俳優たちは新崎人生のプロレス指導のもと、すべてのシーンを自分の肉体で演じている。実際にはケガもして、体力も使いはたし、極限まで追い込まれていた。俳優たちが演じるプロレスの試合には、実際のプロレスの試合と同じか、あるいはそれ以上の興奮があった。試合の構成もじつによく練られていて、明らかにプロの目線で試合を作っていることがわかる。

学生プロレスといえば、プロレス界では学プロ出身者は白い目で見られてきたという歴史がある。「俺たち本職と学プロを一緒にするな」という意識がプロ側に強かったのだが、最近では学プロ出身のプロレスラーもかなり増えた。

この映画には学プロが舞台だから踏み込めたという部分もある。相手の攻撃を受けて痛みを表現する練習だったり、試合の勝敗が事前に決められていることを知らされた主人公が落ち込んでしまったりするシーンだ。おそらく劇場でもこういったシーンはなんの違和感もなく受け入れられるだろう。凄い時代になったものだと思う。

隠語やケーフェイが白日のもとにさらされたいま、(学生)プロレスが見せるべきものは何なのか? ガチだろうとなんだろうとリング上で発する熱こそがすべてなんだと、この映画は伝えている。

Information

映画『ガチ☆ボーイ』

3月1日(土)全国東宝系にて公開!

監督は06年『タイヨウのうた』で劇場長編映画デビューをはたした27歳の小泉徳宏。今回が監督二作目となる。脚本の西田征史はボラギノール日野というハードな切れ痔のレフェリー役で出演している。

【出　演】
佐藤隆太/サエコ/向井 理/仲 里依紗/宮川大輔/泉谷しげる/川岡大次郎
瀬川 亮/西田征史/中谷竜/小椋 毅/久保麻衣子/フジタ"Jr."ハヤト

【オフィシャルサイト】www.go-go-igarashi.jp

こちらも注目!! 学生プロレスサミットがひさびさの開催!

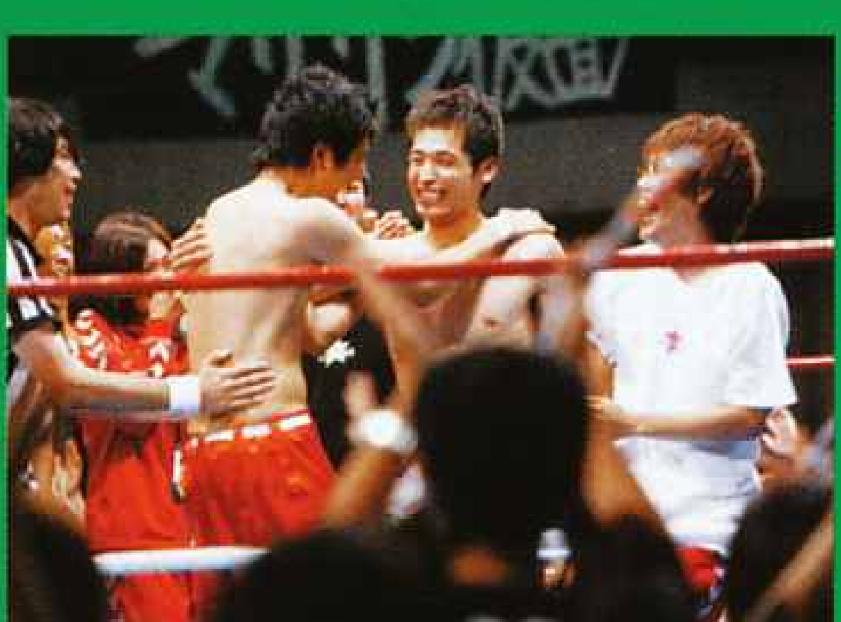
3月6日(木)新宿FACE　開場18:30/開演19:00

【参加予定団体】
HWWA(一橋大学世界プロレスリング同盟)、
NUWA(日大プロレス研究会)、RWF(立正大学プロレス研究会)、
RwO(立教大学プロレス愛好会)、SWSガクセイプロレス、
UWF関東学生プロレス連盟 and more…(アルファベット順)

【オフィシャルサイト】
http://013.fool.jp/gakupuro2008/index2.html

STORY

映画『ガチ☆ボーイ』はこんなストーリーなんです!



事故で頭を打って以来、寝るとその日の記憶をすべて忘れてしまう高次脳機能障害を負ってしまった主人公・五十嵐良一(佐藤隆太)。事故以前に学園祭で観た記憶をたどり、プロレス研究会(HWA)の門を叩いた五十嵐だったが、いつまで経っても"段取り"を覚えられずにいた。商店街で行なわれたデビュー戦、ガチンコの試合をしたことで観客がおおいにウケるが、マネージャーの朝岡麻子(サエコ)や一部の部員に秘密にしていた障害のことを知られてしまう。父・恒雄(泉谷しげる)ら家族の反対を押し切って、五十嵐はガチンコ勝負のリングに立ち続ける。記憶がないのは生きていないのと同じだという意識にとらわれていた五十嵐は、リングに立つことで生きる実感を得ることができたのだ。そんな五十嵐に学園祭という最高の舞台で大きな試合が組まれることになった……。



さとう・りゅうた■
1980年2月27日、東京都出身。『池袋ウエストゲートパーク』や『木更津キャッツアイ』などドラマで人気に火がつき、映画に多数出演。メジャー作品では『ガチ☆ボーイ』が初主演作品となる。日本大学芸術学部卒業で、マッスルで活躍中のミスター・マジック（下島車掌）とは同級生である。

佐藤隆太

映画『ガチ☆ボーイ』で主人公・五十嵐を熱演した佐藤隆太。プロレスも大好きという素質に加え、演技に対する情熱、そしてこの映画そのものにかける熱がスクリーンからほとばしっている。チームで作成していくエンターテインメント作品でプロレスを描くという部分では、『ハッスル』や『マッスル』にも通じる熱を感じることができるのではないだろうか。この熱い映画がどのように作られたのか、その撮影エピソードを中心に話をうかがってみた。

聞き手／森祐美子

技が、プロの方と比べて荒削りでも自分たちがガチンコで挑めばきっと熱は観ている方にも伝わる

――『ガチ☆ボーイ』素晴らしかったです。プロレスファンの心を打つ内容だと思いますし、ぜひ、取材させていただきたかったんです。今日はよろしくお願いします！

佐藤　凄く嬉しいです。僕ずっと言ってたんです。せっかくプロレスを題材にした映画に出たんだから、プロレス誌に取材してもらいたいって。だから、めちゃくちゃ嬉しいです！

――ありがとうございます。佐藤さんはプロレスがかなりお好きなんですよね。

佐藤　格闘技を観たり、友だちとふざけてやったりするのは凄く好きです。でも、ちゃんとやったことなんか一度もなくて。柔道の経験もなかったので、この映画をやるまでは、受け身の取り方一つ知らなかったんです。

――そんなふうには思えないほど、かなりの腕前でしたよ。

佐藤　僕はずっと野球をやっていて甲子園を目指してたこともあるんですけど、野球を題材にしたドラマとかを観ると、どうしても違和感を感じることが多くて。だから、今回はプロレス好きの方が観ても、満足していただけるような作品にしたいって最初から思っていました。みちのくプロレスさんにがっつりバックアップしていただいて、撮影の2ヵ月ぐらい前からトレーニングしたんです。

――どんな練習をされたんですか。

佐藤　受け身をひたすら練習しました。撮影の途中でケガをして撮影が止まってしまうのは嫌だったので。あとは、腕立て、腹筋、スクワットのメニューを提示してもらい、こなしていきました。それから、首ですよね。とくに重点的にやるようにって言われて、それっておもしろいなと思いつつ、タオルを自分の首に巻いて筋トレをやってました。でも普段使ったことのない筋肉だからめちゃくちゃきついんですよ。

――それをやりきって挑んだ撮影だった、と。

佐藤　どんなにきつい技でも己の身体でやるんだと決めてましたから。正直、リング上で、マスクを被っているシーンも多いし、引いて撮っているカットなんか、違う人がやっても絶対わからないと思うんです。でも、ワンカットも吹き替えを使わずに、ワイヤーアクションのような特撮も使わずに、俺たちだけの身体でやろうっていうのは、誰かが言い出したことじゃなく、部員役の役者がみんな最初から思ってたことなんです。それは『ガチ☆ボーイ』っていうタイトルの持つ力でもあるかもしれません。技一つ一つが、プロの方と比べて荒削りであったとしても、自分たちがガチンコで挑めば、きっとリング上の熱が観ていただいた方に伝わるだろうし、そこの部分だけはきっちりと表現したいと思っていました。

――プロレスにおいて、〝熱を伝える〟って大切ですもんね。

佐藤　そうですよね。一番胸を打つのは、技じゃなくて熱じゃないですか。だから、多少のケガをしようが、心も身体もボロボロになろうが、自分たちがやる。それをやりきれば、きっと満足のいただけるようなシーンになると信じて、一切妥協せずにやりました。

――クライマックスのプロレスシーンの撮影は、朝から晩までぶっ続けで5日間かけて行なわれたそうですね。

佐藤　正直、身体は悲鳴をあげてましたけど、自分の身体の痛みも、ほかの誰でもない僕が五十嵐を演じているという実感につながったんです。僕が演じた五十嵐という男は、プロレスから得る痛みや傷で、生きている実感を取り戻していくキャラクターなので、その痛みのおかげで役柄と一体化できたというか。そんな経験って、これまでに数えるほどしかありませんけど、その瞬間を求めて芝居を続けているような気はしますよね。

――ところで、今回学生プロレスの世界に触れていかがでしたか。

佐藤　もちろん存在は知っていたんですが、今回初めて生で触れさせてもらって、凄くレベルの高いことをやっていておもしろいって思いました。うわっ！って驚かされるような大技をいきなり決めますし、一方でストーリー性もある。お客さんを笑わせて、熱くさせて、ハッピーな気持ちにするために、凄く考えて組み立てられていますから、お芝居に通じるものがあるなと思いました。

――本作には、一橋大学世界プロレスリング同盟も参加しているんですよね。

佐藤　彼らと一緒にすごす時間は凄く楽しかったです。撮影の合間にも技のかけ方を教えてもらったり、いろいろ話したりしたんですが、ふとした瞬間にめちゃくちゃ熱いまなざしで、「今回学生プロレスを取り上げてくれて本当に嬉しいんです！」って言ってくれて。それが凄く嬉しかったし、本当に学生プロレスが好きなんだというのが伝わってきたんです。刺激的でしたね。仲間と自主映画ばかり撮っていた学生の頃を思い出して、その頃の純粋な気持ちをいつまでも忘れたくないなというようにも思いました。

――思い入れたっぷりの作品が完成したときのお気持ちは？

佐藤　もちろん反省点がないわけではないですが、僕にできる精一杯のことはやったと言いきれます。そう思えたことが本当に幸せで。五十嵐はみんなに支えてもらいながら生きているんですが、僕もまったく同じで、周りのキャスト、スタッフの皆さんがいたからこそ、途中で折れずにやり抜くことができた。あとは、この〝熱〟が観てくださる方に伝わればいいな、伝わってくれ！　っていう思いでいっぱいです。それが伝わったら、僕は役者という職業を選んでよかったという実感を得られるんじゃないかって思うんです。

――ありがとうございました！

【08年1月31日／東宝にて収録】

プロレス界よ!
な魅力を取り戻せ!

80〜90年代プロレス文化人が

いま 髙田総統を観たら どう思うのか?

作家・コラムニスト
亀和田 武



いわゆるプロレス文化人と呼ばれる大御所が、本誌にひさびさ登場！ その人物こそ、作家、コラムニストとして活躍し、かつて紙のプロレス読本『猪木とは何か?』にも登場している亀和田氏である。氏は、80〜90年代のプロレスを駆け抜けた評論家でもあるが、その後ぱったりとプロレスを観なくなる。しかし、あるきっかけで数年ぶりに『ハッスル』を観る機会があったということだが……。突然、目の前に姿を現わした高田総統に亀和田氏は何を思ったのか。また、かつてのプロレスから、プロレスの偉大なる可能性についても提言してくれた。

聞き手／ジャン斉藤　写真／山口比佐夫、平工幸雄



さとう・りゅうた■1980年2月27日、東京都出身。『池袋ウエストゲートパーク』や『木更津キャッツアイ』などドラマで人気に火がつき、映画に多数出演。メジャー作品では『ガチ☆ボーイ』が初主演作品となる。日本大学芸術学部卒業で、

——『週刊文春』の連載コラム「テレビ健康診断」でひさしぶりにプロレスのネタ（『どハッスル!!』／テレビ東京）を書かれてましたけど、そのきっかけは某国民的写真週刊誌の次長さんなんですよね？

亀和田　もちろん仙波（久幸）さんですよ！（キッパリ）。

——やっぱりそうですか！　仙波さんはウチの読者ページの常連投稿者でもあるんですよね（笑）。

亀和田　ボクが最近出した『人ったらし』（文芸春秋）という本の中で、猪木や吉行淳之介と並んで仙波さんにも10ページ前後、ページを費やしたら、彼から連絡があって。十数年ぶりに会うことになって。

——吉行淳之介と並んでましたか（笑）。仙波さんと亀和田さんは猪木さんの政界スキャンダルの際、ウチが編集した『猪木とは何か？』に一緒に登場されたりしてましたね。

亀和田　そうだね、ナンシー関と3人で。オレが『スーパーワイド』（TBS系ワイドショー番組）の司会をしてたときだね。仙波氏とひさしぶりに飲んだその日も、最初は梨本（勝）さんの話とか芸能ジャーナリズムの話をしてたんだけど、どんどん酒が進んでいくうちに話題が変わってきて。

——プロレスモードになっていきましたか。

亀和田　うん、坂田亘氏がやってる店ということもあったから。オレみたいにいまのプロレスを知らない人間が適当に語るのはイヤだからさ、仙波氏が「プロレスはこーなってるんですよ！」っていうのを「うん、うん」って相づちだけ打って聞いてたんですよ。そしたら、突然、仙波氏が「なんでプロレスを語らないんですか！　亀和田さん、もう一度プロレスを観てくださいよ!!」って迫ってきて（苦笑）。

——タチの悪い酔っぱらいですねぇ。いったいいつの時代のプロレスファンですか（笑）。

亀和田　ホントにタチ悪いんだよ！で、その日は『どハッスル!!』の番組が始まってちょうど2回目だったのかな。仙波氏が「ともかくおもしろいんですよ！」ってプッシュするわけよ。だからオレも「そこまで言うなら観るよ。おもしろければちゃんとテレビ評を書くから」という話をして。

——凄いきっかけですねぇ（笑）。それで今日は、80～90年代にプロレスを観ていたいわゆる文化人の方々が、ひさしぶりにプロレスを観た感想をうかがえればと思います。まず、亀和田さんがプロレスを観るようになったのはいつなんですか？

亀和田　82年12月、全日本プロレスの暮れの世界最強タッグ決定リーグ戦かな。まだ天龍源一郎と阿修羅原が龍原砲を組んでたし、それからハンセン&ブロディの絶頂期、あの時代ですよね。当時『エキサイティングプロレス』という雑誌があったんだ。『ゴング』と『プロレス』の二強に離された国際プロレスみたいな雑誌。そこの記者の人で、たまたま僕の文章を読んでる工藤くんっていう編集の人から原稿依頼があってね。僕はもう力道山が死んでからプロレスは観てないからって話をしたんだけど、「じゃあ力道山時代のプロレスの思い出を書いてください」ってことで原稿を書いたら、じゃあ今度は現在のプロレスのことも書いてくれって言われて、全日の最強タッグをまだ蔵前にあった国技館に行って、観戦記を書いたの。

——当時は新日本と全日本のファンが二派に分かれてケンカしてたような時代でしたね。

天龍は最強レスラーと書いたライターはいなかったんだからね

亀和田　そうね、衰えたといえども猪木のファンはまだまだもの凄く多かった。で、オレは最初に長州のファンだったんだけど、すぐに天龍源一郎のファンになってね。ずっと全日・第3の男っていわれて、ジャンボ鶴田より格下扱いで、いつもつまらなそうな顔をして試合やってたな。そのふてくされ方がなんともいえず、味があった。拍手するヤツなんて、会場全体でも2、3人しかいなかったけど。

——ストレスの溜まり方に色気があるな、と。

亀和田　でね、当時、地元のプロレスファンが集まるような喫茶店があったんだけど、そこのマスターがやっぱり猪木ファンなわけですよ。で、その店でマスターが「レスラーでは誰が一番強いですかね？」みたいなお決まりの話を始めたりするんだ。そのときにオレが「天龍……」ってボソッと言ったら、本当にコーヒーカップを落とさんばかりの感じで「え……」と言ったきり絶句したんだよね（笑）。

——天龍は渋すぎるでしょ、って？

亀和田　いや、当時はまだ渋すぎるという視点すらない。天龍を最強レスラーと書いたライターはプロレス誌にいなかったんだから。それに、その当時は誰が強くて弱いか、それがともかく問題で。意見が違えば、すぐケンカになるような感じなんですよ。

——いまのファンには理解できない空気ですけど、そういう時代だったんですね。

亀和田　まあ、向こうも紳士だし、僕もお客だからケンカにはならないんだけどね。でも、その猪木信者のマスターは「猪木は何が嫌いって、腹が突き出た力士型のレスラーは最低だと言っている。だから僕もああいう体型のレスラーは嫌いなんですよ」と言うんです。いま考えれば牧歌的な時代だよね。熱狂的なプロレスファンの9割8分はマッチメイクの存在などまったく想像もしてないときだからね。

——亀和田さんが言うマッチメイクというのは、いわゆるケーフェイの部分ですね。亀和田さんはどのタイミングでプロレスの仕組みを感じました？

亀和田　う～ん、熱心に観てると謎はいくらでも出てくるわけで……。

——ガハハハハ！　確かに謎だらけですよね（笑）。

亀和田　だから、わりと最初から、



かめわだ・たけし■1949年1月30日、栃木県出身。作家、コラムニストとして幅広く活躍。92年からは『スーパーワイド』（TBS系）、98年からは『スーパーモーニング』（テレビ朝日系）で司会を務めていた。プロレスにも造詣が深く、著書にプロレス関するコラムを集めた『反則がいっぱい』（芸文社）があり、また93年に出版された『猪木とは何か？』にも登場している。



紙のプロレス公式読本『猪木とは何か？』では「猪木スキャンダル」の告発者・仙波久幸氏、ナンシー関、そして当時ワイドショーキャスターであった亀和田氏の3人の座談会が繰り広げられている。同書では、カバンの中から次々とプロレスコレクションを取り出す仙波氏の様子が書かれている。いまとちっとも変わっていない。

プロレス界よ！ な魅力を取り戻せ！

ほとんどの試合はマッチメイクがあるんだろうなと思ってた。だけど、一方で「このあいだの前田の怒り方は凄かったね」とか、100に一つはヤバい試合、セメントがあるんじゃないか、それはどの試合なんだろうとリングを必死に観るという、そういう楽しみ方だったよね。

——グレーな感情や空間を楽しむという。ところで、亀和田さんはあまり猪木さんの存在を評価されてなかったですよね。

亀和田　70年代の猪木全盛時代を経験してないせいも大きいとは思うんだけどね。モハメド・アリとの異種格闘技戦だとかはメディアを通して知ってたけど。でも、僕がプロレスを観始めてからの猪木はね、本当にイヤでイヤでしょうがなかった！

僕がプロレスを観始めてからの猪木はイヤでしょうがなかった！



亀和田氏がプロレスを追っていた80〜90年代はターザン山本（当時）が編集長を務めた『週プロ』がとてつもない売れ行きを記録し、いわゆる活字プロレスが広く定着した時代だった。当時は、プロレスの試合を観なくても『週プロ』さえ追っていれば内容がわかるという読者も多数いたほどである。

——たとえばどんなところが？

亀和田　もう身体もガタガタだし、何より試合がつまらなかった。それが第一だね。それを安っぽいシナリオでゴマかそうとして、アラが目立つばかり。しかも長州や藤波の名勝負に水をさすようなことばかり仕掛けてて。

——猪木さんのお金にまつわる問題が表面化し始めた頃ですね。

亀和田　UWF設立の経緯にしたってそうだったんじゃない？　新日のレスラーたちが、みんな猪木や取り巻きのせいで、ひどい目に遭ってるのがかわいそうでね。なのに新日ファンの半分は、まだ猪木への幻想を捨てきれなくってね。どうなってるんだとあきれてましたね。

——幻想がなかったら、猪木さんなんて単なる悪いヤツですよね（笑）。

亀和田　メインをキッチリ張れる体調になかったし、プロレスへの情熱も冷めてた。それなのに次から次へとおかしなアイデアを出すじゃない。海賊亡霊なんてチャチで悲しくなるような企画もあったし、ホーガン戦での舌出し失神事件とか、長州の乱入事件とか、凄く安っぽいプランがたくさんあった。

——あれはちょっと不発すぎましたもんね（笑）。

亀和田　長州、藤波の札幌の試合もメチャクチャにされたり。そういう意味では長州も藤波も佐山も前田も全員が被害者だよね。みんな猪木の思いつきと欲深さに翻弄されて。これだったらクーデターが起こってもしょうがないよなって思ってた。そんなわけで、あの当時の猪木は本当にイヤだったんだよ！

——じゃあ、やっぱり猪木さんの政界スキャンダルのときはそれ見たことかというか。

亀和田　ただ、あの騒動に関しては、プロレス的展開としては凄くおもしろいなと思って見てましたけどね。佐藤久美子という猪木を告発した秘書が「猪木は永田町にプロレスを持ち込んだ。それは罪である」と言ったんだけど、僕は逆の見方で、要するに永田町で行なわれていることも、基本的には政治といって威張れるようなことではなくて、所詮そんなもんだと。あのときの猪木の数少ない功罪の「功」の部分があるとするならば、永田町で行なわれていることも、たとえば猪木が都知事選に出るというブラフをかければ、自民党の大物の金丸（信・元衆議院議員）までが出てきて、佐川急便を仲介して金が動いたとかなんとかというような、そういった悪い意味でのじつにプロレス的な世界なんだということをさらけ出したことだよね。あとは、やっぱり当時の仙波さんの身の処し方！　あれこそプロレスだなって!!

——ちょっと凄いですよね（笑）。仙波さんのヤバさを知らない人は、先述の『猪木とは何か？』シリーズと『たけし事件　怒りと響き』（太田出版）などをお読みになってください。

亀和田　アントニオ猪木以上に猪木イズムの極致まで行っちゃった人の凄さを見せつけられたよなあ……（感心しながら）。

——「猪木を介錯するのはオレだ！」くらいの感じでしたよね。おそらく仙波さんの中で「猪木ならどうするか」ということが行動原理になったと思うんですけど、亀和田さんは誰かを自分に置き換えることってありますか？

亀和田　そうだなあ。そこはオレの限界というのか、オレはある種マイナーな人が好きなのね。『人ったらし』にも書かせていただいたんだけど、男は「含羞」があるのが一番、それから「落魄の美学」ね。落魄、ひらたくいえば落ちぶれていくことなんだけど、やっぱり陰影のある人が好きなんだよ。

——表街道を胸張って歩いている人よりも、陰があるほうが惹かれたりしますもんね。

亀和田　たとえば、大仁田厚という男はジャイアント馬場にかわいがられてポンポンと出世してジュニアヘビーの王者になったりしたじゃない。しかしそのあとなぜか馬場さんと元子さんに嫌われたんだね。全日に出入りできなくなっちゃってさ。最初はそれもシナリオかなと思ってたんだけど、ときどき一人で全日の会場に来ると、当時維新軍でジュニアの王者だった小林邦昭なんかに大仁田が「俺と闘えー！」とかって客席から吠えてるんだよ。でも、馬場さんってそこは凄く非情なくらいキッチリしてる人だから二度と全日のリングに上げないんですよ。結局は大仁田もプロレスをやりたいという一心で、梶原一騎のイベントに出たり、最初のインディー団体である『パイオニア戦志』で闘ったりね。そのときの剛竜馬との試合なんか、血だけはたくさん出てるんだけど新日やUWFの試合を見慣れた観客が観ればあまりにもドラマ性に乏しい、ファンにはどうにもアピールしない古くさい試合でね。でもそれを観ているうちに「コイツは本当にプロレスをやりたい一心なんだな」ってじんわり伝わってくる。

——それこそジャパン女子にも上がってお客に「帰れ！」コールを浴びたり、切なかったですよねえ。

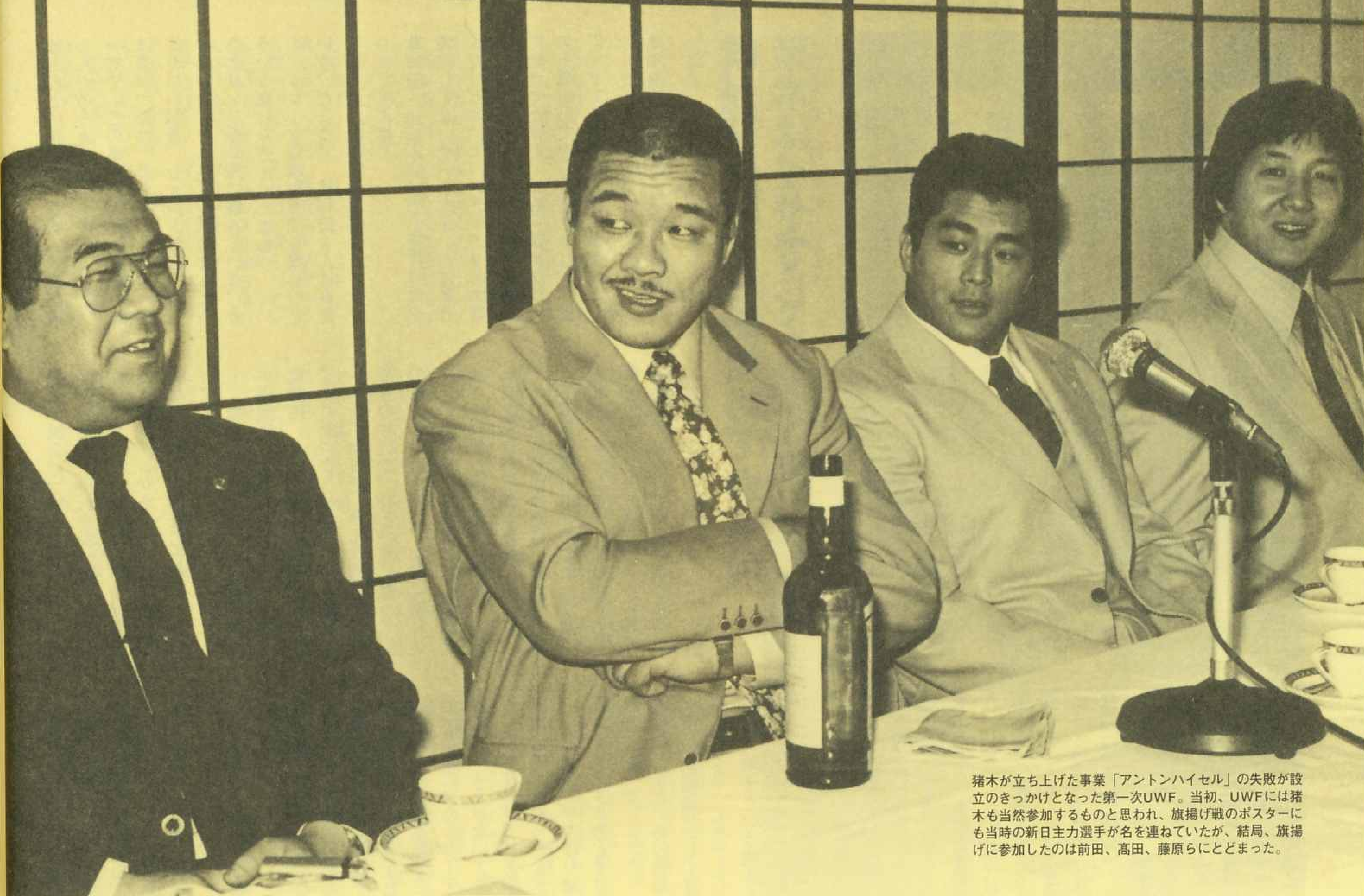
亀和田　だから、この男にもいいことが起きるといいなと思ってたときに、ほらFMWが旗揚げ戦の後楽園ホールを超満員にしたりしたじゃない。だから「いいな」って思ったりね。

——つまり、そういう陰があるものに惹かれてたわけですね。

亀和田　マッハ隼人の話で泣かせる話があるんだ。元は国際プロレスにいたマッハ隼人は第一次UWFを「こんなにフェアな団体はなかった」って言ってるんですよ。たとえば、地方に行くときほとんどのプロレス団体は、幹部レスラーはグリーン車、一般のレスラーは普通車でという区別があった。でも、UWFは上から下まで全部平等でみんな同じ座席だった、と。それが本当に嬉しかったという話をしてるんですよね。マッハは結局UWFでは一勝もできなかったんだけど、自分のレスラー人生の締めくくりにできて本当によ

80〜90年代プロレス文化人が いま高田総統を観たらどう思うのか？

さとう・りゅうた■
1980年2月27日、東京都出身。『池袋ウエストゲートパーク』や『木更津キャッツアイ』などドラマで人気に火がつき、映画に多数出演。メジャー作品では『ガチ☆ボーイ』が初主演作品となる。日本大学芸術学部卒業で、



猪木が立ち上げた事業「アントンハイセル」の失敗が設立のきっかけとなった第一次UWF。当初、UWFには猪木も当然参加するものと思われ、旗揚げ戦のポスターにも当時の新日主力選手が名を連ねていたが、結局、旗揚げに参加したのは前田、髙田、藤原らにとどまった。

第一次UWFは同じUWFでも第二次UWFとは全然別もの

かったと話してるんですよ。だから、オレが第一次UWFが好きだったのは、後楽園ホールで試合を観てると自然とその雰囲気が伝わってくる感じがあったからだなあって。

――亀和田さんにとってUWFってどういう存在でした？

亀和田　第一次UWFは本当にプロレスの理想型ですね。単にそこで使われる新しくてタフな技だとか展開だけではなく、いま言ったようなレスラー同士、それからリングと客席の一体感ね。そして後楽園ホールという素晴らしい空間、それが奇跡的に融合した団体だね。それとホールに、6～7割しか客が入らないという、それがまたなんとも言えず牧歌的な雰囲気を醸しだしていて、いいんだよね。

――いまだとそんな会場入りだったらファンは不安になっちゃいますけどね（笑）。

亀和田　確かに客は入らないし、貧乏所帯なんですよ。だけど、観てるほうとしては凄く贅沢なの。それこそ落語でいえば（古今亭）志ん朝とか立川談志の一門の会を6～7割しか入ってない会場で聞いているような感じね。

――ああ、精神の贅沢性ですね。

亀和田　だから、第一次UWFは僕にとっては、同じUWFでも第二次とはぜんぜん別のものなんですよ。でさ、第二次の旗揚げの試合を観ると、いっぺんにショーアップされてたじゃない。ショービジネスの進化系としてはそうならざるをえないのかもしれないけど、あらゆる面でロックコンサートの手法を取り入れたりしてた。しかも周回遅れでね（苦笑）。それを観たときは、これはもう第一次UWFとは別ものだなって思いましたね。

――UWFって革命だったと思うんですけど、プロレスタイルの進化には興味はなかったですか？

亀和田　さっきの空間の話でいうと、やっぱり会場が大きくなるというのは、当然3階席の奥の人までわかるような動きをしなくちゃいけないってことでしょ。でも、肉眼で観てわかる範囲ギリギリがやっぱり後楽園ホールでやるキッチリした試合なんだよね。だから、僕はどうしても大箱用の味が薄れた試合、雑な試合になったんじゃないかなって思いがあった。それは、人一倍思い入れがあった第一次UWFを後楽園ホールという素晴らしい箱で観ていたからかもしれないけど。

――そういう空間を作るには後楽園ホールが限界じゃないか、と。

亀和田　もちろんシビアな見方をすれば、第一次UWFの後楽園ホールでもみんなが「おおーっ！」ってどよめきをあげるのは、やっぱり山ちゃん（山崎一夫）とかのキック・シューズが一番いい音でバシーンと響くときなわけ。要するに、あの当時もわかりやすいものが受けてたという事実は否定できない。ただ狭いホールの場合だと一番うしろの観客もちゃんと見えるからね。それまでのプロレスとは違うプロレスを標榜していただけに、やっぱりその緊張感は全体に伝わってたんじゃないかな。後楽園ホールの第一次UWFの試合をほとんど目にしてた観客としてはそう断言してもいいかなって。

――れっきとした"変態"ですね（笑）。

亀和田　えっ、そうかな？（笑）。中でも一番衝撃的だったのは、佐山がザ・タイガーとして初めてUWFのリングに上がったときだった。ザ・

プロレス界よ！
……な魅力を取り戻せ！

80〜90年代プロレス文化人が いま髙田総統を観たらどう思うのか？

タイガー＆髙田組vs前田＆藤原組。そこで前田がタイガーをロープに振る。そうするとタイガーがガッとロープをつかんで飛ばないわけですよ。それを観たときの驚きったらなかったよね！　ホール中が「うおーっ！」というどよめき!!

──初めてロープに振られない瞬間を目撃しましたか！

亀和田　うん。目の前で初めて新しいプロレスを実際にかたちとして観たわけだからね。いつかそういう試合を観たいと思ってた幻のプロレスをタイガーが見せた。さらにその3ヵ月後には木戸がドロップキックで佐山を攻撃すると、佐山はスッと後ろに下がって受けないんですよね！　そのときも「うおーっ！」って!!

──またしても革命の瞬間！（笑）。

亀和田　あれはプロレスの試合をこれまで生で観てた中でも、一番の歴史的瞬間に立ち会ってるような感覚でしたよね。だからそのときのわずか1500人の観客というのは歴史の証人ですよ。

──それを考えたらやっぱり第二次UWFというのは、本当にショービジネスとしての成長でしかなかったんですかね。

亀和田　ショービジネスとしては一気にスケールアップして、あとチケットぴあとかも使ってたしね。ビジネスとしての輪郭を整えていくんだけど、内容的には僕は進化したとは思ってないんだよ。

──亀和田さんがプロレスに対して熱が冷めていったのはいつぐらいからなんですか？

亀和田　だから、そんなふうにUWFが自分が思ってたものとは違うものになっていったのが一つかな。あとはね、『週プロ』でターザン山本がどんどん勘違いしていったじゃない。

──ダハハハハ！

亀和田　SWS問題ってあったよね。その少し前からターザンってかなり政治的な野心が露骨になってきて、それまでは猪木信者でアンチ馬場だったのが、馬場さんとくっつくことのうまみを覚えていったでしょう。そこでメガネスーパーが天龍のスポンサーになってSWSを立ち上げたときに一気に反メガネスーパーの論陣を張って叩いたよね。

──「金に転んだ天龍」というショッキングなフレーズがありましたしね。

亀和田　そうやってネガティブキャンペーンを張るんだけど、プロレスファンもバカだからさあ、まんまとそれに乗せられちゃって。だって、当時のプロレスブームの半分は『週プロ』もしくはターザンのブームだったからね。テレビの試合を観てなくても『週プロ』だけは買ってたという人が何万人もいたくらいだから。ターザンの記事を読んで、みんな「そうか、そういうことだったのか」って納得してたんだけど、しかしオレは今度だけはそんな掌返しの天龍バッシングは、いくらなんでも読者には通用しないだろうと思ってたんですよ。

──でも、それがアッサリ浸透してしまって。

亀和田　結局SWSの旗揚げ戦なんか席は半分ちょっとしか埋まらなかった。それもタダ券をメガネ屋で配ってね。それは完全に『週プロ』の影響で、僕はターザン山本のそういう見え見えのネガティブキャンペーンに乗せられてしまうプロレスファンの底の浅さというのに本当にあきれはてたし、ガッカリした。それで冷めましたね。

──確かに、天龍がそれまで積み上げてきたものだったりは当時のファンは一切見てなかったですよね。

亀和田　あれだけ天龍を持ち上げて、それで雑誌売ってきてたのにね。しかも、馬場という人間にもいろんな問題があったはずなんだけど、そこは全部ネグる！　だから、プロレスファンの正体を見たというのがあったよ。そのあと天龍だけはずっと見ていようという思いはあったんだけど、まあ、SWS自体があんまりおもしろくなかったんでねえ……。だから、なんとかジャパン女子の分裂していく寸前まで観てたりしてたんだけどね。

──最後はジャパン女子！

亀和田　オレはねえ、ジャパン女子では尾崎魔弓のファンだったの。団体が発足して丸1年目くらいかな、初めて観たのは。そのとき尾崎はまだキューティ（鈴木）をやっつけるだけの悪役だったんだけど。府川充男くんという写植と活版印刷の歴史の知識に関しては日本の在野の研究者で右に出るものはいないという人がいるんだけど、彼も尾崎好きで。一緒に、尾崎魔弓のファン雑誌を7、8冊くらい出したなあ。で、タイトルが『終着の浜辺』。これは浅草キッドなんかもかっこいいですねって喜んでくれてね。なんでそういうタイトルかというと、アントニオ猪木を信じた、だけど猪木もだめだった。で、UWFに懸けた。でもUWFも変質してしまった。長州も昔とは違ってしまった。そんなふうに夢を求めてプロレス団体を漂流したあげく最後にたどり着いたプロレスファンのユートピアがジャパン女子だったという。

──それは凄い漂流ですねえ（笑）。

亀和田　プロレスファンが最後にたどり着いたユートピア。本当にのどかな、後楽園ホールに6割しか入ってないような、第一次UWFと通じるようなうしろ向きなユートピアね。退行的なユートピア。革命って凄く前向きなんだけど、そういう革命じゃなくて、たとえば中国の何千年前のまだ統一王朝ができる前の、まだ神様と民衆が一緒に暮らしているような、そういうようなユートピア、それがジャパン女子なんだよね。

──凄い話だなあ（笑）。

亀和田　堺屋太一まで、毎月必ずリングサイドで尾崎に声援を送ってたっていうのが、ジャパン女子の奥深いところだね（笑）。

──あれですかね、亀和田さんってあんまり洗練されちゃうとダメなんですか？

亀和田　洗練された会場に見合った素晴らしいエンターテインメントショーを見せてくれたらそれでいいんだけど、そこまでいかないもんね。

──ほかのジャンルと比べると、あか抜けない面も多々ありますし。

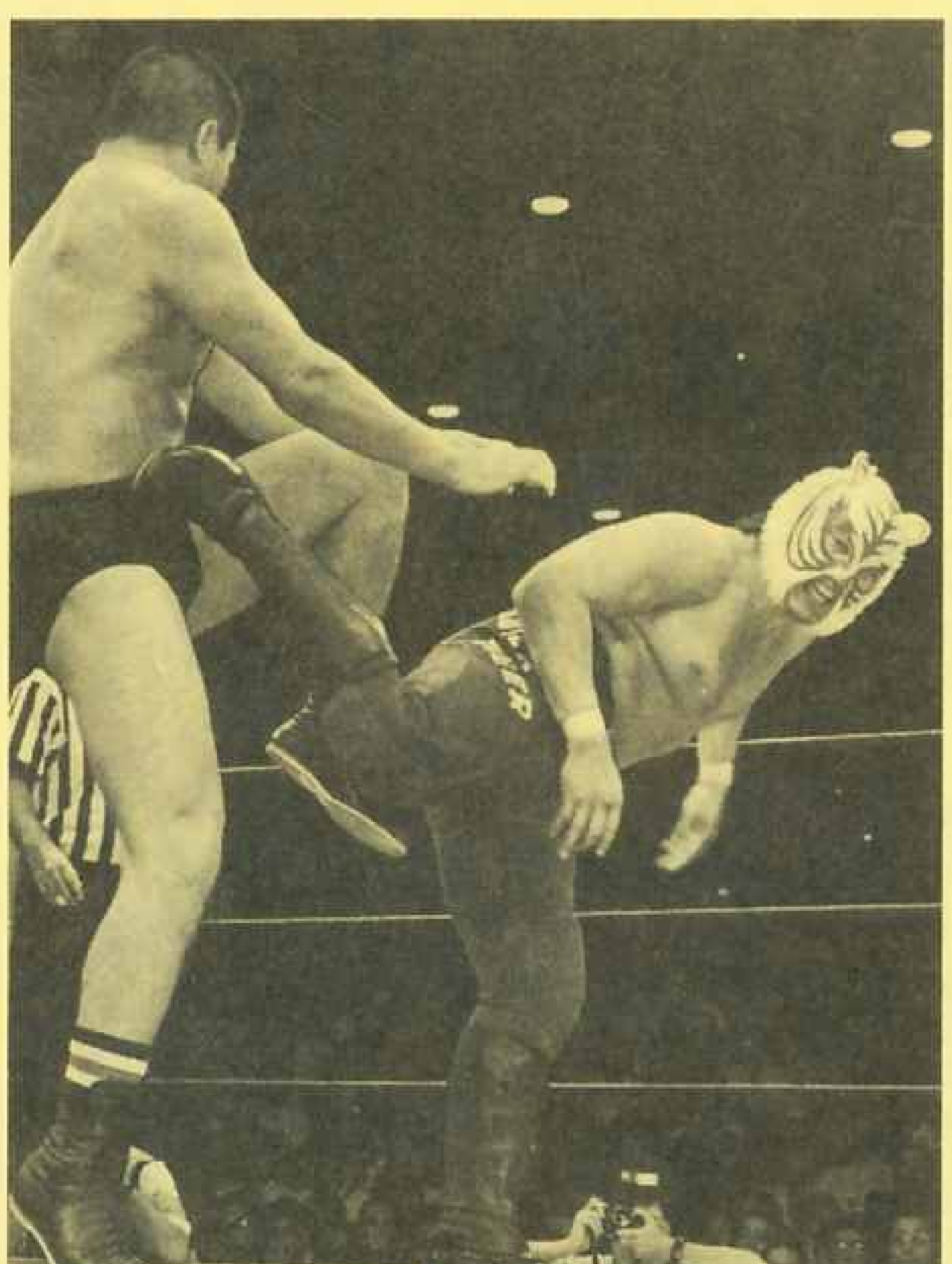
亀和田　ねえ。だけど、どっかに泥臭かったり半端なところがあってもそれはそれでいいんじゃないかっていう気がするし。でもジャパン女子は本当に素晴らしい団体だったよ。

──いずれ検証しないといけない（笑）。ところで、亀和田さんがしばらくプロレスから離れているあいだに、格闘技の台頭だったり、ミスター髙橋さんの暴露本があったりとか、さまざまなことがあったんですけど、それはご存知ですか？

亀和田　知ってたけど、なんでミスター髙橋本があんなに大反響を起こしたのかが正直ちょっとオレにはわからなかったね。

──おそらく時代のタイミングだったのかなと思うんですけどね。いまのプロレスはいわゆる挟み撃ちというか、左から総合格闘技、右からはエンターテインメント色の強いプロレスというものに押されてて、いまいち居場所がない状態になっているんですけど。

亀和田　エンターテインメント的なプロレスは、僕はあれはあれでおもしろかったけどね。WWEなんか観ていると、いかにもアメリカならで



「ロープに振っても走らない！」と、後楽園ホールに集結した"変態"たちを感動の渦に巻き込んだ第一次UWFの名試合の数々。総合格闘技が浸透した現在ではまったく驚くべき部分ではないものの、当時のファンには戦慄が走った。

——『ガチ☆ボ
です。プロレ
容だと思いま
ていただきた
よろしくお願
佐藤　凄く嬉
ってたんです。
材にした映画
レス誌に取材
から、めちゃく
——ありがと
んはプロレス
すよね。
佐藤　格闘技
ざけてやった
す。でも、ちゃ
一度もなくて。
たので、この映
身の取り方一
——そんなふう

さとう・りゅうた■
1980年2月27日、東京都出身。『池袋ウエストゲートパーク』や『木更津キャッツアイ』などドラマで人気に火がつき、映画に多数出演。メジャー作品では『ガチ☆ボーイ』が初主演作品となる。日本大学芸術学部卒業で、

プロレスというのはある種の触媒じゃないかと思うようになった

はのプロレスで、オーナー一族まで巻きこんで帯の昼ドラみたいになっててておもしろいよね。でも、こういうのは日本ではムリだろうなって思ってたところに『ハッスル』が出てきたからね。それは、なかなかおもしろいと思いましたね。あとは、やっぱり僕が一番ビックリしたのが、髙田延彦！

——ビックリしますよね、ひさしぶりに観たら（笑）。

亀和田　髙田という人があんなにタレント的な才能があるとは思わなかったねえ……（しみじみと）。

——髙田さんのイメージって、どのあたりで止まってます？

亀和田　昔、『週刊ファイト』の最後のページに、ちょうど『噂の真相』の一行情報みたいな欄があったのね。藤原が「一番非情なレスラーは誰ですか？」って聞かれた記事が印象に残ってて、「藤原さんですか？佐山さんですか？　やっぱり前田さんですか？」みたいな感じだったと思うんだけど、藤原の答はなんと「髙田だよ」って。

——ありましたね（笑）。

亀和田「アイツは怖いよ。本当に非情で、相手の腕なんか平気で折るよ」って。記者もビックリしたという噂が載ってて、わりと読者も衝撃を受けたんですよね、半信半疑だったけど。で、髙田は顔もハンサムだしクールな雰囲気でしょ。一回『平成教育委員会』の楽屋で一緒になったことがあるんだけど、とてもいまのようなおちゃらけをやるような人だとは思わなくて。もちろん初期の髙田総統は、ちょっと見てて恥ずかしくなるようなところがあったんだけど、最近は楽しんでやってるよね！　このあいだの有田総統とのかけ合いなんかも笑いながらアドリブなんかも入って。うん、いいよね！



最近、ますます力技に磨きがかかりまくっている髙田総統。ここ十数年のマット界で最も強烈に変貌を遂げた人物の一人ではなかろうか。かつて亀和田氏が読んだ「アイツは相手の腕も平気で折る！」といった藤原組長の言葉が、いまはどこか納得できるような気もする？

——でも、『ハッスル』はプロレスじゃないということで、マスコミからは拒絶反応が強いんですよ。

亀和田　プロレスのバリエーションの一つとして『ハッスル』が日本に定着するようになったのは、ある種プロレスファンの成熟だと思うけどね。たとえばプロレスにはマッチメイクがあって、いちいち野暮は言いっこなしという世界を確立していることでいうと、やっぱり成熟だなって。ただ、もう一つシビアな目で見ると退廃でもあるんだよね。

——退廃している部分もありますか。

亀和田　やっぱり真剣に誰が一番強いのかという部分も残しておいてくれないとね。そんなの関係ネエといって、全部おちゃらけにして楽しめりゃいいじゃないかというのは退廃といえば退廃。

——根本のプロレスのおもしろさという部分が消えちゃいますもんね。

亀和田　たとえば、ローマ帝国が崩壊した一つの要因はやっぱりパンとサーカスで滅びたというのがある。つまり、ローマ帝国が辺境の植民地からいろんなものを頂戴してどんどん栄華を誇っていく中で、ローマ市民は自分が汗をかいて働く必要がないから、皇帝からパンをもらいサーカスやら剣闘師の試合を観てワーワーと熱狂する。でも、よく考えるとそれは退廃なんですよ。「自分たちはどうして国家の一員になって社会が維持されているか」を考えなくなる。だから、全部おもしろければいいというのはヤバインでね、プロレスがそうなっていくのであれば、それは退廃を生む感じはありますね。でも、そこを楽しめる余裕があるのは、やっぱり情報化社会の行き着いた姿ではありますけどね。だって小学生でさえプロレスの約束事ってわかってるんじゃない……、あ、いまの小学生って、昭和30年代、『ALWAYS三丁目の夕日』の頃の40歳と同じくらいの雑学知識を持ってるって知ってました？

——そうなんですか（笑）。

亀和田　テレビやらパソコンから入ってくる情報があるもんだから、大人顔負けに知ってるんだよね。だからプロレスもそうだろうけど、政治にしても「小沢と福田のあいだって、どうせ出来レースだよ」とか言ってたりするからね（苦笑）。

——イヤですねえ、そんな小学生は（笑）。

亀和田　だけど、その情報を受け取っている自分自身を疑うとか、あるいはそれが本当に精度の高い情報であるかを見極めているのかという部分で、やっぱり怠ってる部分があるんだよね。だから、いまってすぐ、オレはコイツに裏切られたみたいになって、掌を返したようにブログ炎上みたいな現象があるわけでしょ。

——情報には恵まれているはずなのにクールさを保てないし、熱くなる瞬間もよくわからないし、バランスが非常に悪いですよね。

亀和田　マニアであればあるほど熱くなって我を忘れてる。誰か一人が熱くなるとみんな一つの流れに行っちゃってさ。最近、村松友視さんとかがプロレスに対して沈黙しちゃったのは、一つはいまの格闘技ファンのあまりにも子どもじみた、疑うことを知らない熱狂についていけない部分があるんじゃないかなって。村松さんはシニカルに、そして批評的に見てる人だから、村松美学といまの格闘技ブームは根本的に相容れない感じになってるんじゃないかな。

——さっき小学生がいろんな知識を持ってるという話がありましたけど、いまのプロレスは価値が多様化する現代社会で昔のように大衆娯楽として定着することってあると思いますか？

亀和田　うーん、それはないだろうねえ。いろんなツールもある中で、どれだけプロレスに時間とお金を使ってくれるかだけどねえ……。

——そうなると、プロレスが放つメッセージや存在意義が問われてきますよね。

亀和田　そういえば、今年はオリンピックイヤーということで、みんなスポーツに目が向いてるよね。空手や柔道、アマチュアレスリング、ああいう競技は本当に細かくマイナスポイントを取ったりするじゃない。そうやってルールだけが細分化されていく。そうしないとIOCに代表されるような国際的な機関にスポーツとして認定されないわけだよね。でも、その方向を目指すと、最初からあった武術だったり格闘技、そういったもののエッセンスが失なわれてしまう危険性があると思うんですよ。

——本来の、どっちが強いのかという部分も見えづらいですしね。

亀和田『月刊秘伝』なんか読んでると、スポーツに吸収されなかった柔術をはじめとする古武道の凄味や神秘性が伝わってきて、おもしろいよね。で、オリンピックはオリンピック、スポーツはスポーツ、でもそ

80〜90年代プロレス文化が いま髙田総統を観たらどう思うのか？

プロレス界よ!
な魅力を取り戻せ!

れとは違う、もっとルールから逸脱するものに対する興味だってあるわけだし、娯楽的要素が勝っているにせよ、その根底に流れている強さってあるわけじゃない。だから、たとえばサーカスにしたってエンターテインメントである一方で、サーカスの綱から落ちないためにはもの凄い訓練をしなきゃダメなわけでしょう。

――ああ見えて命懸けのエンターテインメントですもんね。

亀和田　だから、スポーツじゃないものを観るおもしろさは、そういったものとして残っていけるかなあとは思うんですよね。でもサーカスも昔に比べればやっぱり衰退してるんだけど（苦笑）。

――そういえば、『シルク・ドゥ・ソレイユ』にしても、サーカスというイメージではあまり打ち出してないですね。プロレスもそういった方向じゃないと生き残れないんでしょうか。

亀和田　オペラや歌舞伎はそうだもんね。オペラなんか高級芸術と思われてるけど、バカバカしい芸術の最たるものだって言う人もいるんだよ。オーケストラがいて歌手がいて、衣装もセットも大がかりじゃない。だからオペラのチケットって凄く高いんだけど、それでいてテーマはぜんぜんくだらなかったりするんだよ。市井の色恋沙汰だったりね。そんなにお金を使ってやることかよっていう話が多いの。そういった意味では歌舞伎も一緒。めちゃくちゃおもしろいけどそんなにかっこつけて観るような高級な芸術じゃないんだ。ところで、いまってプロレスファン自体はどう思ってるの？　というか、何を一番のよりどころにしているのかな？

――うーん……ファン自体も細分化してますからねえ。それぞれあるんでしょうけど。いまは100人、200人キャパの会場で毎日プロレスをやってるという状態なんです。

亀和田　へえ～。それはある意味本当に〝変態化〟してるわけね。

――そうですねえ（笑）。ただ、ウチに出ている〝変態〟たちの感情って、まだ多くの人が共有できると思うんですよ。たとえば題材にしているUWFって大きなムーブメントだったじゃないですか。でも、いまのプロレスって……。ちょっと大衆に戻さないといけないと文化としては続かないと思うんですよね。

亀和田　そうか、そうか。もう少し大きな、うねりのある川に引き戻してやろうじゃないか、と。でも、昔は金曜ゴールデンで流れてたという素晴らしい環境があったのにねえ。それをちゃんと伝える古館伊知郎というとんでもない才能があったりしたんだけど。いまの古館氏を見てると才能がやたら空転している感じで痛々しいんだけど（笑）。

――古館さんがコメントすると、どんなビッグニュースもすべて茶番に聞こえますからね。ひさしぶりに復活となった02年の『猪木祭り』実況もイマイチでしたし。

亀和田　でも彼の才能は本当に凄くて、結局彼を超えるプロレス実況は出てきてない。

――それは同感ですね。

亀和田　かろうじて福澤明だけがなんとかその中で自分のスタイルをちょこっと出したけどね。でも福澤も結局どんどんダメになっていくばっかりで、彼も最も輝いていたのはやっぱりプロレス中継だった。だから、プロレスというのはある種の触媒じゃないかと思うようになったな、オレは。

――プロレスは触媒！

亀和田　触媒というのは本人は何も変わらないのに交わったものを化学変化させていくもんでしょ？　たとえば村松さんもプロレスを語ったことから小説家・村松友視への変化が促された。それから、いまや現役のフリーキャスターとしてはトップの古館伊知郎を生んだのもプロレス実況中継。福澤がフリーに転身できるぐらいの看板アナウンサーになったのもやっぱりプロレス中継が出発点だよね。ほかにもたくさんいると思うんだけど。

――そう考えると、プロレスって触媒としてはズバ抜けてますね。

亀和田　夢枕獏さんや二宮清純だってそうだよ。もちろん獏さんなんてもともと途轍もない物語作者の才能があった人なんだけど、プロレスと出会うことによって、さらに劇的な化学変化を起こして、それまでとはまた異なる種類の才能まで開花させたんじゃないかな。

――そういう点では、ある意味仙波さんもそうだったりしますし（笑）。

亀和田　そう！　だからやっぱりプロレスがおもしろいのはそういうところだよね。仙波氏みたいに講談社なんかの大手出版社には絶対いないタイプの編集者が出てきたというのがさ。まあ仙波氏は学生時代から過剰な人間だったんだろうけど。

――プロレスに出会わなくても……というか（笑）。

亀和田　やっぱり大手ジャーナリズムで異色の編集者であり続けてきたのは彼のプロレスとの交流が生んだものだよね。

――プロレスには優れた触媒的機能がある！　と。そこまで語りがいのあって見応えのあるジャンルなんですね。それにしても、仙波さんの話で始まって仙波さんの話で終わるという、凄いインタビューになってしまいましたが（笑）。

亀和田　やっぱり仙波久幸には2万字くらいの特別インタビューをしたほうがいいんじゃない？

――「なんでプロレスを語らないんですか！」と（笑）。今日はありがとうございました！

【08年1月20日／都内・スターバックスコーヒーにて収録】



80年から『ワールドプロレスリング』（テレビ朝日系）で実況を務めた古館は、「燃える闘魂」「人間山脈」「風車の理論」など、怒濤の名調子を次から次へと展開し、アントニオ猪木全盛期の新日本プロレスを支えた立役者の一人であった。



アントニオ猪木、そして噂の仙波氏も登場!!
『人ったらし』（文芸春秋）

会えばたちまち魅了されてしまう、不思議な人なつっこさを持つ人たち＝「人ったらし」の魅力を綴る一冊。吉行淳之介や桑田佳祐らをはじめ、マット界からはアントニオ猪木、そしてなんと本誌・読者ページ常連投稿者である仙波氏までもが紹介されているぞ！　本誌インタビューと併わせて読め!!

——『ガチ☆ボ
です。プロレ
容だと思いま
ていただきた
よろしくお願
佐藤　凄く嬉
ってたんです。
材にした映画
レス誌に取材
から、めちゃく
——ありがと
んはプロレス
すよね。
佐藤　格闘技
ざけてやった
す。でも、ちゃ
一度もなくて
たので、この映
身の取り方一
——そんなふう

さとう・りゅうた■
1980年2月27日、東京都出身。『池袋ウエストゲートパーク』や『木更津キャッツアイ』などドラマで人気に火がつき、映画に多数出演。メジャー作品では『ガチ☆ボーイ』が初主演作品となる。日本大学芸術学部卒業で、

プロレス界よ!
グレーな魅力を取り戻せ!

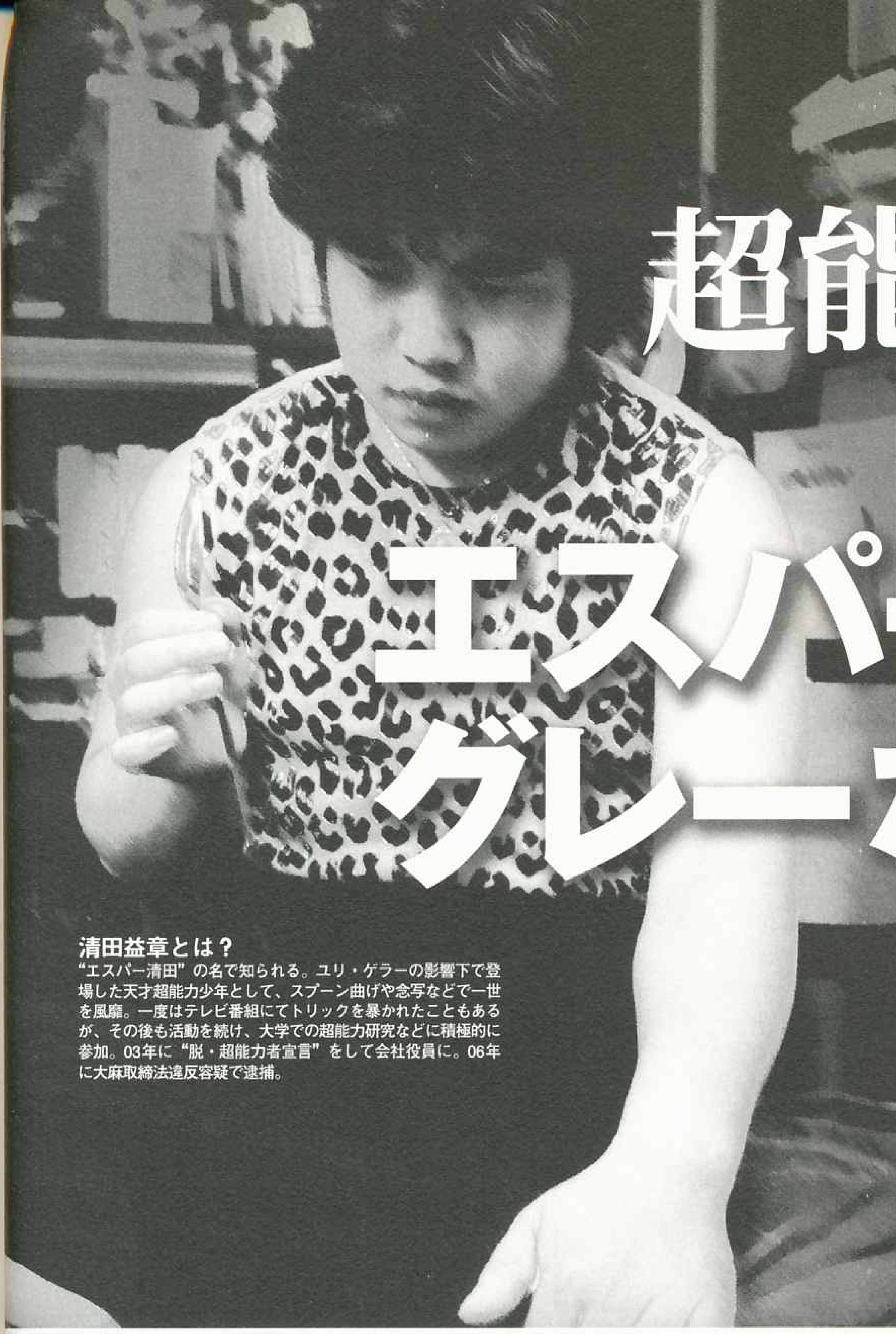


超能力　　UFO　　スピリチュアル

特集

底が丸見えの底なし沼な世界

かつて“虚”と“実”が渾然一体となって入り混じり、永遠に真実にたどり着かないグレーさが底なしの魅力を放っていたプロレス界。それをＩ編集長が「プロレスとは、底が丸見えの底なし沼」と言っていたが、現在のプロレス界はその魅力がすっかり色あせて、いまや底が丸見えの沼状態になってしまっている。そんな、かつてのプロレスが持っていたグレーな魅力をいまだに持ち続けているのが、超能力、UFO、スピリチュアルといったジャンル。そこにこそ、プロレス復興のヒントが隠されている！　……に違いない。そんな気持ちを込めて“底なし沼”な特集をお送りします！読めばわかるさ！



リサーチ **001**

超能力の世界

ドキュメンタリー作家
森達也が語る
エスパーという グレーな存在

清田益章とは？
“エスパー清田”の名で知られる。ユリ・ゲラーの影響下で登場した天才超能力少年として、スプーン曲げや念写などで一世を風靡。一度はテレビ番組にてトリックを暴かれたこともあるが、その後も活動を続け、大学での超能力研究などに積極的に参加。03年に“脱・超能力者宣言”をして会社役員に。06年に大麻取締法違反容疑で逮捕。

オウム真理教を被写体にしたドキュメンタリー映画『A』で注目を浴び、文筆家としても活躍中の気鋭のドキュメンタリー作家・森達也氏。今回は森氏が超能力者に密着した『職業欄はエスパー』（角川書店）にも登場し、“スプーン曲げ”で知られるエスパー・清田益章氏の“底なし沼”な魅力を直撃！



聞き手／真下義之

――今日は、ドキュメンタリー作家である森さんに超能力のお話を中心に、〝グレーなジャンル〟の魅力について聞かせていただきたいんです。

森　はい。でも『kamipro』はプロレス誌なのに、妙な特集企画が好きですね。前に呼ばれたときはバッシングでしたっけ。おもしろいけれど（笑）。

――恐縮です（笑）。森さんは著作（『職業欄はエスパー』角川書店）や映像作品を残されてますけど。もともと超能力に興味はあったんですか？

森　ええ。とくにこの本に出てくる3人のエスパーとはほぼ同世代ですから。そういう意味でも気になってましたね。

――スプーン曲げの清田（益章）さん、UFOを呼ぶ秋山（眞人）さん、そしてダウジング（棒や針金、振り子などを用いて鉱脈や目的のものを探す）の堤（裕司）さんですね。

森　彼らが80年代にテレビ番組でスプーンを曲げたり、UFOを呼んだりしてる時期に、僕もテレビの前で「すげえ！」って言ってましたから（笑）。ただ僕が歳をとればあっちも歳をとるわけで、「そういえば彼らはいまどうしてるかな？」ってフッと思ったんです。あまりテレビに出てこないけど、年齢的には結婚もしてるはずだし、ならば子どももいてもおかしくないし、そうすると授業参観とかはどうしてるのかな？　とか、ローンの手続きをするときに職業欄になんて書くのかな？　とか。

――それで『職業欄はエスパー』と（笑）。

森　うん。彼らの能力が事実か？　嘘か？　の視点も興味はなくはないけれど、それ以前に彼らがどんな生活をして、どんな人なのか？　て部分が気になっちゃって。

――この本は最初にドキュメンタリー番組（『NONFIX』「職業欄はエスパー」フジテレビ★注1）と並行したかたちで、取材もしていたんですね。

森　映像が最初です。書籍のほうはそのメイキング。だからすんなり書き始められたし、番組の尺は50分しかないから、書くほうではおもいきり裏舞台も含めて補完しました。

――この本の〝主役〟はズバリ、エスパー清田として一世を風靡した清田さんだと思うんですが。

森　あ、やっぱりそう思った？　そのテレビ版のオンエアのあとにお疲れ会で3人で飲んだときも、真っ先にアイツが言ったのは「主役は俺だよな！」って（笑）。

――自分から主役宣言（笑）。

森　彼は万事がそういう調子ですから。とても我が強いし、ワガママだし。でも同時にもの凄くセンシティブで気を使う男なんです。矛盾の塊。そこが魅力でもありますね。

――清田さんはキャラが非常にプロレスラーっぽい感じですね。

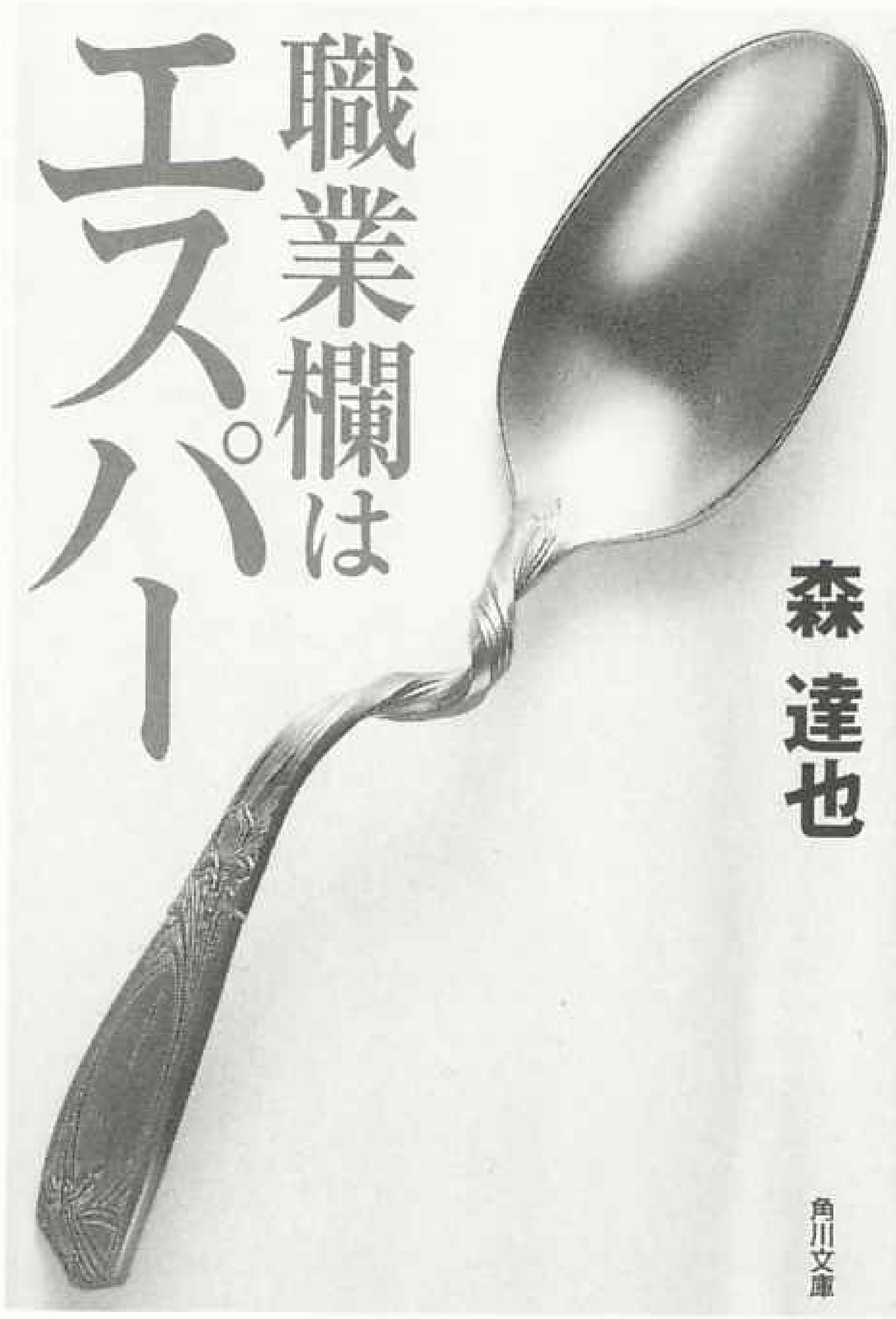
森　あ、そうかもね。トンパチ系ですね。そういえば彼は格闘技が大好きですから。清田の友人として前田（日明）さんにも取材をしています。多摩川のリングスの餅つき大会のときに。ただ、ファンに囲まれてるから、なかなか話を聞ける状況じゃなくて。しかも前田さんはその頃、フジテレビといさかいがあった直後でね。

――パンクラス関連で揉めていたとき

ですね。
森　そんな状況は知らずに「フジテレビですけど」って切り出したら、「何、コラ！」って険悪なムードになったんだけど、清田が「この人は違いますから！」ってとりなしてくれて。
——危うく一触即発でしたか（笑）。
森　前田さんはその頃、必ず試合前に清田にヒザの調子を診てもらうくらい信頼してましたから。そのときに聞いたのは、彼も最初は超能力を信じてなかったらしいけど、あるパーティの席で大きな金属のサラダスプーンを目の前で清田が曲げたのを見て、「恐れ入りました」って素直に認めたらしいですね。
——あの頑固な前田さんも素直に。森さんも目の前でスプーン曲げを拝見されてると思いますけど。
森　曲げというかスプーン〝折り〟ですね。ただ、あれは20以上のトリックがありますから。
——トリックが20通り!?
森　あらかじめスプーンに切れ目を仕込む方法とか、服の下に鉄板を忍ばせておいてそこに押しつけるとか、てこの要領で曲げる場合もあるし。ただ、僕も目の前で何度も見ていますけれど、「恐れ入りました」ってほど純朴じゃないんで、判断は保留ですね。
——目の前でも本当か嘘かわからない。
森　微妙なんですよ。スプーン全体が見えた状態なら別だけど、スプーンの半分は掌の中に隠れてる。絶対にトリックをできないわけじゃないんです。昔は車のキーも曲げたことがあるらしいけど、それはさくらももこさんが見てるみたいで。

底が丸見えの底なし沼な世界

——あ、『ちびまる子ちゃん』の作者のさくらももこさんが。
森　自分の車のキーを清田に曲げられてしまって、困ってJAFを呼んだらしいです（笑）。ただ、それを目の前で見ても「完全に信じるか？」っていうと微妙ですね。まぁ、最近テレビに出てるマジシャンのセロ（・タカヤマ）なんか、ガラスのすり抜けをやったり、メチャクチャでしょ。あれはスタッフワークだと思うから、マジックとは呼べないけど。スプーン折りも手首から先だけでは何もわからない。
——それでも取材対象への思い入れは、増していくと思うんですけど。
森　ええ。もちろん彼らとは付き合いが長いし、魅力的な男たちですから、人間として感情移入はしますけど。僕が「嘘か本当か」を判断できるとしたら、彼らがトリックを使って世間を欺く自分を許容できるかどうか、と考えるしかない。



『職業欄はエスパー』森達也（角川書店）
“エスパー”を職業に選んだ清田益章氏、秋山真人氏、堤裕司氏にスポットを当てたノンフィクション。森氏が不可思議な現象（心霊番組のロケで霊に取り憑かれ？ 秋山氏に除霊してもらうシーンも）に対面、観察者として葛藤しつつ、超能力者の日常を掘り下げた8年間の記録。『スプーン―超能力者の日常と憂鬱』（飛鳥新社）を改題。

——そういう部分でしか判断できない、と。
森　付き合いが長ければ嘘もつきますけど、逆に「これは嘘ではない」っていうのもわかるし、結局のところ、手首から先ではなくてその手首がついている本人そのものへの直感でしか僕にはわからない。
——本では「超能力を認めることへのうしろめたさは払拭できない」とも書かれてました。
森　オカルトって〝隠す〟という意味もありますから。なぜか認知したくない。不思議な抵抗が働くジャンルです。でも清田がスプーンを〝ねじる〟ところも僕は何度も見ているけれど……。あれはトリックがない。目の前で見たらさすがに凄いです。これはテレビの映像にも残っていますけど、スプーンをほぼ30秒で180度ねじりますから。その動きが肉眼でよくわかる。確かに一回曲げてからねじるという手法もありますが、このときはそれではない。でも清田はこのスプーンねじりは、めったにやらないんです。本人も「お茶の間にはスプーン折りで充分」って言うけど。あれはやっぱり凄い。
——そこは認めざるをえない、と。
森　うん。それでも「100パーセント信じるか？」と聞かれたら、「なんかあるんじゃないの？」って思いますけどね。ただ、「清田は僕を騙すくらいなら舌を噛んで死ぬタイプだろうな」と思っています。これは秋山さんや堤さんも一緒。なんの立証もできないけど。
——失礼かもしれないですが、一昔前のプロレスファンみたいな感じですね。「あの試合は本当じゃないか」「あの蹴りは入ってる」みたいな（笑）。
森　あ、そういう虚実の入り混じる共通点は確かにあるね。ただ、彼らは明らかにトリックを使うときもあるんですよ。
——それは興味深いですね。
森　実際に84年に清田は、テレビでトリックをやった様子を暴かれているんです。フジテレビの特番でホテルにカンヅメになっていろいろ実験をやったんですけど、調子がよくなかった。そのカンヅメの途中で彼が日本テレビの特番にも出演したんですが、そのときフジのスタッフは日テレのスタジオに日テレの了解を得て、隠しカメラを仕掛けるんです。「よくそんなことできたなぁ」と思いますけど。
——いまでは、ありえないですよね。
森　で、清田は知らずにスタジオに呼ばれて、トリックを撮った証拠のVTRを突きつけられた。ごまかしようがない事実を突きつけられて、しかもゴールデンタイムの生放送だから、清田も認めざるをえないですよね。僕もその番組を高校生ぐらいに観ていましたけど、「バカだな、アイツ」とか思いながらも、後味はとても悪かった。「確かにイカサマをやったのは悪いけれど、なぜテレビでここまで一個人を叩けるのだろう？」って感じましたね。
——完璧なさらし者状態で。
森　それだけ影響力があった証拠なんですけど。清田はいまもその話になると「イカサマしたのは事実」と言いますね。ただ裏舞台の話を聞くと、なかなか超能力が発揮できなくて、制作側に「制作費を賠償できるのか？」とプレッシャーをかけられてたとか。
——本には「賠償金として2300万払え」と言われた、と書いてありましたけど。
森　それは、構成作家の○○さんっていうフジの大御所が言ったらしいですけど。値段まで覚えているから、信憑性は高いでしょうね。ただ仮にそういう事情があってもトリックはトリックですから、弁解の余地はない。ただ「一回トリックをやったからすべてが嘘」とも言いきれないのに、テレビが求める結果は常にイチかゼロかですよね。インタビューのときに秋山さんが僕に言ったのは、「超能力も野球のバッティングと一緒で成功率は3割ぐら

めったにやらない清田のスプーンねじり あれは凄いし、トリックはないと思う

いだ」と。「でもメディアはそれでは許してくれない」って。

——野球だったら打撃十傑に入れるぐらいの高打率ですけど（笑）。

森　超能力はメンタルなものだし、完全にコントロールできないから。「できるときもあれば、できないときもある」と。

——どんなメジャーリーガーだって、打てないときはありますよね。

森　でも3割というグレーさをいまの社会は許容しないんです。彼らも能力を発揮できないときに数人でも目の前にいれば、「サービスしたい」って気持ちになるでしょうし。

——ただ、清田さんはほかにも凄い逸話がありますね。テレポーテーションとか。

森　それは清田が北千住に住んでいた頃に「マンガ家のつのだじろうさんの新宿の家に行く途中でテレポーテーションした」という話ですね。実証的なものではないんです。清田が「いまから遊びに行く」と自宅から電話をしたあと、20分くらいでつのださんの家に来たから「テレポーテーションに違いない」とつのださんは言っているわけだけど。清田も「あの頃はやんちゃだったから」なんて言い方をしていますね……。

——そこは否定しないわけですね。

森　当時は電話の番号表示もないし、池袋あたりの公衆電話から電話して「いまから行くよ」と言うことはできるから、この話だけではなんとも言えない。あとは「火星に行ってきた」っていう話もあるし。

——それも凄い話ですよね。清田さんが中学2年生のとき、月の表面にテレポーテーションして〝2B〟（「2年のボーイ」の意味）と書いてきた、という（★注2）。

森　実際、NASAの写真を見たら確かに〝2B〟とは書いてはある。だけど、砂や石の影が偶然そのように見えたという可能性は否定できないし……。まったく信じないわけじゃないけど、信じる根拠も否定する根拠もないしね。だから僕もグレーなんです。どっちかに決めなくてはならない理由もないし。

——そういう幻想的なエピソードもプロレスラーみたいですよね。昔のプロレスラーも嘘みたいな豪快な伝説の中に「本当にヤバイ」真実が含まれてて。

森　だからね……。彼らこそ〝底が丸見えの底なし沼〟ですよ！

——エスパーの存在そのものが底なし沼だ、と。

森　いまも江原（啓之、スピリチャル・カウンセラー）さんだの細木（数子、占術家）さんだのがゴールデンタイムで堂々と出演しているわけでしょ。江原さんを「インチキだ」と思ってる人もいれば「ホンモノだ」と思っている人もいる。そういうのと「全日本プロレスは打ち合わせやってるけど、新日本プロレスは違う」と言うのと近い感覚があるよね（笑）。

——プロレス界には「ノアだけはガチ」って有名な言葉もありますけど（笑）。

森　ひいきの引き倒しみたいなね。そういう意味で、いま流行りの〝KY〟も気になってるんだけど。



もり・たつや■1956年5月10日、広島県呉市出身。映画監督、ドキュメンタリー作家。98年にオウム真理教の荒木浩を主人公とするドキュメンタリー映画『A』を公開、海外でも高評価を受ける。現在はテレビ・ドキュメンタリー制作や、執筆活動を中心に活動。近著に『悪役レスラーは笑う』（岩波新書）、『死刑』（朝日出版社）など。

——去年の流行語大賞にノミネートされた〝KY〟。

森　不安や恐怖、危機管理意識が高まってるからこその流行だと思います。いまの日本社会は慢性的な避難訓練みたいな状況で、監視カメラがあっちこっちに設置されているし、「特別警戒実施中」や「テロ警戒中」みたいな貼り紙がいたるところに貼ってある。駅では「不審物を見かけましたら」式のアナウンスばかり。不安や恐怖がとても強くなっている。だから「場を乱す

超能力の成功率は3割ぐらい。でも、そのグレーさをいまの社会は許容しない

な。ちゃんと見ろ」って気分が強くなってるんでしょう。

——なるほど。

森　「場を見る」ことは否定しません。弱い動物って群れるんです。馬や羊や牛などの草食動物とか、鰯とか秋刀魚とかメダカとか、鳩とか鴨とか。天敵がいる動物は群れる。そして一匹が逃げたらみんなでバッと逃げるでしょ？　英語ではスタンピード（暴走）と言うんですが、人間なんてもっとも非力だからそういう危機管理本能が強く刷り込まれてる。

——もともと人間は空気を読む習性があった。

森　はい。ところが人間は道具を持ったから、地球上で〝最強〟になって天敵がいなくなっちゃった。でも不安とか恐怖の遺伝子は天敵の〝鋳型〟（金属を溶かして流し入れる型）のまま残っている。これが空っぽじゃ居心地が悪いんです。

——空っぽの状態に何かを入れたくなるワケですね。

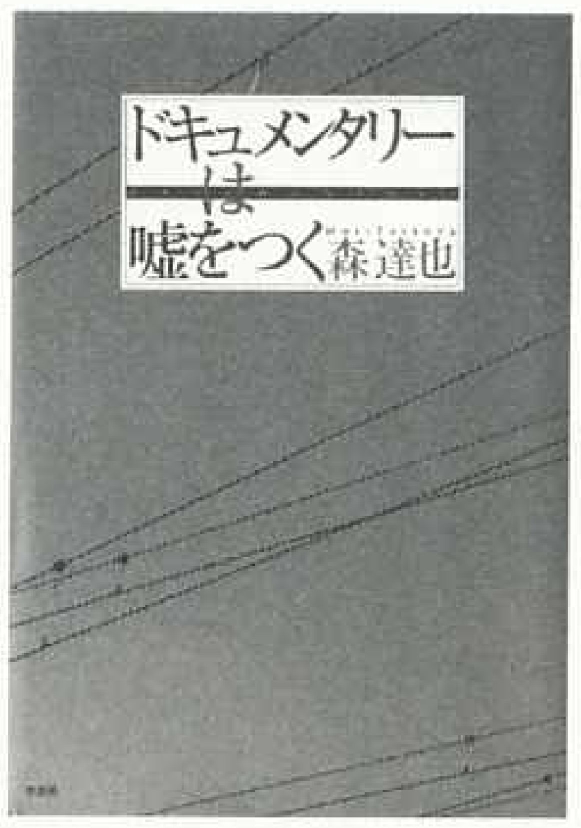
森　だから一番危険なのが同族の人間を入れること。つまり仮想敵ですね。だから戦争や虐殺はなくならないし、違う共同体を敵に仕立てて、言葉や宗教や皮膚の色が違うことだけで「アイツら、危ない」となる。だから危機感が高まると、空気を読まないヤツのために群れが危険にさらされるかもしれないから、「許せない！」となる。それで〝KY〟って言葉が生まれたのかな、と。それに不安や恐怖が強まっているときには、イチかゼロかすっきりしたいから、0・5や0・78みたいな、〝端数〟には興味を示さなくなってきているんでしょう。

——そういう時代の中で気持ちの余裕がなくなって、超能力やプロレスみた

★注1＝『NONFIX』「職業欄はエスパー」（フジテレビ）
1998年2月24日放送。フジテレビ深夜の『NONFIX』内で流された『職業欄はエスパー』映像版。秋山氏がエスパーによる株価予想のデータを公表する場面、堤氏が焼きそば屋のテーブルでコップに入った紙くずをダウジングする場面、清田氏がスプーン折りをする場面を1カットで収録など〝動く〟エスパーたちの不可思議な世界と日常が映し出されていく。

★注2＝火星の表面にテレポーテーション
1976年7月20日、アメリカの火星無人探査機バイキング1号から火星表面の写真が電送。この中に数字の「2」、アルファベットの「B」という文字らしきものが認められた。この1ヵ月後の『週刊ポスト』8月17日号で、当時中学2年生の清田氏が「火星に行ってきた」と父親に告白していた、という記事が掲載。清田氏は『職業欄はエスパー』の中で「指で文字を書いた」とコメント。

★注3＝『ドキュメンタリーは嘘をつく』（草思社）
「ドキュメンタリーとは事実の客観的記録」といった一般的な観念を、テレビのドキュメンタリー番組出身の森氏が「じつは撮る側の主観、作為から逃れることができない」として、自身の映像作品の成り立ちやドキュメンタリーの歴史や作品群から解き明かす。NHKスペシャルなどテレビドキュメンタリーの功罪に迫りつつ、その虚構性と表現の危うさについて言及した論考本。





昨年の『大みそかハッスル祭り2007』で、ミルコのハイキックをノーガードで“受け”て、失神してしまったキンターマン。プロレスから逸脱した『ハッスル』のリング上にてプロレスラーの凄さを再発見する、という逆説的な構図となった。虚実が交錯するプロレスの“底なし沼”ぶりがあらためて証明された格好だ。

いなグレーなジャンルは時代に受け入れられなくなってるんでしょうか。

森　ただ底なし沼とはいえ、プロレスも超能力も底がないわけじゃなく、けっこう底も見えたりするわけですよ。そのへんの中途半端さがイヤなんじゃないかな。江原さんは底が見えないほうですよね。でも、スプーン折りはトリックがチラチラ見え隠れするから、もうあまり興味を示さない。

――そんな時代に合わせるように、『ハッスル』がカミングアウトしたり、Mr・マリックさんも「マジックにタネはあるんだ」と裏側を明らかにすることでサバイブしている。このオープン指向の状況はいかがですか？

森　複雑ですねぇ。たとえばドキュメンタリーの定義の場合、ほとんどの人が「ドキュメンタリーはすべて事実だ」と思い込んでいる状況があった。だから僕は「ドキュメンタリーは主観の産物であり、客観公正中立などありえない」というテーマで、『ドキュメンタリーは嘘をつく』（草思社）（★注3）っていう本を出したんです。

――ええ。ドキュメンタリーの構造について言及された本ですね。

森　あえてそんなことを口にしたのは、「主観的な表現なんだ、と知ることでドキュメンタリーはおもしろくなる」って確信があるからです。ただプロレスの場合、裏を明かしちゃうのはどうなんだろう。僕もある程度は知ってますけど、「そこまで言わなくてもいいんじゃない？」ってところがあるかなあ。ドキュメンタリー番組は世間の約9割が「本当のことだ」と思っちゃうけど、プロレスをテレビで観て「真剣勝負の格闘技だ」って思う人はまずいないでしょう（笑）。この前、川田（利明）が大食いチャンピオン（ジャイアント白田）と試合したんでしょ。それで充分じゃないかな。

――「察してくれよ」みたいな（笑）。

森　ロングスパンで考えたら、決していいことじゃないような気がしますね。その『ドキュメンタリーは嘘をつく』は、僕がテレビ畑の出身だからあえて提示したんですが、でも映画畑の連中の反応は「いまさら何を言ってるんだ」って感じで、土本典昭さんというドキュメンタリー監督の大先輩にはハガキで「いい本だけど、タイトルがいけません。嘘と言いきるのは言葉が違う。もっとグレーなものだ」と叱られました。

――ただ、森さんはそこを確信犯的にやられてるわけですよね。

森　ええ。ただ、ここは大事なところでプロレスだって打ち合わせやリハーサルもするけど、一瞬パンチが入ったらムカッとしたり、3発やられたら、3発返すところを4発やっちゃったとか、絶対にあるわけでしょう？

――一瞬の本気ってありますよね。

森　その曖昧さやグレーな領域が楽しいし、魅力なわけですね。でも最初からタネ明かしをするとそこが消えちゃうからね。

『ハッスル』の路線もいいけど、全団体がタネ明かしをするのはどうなんだろうね

――『ハッスル』の大晦日ではゲストのミルコ・クロコップがプロレスラーにハイキックを入れたんですけど……。

森　ええっ！　あのクロコップが？（と驚いて）。

――そのハイキックをノーガードで受けた金村キンタロー選手がリング上で失神しちゃったんです。

森　頭で受けたんですか？　そりゃ失神するかもね。ただ、金村さんは本望かもしれないし。そこはプロレスラーの凄いところだよね。K―1の選手に「ミルコのハイキックをノーガードで受けろ」って言っても誰も受けないでしょう。それこそプロレスの矜持たる部分だと感じますね。

――ええ、受けの凄さというか。

森　だから『ハッスル』の路線もいいと思うけど、全団体がタネ明かしをしてくるってのはどうもね。クロコップが出てくるようなお遊びを……。お遊びはあってもいいけどレスラーならどこかで反発する一線があるんじゃないかな。

――そこでノーガードで受けたって話を聞くとシビれますよね。

森　そういう話にすがるしかないよね。だから、いろいろとバラされてもそういうのは起こりますよ。CGじゃなく生身の人間がやっているんですから。だから「100パーセント、プロレスは本物」ってのもどうかと思うけど、逆に「100パーセント、作りました」ってのも違うし。そういうグレー部分があるからこそ、世界は豊かになると思うしね。超能力もプロレスもマーケットは縮小するかもしれないけど、絶対に消えることはないと思いますね。

――グレーなジャンルでも、かたちを変えて生き残るということですね。

森　超能力も周期はあるでしょうね。明治時代の頃から、突発的に盛り上がって、最後はバッシングされて消えて、またしばらくして出てきて、を繰り返していますから。

――清田さんは大麻の事件もありましたけど（06年10月に大麻取締法違反容疑で逮捕）、いまは……。

森　もう出所していますし、元気ですよ。年末に「忘年会やろう」って連絡がきたけど結局時間作れなくて。だから、今日はひさびさに電話しようかなと思ってね。（ポツリと）そういえばね、僕の妻もけっこうできるんですよ。

――えっ！　超能力を？

森　スプーン曲げはできないけど、マクドナルドの景品の当たる10円でこするやつは百発百中でしたから（笑）。

――スクラッチカードが百発百中！

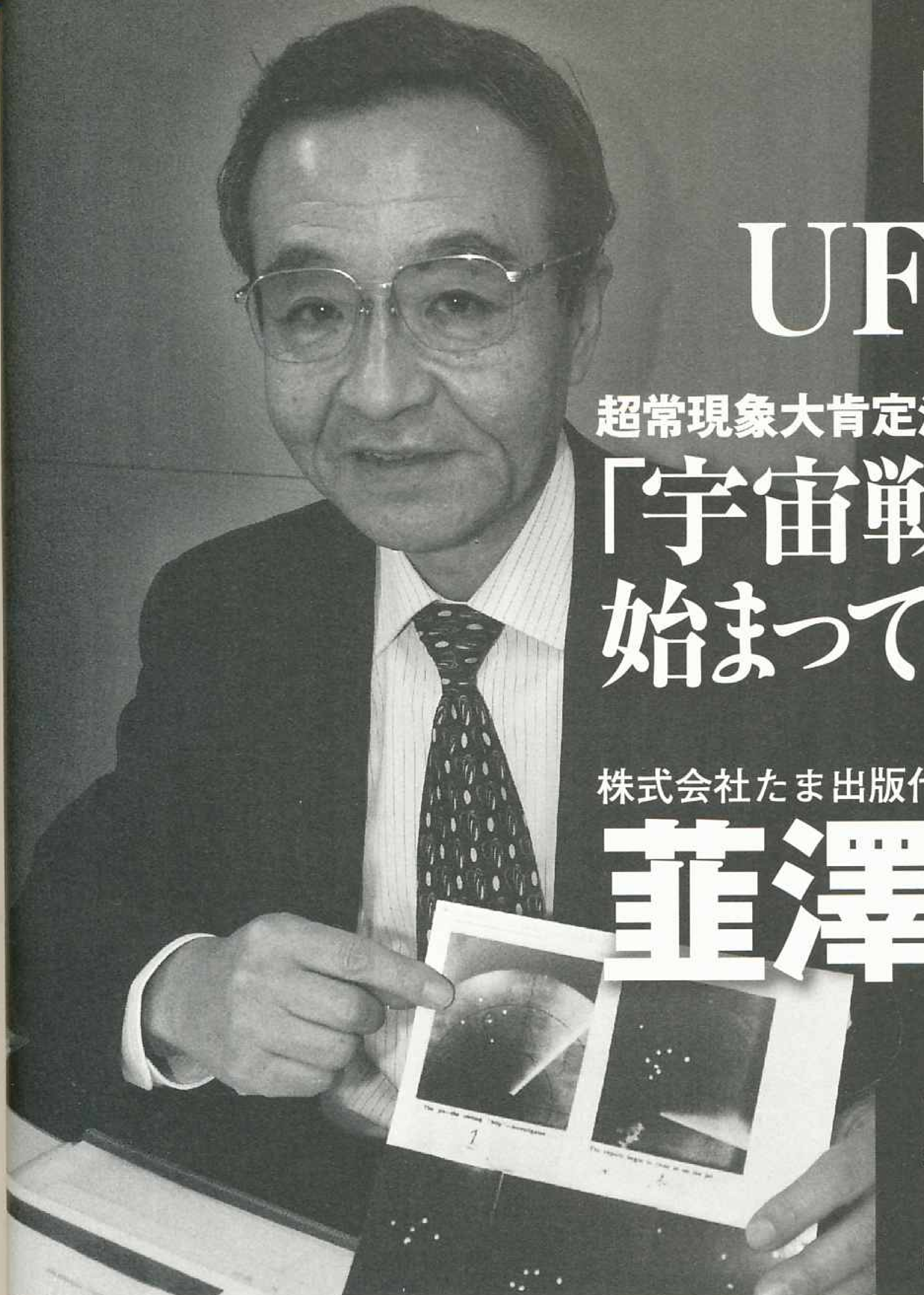
森　集中すると凄い疲れるんだって。「こんなに疲れて、ポテトSじゃ合わない」ってやめちゃったけど（笑）。ダウジングもかなり当たりますし。というか、ダウジングは簡単ですよ。

――へぇ～。ホントですか？

森　うん（笑）。ぜひ君もやってみたら？

――ちょっと興味が出てきました（笑）。本日はありがとうございました。

【08年1月8日／都内・新橋の喫茶店にて収録】



リサーチ **002**

UFOの世界

超常現象大肯定派が語る驚愕の“真実”

「宇宙戦争はすでに始まってるんです!!」

株式会社たま出版代表取締役

韮澤潤一郎

かつてのプロレス同様、好奇の目にさらされながら、答の出ない答を探し続けるジャンルであるUFOの世界。その第一人者といえば、毎度おなじみ超常現象絶対肯定派、韮澤さんだ！　ある意味日本一、底が丸見えの底なし沼にハマりまくっている韮澤さんに、沼の中の“真実”をおおいに語ってもらった！

聞き手／堀江ガンツ

――韮澤さん、1年ちょっとぶりのご無沙汰でした。

韮澤　毎年、ご苦労さまです（笑）。

――前回、06年末にお話をうかがったとき、韮澤さんが「来年はUFO問題が日本の政治としても問題になる」とお話しされてましたけど、07年末、石破茂防衛相の発言をきっかけに、ホントに永田町でUFO問題が話題になったので、ビックリしましたよ！

韮澤　ねぇ、予言が当たりましたね（ニヤリ）。なぜ、私が「UFO問題が日本の政治としても問題になる」と言ったかというと、じつはちょうどあの頃、石破さんに会ってたんですよ。

――えっ！　韮澤―石破会談が実現していたんですか!?

韮澤　当時、石破さんは防衛庁長官を退任されてフリーだった時期だったんですよね。で、テレビの仕事でお会いすることになって、議員会館でお話しさせてもらったんです。もちろんね、「ゴジラが来たときはどうしたらいいのか」って話もありましたよ。

――韮澤さんにゴジラ襲来の際の国防について相談していましたか！

韮澤　石破さんはもともとそういう話が好きなんでしょうね。だから、私のほうから日本で撮られた鮮明なUFO写真を額に入れてプレゼントしたりして、喜んでもらえましたよ。防衛大臣室に飾ってあるかどうかはわかりませんけどね。

――防衛大臣室に額入りのUFO写真が飾ってあったら驚きですね（笑）。

韮澤　で、そのとき私が石破さんに、航空自衛隊の戦闘機がUFOに接触して墜落した事件について質問したんですよ。

――そ、そんな事件があったんですか!?

韮澤　あったんです（キッパリ）。いまから30年ぐらい前の話ですけどね、東京空域のレーダー網にオレンジ色の円盤型の飛行物体が現われて、茨城の百里基地からファントムがスクランブルで発進したんですよ。そして、その飛行物体を追跡して見つけたときに、パイロットがキャノン砲の発射ボタンに手をかけたんです。撃つ気はなかったんでしょうけど、もしものために構えたんですね。そうしたら、構えたと同時にオレンジ色の物体がスーッと遠のいて、さらに追跡したらファントムが墜落させられちゃったんです。

――それはUFOに撃ち落とされたんですか？

韮澤　撃たれたのか、接触したのか、そこはよくわかりませんけど、戦闘機は火を噴いちゃって、きりもみ状に墜落したんですよ。それで二人のパイロットはパラシュートで脱出したんですけど、一人は助かったけれど、もう一人はパラシュートに火がついて死んでるんです。

――そんな大事件がありましたか……。

韮澤　で、「そういう話がありますけど、ご存知ですか?」って石破さんに言ったら「いや、そういう話は上がってきてない」ということでしたけどね。

――あ、石破大臣は知らなかった（笑）。防衛省のトップが、そんな国防上の大事件を知らないというのは、大問題なんじゃないですか？

韮澤　まあ、防衛省の中のデータがす

べて大臣にまでいくかっていうと、そうじゃないから。重要なことしか上がらないから。要請すればデータは出てくるかもしれないけども、まあ知らないということだったんですね。

——自衛隊の戦闘機がUFOに撃墜されたのは、あんまり重要じゃないんですかね……。で、そんな防衛大臣も知らない情報をなぜ韮澤さんは知っているんですか？

韮澤　まあ、私も立場上、内部情報というのはたくさん入ってくるんです。

——UFO問題の専門家という立場上、内部機密がいろいろと入ってきますか（笑）。でも、UFO事件は、これまでたくさん起こっているはずなのに、新聞やテレビのニュースでほとんど報じられてこなかったのは、どうしてなんでしょうね？

韮澤　これはね、本当のことを報道して、パニックになってしまうことを懸念しているようですね。アメリカのシンクタンクでブルッキング研究所っていうのがあるんですけど、そこで分析した結果、やはり「パニックになる」と。あとはね、国際法と同じように宇宙法という法律があるんですよ。

——宇宙法！　それは全宇宙で通じる法律ということですか？

韮澤　いやいや、これは宇宙空間とその利用に関する国際的な条約ですよ。たとえば、ある国が月に行った場合、国土として占有してはいけないとか

底が丸見えの底なし沼な世界

ね、そういうことを決めた国際条約です。で、その宇宙法の根源として、一番問題になってるのはエイリアンと遭遇したときの対処なんですよ。

——宇宙人と実際に会ったときの対処法について、国際的な取り決めがありますか！

韮澤　あるんです。で、地球外の知的高等生物との接触の際にとり得る政策として、次の3つが挙げられています。一つは地球よりも低い文明のエイリアンとの接触、それから同等の文明との接触、そしてより高度な文明との接触と、この3段階があるんですよ。

写真提供／産經新聞社



昨年末、閣議後の記者会見でUFO問題について質問された石破茂防衛相は、UFOが日本を襲来した場合に備え、「防衛省として取り組むことはないが、私自身としてどうなるのかは考えたい」と大まじめに発言。法制面の研究に個人的に取り組む考えを明らかにした。この衝撃発言の陰には韮澤さんの存在があったのか……。

——それぞれ対処法が違うわけですね。

韮澤　そう。まず低い文明だったら、信託統治政策、および最終的パートナーシップ。これはたとえば月に行ったとき、そこに原始人がいたときにはこうしましょう、と。もう考えてるわけ。

——月に低い文明があったら、「地球領」のようなかたちで統治する、と。

韮澤　それから同程度の文明を持っている場合は、可能な予備協定を結ぶ必要がある。これは交流して、一応一緒に交わることができる、と。ところが高度な文明との接触の際は、地球外文明からの恒常的除外になってます。

——高度な文明を持った宇宙人が来たら排除しようということですか。

韮澤　はい。要するに人類学的にも高度な文明が原始的なところに入った場合、原始的な文化っていうのは駆逐されちゃうんですよ。これは民俗学的な歴史が証明してるんです。たとえば大航海時代、コロンブスが新大陸を発見したあと、アメリカのネイティブの文化はほとんど滅びちゃったんですね。

——それと同じことが、惑星間でも起こり得る、と。

韮澤　だから、UFO問題や異星人とのコンタクトというのは、地球が支配されてしまうかもしれない危険性を伴なっているんですよ。で、実際にUFOというのは、たびたび地球を訪れていますから、それを知ったら人類がパニックを起こしかねない。そうならないために、各国の政府が行なっていることは、まずUFO問題を笑いものにしましょう、と。目撃談を人に語るのは恥ずかしくなるようにもっていきましょう、と。だから私なんかも、テレビの超常現象特番などで笑い者になってるわけですよ！

——政府のおかげで笑い者にされている、と（笑）。

韮澤　そう、だからもう全員が騙されてるわけですよ！　実際問題、UFOを見たり、異星人とのコンタクトがあったとしても、それをまともに話せなくなっているわけです。実際に事件が起きてもマスコミがなかなか取り上げないから、伝わらないしね。

——そもそもUFOというのは、いつ頃から地球に来ているんですか？

韮澤　目撃例というのはもう100年ぐらい前からあるんですけど、急激に増えたのは第二次世界大戦以降ですね。なぜUFOが増えてきたかというと、広島と長崎に原爆が投下されたでしょ。この原爆というものを地球人が持ってしまったということに対して、「これはほっとけない」ということでUFOがどんどん来だしたんです。

——原爆がきっかけなんですか！

韮澤　だからロズウェル（事件）も終戦の2年後に起きているし、52年にはアメリカの首都ワシントンの上空に連日連夜UFOが出たわけですよ。さらにその2年後の54年には、今度はヨーロッパ全土でUFOの目撃事件が発生するんです。これはアメリカのときよりも多くて、私が調べただけでも100件ぐらいの着陸事件が起きてる。

地球人が原子爆弾を持ってしまったことで UFOがどんどん来るようになったんです！

——UFOが100回も着陸してましたか！

韮澤　着陸してます（キッパリ）。で、目撃者は100万人を超えてます。

——ひゃ……100万人ですか……。

韮澤　100万人です（再びキッパリ）。ところが、これらのUFO目撃事件は全部隠蔽されてるんです。

——では、韮澤さんはなぜご存知なんですか？

韮澤　隠蔽はされているけれど、当時の新聞報道では出てるんですよ。それを調べると、だいたい100件の着陸事件があったわけです。それで各国の首脳が「これは大変だ」ってことで、55年にジュネーブで、イギリス、アメリカ、フランス、ソ連による4大国巨頭会談っていうのが開かれたんですよ。その会談で、宇宙人に対しての地球全体の動きを開示しなきゃいけないということで始まったのが宇宙開発。

——そこから宇宙開発が始まったんですか⁉

韮澤　宇宙開発そのものが、いわば対宇宙人に対しての地球の防衛というか調査のスタートですよね。で、結局いろいろ調べてみると、どうも宇宙戦争がすでに始まっているんですよね。

——えぇ～～！　宇宙戦争が始まっちゃってるんですか⁉

韮澤　始まってるんです！　カナダの前の国防大臣でポール・ヘイラーという人が、UFO問題に絡めて宇宙戦争

底が丸見えの底なし沼な世界

の危険性を警告してるんですよ。アメリカの宇宙防衛戦略は非常に危ないということで、「もっと宇宙人側と平和裏に交渉しないといかん」という発言をしてるんですね。これはね、やはりスターウォーズ計画（戦略防衛構想）等で、すでに何十年も前から地球防衛っていうのが始まってるんです。そしてアメリカは、宇宙人を排除するために、多額の予算を投じて軍備拡張してるわけですから。

――アメリカの軍備拡張はＵＦＯ対策なんですか⁉

韮澤　そういう側面もあるんです。ただ、それを疑われたくないから、ＵＦＯ問題というのは、どんどん秘密になっちゃったんです。でも、実際は高度な文明を持った異星人はたびたび地球を訪れていて、それをなんとか排除しようとしている現実があるわけですよ。それを証明するために、私は年末の『超常現象スペシャル』で、宇宙人の住民票をついに公開したんですよ。

――やってましたね（笑）。あれは高度な宇宙人の住民票なんですか。

韮澤　ええ。あれは正真証明の宇宙語で書かれているんですよ。

――正真正銘の宇宙語……あの象形文字みたいなヤツですよね？

韮澤　そうです。あれが太陽系で一番ポピュラーな宇宙文字なんです。それを読解してみると、太陽系の2番目の惑星から来ていることを示す矢印らしきものがついていて、金星人であることがわかる。

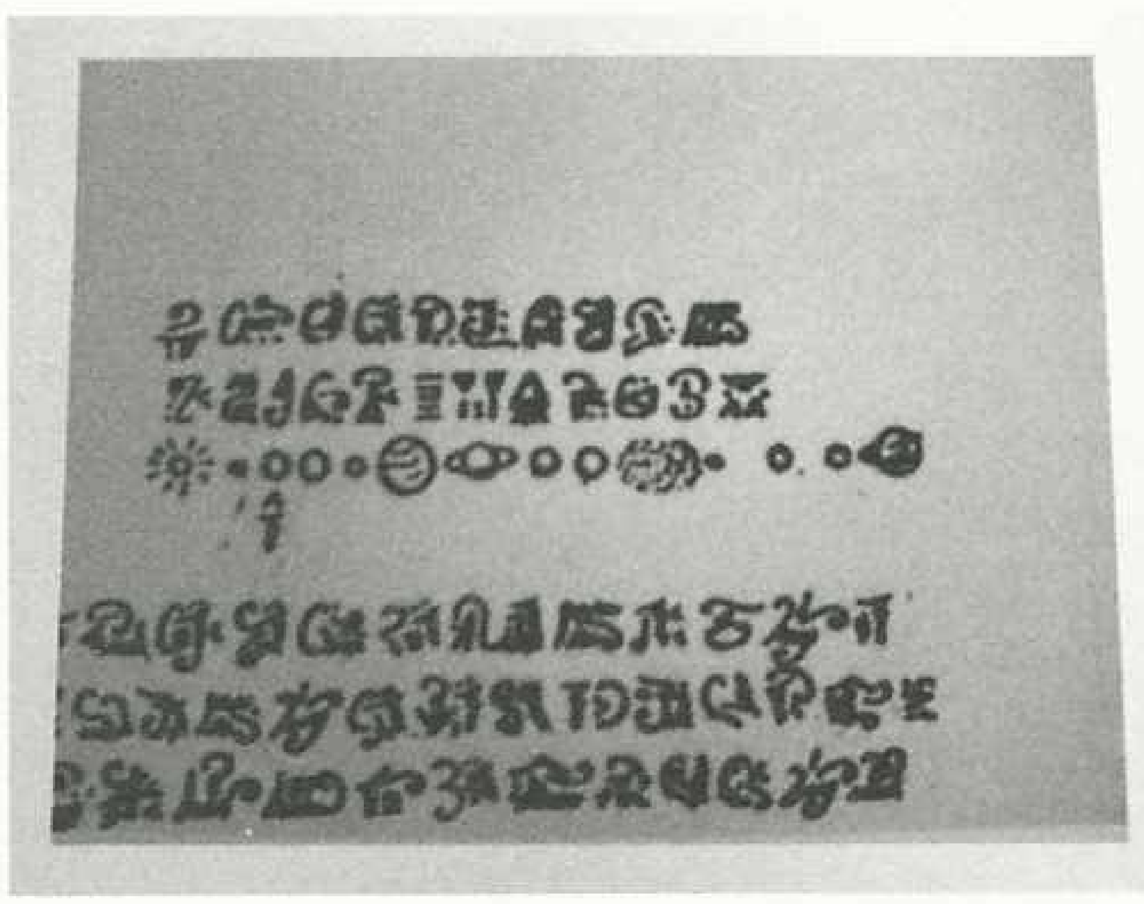
――でも、なんで韮澤さんが宇宙人の住民票を持ってるんですか？

韮澤　この住民票の金星人と同じ金星に行った地球人を私がメキシコで取材してるんですよ。

――えっ⁉　金星に行った地球人がいるんですか？

韮澤　いるんですよ。ＵＦＯに乗っけてもらってね。で、私はその人から直接、金星の様子をいろいろと聞いたんですよ。どんな社会になってるか、とかね。

――金星に社会があるんですか？



これが韮澤さんが金星に行った地球人から手に入れた、金星人の住民票だ！　中央に太陽系の惑星を羅列した象形文字（？）があり、金星のところに矢印らしきものも見える。これははたして本物なのか？　それにしても太陽と土星がわかりやすすぎる……。

韮澤　もちろんありますよ。人口が何億といるんですから。

――金星人が何億人もいますか！

韮澤　金星だけじゃなく、月にだって宇宙人の基地がたくさんありますからね。ただ、金星というのは、とくに高度な文明を持っていて、その人は「ノンポリス、ノンホスピタルだ」って言うんですよ。

――警察や病院がない世界ですか。

韮澤　そう。警察や病院がないというのは、犯罪や病気がない社会ということですから、これは地球と比べてもはるかに高度な文明ですよね。

――まあ、それがホントにあるとしたら、そうですよね。

韮澤　ただ、その金星の進んだ文明を地球が受け入れられるかといったら、無理があると思う。だから、この連中を追い払ってるんですよ。連合艦隊が。

――れ、連合艦隊⁉　なんですか、それは？

韮澤　地球とどっかの宇宙人による連合艦隊ですよ。

――どっかの宇宙人（笑）。

韮澤　このへんの高度な話になってくると、プロレス愛好家の方が理解するのは、ちょっと難しいかもしれませんけどね。

――ええ。かなり脳みそがとろけそうになっております（笑）。

韮澤　でも、実際にはＵＦＯ事件はたくさんあるし、へんな宇宙開発も行なわれているんですよ。ただ、すべて隠蔽されているんです。日本ではＵＦＯを目撃しても、それを届け出る機関がないですしね。じつは「ＵＦＯ１１０番」みたいなものがないのって日本だけなんですよ。

――世界各国には「ＵＦＯ１１０番」があるんですか？

韮澤　ほかの国には全部ありますよ。だから最近になって日本でも文部科学省でそれを受け付けようかって話になったわけですよ。

――そんな動きがありましたか……。

韮澤　それはやはりＵＦＯ問題が、非常にシビアな問題になっているからなんですよね。だから、韮澤のＵＦＯ特番も、だんだん笑ってられなくなってくるんじゃないかな。

地球とどこかの星の連合艦隊が、高度な文明を持つ宇宙人たちを追い払っているんです！

――『超常現象スペシャル』がシリアスな番組になりますか（笑）。

韮澤　そうなるでしょうね。もう「宇宙人なんているわけない」なんて、笑ってられなくなってきてるんです。

――でも、韮澤さん自身は長年ＵＦＯ問題に取り組む中で「宇宙人なんているわけない」って、もう何百回も言われてきたと思うんですけど、そんな中で「やっぱり宇宙人はいないのかな？」とか思ったことはないんですか？

韮澤　それはね、私自身は宇宙に行って宇宙人と会ってきたわけじゃないから、いないと言われればいないかもしれないですよ。「宇宙は広いから、地球にエイリアンが来るわけがない」なんていう確率論なんかも出てますしね。ただ、実際に宇宙開発の歴史やＵＦＯ問題の歴史を見たら、もう確率論じゃ収まりがつかないんですよ。

――積み重ねた状況証拠がありすぎる、と。

韮澤　月の天文学的な観測史を調べれば、月の表面自体が死んだ世界じゃないこともわかりますし、光が動いてたり、いろんな飛行物体が観測されてるわけですからね。月の様子というのは、我々が日常接してないからわからないだけであって、実際はそうじゃない。たとえばアメリカに行ったことがない人はアメリカが実際どうなっているのか、本当はわからないんですよ。テレビや雑誌を見て知っているだけで、その人にとっては二次的な情報でしかない。そして多くの人にとって宇宙というのは、テレビや本からの情報しかないわけです。テレビが本当のことを伝えているのか、実際には隠蔽された真実があるのかわからない。

――まだ答は出ていないということですね。

韮澤　そうです。ただ、一つ言えることは、地球規模での人類の文明に対しての脅威が起きてくれば、我々はどうしても宇宙的にものを考えないと生きていけなくなるということです。そういう時代になってきているということですね。

――では、さらなる真実探求のためのご活躍を期待しております。

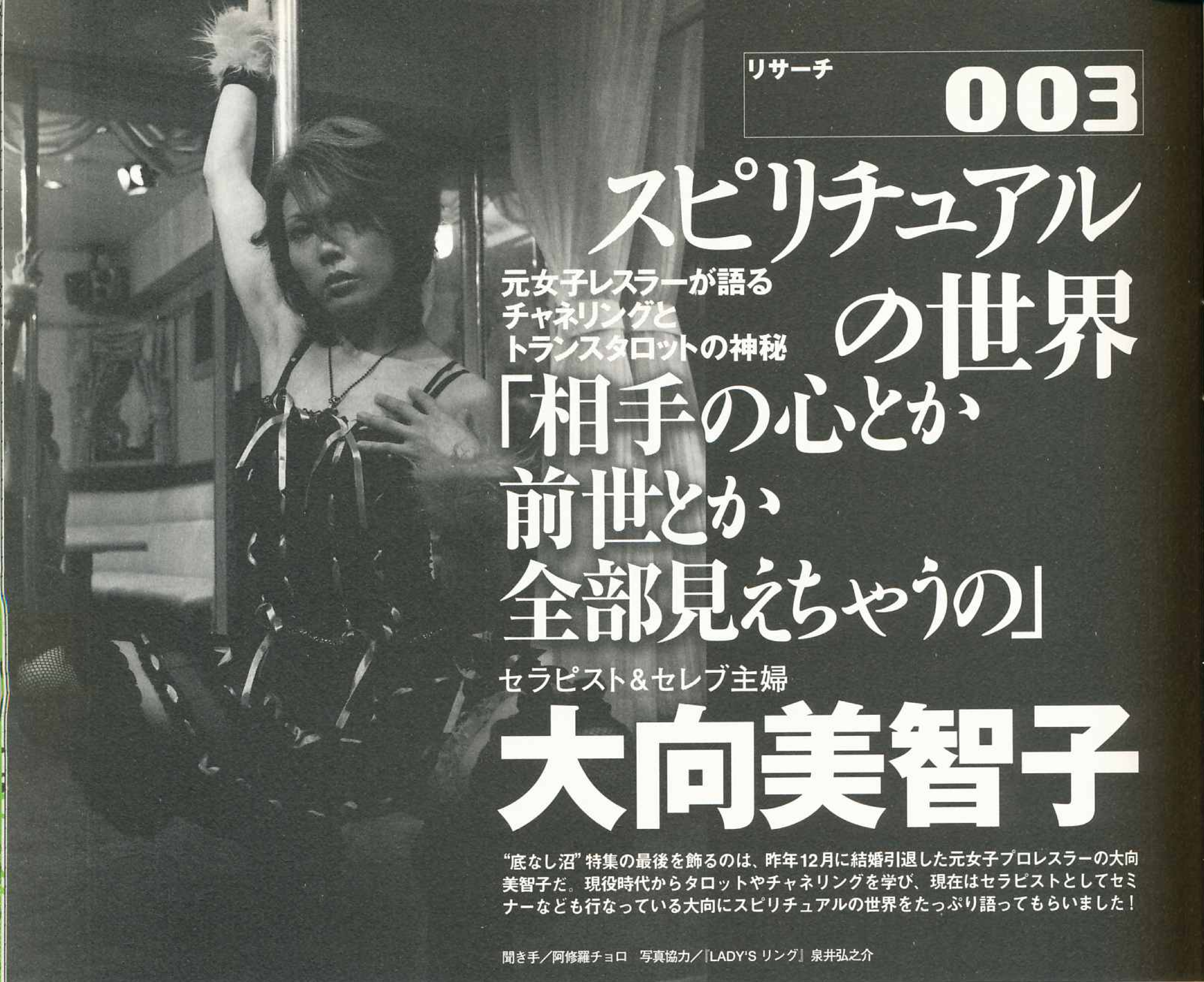
韮澤　ええ。『超常現象スペシャル』も今年で11年目だから、どうなるかわりませんけど、楽しみにしててくださいよ（ニッコリ）。

――ありがとうございました！

【08年1月10日／都内・たま出版にて収録】

にらさわ・じゅんいちろう■1945年新潟県出身。法政大学法学部卒業。小学生時代にＵＦＯを目撃したのをきっかけに、独自のＵＦＯ研究を開始。69年にたま出版を設立。超常現象絶対肯定派として、〝超常現象バスター〟大槻教授とはてしないバトルを繰り広げ、ＣＭでも共演している。





リサーチ 003

スピリチュアルの世界

元女子レスラーが語るチャネリングとトランスタロットの神秘

「相手の心とか前世とか全部見えちゃうの」

セラピスト＆セレブ主婦

大向美智子

“底なし沼”特集の最後を飾るのは、昨年12月に結婚引退した元女子プロレスラーの大向美智子だ。現役時代からタロットやチャネリングを学び、現在はセラピストとしてセミナーなども行なっている大向にスピリチュアルの世界をたっぷり語ってもらいました！

聞き手／阿修羅チョロ　写真協力／『LADY'S リング』泉井弘之介

プロレス以外で初めて自分で勉強しようと思ったのがタロットだったの

――昨年の12月に結婚、翌日に引退試合を行なった大向さんが、いま本格的に占いとか、スピリチュアル系のお仕事をされてるということでお話を聞かせてもらえればと思ってます。

大向 よろしくお願いします。私のは占いとはちょっと違うんだけどね。

――そのへんはのちほど、じっくりと聞かせてもらいます。いまは福岡在住で、月に一度、セラピストとして東京でセミナーとかを開かれてるみたいですけど、そもそも、そういった才能に気づいたのはいつぐらいなんですか？

大向 さかのぼると5～6年以上前になると思うんだけど。でも、もともと才能があるとかじゃなくて、たまたま自分自身がちょっと病んでた時期があったのね（苦笑）。アルシオン時代の頃に、いろいろ精神的にとかプレッシャーだとか、あと芸能もやったりとか、会社を背負うっていうことで、けっこう悩んだりとかしてて。

――情緒不安定な時期があったみたいですね。

大向 そうそう。体調壊したりとか、その頃、恋愛でもいろいろあったりして、自分自身がどうにも救われなかったんですよ。そういう状況が続いたときに、たまたま紹介してもらったタロットの先生のところに行ったのがきっかけで。そのときに診てもらって先生に癒されたのもあったんだけど、とにかくタロットのカードに惹かれてしまって。それから先生といろいろ話していくうちに「自分でわかってないかもしれないけど、凄い霊感があるよ」とか、「あんた、これ仕事にできるわよ」って言われたのね（笑）。

――また凄いことを言われましたね（笑）。

大向 私もそのときは「え～っ⁉」とか思って（笑）。そのときはプロレスラーだったし、自分がセラピストになるとか全然思ってなかったから。でも趣味程度に習いたいみたいな感じで言ってたら、先生が教えてるって聞いたので、そこに通い始めて。それまでは、ずっとプロレス一本でやってきて、プロレス以外のものに興味を示したことがなかったんで、生まれて初めて自分で勉強しようかなと思ったことがタロットだったの。

――霊感が強いっていうのは、自分では感じたことはあったんですか？

大向 全然。逆に霊感はないと思ってたから、気にしたこともなかったし。オバケとか普通に怖かったんで、巡業先のホテルとかでもシングル部屋とかだと怖くて眠れなかったし（笑）。

――きっかけはタロットで、そこからチャネリングとかヒーリングとかも学んでいくわけですよね。

大向 そうそう。タロットは一通りのことを教えてもらって、人を診れるぐらいになったんですけど、それから関連することでチャネリングとかヒーリングとか、そういう方面の方から誘われたりして、「それも習おうかな」み

大会名とかマッチメイクをチャネリングで決めてたんだけど、便利だなと思った

たいな感じで、順番的にいろんなものを習って、いまに至るんですけど。

――習っていく過程で霊感が強いっていうのを自覚したりはしました？

大向　霊感とかも多少はあると思うけど、やっぱり勉強して磨かれた部分が大きいと思う。チャネリングっていっても、たとえばタロットだったら、へんな話、霊感がなくてもできるからね。カードの意味さえわかってれば。

――タロットとかは勉強すれば、ある程度、できるって言いますよね。

大向　そうなんだけど、やっぱりカードの意味だけを、ただ伝えるんじゃなくて、リーディングっていってちょっと霊感っていうかね、その人の持ってるものを使ったりしてやるのに、チャネリングって凄く合うんだよね。

――う〜ん、だんだん、意味がわからなくなってきました（笑）。

大向　チャネリングっていうのは簡単に言うと、高次元なものとつながって情報を降ろすんですけど、その人にとって必要な情報が降りてくるのね。

――は、はあ。

大向　で、それをカードに降ろせるの。人によって、いろんなやり方があると思うんですけど、私は自分でそのチャネリングを取り入れたので、それを自分のオリジナルのタロットとして〝トランスタロット〟とうたってるの。

――オリジナルホールドみたいなもんですね（笑）。

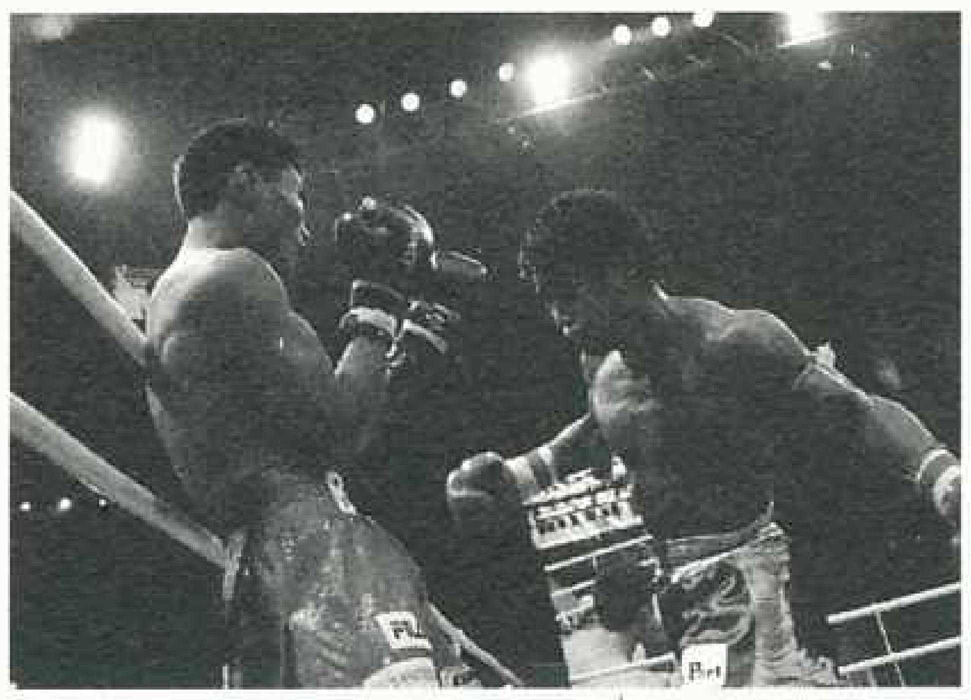
大向　まあ、そんな感じで（笑）。

――確か、そういう力を手にしてからはマッチメイクとか大会名とかもチャネリングで決めてたんですよね？

大向　そうそうそう！　あれはちょっとね、便利だなと思った（笑）。

――イメージが湧いてくるというか、このカードがいいんじゃないかっていうのが天から降りてくるんですか？

大向　そう。でも、その頃はほかの団体から「チャネリングして大会名付けてよ」とか言われちゃうのも困るんで、企業秘密にしてたんだけどね（笑）。



この写真が大向が「試合をしている最中に、神の助けが来てた」と語っていた昨年の大晦日『Dynamite!!』での魔裟斗vsチェ・ヨンス戦。魔裟斗は「最高のオーラしてた」という3ラウンド51秒で見事勝利。大向先生の勝敗予想も始めたいですね！

――凄い話だなぁ（笑）。でも、レスラーの中には「神のお告げでレスラーになることを決めた」とか言う人もいますからね。

大向　でもね、レスラーって、みんなそういう能力を持ってると思うよ。

――プロレスラーは、みんなそういう能力を持ってますか！

大向　そう思う。自分自身の光を受け取るのが上手だから。あと、格闘家の人なんかはとくに神がかりの人が凄く多いんで。試合なんか観てると、私なんかそっちのほうばっかり見ちゃうんですけど（笑）。

――大晦日は『Dynamite!!』をご覧になったみたいですけど。

大向　もう誰のうしろが強いとか、そういうのが気になっちゃって。その人はあまり見てないっていうか。

――「神がかった強さ」とかいう表現はよく使いますけど、大向さんはそれが実際に見える、と？

大向　見える！　闘ってても、「この人には凄い神様がついてるんだな」とか、「あ、この人ちゃんと神を信じて、神様にちゃんとお祈りしてからリングに上がったんだな」とか、そんなことまでわかっちゃうから。

――うひゃー！　最近、そういう意味でこの人は凄いと思った人って誰かいます？　山本KID（徳郁）なんて、そのものズバリ〝神の子〟とか言われてますけど。

大向　うん、神の子だなとは思う。

――あ、やっぱり（笑）。

大向　でもね、このあいだの『Dynamite!!』の魔裟斗の試合を観たときに、入場してきてリングに上がったとき、「この人、今日はオーラ曇ってんなあ」って思ったのね。

――へぇ〜、オーラって曇ったりするもんなんですか。

大向　そうそう。最初は「曇ってるな」と思ったんだけど、試合をしてる最中にね、やっぱり神の助けが来てるのね。

――魔裟斗に神の助けが！

大向　それがどんどん光になっていって、フィニッシュの直前なんか最高のオーラしてたからね。やっぱ一流の格闘家ってこうなんだなって思ったし。桜庭（和志）さんとかなんてもうヤバいよね！

――さ、桜庭さんもヤバいですか!?

大向　私、昔よくPRIDEのバックステージとか行ってたんだけど、出番前の桜庭さんをたまたま見たんですよ。で、普段の桜庭さんってのほほんとしてる感じの人っぽいじゃないですか。けど、出番前の桜庭さんを見た瞬間に「ヤッベエ！　この人、つええ!!」とか思っちゃって。

――わかっちゃいましたか。まあでも、桜庭さんもそうですけど、リングに上がると変わる人っていますよね。

大向　いるよね。格闘家っていえば、ちょっと前に『オーラの泉』で前田日明さんが出てたじゃないですか。

――江原（啓之）さんと美輪（明宏）さんから「コレクションの刀を手放したほうがいい」って言われて、かなり悩んでましたけど（笑）。

大向　あのときは、前田さんが闘う世界から今度は愛の世界にっていうテーマがあったんだけど、あのとき、なんかリンクしたのね。彼もたぶん前世とかで将軍だったり、そういうときがあったと思うんだけど、私も正直、将軍のときがあったんで。

――えっ、大向さんの前世は将軍!?

大向　そう！（キッパリ）。いろんな前世があるんだけど、将軍のときがあったらしくて。私はこれまで、ずっと闘ってきた人間だから、今回、結婚したことで闘うことが終わりになったのかなって、前田さんのときの放送を見て思ったんだよね。前田さんも顔が変わったじゃないですか、すっごい。

――変わりましたよね。やっぱり、『オーラの泉』とかは気になって観たりするんですか？

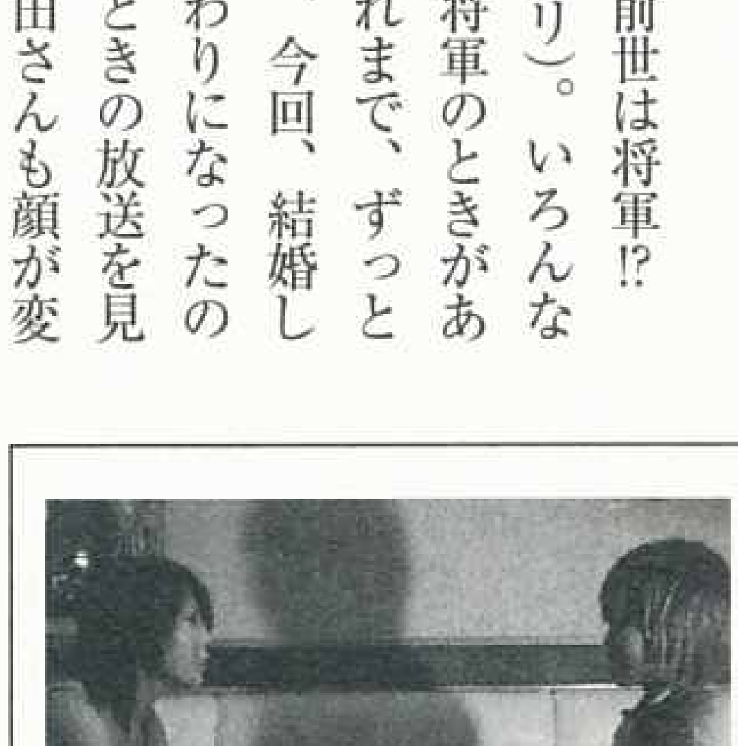
大向　ううん、気になっては観ないの。不思議な話、そういう重要な、私が観なきゃいけないと思うときは、テレビをつけたらもう江原さんが出てるの。

――ワ〜オ！　ちなみに江原さんのことはどう思います？　最近はバッシングとかもあるみたいですけど。

大向　あの人は凄いと思うよ。バッシングとかっていうのも、やっぱり霊感霊視とかって、いつの時代も疑う人はいるからね。プロレスや格闘技だって、いろいろ疑われるわけじゃない？

――まあ、いろんな意味で疑われることが多いジャンルですよね。

大向　それと一緒で、江原さんなんかも疑って見てる人はいるけど、それを信じるか信じないかは、その人の勝手だから。べつに江原さんが言ってることを信じないんであれば、その人はその人の次元で生きればいいんじゃないの、みたいな感じだよね。だから次元



現役時代は後輩レスラー（写真は夏樹☆たいよう）などをタロットで占ってあげたりしていた大向先生。現在、福岡在住の大向は「EGOIST Rose」として、月イチベースで上京し、セッション、アロマらぶセミナー、TRANCEタロット教室などを行なっている。スピリチュアルブログ（http://omukaimichiko.blog.players.tv/）では、大向先生による無料ヒーリングが受けられる日もあるので要チェック。その際には「遠隔ヒーリングを受け取ります」と心で意図するんだ！　ご主人とのラブラブな日常が満載のブログ「EgoistのEGO日記」も必見！　アドレスは各自調査!!

みんな、おでこに第3の目があるんだけど、そこが開きっぱなしになったことがあるの

底が丸見えの底なし沼な世界

なんだと思う。低次元な人って「あの人がこう言った」とか、くっだらないこと言う人って多いじゃない？　でも、江原さんたちはそういう次元で生きてないから気にしてないと思うよ。それに、疑ってる人も面と向かって何かお告げをもらったら、その人はたぶん変わると思うしね。

――そうかもしれませんね。ちなみに、大向さんは何次元で生きてるんですか？

大向　私は三次元で生きてるよ（サラリと）。

――あ、そうでしたか（笑）。でもチャネリングとかで降りてきたりっていうときは、また違う次元に行ったりするんじゃないですか？

大向　チャネリングしてるときとかはトランス状態にあるんだけど、じつは凄く危険なんだよね。だからホントに場を設定してやらないと、へんなものとつながったりとかもあるし、死んだ方とつながるのも良し悪しというか。だから最近は、やたらめったら人を診ることはちょっとやめてるんですけど。

――とても、毎日できるようなものではないんですね？

大向　そうそう。一時はね、私もちょっと開きすぎちゃったっていうか、常に情報を受け取っちゃってて、受信受信で。あと第3の目っていって、おでこのところにもう1個の目があるんですよ、みんな。

――ボ、ボクにも？

大向　あるある。だいたい透視する人はそこで見るんですけど、私ね、そこが開きっぱなしになっちゃったことがあるんだよね。

――ほえ～。その第3の目では何が見えるんでしょうか？

大向　その人が「見てください」って言ったものが見えたりとか、相手の心も見えるし、あとは前世だとか、先のことかもそうだし。

――うわっ、見えまくりじゃないですか？

大向　それでエネルギーに酔っちゃうっていうかね、チャネ酔いっていうのがあって、チャネリングしすぎると酔っぱらったみたいになっちゃうんですよ。私、あんまりお酒飲まないんで、たまにテンション高いときってだいたいチャネ酔いしてるんだよね（笑）。



こちらは昨年12月８日に横浜で行なわれた大向の結婚式での記念撮影。タロットの先生から「前世で会ってる」と言われたという運命のお相手はミュージシャンのＭ（エム）氏。一昨年の８月に出会い、昨年１月の大向のデビュー15周年興行での楽曲制作を機に急接近。約１年の交際期間を経て、結婚となった。昨年８月の「レディリンまつり」で「私はプロレスが大好きだけど、プロレスよりも好きな人ができました」とファンに結婚＆引退を報告。結婚式の翌日に引退興行を行ない、現役生活にピリオドを打った。

――チャネ酔い（笑）。そういえば、昨年の12月に結婚したご主人のことを「神のギフト」と言ってるんですよね。

大向　ホント、そう思うんだよねぇ。

――ラブラブで、うらやましい限りです（笑）。素人考えでいうと、赤い糸のようなつながりだったということでいいんでしょうか？

大向　そうだね。私ね、プロレスもそうだったけど、ずっと仕事をして生きていくんだろうなと思ってたから、結婚とかも全然考えてなかったの。それに私のこのペースだと誰かと一緒に暮らすっていうのは……付き合ったりするぶんにはいいだろうけど、結婚は難しいんじゃないかなと思ってたし。

――風間ルミさんじゃないけど、プロレスと結婚するぐらいの感じで？

大向　そうそう（笑）。ちょうどセラピストの仕事もノってきたぐらいのときだったから結婚とかは考えてなかったんだけど、彼は出会ったときから、私のセラピスト的なことも含めて理解してくれたんだよね。前に付き合ってた人とかは、私がセラピストの仕事をして帰ってくると、「なんか違う！」とか言って。何かに感化されちゃってって言うわけ。そういう人って多いと思うんだけど、でもしょうがないよね。私的にはいろんなものが見えちゃうんだから。

――それはしょうがないと思います（笑）。旦那さんとは、もう赤い糸云々とか人間レベルじゃなく、魂レベルのつながりだったみたいですけど。

大向　そうそうそう。それでね、旦那っていうのは、くすんだ沼に埋もれてたような感じの人だったの。

――そこから大向さんが救ってあげたんですか？

大向　救ったのよ！　っていうか、救うことが私の使命というか。まあ、前世つながりで、彼を初めて見たときは前世で見た映像そのままだったからね。……そのストーリーは話すと長くなるんでカットですけど（笑）。

――了解しました（笑）。そんな素敵なパートナーとともに生活しながら、今後もセラピストとして活動は続けていくわけですよね？

大向　そうだね。自分がそういうもので救われたから、私みたいな思いをした人を助けてあげたり、癒せたらなって思うの。でもね、私は医者じゃないから、病気を治せるとかじゃないし、「この人と付き合いたいから結んでください」とかっていう縁結びはできないから。そういうのは私的なコンセプトというかテーマが違うんで。

――セラピストとしての大向さんのテーマはどういうものなんですか？

大向　私はね、その人自身がちゃんと生きてほしいっていうのがテーマ。たとえば相性が悪くて、先々別れるのがわかってるのに二人を結びつけたりするようなことはしないし。でも恋愛してる子たちってその場がよければいいから、どうしてもそういう方向に行きがちなんだけど、自分にとって必要な人とか必要なことっていうのは……やっぱり、その人のエネルギーがあるから。私の中でその人自身が本来の魂の中で生きてほしいっていうのが一番のテーマなんで。そのために、アロマを使って身体を癒したり、病気が悪化しないようにとか、そういうふうにお手伝いができたらなって感じかな。

――とくに悩みもないのに、ただ大向さんのファンだからって来られると、困っちゃうわけですね（笑）。

大向　それ最近、超困ってんの（苦笑）。「お茶したいんです」みたいな人もいたんだけど、そういう人は困る！

――それは困りますね（笑）。今後もセラピスト兼セレブ主婦として頑張ってください！

【08年1月24日／電話取材にて収録】



おおむかい・みちこ■1975年岩手県出身。中学卒業後、全日本女子プロレスの新人オーディションを受け合格。92年、中見川志保戦でデビューするもケガの影響もあり引退。その後、LLPWで復帰してからは、アルシオン→フリー→M's STYLEを経て、昨年12月8日、ミュージシャンのM氏と結婚。翌9日の自主興行で現役を引退。現在はセラピストとして活躍中！

新 卓球少女（似）松下ミワの ハガキ愛ランド

忙しいのはわかるけれども、いくらなんでも従業員を雇いすぎなんじゃないか。国民的中華料理屋に対してそんなことが頭をよぎる今日この頃ですが、皆さまいかがおすごしでしょうか？　聖子と久子が働かないからだという声も聞こえてきそうですが、勇の気持ちを思うとそうも言ってられませんね。それではスタートしましょう。3、2、1、薬物、薬物、う～、水餃子!!（営業停止）。

kamipro119号へのお便り紹介

おもしろかったのは「秋山成勲と日韓問題」の記事。菊地成孔氏のインタビューは毎回興味深く読んでいますが、「三崎は〝KY〟」の発言はまさに「それだ、それ!って感じ（笑）。」

【静岡県・佐久間孝さん・会社員・36歳】

↓そういう目であらためて見ると、半分許さざるをえないような雰囲気になってしまうので不思議ですね。

ミルコ選手のインタビューを読みましたが、ミルコ選手が『ハッスル』に出ようが表紙に出てもべつに何も問題はないと思います。日本愛のある選手です。これからも『kamipro』はミルコ選手を表紙にしてもいいと思います。

【青森県・菅原豪浩さん・フリーター・21歳】

↓ミルコへの熱い思いをありがとうございます。

野口レフェリーのインタビューがおもしろかった。私は昔、ささきいさんの「サッカーの知識は『キャプテン翼』で止まっている」発言に仲間意識をビッシビシ感じた男なので、野口レフェリーがサッカーボールキックを『キャプテン翼』にたとえてくれてうれしかった。

【北海道・安倍正典さん・フリーター・35歳】

↓野口レフェリーのインタビューが載った『kamipro』No.119号発売の直後に三崎vs秋山戦ノーコンテスト発表……。合掌でございます。

よかったのは「何がやりたいんだ、田村潔司!?」の記事です。とにかくいまは田村のコメントを聞きたい。できれば、前田に対してのものがほしいが……。

【鹿児島県・井上薫さん・会社員・56歳】

↓頑張って聞き出してみてください。

皇帝のお正月は最高！　まさか富士急に!!　そして絶叫マシーンが好きだとは思いませんでした。こんなにも笑顔で無邪気に遊ぶ姿は、試合のときからは考えられません！

【福島県・紺野春樹さん・会社員・28歳】

↓一方で、自分の悪口を言うダナ・ホワイトに「大人として失格です」と注意する皇帝も素敵です!!



髙田延彦〝変態〟座談会がよかった！　Uインターの当時（1億円トーナメント）の話や美容室の予約の話などサイコーだった。宮戸の大切さもよくわかった。山崎の話がないのは残念だった。

【山口県・松江巧さん・自衛官・29歳】

↓大スターの陰には必ず〝キレる〟立役者がいるものなんですねえ。勉強になります！

越中詩郎大好きです！　「気がついたら、おいなりさんを食っていた」という発言も最高。恐ろしくもレスラーらしいエピソードですよね。今年もがんばって！

【東京都・金内潤さん・会社員・35歳】

↓東スポ・プロレス大賞&『kamipro』大賞獲得のために、08年は後半戦に頑張ってほしいと思います！

日本修斗協会事務局長・若林太郎氏の話がおもしろかった。『kamipro』ならではの人選で、裏話がリアルでした。それにしても、まさかあのゴジラの中に入っていたとは。

【兵庫県・春名義行さん・会社員・41歳】

↓若林さんのインタビューは文字起こしをした段階で5万文字ぐらいあったそうです。どんだけ濃い業界人生なんでしょう。

曙さんインタビューがよかった。とってもチャーミングな曙さん、ボノちゃんのかわいらしさの秘密がわかりました。また、親孝行な素顔やお子さんとの切ないエピソードなど、リング上での姿に投影されているのですね。これから『ハッスル』の主役としてますますの活躍を期待します。

【神奈川県・廣木和宣さん・会社員・42歳】

↓そろそろ成長して、学ランにタバコという姿でもいいかなと思います。



プロレスで死を扱うのはタブーなのか!?　の特集が印象的だった。他誌では記事が出ていても「本当に死んだのか？」もよくわからない状態でしたが、本誌でおおむねどういう状況だったか理解できた。でも、ショックでした。

【埼玉県・弘田陽一さん・会社員・37歳】

↓確かにショックです……。ピンスの爆死といい、最近プロレスと「死」の距離が近いのは気のせい？

浅草キッドインタビューはひさびさに読めてうれしかった。K－1との関係でPRIDEと距離をとっていたが、やはりK－1よりPRIDEへの思いが強いのがわかり興味深かった。

【香川県・横山太郎さん・会社員・36歳】

↓これからもバンバンあの名調子ぶりを発揮してほしいと思います。

佐藤大輔インタビューは衝撃だった。『やれんのか！』は期待どおりの煽りVだったが、フジテレビが映像素材を捨てたことは許せない！

【石川県・浅井清治さん・会社員・31歳】

119号・おもしろかった記事ランキング

順位	記事
1位	髙田延彦“変態”座談会
2位	皇帝ヒョードルのお正月
3位	ミルコ・クロコップ
4位	谷川貞治FEG代表
5位	若林太郎

前号もやっぱり“変態”座談会が1位に君臨！　もう殿堂入りしてください!!　続いて2位は、新春スペシャル企画・ヒョードルのお正月特集がランクイン。表紙を飾ったミルコはあいかわらずの人気ぶりで3位。そしてなんと我らがサダハルンバが初のランクインだー!!　しかし、最近はめっきり“ヒールターン”しているので正直これっきりになるかもしれませんよ!

↓個人的には、このエピソードは大好きです。

1ページのみのもけんじさんの「遠い昔、はるか彼方の魔界で……」の絵が凄かった。秋山の顔が魔界になっていた。自分もとにかく怖かった。

【埼玉県・高橋徹さん・会社員・22歳】

↓うわ～ん、うわ～ん、初めてみのも先生のマンガにハガキが来たよ～。



高田将軍も妖精パワーでなんとかしてほしいと思います。っていうか、高田将軍って、また出ますよねえ？

kamipro Special 08年春 おもしろかった記事ランキング

順位	記事
1位	三崎和雄
2位	テレビでは観られない Dynamite!!
3位	大晦日無礼講座談会
4位	バック・トゥ・レスリング特集
5位	ニュースで振り返る2007



1月22日発売の『kamipro Special 2008 SPRING』のランキングはご覧のとおり！　秋山に劇的勝利を収めたと思われた三崎が『kamipro』初登場にしてトップに輝きました。そして大晦日の激闘を語った座談会はやっぱり人気。そのほか、『ハッスル』の“職人族”が語った「バック・トゥ・レスリング」、07年が丸ごとわかる「ニュースで振り返る2007」など大型企画が上位を占める結果となりました。次の速報号もお楽しみに～。

読者ページのヒーロー 森嶋猛の大応援コーナー 紙の森嶋



あいかわらず忙しい森嶋周辺ですが、最近はどんなことが忙しかったかというと……、なんと！メキシコに遠征、AAAで大暴れしていたのであります！　時は2月1日プエブラ州プエブラ、そして3日メキシコ州トルーカ。しかも、これまた天変地異なことに、森嶋がマスクマンに大変身したという情報が!!（気絶）。ああ、『kamipro』に写真がないのが人生で最高に悔やまれる……。でも、ネットとかには出てるので、気になる人は確認後、感極まってみてください！　そういえば、GAORAでは森嶋&丸藤正道のAAA遠征の様子を放送するそうなので、森嶋フリークは見逃すな！（初回放送＝2月28日［木］23:30〜深夜1:15）。

森嶋の近況

［2008年］
2月15日 国内ツアー。
3月2日 日本武道館にてGHCヘビー級王者・三沢光晴とベルトを懸けた闘いへ。
いよいよチャンピオンになりますよ、ええっ!

衝撃ショット!!

待望のペイントマン復活!? S波氏とジェリコとのツーショットを独占入手



WWE日本大会初日の2月11日、なんとS波氏は六本木の某所でクリス・ジェリコと遭遇！　ジェリコの手によってひさびさにペイントマンと化したのだった。あー、めでたし、めでたし。

スクープ! ザ・目撃!!

●先日、大森駅付近のジョナサンに入ったら、ヤノタクさんがいました。ゴールドジムで汗をかいたあとだったのかなと思われます。その数分後には和田良覚さんを発見しました。ゴールドジム付近は目撃率がかなり高いです。
【kamipro Hand投稿】

●先日、NHKを見ていたら、小川直也さんが『パパサウルス』という番組でおむすびを握っていました。子育てに関して「ちゃんと最後までやり通して、それで結果が出ればいいかなと思ってます」とコメントしていたのが非常に印象的でした。
【kamipro Hand投稿】

おハガキ募集!!

どんどんおハガキください！ ケータイからでもOK!!

ご意見、ご感想、苦情、抗議、お悩み、ダメだし、ほめ殺しなど、どんなことでもけっこう！ お便り、お待ちしています！

こんな情報お待ちしています！

●ザ・目撃!!
●おもしろ写真投稿
●選手に対するご意見、試合の感想
●その他、世の中に訴えたいことがあればなんでも!!

以上、すべてのお便り・イラストの宛て先&メールアドレスは

radical@kamipro.com
〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6 パレ・ジュノ2F
（株）ダブルクロス　kamipro編集部
「正義のペン」係まで。

携帯サイト『kamipro Hand』からの投稿もできます。

"正真正銘"変態座談会が到着!?



大好評でお届けしている『kamipro』"変態"座談会シリーズですが、このたび、なんと読者の方から自作の架空変態座談会が到着しました！　気になるお題は「藤原組」!!　しかも、投稿者・周斎氏自ら座談会に出席し、藤原組の思い出を語っていたりもするぞ。なんだかよくわからないけど、約4500字にもおよぶ原稿の一部を掲載するので、読みたいヤツは、読め!!

ガンツ　皆さんは藤原組に関する思い出とか何かあります？

タコ　あちゃあ藤原組かぁ。藤原組…藤原組ねぇ…少し時間をください（笑）。

井上　これはある意味前田や高田以上に難しいお題だね（笑）。

椎名　何か妙にのっぺりしてたよね、藤原組って。

周斎　僕は「Uインター＞リングス＞藤原組」って感じでした。と言いつつも、生で見たのは藤原組が一番多かったりするんですけど（笑）。

タコ　そういうガンツは？

ガンツ　かなり見てましたよ。本戦だけじゃなくSWS絡みのやつとかトーワ杯とか色々見てましたし。でもいかんせん試合の記憶が…。あと藤原組は結構でかいハコでやったりしてましたけどその割にあんまお客さんが入ってなかったりとか…そういう余計なことは覚えてるんですけど（笑）。

井上　最初のビッグマッチだったNK大会も半分くらいしか埋まってなかったよね（笑）。

椎名　東京ドーム大会も当時の最低記録だったんじゃないかな。

井上　俺はNKの時も大丈夫かなと思ってたくらいだからドームは無謀にも程があると思ってましたね。船木×モーリス戦はあの時点で供給できる最高のカードだったのかもしれないけど、ドームとしては弱く感じてましたし。アンダーカードもイマイチで。だからドームに関しては意外と入ってるな、と。

椎名　藤原組って結構そういうことが多い団体だったよね。

井上　といってリング上の熱でそれを補うかというとそうでもなくて。船木×シャムロック戦という……。（つづく）



神奈川県・亜衣さん◎たぶん、青木のイラストハガキは初めてではないかと思います。カラーでいただいたのに、モノクロページで恐縮です。



大阪府・英加直純さん◎プロレスの基礎知識がない私は、ハガキを見た瞬間、なんのこっちゃわかりませんでしたが、本誌・坂井ノブにこのハガキの意味を教わりました。バカにされながら。

さあ、明るい未来への列車に乗ろう！ 上井駅長の人生相談



さあ、今回は社交場でのマナー相談のようですよ。どうやら、何か大失敗してしまったようですね。こんなときは、上井さんにビッシビシと答えていただきましょう！　それではスタート!!

カラオケでのマナーを教えてください

お悩みごと

■マナーに関する相談
（宮城県・歌丸さん・30歳・不動産業・♂）

僕は今年頭に転職したサラリーマンです。時期的にいきなり新年会に誘われることになり、二次会でカラオケに行く機会もあったのですが、そこで選曲した尾崎豊の『15の夜』と僕のあまりの音痴さがかなり評判が悪かったらしく、新しい会社での僕は、どことなく微妙な感じになってしまいました。そこで上井さんにうかがいたいのですが、カラオケでの選曲およびマナーなどをご教授いただければと思います。よろしくお願いします！

上井駅長

あのねえ、それは完全に選曲ミスですよ！　尾崎豊の『15の夜』なんて、盛り上がるわけないじゃない!!　カラオケはやっぱりみんなが楽しい歌を選ばないとダメ。『リンダリンダ』とかねっ！

あ、カラオケといえば、この前2月5日に長州小力の誕生日パーティに西口プロレスのみんなと参加させてもらったんだけど、二次会でカラオケに行ったんですよ。で、やっぱりね、みんな自分が歌いたいんだけど、トップは切らないわけ。まあ、ちょうどその店が僕の知り合いの店で僕が半分幹事みたいな感じになってたから、盛り上げようと思っておもいきって一番に歌ったんですよね。『お祭り騒ぎ』っていう歌なんだけど。たぶん誰も知らない歌だと思うけど、その名のとおり一気に盛り上がるわけですよ！　そしたらね、案の定、爆発してその次からみんな「我が、我が」状態でマイクを放さなかったんだよ。アッハッハッハ!!

だから、あるじゃない。いくらでも盛り上がる歌が。にぎやかにしようとしてるところで自分が勝手に選曲したりしたら、それはトチるよ。あと、音痴なら、おもいっきりハズす練習をしたほうがいいよ。そっちのほうが盛り上がる！

え？　僕の十八番？　それはもちろん『ゲゲゲの鬼太郎』ですよ!!　あの「鬼太郎ないない音頭」は一番得意だね！　ま、あの日はみんな暗くなるだろうから歌わなかったけど……。だから、そういうふうに気遣いをすることですよ。

あとね、最後に一言、小力ちゃんはめちゃめちゃ歌うまいよ!!　松山千春とかも歌ってたと思うけど、あれは凄い!!（熱弁）。

歌丸さん、おわかりになりましたでしょうか？　ぜひ上井さんの助言をもとに、カラオケでのマナーをいま一度考えてみてください。

※人生相談ドシドシ送ってください！　また、悩みが解決した人もぜひ結果をご報告ください!!

マット界の日程、そして情報をツープラトンで一網打尽!!

kamipro よろず情報局

MMA & PRO-WRESTLING MAGAZINE

Calender & Information

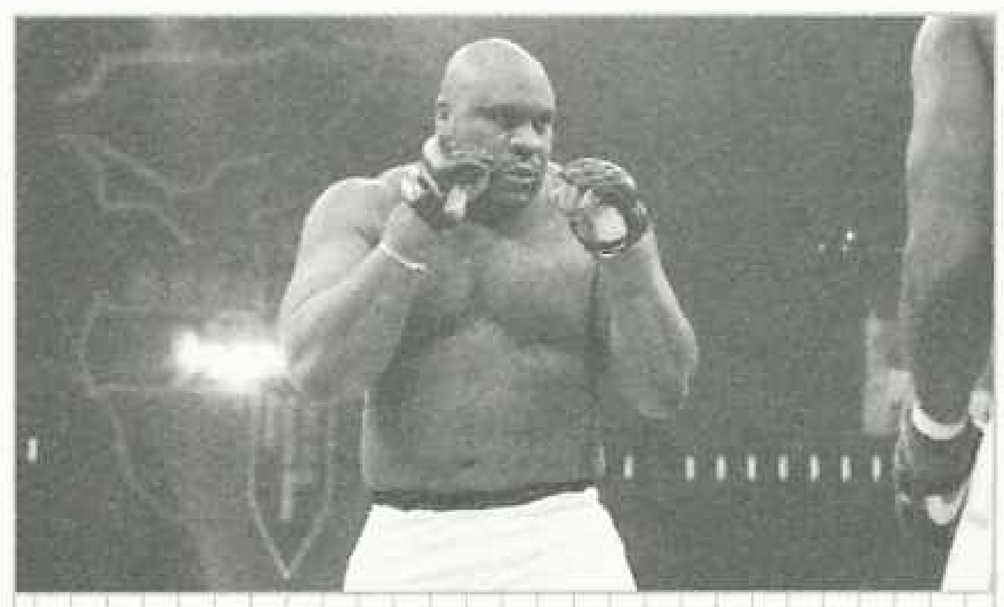
Fight&Event February 2

22 FRI.

◆全日本／栃木・矢板市農業者トレーニングセンター（18:30）
◆アパッチ／東京・新木場1stRING（19:00）
◆DEEP／東京・後楽園ホール（18:30）
◆R.I.S.E.／東京・新宿FACE（18:00）

23 SAT.

サップがストライク・フォースに出陣!
モーリス・スミスは強豪ルーファスと対戦!!



『ストライク・フォース ワシントン大会』
米国ワシントン州ワシントン、タコマ・ドーム

決定対戦カード
モーリス・スミス vs リック・ルーファス

出場予定選手
ボブ・サップ

◆全日本／埼玉・蓮田市総合市民体育館（18:00）
◆NOAH／京都・KBSホール（18:00）
◆DRAGON GATE／愛知・名古屋テレピアホール（18:00）
◆DRADITION／大阪・大阪府立体育会館第2競技場（18:00）
◆大阪プロ／大阪・デルフィンアリーナ（18:00）
◆へなちょこプロレス／愛知・公武堂3階タイガーホール（17:30）
◆DEP／愛知・刈谷市産業振興センター（17:30）
◆修斗／東京・新宿FACE（18:00）
◆NKB／東京・後楽園ホール（17:30）
◆仙台女子／宮城・気仙沼市総合福祉センター（18:30）
◆WAVE／東京・新木場1stRING（18:30）

24 SUN.

◆ハッスル／埼玉・さいたまスーパーアリーナ・コミュニティホール（17:00）
◆全日本／群馬・グリーンドーム前橋（17:00）
◆LOCK UP／東京・後楽園ホール（18:30）
◆DRAGON GATE／福井・福井市体育館（14:00）
◆K-DOJO／千葉・BlueField（13:30&15:00）
◆大阪プロ／大阪・デルフィンアリーナ（14:00）
◆ZST／東京・新宿FACE（18:00）
◆R.I.S.E.／ゴールドジムサウス東京アネックス（11:00）
◆新日本キック／東京・ディファ有明（未定）
◆風香祭り／東京・新木場1stRING（12:30）
◆NEO／東京・北沢タウンホール（18:30）
◆仙台女子／宮城・Zepp Sendai（15:00）

26 TUE.

◆全日本／長野・めいてつショーホール（18:30）
◆NOAH／東京・京王プラザホテル八王子（19:00）
◆DRAGON GATE／兵庫・ドラゴンゲートアリーナ（19:30）

27 WED.

◆全日本／茨城・ひたちなか市松戸体育館（18:30）
◆El Dorado／東京・後楽園ホール（19:00）

28 THU.

◆全日本／茨城・つくばカピオ（18:30）
◆NOAH／神奈川・小田原アリーナ（18:00）

29 FRI.

◆J-NETWORK／東京・後楽園ホール（16:45）

Fight&Event March 3

1 SAT.

アンデウソンとダンヘンの王者対決が実現!
生き残るのはどっちだ!?



『UFC82 PRIDE OF A CHAMPION』
米国オハイオ州コロンバス、ネイションワイド・アリーナ

決定対戦カード
【ミドル級チャンピオンシップ】
ダン・ヘンダーソン vs アンデウソン・シウバ
ヒース・ヒーリング vs チーク・コンゴ
岡見勇信 vs エヴァン・ターナー

◆全日本／東京・両国国技館（17:00）
◆DRAGON GATE／大阪・大阪府立体育会館第2競技場（18:30）
◆ZERO1・MAX／宮城・石巻市総合体育館（18:00）
◆マンモス半田自主興行／愛知・公武堂3階タイガーホール（18:30）
◆WAVE／東京・新木場1stRING（19:00）

2 SUN.

◆NOAH／東京・日本武道館（17:00）
◆DRAGON GATE／愛知・岡崎市竜美ヶ丘会館（18:00）
◆ZERO1・MAX／東京・後楽園ホール（18:30）
◆大日本／埼玉・桂スタジオ（13:00）
◆みちのく／徳島・徳島市立体育館（15:00）
◆NEO／東京・後楽園ホール（12:00）
◆JWP／東京・板橋区立グリーンホール（17:00）

4 TUE.

◆クラブファイト／東京・club asia（未定）

5 WED.

五味、吉田、三崎にジョシュも参戦!
『戦極』がついに旗揚げ!!



『戦極～SENGOKU～』
東京・代々木第1体育館（18:30）

決定対戦カード
吉田秀彦 vs ジョシュ・バーネット
三崎和雄 vs シアー・バハドゥルザダ
五味隆典 vs ドゥエイン・ラドウィック
瀧本誠 vs エヴァンゲリスタ・サイボーグ

24 MON.
◆大日本／東京・後楽園ホール（19:00）
◆DRADITION／広島・広島産業会館（19:00）
◆NEO／青森・八戸シーガルビューホテル体育館（18:30）

25 TUE.
◆ZERO1・MAX／北海道・旭川地場産業振興センター（19:00）
◆NEO／岩手・花巻市民体育館（18:30）

26 WED.
引退宣言を撤回した金ちゃんが参戦！
相手はミドル級王者竹内!!



『PANCRASE 2008 SHINING TOUR』
東京・後楽園ホール（18:30）

決定対戦カード
竹内出 vs 金原弘光
志田幹 vs マルロン・サンドロ
佐藤光留 vs ガジエフ・アワウディン
伊藤崇文 vs ハクラン・ディアス
チケット料金
SS=12,000円、A=8,000円、C=5,000円、D=4,000円
◎問＝パンクラス 03-5792-0815

◆ZERO1・MAX／北海道・函館市民体育館（18:30）
◆El Dorado／東京・新宿FACE（19:00）

27 THU.
◆みちのく／長崎・佐世保市体育文化館（18:30）
◆VKF／大阪・アゼリア大正（19:00）

28 FRI.
◆健介オフィス／福岡・博多スターレーン（19:00）
◆みちのく／長崎・ncc&スタジオ（18:30）
◆橋本友彦プロデュース興行／東京・新木場1st RING（19:30）
◆修斗／東京・後楽園ホール（18:00）

29 SAT.
◆ZERO1・MAX／北海道・札幌テイセンホール（18:00）
◆DDT／東京・新木場1stRING（25:00）
◆みちのく／長崎・島原総合福祉センター復興アリーナ（18:00）
◆NEO／神奈川・NEO道場（14:00）

30 SUN.
◆新日本／東京・後楽園ホール（18:30）
◆RIKI OFFICE／大阪・はびきのコロシアム（18:00）
◆DRADITION／東京・後楽園ホール（12:00）
◆R.I.S.E.／東京・大森ゴールドジム（未定）
◆HEAT／愛知・名古屋国際会議場（15:30）
◆OZアカデミー／大阪・アゼリア大正（17:00）
◆NEO／茨城・石岡市運動公園体育館（18:00）
◆WAVE／東京・新木場1stRING（12:30）

※主催者側の都合により、時間等変更する場合があります。あらかじめご了承ください。また、興行日程を一部割愛しております。詳細は各団体のホームページ等をご参照ください。

17 MON.
宇宙一の親子ゲンカに発展!?
迷走するボノちゃんはどこへ行く？



『ハッスル・ハウスvol.34』
東京・後楽園ホール（19:00）

出場予定選手
HG、RG、天龍源一郎、インリン様、モンスター・ボノ、川田利明
チケット料金
ハッスルVIP=10,000円、スタンドS=7,000円、スタンドA=5,000円、スタンドB=3,000円
◎ハッスルエンターテインメント 03-5464-1731

◆新日本／鳥取・米子コンベンションセンター（18:30）
◆全日本／群馬・伊勢崎第2市民体育館（18:30）

19 WED.
◆新日本／静岡・アクトシティ浜松（19:00）
◆MAKEHEN／東京・新木場1stRING（19:30）

20 THU.
◆ハッスル／大阪・グランキューブ大阪（17:00）
◆全日本／愛知・豊田市運動公園体育館（17:00）
◆DRAGON GATE／東京・大田区体育館（17:00）
◆DRADITION／千葉・船橋アリーナ（17:00）
◆DDT／大阪・デルフィンアリーナ（18:00）
◆全日本キック／東京・後楽園ホール（未定）
◆NEO／秋田・秋田市立茨島体育館（17:00）
◆WAVE／大阪・世界館（17:00）

21 FRI.
◆新日本／千葉・千葉ポートアリーナ（19:00）
◆全日本／京都・京都KBSホール（19:00）
◆修斗／東京・北沢タウンホール（18:00）
◆NEO／岩手・岩手県営体育館（18:30）

22 SAT.
◆DRAGON GATE／愛知・テレピアホール（18:00）
◆DRADITION／福岡・北九州市立小倉北体育館（18:30）
◆K-DOJO／愛知・名古屋市露橋スポーツセンター（18:00）
◆NEO／青森・河西体育センター（18:00）

23 SUN.
◆新日本／兵庫・尼崎市記念公園総合体育館（16:00）
◆全日本／新潟・新潟市体育館（16:00）
◆ZERO1・MAX／東京・靖国神社相撲場（13:00）
◆DRADITION／福岡・アクロス福岡（17:00）
◆K-DOJO／大阪・デルフィンアリーナ（17:00）
◆パンクラス／東京・ゴールドジムサウス東京アネックス（14:30）
◆修斗／広島・広島県立ふくやま産業会館（未定）
◆IWAジャパン／埼玉・久喜市総合体育館（13:00）
◆NEO／青森・問屋町ビックサイト（17:00）

出場予定選手
五味隆典、川村亮
チケット料金
VIP席＝100,000円、RRS席＝30,000円、戦極シート＝17,000円、S席17,000円、A席＝7,000円
◎問＝ワールドビクトリーロード　03-3369-2211

◆ZERO1・MAX／福島・福島市国体記念体育館（18:30）
◆ユニオン／東京・新木場1stRING（19:30）

7 FRI.
◆DRAGON GATE／東京・後楽園ホール（18:30）
◆ZERO1・MAX／千葉・東金アリーナ（18:30）

8 SAT.
◆DRAGON GATE／埼玉・桂スタジオ（18:00）
◆みちのく／岩手・矢巾町民総合体育館（18:30）
◆K-DOJO／千葉・BlueField（18:30）
◆666／東京・新木場1stRING（19:00）

9 SUN.
◆新日本／愛知・愛知県体育館（18:00）
◆DRAGON GATE／三重・四日市オーストラリア記念館（16:00）
◆DDT／東京・後楽園ホール（12:00）
◆みちのく／宮城・仙台港ビジネスサポートセンターアクセル（14:00）
◆OZアカデミー／東京・新宿FACE（12:30）
◆新日本キック／東京・後楽園ホール（未定）
◆M－1ムエタイ／東京・ディファ有明（16:00）

11 TUE.
◆DRAGON GATE／和歌山・ガーデンホテルハナヨ（18:30）
◆大日本／埼玉・熊谷市民体育館（18:30）

12 WED.
◆全日本／東京・後楽園ホール（19:00）
◆WAVE／東京・新木場1stRING（19:00）

13 THU.
◆新日本／和歌山・岩出市立市民総合体育館（18:30）
◆全日本／千葉・茂原市民体育館（18:30）
◆DRAGON GATE／兵庫・SITE KOBE（19:00）

14 FRI.
◆新日本／広島・広島県立総合体育館（19:00）
◆DRAGON GATE／福岡・北九州市立小倉体育館（18:30）
◆ZERO1・MAX／愛知・中スポーツセンター（18:30）
◆横浜プロ／神奈川・横浜にぎわい座（19:00）
◆吉江豊興行／東京・新木場1stRING（19:00）

15 SAT.
◆DREAM／埼玉・さいたまスーパーアリーナ（15:00）
◆新日本／兵庫・豊岡市民体育館（18:00）
◆DRAGON GATE／長崎・佐世保市体育文化館（18:30）
◆修斗／大阪・アゼリア大正（14:30）

16 SUN.
◆新日本／岡山・山陽ハイツ体育館（16:00）
◆全日本／群馬・館林市民体育館（15:00）
◆DRAGON GATE／佐賀・諸富ハートフル（16:00）
◆El Dorado／福岡・博多スターレーン（13:00）
◆大日本／福岡・博多スターレーン（17:00）
◆DDT／東京・新木場1stRING（13:00&18:00）
◆K-DOJO／千葉・BlueField（13:30&15:00）
◆修斗／愛知・東海テレビ（15:00）
◆JWP／東京・東京キネマ倶楽部（13:00）
◆NEO／東京・東京キネマ倶楽部（17:00）

団体INDEX（50音順及びアルファベット順）

Gym　毎週火曜日開校！ スマックガールが格闘技教室をオープン！



スマックガールの格闘技教室『SMACK MMA STUDIO@MUSE』が都内・代々木にオープン！ スマックで活躍する吉田正子らがインストラクターとなって、総合の基本的な技術をわかりやすく指導する、この教室。毎週火曜日の18時30分と20時から行なわれるのだが、その受講料はなんと1000円（学生、女子は500円）というリーズブルなもの。ダイエット目的の方も、プロになりたい人もまずはお試しあれ！

★開催日／毎週火曜日　★会場／ミューズ音楽院1号館202・203
★問／スマックガール 03-5360-7728

Talk　おいしいお酒に囲まれて 船木、柴田、ミノワマンとお花見で盛り上がれ!!



今年のお花見は、これで決まり!? K-1ファンクラブがお花見トークイベントを開催！ そのゲストとして船木誠勝、柴田勝頼、ミノワマンの超豪華キャストがラインナップ。その3人が熱いプロレス談義をするということだから、これは聞き逃せない！ おいしい食事とお酒に囲まれながらのトークショー以外にも、撮影会や抽選会など、イベントは盛りだくさん！ 素晴らしい思い出となること間違いなしだ!!

★日時／4月4日（金）19:00開始　★会場／都内・レストラン
★料金／15,000円（税込）　★問／K-1ファンクラブ0570-00-0578

Book　エガちゃんが映画批評!? 1クールのレギュラーより1冊の映画本！



映画界にモノ申～す!!　本誌でもおなじみのエガちゃんがなぜか映画批評本『江頭2:50のエィガ批評宣言』を発売！ じつは35年の映画愛好歴を誇る映画マニアだったというエガちゃん。「1クールのレギュラーよりも、1冊の映画本！」と意気込み、初の単行本を制作。その内容は、芸風どおり過激！ 世の映画評論家が言えないような、配給会社やスポンサーの意向を無視した発言のオンパレード！ とにかく読め!!

★『江頭2:50のエィガ批評宣言』江頭2:50著（扶桑社）
★定価1,260円（税込）発売中

Fight　初代タイガーも参戦！ 3.13リアルジャパンでサミー・リーがよみがえる



初代タイガーマスクこと佐山サトルがヨーロッパ遠征時代に、「サミー・リー」としてイギリスで旋風を巻き起こしたのはご存知のとおり。それから20年以上のときを経て、その名を引き継ぐ、サミー・リー・ジュニアがデビュー！　佐山をして「飛んだり、跳ねたりだけじゃない、ストロングスタイルができる初代以上の選手」と言わしめる2代目サミー・リー。はたしてどんな闘いを見せるのか!?

★開催日／3月13日（木）18:30開始　★会場／東京・後楽園ホール
★問／KIAI PROJECT 03-3833-3662

Dvd　大連立から3カ月 2007年大晦日の『Dynamite!!』がDVDに！



大連立で注目を集めた昨年末の『Dynamite!!』が早くもDVDとなって登場ーッ！ ヨアキム・ハンセン、ズール、西島洋介という元PRIDEファイターらが参戦した試合に加え、レフェリングを巡って論争を呼んだ山本KID徳郁vsハニ・ヤヒーラの一戦や、桜庭和志vs船木誠勝のレジェンドマッチ、そして「K-1甲子園 U-18 日本一決定トーナメント」を完全収録。大晦日に見逃した人はいまこそチェック！

★『K-1 PREMIUM Dynamite!! 2007』（TBSビデオ）
★定価6,090円（税込）★発売日／3月26日

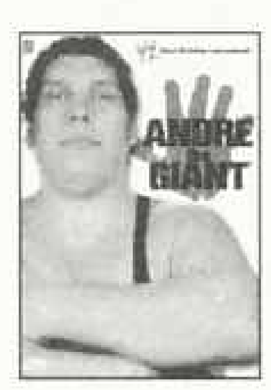
Dvd　これでキミもテクニシャン？ "世界のTK"から使える技術を学べ！



PRIDEやUFCで活躍し、的確な技術解説で定評のある"世界のTK"こと髙阪剛のノウハウが1枚のDVDになった！ 総合格闘技の実践で本当に使うことのできるテクニックや闘い方のコツを丁寧に紹介した、このDVD。一人で観て純粋に知識をつけるもよし、友だちと観て技を掛け合うもよし。技術を知って、より格闘技を楽しみたい方にはぜひオススメの一品だ！

★『髙阪剛 TK格闘学会 実践的総合格闘技1』（クエスト）
★定価5,880円（税込）　★発売日／3月19日

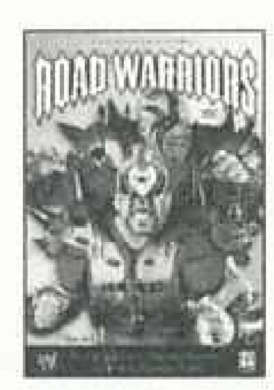
Dvd　追悼15周年 "大巨人"アンドレがDVDでよみがえる！



いまのマット界で巨人といえばチェ・ホンマンだが、元祖・巨人といえば、やはり"大巨人"アンドレ・ザ・ジャイアント！ 80年代、ハルク・ホーガンとの抗争で全米を興奮の渦に巻き込んだアンドレ。そのWWE時代の勇姿を収録したパーソナルDVD『WWE アンドレ・ザ・ジャイアント』が発売されることになった。WWEの殿堂「ホール・オブ・フェーム」入り第1号であるアンドレの功績を振り返れ！

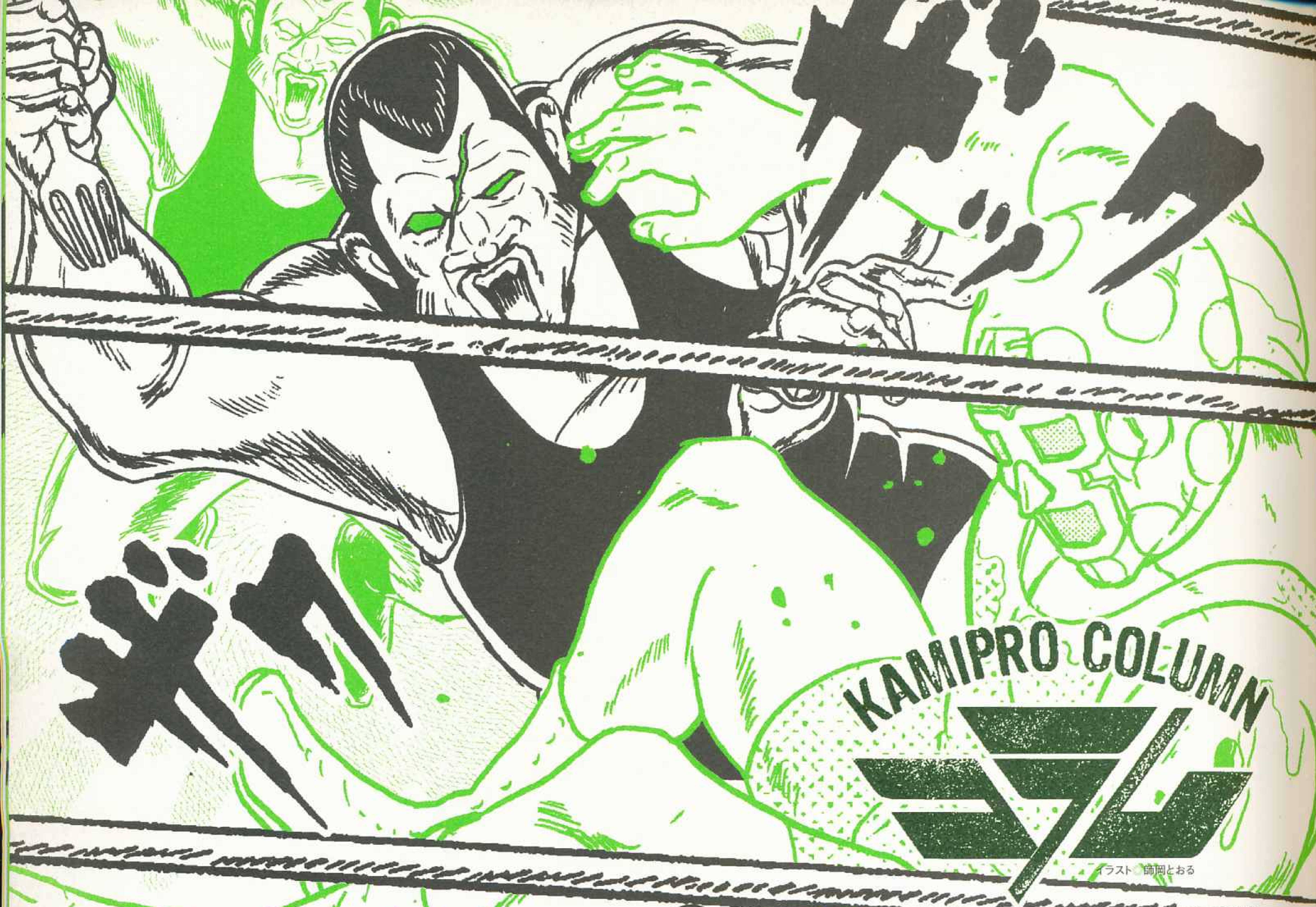
★『WWE アンドレ・ザ・ジャイアント』（東宝）
★定価3,990円（税込）　★発売日／4月4日

Dvd　待望の日本版発売！『ロード・ウォリアーズ』の栄光の日々がここにあり



日本マット界を席巻した"暴走戦士"ロード・ウォリアーズの2枚組DVDがついに日本盤で登場！ 本編では、83年のロード・ウォリアーズ結成から成功までの日々をドキュメンタリー・タッチで紹介。また特典映像では、秒殺勝利を重ねたアメリカでの試合映像を収録。WCW、AWA、そしてWWEと3大メジャー団体を渡り歩き、数々の栄光をつかんできた彼らの軌跡をたどれ！

★『WWE ロード・ウォリアーズ』（東宝）
★定価7,035円（税込）　★発売日／4月4日



イラスト◎師岡とおる

第28回

あれには、しらけました

花くまゆうさく
リングの汁 ミニ

「ブロック・レスナーの応援に、ストーンコールドらWWEスーパースターがUFCの会場に現われ、大声援を浴びた」のニュースには、ワクワクしたなぁ。映画でもスポーツでも、アメリカで成功した人を見るのは気持ちいい、夢がある。だから、五味なんかは、UFCで下からやって成り上がっていったほうが夢があっていいなあ、と思ってたのでUFCを断り、『戦極』行きって選択にはガッカリした。まぁ、それでも凄い相手と試合すれば、それはそれでいいけども。

ストーンコールド来場の映像は観れなかったが、レスナーvsフランク・ミアとノゲイラの試合はネットの小さな画面でチェック。どっちもおもしろかった。攻められながらも、下からヒザ十字極めたミア。劣勢ながらも自ら下へ潜り、スイープして押さえて逃げたとこをチョーク極めたノゲイラ。どちらもカタルシス感じるグッとくる勝ち方で最高。こんなにおもしろい試合は、ちゃんとテレビで観たかった。なんとかしてちょうだいよ、ダナ。

K太郎くんの試合は観れていないけど、惜しい内容だったようで残念。郷野選手も手術で残念だけど、二人ともUFCでのしあがってガッポリ成功してほしい。谷川裁きで、どっちらけな大連立の日本より、アメリカで勝負して成功するほうがロマンを感じる。

『戦極』で、吉田vsホジャー・グレイシーがウワサされていたので、おたがい道衣着てやったらおもしろいなと思ってたけど、ジョシュに変更でちと残念。でもジョシュも寝技強いのでおもしろいかも。吉田の試合で興味持てるのは、寝技強い人とやるときだけなので。結局、PRIDEでもvsノゲイラやらなかったし。

今度の2・11『CAGE FORCE』のトーナメントのメンバーが、名前ある人ばかりでいいよね。そう思うと、修斗は後楽園クラスの大会で、名前ある人同士の試合が二試合くらいしかない現状は、興行的にキツイかと思う。名前出てくるとほかへ行ってしまう現実もあるので難しいんだろうけど。

でも3月のタイトル戦、田村彰敏vs門脇英基、岡嵜康悦vs上田将勝は凄い楽しみ。ひさびさにバレットも出るしね。観ていると誰もが、好印象を持ってしまう上田には王者になってほしいが、岡嵜もこないだの山本篤戦で印象よかったんだよね。男・門脇にも期待。

復活したヤマケンの『クラブファイト』（編集部注＝その後、ドクターストップで欠場）に、高瀬のグラップリングマッチがあることに興味津々。相手は誰になるのかしら。

映画はもうじき公開、『ノーカントリー』の殺し屋がナイスキャラです。凶器はガスボンベ！





Hanakuma Yusaku
◎目の手術をして視力戻りました。



リング上からプライベートまで！
“なんでもあり”の質問コーナー

最終回

所英男のトコロ天国

本コーナーは、読者が抱くさまざまなお悩み、質問に、所選手がすべて答えてくれるという天国のようなコーナーです（こじつけ）。

聞き手／松下ミワ

―所さん、たいへんです！　このトコロ天国、なんと今回が最終回らしいんですよ!!

所　あ、はい（平然と）。

―なんですか、そのあっけらかんとした反応は（笑）。

所　だって、前回のインタビュー後にそんなこと言ってたじゃないですか。

―えー、そうなんですけど、最後ぐらいもうちょっと誌面向きなリアクションをしてくださいよ。

所　（聞かずに）で、今日のお題は？

―今日はですねラストにふさわしい「分かれ道」というテーマです。さっそくお願いしまーす！

仕事に関する質問

大阪府・転勤族さん・28歳・会社員

僕は、商社に勤めるサラリーマンですが、先日中国への転勤を言い渡されました。中国といえばオリンピック景気でノリノリの国ですが、毒入り餃子など、あいかわらず問題ばかり。僕としてはかなり行きたくないし、じつは友だちが立ち上げたイベント会社で働かないかという誘いを受けていたりもします。そこでお悩みですが、安定したサラリーマンとして数年だけ中国に赴任するか、それとも先がまったくわからないけどちょっと興味のある友人の会社に転職するか。所さんはどっちがいいと思いますか？



食の安全について何かとトラブルが巻き起こる中国だが、その中国転勤とベンチャー企業就職、いったい所はどちらを選ぶのか!?

所　ああ、僕の友だちも30歳前後の人が多いんで、いま転職するかどうか悩んでいる人は多いですねえ。

―へえ～。そういう年ごろなんですかね。

所　だって、僕も第二の人生を考えてますからね（アッサリ）。考えすぎて眠れない日もあるんですよ。

―ちょ、ちょっと待ってくださいよ！（笑）。

所　（無視して）格闘技の実況アナウンサーとか、そういうのをやろうかなって真剣に思ってますし。

―でも、それだったらどちらかといえば解説でしょう。

所　いや、解説は宇野（薫）さんだからダメです。

―ワハハハハ！　架空の話なのに律儀ですねえ。しかし、この方みたいに人生の岐路に立たされたときって、所さんは何を判断基準にするんですか？

所　ズバリ、やりたいか、やりたくないかですね！

―おお！　カッコいいじゃないですか。じゃあ、この方もどっちがやりたいかということですね。

所　（厳しい表情で）でも、興味があるくらいで違う会社に移るとか、そんな気持ちじゃダメなんじゃないですか。「これがやりたい」と思ってる会社だったらいいと思うんですけど。

―そしたら、格闘技の実況を中途半端に考えてる所さんはダメってことですね！

所　（即答で）まったくダメ!!

―ワハハハハ！　皆さま、人生の選択は慎重にお願いしまーす。

恋愛に関する質問

宮城県・山田陽子さん・32歳・設計士

じつは、二人の男性から同時に交際を申し込まれて困っています。二人とも私と同じゼネコン業界で仕事をしているのですが、一人は同い年、一人は20歳も年の離れた男性です。ただ、どちらかというと趣味が合うのは年上のほう。でも、同い年の男性も非常に気が優しくて素敵な人なのです。私としてはどちらとお付き合いしても楽しいだろうなという感じはありますが、やっぱりどっちかを選ばないといけないですよね？　所さんなら、こういう場合どうしてますか？

所　20歳年上って、52歳でしょ!?　あと10年で62歳じゃないですか！

―10歳足した理由がぜんぜんわからないんですけど（笑）。

所　そんなに離れてて大丈夫かなって。結婚するにしても20年しか一緒にいられないじゃないですか。死んじゃいますよ！

―勝手に殺さないようにお願いします（笑）。しかし、所さんだったらどちらを選びます？　年齢差は関係ありそうですか？

所　ま、ボクは顔で選びますから。

―いいですねえ、アッサリしてて。

所　でも、最近は「30歳にもなって顔で選んでちゃダメだ」ってよく言われるんですよお。おっしゃるとおりだなって。

―ちなみに、どうなんでしょう。最近の所さんの恋愛事情は。

所　フッフッフッフ。ま、いろいろと……（遠い目で）。

―へえ～、ずいぶんと意味深なリアクションですけど、ホントはなんにもなかったりするんじゃないですか？

所　そ、そんなことないですよ！（妄想を膨らませて）ただ、最近思うんですけど、もう『HERO'S』に出てる格闘家・所英男じゃなくて、所英男自身をちゃんとわかってくれる人を探したいなって心底考えてるんですよねえ。

―知りませんよ、そんなこと。

所　（聞かずに）でもボク、よく失敗するんですよ。人とお酒を飲んだりすると、あとで「なんであんなことしゃべってしまったんだろう……」って後悔するし。なぜかアルコールが入ると前へ前へ出てしまうんですよねえ……（ぶつぶつ）。

―えー、所さんが心ここにあらず状態になっているので、この問題はこのへんで！

所さんに関する質問

東京都・ボクの細道さん・25歳・出版業

ボクはこれまで一回も欠かさず『トコロ天国』を読み続けてきた『kamipro』読者です。と言いつつも、結局このコーナーを読んでも所さんという人がどんな人間なのか、ズバリよくわかりませんでした！　そこで質問ですが、所さんは自分のことをどんな人間だと思っていますか？　一発、おもしろい答えをお願いします！



非常につかみどころのない性格の所さんだが、自分自身ではぶっちゃけどう思ってるのか知りたいところである。

所　ボクは完全な完璧主義者ですね！

―ええ！　所さんって完璧主義者だったんですか!!　いやー、いままでまったくそうは見えなかったんですけど……。たとえば、どのあたりが？

所　うまく返信できなかったメールとか、全部消したりしてますし。

―ワハハハハ！　それは気に入らない現実から目を背けてるだけなんじゃないですか！（笑）。

所　あと、最近思うのは、ちょっと軽い男かなって！

―軽い男!?　ちょっと待ってください。そうなると、まったく完璧主義者じゃなくなりますね。

所　ええ（平然と）。

―いいかげんだなあ（笑）。ちなみに、所さんはどういう人が理想の人物像だったりするんでしょうか？

所　理想はですね、ちゃんと家庭を養える男ですね！　お金に困らず、できればちょっと裕福で。しかも、奥さんに内緒でわりと外で遊べるぐらいの（真剣に）。

―うわ～、ヒドい男ですねえ（笑）。

所　でもボク、いまさら言うのもへんですけど、ハッキリ言って自分ってヤツがまだわからないですよ……（遠い目で）。

―旅の途中ですか。

所　そうですね（笑）。だから、人の悩みを聞いてるヒマなんてないんですよね！

―ワハハハハ！　コーナーブチ壊し（笑）。じゃあ、これからは悩みがあっても自分で解決しましょう、と。

所　よくわからないですけど、それでお願いします。

―ということですので、読者の皆さま、これからは所さんに頼らず個人戦で頑張りましょう！　それでは、またいつかどこかで～。

Hideo Tokoro◎ところ・ひでお【所英男オフィシャルブログ】http://blog.livedoor.jp/zst_tokoro/【ZSTのHP】http://www.zst.jp/

Booker K◎本名、川崎浩市。シュートボクセをはじめ世界各地の強豪外人を招致する敏腕ブッカー。

ブッカーKの ぶっかけ！ 格闘裏情報

第26回

私だけが知っているボブチャンチンの現在

PRIDEのリングで活躍していた〝北の最終兵器〟イゴール・ボブチャンチンが、現役を引退したという記事がウェブで流れているようです。

確かにボブチャンチンは試合から遠ざかっており、事実上のセミリタイア状態ですが、私がウクライナ現地から直接入手した話によれば、その引退記事は正しくありません。

実際には、いまのところ、ボブチャンチンは試合への意欲がまったくない、というのが真相のようです。もしかしたら、このまま引退という可能性がある一方で、彼が再びリングに復帰することもある。以前、当コラムでふれましたが、ボブチャンチンはレストランを経営する実業家。ファイトマネーを得ることだけが理由で試合をしておりませんでした。

たとえば、こんなエピソード。通常よりもギャラがアップする大晦日イベントのオファーを「クリスマスとニューイヤーを子どもと一緒にすごしたいから」と断った。振り返ってみれば、ボブチャンチンは大晦日格闘技イベントに一度も参加したことはありません。そういう男なのです。



現時点でのラストファイトは、『PRIDEミドル級GP』のリザーブマッチ。中村カズ選手との試合でした。最近はサンボと柔道のコーチのもとで練習していたため、寝技の世界に惹かれ、アブダビ・コンバットに出場するという話もありました（土壇場で消滅）。先述しましたが、母国ではレストランを経営しており、とくだんお金に困っているわけではないので試合をするタイミングは、結局は彼のモチベーション次第。日本のファンからすれば、このまま引退というのはさびしいかぎりでしょう……。私もまた日本で試合を組みたい気持ちでいっぱいです。

実際、ボブチャンチンの名物マネージャーだったオバチャンチンには「試合をする気になったら連絡してくれ」と声をかけています。

「ボブチャンチンが試合をしたいと言っておりマ〜ス!!」

もう一度、あのテーマ曲に乗って現われるボブチャンチンに期待したいです。



金ちゃんのどこまでやるの？

イラスト◎中川画伯

●第21回● 金原応援シートの巻

Hiromitsu Kanehara
◎本音炸裂コラムほぼ毎日更新中！
金原弘光オフィシャルHP
http://www.hiromitsu-kanehara.com/

ようやく試合が決まりました！ 3月26日（水）パンクラス後楽園ホール大会で、パンクラス・ミドル級チャンピオンの竹内出選手と闘います。

昨年3月に川村（亮）くんとやったあとに「あと一試合で引退」を発表してから早1年。その間、引退試合は決まらず、前田（日明）さんに「俺の前でもう一試合やれ」と言われながらも決まらず、秋山成勲戦をぶち上げても実現せず。そして、もう一度、闘いたい気持ちがよみがえってきて引退撤回したり、いろいろあったけど、やっと試合が決まって、いまは気合いが入ってるよ。

その復帰戦の相手がいきなりチャンピオンなんて「恐れ多いです」って最初はやんわり断ったんだけど、パンクラスさんが「ぜひ」と言ってくれたんで、やらせてもらうことにしたんだよね。

俺は一度は「引退」を口にした男だからさ、もうプレッシャーも何もなく、全力でやるだけだと思ってたんだけど、昨年末に始めた『リングス金原道場』の道場生たちがさ、「みんなで応援に行きますから」とか言い出しちゃってさ。それがいま凄いプレッシャーなんだよね（笑）。

「金原応援シートってありますか？」とか言ってるんだよ。「そんなのあるわけねーじゃん！」って言ったんだけど、道場生の一人が「ボクがチケットを取りまとめて、みんなで応援に行きますから」ってことで、ちょっとした私設金原応援シートができそうなんだよね。

自分が道場を持つと、「生徒たちのためにも負けられない」って気持ちになるって、今回初めて知ったね。道場を持っている選手たちはこういうプレッシャーの中、闘ってたんだなって。俺はこれまで、滑川とか横井、伊藤だとか、後輩のプロ選手には教えてきたけど、一般の道場生を教えたのは今回が初めてだったから。自分の生徒の前でみっともない試合はできないって思ったよ。これまでファンの人たちが自分を応援してくれたけど、関係が近いだけに、ちょっと違った感覚だね。でも、気合いが入ってかえっていいよね。俺も小さいながら背負うものができたんだなって。

一つ心配事といえば、今回、パンクラスでは初めて階級を落として84キロ契約でやるから、減量しなくちゃいけないこと。いまはまだ、90キロぐらいあるけど、まだ試合まで6週間あるからね。晩飯の量を減らして、減量スタートしてるんだけど、腹が減ってしょうがないよ。アメリカ人選手なんかは計量直前に身体の水分だけ抜いて、一気に体重を落とす方法でやる人が多いけど、それは日本人には合わないみたいなんだよね。俺も昔、リングスのハワイ大会のとき、ミドル級のトーナメントに出るから急に落としたんだけど、苦しくてたまらなかったから。だから、今回は筋肉が落ちないように、徐々に落としていくよ。

あとは、これまで急に試合が決まることが多かったから、緊張する間もなく試合になってたけど、今回は試合まで時間があるからね。じわじわ緊張してきそうで、それが怖いけどね。

対戦相手の竹内選手については、試合のビデオもまだ観てないんだよね。でも、一応面識はあるんだよ。リングス時代に俺が『アブダビ・コンバット』に出たとき（99年）、俺と仲がいいアンソニー・ネツラーと竹内選手が同部屋だったんだよね。それで少し話をしたことがあるんだけど。8年も前の『アブダビ』に出場してて、いまでもパンクラスでチャンピオンになってるっていうのは、本当に地力、実力があるってことだからね。俺も精一杯練習して、全力で闘うので、ぜひ応援してください！

Kamipro Hand連載コラム

橋本宗洋の格闘裏グルメ 出張版

『デブの、デブによる、デブのためのトーナメント開催!!』

「ついに決まったね！」
「すっごい楽しみだよ！」
　いやもう話題沸騰ですよ。会う人会う人、みんなこの話してくるもの。まあタイトルを見てもらえばわかるとおり、〝大連立〟新イベントではなく3月から始まるDEEPメガトンGPの話なんだけど。
　会見のレポート（155ページ参照）にもあるとおり、筆者はこのトーナメントの実行委員を務めさせていただくことになった。佐伯さんから最初にこの話を振られたのは、確か、しなしさとこの結婚式の二次会だったと思う。
「今度デブばっかり集めてトーナメントやるからさ、橋本さん実行委員やってよ」
「やりますやります！」
　そんなことを、ケーキ食べながら話したのである。試合のレベルとしては大ざっぱだが、なんだかんだヘビー級の試合は一見さんにもわかりやすくてウケる。だったらトーナメントやろう。でも100キロ以上のトーナメントっていっても、ノゲイラとかヒョードルあたりと比べられてもしゃあない。じゃあどうするかといったら、選手の顔ぶれを〝デブ〟で括ろうというのがいかにも佐伯さんである。ついでに本部席も全部デブで固めよう。どうせならラウンドガールも100キロ超だ。普通、選手や関係者がラウンドガールを口説くのは厳禁だが、今回は全面OK！
　その後、DEEPの会場やら『やれんのか！』の会場やら、顔を会わせるたびに佐伯さんから新しいアイデアを聞いた。試合形式はスタミナ切れでグダグダになるのを防ぐため1ラウンド3分、インターバル3分。サカゼン（大きいサイズの服を扱う服屋）をスポンサーにつけられないか。会見は食べ放題の店でやったらどうだろう。会見では席上に水が置いてあるもんだけど、今回はカレーにしようか（デブにとってカレーは飲み物だから）etc……。
　こういうこと考えさせたら、ほんと佐伯さんは世界一である。会見は六本木のスポーツバー『ブレーンバスター』で行なわれたのだが、実際カレーが出てきたときは笑ったなぁ。しかも通常の3倍サイズを『メガトン盛り』として、ランチタイムに本当にサービスするっつうんだから。写真撮影タイムがきたため、筆者はカレーを半分しか食べられなかったんだけど、会見中お店のカウンターに立ちっぱなしだった佐伯さんの「ヒザ痛ぇ……」の一言で満腹であった。会見の数日前、「実行委員にもう一人、一宮（章一）も決まったから！」と言ったときの佐伯さんの笑顔もよかったなぁ。逆に「大変だよ。トーナメントだっていうんで選手が張りきっちゃってさ、みんな体重落とし始めてんだよ」というセリフも忘れられん。
「なんだこれ、ふざけてんのか？」と言われたら、まあそうですとしか答えられない。でもなんか、楽しいじゃないか。
　格闘技はガチガチのシリアスなもんじゃなきゃいけないなんて決まってるわけじゃない。選手の安全性が守られていて真剣勝負であるなら、どんな企画だってありだろう。こういう〝ふざけた〟佐伯さんの発想の中から、ルチャドールの総合格闘技挑戦なんていうヒット企画も生まれたわけだし。付け加えるなら佐伯さんの柔軟な思考はシリアス方面でも発揮されていて、その結果として長南亮が注目されだしたんじゃなかったか。それに忘れちゃいけないのは、DEEPではメガトンGPと並行してコアでシビアなミドル級トーナメントもスタートするのである。
　いや、筆者もほかの誰かが〝デブだけのトーナメント〟なんて企画したら「ふざけてんのか!?」と思ってたかもしれない。でも佐伯さんがやるんだったら全面協力だ。なにしろ佐伯さん自身が、格闘技界におけるデブのトップランナーなわけだから。以前、名古屋で佐伯さんにインタビューしたときのこと。「じゃあ昼メシでも食べながら」ってことになって、名古屋名物・味噌煮込みうどんの店に入ったのである。そのときのオーダー風景。



2月8日、六本木『ブレーンバスター』で行なわれたメガトンGP会見。本文中にもあるとおり、カレーを食べながらの前代未聞の会見に。出場予定選手で唯一のプロレスラー・有山いいとも!!　に注目！（総合経験ゼロ……）。

佐伯「オレ、えび天味噌煮込みうどんにしようかな」
橋本「あ、じゃあボクも」
佐伯「ご飯も頼むよね？」
橋本「え？　あ、はい」
佐伯「あと串カツとねぇ、板わさ！」
　これで完全に信頼しましたね、佐伯さんのこと。たとえ昼メシでもうどん一杯では済まないのである、デブは。サイドメニューがどうしてもほしいというその感覚がもう、筆者とまるで同じ。別の取材では、「じゃあ晩メシでも食べながら」となってとんかつ屋でご飯も味噌汁もおかわりして（キャベツはしない）、その上で佐伯さんは「インタビューはお茶飲みながら」と入ったロッテリアでリブサンドとコーラを注文するのであった。このときは負けたと思った。
　……ちょっとたとえがデブ以外にはわかりにくかったか。要するに佐伯さんは、業界屈指のアイデアマンというだけでなく、メチャクチャ付き合いやすい人なのである。向こうが「今度こんなことやろうと思ってるんだけどさ」とプランを話してきたり、こっちが試合の感想をしゃべったり、そういうことがじつにフランクにできる。佐伯さんが『PRIDE武士道』のスタッフに加わったのも、忙しすぎるDSE社員とマスコミとの〝橋渡し〟的なポジションを期待されてという面もあったらしい（佐伯さん自身も死ぬほど忙しい人なんだけど）。あとはシリアスになりすぎてしまう会見の場をなごませたり。
　あ、ちょっといま思い出したんで話の流れとあんまり関係ないことを書くが、佐伯さんはカメラマン出身なのである。パンクラスにいた謙吾やしなしさとこの写真集も撮影している。で、以前DEEPを主戦場にしていたTAISHOという選手にインタビューしたときのこと。名古屋で取材なのだが、カメラマンを連れて行くと予算が厳しい。そこで広報担当者に相談してみたのだ。
「誰か、名古屋在住で腕のいいカメラマンがいると助かるんですけど……」
「……あ、なるほど了解です。じゃあ当日フィルムだけ持ってきていただければ」
　というわけで、取材場所にはカメラを提げた佐伯さんが現われたのであった。頼むほうも頼むほうなら受けるほうも受けるほうなんだが、結果それで取材がうまくいったわけで、遠慮して素人の自分が写真撮ったり、予算の都合で取材が流れるという事態を避けることができた。佐伯さんはこういうことを頼める相手であり、それに乗ってくれる人なのである。
　だからこそ、筆者もメガトンGPの実行委員をホイホイ引き受けて、会見でカレー食ったり集合写真に収まったりしてるわけだ。
　お気づきでない方もいると思うが、大会名の『DEEPメガトンGP2008』っていう、この〝2008〟がまたツボだ。もしかすると〝2009〟とか〝2010〟もあるかもしれないってことじゃないか。GPが続いていくうちにスケールアップするかもしれない。少なくとも可能性はゼロじゃない。考えたら〝可能性はゼロじゃない〟って凄いことだ。
　何年後かに、ヒョードルが「私も体重が100キロ以上あるので、ぜひ参戦したいと思います（微笑）」なんて言ってくるかもしれない。体型を考えるとアレキサンダーかな。バーターでローマン・ゼンツォフ出場を打診されたら、実行委員としてはどう対応すればいいんだろう。まずはモンテ・コックスを海外部門責任者に任命したほうがいいのか。理想としては名誉顧問サモ・ハン・キンポーかなぁ。いや、可能性はゼロじゃないわけだから。

※今回のコラムはケータイサイト『kamipro Hand』で2月13日に更新したものを諸事情にて再掲載しました。「格闘裏グルメ」は毎週水曜に好評連載中ですので、まだ加入していない方は156ページをチェック!!

椎名基樹のサムライ三昧

第23回

三田さん、ごめんさない！

え〜、今回はいきなり冒頭から謝罪の文から。

前号の『kamipro AWARD』でサムライTVキャスターの三田佐代子さんを「毎日ご苦労様で賞」に選び、そのコメントに「毎日見ていると好きになるから不思議」と書いたところ「不思議って……。たとえて言うなら〝納豆パフェを毎日食べさせられてたら不思議と好きになってしまった〟という類ですよね……。まあでも好きになっていただいたのなら前回よりは進歩と言えるでしょうか……」と三田さんが『kamipro Hand』のコラムに書かれていたそーでして、さらに過去に「三田さんでさえ好きになる」と筆者が書いたこと、さらにさらにラジオでも付かないことを筆者が発言したことにも触れていた（嘘）そーでありまして、毎度毎度ながら自分の言葉の足らなさを痛感し反省しているしだいであります。

三田さんのことはサムライTV開局以来、ずーと見続けているわけで、一言では語れない気持ち、親近感と申しましょうか、それがそーした不適切な発言となってしまったのだと思われます。え〜、これでは、説明になっていないかとも思いますが、うじうじ説明するとまた言葉が足りない状況を生む恐れがありますので、自分の文章力を恨みつつ説明をあきらめます。

とにかく、筆者は三田さんが大好きだということです。三田さんといえば、阿川佐和子、山本モナと並び「世界3大話がわかる女」に認定されているほどのイイ女。サムライTVの放送で、ブードゥーマーダーズという到底カタギとは思えない名前とルックスの方たちにセクハラされても軽く受け流し、このあいだも、あの小原道由の突然の乱入にも動じることなく対処し、古くは菊池孝御大の暴走にも「はいはい、今日はこの後、私が（飲みに）付き合いますから」とあやす姿に「こんなお嫁さんがほしいなあ、優しくって頭が良くって話がわかって……あれ？ そーしたらもしかして、オレ働かなくてもいいんじゃないか？」と筆者のみならず、社会的弱者たるプロレスファンは、三田さん的には大迷惑な妄想を膨らます毎日であるのです。

そんな三田さんに本意ではないといえ、不愉快な思いをさせたことを、膝を折り、手を突き、額を地面に押し当て、舌を出し、もとい、舌を切り、謝り申し上げます。ごめんなさい。垂頭＆敬礼！

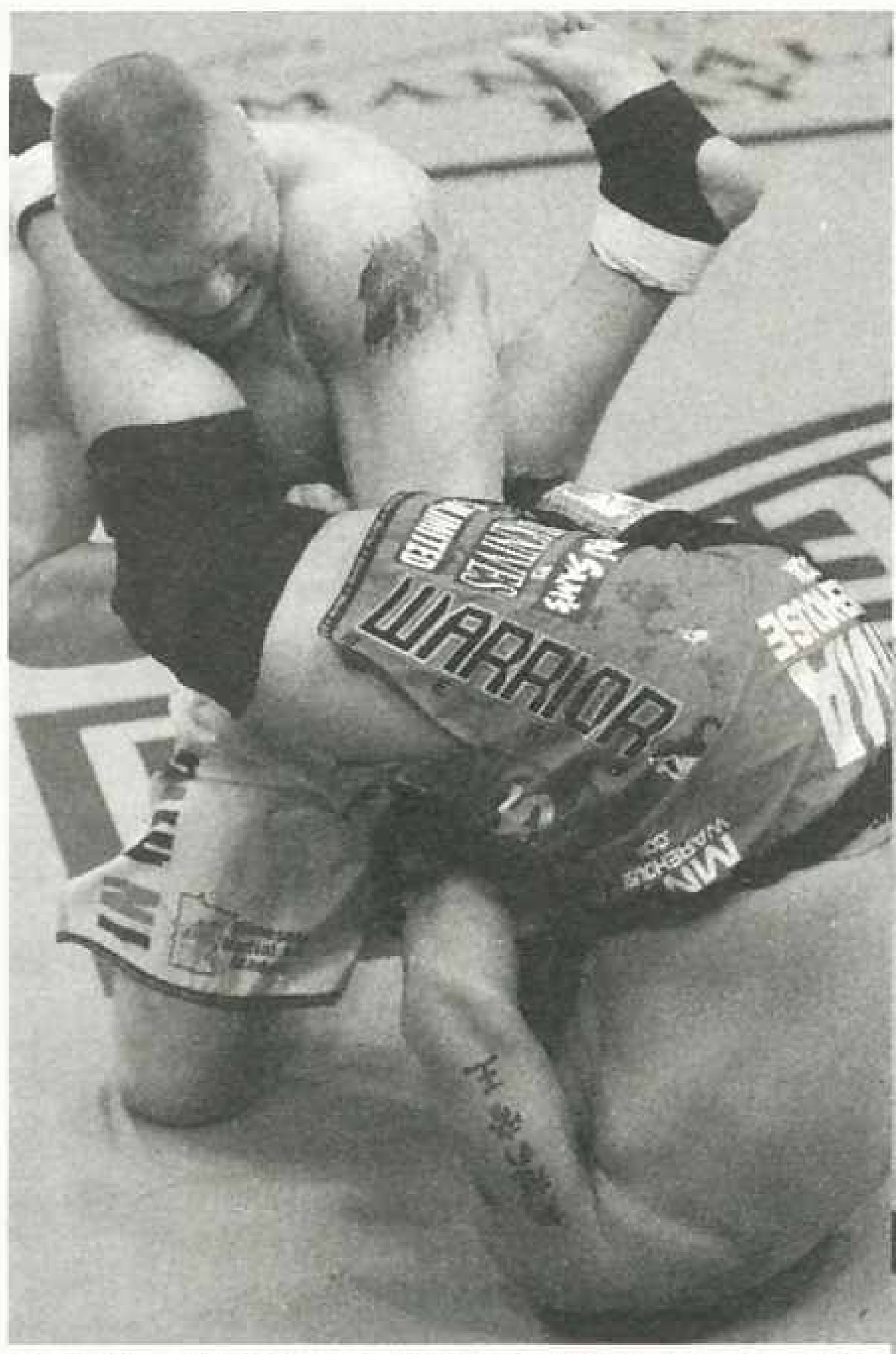
つーことで本題。『UFC81』の大ノゲイラ（←この言い方も古い）vsティム・シルビアのヘビー級暫定王者決定戦をネットで見た。ノゲイラまたもや、ボロボロになりながら大逆転で勝利。UFCヘビー級暫定王者に輝いた。対ボブ・サップ、対ミルコに続き、ノゲイラの世界3大大逆転劇の完成である。1ラウンドにダウンを食らい、そのまま行けば判定負け濃厚の中、ギロチンチョークを極めてみせた。

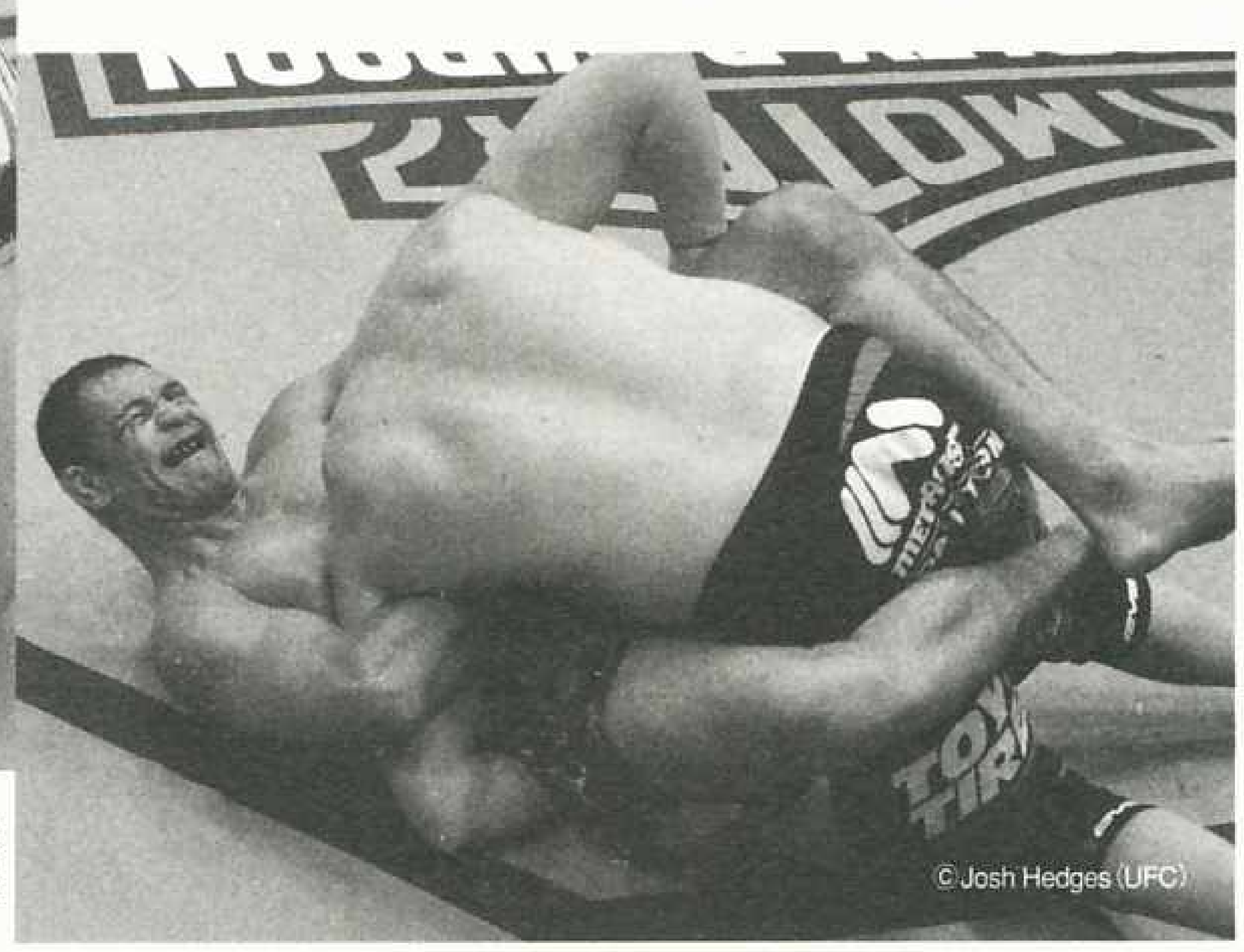
かつてI編集長はシルビアをでくの坊と言ったが、打撃ではノゲイラを圧倒。2メートルオーバーの体格＆体力はテイクダウンを許さない。たぶん、I編集長はシルビアの目が可愛らしいのと、顔がモグラっぽいのとで、大好きな大男にもかかわらず、甘く見てしまったのではないかと想像。

PRIDE勢のUFCでの連敗が続く中、悔しさ紛れにノゲイラの登場を願うと書いたことがあったが、敗色濃厚となって、映りが悪いムービーに向かって、思わず大声で声援してしまった。そこでいつもの大逆転。溜飲を下げた。

ブロック・レスナーのUFCデビュー戦も興味深かった。身体能力はやはり凄いらしく、対戦相手のフランク・ミアが津波の中のビーチパラソルのごとく、技ではなく力で簡単にテイクダウンされてしまう。しかし、猪木vsアリ状態で、上のレスナーの足が隙だらけだなあと思っていると、案の定、下からヒザ十字を極められる。一瞬の予想が的中してちょっと嬉しい。ポテンシャルは凄いが、やはりレスナーはド素人と言わざるを得ない。ポッと出のプロレスラーがMMAで勝つのが許せないらしい自分に、好きでもないミアに思わず声援してしまって気づく。

しかし、プロレスラー参戦で、想像力を刺激する図式がかつてのPRIDEを見るようで、UFCの世界観が急速に進展していく様子が感じられ、羨ましい。PRIDE崩壊以降まったく退屈。アメリカに住みたい。





© Josh Hedges (UFC)

UFCデビュー戦は下からのヒザ十字で秒殺負けしたレスナーだが、ミアをがぶると田村ばりの回転体を披露しながらパウンド連射。次戦が楽しみ。メインに登場のノゲイラはボロボロになりながら、最後はギロチンでシルビアに大逆転し、王座奪取！ やったね!!

遅ればせながらだが、前回のシウバvsリデルもやっと見られたので、少し書かせていただく。UFCの会場にシウバのテーマ曲「サンドストーム」が鳴り響くと、胸が熱くなり、心が焦げる。最近では大鷲透でしか聞いていなかったからなあ。シウバが入場するときアナウンサーが「ジ・アックス・マーダー、ヴァンダレイ・シウバ」と紹介しているように聞こえ、なるほどリードブローを使わず、一撃必殺の重いフックを振り回すシウバのスタイルにピッタリのキャッチフレーズだと感じ、カッコ良い。

前号で佐藤大輔さんと、GANTZ、もとい奥浩哉先生の漫画のほうでなく、本誌Uキチ変態編集者ガンツが絶賛していた、ジョルジュ・サンピエールはなるほど素晴らしかった。あのマッハ、ホイスを完封したマット・ヒューズを、逆に完封してしまった。

特筆すべきはそのテイクダウンのセンス＆技術。相手の上になることにかけては世界一だと思われた、アメリカン・アマチュアレスラーのヒューズを2度までも足取り（右手で相手の左足を外からすくって前に押し倒す）でヒョイヒョイと簡単にコカしてしまう。圧巻だったのは、豪快に一回転させ真っ逆さまに投げきり、ポジションを崩すことなくサイドについた、払い腰。

古代パンクラチオンに対する言葉で「投げ技は寝技より美しい」というのをなんとなく記憶しているのだが、その言葉どおり、投げは格闘技の華。会場が一気にドッと沸き、ヒートアップ。

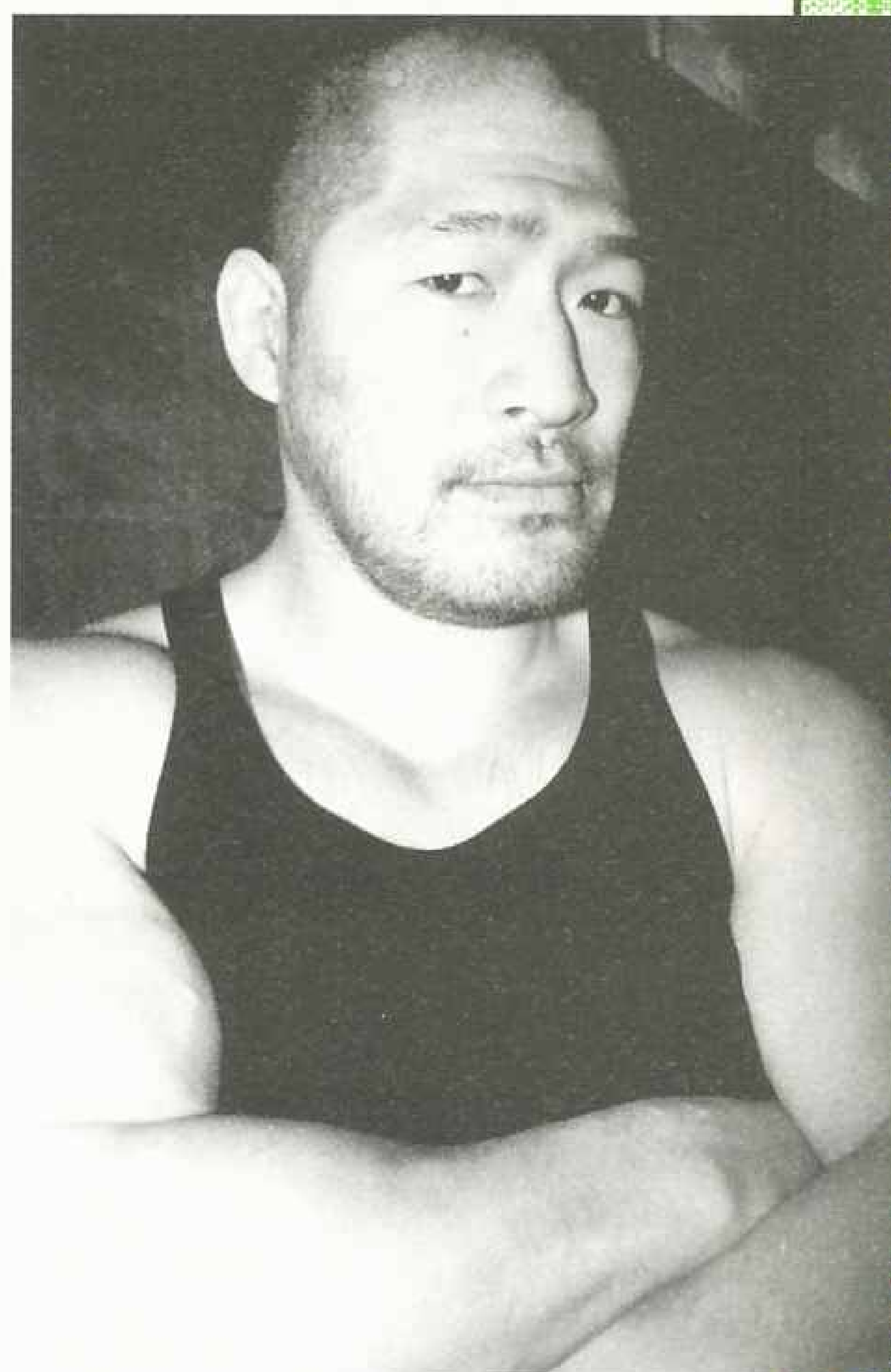
じつに充実した選手層を誇る、日本の70キロ台の総合格闘技ファイターたちでも、とてもじゃないが、ジョルジュ・サンピエールには勝てないと感じた。今さらながら、世界の中心はアメリカに移ったのだと、実感。

イナズマKの ハードコアドージョー Special

脅威の〝40歳新人〟の転身人生とは!?

柔道から指圧まで! ミステリアスな経歴を直撃!!

タカ・クノウ



たか・くのう■本名は久能孝徳。1967年5月18日生まれ。東京都出身。国士舘高校で柔道部に所属、自衛隊でレスリングを経験。23歳でロスに渡米し、ボディビルを学ぶ。01年に日本人柔道家として木村政彦以来となる柔術の黒帯選手からの一本勝ちで注目。帰国後は太田章に師事、05年にDEEP参戦。07年にIGF旗揚げ戦での小原道由戦で、夢だったプロレスデビューをはたす。

〝木村政彦以来、柔術黒帯から一本勝利した日本人〟、〝40歳でプロレスデビュー〟、〝プロレス大賞新人賞・次点〟と何かと話題の人、タカ・クノウ。新人なのにレジェンド状態のミステリアスな実態を直撃!

ハードコア列伝1 超セレブの指圧経験もアリ!!

現在40歳のタカの少年時代は、猪木、初代タイガーらがバリバリ活躍していたプロレス黄金期。「地元が日本橋なんで、よく蔵前国技館に観に行ってました」というタカは、「プロレスラーになりたくて」中学から柔道を始めて、国士舘高校に入学。

だが、「365日、かわいがりみたいなもの。上下関係も厳しかったし、平気で5時間休みなしで練習したり。寮生活だから、24時間臨戦態勢で。塀の中っぽい生活でした(笑)」。ハードな柔道部で鍛えられた身体とメンタルは、のちの人生を支えていく。

高校卒業後、柔道からレスリングに転身。自衛隊に入隊し、レスリングで五輪王者の夢へまっしぐら……のはずだったが負傷で断念せざるを得ず。

そこで「体力補強でやっていたウエートで、身体がスクスク成長したんで。じゃあボディビルで一番になろう」とボディビルの世界へ。「やるならメッカに飛んだほうがいい」と、コネもないのに、23歳でロスに単身渡米というおもいきった行動に出る。

ロスでパーソナル・トレーナーとして通い始めたゴールドジムには、「スタイナー兄弟にホーガン、リック・フレアー、ザ・ロックも来てました」とプロレスファンにはたまらない環境だった様子。若き日のザ・プレデターとも交流があり、「IGFで再会できて嬉しかった(笑)」と語る。

いまも凄まじい肉体を誇るタカだが、当時は「もう一回り大きかった。腕回りが50センチ。レッグプレスは600キロ挙げてました」と、曙二人ぶん(!)を脚で持ち上げる脅威のパワーを持っていたことを告白。

またロスではジムで働きつつ、「指圧の心は母心」でおなじみ浪越徳治郎先生の内弟子の方に孫弟子入りし、指圧もマスター。「バックストリート・ボーイズや女優さん、映画プロデューサーとか。あと矢沢永吉さんも」と、セレブ御用達の指圧師としても活躍していたというから驚き。

ハードコア列伝2 あの〝快挙〟はぶっつけ本番!!

01年、目まぐるしい人生模様のタカに転機が訪れる。ブラジリアン柔術黎明期の強豪、ジャン・ジャック・マチャド主催の柔術大会で日本人柔道家として〝木村政彦以来〟となる柔術黒帯選手から一本勝利、という快挙をはたす。

「ジムでジャンとは知り合いで、柔道をやっていた話をしたら、『柔術と柔道のミックスドマッチをやろう』と言われて軽いノリでOKしたんです」。だが、「柔術のルールもわからず、練習は走り込みくらい。柔道着も10何年ぶりに袖を通した」とぶっつけ本番の勝利だったことを告白!

その結果も「国士舘柔道のおかげ。ウチは寝技が強くて下から攻めるのに慣れてたし、柔術家の引き込みにも対応できた」。さらに「関節技はUWF好きだったんで(笑)。アキレス腱固めとか得意なんです」。国士舘柔道にボディビル、プロレスの関節技のミクスチャーで、黒帯撃破とは痛快な話。

この試合を観た地元の日本人たちの要請で、ロスの『芦原カラテ道場』の休日に柔道のコーチを始め、今度はいきなり師範代となったタカ。

柔術の派閥を越えた交流の場となり、タカも「みんなが『出てください』というから」と押っ取り刀ながら柔術大会に出場、準優勝や優勝を重ねており、この活躍ぶりが伝言ゲーム状態で〝生ける伝説〟というワードに変換されたのだろう。

さて、15年のアメリカ生活を経て、05年に帰国したタカはロス時代に交流があったレスリング五輪銀メダリストの太田章氏と親睦を深めて、DEEPにも参戦。勝ち星は得られなかったが、当時38歳だったタカは、ここで現役からフェードアウト……と思いきや、昨年、IGFからオファーが到着! またまたまた転機が訪れる。

ハードコア列伝3 プロレス練習経験一切なし!!

ちびっ子の頃の夢、プロレスデビューを40歳ではたしたタカ。しかも舞台は両国国技館!「国技館の川向こうが、自分の中学校なんです(笑)」。と、つまりもの凄く大きな弧を描いての地元凱旋デビューとなったが、これにはタカも感慨深い様子。「猪木さんから『プロレスも総合も同じ』と言われたので、普段どおりの練習をやり続けました。プロレス的な受け身やロープワークの練習は一切やってないです」と告白。「プロレスへの敬意はたっぷりあります。ただ経験のない自分がプロレスかぶれみたいな試合をするより、スタイルは一歩ずつ作っていこう、と」と謙虚な姿勢。

さて憧れの猪木に対面したタカだが、「覚えてらっしゃらないでしょうが、指圧したことがあるんです(笑)」となんとロスで指圧治療も行なっており、さらに「中1のとき、日本橋三越屋上でのアントンマテ茶の即売会で、友だちと3対1で猪木さんと綱引きしてます(笑)。抽選で闘魂タオルまで当たって。あれは宝物ですから」とやはり縁があった模様。

『東京スポーツ』の『プロレス大賞』新人賞で次点となったことには、「驚きました。嬉しいけど、なぜ自分なんだって(笑)」と戸惑いつつ、「デビュー3年目まで大丈夫みたいなんで、今年は狙いたい!」とキッパリ。

柔道、アマレス、ボディビル、指圧、柔術、総合、そしてプロレスと、本人が望む望まないに関係なく、一本の線となり、自然体のまま少年の頃の夢にたどり着いたタカ。

屈強なイメージのタカだが、お人柄は限りなく謙虚でソフト。しかし、目の奥は燃えたぎっている。桑田・清原世代の新人レスラー、タカ・クノウがこれからも凄いものを魅せてくれそうだ!



07年6月29日、IGFの「闘魂BOM-BA-YE」にて、いきなり両国国技館、しかも地元デビューとなったタカ。相手となった小原も国士舘出身だが、こちらは大学なのでタカとの接点はないものの、「共通の先輩の話で盛り上がる」こともある模様。



掟ポルシェの萌え萌え女々苑

イラスト◎ゴローちゃん

総合格闘技記事だらけの本誌の中で、萌え視点から女子プロレスを見るという『デラプロ』みたいなことを、需要と無関係にしつこくやり続けるページ『萌え萌え女々苑』。今回のゲストは子宮筋腫＆出産による長期欠場から3月2日、後楽園ホールで、ついにカムバック！ 井上京子さん！ 昭和のプロレスラーの香り漂う男前発言＆豪快すぎる飲みっぷりに驚嘆せよ！

掟 聞くところによると、京子さんはけっこうモテてるとか？

京子 ハハハハハ！ 何言ってんの！ 私が無理やりどうにかしようと思ってるからじゃない？ 酔わせてでも連れて帰ろうっていう（笑）。

掟 えー、言葉を選ばず言わせていただくと、それは「拉致」ですね（笑）。

京子 そう、拉致拉致（笑）。私が男を拉致して帰ってるからモテてる話になってるのかもね。前に、道端にL字型になって倒れてる男の子がいて、この子ヤバいなと思ったんだけど、顔がかわいかったから、担いで帰ったの。お持ち帰り（笑）。

掟 犯罪スレスレの男前ぶりですね！（笑）。

京子 でも、よかった。今日は何を聞かれるのかと思ってたんだけど、そっち系の話だったら得意だから（笑）。

掟 とりあえずは復帰おめでとうございます！ 本格復帰は3月2日の後楽園大会からですが、体調のほうは？

京子 一応大丈夫。あんまり重い話するとあれだけど、出産前とか筋腫のこともあって、出血が致死量に達して、死ぬんじゃねえかって感じだったんで。

掟 常人ならヤバかった、と。お医者さんからゴーサインは？

京子 「普通の生活は大丈夫ですよ」って言うから、「でも自分の普通の生活って、3メートルぐらいのところから80キロぐらいの人が両足でドンッとか乗るんですけど」って言ったら「それ普通の生活じゃないですね。でも筋腫はべつに破裂するようなもんじゃないから、お勧めはしないですけど、なるべくやらないように」とは言われて。



いのうえ・きょうこ■1969年4月22日、山形県出身。88年10月、全日本女子プロレス後楽園大会での井上貴子戦でデビュー。その後、数々のベルトを獲得し、97年にネオ・レディース（現・NEO女子プロレス）に移籍。07年3月から子宮筋腫により長期欠場、同年11月2日に男児を出産。今年3月2日の後楽園大会で復活！ 166cm、100kg。

掟 復帰戦でフットスタンプが降ってこないことを祈ります！ お酒も現役復帰で？

京子 一回5キロは飲むね（笑）。飲む前92キロ、飲んで家に帰ると97キロ（笑）。

掟 うわっ、飲酒はキロ単位！（笑）。

京子 ワインを10本ぐらい飲むんで、毎日ヘロヘロなんだけど（笑）。

掟 アンドレみたいです！ 飛行機の中の酒を全部飲む、みたいな。

京子 あ、そういうのけっこうあるよ。居酒屋のワインなくなったりとか普通にあるから。

掟 スゲェ！ 最近は男子プロレスラーでも、そんなに豪快に飲んでる人の話聞かなくなりましたよね。

京子 少なくなったよねぇ。ウチの店に来てもさ、飲まない男子レスラーっているもん。何しに来てんだって話じゃんねえ？

掟 しこたま飲まされるのが怖いから、飲めないフリしてるんだと思うんですけど（笑）。

京子 そういうのダメだなあ、それじゃプロレスラーじゃないんだよな。……昭和でしょ、私（笑）。

掟 さすがですよ！ そんな豪快な生き様の一方で、最近、お子さんも出産されたわけですが。

京子 そうそう、元気に育ってるよ。でも、私に似なくてよかった。メッチャクチャかわいいの！

掟 お父さん似なんですか？

京子 まあ、そのへんはいいじゃん（笑）。

掟 お子さんの名前は井上りきくんなんですよね？ 大変聞きにくいんですが……それはお父さんが井上雅央さんだとか、井上順さんってことじゃないですよね？

京子 違う違う、長州さんでもないし（笑）。でも、やっぱりさぁ、井上京子が子どもを産むって気持ち悪いじゃん？ 私のことを女として見てる人もいないと思うしね。

掟 いや、そんなことないと思いますよ。

京子 ブスだしデブだし、最悪じゃん。プロレスラーとしてはカッコいいよ、私。でも女としてはもう全然ダメじゃん。そこはちゃんと理解してるんだよ。

掟 全女に入団したときに、ついたあだ名が〝ブス〟だったのにも衝撃を受けましたけど（笑）。

京子 ホントだよ！ 松永会長に「おまえはブスだから、スターにもベビーフェイスにもなれないなぁ」って言われたのはさすがにショックだったなぁ。

掟 獄門党なのにベビーみたいな雰囲気だったし、どちらの予言もはずれてよかったですね（笑）。そういえば、京子さんといえば、小さい頃からお父さんがかなりスパルタ教育だったとか？

京子 そうそう。幼稚園ぐらいからスクワット、腕立て、腹筋、背筋ってやらされてたからね。で、小学校のとき、ある日起きたら枕元に砲丸が置いてあった（笑）。

掟 ガハハハハハ！ タチの悪い冗談みたいな話です！

京子 普通だったらサッカーボールとか、バットとミットとかじゃん？ ウチは砲丸だったからね（笑）。

掟 へたするとグレる原因にもなりますよ（笑）。お父さんは砲丸投げの選手にしたかったんですかね？

京子 「京子はこれでオリンピックに行け！おまえはこれしかない！」って。だから私もオリンピックに行くもんだと思ってて。

掟 京子違いですけど、浜口京子さんとこの親子関係に近いですね。

京子 凄い近いと思う。昔は殺そうと思ったぐらい憎かったけどね。

掟 ゲストには毎回男性の好みを聞いてるんですけど、京子さんの好みのタイプは？

京子 私ね、タイプってまったくないの！ その日によって変わったりする。

掟 なんでも来いですね（笑）。でも、なんか共通点ってありませんか？

京子 ないです！ 私、最高7人と付き合ってたときあるんですけど……。

掟 エエエーッ、7股!! やっぱりモテてるじゃないですか！

京子 いやいや、無理やりだから（笑）。そのときも全員タイプ違ったもん。まあ、好きな人がタイプだね。

掟 モテる秘訣ってなんでしょう？

京子 う～ん……。私、顔は悪いけど性格はいいってホント思うんだ。

掟 実際、京子さんの彼氏だった人は、「あんないい女はいない」って言ってたらしいですからね。

京子 だって、こんな素直でいい女いないと思う。男だったら自分と付き合いたいもん。

掟 お子さんの名前が、りきくんということは、将来はプロレスラーに？

京子 とりあえず、私が小さい頃やらされたようなことはやらせますけど。身体鍛えておいて無駄にはならないじゃん。で、強制はしないけど、ある日突然、枕元に砲丸置く、みたいな（笑）。

掟 ガハハハハハ！ 歴史は繰り返される、と（笑）。



都内・武蔵小山駅近くで絶賛営業中の京子のお店『あかゆ』。興味のある方は潰れる覚悟で！ 京子完全復活間近のNEO情報は→ http://neopro.ne07.jp/

Okite Porsche◎掟ポルシェ■4・4（金）恵比寿リキッドルームでロマンポルシェ。10周年ライブ第2弾開催！ 名前を出すと一発でチケットが売り切れるぁあの人たちもシークレットゲストで登場決定！ 自分のバンドだけでは絶対に埋まらないので、今回も他力本願方式全面採用で頑張るぞ！（俺以外のゲストの人たちが）。前売りチケットはローソン、ぴあ他で発売中なので急いで買ってくださ～い！ その他の出演情報は掟ポルシェブログをチェック！【http://porsche.exblog.jp/】

ファイター関係者がこだわりの選出!

“俺だけの”なんでもランキング

TAJIRIの 僕が愛するマンガたち、ベスト5

俺だけの、俺だけによる、俺だけのためのランキング。俺だけのこだわりを、ファイターや関係者にうかがってベスト5を選出! 最終回となる今回は、『ハッスル』にて大活躍中のTAJIRIが、コアでこだわり溢れるマンガ話がラストを飾ります!



たじり■本名、田尻義博。1970年9月29日生まれ。熊本県玉名市出身。94年vs岡野隆史戦でデビュー。IWAジャパン、大日本プロレス、ECWを経て、WWEに入団して、メジャーリーガーとして大活躍。WWE退団後は、『ハッスル』を主戦場に。

1



『あしたのジョー』

原作/高森朝雄、作画/ちばてつや（講談社）

2



『男の星座』

原作/梶原一騎、作画/原田久仁信（日本文芸社）

3



『空手バカ一代』

原作/梶原一騎、作画/つのだじろう、影丸譲也（講談社）

4



『まんが道』

藤子不二雄A（中央公論社）

5



諸星大二郎&つげ義春

スヌーピー狂いの小学校時代 中高は梶原一騎原理主義に!!

今日は伏せ字の話……じゃなく、マンガの話ですよね（笑）。僕はいっぱい読んでるワケじゃないんですが、たまたま選ぶのがコアなマンガばっかりなんです。今年、最初に買った本は、復刻された『藤子不二雄物語 ハムサラダくん』（吉田忠著）ですから（笑）。

僕はこの世で最初になりたかったのが、『ヤッターマン』の主役のガンちゃん、そのあとがマンガ家なんです（笑）。小学生の頃はマンガを描いて先生に刷ってもらって、クラスで毎週連載してましたから。絵はうまかったワケじゃないんですけど。何か表現したいものがあったのかな、と。

最初に好きになったマンガはスヌーピーの『ピーナッツ』（チャールズ・M・シュルツ）。その頃、100巻くらい出てた全集も全部持ってたし、あだ名もチャーリーでしたから（笑）。当時は『ドラえもん』全盛でしたけど、一人でスヌーピー道を邁進してました。

そのあと、アニメにハマって、『戦闘メカ ザブングル』とか『太陽の牙ダグラム』とか、リアリズム路線のロボットアニメが好きになった。『機動戦士ガンダム』じゃなくてね。友だちが、みんなガンダムのプラモを並んで買っているときでも、一人で『伝説巨神イデオン』のプラモを買ってたり（笑）。やっぱり、どこかヒネくれてるんでしょうね。

あとは小学校のとき、すでに『あしたのジョー』（原作/高森朝雄、作画/ちばてつや）は全巻読んでて、もの凄く影響を受けました。そのあと中学生になって、より深いかたちで梶原一騎の作品群と出会うんです。

ウチの兄貴が極真空手をやってたんですが、ある日、兄貴の机に『空手バカ一代』（原作/梶原一騎、作画/つのだじろう、影丸譲也）があったんです。で、これを読んで人生が完全に変わっちゃった。マンガの影響で自分も極真に通い始めたし、そこからプロレスラーの道が開けていきましたから。当時も復刻版だと思うんですけど、その頃読んでも衝撃的だったから、いまの若い子にも読んでほしいですね。

さらに高校生のとき、梶原一騎先生の自伝的マンガの『男の星座』（原作/梶原一騎、作画/原田久仁信）を読んだんです。これまたトラウマになるぐらい濃厚なマンガで。女性の描き方とかも強烈だった。僕の人格形成の芯は完全に梶原一騎なんです。だから、1位の『あしたのジョー』、2位の『男の星座』、3位は『空手バカ一代』が不動です。

つげ義春に、諸星大二郎…… コアなマンガ街道を探求!!

あと『まんが道』（藤子不二雄A）も絶対にハズせない！ これが4位ですね。『まんが道』は大学生のときに全巻読んだんですけど、梶原一騎みたいに自分の人生の向きを変えられちゃうくらいのパワーがあった。『まんが道』は藤子不二雄の人生を下敷きに、梶原一騎は、自分の人生と大山倍達の人生をミックスさせて作品にしてるから、迫力やリアリティがハンパじゃない。表現する人間の生き様が徹底的に描かれてるし、読んでると、「僕もこういうふうになれる！」「僕もやれるんだ！」って感じで鼓舞されますから。いま、こういうマンガってないですよね。

それと、5位は諸星大二郎、そしてつげ義春。彼らの作品は全部好きですから、作品は選べないんですけど。諸星大二郎は絵そのもののタッチが大好きなんです。アフリカが舞台の代表作『マッドメン』もいいけど、タイトルは忘れちゃったけど、最後に輪廻転生をくり返して200億年後の地球に放り投げられちゃう話があって。それを読んだときの圧倒的な孤独感といったら……。表現にたずさわるものとして、絶望的な気持ちになっちゃいましたね。

つげ義春が好きなのは、感覚的な部分なんですけど、つぶやきみたいな言葉のセンスが凄く深く響いてくる。初期作品集から、ほとんどの作品を読んでます。映画になった『ゲンセンカン主人』も不気味な感じが好きなんですけど……、あの主人がミスター・ヒトさんに似てるって、昔、大日本プロレスの道場で話題になってました（笑）。

つげ義春の弟、つげ忠夫も好きで、とくに今日持ってきた『けもの記』っていう短編集には、『流れ者たち』っていうプロレスマンガがあるんです。プロレスの構造をかなり知っていないと描けないような視点からプロレスを描いているし、途中に「ハッスルする」なんてセリフもあって、驚かされる（笑）。プロレスファンは読んだほうがいいと思います。

WWE時代、日本ツアーで脅威の10万円ぶん大人買い!!


最近の復刻ものでは、佐藤まさあきの『ダビデの星』も凄かった。脱獄した殺人鬼に犯されて誕生した男の子が、高校時代にナチスのユダヤ人迫害の記述を読んで、残虐さに目覚める……っていう異常な設定なんですが、第2巻の中盤あたりから、描きたいものを描ききっちゃったのか、ただのエロマンガになっちゃったり（笑）。

マンガを買うのは、『BOOK OFF』とかも多いけど、普通の店じゃあ、僕が読みたい本がなかなかないんです。だから、50万冊揃っているような店とか、『まんがの森』とか紀伊國屋のマンガ館とかに行ったり。

WWEでアメリカに住んでたときは、ツアーで日本に帰ってくると、一回で10万円ぶんくらい大量に買って、マンガが満載のカバンを二つくらい持って帰ってましたから。

こういう濃いマンガの影響って、僕のバックボーンとして確実にありますよね。だから、ビンス（・マクマホン）が僕のことを買ってくれたのも、ずっと読んできたつげ義春とか諸星大二郎とか梶原一騎のエキスがにじみ出て、そこをおもしろがってくれた部分も絶対にあったと思うんですよ。

そういう意味でも、僕というレスラーは好き嫌いが分かれるのかもしれない。でも、意外といつまでも心にひっかかるものってそういう濃いものなんですよ……と、自分で言っておりますが！



格闘激国

“韓国”とは何か？

全25ページ！ 現地潜入徹底特集!!



近くて遠い格闘激国を探れ!!

我々はの国を

1月下旬、韓国には注目すべき格闘技イベントが見当たらないにもかかわらず、雪の降るソウルへと飛んだ。

格闘激国、韓国——。昨年のPRIDE崩壊後、以前の勢いを失なった感のある日本の格闘技界に対し、〝国民的スター〟チェ・ホンマンを中心に、ユン・ドンシクや元在日韓国人である秋山成勲らの活躍により、最近の韓国では格闘技人気が定着しつつある。韓国の格闘技マーケット開拓に力を注ぐ谷川貞治FEG代表は「韓国の格闘技熱は日本を上回った」と言う。もはや現在の格闘技シーンにおいて韓国を無視することはできなくなっている。そして、こうした傾向は今後もますます加速していくだろう。

日本で花開いた格闘技文化が韓国に輸入され、そうして花開いた韓国の格闘技文化が日本にやってくる。しかしながら、日本と韓国には深くて大きな溝がある。その溝にはリアルなナショナリズムがいびつなかたちで埋もれている。

2006年の大晦日に行なわれた桜庭和志vs秋山成勲戦。日本では悪質な反則を犯した魔王が猛烈なバッシンクを受けたが、韓国では「秋山は集団いじめを受ける〝被害者〟」とした。こうした感情の対立は昨年の大晦日、三崎和雄vs秋山成勲戦でも同じだった。日本の一部のスポーツ紙などはこの試合を「勧善懲悪のストーリー」と表現したが、韓国では三崎和雄を〝差別主義者〟とし、怒りととも

もっと知る必要がある!!



に筆を走らせた。そうだ。日本マット界から消えてなくなったはずの日韓問題が亡霊のようによみがえったのだ。

よみがえった日韓問題——。現在の格闘技界のルーツをたどれば、必ず戦後のプロレスに行き着く。かつてのプロレスは、敗戦に打ちひしがれた日本に活力を与える役割をはたしていた。しかし、皮肉にもその中心にいたレスラーは朝鮮半島出身の力道山（キム・シルラク）だった。彼の存命中、その〝出自〟に触れることは決して許されなかった。

それはまた、極真会館を創設した大山倍達も同様だった。そのタブーには哀しさがつきまとっていた。

しかし、現在の格闘技界では、かつてタブー視された〝出自〟の部分に批判を集中させるような〝逆転現象〟が起きている。そのタブーは攻撃的に、そして無造作に扱われている。

かつてのマット界がそうであったように、国籍の違いを隠そうとしても本質には近づけないし、秋山問題のネット上の書き込みのように、国籍の違いだけで見たところで本質から大きく離れてしまう。

国が違えば、立場や考え方、文化、倫理性、価値観が違うのは当然である。知れば知るほど、溝の深さを味わうことになるのかもしれない。しかし、それでも我々はこの国をもっと深く知る必要がある。格闘激国、韓国とは何か？　それは日本マット界の合わせ鏡でもあるのだ。



意義とそれに伴なう内容をまざまざと見せつけ、早くも伝説のイベントとなりつつある昨年末の『やれんのか！大晦日！２００７』。その総決算ともいえるドキュメント番組『ドキュメンタリーやれんのか！　完結編』が、さる2月2日、『スカパー！』にてＰＰＶ放送された。

〝煽りＶ〟というジャンルを確立させた男・佐藤大輔の監修によって作られたこの映像作品は、氏がＰＲＩＤＥにおいて表現し続けてきた「観客を煽る」というテーマとはまた味わいの違う、きわめてエモーショナルな内容となっている。

前半部分はいわば〝戦前編〟。各選手に密着し、日常とインタビューからそれぞれのドラマを描き出してゆく構成である。映像はほとんどが『やれんのか！』当日に流された煽りＶと同じ取材からのものだが、より日常的な風景や、より心情的な発言をあえて抜き出すことによって、選手それぞれのキャラクターやＰＲＩＤＥへの想いを浮き彫りにしてゆく。大衆食堂でラーメンをすすりながら「ヒモになったことあります？」とつぶやく川尻達也や、部屋でボーっとしていた半年間を事細かに語る石田光洋の言葉はただひたすらに重いものであったし、ストレートに『ＨＥＲＯ'Ｓ』とＫ−１を非難した青木達也と桜井〝マッハ〟速人からは、苛立ちとともに「なにくそ」「やってやる」の気概が見て取れた。どれも格好の良い姿ではないが、まさしくこれこそが〝闘いの場〟を奪われたＰＲＩＤＥ戦士たちの現実であったのだ。

後半はそのまま〝当日編〟となっている。これまであまりフィーチャーされることのなかったバックステージ風景をふんだんに折り込み、そこから生まれる試合前後のヒューマンドラマを絡めながらの当



『ドキュメンタリー
やれんのか! 完結編』の
主人公は魔王だった――!!

黒き魔王の人間像
秋山成勲

まさかのノーコンテスト裁定によって、ますます広がる魔王の波紋――!!　やはり、この男の物語はただでは進まないのである。そしてあの大晦日の裏側にも極上の物語はあった。“魔王ライター”田中太陽の秋山成勲テキスト第5弾!!

文／田中太陽　撮影／乾晋也

日リプレイ。敗戦後にキレまくるギルバート・メレンデスや、すべてが終わったあとに控室で泣きだしてしまう青木など、ここにも感情を揺さぶられる映像が盛りだくさんである。会場で一体感を得られた人も、テレビで試合だけ観て満足した人も、この番組とともに『やれんのか!』、ひいてはPRIDEを振り返ることで、また新たな感動を発見できるだろう。

と、おおまかな番組の流れはこのような感じなのだが、このドキュメンタリーには、本筋とまったく交わらないアナザーストーリーが一つ存在している。すべてのドラマがPRIDEや〝感動〟といった共通のテーマに帰納してゆく中、一つの物語だけが延々と別ベクトルで展開されていたのである。もうおわかりかもしれないが、それは『やれんのか!』の裏主人公、〝魔王〟こと秋山成勲の物語だ。

そもそもがFEGからの派遣選手であるうえ、PRIDEに対する思い入れをまったく持たない秋山というキャラクターを「一夜限りの夢祭り」「最期のPRIDE」「集結セヨ」といった感動的なテーマに絡めてゆくのは無理がある。しかし、同じような立場で参戦したチェ・ホンマンとは違い、秋山の物語はあまりに深く、重く、そして黒すぎた。「登場人物の一人」として軽く処理できる存在ではないのである。さらに当日残したインパクトも絶大とあっては、秋山に触れぬまま『やれんのか!』を振り返ることなどできるはずもない。ならば秋山の扱いをどうすべきか?

魔王の〝黒き物語〟と、本筋であるべき〝感動の物語〟は、はたして両立しうるのだろうか?

これは一つの命題であり、感動のドキュメンタリーを成立させるための焦点でもあった。

たとえば秋山を完全な悪役に据え、三崎という〝勇者〟に討伐されてめでたしめでたしという流れならば成り立つだろう。というより、感動的なドキュメンタリーに仕上げるならばほかに方法がないようにも思える。しかしながら鬼才・佐藤大輔は、秋山の重すぎる物語に真っ向から取り組んでキッチリと成立させてきた。そして『やれんのか!』本編と秋山の物語を横並びで進行させ、二つの物語を同時に描ききったのである!

これには正直、度肝を抜かれた。

その手法とは、秋山の「黒」「悪」「魔王」といったパブリックイメージからは少し離れた〝人間像〟にスポットを当て、そこから染み出る秋山なりのドラマと〝闘う理由〟を真正面から描き出すというものであった。そして試みは成功した。秋山一人の物語が、『やれんのか!』全体の物語と互角に渡り合ったのである。その軌跡、いやさ奇跡をここで振り返ってみたい。

まずは番組初登場時のインタビューから。ここで秋山は『やれんのか!』というイベントタイトルの印象について尋ねられるも、「言っていいんですか?」「いや、あんまピンとこなかったですね」と否定的な回答。ここで秋山は、早くもドキュメンタリーの本筋から外れることとなる。

いうまでもなく「やれんのか!」とはアントニオ猪木の名ゼリフであり、PRIDEにおいてはドン・フライの煽りVによく使われていた言葉である。ナレーター立木文彦の名調子が好評を得たが、次第に他の場面で用いられることも増えていったこのフレーズは、いつしかPRIDEを語るうえで外せないタームになっていった。「やれんのかって言われたんですけど、



大晦日屈指の名シーン!! 興奮して説教する三崎を完全無視する魔王。この時点で反則の疑いが頭をもたげていたという。マイクを握ってそれを指摘したら、いったいどうなっていたのか!?

息子が打ち倒されると、会場が包む大歓声に秋山の母は目を閉じて耐えた

やるに決まってるでしょう」と吠えた川尻にせよ、「やれんのか！」を〝号令〟としてイベントを盛り上げようとした青木にせよ、本筋の主人公たちはみな「やれんのか！」というフレーズの背景を理解している。その言霊をのっけから否定し、イベントにおける〝異物〟であることを自ら宣言した秋山の物語が、ここでは意外な方向へと転がってゆくのである。

その後も淡々と受け答えを続ける秋山。冷静さと謙虚さを指摘されれば「ワーッと吹いたり言ってる人を見てかっこいいと思わなかったんですよ」と、これまた謙虚で冷静な答えを返す。リングの外で感情を見せない秋山の姿勢は、これまで〝怪物性〟の演出に一役買っていた感があるが、この回答はそれに対するアンチテーゼになっていないだろうか？

魔王のイメージとはまた違った秋山の〝人間像〟が、このあたりから滲み出し始める。

「必ず結果を残していかなければいけない状況の中で育ったっていうのは、そういうふうに勝負の結果に飢えてるぶん、凄く逆に反面、勝負に怯えてるかもわからないですね。結果にも」

これは同じインタビューからの秋山の台詞で、煽りVにもそのまま使われたものである。しかしなぜか、煽りVとこのドキュメンタリーではまったく違った印象を受けるのだ。したたるクリームや凄惨な試合映像を用い、秋山の持つ〝黒〟と〝恐怖〟を演出した煽りVからは、結果にしか意義を見出せない〝格闘モンスター〟の恐るべき姿が。秋山の誠実な面を強調し、その人間像に迫ったドキュメンタリーからは、結果でしか評価されなかった悲しい生き様が。どちらが真で偽というものでもないだろう。魔王は魔王であり、人は人なのだ。

「やっぱ勝たんと意味がないなとか。勝って、勝って、勝てば人気が出るんじゃないかとか」

そう秋山は続ける。このいびつな価値観の根底には、やはり柔道家時代に受けた差別経験があるのかもしれない。

在日コリアンとして日本で生まれ育った秋山は、幼少時より柔道に没頭。卒業後には韓国へ渡り、市役所に勤めながらオリンピックを目指す道を選ぶ。その背景には、在日でありながら韓国柔道界で活躍した父の存在がある。韓国で放映された秋山のドキュメンタリー番組で、彼の父は「韓国には日本の柔道と違う柔道がある。そこで韓国式の柔道を習得すれば、日本でも韓国でも強い選手になれると思って勧めた」とコメントしている。とにかく秋山は成功を夢見て海を渡り、そこで初めて「秋成勲（チュ・ソンフン）」と名乗ったのである。

しかし韓国で彼を待っていたのは、同胞たちからの在日差別と学閥差別だった。理不尽な判定負けが相次いだ。とうとう秋山は韓国での成功をあきらめ、失意のもとに日本へ舞い戻ったのである。

その後、秋山は日本に帰化して柔道を続け、ついには釜山アジア大会において〝日本人〟として優勝する。しかしこのとき「柔道のために日本国籍を取った」と発言したことにより、逆に韓国マスコミから大バッシングを受けてしまう。拒絶されてもなお慕る秋山の〝韓国への想い〟と、帰化理由に神経質な韓国民の思想。両者の溝は永遠に埋まらないかと思われたが、秋山がプロ格闘家に転進すると、状況は劇的に変わり始める。

黒き魔王の人間像 秋山成勲

血と骨の格闘激国

圧倒的強さをもって勝ち続ける秋山と、折りしもMMAブームに沸く韓国。国籍も差別も関係ない〝実力の世界〟に飛び込んだ秋山を、皮肉なことに韓国民が英雄視し始めたのである。あれほど望んだ〝韓国での成功〟が、すべてをあきらめた秋山のもとへ突然やってきたのだ。日本でつかみかけた栄光は〝黒の事件〟によって手放してしまったが、韓国マスコミは「在日だから叩かれている」と秋山を支持し続けた。日本側はむろん「反則だから叩いている」「きちんとした〝みそぎ〟がないから納得できない」と反論する。

そうするうちに「韓国では英雄だが日本では黒魔王」という現在の秋山像ができあがり、その存在はもはや〝日韓問題の象徴〟とすらいえるものになってゆく。

こうして振り返ってみると、秋山の格闘人生は常に〝結果以外の要素〟によって左右され、それを結果で（言い換えれば〝力〟で）強引に塗り潰すことの繰り返しであったように思える。圧倒的な格闘能力と精神力を持ちながら、その使い方をどこか間違えてしまっているようにしか見えないのだ。そんな秋山の悲しすぎる〝黒の道程〟が、このインタビューからは浮かび上がってくるようであった。

インタビューのあとも、番組は秋山の〝人間像〟を追い続ける。ストイックな練習風景や真摯な言動を拾った映像からは、秋山の知られざる一面が立ちのぼってくるようだ。同じ人物を〝怪物〟として、〝悪〟として表現しつくしてみせた煽りVとはまったく別の視線である。

と、ここまでの〝戦前編〟では秋山の人間面が描写されるにとどまったが、ここからの〝当日編〟において、カメラははっきりと秋山寄りの視線を持ち始める。なにしろ後半のキモであるバックステージ映像集において、最もフィーチャーされているのはほかでもない秋山なのだ。裏主人公・秋山成勲の物語は、ここから一気に収束へと向かい始める。

クライマックスは、むろん試合の映像である。花道の手前から会場を映し出し、視聴者に秋山の入場を疑似体験させるカットの迫力は圧巻の一言だ。ここから見えるのは、想像を絶する数の〝敵〟。この風景を乗り越えて、秋山はリングまで歩いたのだ。これだけの罵声に包まれながら、秋山は闘ったのだ。こんな映像を見せられてしまっては、もう秋山に感情移入せずにはいられない！

やがてゴングが鳴らされる。この日もっとも観客をエキサイトさせた、今後も語り継がれてゆくであろう〝伝説の一戦〟のリプレイである。ここでたびたび画面に映し出されるのは、なんと秋山の母親と清原和博という〝秋山応援団〟。この二人の目線を取り入れたことにより、カメラはもはや完全に秋山の側に立った。多くのファンにとっては「三崎和雄の英雄的大勝利」「勧善懲悪」という物語であったこの試合を、いま佐藤大輔が〝秋山側〟から振り返らんとしている。

嵐のようなブーイングの中、一人秋山コールを叫び続ける母親。2万人相手に闘う息子を気丈に応援するその姿は正直、涙を誘う。秋山を産み、秋山の人生とともに生きたこの人は、秋山の味わった苦痛と栄光をすべて共有してきた人なのだ。やがて息子が打ち倒されると、会場を包む大歓声に彼女は目を閉じて耐えた。そして三崎の勝利に沸く会場の熱気を、今度は鬼のごとき形相でこらえた。何かを言いたそうな表情でもあった。この人はいま息子とともに闘い、息子とともに敗れたのだ。



あきやま・よしひろ■1975年7月29日、大阪出身。パリ国際柔道大会81キロ優勝など、輝かしい実績を引っさげてMMAに転向。『HERO'S』ライトヘビー級王者に就くが、桜庭和志戦の反則行為よりその暗黒面が明らかに。得体の知れない恐怖の象徴として〝魔王〟と呼ばれている。177cm、84.5kg。

対して清原は、終始エキサイトしながらの観戦。「アキ頑張れー！」と気さくな檄を飛ばすその姿は、秋山の強さを信じきり、その勝利をまるで疑っていないかのように見えた。秋山がダウンを奪い、そのままパウンドを打っていった場面では「いけぇー！　ブッ殺せ！」と子どものようにはしゃぐが、逆に秋山が倒されると「まさか？」というような表情。ゴングの瞬間にはまさに呆然、といった様子であった。その後、三崎のマイクを怒りの表情で聞き流すと、退場してくる秋山の胸を叩きながら「気にすんな！」を連呼。「惜しかったな」でも「残念だったな」でもなく「気にすんな」とはどういう意図か？　「あんな奴の言うことを気にすんな」あるいは「ひどいことを言われたけど気にすんな」と解釈して差し支えないだろう。大観衆の熱狂とは裏腹に、画面はもはや三崎の勝利を「何か間違ったもの」として映し出していた。

番組はこの後も『やれんのか！』本編を追い続けるが、秋山の物語はひとまず終幕。そして本筋のほうも大団円を迎えるに至るや、ここに「二つの物語を両立させる」という偉業は完成されたのである。音楽とスタッフロールが流れ、この素晴らしき映像作品もいよいよ完結。と思いきや最後の最後、思わぬ仕掛けがまだ残されていた。

年明け後、フィニッシュとなった三崎の蹴りを「反則である」と秋山が提訴し、試合結果がノーコンテストに変更されたことは周知のとおり。さる1月23日に行なわれたこの〝ノーコンテスト会見〟の映像がエンディング後にはさまれたのち、青木真也の父が「余分なことすんな！」と叫ぶ映像（実際は試合中の息子に向けて叫んだセリフであり、秋山とは無関係）が入ってこのドキュメンタリーは終わる。

この映像はストレートな秋山批判、あるいは秋山に寄りすぎた本編とのバランスをとるために入れたものとして解釈することもできるが、はたしてそのとおりだろうか。筆者にはこれが、佐藤大輔のちょっとした愚痴に見えたのである。すなわち秋山をある種のアンチヒーローとして描ききった作家からの、イメージに反する行動をとって作品にミソをつけた主人公への不満として。裁定そのものの是非を問うというよりも、演者に対する舞台演出家の〝ダメ出し〟。筆者にはそのようにしか思えなかったのだが、いかがだろうか。

ドキュメンタリー映像として秋山をこのように描写すること、あるいは本稿の解釈それ自体に反感を覚える人も多いだろう。秋山の罪がいまだに赦されていない以上、それは当然のことである。しかしながら大晦日をおおいに盛り上げ、映像作品の裏主人公となるに至った秋山の〝存在力〟は、いまや無視できない域にまで来てしまっていることもまた事実だ。魔王から目をそらすのではなく、正面から向き合う。それがこの大河ドラマを受信するうえでの、もっとも正しい姿勢だと思うのだ。


血と骨の
格闘激国



韓国格闘技界と
憂鬱を背負う英雄の真実!!

孤独の大巨人
チェ・ホンマン

218センチ、160キロ。類い希なる巨体と才能を誇る韓国の国民的英雄には、選ばれた男がゆえの孤独と不安を抱えていた。そこには天下壮士でもなくK-1ファイターでもなく、人間チェ・ホンマンの姿があったのである。知られざるエピソードで綴るチェ・ホンマンの光と影!!

文／大川義之　撮影／ユン・ヨギル

1月22日、本誌のインタビュー取材のため、韓国のホテルでチェ・ホンマンと初めて対面した。非常に明るくて社交的な性格と聞いていたホンマンだったが、インタビュー時の彼は言葉数も少なく、不機嫌そうに見えるも、そこはさすがプロ。ヒョードルにエグイ角度で曲げられた右腕が痛いにもかかわらず、「青木真也を持ち上げてほしい」という本誌の無理な要求にもイヤな顔一つせずに応じて、青木とのツーショットでも本来の茶目っ気を見せてくれた。しかし、それ以外のホンマンは表情に乏しく、かなり精神的に参っているように見えた。

華やかな舞台に立ち、文字どおり韓国の〝国民的スター〟であるチェ・ホンマンは、有名であるだけに、常にその代償を払わされる。一年間に数億円稼ぐとも言われるその一方で、常人には経験できないさまざまな悩みを抱えている。

ここでは巨人であり、大スターでもあるという特異な存在であるホンマンの〝栄光の裏側〟に焦点を当ててみたい。

芸能活動への批判

本誌でホンマンにインタビューした際、韓国でCDを発売し、テレビで歌手デビューしたことを質問した。

しかし、その質問をした途端、ホンマンの表情は一瞬にしてこわばり、聞き取れないような小声で質問に短く答えただけだった。そこには〝その話題には触れてくれるな〟という明らかな意思が感じられたため、それ以上聞くことは避けた。

それもそのはず。あとでわかったことだが、本誌がインタビューしたのはホンマンが韓国のテレビに出演した直後であり、世間ではホンマンの芸能活動に対する賛否両論が巻き起こっていたところだったのだ。

たとえば、08年1月20日付の『スポーツ朝鮮』は「ホンマンは格闘技の技術も充分ではないのに、歌手に〝浮気〟していて、戦闘能力を発揮できずにいる」と批判している。確かにK－1ワールドGPの前にレコーディングしていたホンマンにも非はあるが、ツッコミどころはそこではなく、デビュー曲のタイトルが『自尊心』（プライド）ってところなのでは⁉

本誌のインタビュー終了後に、ホンマンが自身のマネージャーに「歌手デビューしたというけど、ただ一回だけやってみただけなのに、こんなにいろいろ言われるなんて……」と漏らしていたのは、彼の本心だっただろう。

ホンマンが芸能活動で批判されたのは今回だけではない。昨年3月にマイティ・モーに格闘人生初のKO負けを喫すると、韓国のメディアやファンは一斉にホンマンの芸能活動を批判した。

「試合が近いのに、たびたびバラエティ番組に出演していて練習不足は明らか。ファイターが肝心の試合に敗れ、格闘家としての真骨頂を見せられなければ、ファンからそっぽを向かれる」（07年3月14日付『朝鮮日報』）

「引退したら、芸能界に入る」とか「子どものころの夢はダンス歌手」、「K－1に転向したのはFEGの自分に対するスターマーケティングに心惹かれたから」と公言するホンマンは、現在も格闘家としてのレギュラー番組を持つなど、韓国では週イチのテレビ出演をこなしている。勝っているうちはよかったが、負けてしまうとその反動も大きい。



ヒョードルに敗れはしたものの、ホンマンはテイクダウンを試みるヒョードルを二度も押し潰した。さすがシルムの横綱!! 本格的にMMAに参入すれば……という幻想をおおいにかき立ててくれた。事実より幻想のほうがごはんを何杯もお代わりできる層にとってはたまらないイツザイだ。

大きいがゆえの悲哀

またインタビューでは物憂げな眼で「外に出ると人が集まってきてしまうので、あんまり家から出ない」という引きこもり気味状態であることを告白していたが、外に出ればプライベートがまったくない状況が半永久的に続くのはかなりの苦痛だろう。

2月1日韓国メディアが報じた記事によると、つい最近チェ・ホンマンは付き合っていた女性タレントと別れてしまっている。

「自分の体格が大きすぎるので、すぐ他人の目についてしまって、一緒に外に出たりできなかったし、結局別れるしかなかった」（08年2月1日付『スポーツ朝鮮』）

普通の有名人なら、変装して気づかれないようにすることはできるが、ホンマンの場合、身体を見ればばれてしまうので変装の意味はない。そして自分の身体のことが理由で愛する人と別れるのは、精神的にかなりキツイのではないだろうか。

ただ、こうした問題やホンマンにつきまとう騒動は、決して一過性のものとは思えない。物理的に目立たざるをえない彼は、身体が人並み外れて大きくなってから、常に奇異を感じる目にさらされてきたはずだ。ホンマンが来日した当初、「日本はいいです。自分が何者かを知る人があまりいないし、韓国人に比べて、他人のことに干渉しない」とコメントしていたが、そんな状況は長く続かなかった。有名になるにつれて、日本で暮らすことも徐々に窮屈になっていく。

タレントとの熱愛報道をされることもあれば、「一度スーパーに買い物に行って、主婦のおばさんと話を交わしただけなのに、写真を撮られ『チェ・ホンマン、既婚女性と熱愛デート』という内容で記事にされた」（06年8月8日付『朝鮮日報』）というバカバカしい報道もある。

しかし、このようなんでもない日本の飛ばし記事でさえ、韓国では広く報道されて大きく話題になるのだから、いちいち否定しなきゃならないホンマンとしてはたまったものではない。



ボビー・オロゴン戦の入場でゴキゲンなダンスと見事なロパクを披露していたホンマン。この明るさは韓国世論の前に埋もれてしまうんでしょうか? ガンバレ、ホンマン!!

試合内容への過剰な期待

またホンマンは韓国で〝国民的スター〟であるため、常に国民の大半が彼の試合を観て応援している。逆に言えば、これは全国民の期待を背負わされているということでもある。常に国の威信を背負っているため、ホンマンが微妙な判定で勝ってしまった場合は〝本当は負けていたのに過剰に保護されて勝ちになった〟と受け取ったファンやメディアから厳しく批判される。

通常の韓国人選手にはどんな手を使っても勝利が要求されるのに、ホンマンの場合は、すべての人を納得させたうえで試合に勝たなくてはならないのだ。

孤独の大巨人 チェ・ホンマン

血と骨の格闘激国

近づく軍入隊。ホンマンの憂鬱はますます助長されていく——

とくに韓国で行なわれたマイティ・モー戦（07年9月29日）でのローブロー疑惑、セーム・シュルト戦の判定（06年6月3日）は、ホンマンのホームグラウンドであるにもかかわらず辛辣な批判が多かった。この二試合はどちらも判定やジャッジの是非が問われるべきなのに、ホンマン自身に批判の矛先が向けられた。不思議な話だが、それが韓国においてホンマンが浴びている強風なのである。

末端肥大症と脳腫瘍疑惑

そして、ホンマンに対する最も激しいバッシングは、07年6月3日『Dynamite!! USA』への出場を禁止されたことに端を発する、末端肥大症による脳腫瘍の問題である。

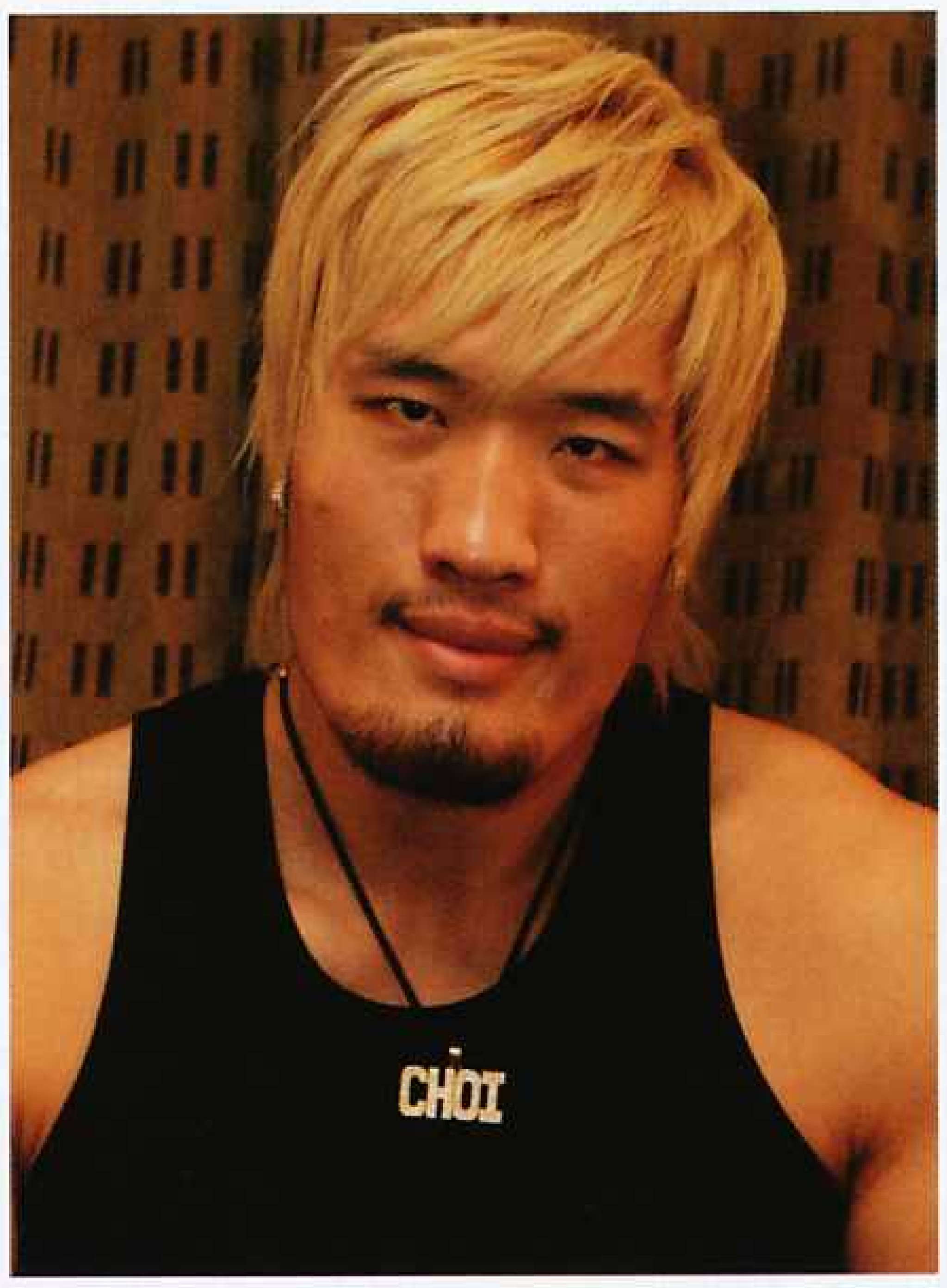
末端肥大症とは、成長期が終わっても成長ホルモンが過渡に分泌され、身体の尖端（末端）が異常な大きさになる症状（病気）で、成長ホルモンを管理する「脳下垂体」に成長ホルモンを分泌し続ける『腫瘍』ができ、これを放置しておくと、突然死を招く恐れのある致命的な病気である。FEG側はUSA大会の出場は断念したものの「ホンマンの腫瘍は活性化されてないので、試合をすること自体にはなんの問題もない」と主張し、アメリカ以外の大会では出場を許可している。

韓国内では国営のテレビ局KBSが、こうした問題を独自に調査して大きな反響を呼んだ。KBSの報道によると、ホンマンがFEG側に提出した脳写真は捏造された疑いがあること、そして大韓民国医学界に取材して「ホンマンの脳腫瘍はまだ成長を続けているのではないか。もし手術せずに選手生活を継続すれば生命に危険を及ぼす」ことを指摘している。これを根拠に番組は「FEGは選手の健康よりも興行を優先している」と批判し、「腫瘍がありつつも出場を続けるホンマンにも問題がある」と主張している。

この番組は大反響を呼び看過できなくなったため、ホンマン側は公式声明を発表せざるえなくなった。

「番組を観たあと、悔しさと怒りで一睡もできなかった。いま自分のコンディションは最高にいいのに、どうしてその勢いを止めようとするのかわからない。自分も人間なので健康に暮らしたい。お金よりも健康が大切だ。数年後に死ぬ人がK―1をできるのか。その可能性が0・01パーセントでもあれば闘わない。心配してくれるのはありがたいが、悪意をもって私の姿を歪曲している。もう韓国を離れて外国で暮らしたい……」（07年8月10日付『中央日報』）

こうしてテレビ局の報道内容を完全否定し、国外へ逃亡したい気持ちまで吐露したが、現在でもホンマンへの疑いは晴れていない。



チェ・ホンマン■1980年10月30日、韓国出身。韓国相撲シルムの横綱として国民的英雄になるも、所属チームの経済的な解散によってK-1へ転向。韓国では抜群の知名度を誇り、韓国の格闘技マーケットの隆盛に大きな役割をはたした。練習は大阪の正道会館で行なっており日本語はかなり達者。バラエティ番組にもたびたび出演している。218cm、160kg。

しかし、KBSが純粋に選手の健康を守る正義感から、この番組を制作したのかについては、大きな疑問もある。なぜならKBSは韓国内でシルム（韓国相撲）の独占中継権を持っており、シルムの看板選手をK―1に奪われた恨みを持っているフシがあるのだ。ホンマンがシルムからK―1に移籍を決めたのは、シルム界の経営難によって職を失なったためであって、決してホンマンだけの責任ではない。

もしホンマンの症状に問題ないのなら、この報道も逆恨みと言うほかない。

軍入隊の問題


ホンマンの憂鬱を助長する問題はまだある。彼は来年の初めに軍隊へ入隊しなければならない。日本人にはなかなか想像しづらいことだが、2年間の自由を奪われることは相当につらいことであり、多くの韓国人男性は入隊前に「憂鬱になって何もしたくなくなって塞ぎ込むか、どこかに逃げ出したくてたまらなくなる」のだという。軍入隊をギリギリまで延長してきたホンマンは現在27歳。スポーツ選手として最も活躍できる時期であり、経済的にも最も稼げる時期に活動を休止しなければならないのだ。

オリンピックでメダルを獲った選手や世界大会で優勝した選手たちは〝国威宣揚〟したという名誉のもとに、兵役が免除される。しかし、プロスポーツの世界で活躍するホンマンの場合、どんなに頑張ってもその手の救済措置の対象にはならない。ホンマンのように、常に韓国の威信を背負って闘い、会場やテレビを通してファンを熱狂させ、夢を与える男が、兵役免除の審議の対象にすらなりえないのである。

国のために働いていても、目に見えるかたちで評価されることはない。ホンマンの憂鬱はいかほどであろうか。そっとしておいてほしくても、周囲がそれを許さない。視聴率のために利用する者もいれば、やっかみや逆恨みから足を引っぱろうとする者もいる。

FEGが彼に求める商品価値の何割かが〝大きいこと〟にあることは否定できないし、ホンマン自身も身体的特徴によって現在の地位が保障されているのは事実である。闘えば闘うほど、名誉や富を手にする半面、自由を失ない、私人であることを許されなくなっていくホンマン。常人には経験することのない特殊な情況を突き抜けてこそ、本当のプロなのかもしれないが、チェ・ホンマンの有名税は決して安いものではない。

ヒョードル戦で見せたホンマンの格闘家としての潜在能力と同様に、ホンマンにはまだまだ大きな可能性が秘められている。はたして今後、彼がどのようなかたちで自分をとりまく外部の事象と内面との決着をつけていくのか。リング外での闘いに負けなくなったホンマンは、さらに化け物じみた凄みと深みを進化していくのではないだろうか。



「もうちょっとでヒョードルに勝てたのに!!」（青木真也）

「……………（無言で複雑な顔）」（ホンマン）

デコボコ大連立記念（?）対談

大男×バカサバイバー

やれました！　大男とバカ（サバイバー）のスペシャル対談が実現!!
『やれんのか！』とFEGのデコボコ大連立樹立を祝って（?）、
FEGサイドのチェ・ホンマンに会うべく“ミスターやれんのか！”青木真也が韓国入り!!
ホンマンのインタビュー中にず、ず、ずい〜っと乱入だい!!

聞き手／ジャン斉藤　撮影／ユン・ヨギル

血と骨の格闘激国

――ホンマン選手、まず昨年一年間を振り返っていただけますか？

ホンマン　試合にはたくさん出たんですけど、練習の面がちょっと足りなかったなという気がしますね。

――いまの韓国の格闘技マーケットはチェ・ホンマン選手一人が支えていると言っても過言ではありませんが、そのプレッシャーは感じますか？

ホンマン　以前は感じていましたが、マーケットの状況は以前よりはよくなっていると思います。

――今後も韓国の格闘技マーケットを引っぱっていくのは、自分だという自覚はありますか？

ホンマン　いいえ。ほかにももっといい選手が出てきて格闘技界が盛り上がっていくほうがいいですね。

――先日ホンマン選手は、韓国でCDデビューしたと聞きましたが、それもホンマン選手の人気があってのものだと思うんですけど。

ホンマン　（急に小声になって）……音楽的な活動が大事というよりは、いろんな人たちと親しくなる機会が増えたのが自分にとってよかったですね。

――歌うのは好きですか？

ホンマン　歌よりは、ダンスのほうが好きです（ニッコリ）。

――そういえば、大晦日の『やれんのか！』ではいつものダンスは披露しませんでしたね（笑）。

ホンマン　そうですね。試合には楽しい気持ちで臨んだんですけどね……。

――試合には負けてしまいましたが、ヒョードルのテイクダウンを2度も防いだということで、むしろホンマン選手の潜在能力の高さを感じました。あの試合についてどう思ってますか？

ホンマン　とりあえず準備期間が短かったので、総合格闘技の充分な練習はできませんでした。そういう状態で試合に出たので、それはちょっと残念でしたね。もっと練習期間を長く取ってちゃんと準備すれば、とくに大きな問題はないと思います。

――つまり、ちゃんと練習すればヒョードルは怖くないと？

ホンマン　はい。彼は素晴らしい選手ですが、圧迫感とか怖さは全然感じませんでした。

――自分のことをテイクダウンできそうな選手って心当たりはいます？

ホンマン　うーん。いないと思います。

――なるほど（笑）。ホンマン選手は今後、韓国格闘技界がどうなると思いますか？

ホンマン　まず今年一年がとても大事でしょう。今年がどうなるかによって、だいぶ変わってくると思います。

【ここで青木真也が登場!!】

青木　ワオ!!（ホンマンを見上げて）おお～!!　デカイ！

ホンマン　フッフッフッ！

――青木さんはチェ・ホンマン選手の足のサイズに興味があるんですよね？

青木　そうなんですよ。ホンマン選手って何センチあるんですか？

ホンマン　サンジュウロクデス（日本語で）。

青木　すげぇ!!（笑）。ボクは30センチあるんですけど、いままで足のサイズでは誰にも負けたことなかったのに！完敗ですね。

――足が大きくて不便なこととかありますか？

ホンマン　やはり買いたいものが買えないので、それは不便ですね。靴はまとめ買いするんですよ。一回でまとめて買っちゃう。

青木　なるほど～。得することは、試合で投げられないようにするときに踏ん張りがきくことですね。でも、ヒールホールドは取られやすいです。（ホンマンの足を指さしながら）でも、ここまで大きいと、たぶん取られないでしょう。ヒールホールド、知ってますか？

ホンマン　はい。知ってますよ（笑）。

青木　じゃあ、ボクのこと知ってますか？

ホンマン　はい。大晦日に同じ会場で試合をしてたでしょ？

青木　そうです、そうです。韓国のチョン・ブギョンと闘いました。同じ韓国人の彼が負けて悔しかったんでしょ？

ホンマン　いえいえ。とってもおもしろい試合でしたね。

青木　大人の発言ですね～。なんだか人生の余裕を感じますよ。僕にはないものを感じますね。ククククク。

――逆に青木さんはホンマン選手の試合はどう観ましたか？

青木　いや～、途中まで「あれれ～？　勝っちゃうんじゃないかな～？」と思って観てましたよ。もうゲラゲラ大笑いしながら観てました！

――ちょっと青木さん、あなた“PRIDEサイド”でしょ（笑）。

青木　（無視して）もうちょっとでヒョードルに勝てたのになあ。



我らがワオ木さんがかぶっているのは、韓国で絶賛ブーム中のかぶり物らしい（現地カメラマンが持ってきた）。リクエストに応じるワオ木さんはさすがですが、それを見やるホンマンの微妙な表情がたまらない。こんな目で他人から見つめられることってそうそうない。

ホンマン　……（無言で複雑な顔をする）。

青木　そんなに悲しまないでくださいよ!!（ポンポンとホンマンの肩を叩く）。

――そういえば、青木選手はチェ・ホンマン選手と闘いたいって言ってましたよね？

青木　ヤベッ……。

ホンマン　アア、ホントウデスカ？（日本語で）。

青木　そ、それは半分ファッションで言ってますから！　ファッション、ファッション!!

ホンマン　フフフフフ。

青木　そんなことより!!　ホンマン選手は日本語が上手ですよね。最近覚えた日本語ってなんですか？

ホンマン　うーん……ムフフフ（一人で含み笑いをする）。

青木　なんですか、その笑いは!?（笑）。

ホンマン　（照れながら）最近はずっと韓国にいて韓国語をしゃべっているので日本語が出てきませんね。

――青木さんは何か覚えた韓国語はありますか？

青木　それはニダです。ニダ！　ニダ!!

ホンマン　ン？　ナンデスカ？（日本語で）

――日本語で「～です」という意味ですよ。しかし、何を言いだしてるんだ、この人は（笑）。

ホンマン　あ～、“ニダ”ですか（笑）。もっともっと勉強してください。

青木　ニダ！　カムサハムニダ!!（ありがとうございます）。ククククク。

【08年1月21日／ソウル市内・リベラホテルにて収録】


血と骨の
格闘激国



青木真也を追い詰めた
柔道五輪銀メダリストに迫る!!

韓流腕十字職人 チョン・ブギョン

韓国格闘技界の秘密兵器が本誌初登場!! 『やれんのか! 大晦日! 2007』の青木真也戦で一躍、脚光を浴びたチョン・ブギョンである。"MMA素人"だけに前評判は高くはなかったが、なるほど柔道五輪代表の身体能力、そして関節の切れ味はおそるべし。08年注目株ファイターの素顔に迫った!

聞き手／ジャン斉藤　撮影／ユン・ヨギル

——ブギョン選手ってずいぶんとオシャレですねぇ！　ファッションには気を使うほうなんですか？

ブギョン　（照れながら）いいえ。それほど気を使うタイプではないです。

——そうですか（笑）。じつはですね、日本では、『やれんのか！大晦日！２００７』の青木真也戦で強烈なインパクトを残したチョン・ブギョンとはいったい何者なのか？　という声があちこちから挙がっているんですよ。

ブギョン　本当ですか？（笑）。

——はい。日本にはブギョン選手の次の試合を楽しみにしているファンがけっこう多いんですよね。

ブギョン　それは嬉しいですね。いまはまだ寝技が中心の試合しかできませんが、いずれは打撃もできる穴のない選手になりたいと思ってますので、ファンの期待に早く応えたいですね。

——ブギョン選手はオリンピックに出場したりと、柔道でかなりの実績を収めていますが、またどうしてMMAに転向しようと思ったんですか？

ブギョン　自分は柔道でも寝技が得意なんですが、最近の韓国柔道界は〝退屈しない闘い〟というものが好まれており、自分の得意な技術を見せられる余地がなくなってきたんです。

——へえ〜。つまり、寝技師受難の時代なんですね。

ブギョン　でもMMAに転向すれば、寝技の技術を披露する機会が多くありそうですし、完全に新しい分野ではなく自分のやっていた柔道に近いところもあるじゃないですか。挑戦する価値は充分にあると判断したというわけです。

——MMAに転向したのはいつになるんですか？

ブギョン　昨年の10月まで柔道の試合に出ていましたから、だいたい11月の初めからですね。

——はあ。つい最近じゃないですか（笑）。

ブギョン　ええ。もともとの計画では今年の春頃にデビューするつもりで練習していましたが、大晦日のオファーがあったので急な話ですがやってみることにしました。

——大晦日はとてもデビュー戦とは思えない強さが見えました。もともとご自分にMMAの適応能力があると思っていましたか？

ブギョン　どうなんでしょう？　一つだけ言えることは、あの試合では、新しく学んだMMAの技術ではなく、柔道でやってきた技術を見せただけなんですね。試合の準備期間は短かく、充分な練習は確かにできていませんでした。ちゃんとしたパウンドの練習は一度もしたことがありません。打撃は本当に未熟な状態なんです。その中で使えるものといえば、寝技の技術ぐらいです。あの試合では柔道時代から反復練習してきたものが本能的に出たと言えますね。

——寝技が通用する自信は最初からあったんですか？

ブギョン　はい。そう思ってMMAに転向してきたんですけど、いざ練習になったら道衣を脱いで闘うため使えない技術も多いことに気づいたんです。それで一度は自信を失いかけたんですが、実際に柔術家たちと練習してみると、パワーは自分のほうが圧倒的にあったので、ある程度の技術は力でカバーすることができました。もともと自分の持っていた技術もある程度は通じたので、「これからテ

クニックを補っていけば大丈夫だろう」と思うようになりました。

—それは五輪銀メダリストの身体能力があってこそ可能なんでしょうね。

ブギョン　そういうことです。

—感銘を受けたMMAファイターがいれば教えてください。

ブギョン　軽量級ではJZ・カルバン選手ですね。彼は寝技も一流ですし、打撃も凄い。ほとんど弱点と言えるものは見当たりませんよね。あと青木選手の印象も強いです。韓国でも彼の動画はインターネット上でたくさん観られますし、DVDも出ています。実際に「身体も柔らかいし、凄い選手だなぁ」と思っていたんですよ。なので、まさか自分が闘うことになるとは思いもしませんでした。

—その青木選手を追い詰めた腕十字は、もちろんブギョン選手の必殺技なんですよね。

ブギョン　もちろんです。あれは自分が柔道時代に習得した技術なんです。とくに最初の腕十字は、あの状態から立たれた選手はいままで一人もいなかったんですけどね……。

あの腕十字の状態から、立たれたことはありませんでした

—へぇ〜！　そんなスペシャルな技だったんですか！

ブギョン　はい。青木選手が立ってきたときは凄くびっくりしました。かなり慌てたことで逃げられてしまいました……。柔術にも似たような技がありますけども、あの腕十字は柔道時代にいろんな選手と練習しながら身につけたオリジナルです。あそこからほかの技へつなぐ組み合わせは10通り近くあります。青木選手が立ち上がりさえしなかったら完全に極めることができましたし、そうでなくてもほかの技に移行できたんですけどね。

—もう一つ驚いたのは、あれだけ殴られて片目が塞がっても決してひるまないブギョン選手の姿勢ですね。

ブギョン　自分も一つの分野でやれるだけのことはやってきたという自負心を持っていますから。青木選手にはかなり殴



危ないっ!!　青木真也快勝のムードが漂っていた会場を凍りつかせた、ブギョンの腕十字!! 総合能力では青木にまったく劣るブギョンからすれば、狙いはこの腕十字一発。作戦は見事に成功、青木のペースを大きく乱した。

韓流腕十字職人 チョン・ブギョン

血と骨の格闘激国

られましたが、意識が飛ぶほどのものではなかったですし、絶対にタップするつもりはなかったです。もちろん打撃に対する恐怖心はありましたが、（ユン・）ドンシクさんが「殴られても気持ちを強く持ってれば大丈夫だ！　慌てなければいいんだ！」ってアドバイスしてくれたんですよ。だから、そういう気持ちで試合に臨みました。

——ユン選手とは柔道時代からかなり親しいんですよね。

ブギョン　はい。ドンシクさんは自分にとって兄貴みたいな存在です。

——ユン選手も寝技が強いですが、ブギョン選手とどっちが上なんですかね？

ブギョン　それは……聞いちゃダメですよ！（笑）。

——ああ、すいません（笑）。

ブギョン　ドンシクさんにはいろいろ教わっています。あの試合のあとも「2回目の腕十字でなぜ極められないんだ！」ってかなり怒られたんですよ（笑）。

——頭が上がらないんですねぇ。柔道家時代のつながりでいえば、秋山選手とはどんな関係だったんですか？

ブギョン　彼とは泰陵（テルン）選手村にいた頃から知っている仲ですよ。そこで一緒に練習したことも当然あります。ウェートトレーニングがめちゃくちゃ好きなヤツでしたね（笑）。

——そうなんですか（笑）。

ブギョン　普通の選手は練習を嫌がるものなんですけど、彼は違っていて、乱取りが終わったあとでも「トレーニングがこれで終わりってことはないでしょう」と言いながら楽しんでウェートトレーニングをしてました。練習に取り組む姿勢は積極的で、そして情熱的でしたね。

——柔道時代にユン選手も秋山選手も、韓国スポーツ界にはびこる学閥問題の影響を受けて、苦労されていたようですが……（出身大学によってオリンピックの代表選考や試合の判定に大きな影響を与える問題。韓国スポーツ界にはびこる差別問題である）。

ブギョン　……じつは、自分も被害者なのです。

——あ、そうだったんですか。ブギョン選手はオリンピックに出場しているから、学閥問題とはてっきり無縁かと思ってたんですが……。



チョン・ブギョン■1978年5月26日、韓国出身。00年シドニーオリンピック柔道60kg級韓国代表。決勝で野村忠宏に敗れ、銀メダル。昨年の10月に柔道を引退し、FEGコリアと契約。JZ.カルバンの代打として大晦日に青木真也と対戦した。現在はユン・ドンシクのもとでトレーニングに励む。171cm、70kg。

ブギョン　じつはアテネオリンピックも韓国代表としてほとんど出場権を手中にしていたのに、学閥問題のせいで負けにされて出場することはかないませんでした。自分もそんな目に遭っているので、ドンシクさんも秋山選手にももの凄く共感できる話ですね……。

——仮にそういう話がなかったら、ユン選手も秋山選手もブギョン選手もMMAに転向してなかったかもしれませんね。

ブギョン　そうですね。ああいうことがなかったら、自分はたぶん北京オリンピックまでは柔道界に残っていたでしょう。それとアテネオリンピックの韓国代表になって出場していい成績を収められていれば、あと少しだけ柔道の現役生活を続けて、早いうちに引退して指導者になっていたかもしれません。でも、現実は違っていました。不当な扱いをされたことで未練が生じてしまい、それを晴らそうと北京オリンピック代表を狙っていたんですが、韓国の柔道界の趨勢と自分があまりにも合っていなかったのでMMAに転向したんです。

——完全燃焼できていないという気持ちがあったんですね。

ブギョン　いやいや、いまはもう柔道界に対する未練はないですよ！　自分が柔道界にいたときには、柔道界が本当に大きな世界だと思っていたし、オリンピックがすべてだと思っていましたが、MMAに来てみると、プロの世界はアマチュアよりもはるかに大きな舞台でした。何かが違うと感じたんです。この世界での試合は、毎試合が世界大会のようであり、オリンピックみたいな感じなんです。ですから、つらくても厳しいトレーニングにも耐えられるし、こっちに来てよかったと思いますね。

——しかし、まさか当時一緒に練習していたあの二人（ユン・ドンシク、秋山成勲）がMMAでまた一緒になるとは思ってもみなかったんじゃないですか？

ブギョン　はい。こんなことは想像もできなかったことですよ（苦笑）。

——今日、お会いして感じたんですが、ブギョン選手って物静かな顔つきをしながら、なみなみならぬ闘志を内に秘めていると思いますね。

ブギョン　いやいや、柔道であれ、ボクシングであれ、レスリングであれ、MMAであれ、選手には内面に闘志を持っているから、つらい練習にも耐えられるんです。欲もなく、闘志もないヤツにつらい練習は耐えられませんよ。

——なるほど。ちなみに日本という国についてどう思いますか？

ブギョン　日本には1998年に柔道の試合で初めて行ってから、もう何度も行ってますけど、やはり先進国ですし、きれいな国だと思います。

——秋山選手の試合もそうですが、日韓戦というのは、野球でもサッカーでもいつも大きな話題になります。そのことについてはどう思いますか？

ブギョン　自分は日本のイベント会社と契約しているわけですから、どうしたって日本人と闘うっていうことは避けられないことだと思います。毎試合、相手が日本人の可能性もあるわけで、そこに必要以上に気を使っても疲れてしまいますからね。相手はただ一人の選手だ、と考えています。

——周囲にそういう見られ方をされるのは気になりませんか？

ブギョン　ええ。周りは熱狂したり、興奮したりしますけど、そういうことはべつに気にならないですね。自分はただ一生懸命頑張るだけです。

——わかりました。またあの腕十字を期待しています！

【08年1月21日／韓国ソウル市・リベラホテルにて収録】

血と骨の格闘激国

テレビと韓国格闘技

大衆化する現状を探る

聞き手／ジャン斉藤



韓国ケーブルテレビ『XTM』広報長

イ・ドクチェ

現在韓国では、多くの格闘技中継が放送されており、その充実ぶりは日本の格闘技ファンがうらやむほど。韓国内の団体はもちろんのこと、日本のFEG系興行やPRIDE系興行、パンクラス、アメリカはUFC（イギリス大会や過去の『TUF』シリーズも含む）を中心にして、過去にはポードッグにいたるまで!! 注目大会はすべてケーブルテレビで生中継されており、誰でも簡単に観ることができる。

今回取材した『XTM』は、現在FEGコリアに出資するメインスポンサー『CJメディア』という大企業の抱えるチャンネルの一つで、開局わずか数年のスポーツ専門チャンネルだ。この『XTM』は、数年前に韓国の国会で格闘技批判が持ち上がってK−1やPRIDEが地上波放送を失なったとき、批判を恐れず果敢にPRIDEと契約を結び、全大会を生中継することで国内随一のスポーツチャンネルにのし上がった。

また、PRIDEが身売りするわずか数か月前に、FEGに契約を切り替えるという〝神業〟を成し遂げた。恐ろしいほどの市場分析能力を持ったチャンネルでもある。今回は、そのテレビ局のブレーンであるイ・ドクチェ氏に取材を試みた。

――まず韓国格闘技界の現状を教えてください。

「韓国ではよりいっそう盛り上がってきています。それは韓国の選手が頑張っているからでしょう。チェ・ホンマン選手やユン・ドンシク選手などの活躍もあって、格闘技に興味を持つ人たちが増えているんです。それに韓国ではテレビを通して格闘技を目にする機会が凄く多いんですよ」

――韓国ではUFCも放送しているそうですが、そんなに頻繁に格闘技番組が放映されているんですか?

「もちろんサッカーや野球のように国民的スポーツとは言えませんが、以前は一部のマニアたちだけが観るコンテンツでした。しかし、いまは大衆化していますし、とくにK−1は老若男女すべての人たちが観るコンテンツになっています。格闘技といえばK−1を連想するほどになっていますね」

――韓国ではケーブルテレビの発達が、格闘技を一般大衆の娯楽として定着させたと言えるんでしょうか?

「そうなりますね。じつは韓国でも格闘技の地上波放送は難しい状況にあります。しかし、韓国ではケーブルテレビが開始されて12年ほど経っており、地上波を視聴できる世帯の中で、約80パーセント以上の世帯がケーブルテレビの視聴が可能なんです。具体的にいうと、地上波視聴世帯が1800万世帯だとすると、ケーブルテレビ視聴可能な世帯はだいたい1450万世帯近くあるのです（※韓国の人口は4800万人）。ですから、現在ではケーブルテレビのコンテンツが地上波の視聴率のほうをどんどん食っているような現状なんですね」

――ケーブルテレビによって格闘技の認知度は上がっているということですね。

「会場観戦より、テレビを通して格闘技を観ている人のほうが多いでしょう。というのは、韓国のケーブルテレビの料金は非常に格安。たとえば、110チャンネル以上も観ることができて、日本円で月700円ぐらいしかかかりませんからね」

――それは安いですね〜!

「だから、どうしても会場観戦よりも、テレビで観る人のほうが多いんですよ。昨

エンターテインメント的要素を除くと、誰も観なくなる恐れがあります

年の『やれんのか！』でのチェ・ホンマンvsヒョードル戦も14パーセントの視聴率を記録（占有率は47・3パーセント）しました。これは視聴率の対象となるケーブルチャンネルおよび、地上波放映を含めた上での数字です」

——それは相当な数字ですね。

「チェ・ホンマン選手の場合は、シルム（韓国相撲）のときから国民的スターでした。基本的に他局のスポーツニュースでも、ホンマン選手のことが報道されますし、もちろんすべての新聞が彼について記事を書きます。私たちのテレビネットワークが宣伝しなくても、チェ・ホンマン選手の試合がいつあるのか、すべての国民が自動的にわかるような状況です」

——今後の韓国格闘技界はどうなっていくでしょう。

「それについて、私どもは肯定的に考えています。なぜなら、韓国には総合格闘技で活躍できる選手が潜在的に多くいるからです。韓国は柔道、レスリング、テコンドーなどが非常に強い国です。オリンピックでメダルを獲得した多くの選手が、いずれタイミングさえ合えばK-1の舞台に上がってくるでしょう。さらに私たちも韓国の選手がK-1に出場できるように、テレビの番組で『K-1トライアウト』のようなものを計画しているところです。すでにFEGコリアと一緒に準備しているところです」

——お話を聞いていると、メディアとの二人三脚がうまくいっている印象が強いです。

「もちろん、格闘技のおもしろさを伝えるだけでなく、芸能人なども起用しながらリアリティ・プログラムとして制作し、各選手の私生活やライフスタイルも伝えていきたいと思います。昨年にも『チェ・ホンマンの華麗なる休暇』という番組を4部作で放送したんですが、非常に高い視聴率を記録しました」

——『チェ・ホンマンの華麗なる休暇』ですか!!（笑）。やはり職業柄、競技としてよりも、まずはエンターテインメントとして磨きをかけることが定着の秘訣だとお考えですか？



力道山の活躍によってプロレスが大衆化したように、どんな競技やジャンルも定着するためには自国の英雄が必要不可欠だ。その看板や見出しを持って何を伝えてるのか、どうやって今後の興味を持たせるかがクリエイターサイドの力量となる。

「私たちは、PRIDEやK-1を一般的なスポーツではなく、スポーツとエンターテインメントが結合した"スポーツ・エンターテインメント"としてとらえています。ですからXTMではエンターテインメントの要素を強め、観る楽しみを極大化させるための、さまざまなプロモーションを計画しているんですよ」

——そういったエンターテインメント化に対して批判の声はありませんか？

「私たちのXTMでは、いろいろなテーマを討論する生放送番組があるんですが、『やれんのか！』の1週間前に"総合格闘技はスポーツか？"というテーマで放送をいたしました。ヒョードル選手とチェ・ホンマン選手には電話取材しましたし、街角でアンケート調査もしたんです」

——それは興味深い番組ですね。

「ヒョードル選手は『これはスポーツだ。ロシアでもそう認識されている。したがって私はこれを正式なスポーツとして考えているから、常に一生懸命練習するし、準備している』と語っていました。一般人のアンケート調査でも70パーセント以上が『これはスポーツだ』と回答しています。つまりこれはどういうことかというと、すでに一般の人たちは、エンターテインメント的な要素があるけれども、嘘偽りなく懸命に準備して闘っている姿を見て、これはスポーツとして認識すべきときが来たと考えているということなのです。以前は娯楽的な要素の強いイベントだとか、青少年に害を与える暴力的なものという意見もありました。しかし、現在ではエンターテインメント的要素が結合したスポーツだという意見が圧倒していると思います」

——以前は批判の対象だったけど、認めざるをえなくなってきた、と。

「はい。最近の韓国では、エンターテインメント的要素があるからといって、批判の対象とすることはなくなってきています。完全なスポーツ競技を観たいのなら、レスリングとか柔道とかボクシングとかを観ればいいんですよ。しかし、総合格闘技というものはそういったスポーツとは差別化された魅力を持っているものですから、そこからあえてエンターテインメント的要素を除いてしまうと、そのほかのスポーツと変わらなくなりますし、誰も観なくなる恐れがあります。それに、先ほど挙げたようなスポーツ競技は、韓国では人気がないんです」

——韓国はレスリングや柔道の強豪国として知られてますが、競技自体は人気があるわけじゃないんですね。

「韓国では国家対国家の対抗戦をとても重要視する傾向があります。柔道やレスリングなどは、オリンピックや国家対抗戦という図式がなければ、ほとんど誰も観ません。反面、ワールドカップやオリンピックなどは団結して応援します。もちろん、韓国ではヒョードル選手やミルコ選手は人気がありますし、彼らの試合があれば多くの人がそれを観ますよ。でも、そういった選手に加えて、韓国側にも国を代表する強い選手がいてこそもっと大きな興味を持つということです。私どももこの熱がもっと広がるように努力していきたいですね」

——わかりました。今後のバックアップも期待しています！

【08年1月21日／ソウル市・XTM局内にて収録】



kamipro VS 韓国マスコミ 座談会





賢明なる本誌読者ならば、本誌がなぜか韓国で注目されていることはご存知だろう。「日本で秋山は魔王と呼ばれている」「三崎和雄が秋山に謝罪した」など、どうにも本誌発のニュースが多いのだが、いったい韓国格闘技マスコミは日本をどうとらえているのか？　遠足気分の本誌編集長が目を覚ます、座談会スタート!!

座談会の前に、韓国格闘技界の現状を長文で説明いたします!!

今回の韓国現地取材で実現した日韓格闘技マスコミ座談会。出席者は本誌編集長のジャン斉藤、そして韓国サイドは格闘技マスコミの中心にいる人物たちで、彼らの意見は〝業界の識者〟によるコメントととらえてもらっていいだろう。

座談会のテーマは、日本での秋山成勲の扱われ方、そして日本の格闘技界全般について韓国側から感じている意見を聞く、というものだった。ところが、〝格闘技とエンターテインメント〟についての考え方があまりに違っていたため、序盤から〝激論座談会〟の様相を呈し、あたかも『kami-pro』vs韓国マスコミのような構造となっていった。

同じ格闘技を観ているのに、なぜこのような価値観の違いが生じるのだろうか？　まあ、本誌＝日本マスコミという位置付けも相当に無理があるのだが、まずは今回の座談会の〝副読本〟として、見ている人間の立場の違いや、韓国における格闘技界の成立過程、スポーツに対する意識の違いなどを紹介しながら、韓国のマスコミの発想に近づいてみたい。長いかもしれないが、とりあえずどうぞ!!

韓国の〝縛り〟

韓国の格闘技マスコミは、すでに帰化して日本人となっている元・在日韓国人であった秋山成勲を、いまだに〝チュ・ソンフン〟と記述しながら報道。韓国を代表する英雄として扱う。

その秋山の定義の仕方には〝国籍〟という〝縛り〟が根底に存在し、それ以外の見方を許容しない。そこに〝プロレス的視点〟はない。言い換えれば、リング上で起こる出来事をさまざまな角度から楽しむ視点がないのである。さまざまな視点から物事を見るためには、〝縛り〟から解放されなければならない。だが、韓国には〝縛り〟が多すぎる。

ほとんどの韓国人は、秋山vs三崎戦における三崎には〝乗れない〟だろう。なぜ乗れないのか？　それは彼らが〝国籍〟というフィルターを通して、この試合を観ているためである。韓国の記者は「日韓対抗戦はおもしろい」と言う。この〝おもしろさ〟の根源を、誤解を恐れずストレートに表現するなら、それは〝歴史的に植民地統治をしていた日本を（たとえスポーツという手段であっても）叩きのめすことができる〟という疑似体験によるカタルシス（精神の浄化）が得られるからだ。

最近でこそあまり聞かれなくなったが、少し前まで日本人に負けた韓国人は母国で生卵をぶつけられ、国辱者と呼ばれたものである。そこには〝日本には勝たねばならない〟という〝縛り〟が存在する。

こうしたリアルな歴史に根ざすライバル構造や国家間の対抗戦を焦点に当てたスポーツ観戦の方法は、日本にも存在するもので、楽しみ方の一つの方法として否定されるべきものではない。しかし、韓国人の場合はこれがじつに極端なのだ。

サッカーのワールドカップや野球のWBCに熱狂しても、国内のリーグの球場はガラガラで人気はサッパリ（観客が二桁しか入らないこともあるほど）。国単位でもオリンピックなどを通して国威発揚した選手の兵役を免除しているように、韓国ではナショナリズムというスポーツ以外のイデオロギーが加えられている。そこでは選手はどんなことをしても勝たなくてはならないし、観る側にとっても結果が第一で、競技を楽しむ視点は生まれにくい。

また韓国でプロスポーツが創設されたのは80年代で、しかも国が強制的に財閥にプロチームを作らせた経緯を考えると、競技そのものを楽しむスポーツ観戦法がまだ成熟しきっていないと推察される。いわんや、格闘技業界は成立して数年である。だからこそ、その反論として韓国の記者たちは、くどいほどに〝格闘技の競技化〟ばかりを主張することになる。もしかしたら単に「日本的な味つけをされたイベントは観たくない」というだけなのかもしれないが……。〝縛り〟が多いということは、それだけ物事を画一的で一面的にしかとらえられない、ということである。

韓国にはプロレスの見方が存在しない

韓国にはプロレスやプロレス脳がない。日本の格闘技は、アントニオ猪木の〝異種格闘技戦〟に源流があり、その後U系団体の格闘技への移行期があり、UFCの誕生とグレイシー柔術の出現によってPRIDEが誕生し、総合格闘技界が成立した。ここではプロレスラーである高田延彦や船木誠勝、田村潔司、桜庭和志らを無視して語ることはできない。

しかし韓国の場合は違う。プロレスと格闘技はまったくリンクしていない。それは韓国で1965年に起こった「プロレスはショー発言」に起因する。戦後、力道山や大木金太郎（キム・イル）といった韓国系の選手が活躍する日本のプロレスは、韓国でも人気があった。しかし、力道山の死後、韓国内では海外派の大木と国内派の張永哲（チャン・ヨンチョル）が対立し、二人は次第に溝を深めていく。両者が緊張を高める中、1965年の11月にソウルで開催される興行の前に勝敗の配分で揉め、試合の内容や結果が決まらないまま試合を迎えるという異常事態が起こった。

当日、日本の大熊元司と対戦した張はキャメルクラッチを掛けられてギブアップしたが、大熊が攻撃を続けたため、激怒した張の後輩が一斉にマットに乱入し、大熊の頭をビンやイスで殴るという騒ぎを起こした。この騒動を〝傷害事件〟として調査しようとした警察に対し、大ごとにしたくない張は「プロレスはショーだから」と発言したことがメディアに報道され、ファンの失望を買った。この事件により韓国のプロレスは没落の道をたどることになった。その後、韓国におけるプロレスの立ち位置は完全に〝ショー〟であり、真剣勝負と混同されることはなくなった。

韓国の格闘技界の成立は、UFCやPRIDEの誕生の影響を受けてのものであって、現在の韓国の格闘技マスコミにU系団体を体験した人はほとんどいない。したがって、韓国では格闘技といえば、プロレス要素のまったくないもので、完全に白は白でしかなく、黒は黒でしかない世界なのだ。韓国ではプロレスと格闘技の距離があまりに遠すぎるため、エンターテインメント的要素が強くなると、「プロレス的要素が強すぎる」として拒否反応を示すのだろう。〝活字プロレス〟を源流とする本誌と、話が噛み合うわけがないのである。

韓国には格闘技専門誌がない

そのうえ韓国には活字文化がない。

そもそも韓国の場合、格闘技雑誌にかぎらず、すべての雑誌の出版部数が日本に比べるとかなり少ない。日本では地下



座談会開始直前、日本から秋山vs三崎戦の裁定がノーコンテストに覆ったとの一報!! なんとも微妙すぎる展開だが、韓国側からすればまったくもって正しい訂正となる。見方はそれぞれだ。

鉄や喫茶店でコーヒーを飲むときに雑誌を手放せない人が多いが、韓国ではそういう光景を見ることが少ない。すでに韓国はＩＴ産業の発達によってネット中心社会に移行しているせいもあるが、一般的に韓国人は日本人より本を読まない。２００６年の統計を見ると、韓国の出版市場の規模は10分の１。発行部数でいうと20分の１である。日韓の人口比が３対１であることを考えると、これはとんでもない数字になる。

さらに韓国にはあれほど格闘技が流行、定着していると言われているのに、専門誌がないのである。かつては月刊誌の『武zine』と『ＨＯＬＯＳ』があったが、両誌とも現在は休刊中。『武zine』は名称を『ＭＡＲＴＩＡＬ ＡＲＴＳ ＴＩＭＥＳ』にしているが、これも格闘技道場やジムに送る程度だ。

つまり、韓国人の多くは、格闘技の試合を専門誌による補足、分析、解説といったフィルターを通さず、テレビ中継でしか観ていない。韓国の新聞やメディアによく見かける基本的な知識や流れを知らない、近視的で感情的な記事（たとえば、三崎のバックグラウンドを知らないため、三崎の「柔道最高！」発言は秋山への揶揄としてしか映らない、など）が多いのも、一次的な方法でしか格闘技を観ていないからではないだろうか。ただ「格闘技は大晦日にしか観ない」という日本のライト層の秋山叩きと、韓国での三崎叩きにはかなり共通点があり、同レベルのように思えるのは気のせいではないだろう。

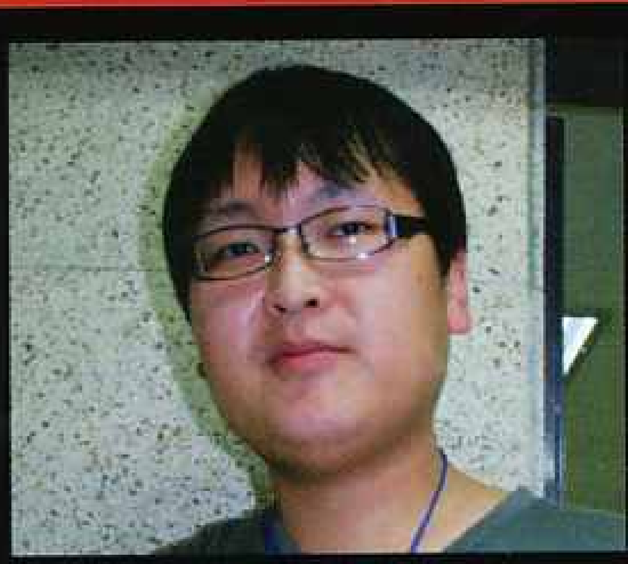
核となる国産興行がない

座談会で韓国人記者たちは何度も「日

座談会出席者



ジャン斉藤［司会］
本誌編集長。開始前は「相手の発言を8引き出して、10で返す!!」と風車の理論を持ち出していたが、ホームシックの影響もあり、序盤からおとなげなく牙をむく。ページの都合上、大幅カットされているが、隣で聞いていた青木真也が大爆笑するほどのダメ出しを続ける。



イ・ソンム
韓国の一般新聞『マイデイリー』紙の格闘技番記者。格闘技番をする前はサッカーなどのスポーツ全般の番記者として世界を飛び回るなど、幅広い視野で冷静に格闘技を分析する眼力を持つ。最近ではテレビなどでの格闘技中継で解説をする機会も増えてきている。



キム・ギテ
現存する韓国唯一の格闘技専門誌『MARTIAL ARTS TIMES』の編集長。元『武zine』編集長。現在はパンクラス・コリアの事務局長兼審判長を務める。今回の座談会では序盤から炎上して半分以上しゃべりまくった熱い男。格闘技のテレビ解説も務め日本語も堪能。



ユン・ヨギル
『MARTIAL ARTS TIMES』所属の写真部長。韓国格闘技の創成期からリングサイドであらゆる試合を撮り続けてきた業界を代表するカメラマン。韓国のみならず、日本の格闘技大会の撮影も数多く経験。本誌では『インサイドコリア』に写真を提供している。



イ・ギョドク
韓国最大の格闘技ニュースサイト『MFIGHT』の記者。秋山成勲の番記者でもある。同サイトの記事は韓国内の多くのスポーツ新聞やウェブサイトに提供されており、韓国格闘技の世論生成の大本とも言える。今回は編集の都合により、発言が大幅カットされてしまった。

本的な味つけは韓国には合わない」と言った。それはそうだろう。そもそも日本の格闘技興行では、韓国人が観ることを前提に煽りや演出をしていないのだから。

また興行団体としては、会場にお金を払ってくれるファンを第一に考えてプロデュースしている。だからこそ韓国での中継でも日本で作られた煽り映像はカットされて韓国向けのものに差し替えられているのである。そして、これは彼らに言うべきことではないが、日本向けの格闘技興行が韓国人に合わないというなら、韓国で韓国人を満足させる大会を作ればいいだけなのだが……。

残念ながら韓国ではブランド志向が強く、国内純血格闘技団体はスピリットMCを除いて壊滅状態。多くの注目を集める格闘技興行はFEG系興行しかない。しかも、そのFEGの興行は彼らの嫌う、チェ・ホンマンや秋山成勲などをメインにした〝韓国向けの演出〟をしているのに、そのことについては疑問を持たないのだから、まったく不思議な話なのである。

とてつもなく長くなったが、以上からもわかるように、格闘技界の成立背景からスポーツに対する認識、そして活字文化の有無は、本誌とは大きな違いがある。個人的にこうした視点や考え方の違いは、存在して当然だと思うし、リアルな怒りや熱があったほうが興行としては転がしやすいし、生かしやすいと考える。その点を踏まえて、この座談会を読んでいただきたい。（文／大川義之　司会／ジャン斉藤）

――本日、日本では三崎vs秋山戦がノーコンテストになったという発表があったんですが、その件も含めて、あの試合の感想を聞かせてください。

血と骨の格闘激国

世論も三崎を批判したので問題になったんですよ（ギテ）

キム・ギテ（以下ギテ） まず、ノーコンテストという結論が出たことは当然だと思います。充分にそういう結論が出る可能性のあったものだと見ていましたから。昨年の桜庭vs秋山戦のときもそうでしたが、主催者側は当初「故意ではない」という判断をして適当にやりすごそうとしていました。しかし、社会的な世論や桜庭側の抗議があって、もう一度審議しなければいけない状況になって、ローションを塗っているビデオが出てきて反則の裁定が出ました。そういう前例を見ると、今回のケースも怪しい部分があったのは事実ですから、〝日本の格闘技界は公正である〟というイメージを与えるために、あのような処置をしなければならなかったんでしょうね。

――え～っと、それは裁定を審議し直したことが公正ということですか？　それともノーコンテストにしたことが公正だということですか？

ギテ 秋山の問題に関して言えば、日韓のあいだに感情的な問題があります。ですからFEGは、韓国系の秋山を差別しているわけではないということを見せる必要があったんでしょう。

――「差別しているわけではない」という理由で覆った判定は、おそろしく政治的ですし、それこそ差別ですよ。

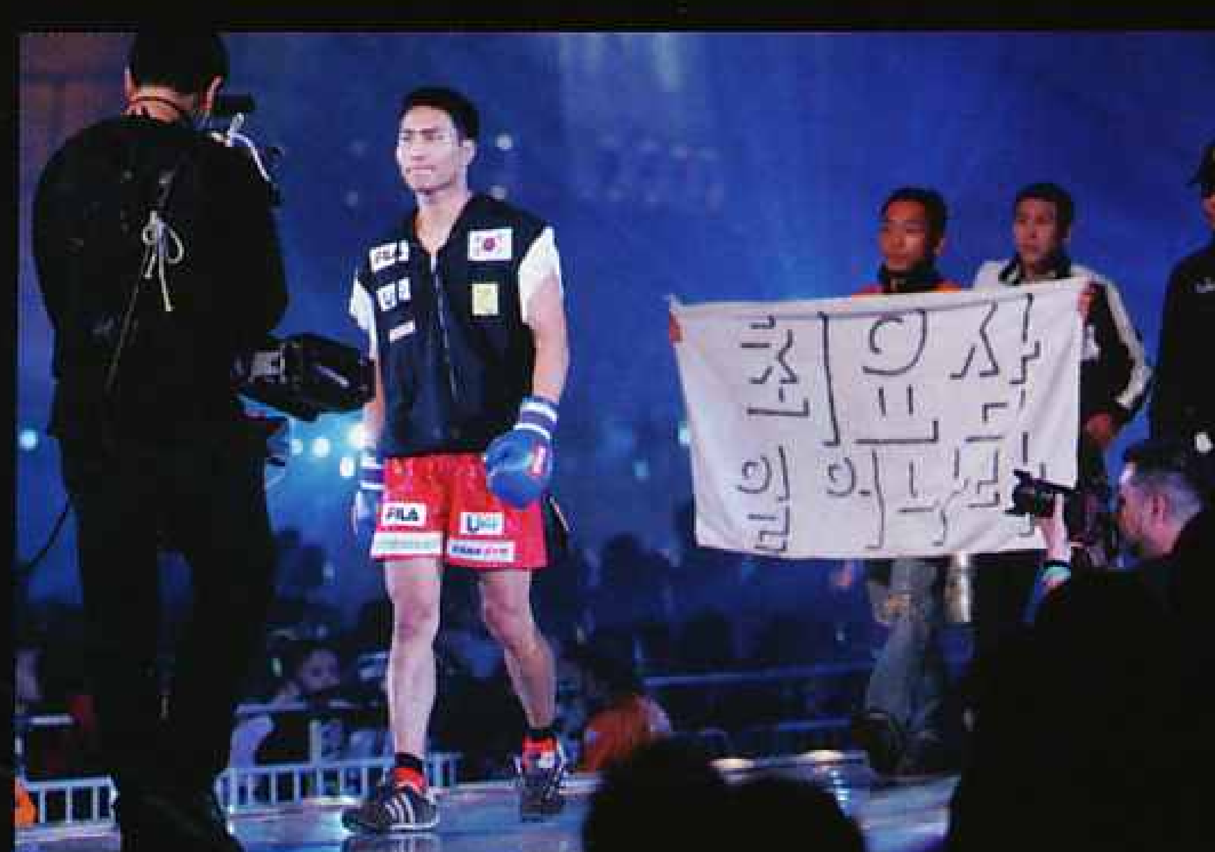
ギテ うーん。それはそうですが……、疑惑があるから、処分すべき可能性のあるものは処分せよ、ということだと思うんです。私は審判も経験していますが（※ギテ氏はスピリットMC、KPWなどで審判経験あり）、あのときの野口レフェリーの判断は、間違っていたとは思いません。あの状況であゝいう判断を下すことは充分にあり得ることですから。

ユン・ヨギル（以下ヨギル） むしろ今回の秋山は、見方を変えると〝得をした〟とも言えるんですよ。

――ほほう。

ヨギル 秋山には韓国人ファンも多くて後ろ盾もあるし、日本で話題の中心にいる存在です。それに対して同じ状況にあったとも言える山本KID vsハニ・ヤヒーラ戦では、ヤヒーラにはなんの後ろ盾もなくて、そのままになってますよね（※のちにヤヒーラ陣営も提訴）。

ギテ それに、ビデオや写真で検証すれば、あれが反則であったことはハッキリしています。当初『やれんのか！』側は「あれは流れの中でのものだった」とか「4点ポジションじゃなかった」という理由で、反則ではないとして、そのままにしようとしました。それに『やれんのか！』側のルールは、グラウンド・ポジションを広く定義していましたから、あれは明らかな反則だったわけです。にもかかわらず、「反則ではない」と言っていたから問題になったんです。そして最終的に『やれんのか！』側は、正しく訂正したということですよ!!



XTM広報長インタビューと比べて、座談会出席者からはガッチガチな意見が飛び出した!!　いまの韓国格闘技界をリードしているのが、“敵国”日本のFEGだというのも、ロうるさくなるポイントなのかもしれない。選手は揃ってきているが、自国発の格闘技文化は発生するのか?

――ちょっと待ってください。問題になったのは〝反則の疑い〟があるからじゃないんですか。あなたが指摘する「そのままにした」というのは、あくまであの時点での『やれんのか！』サイドの見解にすぎないでしょ。

ギテ いやいや、『やれんのか！』側が最初やりすごそうとしてたのは、事実じゃないですか!?

――当初はレフェリーの判断をそのまま支持したわけで、秋山サイドから提訴があったからあらためて審議したという流れだったと思うんですけど。

ギテ そこは私も問題はないと思ってます。しかし!!　そこから秋山側が提訴したこと、世論も三崎を批判したので問題となったんですよ。もし『やれんのか！』側があのままずっと「レフェリーの判断だから」と言ってやりすごしていたら、『やれんのか！』のイメージはもの凄く悪くなっていたでしょう。

――ちなみに、あなたのおっしゃる「世論」というのは、なんのことを指しているんですか？

ギテ まあ、韓国のほうからも大きな批判がありましたし、日本でも「反則じゃないのか？」という指摘がありましたよね？　そのことです！

――「世論が騒ぐから検証しなければならない」というのは、一つの競技としてどうなんでしょうかね？

ギテ いや、世論が騒ぐからということじゃなくて、世論に事実があったということですよ。

――はあ。ボクは反則だろうがなんだろうが、もの凄く判断が難しいと思うんで

すけど、こうして裁定が覆った件に関して、日本でも「なんで変えるんだ！」という声が挙がると思うんですよ。そうしたらそれも世論とやらの力で変えなきゃならないんですかね？

ギテ　……まあ、秋山も最初は提訴しようという考えはなく、裁定を受け入れる姿勢を見せていましたが、周囲の人たちが「あれは反則だ」と言ったことと、世論が後押ししたので、秋山も提訴できたんです。その結果、正しい方向へ裁定が変わったんじゃないですか？

――え？　秋山陣営は世論に関係なく、最初から提訴の構えはとっていましたけど……。

イ・ソンム（以下、ソンム）　秋山の出自がどうとかは置いておいて、あの試合で『やれんのか！』側は4点ポジション、あるいはグラウンド・ポジションというものを広く定義していました。反則規定というものは、選手の安全を守るためであり、選手に致命的な衝撃を与えないためのものです。今回のケースはVTRで観てもカメラのアングルなどによって判断が分かれるものであって、明確に「あれは反則だ」「いや、反則じゃない」とは言えないものだと思います。

――ああ、それはよくわかります。

ソンム　ほかの種目のスポーツでも「誤審も試合の一部」という言葉があるように、「判断が違っているからVTR判定ですべき」というのは、正直言うと意味のないことです。今回のケースもVTR判定をしてからいろんな批判が出てきましたが、それははたして正しいことなんでしょうか？　秋山の手が本当にマットに触れていたかどうか、それは本当に微妙な問題であって非常に判断の難しい問題です。テニスのように電子判定システムを配置して、怪しい瞬間のたびにそれが反則かどうかを見極めるなんてMMAでは無理なことですしね。個人的には、主催者が選手の安全を守るために、グラウンド状態を広く定義したことは、非常に意味のあることだったと思います。

――なるほど。

ソンム　ただ、秋山は日本に帰化して日本人になっているにもかかわらず、会場中からブーイングを浴びて、"集団いじめ"を受けているような感じで、観ていて自分も胸が痛かったんですが、今回の試合を覆したのは主催者でもなく、秋山でもなく日本のファンなんですよ。

――そ、そうなんですか。

ソンム　それは韓国のファンだけじゃなくて、日本のファンも秋山に対する認識が変わってきている気がします。いままで秋山を嫌っていたファンも、あの試合で秋山に感情移入できるようになった人も多くいたんじゃないですか。



んあ〜！　ロッテの元4番打者がエンタメだとは思ってません！（ジャン）

――はあ。

イ・ギョドク（以下ギョドク）　私もそうですが、ほとんどの韓国人は、在日韓国人の秋山を"韓国代表"として見ていたと思います。最後のサッカーボール・キックは試合後、論議の対象となりましたが、試合自体は日韓戦の興奮もあり、技術とスピード、そして劇的な結末まで用意されている、という素晴らしい名勝負でした。最後の三崎のマイクは、三崎が言いたいことと意図は理解できるんですが、ちょっと言いすぎだなと思いました。

――いまの秋山は悪役に仕立て上げたほうが商品価値はあるんです。プロレスで言うところのヒールとしての個性がもの凄くあるんですよね。

ギテ　でも、プロレスのヒールとベビーフエイスは合意のもとで行なわれるものでしょう？　秋山は自分でそれを望んでないのに悪役にされてるじゃないですか⁉

――いや、秋山はファイターとして必ず知っておかなきゃいけないはずのルールを破って、あろうことかクリームを全身に塗ってしまったわけです。そしてその事実を最初は否定した。そのために、彼はありえないくらいの憎悪をファンから向けられているんです。許す、許さないじゃないんですよ。秋山サイドや主催者に問われるのは、その怒りをどう転がしていくかなんです。

ギテ　それはわかるんですが、秋山は処分を受けてリングに立ったんですよ⁉　ですからファンも応援したい人は応援していい状況になっているはずなのに、それが許されないんですから「悪役であるほうが彼にとってはむしろいい」という意見は、論理的におかしいですよ。

――応援したいファンは応援すればいいと思いますよ。一方でいまでも復活を望んでないファンもいますから、秋山をヒールとして扱うのは、まだソフトな対応ですよね。一番冷たいのは、まったく無視して試合をさせないってことです。もちろん秋山本人はこういう悪役としての見られ方は望んでないでしょう。ただそれはプロとしてどこに商品価値が見いだされるかということで、望む、望まないにかかわらず、そういう評価を受けてしまうのは、プロとしては仕方がないと思いますけどね。

ギョドク　私は秋山を悪役として扱うことについては賛成です。いまの日本の格闘技界には活力を与える人が必要ですから。その役に秋山は適任だと思いますし、秋山が悪役にならざるをえない状況です。悪役であれば秋山も生き返るかもしれないんですよ。

――逆に三崎は、韓国側から悪役として見られてますよね。

ギテ　いやあ、メチャクチャ憎まれてますよ（笑）。ただ、あの説教シーンがどんな意味を持っているか、理解しているファンも多いので「むしろこれは秋山にとってよかったんだ」という意見もあります。とはいえ、感情的な怒りは抑えようがないんですよ。

――皆さんが「秋山を許せ！」とおっしゃるように、三崎のことも許しましょうよ。

【一同苦笑い】

んあ〜！　ジャニー谷川さんのおかげで日本のエンタメ論が誤解されるとは!!　韓国格闘技界は谷川手腕によって活性化しているという見方もあるが、確実に言えることは、谷川さんは日韓双方から嫌われているということだ……チェッ!!（谷川調舌打ち）。

――個人的にはどんどん怒ってほしいですけどね（笑）。韓国でブーイングを浴びながら、〝集団いじめ〟の中で闘う三崎の姿を想像しただけで鳥肌モノですから。

ソンム　まあ、韓国人としては、秋山がブーイングを浴びていることは気分のいいものではありませんが、すでに格闘技においては日本と韓国のマーケットは一つになったといえますし、秋山が復帰したことはいいことだと思います。韓国から見ていても、昨年は日本の格闘技界の停滞が目立ちましたから、どんなかたちであれ彼の存在が活力剤になるのならそれは肯定的に考えることはできます。

ヨギル　あと秋山の試合は桜庭戦や三崎戦もそうですが、必ず試合後に判定問題が起きて、試合だけではない、国家化論を含む〝ドラマ〟があるんですよね。秋山の人生は確かに非常にドラマチックだと思いますが、K－1って〝競技〟ですよね。だったら〝競技〟を重視しなきゃいけないのに、試合以外の〝ドラマ〟ばかりがクローズアップされているような気がするんですよ。秋山が三崎にKOされたのに「結果的に、あれは秋山にとってよかった」なんていう評価が出るのはおかしいですよ。試合に負けてるのに勝敗がないがしろにされているじゃないですか。だから最近のK－1やかつてのPRIDEは、スポーツとしての内容が無視されてドラマ性ばかりが強調されていると思います。

――K－1の場合は「最近」の話じゃないんですけど（笑）。ボクの場合はサッカーや野球といったメジャーなスポーツでもそれらの競技性だけで堪能できるかといったら無理なんですよ。人の物語や背景が浮き上がる瞬間が観たいんです。それが競技性の中からでもいいし、もう入場の瞬間でもいいし、極端なことを言えば、会場へ向かうために靴を履いた瞬間でもいい。だから三崎と秋山の試合内容からは二人のタフな人間性が見えたし、試合後のマイクから、どうにも止まらない三崎の人間性が見えました。また、秋山からは常に誤解され、差別されてきた人生も浮かび上がったように思えるんです。これは偶然の出来事だけど、必然として捉えたほうが絶対におもしろいと思うんですよね。

ヨギル　スポーツとエンターテインメントが結合したものが総合格闘技だというのは理解できるんですけど、スポーツとエンターテインメントのどちらに重きを置くかは、とても重要なポイントだと思います。

ギテ　私は日本はそこが偏ってると思います！　日本人の考えるバランスとほかの国の人たちが考えるバランスは違うんです。韓国人や外国人にとっては、それが納得できないところなんですよ。

――納得できないものというと？

ヨギル　以前、バダ・ハリにインタビューしたときに「どうしてすべてのことがチェ・ホンマンに集中しているのか、俺にはわからない。どうして実力のある人は使わず、背が高くてエンターテインメント性の強い怪物を起用しているかが理解できない」と言ってましたよ。

――言ってることはわからなくはないけど、彼に話題が集中しなかったらいまの韓国であれだけの大興行は成立しませんよね。ホンマンを否定したらマーケット自体が潰れてしまいますよ。

ギテ　（無視して）一番の問題はロッテの元4番打者、立川隆史を出して「4番打者と武道家が闘ったらどっちが勝つか？」なんていう演出です。そういうのは、ちゃんちゃらおかしいですよ!!

――んあ～！　それ、谷川さんが偏ってるだけですよ!!　ボクはロッテの元4番がエンターテインメントだとはまったく思ってませんから。ほかの何を否定されようが、これだけは声を大にして言いたい（笑）。

ギテ　でも、話にならないようなカードを組んだり、芸能人を闘わせたり、日本はそういうのがエンターテインメントだと考えているように見えるんですよ。

――ズバリ、思ってません って！（笑）。

ギテ　私はパンクラスの仕事をしていることもあって、心情的にはUFCよりも日本の格闘技界にうまくいってほしいと思っています。試合自体もUFCより日本の格闘技のほうがおもしろいと思いますから。しかし!!　だからといっていままで日本でやってきたようなかたちで、ずっとやっていくのはダメでしょうね。

――まあ、問題点はたくさんありますね。

ギテ　自分が日本の格闘技界と関わりを強めてから4年ぐらい経ちますが、韓国よりも20年、30年は格闘技文化が成熟されているだろうと思っていた日本の格闘技界には意外にも穴が多いんだなと感じました。それは韓国人や外国人が納得できないものを、日本人はあたりまえのこととして受け入れているのを見て感じたことです。

――それで興行にならなかったら意味がないでしょう。

ギテ　いや！　日本のイベントが世界のファンを納得させるためには、海外市場においても受け入れられることを考えていかなきゃダメですよぉ！

――なぜそこまで世界に（笑）。どういうところがマズイんでしょうかね？

ギテ　ルール面では、日本ではサッカーボールキックや4点ポジションでのヒザを使うのに対して、アメリカではヒジを使いますし、ワセリンを塗ってはいけないという違いがありますよね。いま韓国ではほとんどの団体が顔にワセリンを塗ります。

――アメリカを見習った韓国のように顔にワセリンを塗れ！　と。

ギテ　それはまだ小さな問題です。さっきも言いましたが、スポーツとしてのストーリー、ドラマなどは外国人が見ると「これは違うだろ」という部分もあるんですよ。

――まあ、外国人に向けてないですからね（苦笑）。じゃあ、たとえばどういう興行が現実的なんですかね？　ちょっと抽象的なご意見が続いているので、具体的にお願いできますか？

ギテ　いま現在としては……そうですね……。ちょっと難しいですが修斗やパンクラスがそうだ、と言えなくもないですね。

――な、なるほどねぇ。競技としてはいいんだろうけど……。

ギテ　まあ、誰が見ても納得できる〝競技〟にするのが第一であって、その上にエンターテインメント性を演出されなければならないし、どの国の人に見せても「おもしろい」と感じさせるコンテンツでなければなりません。日本人だけがおもしろいコンテンツはダメだということですよ!!

――それで興行にならなかったら競技も何もないですよ。

ギテ　いや！　日本のイベントが世界の……（以下、延々と繰り返し）

【08年1月22日／ソウル市内のどこかにて収録】



お国が違えば見方もそれぞれ。三崎の煽りVじゃないが、わかる人はわかるし、わからんヤツはとことんわからん。しかし、偏見を取り除いた議論を重ねることによってバランスは保たれていくはずだ。

血と骨の格闘激国

注＝相撲のページではありません



K-1がユース路線に傾いたいまこそチャンスだ!!

K-1モンスター路線はDEEPが継承へ――!!

体重100キロ以上の〝デブ〟が大集結!! 超メガトンなトーナメントが開催決定!!

モンスター路線といえば、かつてはK―1の専売特許だった。ここ最近のワールドユース路線とは真逆の、でかくておもしろいモンスターたちが大集結していた時代のことである。個人的には03年をピークとするモンスター路線のK―1こそが黄金時代であると信じて疑わない。曙vsボブ・サップで瞬間最高視聴率が『NHK紅白歌合戦』を上回り、世間に大きな風穴を開けたものの、格闘技ファンの評判は芳しくなかった。その後、モンスター路線の象徴的存在であるボブ・サップの失速とともにモンスター路線は頓挫してしまった。その反動が、若くて、小さくて、かわくて、もちろん格闘技の技術もある選手を集めたワールドユース路線の呼び水となっているであろうことは想像に難くない。

そんな時代にDEEPが開催する『DEEPメガトンGP2008』。これは凄い。なにしろ参戦する選手の体重は全員100キロ以上。ヘビー級の外国人選手にとってはごくごく標準的な体重だが、日本人で100キロ超えとなると途端に〝デブ〟というレッテルを貼られてしまう。骨格や筋肉に限界があるので仕方のないことではあるが、そんな〝デブ〟を集めてトーナメントをやってしまおうというのが今回の趣旨である。

しかも、「スタミナに問題が多い選手ばかりなので3分2ラウンド、インターバルを3分とする」というルールである。パンチ一発のダメージは大きいがスタミナ切れも早い、という配慮からこのようなルールにした、とは佐伯繁DEEP代表（減量して現在99キロ）のコメントだ。通常より長めのインターバルには、大きなサイズの洋服店や食べ放題の飲食店などのスポンサーを募る模様だ。リングガールにもビッグな女性を集め、実行委員にも本誌でおなじみのライター・橋本宗洋氏（体重116キロ）や一宮章一（体重105キロ）を揃える徹底ぶり。健康ブームによってメタボリックであることが犯罪であるかのように騒ぎ立てられる昨今の風潮にケンカを売ってるとしか思えない鉄壁の布陣である。

スピーディで技術のある攻防とは真逆のベクトルで格闘技界に波紋を起こそうという試みは個人的には熱烈に応援したい。トーナメントに出場するのはDEEPを主戦場にする選手が多いのだが、かつてのモンスター路線の牽引車となっていたボブ・サップのような活躍をする選手が出てくるかどうかが大きなテーマになるだろう。世間的には無名な選手ばかりだが、この中から誰が飛び出すことになるのだろうか？　痴漢逮捕というお手柄でTBSの『サンデージャポン』でも取り上げられたプロレスラー・有山いいとも!!（写真右端）はその位置に一番近い気がするのだが、はたしてどうなるか!?（ただし、総合格闘技の試合経験はないらしい）。会場に足を運び、ポップコーンとビール片手にその目で確かめてみよう。

（坂井ノブ）

『DEEPメガトンGP 2008』
一回戦　3月29日（土）
二回戦　5月24日（土）
準決勝&決勝　8月2日（日）
※会場はいずれも新宿FACE

［出場選手］
マッスルヒラヌマ（JUNGLE MUSCLE GYM）、川口雄介（BLUE DOG GYM）、馬場口洋一（Team Paon）※WAKASHOYOから改名、鶴亀金太郎（フリー）、高原信好（正道会館）、折橋謙（CORE）、和歌嵐（手塚道場）、有山いいとも!!（サンジャポファミリー）、保坂忠広（フリー）、小島良祐（CORE）、小阪俊二（ファイティングマスター）、鈴木宗之（U-FILE CAMP）他3名、調整中。

［問い合わせ］
メガトンGP実行委員会（DEEP事務局）
TEL. 052-339-0303



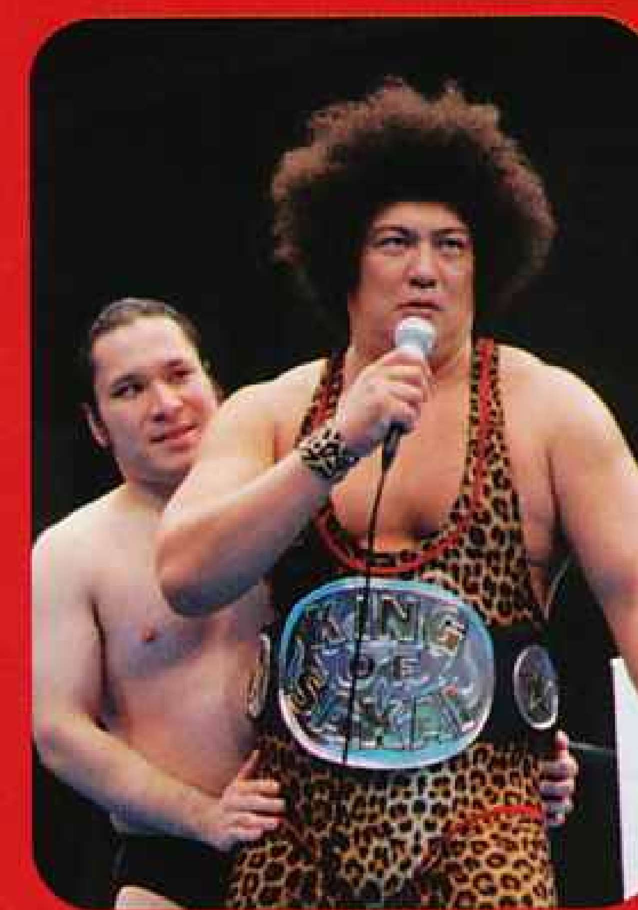
kamipro日曜劇場に
キンターマン&
クロダーマンが登場!
"失神事件の"
真相を激白中!!

kamipro Hand

毎日更新のブログも必見!



「やる気! ○起!? 青木日記」



「ゴー・フォー・ブログ! 日刊マッスル坂井」

最狂布陣のkamipro Handコラムはコチラ!!

月	インディー界をぶった斬る! プロレスキャスター 三田佐代子の『サムライな日々』
火	毎週のニュースを独断と偏見でランキング! ニュース特選!『kamiの一週間』
水	マニア格闘技の真髄を読め! 橋本宗洋の『格闘裏グルメ』
木	アメリカMMA事情を週イチでお届け デューク東郷の『USA Cool宅急便モバイル』
金	"プロレス冒険家"がマット界を斬る! 金沢"GK"克彦の『こちらプロレス村役場』
土	マット界の事件を徹底追求! kamipro事件簿「金子賢はPRIDEファイターだったのか」

そのほか、大会、会見も即日速報!



「kamipro事件簿」は金子賢PRIDE参戦に迫る!

携帯サイト「kamipro Hand」への簡単アクセス方法

1 QRコードでクイック・アクセス!!

2 http://kamipro.dsn.ne.jp/hand/ を入力して直接アクセス

3 hand@kamipro.com へ空メールを送信

アクセス方法

DoCoMo	iMenu	メニューリスト	スポーツ	格闘技/大相撲
	※もしくは「kamipro」で一発検索!!			
au/TU-KA	トップメニュー	カテゴリで探す	スポーツ	格闘技
Soft bank	メインメニュー	メニューリスト	スポーツ	格闘技
WILLCOM	趣味&スポーツ	スポーツ	総合	
	エンターティメント	TV・メディア・本	本	

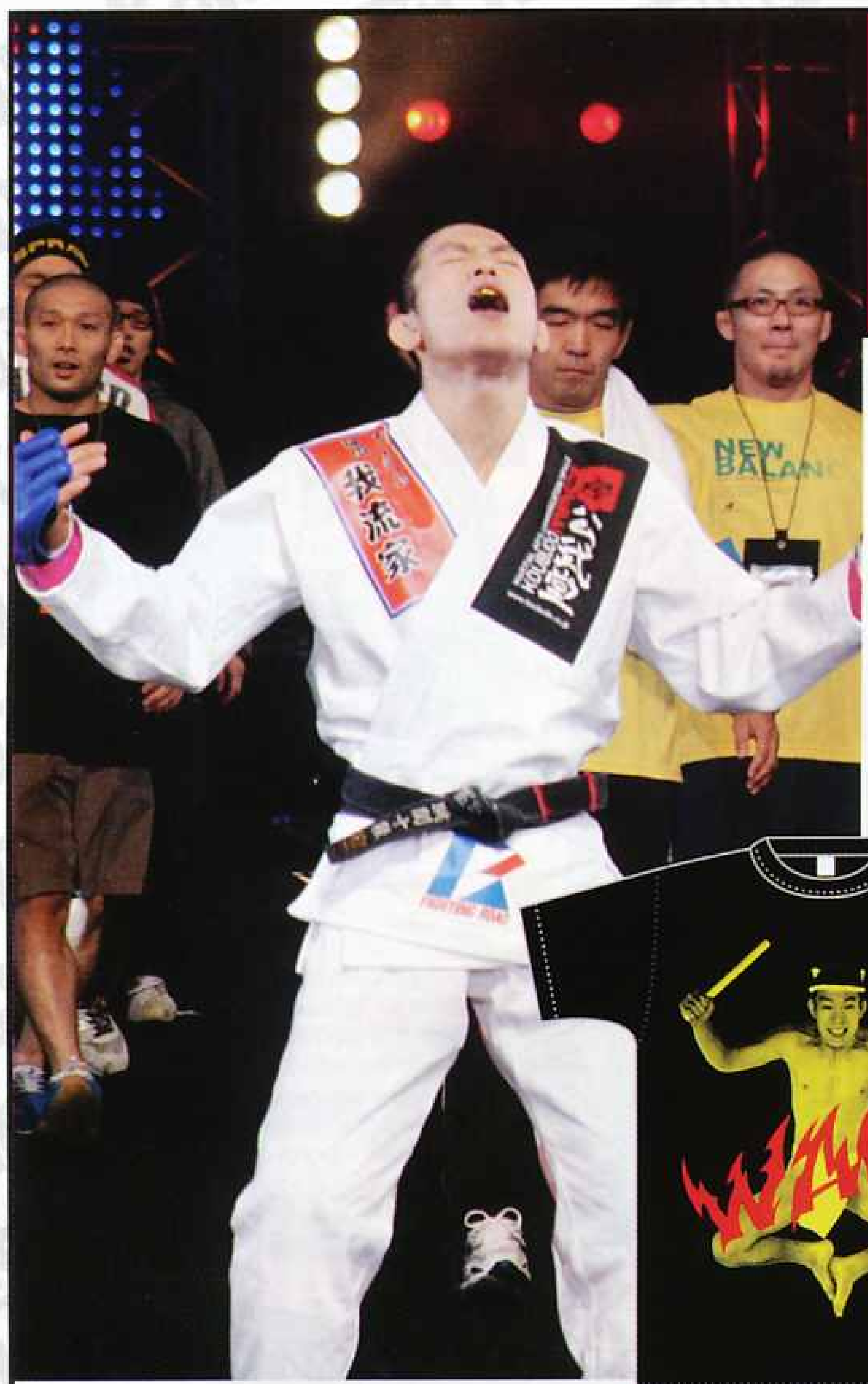
kamipro Hand

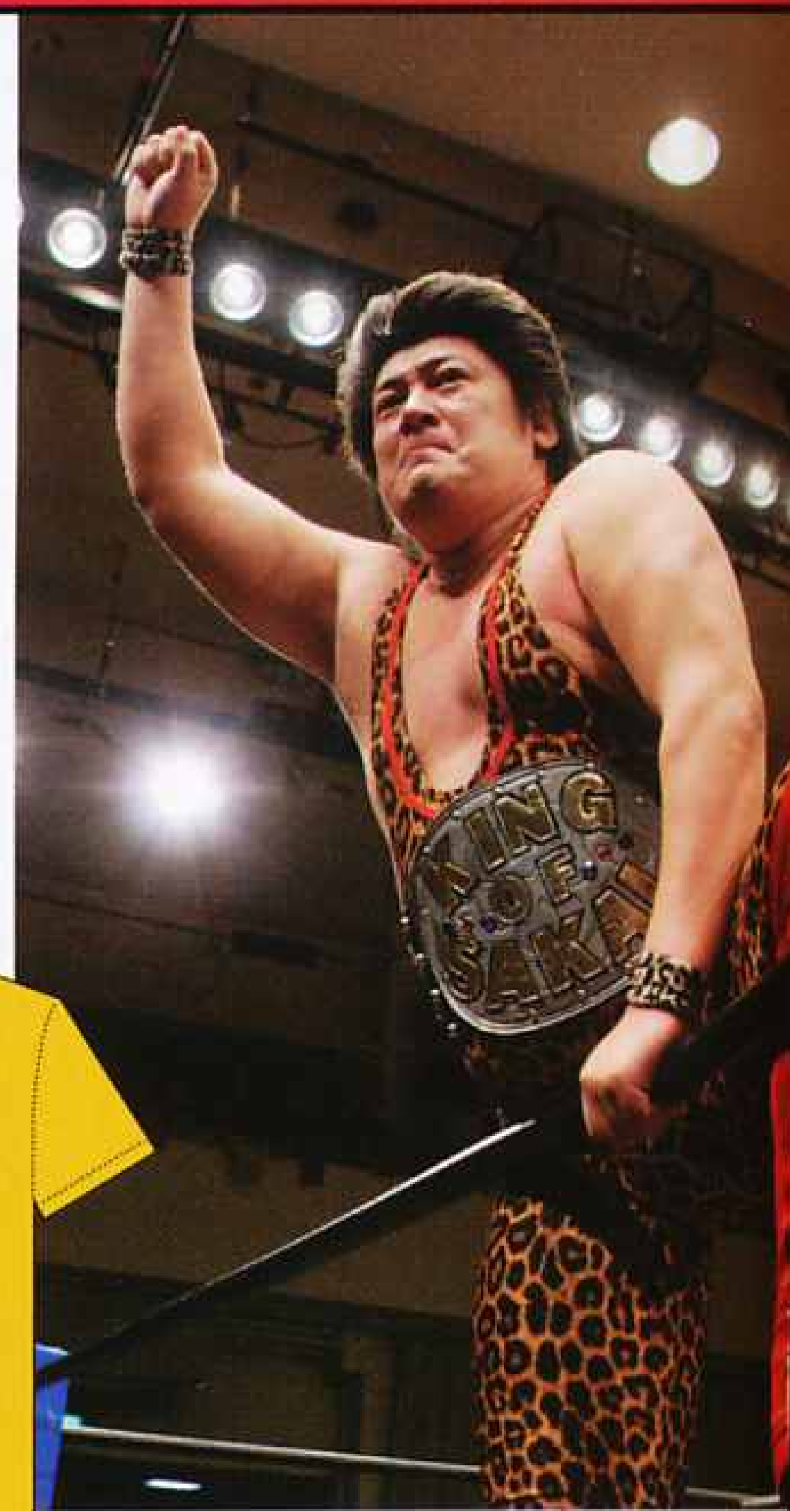
[QRコード]

えー! 永久電機が完成したって? そんなニュースは当サイトで!!

［お問い合わせ］(株)ダブルクロス TEL.03-5368-1795

kamipro SHOPPING





『kamipro Hand』人気ブログ連載コンビがTシャツシリーズにラインアップ! まとめて着こなせ!!



青木フンドシ Tシャツ[☆]
[M･L･XL ブラック] ¥3,990(税込)



マッスル スターウォーズ Tシャツ[☆]
[S･M･L･XL イエロー] ¥3,150(税込)



ニューリン様"BERO" Tシャツ[☆]
[LADY'S M･M･L ブラック] ¥3,990(税込)



KamiproマスクTシャツ[☆]
[S･M･L･XL ホワイト×レッド] ¥3,990(税込)



I編集長"殺し"Tシャツ[☆]
[M･L･XL ブルー] ¥3,990(税込)



マサ斎藤Tシャツ[☆]
[M･L･XL ブラック] ¥3,150(税込)



インリン様M字Tシャツ
[LADY's M･M･L･XL ブラック] ¥3,990(税込)



LOVE&HUSTLE Tシャツ
[LADY's M･M･L･XL ブラック、ベージュ] ¥5,250(税込)



ハッスルNEW Tシャツ
[XS･S･M･L･XL ホワイト、ブラック] ¥3,990(税込)

『kamipro』通販方法

★通販はすべて代引きです。お支払いは、現金、デビットカード、クレジットカードの中から選べます。

★全国どこでも送料一律500円です。(何枚でも可。離島・山岳部の方はお問い合わせください)

★代引き手数料は315円です。(代引き金額によって異なります)

『kamipro Hand』でご注文の場合

詳しくは『kamipro Hand』の通販コーナーをご覧ください。ご注文後、確認メールを送りますので注意してご覧ください。

電話でご注文の場合

平日13:00～19:00
(株)ダブルクロス
TEL.03-5368-1797

[kamiproオリジナルTシャツ サイズ表]
☆マークのものがKamiproオリジナルTシャツです

(単位はcmです)

サイズ	S	M	L	XL
身丈	66	70	74	78
身巾	49	52	55	58
袖丈	19	20	22	24





HUSTLE ニットキャップ
[FREE ブラック] ¥3,360(税込)



MONSTER ニットキャップ
[FREE ブラック] ¥3,360(税込)



髙田総統MONSTER Tシャツ
[XS･S･M･L･XL ホワイト] ¥4,200(税込)

ケータイサイトでセール実施中! いますぐアクセス!!

非会員でもショッピング可能!!

アクセス方法

DoCoMo iMenu ▶ メニューリスト ▶ スポーツ ▶ 格闘技／大相撲 ▶
※もしくは「kamipro」で一発検索!!

au/TU-KA トップメニュー ▶ カテゴリで探す ▶ スポーツ ▶ 格闘技 ▶

SoftBank メインメニュー ▶ メニューリスト ▶ スポーツ ▶ 格闘技 ▶

WILLCOM 趣味&スポーツ ▶ スポーツ ▶ 総合 ▶
エンターティメント ▶ TV・メディア・本 ▶ 本 ▶

kamipro Hand

[QRコード]

※価格はすべて税込みです

先生、バナナはおやつに入りますか?
韓国遠足記念大放出!!

桜の咲く頃はすぐそこ! 集結セヨ!!
kamipro PRESENTS

応募要項

ハガキに応募券を貼り、①～⑧の質問の答えをご明記の上、下記の宛先まで郵送してください。応募多数の場合はそれぞれ抽選で決定致します。ただし、雑誌公正競争規約の定めにより、懸賞に当選された方は、この号の他の懸賞に当選できない場合がありますので、ご了承ください。なお、当選者の発表は発送をもって代えさせていただきます(商品は1月21日以降発送予定です)。
【質問事項】①郵便番号・住所・電話番号②氏名③年齢・職業④希望商品⑤おもしろかった記事&その理由⑥つまらなかった記事&その理由⑦探検隊に探検してほしいのは?(その理由)⑧本誌でインタビューしてほしい選手は?
【宛先】〒151-0051 東京都渋谷区千駄ヶ谷5-16-6パレ・ジュノ2F
(株)ダブルクロス『kamipro』編集部「余分なことすんな!」係まで
※締切は3月20日(水)当日消印有効

kamipro 120 応募券
チチ、キトク スグカエレ!

ちぎって持ってっちゃダメだぞ!!

K-1&YARENNOKA





各1名様

やれんのか! ニットキャップ
ブラック&ヒョウ柄&トラ柄/¥3,150(税込)

あの"60億分の1煽りVアーティスト"佐藤大輔氏による『ドキュメンタリーやれんのか! 完結編』のPPV放映でまたまた再評価、『やれんのか!』のニットキャップを3種類各1名様に提供!



1名様

やれんのか! タオルマフラー
ブラック/¥2,100(税込)

「桜の咲く頃に会いましょう」とファンに期待を持たせた『やれんのか!』のタオルマフラーのブラックを1名様に。このタオルを巻き、次回大会を首を長～くして待つべし!



Back



各1名様

ミノワマン "キン肉マン×ミノワマン" コラボTシャツ
ホワイト/¥4,410(税込)

牛丼ひとすじ300年～♪ でおなじみ、あの『キン肉マン』と"超人"ミノワマンとの夢のコラボレーションが実現! ゆでたまご先生書き下ろしの貴重なTシャツ。

チェ・ホンマン "崔HONG-MAN" Tシャツ
ブルー/¥4,410(税込)

今号の本誌では青木真也とのデコボコ大連立コンビを結成(?)したスーパーヘビー級戦士、チェ・ホンマンのスーパーマンテイストなオリジナルTシャツを1名様に!



3名様

チェ・ホンマン "韓流超人" フェイスタオル
コリアンレッド/¥1,890(税込)

あの"60億分の1の男"ヒョードルのテイクダウンを二度も防ぎ、MMAの隠れた才能の片鱗を見せた"韓流超人"こと、チェ・ホンマンのコリアンレッドなタオル。

FEG■http://www.k-1.co.jp/

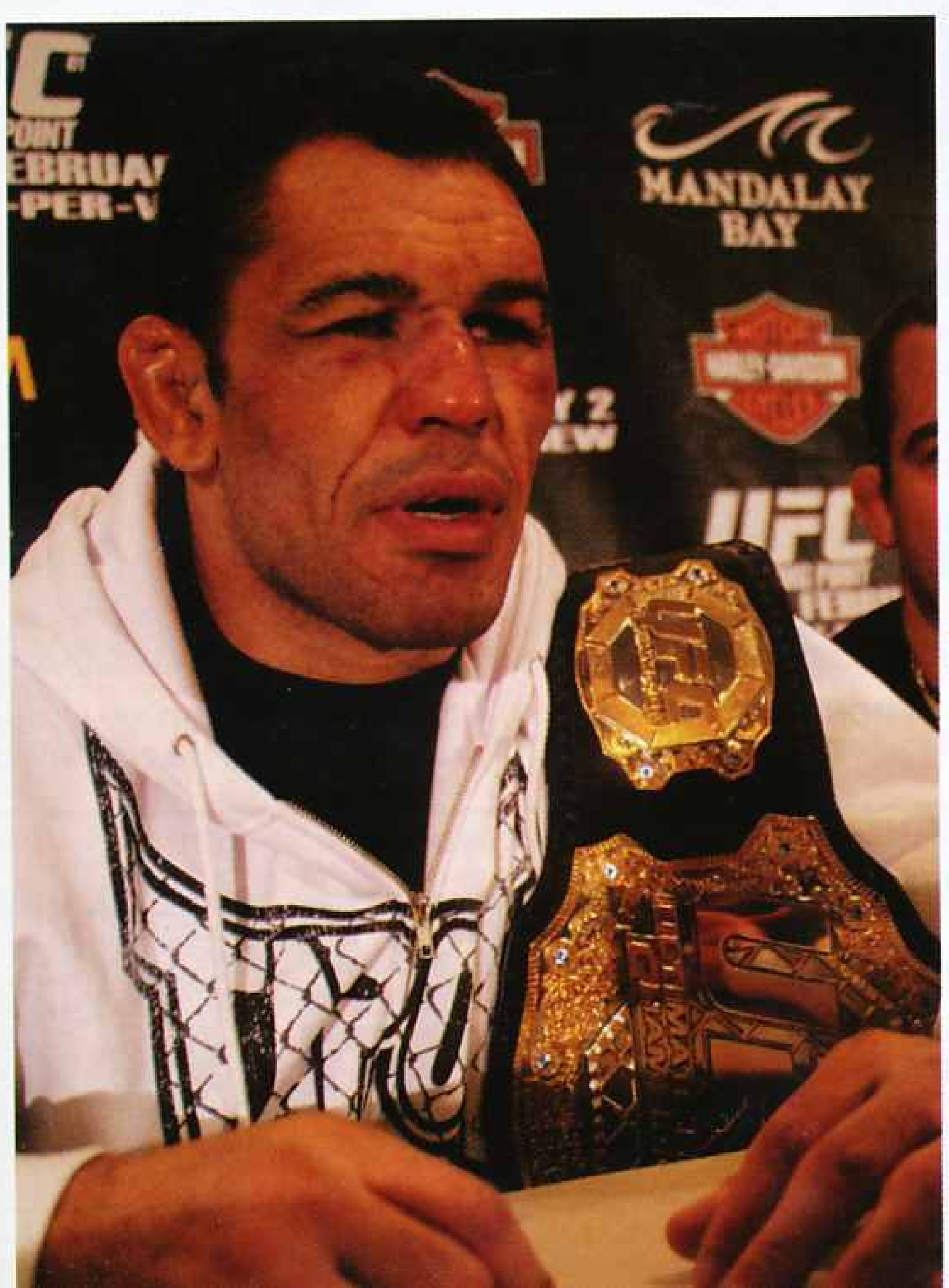


2名様

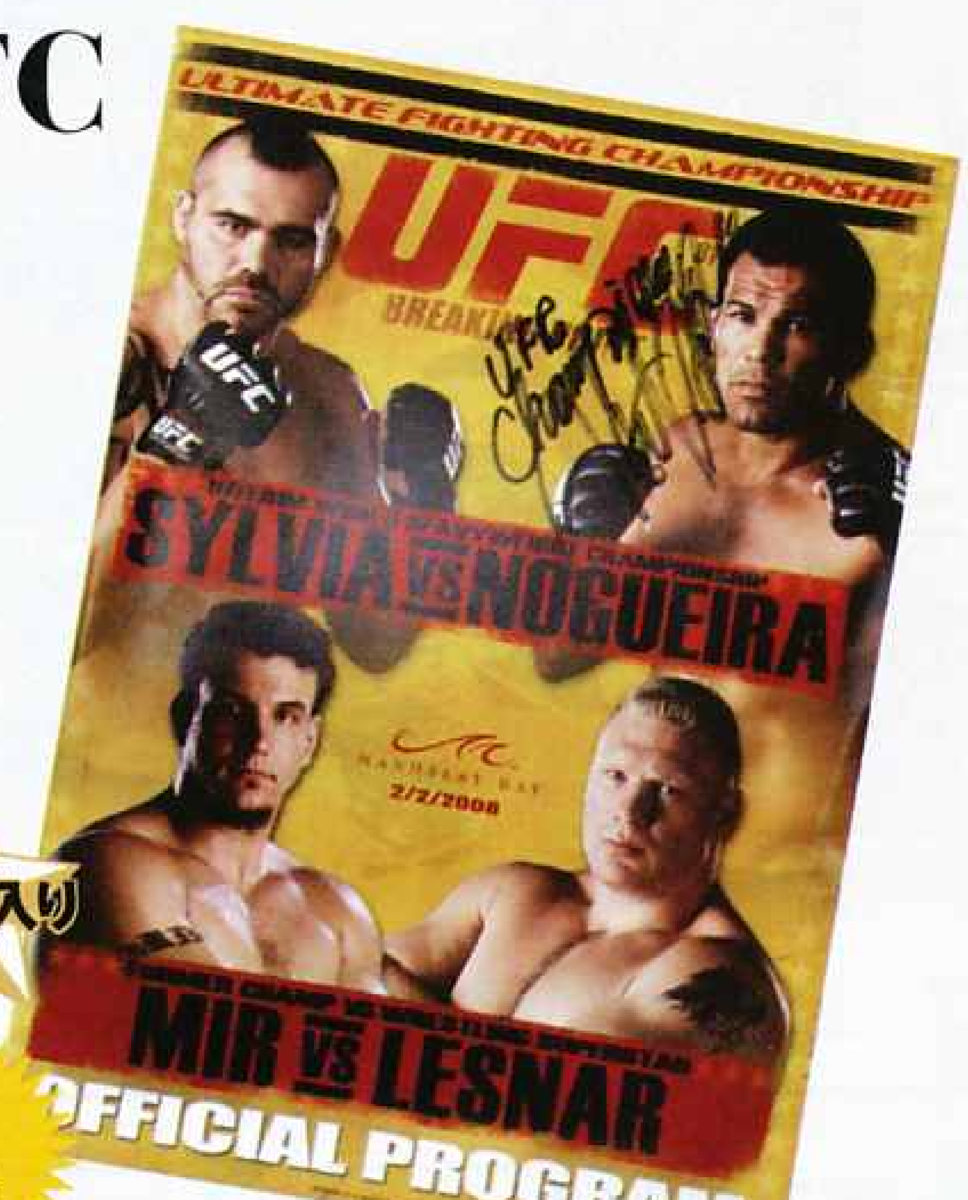
跳関十段 青木真也 2
(クエスト)130分/¥5,880(税込)

今号では韓国への遠足を満喫して絶好調! "ミスターやれんのか!"青木真也の変幻自在なグラップリングの極意を収録したDVD。先月、今月号とインタビューで登場した若林太郎氏が手がけた作品。

やれんのか!■http://www.yarennoka.com/



UFC



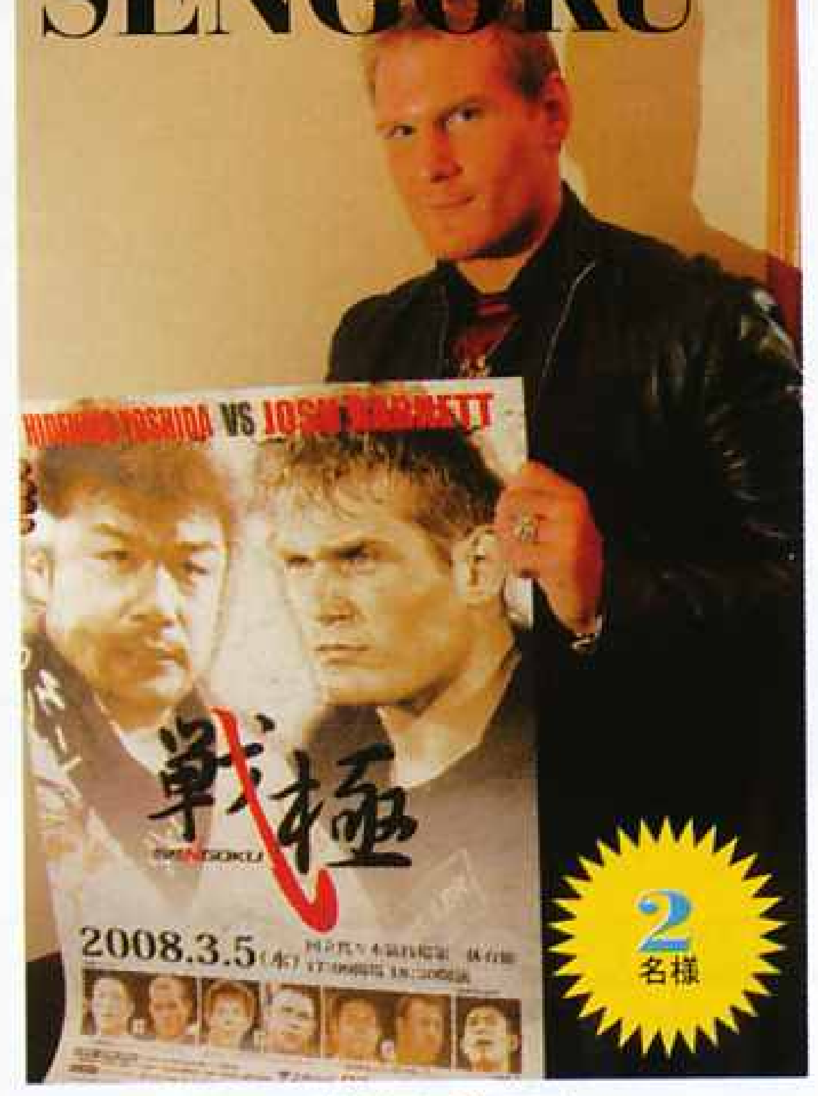
サイン入り

1名様

ノゲイラサイン入りUFC81パンフレット
前王者ティム・シルビアとの暫定王座決定戦で、体格差に苦しめられながら見事なフロントチョークで逆転勝ちしたノゲイラのサイン入り『UFC81』パンフレットを1名様に提供。

UFC■http://www.ufc.com/

SENGOKU



2名様

3.5 戦極ポスター
B2サイズ/¥500(税込)

戦極ビターン! 五味隆典、ジョシュ・バーネット、藤田和之も参戦決定して注目度は急上昇! 3月5日、いよいよ旗揚げする『戦極』の貴重なポスターを2名様に放出します!

戦極■http://www.sengoku-official.com/pc/

HUSTLE



ハッスル EPISODE Ⅱ DVD 3

180分／¥5,040（税込）

インリン様がまさかのご懐卵でモンスター・ボノ誕生、天龍がHGコスチュームで狂い咲きすれば、RG感動の初勝利！　など笑いあり涙ありの07年夏『ハッスル』劇場が満載のDVDが登場だ！



MONSTER FAMILY Tシャツ

ブラック／¥3,990（税込）

『大晦日ハッスル祭り2007』では最初で最後かもしれない(?)感動の親子初対面をはたした“パパ”ムタ、“ママ”インリン様、そしてボノちゃんの魔界最強ファミリーTシャツ。



インリン様MONSTER Tシャツ

ライトブルー＆ホワイト／¥3,990（税込）

“愛と闘いの女神”インリン様のシンボルマークであるM字をプリントしたモンスターな逸品が読プレに降臨！　ライトブルー＆ホワイトカラーを各1名様に提供します。洗脳されたいあなたに。



ハッスル28 ポスター

B2サイズ／¥500（税込）

『ハッスル』が早くもたまアリに帰ってきた！　今回はコミュニティアリーナ内で『ハッスル28』が開催！　インリン様の艶やかなM字姿も最高な記念ポスターを3名様にプレゼント！

ハッスル■http://www.hustlehustle.com/

REVERSAL



新極真「押忍」Tシャツ

ブラック／¥4,200（税込）

人気ブランドreversalからは07年に行なわれた全世界空手道選手権大会で販売された新極真会とreversalのコラボレーションTシャツが登場！　ブラックに白で書かれた背中の“押忍”の文字がインパクト大！

reversal■http://www.rvddw.com/

ART JUNKIE



無鉄砲Tシャツ

ジャパンブルー／¥3,990（税込）

ART JUNKIEからは、犬と映画とおいしいものが闘う日々のエネルギーという昨年結婚したばかりの無鉄砲娘、しなしさとこ公認モデルのTシャツを1名様に。ジャパンブルーに赤い文字の入ったおしゃれな逸品！



メガンクルロック・スマックガール 7th-Anniversary カラーTシャツ

ミント／¥3,990（税込）

ジョシュ直伝の必殺技、メガンクルロックをひっさげ、格闘技ロードを突き進む女子格界のレジェンド、藤井恵公認モデル、スマックガール7周年記念カラーTシャツが堂々登場！

ART JUNKIE■http://www.artjunkie.jp/

PANCRASE



SHINING TOUR Tシャツ

ホワイト／¥3,675（税込）

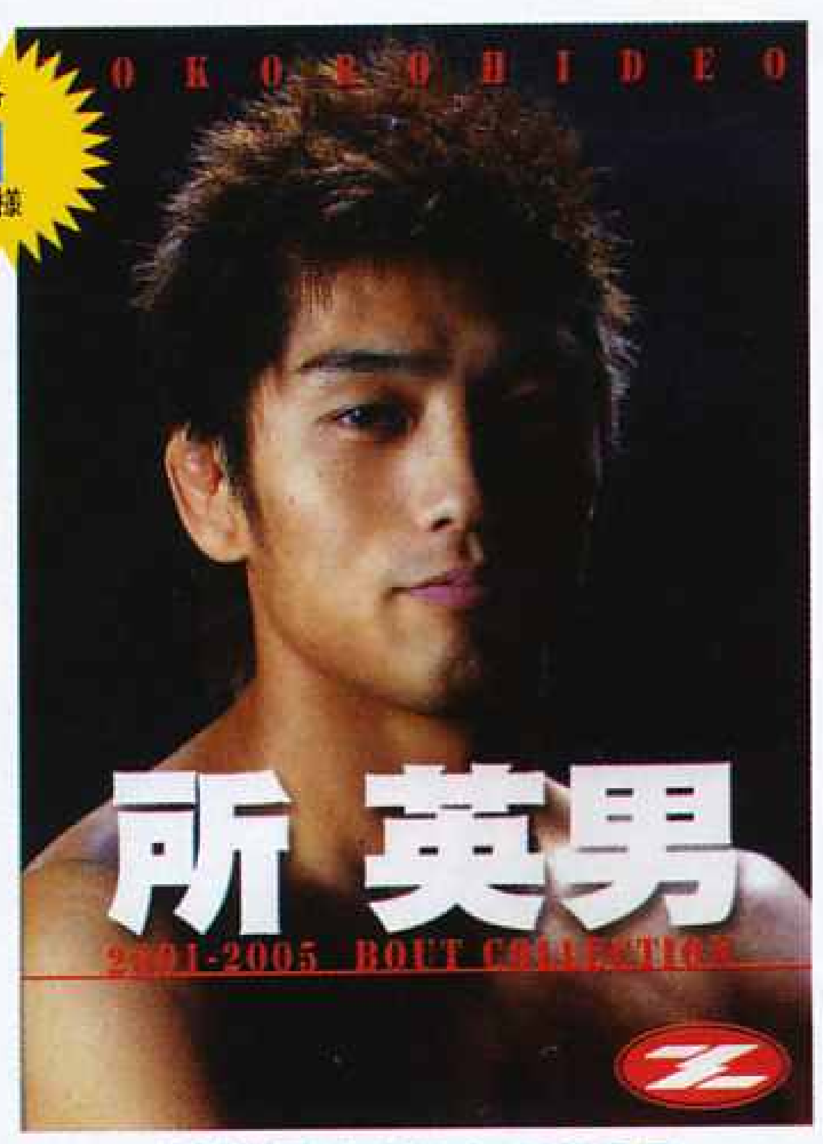
パンクラスからは今回の ツアータイトルのテーマ「太陽のように上昇し、光輝くパンクラシスト」をモチーフにしたシャイニングなデザインのTシャツを1名様にプレゼント！　このシャツを着込んで3.26 後楽園大会へゴー！

PANCRASE■http://www.pancrase.co.jp/

QUEST



第8回 全日本ブラジリアン柔術選手権大会　238分／¥5,880（税込）
SHOOTO 2007 BEST vol.2　235分／¥5,880（税込）
新極真会 第9回全世界空手道選手権大会　237分／¥5,880（税込）
武神館DVDシリーズvol.32 大光明祭 2007　250分／¥5,880（税込）
金澤弘和空手伝説 Karate Legend　87分／¥5,880（税込）
イスラエル近接戦闘術カパプ　120分／¥5,880（税込）



所英男2001-2005 BOUT COLLECTION

236分／¥5,880（税込）

“闘うフリーター”から出発し、ZSTの人気者、世界の所さんとなるまで、所英男の濃密すぎる5年間を収録した作品。自らの人生を語りつくした貴重なDVDを1名様にプレゼント。

QUEST■http://www.queststation.com/

BOOK



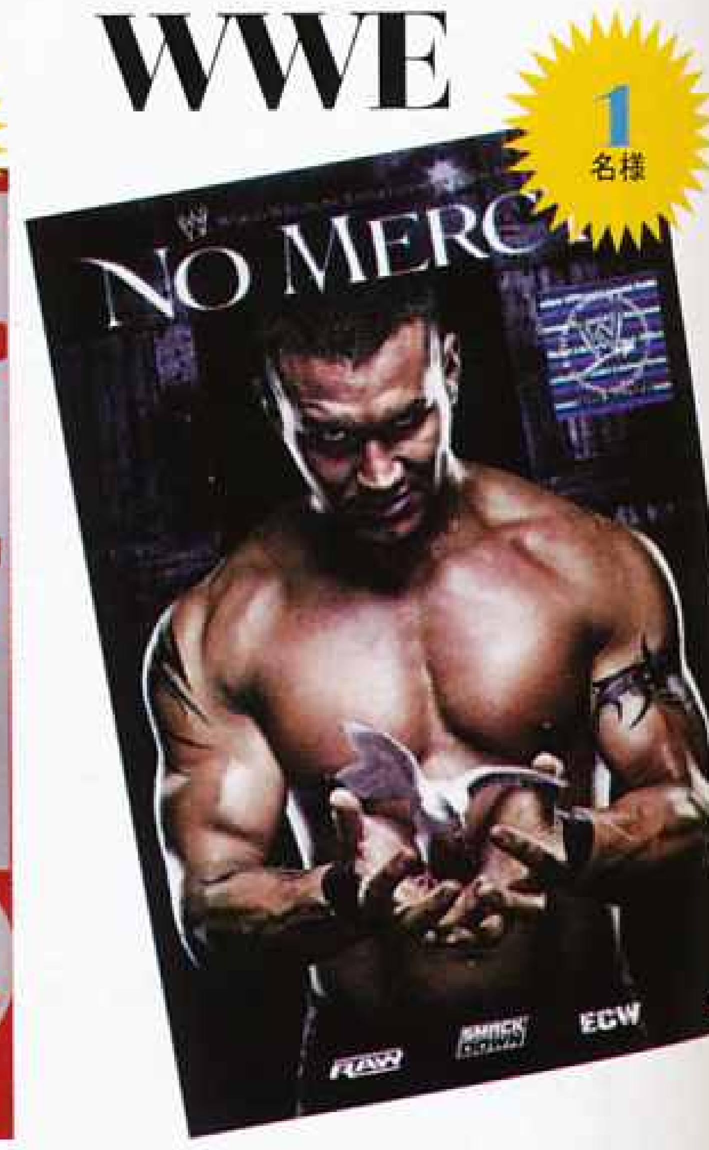
エイガ批評宣言

江頭2:50（著）（扶桑社）／¥1,260（税込）

いつ何時も“ガチ芸人”な男、江頭2:50による初の映画評論本を1名様にプレゼント。映画の批評を的確にしながらも、やっぱり笑える脅威のエガちゃんワールドに引き込まれること間違いなし！

WWE■http://wwe.co.jp/

WWE



NO MERCY 2007 DVD

183分／¥3,990（税込）

WWE来日記念！　かつて師弟だったランディ・オートンとトリプルHの宿命のタイトルマッチをはじめ、07年のターニングポイントとなった大会の模様を完全収録したDVDを1名様に提供！

WWE■http://wwe.co.jp/

kamipro 紙のプロレス

No.120
2008年3月7日 発行

発行人
浜村弘一

編集人
斉藤慎一

編集統括本部長
ジャン斉藤

編集スタッフ
坂井ノブ
堀江ガンツ
阿修羅チョロ
松下ミワ
真下義之
八木賢太郎（住所録作成のため非番）

焼鳥屋
上杉こせ喜

終身名誉バイザー
吉田 豪

助っ人
ジャイ子
能登くん

編集次長（今回はミアに1000ドル！）
松林 貴

デザイン大将
出田さん（TwoThree）

デザイン司令長官
金井ヒサくん（TwoThree）

デザイン
松坂マツくん
谷タニやん
廣田ブンちゃん
野口ノグッチー
白木しらき（以上、TwoThree）
トメさん
はなえちゃん（以上、さおとめの事務所）

カメラマン
乾 晋也
菊池茂夫
平工幸雄
山口比佐夫
黒田史夫
吉場正和
平 専英
戸成嘉則
梅木麗子
大甲邦喜

お勘定&衣料部
ニュー林様

次期大統領候補？
入江マケイン（TwoThree）

雑誌営業
堂前秀隆
中村宣忠

助っ人営業
上野宏樹

業務部
樽本"年度末で超繁忙"義之

編集庶務
原 正典
山内ユリコ

終身名誉編集庶務
高木由美子

編集チアガール
金川奈津子

編集チアマダム
廣橋久美子

広告営業
株式会社ビューポイント
（広告掲載のお問い合わせは☎03-5776-0717まで）

発行所
株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1
☎0570-060-555（代表）

印刷
図書印刷株式会社

協力
BUSHIDO KOVOTOJO KELIAS
FightSport

本書の内容、不良品交換等についてのお問い合わせは下記の窓口までお願いいたします。なお、内容につきましては記載以上の詳細につきましてはお答えできませんので、あらかじめご了承ください。

[カスタマーサポート]
☎0570-060-555
（受付時間／土日祝祭日を除く 12:00〜17:00）
メールアドレス support@ml.enterbrain.co.jp

●個人情報の取り扱いについて
本書にお寄せいただいたハガキ、各種のお問い合わせに関連してご提供いただいた個人情報につきましては株式会社ダブルクロス、および株式会社エンターブレイン（URL:http://www.enterbrain.co.jp/）、それぞれのプライバシー・ポリシーの定めるところにより、取り扱わせていただきます。

©「LADY'Sリング」泉井弘之介



NEXT ISSUE

3.5『戦極』代々木大会、3.2『UFC82』を徹底詳報!!

kamipro Special 2008 LATE SPRINGは3月13日（木）発売予定!!

3.15『DREAM.1』を完全解剖!!

No.121は3月28日（金）発売予定!!

※地域によっては多少発売日が遅れます。本誌にはわかるの。


Fighter's Shop
BULL TERRIER
www.b-j-j.com
T-Shirts
Outers
Gloves
Jiu-jitsu Gi Fogo Model
Rush Guards & Combat Shorts
Jiu-jitsu Gi B-Fire Model
Jiu-jitsu Gi Star Model
Check here!!
www.b-j-j.com
www.btfightgear.com
Mobile
ファイターズショップ ブルテリア URL http://www.b-j-j.com 携帯サイト http://www.b-j-j.com/cgi-bin/i/index.cgi 〒435-0006 静岡県浜松市東区下石田町 1782-1-1F TEL053-421-2534 FAX 053-421-2542

kamipro 2008 120
PRIDEはもう忘れろ!! "過去の誇り"を捨てて、新時代を切り開け!!
2008年3月7日 発行人 浜村弘一 編集人 斉藤慎一 発行・発売所 株式会社エンターブレイン
〒102-8431 東京都千代田区三番町6-1 ☎0570-060-555(代表)
印刷・製本 図書印刷株式会社 ©2008 ENTERBRAIN,INC. ©2008 DOUBLECROSS
enterbrain

定価:本体838円+税

雑誌 61955-86 Ⓗ2008.6

Printed in Japan 図書印刷

ISBN978-4-7577-4063-1
C9476 ¥838E

9784757740631
1929476008381